THE CENTRAL REVIEW

中央公論

「新時代の開幕」號

(新年特別號)

第四十四年 第一號 第四百九十二號



1929
Sunday

Jan.	6.13.20.27	July	7.14.21.28
Feb.	3.10.17.24	Aug.	4.11.18.25
Mar.	3.10.17.24.31	Sept	1 8.15.22.29
Apr.	7.14.21.28	Oct.	6.13.20.27
May	5.12.19.26	Nov.	3.10.17.24
June	2 9.16.23.30	Dec.	1 8.15.22.29

謹賀新年

昭和四年元旦

舊年中は格別の御眷顧を蒙り難有厚く御禮申上げます何卒本年も相變らず御引立の程偏に願上げます

松屋呉服店

東京・銀座

豫約募集

堀江歸一全集

我國一流の經濟學者で財政學者。旺盛な研究心、鋭き觀察力の持主。街頭に立てば口に筆に烈々風霜の如く時人を激動せしむ。今、博士街頭に勇敢に斃れて本業績を殘す。經世家、實業家、銀行家、教育者は來りて博士の偉大なるこの業績を見よ。高邁透徹の卓見によりて更に經世的見識に資するところあれ。

「堀江歸一全集」内容一斑

第一卷 財政篇
一增訂改版財政學 二財政學綱要

第二卷 貨幣及金融篇(上卷)
一貨幣 二貨幣制度論概要 三銀行 四銀行制度論

第三卷 貨幣及金融篇(下卷)
一ダンバー氏銀行論 二海外金融市場 三改訂版中央銀行と金融市場 四金融及金融機關 五金融と恐慌 六英國預金銀行論 七金貨本位制度の興廢

第四卷 國際經濟論(上卷)
一國際經濟總論 二世界經濟と國際金融 三國際商業政策 四本邦通商條約論 五關稅問題

第五卷 國際經濟論(中卷)
一國際商業政策 二本邦通商條約論 三關稅問題

第六卷 國際經濟論(下卷)
一世界の經濟は如何に動くか 二仝上續篇 三國際經濟と國民經濟 四仝上續篇

第七卷 社會問題篇
一勞働問題十講 二勞働問題の現在及將來 三勞働組合論 四經濟組織改造論 五勞働組合の現在及將來 六國家資本主義

第八卷 雜纂(上卷)
一緊急經濟論策 二經濟財政橫議 三歐洲戰時の經濟財政 四本邦經濟社會の重要問題 五支那經濟力觀 六世界經濟思想の變動

第九卷 雜纂(下卷)
一英國現代の經濟 二日本の經濟的危機

第十卷 日記、書簡及附錄
一日記 二書簡 三國民經濟の話 四社會經濟研究 五アダム・スミスの租稅論

豫約略規

◆體裁 本文四六判九ポイント組、一冊紙數平均約千頁。◆刊行期日 昭和三年十二月第一回を刊行し爾後毎月一冊づつを刊行昭和四年七月完結。◆申込 申込金貳圓五拾錢お拂込み下さい。これは最後の會費に充當しますから最初の會費は別に御拂込み下さい。◆會費 毎月拂一冊貳圓五拾錢 全拂全十冊二十四圓 外に送本料を申受けます、

東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二番

全十卷 一冊 貳圓五拾錢 ◆ 〆切十二月廿五日限 ◆ 内容見本進呈

(本誌愛讀者に限り一月十五日迄申込有效)


内面からの
艶消で
特に明く
氣持ちよい
三五の月に
似たランプ
こんど切れたら
新マルダランプを
マルダ

スポーツとマルクスとシネマ



藤澤利喜太郎著　◇新刊發賣◇

總選擧讀本

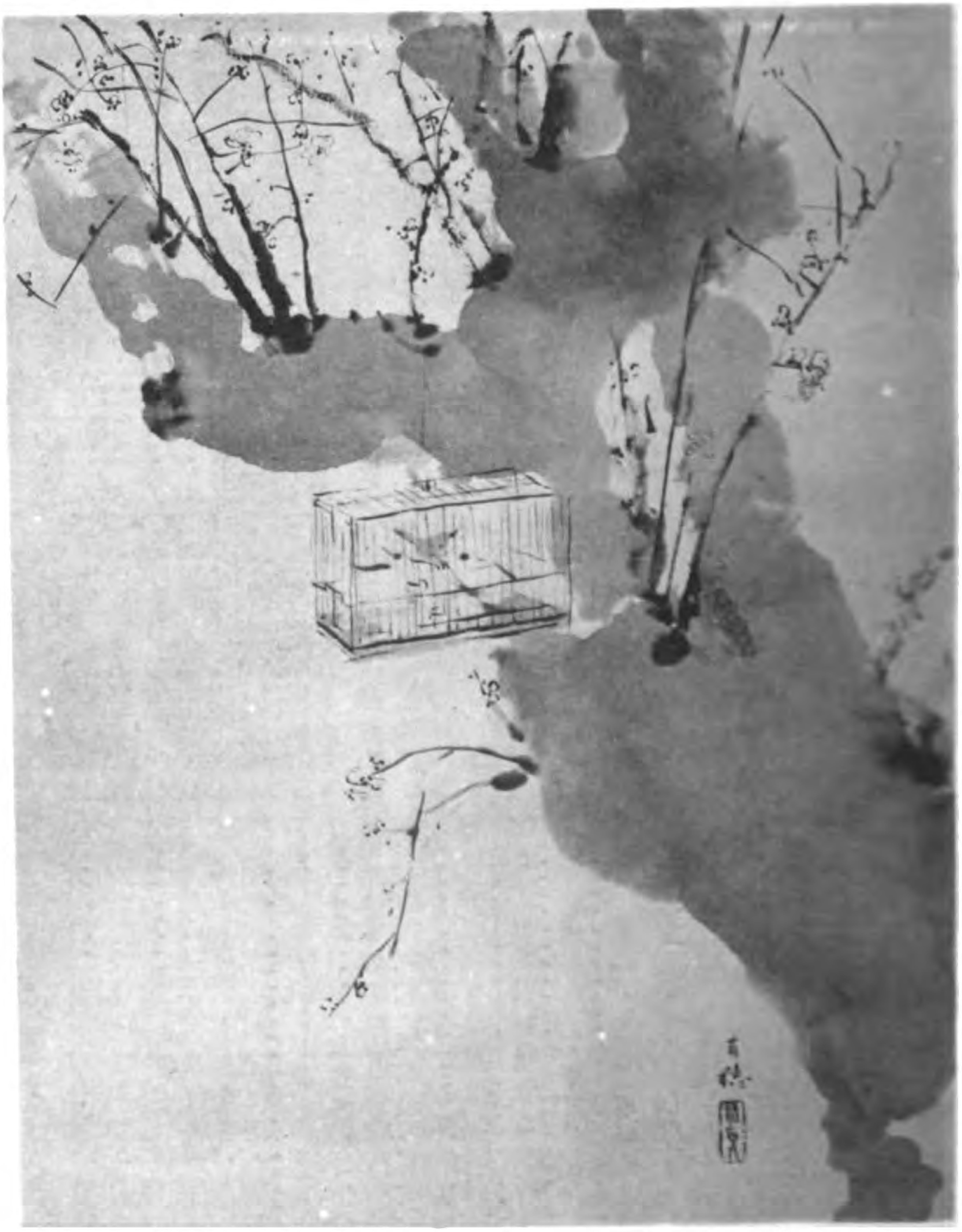
普選總選擧の第一回

菊判三八二頁
總布裝函入
定價三圓
送料書留廿七錢

「政治に無關心なる民族は滅亡へたどる」と。我々日本民族は政治的關心と其現實的なる訓練に於て自ら自負し得るか。健忘性の國民は十年の苦鬪を以てかち得た普通選擧の結果が何であつたかを忘れ去らんとしてゐる。著者は學者的緻密と正確さとを以て第一回普選に依る總選擧の結果を批判し、更に將來改正の問題に就いて理義透徹せる獨特の意見を述べる。帝國議會開會眼前に迫る秋。「時代に呼びかける書」とは正に本書の如きを言ふであらう。國民の必讀すべき書である。

●内容概略　普選法成立の經過。原案全文の漏洩。立案審議の經過。議員の總數。供託金。選擧區制。選擧權被選擧權の年齡。住所と住居。華族の戶主の選擧權被選擧權。連坐の規定。無投票當選及推薦候補者。町村別開票。貧困缺格條項。基本資料(得票統計)。法定得票數。別表の沿革。得票數の統計的特色。番狂はせの增減。大衆は巨象の如く歩む。地方的色彩の減退。議員の年齡に關する研究。棄權率の少かつた原因。黨派別得票數に按分すれば。比例代表の種類。名簿式を徹底的に排斥すべき理由。何が故に歐大陸諸國では名簿式が行はれてゐるか。英國に於ける比例代表論の趨勢。補正式比例代表法。假想大選擧區。選擧干涉の統計的研究。府縣別選擧干涉の研究。鶴見祐輔候補應援の演說。鳥瞰的觀察。我が代議政治の進趨。二大政黨の妖夢。四月五日の座談會。政黨の浮動性。中立候補者。小選擧區還元の妄想。歐羅巴中で一番愉快な倶樂部。衆議院の門戶解放。無產黨の進出。大選擧區の頃合ひ。括結の辭。補缺選擧。

東京神田南神保町
岩波書店
振替東京二六二四〇番
(圖書目錄進呈)



春信　　平福百穗筆

牧野信之助著

文學博士 三浦周行序
文學博士 西田直二郎序

武家時代 社會の研究

（新刊）

輓近、我國文化の淵源探究の機運茲に勃興せる秋に當り、夙に斯界矚目の的となつて居た著者論攷の成果たる本書は終に成つた。著者は夙きに我國地方史の白眉たる福井、滋賀兩縣史の執筆者たり、今亦現に中世の代表的都會たりし堺市史の編纂者であるが、その永年に亘る實地踏査とその蒐集に係る無數の稀覯史料とを基礎として中世より近世への武家時代を大觀し、その底流に脈動する一般地方庶民階級の經濟生活を中心として社會人文の諸相に峻絶せる研鑽を重ね、文藻と趣味とに滿ちた幾多獨歩の創見を發表せられて居る。爾來、その研究構想の進捗につれて鑿掘の坑道を深め、その光輝ある結晶は二十年の歲月を俟つて、始めて體を成し系を改めて世に出づるに至つたものであつて各編各章無限の生彩と暗示とに富んで居る。正に近來の一大史編たるを疑はない。

菊大判六三〇頁
挿畫八葉・挿圖八個
天金・總布・函入

定價 六圓八十錢
送料書留三十六錢

新刊

著者	書名	判型	定價・送料
澤田吾一著	日本數學史講話	菊判	定價二圓八十錢 送料二十七錢
松岡靜雄著	日本言語學（改訂版）	四六判	定價二圓八十錢 送料十八錢
伊能嘉矩著	臺灣文化志（全三卷）	菊判	定價各十圓 送料各三十六錢

東京駿河臺
ニコライ下

刀江書院

振替東京七三一一八番
電話神田三二七一番
三一八九番

新刊

マルサス人口論の研究

長崎高商教授　伊藤久秋著

讀まれざるマルサス！歎聲は既に彼が生前にあつた。今、果して幾何を變じたか。ネオ・マルサス主義の勃興により彼の名はまた唇頭を往來す、併しそはボナーが適切にも言つた如く磨滅したる通貨の如く轉々流通するが如きものではなからうか。マルサス再讀は果して閑事である乎

菊判アート・カンブリック裝　定價三圓卅錢
四一五頁　索引六頁　送料十八錢

時代は、かの人口論のマルサスに關心すること依然頻りである。蓋し人口論全體に關する解說はなほ大に要求せらるべきで、その爲めには必然時代の反響を一瞥するの要がある。それが最肝要事である。從つて本書の主調はマルサス人口論を主として其の時代の反映に於て見んとする所に在る。故に本書の内容は人口論の解釋と當時の反響とに二分される。マルサス人口論に對する批評は本書、當來の目的でないが、然し解釋は既に或る程度に於て問題の批評である限り、また批評家の批評を取扱ふに當つて必要なる限り、ただに著者自身の光つた批評が隨所に介在して心讀を要求するばかりでなく、近時のマルサス批評家に就ても、論述の途、しばしば引用または援用されて居るから、いろいろに學者を嘉惠する。その材料は著者が英國滯在中聚め得たるもの、世に現はれざる批評家を多く紹介されたのは、分けて貴重される。

東京日本橋通
丸善株式會社
大阪　神戸　京都　名古屋
横濱　福岡　仙臺　札幌
東京―神田・三田・早稲田・丸ビル

監輯 土岐善麿 金田一京助

校訂編輯 吉田孤羊

第一回配本中 全五巻 [illegible] 内容見本進呈 [illegible]三日限

豫約募集

石川啄木全集

痛ましき先驅者情熱の詩人啄木の全集成る。彼の思想と藝術は月と共に、年と共にその光鋩愈加はり、凛々現代に生き、儼乎として「明日」を指呼す。彼は新らしき現代に何を呼びかけ何れを指標した？全日本の大衆よ！彼の眞の姿を摑め。彼の理想を復活せ！而して彼を相續せ。

（△印はすべて絶對に單行本とならず新らしく本全集のみに收容さるゝもの）

第一卷 小說 自明治三十九年七月 至明治四十三年五月 計十篇

雲は天才である △面影 △葬列 △漂泊 △菊池君 △病院の窓 △二筋の血 △天鵞絨 △刑餘の叔父 △鳥影 [illegible]

第二卷 小說、小品、散文詩 自明治四十一年十二月 至明治四十三年六月 計四十二篇

赤痢 △足跡 △故郷に入る △我等の一團と彼 △道 △[illegible] △底 △札幌 △不穩 △無題 △[illegible]づれ △その人々 △父と子 △[illegible] △窓 △連想 △古外套 △束縛 △島 [illegible]田君の書簡 △金字塔 △空想 △ド[illegible] △文學の[illegible] △追想 △エピソオド △宿屋 △文學の悲み △外無題六篇 △村長の上京 △酒田川丸の船客（以上小說） △あきの愁ひ △牧舍の賦 △高調 △手を見つつ（以上小品） △嘲 △野 △白い鳥 △血の[illegible] △火星の芝居 △二人連 △祖父（以上散文詩）

第三卷 詩歌 自明治三十六年十一月 至明治四十四年七月 詩五十五篇 歌千五百八十九首 計[illegible]

あこがれ（第一集） △秋風高歌（補遺） △西伯利亞の歌 △あこがれ以後（第二集） △黄草集 △ハコダテの歌（補遺） △心の姿の研究（補遺） △呼子と口笛 以上[illegible] △心の姿の研究 △秋草 △五つ星 △[illegible] △ほとゝぎす △[illegible] △緑露 △明治四十一年のノートより △明治四十二年のノートより △明治四十三年のノートより △補遺 △雜詠 △一握の砂 △悲しき玩具（以上短歌）

東海の小島の磯の白砂に
我泣き濡れて蟹とたはむる
たはむれに母を背負ひてその余り
輕きに泣きて三歩あゆまず
眼閉づれど心に浮ぶなにもなし
さびしくもまた眼をあけるかな

第四卷 評論、感想 自明治三十四年十一月 至明治四十五年一月 計六十篇

△[illegible] [illegible]

第五卷 書簡附年譜 自明治三十四年 至明治四十五年 計三百十八通

書簡（三百十六通）（内百四十八通未發表） 年譜（金田一京助編）（各卷に詳細なる解說を附す。）

體裁 四六判九ポイント、パラルビ附、一冊紙數平均約六百頁以上

昭和三年十一月第一回刊行同四年三月完結

申込金一圓 これは最後の會費に充當

毎月拂 一冊壹圓一錢

前拂（全五卷）四圓八拾錢

送料 一冊十四錢

東京市芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番

（本社愛讀者に限り十一月十五日迄申込[illegible]）

中央公論の本領に關する宣言

——(卷頭言)——

[illegible]は中央公論が天下幾百萬の讀者に對し敢て其存在を表示する所以のものに付ては今[illegible]者には今更之を繰り返すの必要もないのだが、最近本誌に對する世上の誤解の幾分かを致せるの事實に驚きされ、年の改まると共に新に鋭氣を蓄して大に打て出でんとするの際、聊か從來之を語るも全然無意義のことでなからうと思ふ。

謂ふまでもなくわが中央公論は、我國文化の各斷面に付き最も進歩せる業績の忠實なる紹介乃至解説を以てその本領とする。消極的には現代の文化が如何の點に到達せるかを示し積極的には更に將來に於て如何の展開を爲すべきかを明にせんとするが、私共の不斷の努力の目標であつた。私共が十分にこの任務を成し遂げ得たかは暫く別問題として、常に這の心懸を以て努勵し終始一貫我國唯一の高級雜誌たるの面目を辱しめなかつた事だけは、讀者諸君のひとしく認むる所であらう。

最も進歩せる業績の紹介乃至解説、之は今後に於てもわが中央公論の不動の目標であらねばならぬ。たゞ何を以て最も進歩せる業績と觀るか。この具體的選擇の問題に就ては特に今日の場合一層の辯解を必要とするものの如くである。そは所謂最も進歩せる意見の何たるかに付ては、一見明白なる場合もあれば又否らざる場合もあり、殊に最近世上にやかましい社會思想乃至運動等の問題に關しては、批判の統一的標準がなく甚しきは對蹠的に相容れざる立場の抗爭さへもあるからである。而して之等の點に付ては、私共個々人の主觀に於ては固より夫れ〲所信を異にするを妨げざるも、文化發展の現段階の有の儘の紹介解説を本領とする中央公論の立場としては、飽くまでも其一方に偏してはならないと考へる。この邊の用意の如何に周到なる注意を加へられつゝあるかも亦賢明なる讀者の看過せざる所であらう。

斯くして私共は玆に明に宣言する。わが中央公論それ自身は右派でもなければ左派でもない、一派の宣傳に惡用せられざらんことを極度に用心しつゝ、左右兩派の誠實なる意思表明には最も自由なる機會の提供を吝むものではないと。左右兩派の何れをも問はず偏僻狂熱の人から見たら這の態度は恐らくその快しとせざる所かも分らない。併し乍ら私共は、左右兩派の何れを重しとするやを考ふる前に、未だ其の何れにも屬せず私かに去就に迷うて居る一層多くの大衆の存在を先づ念頭に置かざるを得ぬ。換言すれば、左右兩派の意見が現に天下無數の大衆の面前に烈しく相爭はれて居るの事實を正視し、讀者と共に之に善處するの途を講ずるの必要を感ずるのである。果して然らば、この爭を如實に誌上に縮現し、極めて鮮明なる形に於て讀者の耳目に之を展開するのが、わが中央公論の當然の任務ではあるまいか。

中央公論はその名の示す如く多年天下の大道を闊歩して來た。奇を衒ひ勢に屈し、或は好む所に偏執し又一時の流行に阿ねる如きは其本領の堅く禁ずる所である。殊に兩極相容れざる意見の鬪はるる今日の如きに在ては、益々切に其中間に立つ天下の大衆の爲の最も忠實なる代辯者としての任務を痛感するものである。

中央公論



第四十四年第一號
新年特別號
四百九十二號

劃時代的鬪爭の展開へ

猪俣津南雄

諸君がもし、現代日本の政治經濟を、否な現代日本の全生活を、根柢から建て直させる力は何かと問ふならば、吾々は躊躇なく無產階級であると答へるであらう。

日本無產階級は、いまやその全戰線の統一によつて劃時代的巨步を踏まんとする。

諸君がもし、我が無産階級はしかしその歴史的使命の遂行者としては尚ほ餘りに弱いではないかと言ふならば、吾々はマルキスト的卒直さをもつて正に然りと答へねばならぬ。が、同時に吾々は諸君に反問して、諸君は大衆の生長を信じ得ないか？ と言はう。然り、大衆の生長を信ずると信じない、よろこぶとおそれるとが、問題に近づく最初の一歩の方向を決する。ひとたび異なる方向にむけられた一歩は、進行によつて遂に千里の隔たりを生み、諸君と吾々は政治的意見の兩極端に立つお互ひを見出すのみである。

だが、諸君がもし、吾々と共に大衆の生長を信じつゝ、自ら大衆の先頭に立つならば、少くとも大衆と共に進むなら、諸君は正に大衆の生長力そのものに即して我が無産階級がこゝに踏み出す劃時代的巨歩の全意義を發見せずにはをられない。しかしてまた、此の巨歩をして眞に劃時代的たらしむべき積極的方途を見出さずにはをられない。

一

鬪爭を通じてのみ、大衆は生長する。經驗的事實としても、理論的眞理としてもさうである。吾々の日本の經驗的事實としても、鬪爭らしい鬪爭に進出しなかつた時の「大衆」は、大衆として吾々の認識にさへのぼらなかつたではないか。大衆の生長は、鬪爭力の増大としてあらはれる。だが、大衆の鬪爭力は、鬪爭のための組織の強大化に比例してのみ増大する。組織なき大衆は、鬪爭し得ざる大衆であり、嚴密には、大衆でさへもない。「未組織大衆」といふ時でさへ、人は組織との關聯においてのみそれを認識し、評價してゐる。

プロレタリア大衆が、「それ自身のための階級」にまで自らを高めゆくといふことは、すくなくとも、強力な鬪爭の主體

にまで自らを高めゆくといふことである。鬪爭の主體として强力であるためには、最廣汎な大衆が合理的効果的に組織せられてをらねばならぬ。それは、統一ある全體をなし、勇敢なる行動體をなし、訓練ある戰鬪部隊をなさねばならぬ。それらのものであることによつて此の鬪爭の主體はまた必然的に自分自身の指導勢力を作り出してゐる。これは全體の頭腦であると同時にまた常に全大衆の最先頭に立つ前衛であるであらう。

大衆の生長が、初等的自然的な最初の發展段階を經るや否や、鬪爭する大衆の陣營の此處かしこには早くも指導勢力の胚芽が見られる。と同時に、プロレタリア運動には早くも目的意識が働き初め、大衆の生長はいまや自然的盲目的な過程から教育的指導的な過程に變ずる。理論と宣傳とアジテーションの役割は次第に重要となり、その時々の運動の形態及び方向は、階級的使命遂行のための最短距離を切らんとする見地からのみ決定せられんとする。かくしてプロレタリアートは、一般戰略をもち、また戰術をもつ。が、それと共にまた、これらに關する見解の相異は、「指導精神」の對立として現はれずにはをらない。そして異なる指導精神を代表する指導者群の間に展開される鬪爭を通じ、その現實の「優勝劣敗」によつてのみ、眞實の階級的指導勢力は結成されてゆく。この前衛結成は、それ自身必然的に最強度の意識的努力の所産であり、しかもその努力は、大衆の生長過程が指導的過程と化せば化すほど決定的な重要性をもたねばならぬ。（――言ふまでもなく、大衆の生長過程が指導的過程と化すといふことは、毫も該過程全體がその物質的基礎から遊離することを意味しないとはいへ――）

他方において、自然生長的に發展し出づる鬪爭の組織は、それがかなりの規模に達するや否や、樣々に分化する。なかんづく重要なのは、經濟鬪爭の組織と、政治鬪爭の組織の分化である。政治鬪爭及びその組織は、當然に優位を主張するが、これと經濟鬪爭の組織その他種々なる組織とが綜合されねばならず、また、されてゆく。かかる組織のうち最も重要なる一つは、プロレタリアートと同盟を結ぶ社會層――例へば日本にあつては農民層――の組織である。

大衆の生長は、闘争を通じてのみなされるが故にまた、常に、その一定の闘争力を體現するところの、組織の性質や程度や形態は、闘争によつて克服せらるべき搾取や抑壓の性質、程度、形態と相關的に決定されてゐる。言ひかへれば、支配階級の攻勢と守勢、その具體的内容としての種々なる對プロレタリア政策の性質、程度、形態と相關的に。――だがこれらのものは更に、搾取抑壓の組織たる資本主義社會の發展の程度、性質、形態によつて條件づけられる。更に一層根本的には、社會の生産力の發展の程度、性質、形態によつて――。

二

日本資本主義は、おくれて發足した。だが、間もなく、先進資本主義諸國と伍して資本主義――帝國主義――の世界體系の完全な一要素と化し、それだけにまた早熟的であつた。貧弱な資源、幼稚な生産技術が、發達した流通の組織と混和せしめられ、前時代の政治的遺制が新時代の政治體系の中に強く混在した。それは、ヨリ多く、現實の深大矛盾を内包することを意味した。社會を分裂せしめんとする矛盾の存在が深刻であればあるほど、その搾取の體系はヨリ多く強力の使用によつてつぎ合はされる。日本の支配階級は、勞働力の格安と帝國主義的強兵とを維持するために、――この死活的必要のために、初めから徹底的彈壓をもつてプロレタリア大衆に臨んだ。この政策は奏効し、闘争の大衆は長く組織を持ち得なかつた。就中、指導勢力を持ち得なかつた。指導的前衛分子を行進の大衆から切り離すこと、――そこに彈壓主義の尖端は向けられて來たからである。辛うじて、世界資本主義の弔鐘が鳴る歐洲大戰を背景に日本プロレタリアートは闘争の組織をもち始めた。

日本資本主義がさうであつたやうに、いまや我がプロレタリア大衆の組織もまた早熟的である。だが、日本資本主義が現在の爛熟から沒落へと轉向する一歩々々と共に、日本プロレタリアートは飛躍を重ねて「それ自身のための階級」を形成

しつくさうとする。それは、彼等の組織における諸矛盾を克服しつゝ、彼等の闘爭力を擴大し充實しゆく過程でなくてはならぬ。彼等のみが、新しき社會の擔ひ手として眞に新興の政治勢力であるから。

無産階級がその闘爭力を高めゆく過程における「飛躍」はいかにして生ずるか。

新興の政治勢力はつねに既成の支配に對する反抗の勢力としてあらはれる。かゝるものとしてあらはれずして新興の勢力であることは出來ぬ。反抗の勢力が勢力として感じられるや否や、既成の支配はその抑壓を企てる。國家權力の把持者たる彼等は多かれ少なかれ目的を達する。抑壓に抗して闘爭し、闘爭を通じて學ぶ新興勢力は、茲において自己の闘爭組織の缺陷を發見し、より有力な組織及び闘爭方法を想見する。だが、正にその時にこそ支配者階級の攻勢は新興勢力の全滅を期して最も熾烈を極めるであらう。常態時における大衆は鈍重であり、惰力によつて最少抵抗線のみをゆく。だが、危機の實感は、そしてほとんどそれのみが、全大衆を發奮せしめ、驚嘆すべき創造力をさへ發揮せしめる。全運動は全然新しき方向を取り、全組織は急速に昂揚される。それは飛躍でなければならぬ。飛躍はかくして大衆生長の過程において必然的に生起するが、この過程がまた、資本主義經濟の景氣不景氣、恐慌、戰爭、等の周期的發作のヂグザグの過程と或は並行し、或は交錯し、それによつて多くは、謂ふところの飛躍が一層激甚となり、且つ不可避となる。

世界大戰時に初めて戰列につけるわが勞働者農民の大衆は、長驅して全國的組織をもち、つゞいて政治戰線に進出した。無産政黨の出現はそれ自身驚異的であつた。だが、政治戰線の分裂と、それに乘じての支配階級の極度の壓迫は、無産政黨運動を尙ほ草創期的な混沌の域に彷徨せしめた。しかも普選による第一回の總選擧に際しての極度の彈壓と、ひき續く共産黨檢擧と勞農黨の解散とは、資本攻勢の最尖端を全勞農大衆の面前につきつけた。危機の實感は全大衆を搖り醒ました。

大衆はいまや飛躍を身構へてゐる。この飛躍が遂げられてはじめて、わが無産階級は確乎たる新興勢力となるであらう。我が無産階級は、政治的進歩のための一切の闘爭を負擔する巨人として、全日本の輝く未來を指呼して立つに至るで

あらう。これこそ、劃時代的巨歩でなくして何か。

三

日本プロレタリアートのこれまでの組織、これまでの闘爭力の弱さは、就中、次ぎの事情にあらはれてゐる。(一)プロレタリア大衆全體の僅かだけが組織せられてゐるに過ぎない。(二)組織せらるれば當然に全體の最強部分となるべきもの、即ち大工場、大鑛山のプロレタリアが組織せられてをらぬ。(三)經濟闘爭の組織(主として勞働組合)の本營建の土臺の上に直ちに政治闘爭の組織がうち建てられねばならなかつた。(四)一の闘爭準備隊としての農民と政治的に結合したプロレタリア部分は、この同盟における主要勢力たるには弱すぎる。(五)階級的前衛は、その形成のための意識的努力の發足點において蹉跌を重ね、今尚ほ大衆の物となつてをらない。(六)種々なる闘爭の組織はおの〳〵なほ四分五裂し、素朴な指導者利己主義と結びついてギルド的な對立闘爭を續け、統一の缺如と、從つて生ずる闘爭力の分散とは、組織の擴大、強化に對する最大の桎梏をなしてゐる。

組織におけるこれらの缺陷は、いふまでもなく相關的である。そのいづれもが克服されねばならぬ。だが、そのいづれの克服にいま主要努力を向けるべきであるか? すべての克服への最捷徑はいづれにあるか? 問題はかく具體的に提起されねばならぬ。

次の如き特殊の諸事情が吾々の解答を決定する——。

政治闘爭の組織(代表的には政黨)の土臺——一層適切には貯水池——としての經濟闘爭の組織(代表的には勞働組合)を擴大せんがためには、未組織大衆を組織に獲得したければならぬ。農民軍と政治的に結合したプロレタリア部隊を強大ならしめんがためにも、未組織大衆を組織に獲得しなければならぬ。しかるに、——こゝに重要點の一つがある——

ー。所要の未組織大衆を組織に卷き込むためには、もはや中小工場ではなく大工場鑛山にまでプロレタリアの旗を押し進めねばならぬ。だが、大工場鑛山の防備は堅い。この要害の戰略的重要性が大なればなるほど、日本ブルジョアジーは死力を盡して侵入のプロレタリア軍と抗爭する。今日までの事實が立證してゐるやうに、この要害の攻略は既成のプロレタリア鬪爭力をもつてしては不可能であつた。しかも全無産階級の生長發展は、いまやこの不可能な一線を突破し得るか否かにかゝつてゐる。分裂の戰線を統一せよ、しかして分散の鬪爭力を集中强化せよ。——この叫びは進出の衝動からほとばしる端的な要求でなければならなかつた。

だが、この本能的な要求が大衆の意識的要求に結晶し、現實の行動の目的となるまでには、大衆は尙ほ經驗による苦綀の數々によつて敎へられねばならなかつた。

幾十百の小集團に組織せられた大衆は、それ〳〵に自己の指導者をもち、多かれ少なかれ個人的情誼的に、多かれ少なかれ親分子分的に、即ちセクト的、ギルド的に結びつけられてゐた。指導者たちのおの〳〵は、指導下の組織大衆を自己の繩張りとして扱つた。最も先進的な指導者たちでさへ、「階級のため」を口にしながらもしば〳〵自己の繩張りを擴げるために鬪つてゐた。草創期の混沌は、極めて素朴な指導者利己主義の跳梁によつて特徴づけられてゐた。同一地區内の同一産業に屬する勞働者の團體が、幾つかに小分されて對立し、その合同統一の必要と利益とがあまりにも明白な場合でさへ、各指導者は頑强に競鬪を續けた。指導方針における階級的と非階級的との爭ひさへが、この利己的競鬪を正當づける修辭にすぎないことも少くなかつた。最後に、かゝる繩張り爭ひは無産政黨の結成過程の中に持ち込まれ、單一無産政黨の光輝ある旗幟の下に押し進められた結黨運動が、四つの全國的大衆政黨と、一ダース余の地方政黨への分裂に終つたことは、指導方針としての指導方針の對立の故にのみ歸すことは出來ない。

だが、國際プロレタリア運動の大敎師達がしば〳〵指摘してくれたやうに、分裂を欲するのは指導者のみである。大衆

はつねに戦線統一の要求に傾いてゐる。分裂によつては大衆は何物をも獲得せず、却つてすべてを失ふのである。我が大衆は組合及び政黨間の共殺的な對立闘争が少しも組織の伸長を齎らさないことを知り、然して如何にさうとすれば資本家＝地主＝官憲の前に跪く骨抜きの組織を強ひられるか、しからざれば彈壓一下して組織の潰滅に終るか、さもなければ無氣力な現狀維持に甘んずるを餘儀なくされることを學び知り、更にまた選擧戰における慘敗の苦惱をなめつくし、かくして一切の闘争的努力が唯だ敗北と屈從と退却、とそして全滅の脅威とをもつて報いられることを知つた時、——我が大衆がこれらすべてを知つた時、「統一戰線へ」の標語は動かしがたき大衆の要求として全運動を新方向に驅り立てる燦灼たる炬火とならずにはゐなかつた。

四

それは何を意味してゐるか。

いまや大衆は、狹隘な愛黨心やギルド精神を超克せんとしてゐる。いまや大衆は、「分裂主義」の指導者を振り捨てんとしてゐる。いまや大衆は、すべての日和見的指導者に反逆せんとしてゐる。すべての指導者利己主義を批判しはじめてゐる。

この大衆の新しき態度——狹隘な個人的情誼的、セクト的ギルド的な結合から脫却して、廣汎な、全階級的な、共通の闘争目標による結合に向はんとする新しき態度は、大衆の意識における劃期的飛躍を意味してゐる。だが、それは意識における飛躍に止どまつてはならぬ。それは、統一戰線の實現によつて「闘争力の現實の飛躍」とならねばならぬ。しからばそれはいかにして可能か。たゞ、明確な目的意識をもつて大衆の先頭に立つ階級的先進分子・前衛分子の斷乎たる指導闘争の力によつてのみ可能である。

搾取と抑壓の組織的强行者の支配の下にある大衆の自然的生長の速度は、地質變化のそれの如く緩漫である。大衆の要求が現在の如く統一戰線に向つて集中結晶するまでにもすでに、意識的先進分子のたゆみなき宣傳とアジテーションとに助けられねばならなかつた。いま吾々の眼前に澎勃として動く大衆の生長力は、たゞ階級的先進分子の指導鬪爭の力に助けられてのみ現實の生長を實現し、大衆の前進を事實化する。

『前衛は、彼等の指導する大衆との連絡を失はぬのみでなく、全大衆を眞實に前進せしめ得る場合にのみ、前衛たるの任務を果す。』日本無產階級の戰線の脆弱なる理由の一つとして、吾々は、謂ふところの前衛が尙ほ大衆のものとして强力に結成されてをらないことを指摘した。階級の前衛なくしては大衆の加速度的な前進もない。だが、階級の前衛は、大衆と結びつかざる少數個人の結成によつて生ずるのではなく、常に大衆の要求の尖端を代表しつゝもそれを階級的なものに高めんとする鬪爭を通じて大衆の信賴を自身の上に積み重ねゆく戰鬪的プロレタリア分子が、明確な階級意識と適正な指導方針と鐵の如き訓練とを有する結成體にまで自分らを築き上げんとする努力の結晶としてのみ實現されねばならぬ。從つて、前衛の結成と成熟とは、大衆の生長・前進と獨立して達成されるのではなく、――またもちろん現在の前衛分子の意識的努力なくして大衆の前進や前衛の結成が可能なのでもなく、現在の前衛分子が大衆を前進せしめんとする努力を通じてこそ前衛結成の一步は踏み進められ、同時に、大衆もまた前進せしめられる。大衆と前衛とが發展し强化する過程は、交互作用的な發展强化の過程である。かゝる過程であるとの認識をもつてのみ我が前衛・先進分子は、當面の統一戰線運動の大衆の先頭に立ち、もつてその兩面の任務を果たさねばならぬ。

他方において、無產政黨の統一と、勞働組合及び農民組合の統一との關係においてもまた、交互作用的な發展强化の過程が存する。組合の統一と政黨の統一とのいづれに當面の努力を傾注すべきかは、その時々の具體的情勢によつて決定されねばならぬ。日本農民組合と全日本農民組合とが合同を決行したことは、統一戰線運動における光輝ある一步であつ

た。この合同こそは強大な牽引力としていま無產諸黨を合同へと驅り立ててゐる。一方、數十の有力勞働組合は、今夏、全國勞働組合會議の結成を企圖したが、政黨問題の暗礁に乘り上げて停頓した。だが、最近急速に具體化するに至つた無產政黨の合同は、その達成によつてそれ自身、勞働組合を合同へと導く強大な牽引力となるであらう。

五

當面、合同によつて統一無產政黨を形成すべき全國的政黨は、社會民衆黨、日本農民黨、日本勞農黨、無產大衆黨、及び新黨準備會の結黨によつて生ずる新政黨である。

舊勞農黨の大衆は、その指導者が合同による統一を執拗に拒んでゐたにも拘らず、階級的要求であるところの合同統一を比較的急速に自身の要求となすに至り、昨年末に到つてつひに同黨幹部をして合同反對の聲明を翻へさしめ、日勞黨への合同提議を餘儀なくせしめたことは、まだ吾々の記憶に新しい。この合同の提議は、日勞黨が謂はゆる「宗派的分裂主義の排除」をもつて合同の絕對條件となしたため、事實上拒絕せられたことになり、合同運動は表面上そこに停頓したが、舊勞農黨員の絕對多數を組合員とした日本農民組合が、間もなく、日勞黨員の絕對多數を含む全日本農民組合と合同したことは、勞農＝日勞兩黨の合同の必要をます／＼緊切ならしめた。その前後から、誠意をもつて合同統一運動を積極的に促進し、この運動において階級的左翼の旗幟を高揚すべしとする主張が、次第に黨內に結晶し、同黨幹部の少數派はこれを支持して公然と多數派と對立するに至つた。さきに日勞黨に對して「即時無條件合同」を提議することを餘儀なくされたところの、舊勞農黨の多數幹部は、いまや再び「勞働者農民の政府」のスローガンの承認、「社會民主主義の批判の自由」を確保すること、等を、他黨との合同における事實上の條件たらしめんと試み、少數派幹部と抗爭して、本年三月の同黨擴大中央委員會において優勝したが、四月に入つて彈壓の兇手は勞農黨の解散を強行した。

解散後直ちに舊勞農黨幹部を中心に組織せられた新黨準備會は、勞農黨奪還のスローガンをもつて最も勇敢に抗議運動を行つた。だが、現實の階級間の力關係は、彈壓の奏效を結果し、「勞農黨奪還の悲壯なるアッピールも充分に大衆を起たしむるに至らなかつた。新黨準備會はその後、「戰鬪的政黨の戰鬪的獲得」の名のもとに、合法的大衆政黨――舊勞農黨はその一つであつた――を結成せんとする努力を事實上放棄し、準備會のまゝで日勞黨に合同――實は合流――を申込むに至つた。（この方向が誤つてゐたことは吾々のしば〳〵指摘し批判したところである。）だが、八月に至つて、舊勞農黨における合同統一主義の主張者たりし少數派幹部を中心に無產大衆黨が結黨し、急速に全國的政黨へと發展したことは、新黨準備會をして再び結黨の正路に向ふを餘儀なくせしめ、十二月二十二日をもつて結黨を期することを聲明するに至つた。

合同統一の要求は、大衆の集中的要求として最高潮に達し、その促迫のもとに無產諸黨の合同が急速に具體化しつつある現在において、新黨準備會に課せられた任務は最も困難であると同時にまた最も重要である。新黨準備會が速かに結黨し得るか否かは、組織を奪はれて政治的無關心に陷りつゝある數萬の舊勞農黨大衆を速かに政治戰線に動員し得るか否かを決定するのみではない。また、新黨準備會員及びその支持者中にある階級的前衛・先進分子が、速かに廣汎なる日常鬪爭大衆との結びつき――連絡――を取り戻し得るか否かを決定するのみではない。速かに結黨するか否かは、實に、これらの前衛・先進分子が、全大衆の當面の集中的要求たる合同統一の運動の最先頭に立つてこれを階級的軌道に移しつゝ、自らをヨリ强大な階級的前衛に結成せしめ得るか否かを決定する。このクリチカルな瞬間においては、新黨準備會の幹部諸君がしきりに爭つてゐるやうな、準備會それ自身がすでに政黨の實質を持つてゐるかゐないかといふやうな理論的認識の爭ひが爭ひとなるのではない。いまや支配階級の彈壓政策がその尖端を前衛分子の孤立化に向けてゐる以上、また協調主義者、機會主義者が、それに策應して左翼分子の排除を企ててゐる以上、彼等をも含む指導部のもとにある他の政黨と合同せんとするならば、合同の相手方たる新黨準備會をば、彼等機會主義者といへども大衆に對して合同拒否の欺瞞的口

實をつけるに由なきほどの充分な政黨に結集せしめることをもつて合同戰術の第一步たらしめねばならぬ。言はゞ合同運動の先頭に立つ任務を放棄せざる限り。また支配階級の前衛分子孤立化の政策と抗爭する任務を放棄せざる限り。新黨準備會の結黨の必要は絶對的である。

だが。もし新黨準備會をして、大衆動員のための合法的組織に發展せしめる代りに直ちに前衛黨の役割を演ぜしめんと欲するならば。問題は全く別個のものとなる。その場合には。新黨準備會は結黨を口にすべきでなく。合同を口にすべきでない。前衛黨の獨自性は。合法的大衆政黨との合同を嚴禁する。

六

舊勞農黨において、合同の主張その他の政策について多數派幹部と意見を異にしたところの少數派幹部を指導部として結黨したる無産大衆黨は、それが舊勞農黨の誤謬を清算してゐる點において、また舊勞農黨員以外の新要素をも多く包含してゐる點において、舊勞農黨の單なる再現にあらざることを聲明し、且つ主として二つの緊急任務をもつて生れたものであると宣言した。一つは、組織を奪はれて政治的無關心に流れ、彈壓の下に右傾化せんとする舊勞農黨大衆その他に速かに政黨組織を與へ、もつて反動支配と抗爭すべき現實の鬪爭力を急速に再建することにあり、他の一つは同時に、この政黨を合法的主體として合同統一運動を押進め、もつて全勞農大衆を前進せしめることにあると。

この第二の任務を任務とする限り、無産大衆黨の重要特質の一つは、それが緊急的過程的な組織形態なることにある。即ちこれは、可及的急速な無産黨合同の達成により、自己の任務を果すと共にその存立を終るものであるが、それだけにまた此の任務に對して忠實を缺く限り、無産大衆黨の結黨理由の大半は失はれると言はねばならぬ。言ふまでもなく、無産大衆黨が企圖するところの合同は、同黨が他の任意の一黨と任意に行ふ合同を意味することは出來ぬ。さうした單な

る合同――たゞ合同のための合同ならば、無産大衆黨の指導者達は、わざ〳〵結黨の迂路をとつて無産黨の數を増させるまでもなく、任意の他黨に入黨すれば足つたとも言へやう。(尤も、それは第二の任務に關する限りにおいてのことである。併せて第一の任務を有したことを忘れてゐるのではない)。即ち、無産大衆黨が任務とする合同は、階級全體のための合同でなければならず、かゝる合同であるためには先づ澁滯した合同運動に對する拍車たるの役割を、力づよき宣傳とアジテーシヨンとをもつて果さねばならなかつた。そしてそれは、新黨準備會を結黨に驅り立てる役割と共に、まさに同黨の果し得たところであつた。日本勞農黨が合同に對する態度を明確化するに至り、日本農民黨さへが合同に乘り出すに至つたことは、無産大衆黨によつて促進せられたところ大なるものがあると言ひ得る。

だが、無産大衆黨がその特殊の任務をどれだけ成功的に遂行するかは、最近に具體化した合同運動をどれだけ階級的な合同たらしめ得るかによつて決定される。階級的な合同は、全無産政黨の合同でなければならず、統一政黨の實現でなければならぬ。現下の情勢は、もちろん、一擧にして單一無産黨の實現を許さぬではあらう。從つて、可能なる範圍における最も有効なる合同から出發せねばならぬでもあらう。だが、その場合に最も必要なことは、かゝる合同をして飽くまでも、全無産政黨合同への眞實の第一歩たらしめることにある。いま合同せんとする諸黨の意志が完全にそこに向けられてあることを、決議において、聲明において、また合同の方法そのものにおいて、全勞農大衆の前に明示することにある。そしてそれと共に最も重要なことは、當の合同をして、反動的支配階級の前衛分子孤立化の政策に對する抗爭たるの實を備へしめることにある。これらの要求をどの程度まで實現し得るかは、無産大衆黨の努力にかゝること大なるものがある。或は合同を拒否し、或は合同を取引せんとする他黨の機會主義者等と戰はねばならぬ無産大衆黨は、――しかも當面の合同を階級的合同たらしめる任務に堪へる政黨として殆ど唯一のものである無産大衆黨は、それ自身尙ほ決して有力であるとは言へぬ。だが、大衆の生長力に信頼し、また大衆の壓倒的支持を確信し、勇躍してその階級的任務を遂行すべきである。

七

「階級的大衆的統一主義」を立黨の精神として唱へた日本勞農黨は、合同問題に當面してしば〳〵岐路に立つた。同黨内に即時無條件合同の主張が勢ひを得つゝあつた當時において、無條件合同論を極力排撃してゐた舊勞農黨が、急轉して即時無條件合同を日勞黨に迫つた時がその一である。同黨の大衆は合同を要求してゐた。しかし同黨内の協調主義的指導分子は合同を恐れてゐた。彼等の脱退による日勞黨の分裂を防止するため、及び大衆の合同要求の鋭鋒をさけんがための折衷手段は、舊勞農黨との合同に「宗派的分裂主義の排除」を單一絶對條件として要求するといふステツプとなつた。この「宗派的分裂主義の排除」がもし、舊勞農黨の過去の誤謬の公然の清算を要求することを意味するならば正しく、特定の左翼分子の排除の要求を意味するならば間違ひであつて、「階級的大衆的統一主義」の立黨精神の冒瀆であるといふことは、當時（本誌昭和三年新年號その他）において吾々の指摘し、批判した所である。日勞黨がこの單一絶對條件をもつて事實上合同を拒否したことは、同黨の協調主義的指導分子に若干の滿足と安心とを與へたし、またその條件を附したことも、當事の舊勞農黨指導部がとつてゐた誤れる宗派的態度及び行動の故に、一應は日勞黨大衆を承服せしめはしたが、しかしその根強き合同要求を抑壓することは出來なかつた。

所謂宗派的分裂主義の誤謬を清算したところの、舊勞農黨の少數幹部を中心とする無産大衆黨が結黨し、合同の新しき相手方として登場した時、日勞黨はもう一度動搖した。合同を躊躇する協調主義的指導分子は、今度は無産大衆黨との合同を拒むべき公然の理由を見出し得なかつた。しかも合同はすでにさし迫つた問題となつてゐた。そこで彼等は、右翼政黨との合同を主張し、無産大衆黨との合同は右翼政黨との合同を阻害すると唱へ始めた。が、言ふ迄もなく、右翼政黨として彼等が目ざした所の社會民衆黨との合同なるものは、その幹部の頑強なる反對のために暫くは不可能なのであつた。

幸にして日勞黨は、盲動の協調主義者を壓倒して階級的統一主義の旗を守り得た。機會主義者等は尚ほも盲動を續けるであらう。日勞黨のすべての先進分子は、彼等を看視して統一の巨歩を踏み進めねばならぬ。

日本農民黨は、「せけん」からは無産政黨でないと言はれ、或者からはファシスト黨の萌芽であるとさへ呼ばれてゐた。それ程この黨の指導者達はプロレタリアの階級的立場から離脱してゐた。だが、同黨の大衆は、舊勞農黨の絶對多數を占めた農民と本質的に異るところなき農民の大衆であつた。この大衆は、闘爭の體驗により、農民のみの、孤立した政黨が何事をもなし得ないことを知り、且つ組織農民を選擧地盤視し、農民の政黨を取引の道具視する指導者の頼むべからざることを見、プロレタリア戰線における合同統一運動の展開につれてます／＼他の無産政黨との合同を熱望するに至つた。日本農民黨のボッス政治家諸君は、この大衆の要求に押され、他黨との合同の早晩避けがたきを看取し、その割込みの好條件を狙ひ、好取引を我物とする意圖をもつて策動を始めつゝ、他方では黨内大衆及び先進分子の合同要求を抑へることに骨折つた。だが、十月二十日の同黨大會に至り、合同派の勢力は既に大會を左右するほど壓倒的になつてしまつた。

八

最後に、我國において社會民主主義を標榜する唯一の政黨なる社會民衆黨の指導部のみは、尚ほ執拗に合同統一主義に反對してゐる。この事實は、彼等の謂はゆる社會民主主義なるものの本性を暴露して遺憾ない。

強猛な榨取と彈壓の下に闘爭する大衆が、その意識における飛躍を遂げる時、彼等を指導するエセ指導者がいかなる運命に置かれるかは、日本農民黨の實例が最も雄辯に語つてゐる。社會民衆黨の指導部もまた、——その欺瞞的統制においてやゝ有能なるが故にのみ尚ほ辛うじて統一戰線の大流に逆行し得てゐるとはいへ、——早晩日農黨幹部の轍をふまねばならぬことは、社民黨大衆そのものがすでに着々と合同統一主義に進出しつゝあることによつて疑ふ餘地がない。

社會民衆黨に於けるプロレタリア要素のほとんどすべては、大衆團體に組織せられてゐなかつた。然るに、昨年においては、野田を失つて以來、總同盟大阪聯合會を中心とする關西大衆は、總同盟大衆の過半を占めることになり、社民黨の一代議士を大阪において當選せしめたのも、この大衆の力であつた。しかるに、社民黨幹部に反對する合同統一の叫びは、この大衆によつてあげられてゐる。大阪聯合會を構成する金屬、紡績、合同勞働の三大組合は、いづれも本年の組合大會において、全無産政黨は合同すべしとの決議を行ひ、それは大阪聯合會大會においても三分の二以上の賛成をもつて通過した。大阪聯合會の要求によつて大阪に開かれた七月十七日の總同盟中央委員會は、この問題を審議した。討議の結果は、鈴木文治君の「時期尚早」なる折衷案の勝利に歸したとはいへ、いふまでもなくこのことは、總同盟の幹部諸君が從來の合同絶對反對の態度を維持し得ず、合同の賛成を意味する——即ち時期の問題であるといふ——聲明を餘議なくされたことを意味してゐる。

以來、總同盟及び社民黨の幹部諸君は、大衆の進出を抑へ、大衆の前進を喰ひとめる役割を成功的に演ずるために、秘術を盡くした。その一つは、合同を主張する關西大衆の先進分子に除名の威嚇を加へることであり、他の一つは、日勞黨との合同に關しては幹部が個人的資格に於て協議することを辭せないと聲明したりすることであつた。だが、最後の切札は、社會民衆黨は資本主義にも共産主義にも反對し、相容れざる指導精神を有する他黨とは絶對に合同せず、同一指導精神を有する他の諸政治勢力との大同團結すなはち右翼結成に邁進するといふ聲明、言ひ換へれば社民黨はあくまでもプロレタリア戰線を分裂せしめるために戰ふといふ、支配階級の意圖そのまゝの聲明をはづかし氣もなく公然と發表することであつた。こゝに何よりも明白なことは、社民黨幹部が味方とするものは支配階級であり、敵とするものは社民黨の關西大衆であることである。

かゝる幹部と關西大衆との對立は、もとより單に合同統一の問題のみではあり得ない。事實において、前議會の田中反

動内閣不信任案における無產黨代議士の鞏固なる共同戰線を、松岡君に曳きずられた社民黨幹部が「獨自の不信任案」を云々して裏切らんとした時、しかして政友會との取引を完うせんと試みた時、その撤回を迫つて幹部の陰謀を粉碎したものは同黨關西大衆の先進分子であつた。更に十月の勞働總同盟大會において、總同盟は資本家と協調してその產業合理化を遂行せしむべきであるといふ、資本家のための議案を提出した松岡君と鬪つて大勝したのも、同じ戰鬪的勞働者たちであつた。古き勞働總同盟の鬪爭的傳統は、この精鋭分子あるが故にのみ尙ほ生きてゐる。資本家政府の前に跪く幹部諸君がいま鬪ひつゝあるのは、この少壯分子が高く把持する階級的、鬪爭的精神である。そしてその精神こそはまた、當面の戰線統一運動の基調をなす。指導精神を云々して、全無產政黨の合同統一に「絕對に反對」する幹部諸君は、ひとり自黨の關西大衆のみならず、實に全勞農大衆を敵とするものであり、それ故にまた、全勞農大衆の敵でなければならぬ。

九

無產諸黨についての以上の如きスケッチは、一口に言へば何を語るか？　我が日本のプロレタリア戰列に立つ全大衆の要求が、合同統一といふ單一の當面目標に向つて集中、醱酵、結晶したことである。そしてそれと共に、この要求を事實化して大衆を前進せしめんとする指導者分子と、この要求に反して戰線を分裂せしめ、支配者階級の前衛分子孤立化の政策を助け、彼等による搾取と抑壓に協力して利潤のおこぼれにあづからんとする指導分子とは、それ〳〵に何びとなるかもまた明白ならんとしてゐることとである。

みづから社會民主々義者と名乘る社民黨幹部諸君が、全無產政黨の合同に反對する表向きの理由は、同黨の代表的理論家とされる赤松克麿君の說くところを聞きさへすれば、いかにそれがたわいもない屁理屈であるかは直ちに明瞭する。（本誌の讀者の利益のために、同君の最近の論文にして、しかも本誌十月號に載つた「量的統一を排して質的統一へ」に據つ

てゐる」)。

（一）どんなでたらめでも平氣でいふ典型的なデマゴーグとしての赤松君の面目は、同君の論文の冒頭の一句においてすでに躍如たるものがある。曰く、「もし無産大衆が眞に全線的統一を切望してゐるのなら、少數の分裂主義者はゐたとしても、そんなものは蹴飛ばして統一へ急ぐ苦であるが、一部の論者が「大衆の要望」だといつて騷ぎ立てても、大衆は案外に踊らないのである』と。こんなことを云はれて、さうかと思ふ者は、大衆とこれを率ゐる「少數の分裂主義」的指導者との現實の關係を常識的にでも知るものゝ中に一人でもゐるであらうか？　赤松君の如き分裂主義者が、その指導的地位を利用して必死のデマゴギーを飛ばし、「統一へ急ぐ」大衆の袖をおさへて口說き立てるが故にのみ、大衆の進みは遲いのだ。にも拘らず、前進の大衆が「蹴飛ばし」さうになつたので赤松君は、日勞黨內の協調主義者と策應し、日勞黨や日農黨を割つて取らうと狂奔した。だが、兩黨の「大衆は案外に踊らないのである。」そこで我が赤松君はまた、かう言つてのけることも知つてゐる——『故に今日では所謂戰線統一論は、やゝ空砲的な調子を帶びて來つゝある、』と。

（二）こんな出駄羅目をいふ赤松君は、「激烈なる資本の攻勢に對して無產勢力は、左翼（共產主義派）も、右翼（社會民主主義派）も中間派も、指導精神にこだはらずに合同して强大なる單一無產戰線を作つて以つてこれに對抗しなければならぬと主張する』ところの統一論に、『最的統一論』といふ、いかにもつまらなさゝな名前をくつつけ、『この見解を取るものは、舊勞農黨、無產大衆黨、日勞黨である』と言ふ。そして赤松君は、この見解をけなしつける、——曰く、『最的統一論者は指導精神にこだはるなといふ。しからば統一された陣營內に於いて、相異る數個の指導精神を綜合し化合して、一個の新しい指導精神を戴くといふのかといへば、彼等はこの點には口を噤んで語らない。』これはまつかな噓である。（例へば私が本誌の昭和三年新年號に書いた「無產政黨合同問題批判」を見よ。もし、赤松君がしらばくれるなら、私は幾度でも繰りかへして赤松君の前につきつける。後段を見よ）。

（三）　だが、赤松君は何喰はぬ顔でつゞける――『しかし彼等は誤らないと雖も、他の言動によつて彼等が戰線統一の後に於いて自己の指導精神を放棄しないことは極めて明白である』と。また、言ふ迄もないことではないか。吾々は、自ら信じて正しいとなす指導精神を放棄せんがため、乃至はそれを赤松君の如き誤つた指導精神と「綜合し化合」せしめんがために、統一戰線を唱へるのではない。この當然すぎる當然を、赤松君は怪しからぬことのやうに說かねばならぬ。曰く、『さうすると各々の指導精神は對立したまゝに戰線を統一することになるが、……そんな機械的な統一戰線は、出來上つても直ちに激烈な内部鬪爭を惹起して、戰鬪力を増大するどころか、却つて戰鬪力を減殺し、揚句の果ては再び戰線分裂の破目に陥るであらうとは、過去の多くの事實がこれを切實に（！）立證してゐる』と。そして、赤松君は、その「事實」としてかの勞働總同盟が分裂したことと、日本・全日兩農組合が合同して出來た全國農民組合に、『依然として二潮流が並存し、有機的な統一的勢力となり得ないで困つてゐる』といふこととを、あげてゐる。しかるに此の二つの事實ほど、赤松君等の指導精神の間違ひを「切實に」立證するものはないのである

合同した全國農民組合がいま困つてゐるのは、その合同が赤松君の言ふ如く「失敗」であつたからではなくて、組合と組合との合同は成功的に遂行されたにも拘らず、組合員の所屬する政黨と政黨との合同が未だ出來てゐないからである。そして政黨間の合同が出來ないのは、赤松君の如き分裂主義の指導精神がまだのさばつてゐるからではないか。また、總同盟を二度まで分裂させたのは、外ならぬ赤松君等の除名政策ではなかつたか。勞働總同盟は、日常鬪爭のための大衆團體である。その日常鬪爭の方針に關する意見の相異から生じた爭ひにおいて、反對派の除名を强行して大衆團體を分裂せしめるやうな指導精神が正しいか、正しくないか。すくなくとも左翼的指導精神は、かゝる反階級的行動を嚴禁する。たゞ、既に傷もつ利己的腐敗の幹部のみが、正しき批判を恐れ、自己の繩張りを維持するために批判者を除名する。赤松君は、分裂後却つて總同盟は『戰鬪力』を増したことを『斷言することが出來る』といふが、少しでも事情に通ずる者は、

その「煽動力」を「取引力」と呼ぶことを忘れないであらう。そして君等は、私人、世間ずることに、闘争の武器たる労働組合同盟を取引の道具と化したればこそ、いま組内の総同盟大衆はかの野卑的特権のために戦つてゐるのではないか。幹部は再び此の階級的先進分子を除名せんとする。この驚くべき指導精神をなす松岡諸君が総同盟内にボッス政治を強行して飽くまでも「指導権」を維持せんとする限り、そしてそれにも拘らず総同盟内の大衆及び先進分子は絶えず目醒めて階級的軌道を前進せんとする限り、除名とか分裂は総同盟の年中行事たらねばなるまい。

（四）　合同によつて生ずる團體内に異なる指導精神が對立することを、何故に赤松君が恐れるかの理由はすでに明白である。現在の自己の團體内に於いてすら、赤松君等の誤れる指導精神は、正しき指導精神の擡頭によつて絶えず脅かされてゐる。そして、自己の大衆團體の分裂を犠牲にしてまで、その腐つた指導精神（！）の横車を押さうとしてゐる。赤松君等の指導精神は、合同によつて生ずる新團體内においては、今よりも一層正しく、一層強い指導精神との對立によつて悩まされるであらう。しかも現在の如く、除名によつて横車を押すことは一層困難となるであらう。それをこそ、赤松君等は恐れてゐる。

私は、一年前に言つたことを玆で再び繰返して置く。赤松君その他の社民黨幹部諸君が、もし眞實に自己の指導精神が正しいと信じてゐるならば、恐れずに合同を決行し、異なる指導精神に面と向つて見るがよい。そしてそれと、自己の指導精神とを、同一大衆の前に同時に示して見るがよい。そして諸君の指導精神を勝利せしめてその正しさを立證して見るがよい。すくなくともさうすることは、指導者としての諸君が、大衆に對して有する第一義務ではないか。さうして勝てないやうな指導精神が、正しい指導精神であり得やうか？　大衆は無條件的に正しき指導精神を求めてゐる。だが、――俺れの劍法のみが正しいのだと一方では頻りにいひながら、しかし他流仕合は危險だからしないといつてスマしてゐる赤松君の如き指導者の精神を、大衆は果して何と見るであらうか。

赤松君は、社會民衆黨の道場に立籠つて他黨の指導精神と鬪ふつもりでもあらう。だが、そんなつもりでゐることこそが、赤松君の指導精神の間違ひを今ま決定的に立證する。何故といつて、いまこそ大衆の要求は合同統一に向つて集中結晶してゐるではないか。そしてその要求こそは、いまや熾烈なる資本攻勢と戰ふため、兇猛な反動支配と戰ふための、大衆の現實の絕對的必要から生れ、それ故にまた絕對に正しき階級の要求ではないか。かゝる場合に、合同統一を拒否せねば守れないやうな指導精神、資本攻勢と戰ふことを拒絕して大衆の要求にそむくことによつてのみ維持されねばならぬやうな指導精神は、無產階級のための指導精神ではない。ブルジョアジーのための指導精神である。吾々は、赤松君等の指導精神を、かゝる指導精神としてのみ、いま具體的事實に即して批判し排擊するのである。たゞ、赤松君の指導精神であるが故に、もしくはまた社民黨の指導精神であるが故に、批判し排擊するのではない。

（五）當然に指導精神の對立したまゝでなされねばならぬ戰線の統一を、赤松君は『鵺的統一』といふデマゴギー的修辭であつさりと片づけ、そしてそれでは『出來あがつても直ちに激烈な內部的鬪爭を惹起して』混亂するから駄目だらうと、會社の重役かブルジョア政黨の「總務」連でもがいひさうなことを言つてゐる。だが、赤松君よ、無產政黨は、株式會社やブルジョア政黨のやうに、その指導者が利得を捻り出すために私有物視すべき團體ではなかつた。意見の對立とそれに基づく「內部的鬪爭」は、そんな團體においてこそ禁物であれ、無產政黨にあつては正にその發展の活力であり、生命であるのだ。赤松君がいかに資本主義末期のブルジョアジーに仕へる日和見主義的理論家であるとはいへ、ブルジョアジーでさへ未だ新興の政治勢力であつたあひだは活潑なる公然の討議の力によつて大衆の意識を引きあげてゆく議會制度をば舊勢力に對する鬪爭及び自階級の發展のために活用したといふ事實をまでも赤松君は忘れやうとしてゐる。戰略や戰術や組織の方法やスローガンについての意見の對立と、それに基づく活潑公然の討議、――そこに生ずる「內部鬪爭」のないやうな無產政黨は、發展性のない團體である。大衆を引上げ得ない團體である。赤松君は、そんな無產政黨を欲して

ゐるのであるな。

（六）「内部闘爭」のある結果、「揚句の果ては再び戰線分裂の破目に陥るであらう」と、ここと、しずかに色わけはいふ。讀者諸君は、かくいふ赤松君が、かの除名主義、大衆團體分裂主義の赤松君であることを想起すれば足る。だが、労農分子は、組合と政黨とを問はず、合同統一したことによつて生ずる廣大な大衆團體の内部において、不斷に自己の正しき指導精神の浸透、徹底、勝利のために戰ふと同時に飽くまでも赤松君等の除名・分裂の陰謀と戰つて大衆團體を守り得る確信をもつてゐる。それ故にのみ、いま大衆の要求に忠實に、「指導精神にこだはらざる合同」を主張する。眞實なる、階級のための指導精神は、それ自身が勝つために、日常闘爭の大衆團體の擴大強化を犠牲にし得るものではない。自身の勝利は同時に大衆團體の擴大強化となつて現はれねばならぬ。日常闘爭のための闘爭組織に分裂と軟弱化をもたらしてのみ守らねばならぬやうな指導精神は、僞りの指導精神である。そしてそれが赤松君の指導精神である。

（七）最後に赤松君は、日勞黨や無産大衆黨は、『他黨の幹部を排撃することによつて、……自己の指導精神の下に全戰線を統一せんとするものである。』『しかし一體かうした自己中心の人を食つた戰線統一論はうまく成功すると思つてゐるのだらうか。一體量的統一論者は、他黨の幹部と大衆とを容易に中傷離間（！）出來るものと思つてゐるが、それがそもそもの見當ちがひである。』『相手が掏摸だとわかりきつてゐるのに拘らず、こちらが物を掏られたら、餘程間拔けた話である。』といつてゐる。そしてこれこそが「中傷離間」といふものである。かゝる中傷者があればこそ、吾々はわかり切つた統一論を繰り返さねばならなかつた。玆にもう一度、吾々がいま赤松君を批判し排撃してゐるのは、赤松君の分裂主義が大衆の階級的要求を裏切つてゐるといふ現實の具體的事實に即してであることを繰返しておかう。だが、讀者諸君は、右において赤松君が他黨の統一論を、自己の「掏摸」的統一論にすりかへておいてそれに惡態をついてゐるすばしこさを見逃してはならぬ。すなはち赤松君は『日本において社會民衆黨は、日本農民黨の反動的要素を清算して、これと合同すべ

きである。」といひ、合同はまづ日農黨の幹部を排撃してからのことだといふ自己の掏模的統一論の本音を吐いてゐるからである。だが、この統一論を實踐に移した赤松君は、見事に日農黨と日勞黨とをスリそこねてしまつた。十月二十日の日農黨大會は、同黨に向つて動いた掏模的統一主義者赤松君の魔の手に對する憤慨をもつて劇的なシーンをさへ展開した。そして日農黨は、指導精神にこだはる赤松君等にスラレたら「餘程間拔けな話だ」とも何ともいはずに、指導精神にこだはらない合同を主張する日農黨や無産大衆黨との合同を進めつゝある。この現實は、日頃、「現實主義」をもつて誇る赤松君の指導精神がいかに現實的であるかを率直に語つてくれる。

社會民衆黨の、右翼結成による統一とは、掏模的統一のことである。社民黨の幹部諸君は、反動ブルジョアジーがつくつてくれた治安維持法の黒旗をかつぎ、資本主義にも反對するが共産主義にも反對するとわめき立て、大衆の油斷を見すまして各黨各組合を掏つて廻る。大衆は「常に用心せよ！」。

一〇

筆を進めてこゝに到つた時、都下の新聞紙は一齊に、無産四黨——日勞、無産大衆、日農、民憲の四黨の合同協議會が成立したことを報じた。

これは、指導者利己主義の幹部に對する大衆の勝利を意味し、大右翼結成主義に對する統一政黨主義の勝利を意味する。だが、それらは尚ほ一應の勝利を意味するに過ぎない。合同は目的自身なのではなく、多くの手段の一つに過ぎない。この手段は正しき階級的目的に仕へねばならぬ。すなはち、各黨の先進分子は、この協議會及びその成果としての四黨合同を通じて、眞實に全大衆を前進せしめなければならぬ。このためにまづ必要なことは、この合同をして名實共に全無産政黨合同の第一歩たらしめることにある。合同協議會は、それ自身決してたゞ四黨合同のための協議會ではないことを、全

大衆の前に暴露すべきである。しかして、[illegible]ある。これによつて初めて、我が勞農派指導部及び新黨準備會幹部の古き誤謬は實踐的に清算せられ、[illegible]は昂揚において甦生を完うし、無産大衆黨の結成の意義も完全に實現せられるであらう。いふまでもなく、四黨合同協議會は左翼分子のみで構成される協議會ではなく、却つて左翼を恐れる[illegible]主義的指導分子乃至はその代表者をも含んでゐる。それは、指導精神にこだはらざる合同の促進せられる過程において必然的に生ずる現象である。從つて、協議會をして、新黨準備會の結黨によつて生ずる新黨の參加を決議せしめることは、不可能なことに近いとも見られる。この決議を強ひれば、協議會それ自體の決裂をさへ招くであらう。分裂主義の右翼結成主義者が牙をむいて働きかけてゐる今において、協議會の決裂は絶對に避けねばならぬ。だが、協議會の内外にある各黨の先進分子は、決裂を引起さざる範圍において、新黨準備會の結黨によつて生ずる新黨の參加の要求を協議會に反映せしめることは、劣らず絶對に必要である。

同樣に、協議會は、社會民衆黨に對しても合同への參加を求むべきである。これは特に社民黨大會に先きだつてなされねばならぬ。社民黨の幹部がいかに合同に反對するにもせよ、同黨の大衆は熱烈にそれを要求し、その要求をもつて大會に臨み、裏切り的な幹部に對する決戰を行はんとする今において、四黨合同協議會が社民黨の參加を要求する意志表示を怠ることは、社民黨大衆を見殺しにするものであり、また全大衆の統一の要求に對して忠實なるものでない。

二

吾々は、統一政黨がいま一擧にして實現せられると考へるほど沒常識ではない。また、極めて近き將來におけるその實現を夢みるほどに空想的ではない。更にまた、やゝ遠き將來においてすら、完全な、文字通りの統一政黨が出來上ると信じ得るやうな理想主義者ではない。吾々はしかし、統一的大衆政黨を獲得することをもつて——そしてそれを能ふ限り階

級的な黨に高めることをもつて、吾々の鬪爭の一貫した方針となさねばならぬ。そして吾々はかくの如き黨を、すくなくとも實質的には、わが勞働者農民大衆のものたらしめ得るといふ確信をもつて進みつゝある。すくなくとも四黨合同は、すくなくとも四黨の階級的前衛・先進分子相互の結合を强めるであらう。當面の合同の階級的意義の一つは、かゝる結合をもつて階級的指導勢力の生長發展過程における飛躍的一步たらしめることによつて實現される。

かくの如く、各黨を横に貫く横斷左翼的な勢力は、更に、尙ほ合同に參加せざる各黨內の階級的前衛・先進分子に向つて手をさしのべ、しつかりと互ひの腕を組み合はせねばならぬ。すべての無產政黨に楔の如く横さまに打ち込まれた此の力が力强く押し上げる時にのみ、すべての無產政黨は統一へと高められてゆく。

よし端緒的にもせよ階級的指導勢力を形成する現在の前衛・先進分子は、澎湃たる鬪爭を展開し、鬪爭を通じてのみすべての槓杆たる役割を果さねばならぬ。ひとり政黨のみではない、諸君は勞働者農民のすべての組合をも統一へと高め、すべての無產團體をも大衆的規模に結合せしめつゝ、その一步々々と共に全無產階級の鬪爭力の集中と强化とを、飛躍的に實現しゆくであらう。謂ふところの鬪爭力の集中は、既成の鬪爭力の集中强化に盡きはせぬ。それは直ちに、全然新たなる大衆をプロレタリア戰線に立たしめる力であり、またあらしめねばならぬ。かくして諸君の鬪爭は、部分的斷續的な鬪爭から全無產階級的な鬪爭に轉化し發展するであらう。無產階級それ自體が强まれば强まるほど、他の多かれ少なかれ動搖的な被抑壓諸層――農民や小市民――もまた、自身の解放のために協力すべき階級の所在を明確に認識し、無產階級が掲げる炬火に續いて進むであらう。

當面の合同は、劃時代的鬪爭の展開のための準備行動に過ぎない。だが、合同の達成は、階級意識の發展における跳躍、大衆の飛躍的前進の事實化であるが故に、吾々はこれを劃時代的巨步であるといつた。この巨步を踏み切らしめよ。集中强化によつて激增する鬪爭力は、階級鬪爭の發展における新しき時代を劃すであらう。

確乎たる階級的指導勢力をもつ强力な政治的無産階級の實闘する鬪爭は、政治の全過程に一變をもたらす。政治に勝敗を決定するものは、もはや料亭の灯下に私語する利權政治家の取引ではなく、大衆を組織しつゝ、天日の下、工場に鑛山に農村に街頭に議會に、解放の旗をひるがへしたつ全民衆の意思、行動であるであらう。これと共に、政治的爭點の重心もまた一變し、いかに巧みに反動政治を行ふべきか、いかに巧みに既得權を永久化すべきかに關するブルジョア＝地主の各分派間の紛爭は後景に退ひやられ、政治的進歩か反動かの根本爭點を、議會的組織內に戰ひつくす二つの基本的社會階級の、端的な對立抗爭こそが最前面に押出されるであらう。しかして此の歷史的鬪爭における新興階級の輝く勝利への展望のみが、全日本の生氣であり、また光明であるであらう。

劃時代的鬪爭の展開へ――

――一九二八・一二・五――

マルクスより出でてマルクスを克服するもの

河合榮治郎

（一）

目下の日本には、反動の空氣が横溢してゐる。之を僅に一ケ年以前の日本と比較してみよ、今が看過すべからざる轉機に在ることを見出すであらう。久しからざる以前に於て、吾が學界はマルクスの徒に非ざれば、人に非ざるが如くに思はれて、歩むに肩身の狹きが如くに思はれた。然るに今マルクス思想の普及は、既に飽和狀態に到達した。一部の私有獨占であつた思想は、今は大衆の共有財産となつた。語るも奇に非ず述ぶるも耳目を聳だてしめない。マルクス、エンゲルスを語るといふ點なるその故に、新進の學徒とされ有望の思想家とされたものは、自らの地盤の上に立つたのでなくて、マルクス、エンゲルスの肩車の上に乘つてゐたのであつた。今や大衆の批判はそのあるべき地位に立ち戻つた。彼らは偉人の肩車から引き下されて、その自らの價値のみにて評價されるに至つた。

此の狀勢が既に萠してゐた時に恰も、本年四月所謂左傾教授は全國一齊に淘汰された。若し必要とあらば大學の一二は潰すも可なりとまで豪語した有力なる閣員は、いかにその態度が勇敢にして剛腹であつたであらう。之に對して反撥し抗爭すべく期待された左翼學徒の、いかに愼重にして忍從にして且つ怜悧であつたらう。往年我がものの如くに跳梁した全盛時代に比して、その抗爭の實力は餘りに人をして心外に感ぜしむるものであつた。實力を以て爭ひ難しとするは必ずしも咎めない、唯一人として「否」と唱へて之を批判し之に抗爭するもののないことは、吾等の期待に反する甚しきものであつた。今や學界に於てマルクス學徒と名乘ることは、小さき擧を以てのみ云はる

るものとなつた。かくして[illegible]に[illegible]も、高くマルクス主義の久しき迷夢より覺めつゝあるに、不拘すべからざる眼前の状勢である。

更に眼を轉じて實際界をみよ、三月中旬共産黨の檢擧を手始めに、保守派は全戰線に亘つて驚くべき攻撃を開始した。之ほどまでに保守派の底力が隱れてゐたかと思はれる位に、今は反動の勢力は限なく全日本を壓倒した。見よ左翼の戰線がいかに混亂を呈しつゝあるかを。信ずべかりし鬪士は信ずべからざりし臆病であつた。無視されてゐた列伍の中よりして、却て勇敢なる戰士は躍出した。その何人を信じ何人を捨つべきに、混沌として去就に迷つてゐる。實力以上に虚勢を張つた戰線は、脆くも一敗地に塗れて、今はその收拾に忙殺されてゐる。

支配階級の「無知」と「油斷」とに乘じて、帝國の各所を蝕ひつゝあつた白蟻は、今や探知され發見され掃蕩されんとしつつある。今までの「無知」に代ふるに「覺醒」が來、「油斷」に代ふるに「警戒」が來た。その警察網の全國的に行屆けるをみよ、その根治の對策に汲々たるをみよ。要するに思想の自由を解せざる日本に、不思議に自由を惠まれたマルクス主義は、今や停止状態に入つたのである。

必ずしも社會運動のみと云はない、内政に外交に社會の全面にまで、いかに反動が[illegible]るであらう。而も注意すべきは、此の状勢に對して[illegible]看破するもののないことである。すべて此當然のことたるかの如くに、靜に穏かに進行しつゝあることである。甞て依然として急進派の味方たるが如くに思はれた大衆は、今は我れ關せざる如くに冷然として此の状勢を傍觀してゐる。勇敢なる保守派と無力なるマルクス派と、冷淡なる中立大衆との、三つ巴を戰せて我が社會は、一日一日と歴史の一頁を繰りつゝある。

此の状勢に直面して、少からざる人は前途に迷ひつゝある。マルクス主義に慊たらず而も反動に與するをえず、反動に與しえざるが故にとて、その路をマルクスに求むるをえず、マルクスに背けばとて此の反動に加はるを屑しとせざるものは數多いであらう。殊にそれは右か左かの單純なる岐路ではない。一にマルクス主義なるものが、極めて複雜なる體系を持ち、又一個特異なる社會思想たるに在る。その故に人はマルクス主義に直面して、いかに之を清算すべきかに迷ふのである。甞てイタリアのクローツエはヘーゲル思想の中で何が消え何が殘るべきかを論じたことがある。今マルクス主義に對して採るべき態度も亦、輕卒なる一括的の取捨に非ずして、繊細にその部分を吟味し取捨を決せねばならない。

筆者はマルクス主義者ではない。過去に於て之に反對し、今後も亦之に反對を繼續するであらう。今マルクス主義が澎湃たる反動の潮流に翻弄されつゝあるを見る時に、余は悲喜交々至るを覺える。若し之を好まざるを以てせば、マルクス主義の凋落は喜ぶべきが如くである。然しマルクス主義の凋落は、單にマルクス主義のみの凋落と目すべきではない。その運命は更に大なるものを持ちはしないか。その興亡をいかに迎ふべきか、之と共に現下の反動にいかに對すべきか。之れ實に目下の日本國民に課せられたる最も重要なる問題である。此の難局に際會して、人は何人も去就を誤らざるの責任がある。

（二）

吾々は今靜に停止して、マルクス主義が青年學生の間に、どれほどの勢力を擁してゐたかを顧みるの必要がある。此の狀勢は最近に至つて少しく變化したことは、前節に述べた如くであるが、青年學生とマルクス主義との關係を覘ふ好個の資料である。固よりいかほどの割合の學生がいかなる傾向に在るかは、容易に判斷しうるものではない、從つてそれは單に私の憶測に過ぎないことはいふまでもない。而も尙大體に於て時代の潮流を指示するに足ると思ふ。

私に依れば、現在の學生の約七割は極めて穩當な平凡な部類である。彼等は現代社會秩序の何たるかに興味を持たない。彼等は來らんとする社會を持ち來すに、何等の役割を占めやうと思はない。考ふる所は現社會に於て、自らがいかに生存し成功すべきかに在る。それに必要な限りに於て學校の課程に勤勉であり、それに必要ならざる限りに於て、讀書もしなければ思索もしない。そのあるものは克己して純潔な生活を送り、あるものは誘惑に敗れて相當の遊蕩を試みる。いかなる時代いかなる社會に於ても、かゝる部類の大衆が社會の多數者である。然し數の多きを以て必ずしも力の多少を卜しえない。彼等の存在は社會の進步に益する所なく、又失ふ所もない。要は殘れる三割が何であるかに依存する。而も私は十年以前に於て此の七割は更に多くして約九割を占めてゐはしなかつたかと思ふ。此の九割が減じて七割となつた所に、現代學生の進步と從つて日本の進步を指摘したいと思ふのである。

餘す所の三割は人生に對し社會に對し一定の思想を持たんとする。その中に於て、約一割が所謂マルクス學生である。若し更に詳細に分析すれば、その內の五分が純粹のマルクス學生で、他の半分は觀念的マルクス主義に浸潤するもので、之が眞實のマ

ルクス學生中の鬪士である。後者は自ら稱してマルクス主義者と云ふ。然しその人格の點に於てはマルクス主義化してゐるのではない。口にマルクスを唱へてはゐるが、之に殉ずるの操守がある譯ではない。マルクス學生が反對思想を嘲つて觀念的と呼ぶ言を借用するならば、彼等は觀念としてマルクス主義を援用するので實踐の之に伴ふ力強さが缺けてゐる。之等兩者のマルクス學生は多くは學外に於ける無產者運動と聯絡を採つて、その爲に學外で働いてゐる。又學內に於て團體を作つてマルクス主義の普及と宣傳とに餘念ない。彼等は一般の講義をブルジヨワーの御用講義と稱して教室に出席しない。然しマルクス主義の文獻に關する限りに於て、丹念に克明に研究に沒頭する。

更に餘す所の一割の學生は、自らはマルクス主義者とは稱しないが、大體の傾向に於て之に好意と同情とを惜しまないものである。必ずしもマルクス主義の文獻に親しんでゐるのではない、又之に全部滿足してゐるのでもない。然し一旦マルクス反マルクスの對立の起る時、彼等の援助はマルクス學生の側に傾くのである。最後に殘る一割は、別に獨自の人生觀を持ち社會觀を持つ、而もそれがマルクス主義と反對であると云ふ立場から、マルクス學生に對立し之に抗爭する。此に保守的な學生と自由主義理想主義的な學生とを抱括する。保守的な學生は、その勢力に於て、マルクス學生に比すべくもあらない。唯、理論と體系とを缺くが故に、爭と云ふ實踐の鬪爭に於て、對抗するに不利がある。自由主義理想主義的の學生こそは、學徒として人として愛好すべき青年である。彼等には理論もあり體系もある。然しその傾向上當然に孤獨を愛し組織團結を好まない、又人格は純であるが理論を實踐に移すに意志の弱さがある。その故に社會鬪爭に於てマルクス學生と拮抗しえないのである。

此に七割の醉生夢死の學生と、三割の自覺したる學生とがある。その中の一割はマルクス學生であり一割はその後援者である。之に拮抗する僅に一割の學生が、幾多の缺點を持つとせば、二割のマルクス的傾向は數の少なきに拘はらず、全體を支配しうる實力を持つ。而も之等の學生は決して無賴不逞の徒ではない。その頭腦は鋭敏にしてその鬪志は熾烈である。彼等は現代社會の成功兒となりうべき幾多の才能を惠まれたるに拘はらず、現存秩序の不合理を默過しえざる情熱を持つ。吾々が曾て學生時代に在りし時に於て、學級の衆望を收め將來を嘱目された型の學生は、曾ては自由主義理想主義的な傾向のものであつた。それが今はマルクス學生に變遷して來てゐるのである。之は必ずしも學生界のことのみではあるまい。農村に於ても工場

に於ても、他のあらゆる點に於て尊敬に値する青年が、相率ゐてマルクス主義に走るを見出すのである。マルクス主義が問題の老人の間に於てすら脅威を與へつゝあるは、その原因が此に存するのである。七割の寥々寂々の徒は、大勢の中心勢力ではない。彼等は動くものでなくて動かさるゝものである。之を動かすものは殘る三割にありとして、天下の俊英を擧げてマルクス主義に傾くとせば、その恐るべきや云ふを俟たない。たとへ彼等の信條はさまで固くはないとしても、將來に於て融通の餘地はあるにしても、たとへ青年時代の限られた時期だけとしても、以上の事實は默過すべからざる重要さを持つと云へないか。一葉の流るゝを以て天下の趨勢をトしうべしとせば、識者の着眼を俟つ問題は此に伏在するのである。

（三）

然らば何がかくの如くマルクス主義を時代の勢力たらしめたか。之が爲には數段に分つて說明を試みねばならない。

筆者が學生々活を送つた今から十數年前と比較して、現代の學生は二つの方面に特異性があると思ふ。その一つは社會改造を關心事とすることである。十數年前に於ける學生の大多數は、國家主義者であつた。日本と云ふ國家の膨張と發展とが、彼等の關心事であつた。此の多數者に對抗して現はれた一群は、自己の教養と完成とを念とする個人主義理想主義であつた。大學時代はノートの整理に忙殺されてゐた爲に、此の對立は顯著に現はれる機會がなかつたが、高等學校の時代に於て、國家主義に對立して新に現はれた理想主義的個人主義の姿は花々しいものであつた。それは數に於て並に於て劣るが、その思想的根據に於てその人格的の力強さに於て、來るべき時代を負擔するに足ると思はせた。その個人の完成とは、必ずしも社會の問題に無關心なることを本質とするのではない。然し少くとも學生時代は自己の思想を整理すべき沈潜の時代であつて、全人格的の命令に非ざる社會への進出は愼むべきである。而して若き學生の時代に於て之が全人格的の動きだと誰が輕卒に斷じうるか。先づ爲さるべきことは個人の側に在ると云ふのであつた。從つて路を先づ何れに採るかに在つて、事の本質が必ずしも國家主義と相容れないものではない。然し立場の相違は明白であつた、そこには根本的に對立する人生觀が、朧ながら既に姿を現はしてゐるのである。

幸か不幸か理想主義的個人主義が、時代を支配した命脈は短かつた。之に對立して擡頭して現はれたのが、即ち現時の社會改造主義である。個人は社會の產物であ〔る〕、個人の完成は社會

の完きたらしめんことに外ならない。或は個人の完成は[illegible]現[illegible]秩序の成立である。或は[illegible]界に於て[illegible]の不安に失くものが多き時に於て、個人の完成に拘るは利己主義であると云ふ。その論據は色々擧げうる、而して必ずしも當所に當れた反對ではない。然し此れ社會の問題を關心事とする傾向が、而も青年の間に出現したことを知れば足りる。今之を往年の國家主義と對照すれば、それが第一に個人の完成に反對するに於て共通であり、第二に社會を以て關心事とすることに於て同一の立場に在る。而も兩者の間には看過すべからざる次の差違がある。第一に國家主義の念とするものは國家である、その理想とする所は外國に對する自國の優越である。社會改造者の念とするものは社會である。その理想とする所は、今在る社會をあらねばならぬ社會に改造することである。彼は世界に於ける國家の比較にあり、之は異る時代に於ける社會組織の比較に在る。彼は社會組織の點に至ては、直接の關心事とはしない、寧ろ國家の發展と調和しうる限りに於て、それは現狀維持に傾くであらう。第二に國家主義は、國家の發展を念とする爲に、必要あらば自己を國家の爲に犧牲とすることを忘れはしない。然し軍人の如き特種の職能とする場合は稀有である。之が國家主義なるものが、個人を犧牲とすと稱しつゝ利己主義と調和しうる所以である。之に[illegible]ずる、從つて[illegible]に動かされないのみならず、一身の[illegible]せねばならない。[illegible]に國家主義者は解決を與へた理論を持つてはゐなかつた。それは感情であり本能であつた。それは便宜的であり因襲的であつた。之に反して改造論者は、自己を指導すべき原理を持つゝ少くとも之を持たんことを慾求する。此の點は自ら次の特異性に接續する。

現代學生の第二の特異性は、指導原理を要求して止まないことである。その時その時の必要に臨んで、その場限りの對策を以て糊塗することに堪へない。あらゆる場合に妥當すべき一定の原理を探つて、時を異にした同一の事件に、矛盾なき處置を採りたいのである。いかなる場合が起らうとも之に適用して悖らざる原理を把握せねば滿足出來ないのである。此の要求こそは未開人を文化人より區別し、兒童を成人より區別する重要な契機である。科學の進步も哲學の發達も懸つて此の要求の心理の上に在る。維新以來の文化の水準は遂に青年學生をして此の要求を持たしむるに至つたのである。眞に祝ふべきである。

此の要求は社會進化の理論を求めしめる。何が理想の社會であるかを究めしめる。何が吾々にとつて善であるかを考へしめ

る、認識はいかにして生ずるか、宇宙の本體は精神にあるか物質にあるかを探らしめる。その與へられた答案が正しきや否やは問ふを止めよ。かゝる種類の問題までが、法律政治經濟を學ぶ學生の興味の對象となることが、どうして十年以前の學生に豫想が出來たであらうか。すべてを根本に突きつめて一定の思想を持ち、之等の思想を一元的の體系に構成したいとは、現代學生の熾烈なる要求である。讀書慾の旺盛なること、態度の眞劍なること、視野の廣潤なること、事物を根柢に究めること。すべて之れ一代の教師と哲人とが來さんと欲して止む能はざる傾向は、朧ながら現代學生にその萠芽を現はしたのである。

社會改造の情熱と指導原理の要求との二つは、現代學生の特異性である。今此の特異性を提げて、幾多の思想を點檢してみよ。社會改革の指導原理となるべきものが何處に在るか。理想主義の哲學は偉大なる指導原理はあるが、不幸にして社會改造の原理ではない。サンジカリズム、ギルドソシアリズムを迎へたことはある。社會改造の情熱を滿たしうるも、指導原理の體系を與ふるには足らぬを覺ゆる。社會政策の學説も亦、現存社會秩序に何等かの變革を加へるものではある、然し依然として原理と稱するには、淺薄にして斷片的である。

かくの如き特異性を提げて、之を滿足すべきものを求めて、彼等はマルクス主義に於て、渴望を醫したのである。

（四）

然し以上の説明では、マルクス主義を迎へた心理的遠景を與へるに止まつて、説明としてはまだ充分ではない。マルクス主義は單なる社會主義の思想ではない。それは唯物史觀なるものを樞軸とし、從つて根本に於て唯物論を採るものである。マルクス主義を採つたと云ふ時に、單に社會主義の原理を採つたと云ふ説明では足りない。何故唯物論を哲學とする社會主義を採つたかの説明が加へられねばならないのである。

その説明は私に依れば二つあると思ふ。一つは現狀打破を旨とする思想は、多くは唯物論に據ると云ふことである。少くとも理想主義と反撥すると云ふことである。マルクス自身が唯物論を採つて觀念論を排したのも之であらう。ミルはその「自叙傳」に於て「論理學體系」に於て「ハミルトン哲學の檢察」に於て、明白に此のことを告白してゐる。人間に時間と空間とを超越して妥當する先天的原理が内在してゐると云ふことは、必ずしも現に存する社會秩序がその永遠性を有するものだと云ふ論結を齎すものではない。從つて理想主義はその本質に於て、毫も現存秩序を保持すべき必然の因緣はない。然し世に絶對永遠

のものにない、すべては時と所とによつて變化するものだと云ふ思想に、現狀の價値を相對的とし、一時的のものと考へしむるに便宜である。況んや理想主義は多くの場合に於て絶對永遠を說くに急にして、眼前現實の社會を批判するの遑がない、これを批判せざることに於て、一應現狀維持を消極的に援助することとなる。此に於て現狀打破論者は理想主義を當面の敵とする、それは反理想主義の立場に根據を置かしめるのである。詭辯學派、フランス革命論者、功利主義者、すべてさうであつた。その思想史上の因緣が、今マルクス主義に於て社會主義と唯物論との奇怪なる結合に見出されるのである。

然し此に當然に反問が起るであらう。たとへ思想史上の因緣はどうであらうとも、吾が日本の忠君愛國主義は疑ふべくもない一種の理想主義である。牢乎拔くべからざる此の理想主義の國民が、何故に唯物論を受容したのかと。私は日本從來の國家主義こそが、寧ろ唯物論の爲に路を準備した同工異曲のものであると云ひたい。之を說くことが私の說明の第二である。人は私の答に驚異の念を抱くかも知れない、然し事實はさうなのである。若し唯物論なるものに反撥し抗爭せしむるものがあるとせば、それは唯一つ個人良心の權威を自覺したものである、その故に意志の自由を求めて止まざるものである。此の一點のみ[illegible]步せば唯物論は大手を振つて一步々々と侵入しうる。國家主義なるものをみよ、それは國家の秩序と平和とを絶對的のものとする。その故に國家の命令は絶對の權威を持つ。個人良心の「否」と云ふ叫びは、そこでは秩序の妨害であり統一の邪魔物である。個人は國家の規定した法律と社會の慣習と多數者の輿論との前に、從順なるべく豫期されてゐるのである。それは外なる命令に動けよと教へ、内なる聲に聽けよとは云はない。此の國民よりしていかにして意思の自由が必要とされるか、いかにして唯物論に反撥せざるべからざるか。外なる命令に動いた國民は、自律を持たざる點に於て、唯物論の必然論には寧ろ親しみ易いのである。

更に又國家の發展を文化的方面に考へずして、領土的經濟的方面に考へることに於て、それは價値付けられるものを價値あるものとすることに於て、唯物論と對立するものではない。寧ろ共同の地盤に立つものである。自己の身命を國家の爲めに犧牲とせよと云ふ國家主義が、理想主義的色彩を多分に有するに拘はらず、而も不思議にも唯物論と同類項である。假りに國家主義と云ふ形を離れても、明治大正を通じて學界を指導した大學の教授の內、僅かの例外を除いて、誰が理想主義を明白に[illegible]

したか、誰が唯物論を排斥しえたか。唯物論を採らざりしは、彼等が唯物論をさへ理解しえなかつた爲である、斯る根本の問題は彼等の問題に置かれなかつたからである。若し之を問題とし之に去就を決せざるをえざりしとせば、彼等は擧げて唯物論を採るより外に路がなかつたであらう。惜しきは理想主義的個人主義の命脈の余りに短かりしとである。新カント派の思想の紹介の足らざりしことである。兎も角も唯物論は根を張るべく、用意されたる地盤を此國に見出したのである。何物の敵對を受けずして、無人の境を往くが如くに浸入しえたのである。

（五）

然しまだ之だけでは説明を盡してはゐない。何故なれば日本に於けるマルクス主義はロシアに於て構成され展開された一種特異のマルクス主義である。それが共産主義と云ふ形を採つたマルクス主義中の一派である。それはカウツキーによつて祖述されたマルクス主義でもなければ、ベルンシユタインによつて訂正されたマルクス主義でもない。私有財産制度を廢止するに議會制度を以てせずして暴力革命を以てし、社會革命の後に於て反對思想を彈壓する無産者獨裁を許容するマルクス主義である。何故に日本は此の形式のマルクス主義を受容したか、之に觸れるとなしには、此の説明はまだ充分とは云へないのである。

同じく社會主義を採りながら、之を實現する方法として、總選擧に於て多數の投票を獲得し、社會主義の政黨を議院に於ける多數黨たらしめ、この投票に依て資本主義改造の法案を通過せしむる行途がある、世に議會主義と稱せられるもの即ち之である。共産主義は之を認めない。議會を利用しないのではない、然し議會制度による社會改造は不可能である。例へ可能であるにしてもそれは百年河淸を俟つが如くである。斯る長年月を俟つに堪へない。此に於て少數の自覺したる者が暴力の革命手段により、一擧にして權力を掌握し、社會革命を實行しやうと云ふのであり、之が議會主義に對立する暴力革命主義である。

社會革命の後に於ても、反對思想の存在を寛假し之に言論の自由を與へんとするものがある。今のやうな資本主義の時代に於ても、あらゆる思想の爲めに、それが資本主義を謳歌するものであらうとも、之を改造しやうと云ふものであらうとも、之に思想の自由を與へんとする自由主義を、社會革命の後に於ても依然變ることなく、妥當せしめんとするものである。然し共産主義は革命後、過渡的制度として新制度の秩序の定まるまで、反對思想を抑壓しその表現を絶滅しやうと云ふのである。自己の制度に對する批判を聽くの必要なしとし、之に耳傾ける

の重出と云ふ事とを無用なりとするのである。さか[illegible]自由主義に對する無產者獨裁主義の對立である。

然らば何故日本の學生が、暴力革命主義と無產者獨裁とを[illegible]歡して、之に反撥し之を拒否しないのか。歐洲の社會主義は之を拒否してゐる。佛獨兩國に於けるマルクス主義の多數派も亦之を拒否し、米國に於ては社會主義そのものがまだ問題にはならないが當然に之を拒否するであらう。然るに日本のマルクス主義が共產主義の形に滿足するは何故か。それは極めて簡單である。之を拒否すべき必然の思想的準備が缺けてゐるからである。

無產者は勿論のこと、有產者に對してさへ最近に至るまで選擧權は與へられなかつたのである。議會制度に依る社會改造が、痴人の夢に等しと思はれたのは無理ではない。殊に重要なのは國民が、政治的自由といふ觀念の洗禮を受けてゐないことである。すべて自己に關する限り、あらゆるものは之に發言する權利と義務とがある。それは專制君主に對立し少數政治に對立して、今日の議會制度を將來したのである。人たる限り彼は制度の變革に預かるの權利を有し又義務を持つ、彼はたとへ彼の利益の爲であらうとも、無視され看過さるべきではない。之が開明專制にさへ抗爭せしめた思想である。此に個人人格の權威がある。かくしてすべてが預つた制度こそ制度としての職能を果しゐるものであるも、[illegible]容易に[illegible]政治に對して、[illegible]然として政治的自由を主張することを[illegible]さりし我が國民は、大多數を度外視して少數のもののみが革命を實行する暴力革命主義に反撥し抗爭する何物をも持たないのである。

又思想の自由に理解を持たざるものは、無產者獨裁主義に反對すべき根據がない。あらゆる思想は自由に發表せしむべきである。それはよりよき思想の爲に路を開くが爲に必要であり、今在る思想をして反省せしめ批判せしめ、消えかゝれる生命力を復活せしむるに必要である。その故にそれが保守主義であらうともマルクス主義であらうとも、自由が與へられねばならない。現代に於てすらかゝる思想の自由の價値を知らざる民衆は、無產者獨裁が何ものを失ふものであるかも辨へない。人間は弱い、彼は獨裁權力を持つことによつていかなる誘惑に陷らないと保しえない。若し無產者にして謙虛ならば、彼等は反對思想の批判を歡迎すべきである。若し彼等にして自己を信ずることが深いならば、反對思想の批判を恐れないであらう。理性に訴へて說得し改宗せしむべきである。此に獨裁主義に反對すべき理由がある。保守派の言論壓迫に反撥するを知らざるものは、無產者獨裁主義に忍從すべく造られてゐるのである。

要するに政治に就ても思想に就ても、專制に盲從し親炙し來れる國民には、共產主義に對立する何ものを持たない。カイザーとザーとの專制が、そのまゝに新形式の專制に移動するだけである。曾てある學者は、マルクス主義は西歐羅巴に榮えずして、漸次東方へ東方へと赴くに從ひ、勢力を增加し來ると云つた。英米佛に遂に根を張るをえずして、獨逸に墺太利に露西亞に榮え、遂に印度に支那に日本に榮えるは何故か。個人の道德的自律を缺いた國民に、唯物論に反撥するものを缺き、議會制度と思想の自由を理解せざる國民に、革命主義と獨裁主義とに反撥する何ものもないからである。此の點に於て共產主義は、恰當の地盤を日本に見出したのであらう。

(六)

何故にマルクス主義が現代學生に受容されたかと云ふ以上の說明が正しいとするならば、マクルス主義は一面に於て、現代青年の渇望の產む所であり、他面に於ては日本の思想的地盤よりして止むをえざる產物である。

今マルクス主義を求めしめた現代青年の傾向は、果して忌むべきものと云へるであらうか。それは青年に社會關心の旺盛になつて來た爲であり、同時に又社會の問題を扱ふ體系をなした思想を要求したと云ふことである。若し世に此の二つの傾向を目して、時代の惰落であり頹廢であると云ふものがあるならば、彼は凡そ價値なるものを理解せざるものであり、社會進步の動力が奈邊に潛むかを解せざるものである。此に青年ありて一身の生存と榮達とに汲々として餘念なきものと、多くの同胞の貧に泣き飢に喘くをみて、之が爲に一身を捨てゝ社會組織を合理的になさんとするものと何れを吾々は選ぶべきか。公共の善が彼一身の關心事となれることにこそ、人類の進步を祝福せねばならないに、いかにして此の社會の關心を以て呪ふことが出來るであらうか。此の貴重なる傾向がマルクス主義を求めた一つの要素である。

更に又體系的思想を求める心理こそ、日本の教育が數十年の努力の後に、漸く作り上げた貴き產物である。淺薄なる第二義第三義の學說に滿足して、すべての根本をなす問題……之を解くことにより他は容易に解け、之を解せざる間他は結局解し能はざる……に興味を感じ理解を持つやうになつたことは、十年前の學界と比して隔世の感がある。歷史は何によつて動くか、意識はいかにして構成せらるか、宇宙の本體は物質であるか、否かの如き問題は、今は哲學者に非ずして一介の學生の關心の問題である。之等の問題に無理解なる者が狼狽しやうとも、之を日

本文化の向上の種と目せずして。何ものをも世に與へきぬ。

たとへマルクス主義者の中に。淺行を求めるもの、名を求めるもの、之を踏臺として野心をみたさんとする不純のものがあればとて。マルクス主義を青年界に支持する心理は、尊ばるべき我が社會の財産である。之こそ地の鹽であり世の柱である。若し他に忌むべきものありとするも。之を絶滅する要ありとせば。それは角を矯めて牛を殺すものである。

唯物論に滿足し、革命と獨裁とを謳歌する心理は、祝ふべきものではない。然し之等はマルクス主義を受容したる當初に於て、我が國に始より存在した思想的條件であつた。此の條件のありし所、マルクス主義を受容したるは自然であつた。若し咎むべきものありとせば、それはマルクス主義に非ずして、之を受容したる日本の條件である。突かんとせば宜しく、その本源に遡るべきである。之ある間たとへマルクス主義は亡ぼうとも、之と同趣旨のものは再び擡頭するであらう。

かくしてマルクス主義を支持する心理は明白になつた。そこには祝ふべき青年の傾向が之を支持してゐる。又そこには呪ふべきであるが止むをえざる心理が是を支持してゐる。若し前者を認めるならば、現今當局によつて提供される多くの對象が、的を失することを理解するであらう。若し又後者を認めるならば、マルクス主義を排するものゝ如きは、その改革たるものゝ進むるを見出すであらう。現今マルクス主義者の間に、もしその要求を充分に充たすとかに占められてゐる。或るものは日本思想の研究を以て之と云ふ。然し各國思想に特殊性あるを示すことは、マルクスに對立する何ものでもあるまい。或は東洋倫理の研究を以てせんとするものがある。若し之を以て、結局資本的の西洋思想に對するに、東洋思想の神秘性を以てせんとするならば、寧ろ進んで何が故に直截に唯物史觀の批判に突入しないのか。間接の迂路を採るの閑日月には筆者は與しえない。又若し經濟學を以て戰はんとするものあらば、經濟學なる一經驗科學の運命は、社會思想にとつて何ものでもない。たとへそこに敗るるともマルクス主義はいかようにも進路を向けうる。經濟學なる經濟科學に因はるるは、經濟に唯一の重要性を置く唯物史觀に囚はるるもの、敵を攻めて却て敵の術中に陷るものと云へないか。マルクス主義を支持するものは、社會關心と原理要求の心理である。之を滿たして之に代るべきものを提げざる限りに於て、幾多の對策は蜜を求むるものにパンを與ふるものである。その效なきや必せりである。

又マルクス主義を支持する他のものは、呪ふべきではあるが止むをえざる日本の思想的環境であつたと云つた。若し此に反

動家ありてマルクス主義に反對するとせよ。彼が反對するものが社會主義にありとせば、彼は社會主義を採らざるも社會關心を滿足しうることを立證せねばならぬ。又社會主義を採ることが却て多數者を不幸ならしむることを立證せねばならない。自己の利益に囚はるることなく、大衆の前に明かに此のことを立證するならば、人は首肯せざるをえないであらう。然しそれがされるまで人は首肯しないであらう。今に至るまで之を爲したる反動家果してありや。若し彼の反對するものが革命主義と獨裁主義にありとせば、彼は之を難じうるほどに議會主義と自由主義とに味達せるや。若し又唯物論に反對すとせば、之に代ふるに理想主義の準備ありや否や。その利益に於て對立するも、思想的立場に於て反動主義者はマルクス主義者と同一地盤に在る。異る所を求むれば、社會關心の情熱なく指導の原理を持たざるにある。

若し今マルクス主義と反動主義との二つの路ありて、唯二つのみありとして、その何れをか選ばざるべからずとせば、吾々は躊躇なく反動主義を捨てなければならない。たとへマルクス主義に誤謬が伴うとも、それは時代の環境の生じた止むをえざるものである。のみならずそれは祝ふべき心理に迎へられて支持せらる。若しマルクス主義を捨てるが爲に、此の社會關心を捨て原理の要求を萌芽の中に切斷するものとせば、吾々は日本の未來を抛棄するものである。之こそが日本の將來を生かす華である。若し日本にして生くるならば、若き青年の此の傾向にこそ、多大の期待を繼ぐべきである。

（七）

然し問題は果して路は二つのみなるや否やに在る。

筆者はマルクス主義の現代學生に於ける功績をみる每に、ゲーテの「ファウスト」中のメフイストの言を想起する。メフィストは汝の名は何なりやと問はれて、余が名か、余の名は惡……彼の惡と稱して屢々善をなす彼の惡であると答へた。此の一語は含蓄深き言ではあるまいか。善なるものは善の名に於てなさるゝと共に、ある場合に却て惡の名に於てなさるゝことがある。惡の名に囚はれて善のなさるゝを看過するものは、洞察の乏しいものである。然し惡の名に於てするに非ざれば、善がなされずとせば、そは畸形であり變態である。善の名に於て善がなさるゝと云ふその善なるものに、何等かの欠陷である場合にのみ、此の逆說は許されるのである。

曾てハロルド・ラスキーは共産主義が人を誘引するは、その含む理想主義に在ると云つた。たとへ共産主義の經濟理論と唯

[illegible]敗と云ふ評價は、[illegible]捉へずば止まないと云ふ意味だらう。筆者も亦之と感を同じくする。而もマルクス主義が理想主義を否定するに日も足らずとせば、世に解し難き矛盾ではないか。若しある種の理想主義を否定するに止まると云ふならば、理解しえないではない。然し他の種の理想主義を肯定する餘地は、その唯物論よりして可能なるや否や。理想主義を否定して却て理想主義に忠なるはよい、然し善をなすことによつて肯定せらるゝ惡なるものは、通常の惡ではない。惡の形式を採つた善である。その形式に囚はるゝことなしに、寧ろ善と稱するに如かざるや。

マルクス主義は社會關心を滿足せしむる。然し社會關心を既に有するもののみが、マルクス主義よりしてその關心を活用すべき方向を教へらる。されど社會關心を刺戟し鞭撻するものは、マルクスの文獻に求められない。そは既に存する社會關心を當然の前提とする。之を有するものを導くをうるも、之を意識せざるものを意識せしめ、沈痾を喚するものに刺戟をなすものはマルクス主義ではない。マルクス主義は社會關心を滿足せしむと云ふも、實は社會關心自體はマルクス主義の中心に存せずして他に存する。それはマルクス主義より暗々裏に豫想され[illegible]マルクス主義[illegible]を滿足せしめる。然しその體系の根幹をなすものは、唯物史觀であり唯物辯證法であり唯物論である。而も之に誘引せらるゝ青年は、それが唯物論自體を正しとするに非ずして、唯物史觀が資本階級の意識形態の相對性を說き、之によつてそれより來る制約を脱却し、無產階級の解放を容易ならしむるに在る。無產階級の解放を道德的に價値ありとする前提の下に、無產階級の解放を容易ならしむるものは共鳴され、之に便あることの爲に唯物論は人を誘引するのである。而も無產階級の解放は價値ありとは、マルクス主義の教へうる所ではない。その唯物論よりは價値の觀念を導きえまい。かくてマルクス主義が人を誘引するものは、此の場合にも自己の思想以外のもの、而も自己の極力否定しつゝある理想主義の思想である。此に於てマルクス主義は一元的包括的ではない、それが存在し評價される爲には、當然に之と反對思想の存在に依存する。

啻にそれのみではない、唯物論は飽くまでもマルクス主義自身中の癌である。それより來る必然論は、マルクス主義中に於て動きのとれない桎梏である。そこに必然論と革命論とは、屢々混雜して說かれてゐる。必然觀を說くもの必ずしも別の見方を

許しえないではない。然し必然觀のみを說くものが、果して革命の行動を許しうるか。而も唯物論よりして必然觀の外何ものを導きうるや。最も行動を高調すべきマルクス主義は、その行動の一條件たるべき進化の理論を絕對視したるが爲に、闘らずも行動自體に餘地を殘さざるに至りしは誠に運命の悲劇である。

單にマルクス主義がその體系中に混亂があるのみではない。その唯物論はマルクス主義者の行動を甚だしく毒しつゝあるを見出すのである。唯物史觀は現存法律と道德とは、ブルジョアー階級の利益を維持する爲の用具であると云ふ。かくして現存規範と絕緣したる結果、プロレタリアとブルジョアーとは共にその前に跪くべき何等の審判を持たないこととなつた。あらゆる共通の連鎖を破つた爲に、係爭を解決すべき方法は、規範に求めるをえずして、唯力によるの外なきに至つたのである。之は不必要に闘爭を激甚ならしめた。而もマルクス主義者は、強大なる壓迫彈壓の落ちたとき、之をブルジョアー必然の迫害と斷ずるの外、何ものの批判を加へえない筈である。冷靜に因果關係の系列を案ずるの外、之に反撥せざるべからざる何ものもない、若しありとせば、そはマルクス主義以外の思想の殘物である。現實の闘爭に際して、彼等の抗爭力に乏しきは、實にその思想が單なる必然の認識に止まつて、決然たる實踐の哲學でないからである。

その狀勢なるものを過重視し、何を爲すべきを輕視するが爲に彼れらは所謂客觀的狀勢なるものに就て、幾夜も徹宵論議して尙決せず、荏苒機宜を失すと云ふ。客觀的狀勢なるものの判斷に、幾多の主觀が所見を異にすること既に滑稽であるが、その輕きに低迷して重きを見失ふは、その思想よりして止むをえないのである。又その戰術なるものを重要視することが、彼れらの眞摯なる理論の研究を頹廢せしめたるのみならず、手段の爲に目的を忘れしめ、結果を追ふ結果主義を齎した。結果は偶然に左右さるゝことが多い。而して何でとも勝手に最もよき結果を生ずると理屈を付け易い。即ち結果主義のある所規範を消滅せしめ統一を失はしめる。彼等を拘束する何ものもなくなるのである。之が組織團結を唯一の信頼とする彼れらにとつて、致命的損害と云へないか。

更に甚しきは、彼れらの道義的生活の頹廢である。現存道德をブルジョアーの道德なりとして拒否するはよい。然し何らかの新しき道德が彼れらの間にあらねばならぬ筈である。而も彼れらの爲す所は、ブルジョアー道德の拒否のみにあつて、新なる拘束を受けざるに在る。その道德の内容は何ともあれ、何等かの規範を持して現實と對立せしめ、不斷の緊張と努力とを鞭つことは、マルクス主義の運動にこそ必要であるべきである。約束を破つて恬として顧みず、約束を守るが如きはブルジョアー道德なりと云ふ。恩義を甘んじて受けて之を弊履の如くに捨てゝ、マルクスの理論に忠なるが爲と云ふ。警察に捕へられて友人の

氏名を詐稱して、若しき[illegible]してゐるのである。そのブルジョアー道德を守るべきや否やは問はない。吾們の問はんと欲するは、之に代ふべき道德があるかどうかである。之なくば運動の統一と永續とを保ち難いであらう。國家主義が道德思想として幾多の欠陥あるに拘はらず、その雰圍氣より多くの傑物を出したるは、その現實と當爲との對立が明確であり、道德的生活を保持せしめたるにある。左翼運動に黨派の闘爭の絶えざると、同士が他を疑ひ信を缺くことは、一に此にその原因が伏在するのであらう。初期のマルクス主義者は自ら知らざる理想主義者である。故に口に之を拒否しながら、實は理想主義の道義心は彼を支配してゐる。後は次期のマルクス主義者である。此に至つて道德の頽廢が僅かに見えるであらう、それはやがて運動に響かずして置く筈がない。

以上の害惡はすべて唯物論の禍する所である。惡の名に於て善のなさるることはよい。されど惡そのものが吾身を滅ぼすことないとは云へない。マルクス主義が唯物論に據ることによつて、足掻きのとれぬ泥の深まに身を投じたことは、不可思議なる運命の惡戯である。

（八）

現下の日本は反動旺盛の日本である。反動が振り翳す刃の下に、脆くもマルクス主義は一敗地に塗れた。此の表面の事實のみに、すべてを[illegible]少しく氣分を[illegible]は、何か[illegible]過ぎまい。ここには唯權力の爲に抑へられたに止まつて、[illegible]されたのでなく、改宗したのでない急進派がある。彼等は保守派の彈壓を以て、自らの學說が適中したものとして、愈々自己の信條を強めるであらう。そこには暫らく傍觀しつゝはあるが、何等かの批判を試みんとする中立派がある。彼等は始めて階級闘爭の實演に直面して、いかに成り往く將來かに惱んでゐる。かくして今こそ社會進化の理論をマルクスより聴かんとしないであらうか。更に最も注意すべきは保守派の立場である。彼等は最も所信に勇敢である。然しその所信は理論と體系とに缺けてゐる。その故にその勇敢さは持續性を缺く。若し彼等の命脈にして短かからば、やがて來る再反動は更に恐るべきものがあるであらう。若し此の反動の命脈さへもが持續するものならば、更に恐るべき禍亂を孕むであらう。かくして我々の社會は奈落に向つて歩々近づきつゝある。危きは現今の日本である。

此の形勢に直面して吾々は何れに與すべきか。反動に走らんか、時代の進化に逆行するを如何せん。マルクス主義を迎へしめたる思想的要求は、之をなかりし以前に戻すべきに非ずして、之を滿足せしめて更に徹底せしめんのみである。マルクス主義に走るはよい。然しそれはある時代の偶然の理想主義に對立せんが爲に、不必要にも唯物論を受容して、それ自身の意圖に

反して、自縄自縛の窮地に陷つた。マルクス主義の中より出でて之を克服するもの、マルクスと云はずして却てそれに忠なるものは存しないか。路は二つあつて果して二つのみなるや否や。

此に理想主義なるものがある。曾ては個人の完成を標語として孤獨隱遁を求めた。然し個人の完成が本質上社會への關心と矛盾するに非ずして、理想主義の當時の段階に於てその未だ社會への進出に遑なかりしのみ。若し社會關心を云ふならば、寧ろ理想主義にこそ却てその完全の説明を求めうる。また理想主義は曾ては認識論と道徳哲學とを提供するに止まつて、社會生活に適用すべき原理を持たなかつた。されど今は理想主義は、社會哲學を有し社會思想を持つ。而して認識論道徳哲學より社會哲學社會思想に至る一貫したる一元的終局的の體系的原理である。若し社會關心を念とし指導原理を求めんとせば、今は理想主義がそれを與へうるのである。而も當為と現實とを明確に對立せしむることはその最も特異とする本質なるが故に、マルクス主義の陷れる自縄自縛なく、そこに滿ち亘れる停滯がない。

之を以て反動と戰はゞ、現代青年のよきものを蝕むことなきをうる。之を以てマルクス主義に對せしめば、そのよきものを承繼しつつ相續しつゝ、その害を絶るゝをうる。此に新なる路ありて二つの路に優る。

想ひ起す千八百六十八年三月トーマス・ヒル・グリーンは、雜誌「北英評論」に一文を寄せて「人生に關する當代流行の哲學」と題した。彼は社會組織の改造を關心事とする當代青年の傾向を、未來の英國を希望あらしむる貴重なる財産なりと讃へ、而して自己の一身を犧牲として社會改造を爲さんとする青年が、人とは何ぞやに關する哲學に於てベンサムの快樂主義を採る。良き青年が人とは良くあひえざる人間觀を持つ、此に當代の思想の矛盾がある。社會改造をして弛廢せしめざらんとせば、快樂主義の哲學を捨てゝそれに恰當の哲學を與へざるべからずと云つた。余は此の一文を愛誦す。此には當代の時務に迂なるをえざる志士の情熱があり、時代の欠陷を思想の矛盾に求めた所に、哲人ならで持ちえざる識見がある。かくて彼の後半生は、矛盾なき上下の思想構造を提供するにあつた。グリーンの着眼は、移して現代のマルクス主義に云ひうる。唯物論と最も遠かるべきものが唯物論を持つ、ある時代の偶然性のみが齎した此の奇怪なる結合を解放して社會主義をして理想主義に結合せしむることが、當代の志士と哲人とに課せられたる任務である。

然らばその所謂理想主義の上に築かれたる思想の體系はいかなる内容を持つか。之を語るは容易ではない。されどその現はるゝは遠くはあるまい。その聲は幽なれども遥にその聲の聞えざるに非ず。その聲に要なしと云はゞ又何をか云はん。之を求むるものにはその聲のやがて聞ゆるの時あるであらう。聲の幽なるが故にとて、その聲なしと云ふべからず、求むるものには幽なるもその聲の近づくを聽くをうる。

無産階級倫理の原則

杉森孝次郎

一　無産階級の存在の再認の倫理的必要

倫理の原則に二つはない。無産階級倫理はそれの一適用以外のものではない。

無産階級はあるか。言葉としてあることは明白だが、事實として、客觀的にあるか。それが先づ問題だ。なぜなら、無産階級の事實的、客觀的存在がなく、言語、錯覺、迷信としてのみそれがあるのだとするならば、無産階級倫理の原則など、土臺問題とされる價値がない。

無産階級はある。いはゆる第四階級がそれだ。しかし、さういつただけでは問題は多く發展しない。いはゆる第四階級はあるかといふ問ひがすぐ起こる。けれども第四階級の存在は一つの極めて明確な事實だ。

單なる、即ちその言葉の最も廣い意義に於いての無産階級の存在は現代の特質ではない。歴史上のいかなる時代にもそれはあつたと推察される。第四階級としての無産階級は、しかしながら、斷じて現代の一特質だ。

しかし、第四階級といふ用語はこの場合最適當ではない。機械産業に於ける勞働大衆といふ言葉が最も精確だ。

なに人か、現代に於いて、機械産業の存在を認識的に否定することができよう。その機械産業の世界に勞働大衆があることを、そしてその勞働大衆が無産であること、詳言すれば比較的無産であることを、またなに人か、現代に於いて否認することができよう。比較的とは同じ機械産業の世界的に於いてだ。

二　無産階級の原因の認識の倫理的必要

無產階級はどこから來たか。それはいつからあるか。これの發生、發達を必然にした特殊の事情はなにか。

倫理は將來主義のものだ。將來を進化として持つことが倫理だ。しかし將來は過去の連續だ。世界は過去を飛躍することはできない。過去の反省が將來の進化を必然にする人爲的最善方法だ。反省は認識だ。自己認識が反省だ。無產階級の倫理は無產階級の自知に始まるほかない。そしてその自知は最初に於いてなんらの主觀的、道德的色調をも帶んではならない。それは自己を一つの「もの」と見、その「もの」に對する純客觀的認識であらねばならない。その自己は、この場合、無產階級だ。

無產階級の存在は產業革命に始まる。機械產業に於ける勞働大衆が無產階級の實質なのだから、これは自明的だ。

クロ　エルは當時のかれの社會の、即ち英國の、新興生產階級を背景とし、特權階級に挑戰し、それの討伐を企てた。その新興生產階級はいはゆる第三階級であつた。それは當時すでに全盛の勢ひを造つて來た手工業本位の製作、分配、即ち產業的人口であつた。その特權階級は要するに貴族、僧侶等、封建的傳統物であつた。創始的社會力ではなく、惰性的社會力であつた。かれらの特徴は不在地主的所有及び管理にあつた。

たま／＼、その英國が產業革命の最初の社會であつたが、一七六〇年代に於けるその產業革命を轉期として、事情は根本的に一變した。手工業的產業は事實上消滅し、たゞその時代に發達した制度、慣習、道德のみが生き殘り、そして新興產業の形式的支配力となつた。

十七世紀の英國に於ける手工業的產業階級の發達は、クロムエルを闘將として、特權階級打破の政治的進出を企てた。進化史觀から見て、それは一つの必然であつたが、倫理的見地から考察して、それは一つの必要であつた。

クロムエルの時代から一つの政治的新勢力が生まれた。後年の自由黨の原始形がそれだ。クロムエル革命の結果、一六九三年に及んで、王ヰリアム第三世の名に於いて、新憲政が生產された。それは英國の歷史に於いて一つの劃期的意義あるものであつたことはいふまでもないが、それの抽象價に於いては、もつと普遍的な暗示だ。當時の新興生產階級の自由と權利が保護される政治組織がそこに解纜したのであつた。王は、閣員の整理を、衆議院に於ける現在の政黨的勢力の優劣を條件として、斷行した。自由黨系（フイッグス）が優勢であつたので、内閣員をその系統だけのもので揃へた。

當時の新興生產階級であつたブルジョアジーの政治的進出が、そこに始めて、組織的形成を與へられたのだ。

政治は生産技術の器なりた。綜合た。併すに於ける、中世的の、實質的勢力及び必要は、政治化する必然性あるところ段階的には考察されるが、その當時及び同情者の立ち場からいへば、そのやうな勢力及び必要はそれ自身の政治を、その社會的價値、實力相當に、持つ必要がある。英國の場合に於いて、いはゆる自由黨の發達史は、十八世紀を通じて、ブルジ・アジーとしての新興生産階級の當然の政治參與及び政治決定であつた。

産業革命以來、その社會に於ける無特權的生産階級は機械産業に於ける勞働大衆を第一要素とする新事情が發達した。かれら及びその同情者の立ち場からしては相當の社會的新統制が必要だ。無産階級の倫理はこの必要を中心として構成される。しかし、その必要は、現在の無産階級の社會史的及び心理的原因に對する明確なる認識的把握なしには、十分なる意識化を與へられない。

三　無産階級の社會史的原因

西歐に於ける近代初期の手工業全盛時代に現代の無産階級の種は蒔かれた。手工業中心の生産及び分配、即ち産業が原始的であつたあひだ、そこに無産階級の萌芽はなかつた。そこには所有と使用との間、また管理と從業との間に開きかなかつた。産業が未分化だつたからである。

この頃の問屋時代にはまだしも生存がなかつたら、商人は大商に自身勤労者たる位置を去つて、部下の職人及び徒弟の勞働に從ふの管理者たる位置に移つた。器具、設備一般、作業場も發達して、個々の職人の自給を許さなくなり、それらは師匠職人の財力によつて辛うじて所有されうるものとなつた。師匠職人を單位とする規模に於いて、所有、管理、及び商資の抽象的發達が始まつた。

分配も最初は行商的規模のものであつたが、それでは追つ着かなくなり、抽象的分配業者が急速に發達した。錢の存在理由は信用のかたちに於いて協力を助けるにある。手工業的産業の發達は必然的に錢に新發達を與へた。單なる投資業者、金融業者の發達が始まつた。かれらは生産にも、分配にも投資、金融、財政の側面から積極的に關係することによつて、所有、管理、利益を獨占する傾向を長じた。錢を中心として生産及び分配の抽象化が發達し、産業の世界が二つの世界に内分された。不在地主的所有權及び管理權の享樂者たる人口が少數ながら一方に生じ、他方に漸増的多數に於いて所有權及び管理權抽きの生産從業者が生じた。

産業革命は生産の物質技術に於ける非常擴大の、そして突然

的な進化であつた。それは物質認識の世界に於ける成長の必然的一結果にほかならなかつた。所有權及び管理權は、しかるに、社會技術に屬する。その世界は、産業革命に訪はれて、從來の原則のまゝそれに適應し、それを同化すべく試みた。

手工業時代は、それの生産のみならず、分配の過程に於いても、個人主義に非常の發達を與へた。その個人主義は、しかしながら、次第に抽象化して、各種の社會的形式に於ける不在地主的所有權及び管理權を目的とするものとなつた。當時の帝國主義はまたそれの一形にほかならなかつた。

産業革命以來、その以前に發達を開始した産業界内の物質技術的側面と社會技術的側面とのあひだの開きは、前者は革命的に進化したのに、後者は保守的であつたゆゑに、結果としては大なる桁ちがひに於いて發達した。

現在の無産階級はその分裂した上下層に於ける下層であつて、機械産業に從事する勞働大衆以外のものではない。それは全範圍に於いてそれよりも廣いが、中心はその機械産業的勞働大衆にある。

無産階級の倫理の一原則が、機械産業を條件として、社會の本質的利益を目的として、不在地主的所有權及び管理權の十分に社會論理的な廢棄に存することは上述が暗示する。

四　無産階級の心理的原因

現代は力の時代だ。ヨーロッパ戰爭、ロシヤ革命、戰後のイタリ、傳統的、形式的デモクラシの不振、既成宗教の沒落、唯物史觀の部分的全盛、革命論理的辯證法の流行等々はこれを例證し、また反映する。

ヨーロッパ戰爭を分析すれば第一に帝國主義、第二に資本主義だ。しかし、その帝國主義は民族主義ではない。それは民族主義を材料、機會として利用する權力意思にほかならない。その資本主義も産業主義ではない。それは機械産業を材料、機會として利用する權力意思にほかならない。兩者ともに心は權力意思だ。

ロシヤ革命がいかに權力意思であるかは、統制獲得のための方法として直接行動、文字通りの最も露骨な力が選擇されたこと、統制獲得後の形式として獨裁が採用されて今日に及んだことによつて明示されてゐる。ム氏のイタリは形式に於いてそれに酷似だ。かかるは、兩者が孤立的に力の信者、行者であるわけではない。帝國主義そのものが力であり、資本主義そのものが力であり、共産主義そのものが力であるからだ。リェニンは思想にたいて帝國主義及び資本主義を否定する。されば、かれ

の行動は相當の力あるものであらねば不成功だ。ムッソリーニは、意見に於いて、かれは當面した共產主義を否定した。されば、かれの行動は相當の力あるものであらねば不成功だ。

メンシェギズム、ケレンスキ、ファクタでは社會保存が必要とする最低限度の統制が失はれてしまふ。一九一七年六月以後のロシヤをケレンスキに一任することは、社會主義の國內原則と帝國主義の國際政策との矛盾下に國民的社會の破滅を招くことだ。一九二二年のファクタア內閣のイタリは國內の共產派を條件として酷似の狀態にあつた。リェニンとムッソリーニは、恐らくは最も時務を知つたものであつた。力の敵に處するに力をもつてしたのだ。かれらは現代が力の時代であることを確實に把握したものであつた。

傳統的、形式的デモクラシが不振であるのも、それの發生と發達が主として手工業時代に屬するがゆゑにであらねばならん。產業革命以後の帝國主義と資本主義に對して、それは肯定的にも、否定的にも甚だ無力だ。新興の革命的、獨裁的社會主義に對してもさうだ。いはゆるデモクラシは機械以後の產物でないだけに、現代の本能を自身十分に持ちあはせず、他の現代的本能現象を支配することもできない。デモクラシはそれの不適應によつて現代が力の時代であることを立證する。

既成宗教に、それの意志的動向によつて、またそれと相關するの法律はそれ自身の存在に、また現代が力の時代であることを立證する。

無產階級そのものゝ存在が、また實に權力意思を一大原因とする。少數者の權力意思の滿足の必要が多數者の無產狀態を構成してゐるのだ。現代の大多數個人が現にある通りに無產であるのは、同じ社會內の或少數者がまた現にある通りに有產であるからだといふ考察は事實認識ではない。現存の社會——いかなる一國もの——富または收入の總額を人口に均分するならば、その結果は無產者の有產化ではなく、たゞ無產の普及に近いものであるほかないことは算盤をはじいて見ればわかる。しかし、現代の勞働大衆及び無產的人口が現にある通りに無產であるのは、かれら以外の人口がそれを意思してゐるからだといふ考察は多分の眞理を含む。現代には、實に、權力意思を原因とする制限主義があるのだ。

產業の所有權、したがつてまた管理權を比較的にわが自由に使用しうる位置にある個人及び團體は、その位置を、自分たちの權力意思の滿足のために利用する。かれらはその心理に事實上もとづいて產業自治に極力反對する。また同一心理に行動的にはもとづいて、賃銀制度の範圍內に於いても賃銀の或程度以

上の高上を欲しない。要するにかれらは他人の財政、經濟の鍵を當方に掌握することによつて、その他人の貧富を當方の意のまゝに決定する自由を欲する。大體の傾向及び方針としては、他人の貧を必要とするに等しい状態が成り立つ。

産業自治に對する否定または制限、錢の發行及び金融の制限、生産制限等が一部の社會人口の權力意思を原因として生ずる。一般的に所有權及び管理權に對して貪慾、吝嗇、嫉妬である状態がその權力意思を原因として造られ、また維持される。その状態の最も代表的なものは法律だ。法律は政治の柱だ。かくして、無産階級の自己解放は政治的成功を必要とする。そこに力の必要がある

少數者の權力意思ゆゑに多數者の所有權及び管理權が制限され、少數者の虚榮心ゆゑに貧富別が顯著に作られ、また維持され、財物の積極的浪費及び消極的即ち死藏的浪費が競はれ、少數者の利殖慾ゆゑに、それに役立つ各種生産制限が、社會的大人口の消費的必要を犧牲にして行はれる。その少數者が特別の人間性の持ちぬしであるのではない。人間性に於ける反社會的可能及び傾向を社會的見地から制限する、そして善導する制度が現代に設備されてゐないのだ。その制度を造る責任が事實上主として無産階級自身にあることは、**力の時代に於いて殊に格**段に然りだ。

現代は力の時代だ。權力意思の發達が前古無比にいちじるしく、しかもそれに對する社會的統制が發達してゐない時代だ。

力の時代としての現代の原因はなにか。私は科學の發達がそれだと考へる。科學は技術化する。技術は人間にかれの物的環境に對する權力者たる位置を與へる。技術によつて現代人は、その物的環境が關する限り、帝者的、覇者的位置を獲得し、その習性を發達させた。現代人は、即ち、科學ゆゑに、前古無比の高絶程度に於いて、力の持ちぬしとなり、力の味を覺えた。その新習性が、外的事情が許す限り、社會的、人間的環境にむかつても發動、進出することは極めて自然だ。現代はその状態にある。

その新習性の社會環境的、人間環境的進出を許す外的事情が、しかるに、現代に多大に存在する。社會技術の幼稚がそれだ。社會技術は政治だ。産業革命は成し遂げられたが、それに釣り合ふ政治的進化が未實現であることが、現代の發達した權力意思に機會を社會不正的に、反社會的に享用させる根本事情だ。社會技術の幼稚は社會認識の幼稚を原因とする。近代殊に現代に發達した科學は、要するに、物質認識としてのそれに過ぎない。ベーコンがいうた通り、知識は力だ。社會認識の發達は**社會不正、社會的不幸、すべての社會的不完全を積極的に救**

除する力を必ず示す。無產階級倫理の根本的一要件だ、かくして、力の問題の關係からしても、無知の徹底的否定として再認される。

五　社會の名に於いて

倫理の原則は社會的だ。それゆゑに、無產階級倫理の原則が社會的であることは絕對的だ。

階級革命の單純にして明確なる一實現がロシヤによつて示された。ドイツは決してそれに屬せず、イタリの場合もさうでない。ドイツは產業革命を立派に成し遂げた社會であつた。それゆゑに、そこにはいはゆる辯證法的な單純なる革命論理の實現は見られなかつたのだと私は考察する。イタリの場合は、その點に於いて、ドイツよりは原始的であり、ロシヤよりは進んでゐた。それがイタリの戰後を說明する一事情であらねばならん。

文字通りの地主と小作との關係よりも階級的なものはない。地主は明白に、社會的見地からして、有害にして無用だ。機械產業の世界は、しかしながら、階級關係を農村ほど單純には構成してゐない。勞働、技術、科學、組織はすくなくとも機械產業にとつて常に絕對的に必要な方法だ。現代に於ける技師の階級的位置もすでに單純なる二分法を不妥當にする。

無產階級倫理は、それゆゑに、階級意識に固執することをなさない。それは社會意識に出發し、そして多少の階級關係を發見または再認し、社會意識に於いて階級解放、階級鬪爭に從事する。實に、產業革命以後の社會に於いては、單純なる二分觀は事實認識としての資格に缺けてゐるがゆゑに、その不正認識を條件とする行動は成功したい。第一に、その種の行動に良心的に贊加することのできたい人口がその社會內には多數ある。それでは、その行動が政治的に成功する基礎的要件に不充實があるわけだ。

現代の社會を生產主義者と消費主義者とに二分することは或程度に可能だ。しかし、それにしても、その可能は徹頭徹尾、實地調査を條件とするもの、歸納判斷的方法によるものであらねばならん。ブルジョアジーといふ言語に遊離的存在、即ち無責任な適用を與へてはならん。一體、ブルジョアジー及びプロレタリアートといふ言葉は、聰明によつて自由に使用される場合に始めて有意義なものであつて、固定的に、劃一的に使用されるならば、それよりも有害な、反社會的なものはない。それは反學術的だからだ。その兩語は、實は、現代の最も進んだ社會認識及び社會技術にとつて生命的に必要な、不可缺なもので

はない。その術語をしきりに使はないでは自分の社會思想が表現しにくいやうであるならば、その社會思想には反省、純化の餘地があると見てよい。

産業革命以後の社會は必然、その以前の社會に比して甚だ複雜だ。廣義に於いての分業がそこには發達してゐる。無産階級倫理は、この事實に十分の認識を持つものであらねばならん。複雜なものをば複雜なものとして認識的に先づ受け取り、しかるのち、進んでそれを分析し、分類し、比較評價し、關係を研究し、それに對して教育的態度を取ることが倫理的だ。

社會二分的階級觀も、三段進化的辯證法も、産業革命以後の社會には、ただ極度の歸納的用意と暗示的聰明とを條件として多少有用たりうる。

無産階級倫理は、しかしながら、最も積極的なものであらねばならん。それは現存の多くの存在に對して明確な批判を持つ。現狀維持は無産階級倫理にとつて第一の敵だ。しかし、無産階級倫理は、無條件的現狀維持がなぜ惡るいかを明確に意識してゐる。その同じ理由にもとづいて、無産階級倫理は現存の存在の多くのものにも無條件的是認を與へない。無産階級倫理は、しかし、最も綜合的なものであるがゆゑに、そして最も綜合的なものは必然最も積極的なものであるがゆゑに、いはゆる中間黨には決して屬しない。いはゆる中間黨は極めて消極的なものだからだ。

無産階級倫理は同情に於いて十分に社會的であり、聰明に於いて批判的であり、決意に於いて明確に創造的だ。

無産階級倫理は社會意識に始終する。社會意識は人間意識だ。無産階級倫理の一極は、かくして必然、十分に人間的であることであり、他極は常に最も社會的であることだ。完全に社會を條件とする人格主義、人間性達成主義がそれのすべてだ。それはすべての經驗と問題を究極、至眞の人間性の光りと、個知識に照らして不斷に進む。

現代職業婦人論

山川菊榮

一

水の低きに就くが如く、低廉な賃銀を追うて留まる所を知らないのが資本の天性である。婦人、少年、植民地民族と、その搾取の分野は、奴隷的賃銀に甘んずる勞働者の層の中に加速度的に擴大されて行く。この低賃銀の勞働者の大軍の出現によつて、成年男子勞働者の賃銀と生活の標準は必然に低下せしめられ、その扶養能力に頼り得ざる婦人と子供とは、大衆的に勞働市場へ驅り出される。そこで失業と賃銀低下の危險はます〳〵増大し、從つて更にまた婦人小兒の勞働を余儀なくするといふ交互作用が進行する。かうして婦人勞働の利用とその擴大とは、資本主義社會の發展の上に重要な役割を演ずると同時に、經濟的單位としての家族制度の基礎を掘り崩すことによつて、社會組織の根本的な革新を促進する任務を果してゐる。

全世界を通じて婦人勞働者數は約六千萬人と推定せられ、米國だけでも、戰前の推定數八百萬人が、今日では一千萬人と算へられてゐる。

わが國においては、大正九年第一回國勢調査によれば女子職員十六萬八千人、同勞務者八百十六萬七千人、從屬者中家事使用人六十五萬八千人で、合計九百九十三萬人、即ち全人口の一六・三%、女子人口の三二・二%に達してゐる。しかしこれは廣義の婦人勞働者即ち獨立の生産者でない家庭の從屬者をも含んでゐるので、狹義の婦人勞働者、即ち獨立の賃銀取得者としての婦人のみを見れば、筋肉勞働と頭腦勞働とを通じて約三百五六十萬と推定される。『多少の事務又は技術的能力を有する、被傭者及び營業者として獨得の地位を有する女子を謂ふ』といふ

定義の下に、社會局協天谷及び小田切氏は（大正十五年日本勞働年鑑）職業婦人總數を八十六萬五千七十八人と見積つて居られる。その内譯は左の如くである。

一 公務自由業	二一八、九五八	
イ 醫務に關する業務	九七、一九四	
産婆	三九、五一五	大正十二年末內務省衛生局調
看護婦	三八、一三六	同
鍼灸按摩術師	一八、八二七	同
其他（醫師、藥劑師）	七一七	大正十一年 同上
ロ 教育に關する業務	七七、八九三	
小學校教員	六一、五四五	大正十年末文部省調（大正十一年 六三、五五四）
其他女教員	一六、三四八	同
ハ 官廳雇傭	四三、八七一	
遞信省	三四、九四五	大正十二年末統計年鑑
鐵道省	八、五五四	大正十三年四月報知年鑑
其他（印刷局、專賣局、海軍、製鐵所）	三七二	大正十二年末統計年鑑
二 商業	六〇五、七九三	
イ 遊藝娛樂に關する業務	五一三、一五三	
料理店女中	九六、三三八	大正十三年末警保局推定
待合茶屋女中	七、六二二	同
飲食店女中	二五三、五七九	
宿屋	一二三、四五六	
浴場雇女	一二、二四八	
女給	一五、五〇〇	東京市調查推定
其他（一）（劇場、寄席、活動）觀覽物雇女	三、八五六	大正十三年警保局調查推定
（二）（活動女優、遊藝師匠）	一、五五四	東京市調查推定
ロ 商業上雇傭	九二、六四〇	同
事務員	四六、七二〇	同
店員	四一、〇一七	同
タイピスト	五、四三三	
交換手	二六、四七〇	
三 工場鑛山婦人職員數	一〇、七二七	大正十一年末社會局調查
四 其他有業者	二九、六〇〇	
髪結	二四、七〇〇	大正九年國勢調查推定
新聞雜誌	一、〇〇〇	同
派出婦	三、七〇〇	東京市調查推定
音樂家	二〇〇	同
總計	八六五、〇七八	

各種職業を通じて婦人の數は逐年激增し、工場鑛山の女工數は大正十二年より十五年に至る三年間に約十五萬、大正十年より同十四年に至る四年間に、醫師藥劑師七百人、産婆看護婦二千七百人、遞信省雇員五千人等に、部分的に見ても著しい增加を示し、その率は男子のそれを凌ぐと同時に、諸都市の職業紹介の調査によつても、一般に女子就職率は男子のそれを凌いでゐることが明白である。小學女教員の如きは大正十年現、總數の三割二分であつたものが、十五年には四割に達し、男教員の

間には、婦人の職業を壓迫せんとして、これ以上男女の比率に變化を來さゞるよう、女教員の增加に對し、一定の制限を設くべきであるといふ意見が行はれたほどであつた。

二

職業婦人の生活狀態に關する調査は、各主要都市で部分的に行はれたものはあるが、全國にわたる精密なものは、未だ發表せられてゐない。そこで、さういふ部分的な調査を基礎として大體の見當をつけるといふより以上のことはできない。

大正十三年發表の東京市社會局の調査によれば、市内の女子有業者十三萬七千三百七十三人、女子總數に對し一三・七一%を占めてゐる。このうち企業主即ち業務を主宰經營する地位にあるもの三萬七千百十七人、女子有業者總數の二七%に當り、企業主の下にあつて事務又は技術に從事する職員は二萬六千四百七人で一九%を占し、單なる勞務者は七萬三千八百四十九人で五三・八%を占めてゐる。但しこの企業主なるものも男子の場合とは異つて、僅々數人の使用人をおくにすぎない、又はそれすらない小店舖、醫院、髮結等にすぎないことを斷つておかねばならぬ。下級勞務者ほど高い比率を占め、女工五萬四千、女中四萬、事務員一萬五千、髮結九千、電話交換手八千五百、看護婦六千、産婆四千六百、タイピスト千七百、小學教員千五百といふ狀態である。

兩女高師及び一音樂學校の外、女子のために官立の高等教育機關は設けられてゐないので、原則として、外國で學んだ者の外、婦人は高等教員となることが出來ない。從つて專門學校教員は五十人内外に留つてゐる。中等教員は男子一千八百人に對し、女子八百四十七人、總數の二割三分强に當り、小學教員は男子二千七百人に對し、女子千五百人で、總數の三割七分弱を占めてゐる。

市の調査は收入別から見て職業婦人を中上下の三種に大別し、上を平均月收百圓以上、中を六十圓以上百圓内外、下を六十圓以下として分類してゐるが、職業婦人總數十三萬七千人のうち上の部に屬する者（醫師、音樂家、女優、遊藝師匠、産婆等々）一萬三千八百人、中の部（中等及び初等教員、ガイド、記者、外交員、女給、官公吏等々）一萬三千、下の部（女工、女中、事務員、看護婦、タイピスト等）十一萬人で、これによれば平均月收六十圓以上の上、中の部を合して、職業婦人總數の二割にしか達せず、他の八割は六十圓以下の下の部に屬し、その八割の中でも三十五圓以上の者は一割弱、殘る七割は三十五圓以下、特に平均月收二十六圓の女工が職業婦人總數の四割

を占めてゐる事實が明かとなつた。

　敎師、タイピスト、事務員、店員、看護婦、交換手、等九百人について、年齢及び配偶關係を調査した結果、未婚者は總數の八三・六%に當り、特に十七八才より二十三四才までの者が未婚者總數の八二・七%を占めてゐる。有配偶者は總數の一二・八%、離婚者は一・三%、寡婦は二%に當り、共に三十四五才より四十八九才の者が多い。

　一六・四%の既婚者中、五六%は子持で、離婚者には子持が少いが、寡婦の九〇・五%は子持である。業務別によつて見れば事務員には最も少く、敎員に最も多い。これは敎員に對しては出産時の保護、哺乳時間の便宜、恩給制度等、種々なる優遇方法が講ぜられてゐるためであると見られてゐる。

　前記九百人中、兩親のある者は五五・九%、兩親共になき者四四・一%、父親なき者二八・一%を占めてゐる。總數の一二・五%は一、五名の扶養者を持つてゐるが、そのうち扶養者を有する未婚者は九・五八%、離婚者は七二・七二%、寡婦に至つては八五・七%までに達してゐる。

　就職年齢は二十四才以下の者七割二分。四十才以上の者四分といふ割合で、就職年限は三年以内の者最も多く。總數の五割を占め。四年目から漸減して十年以上の就職者は一割二三分にすぎない。業務別から見れば就職年限の最も長いのが、敎師。看護婦で、中には三十ケ年間もの勤續者があり、事務員、店員は最長二十年、交換手、タイピストは最も短期で最長十年程度である。

　九百人中七八%までは自宅から通勤して居り、勤務時間は平均八時間である。就職理由は、生計補助のための者約五〇%經濟上獨立のための者約六%、扶養者のための者〇・七%、他は婚資を得るため等々である。

　大阪、神戸、名古屋の三大都市の職業婦人によれば、年齢は大阪に於て二十四才以下九一%、名古屋に於て七六%、神戸に於ては二十五才以下が八四%を占めてゐる。未婚者は大阪九四%、神戸八四%、名古屋八四%である。勤續年數は大阪は平均二年、六ケ月以上一年未滿が二七%、神戸は三年以上五年未滿が最も多く二五%、次が一年未滿で二二%、名古屋では五年未滿が七五%。最も多いのは三年以上四年未滿で二〇%である。

　收入は、大阪に於ては月收二十五圓以上三十圓未滿が最多數を占め三六%、次が圓三以十一上三十六圓未滿の二三%で、三十六圓以下の收入のものが七三%になつてゐる。神戸では四十圓未滿のものが七五%、名古屋では日給者の中一圓五十錢以下のものが九九%、月給者に於て四十圓未滿のものが四%を示し

てゐる。大阪では日給者多く、七一%を示してゐる。

職業婦人に關する保護立法は、女教員に對して、極めて低度のものが存在するばかりで、その他の職業においては、絶對に何らの保護的制限もない。

三

婦人の賃銀勞働が提供する問題は、一見複雜なるが如くに見えてその實極めて簡單である。問題は、要するにその低率賃銀の影響と、家庭に對する破壞的作用との二つに歸着する。

婦人が家庭內の消費的活動に留まつてゐた時代の習慣は、今なほ婦人に生産者としての技術的訓練を與へることを無用視せしめてゐる。從つて一般的に婦人は不熟練工又は半熟練工の仕事に留まり、從つてその賃銀率は低からざるを得ない。しかも作別的な偏見は更にこれを助けて、同一勞働に對しても、男子の半額乃至精々三分二內外の賃銀に留めるのが原則となつてゐる。中等教員、小學教員の如く、全然同一過程を辿り、同一資格を得た場合でも、男女によつて、初任給三圓乃至五圓の差異を見、官公立の學校では校長、教頭の如き、主要な地位には婦人を就職せしめず、從つて婦人の俸給はその最高額に達する機會なく、中途で永久に昇給を停止せられる狀態に留まらねばならぬのに、その一例である。

上掲の東京市の調査に見ても、職業婦人の八割までが三十五圓以下の收入者であることが明らかにされてゐるが、かゝる狀態は必然に他からの補助を余儀なくする。これを職業別に見ると左の如くである。

	補助を受けぬ者	他を扶養する者	補助を與へる者	補助を受くる者	計
教師	一八 %	二一・一 %	五七・六 %	三・〇 %	一〇〇 %
タイピスト	五三	—	七・七	三八・五	一〇〇
事務員	二二・六	一〇・六	一六・四	五〇・四	一〇〇
店員	二四・四	九・五	七・二	五八・九	一〇〇
看護婦	七五・〇	二〇・〇	二・五	二・五	一〇〇
交換手	三一・八	七・四	一八・二	四二・六	一〇〇
計	二七・九	一一・二	二〇・四	四〇・五	一〇〇

七十圓以上の收入者中補助を受くる者は絶無であるが、三十圓以下の者にあつては、補助を受くる者七一・一〇%に達して居り、然も總數の六割が三十圓以下の收入に留まつてゐるのである。

この收入の不足分は何人によつて、いかに補はれるであらうか。家庭から通勤する者の場合には、父兄又は夫によつて補はれるであらう。然しそれが不可能な場合には？ こゝに職業

人の頽落とその娼婦化への大きな誘因が潜んでゐる。

わが國において婦人が生産者の地位に立つたのは、比較的新しいことである。從つて婦人を經濟的從屬者と見る舊來の觀念は、今なほ無産階級の男子の間にも强く根を張つて居る。從つて一般に資本家階級が婦人の低率賃銀を正當化するために捻出した種々なる口實をすべて無批判にうけ入れられてゐる。彼等は、資本家に敎へられた通り、婦人は、嫁入仕度、小遣稼ぎを目的として働くもので、その生活費を稼ぎ出す必要がない以上、その勞働に相當した賃銀を受取る權利がないと信じてゐるために、平等賃銀の要求を僭越であると考へてゐる。

婦人の勞働から、小遣稼ぎの半道樂的要素が次第に減少して、生活のため眞劍な働らきの要素が增加しつゝあること、現に多くの職業婦人は、自己の生活を支ふるのみならず、家族を扶養しつゝあること、更に、男子の場合には、賃銀は扶養義務その他の家庭の事情とは無關係に決定せらるゝにも拘はらず、婦人の場合にのみ、これを云々することが不合理なること等はすべて不問に附するとしても、婦人の收入不足が、同じ階級の男子の收入によつて補はれるといふ一半だけで、男子が進んでこれに反對せねばならぬ最も力强い理由が成り立たねばならない筈である。男子は、婦人を補助することにより、資本家が婦人に對して當然仕拂ふべくして仕拂はない分だけを、自から資本家に代つて仕拂はされてゐるのである。婦人が同一賃銀を要求するのは、同じ階級の男子に對してではなく、資本家に對してにすぎない。然るに傳統的な優越感を傷つけられるのを恐れて、婦人が資本家に向つてするこの賃銀値上げの要求を支持しない男子は、自から招いて不利益な競爭に苦しまねばならぬと同時に、資本家のために、自己の收入の中から、婦人の賃銀を立替へることに滿足する者である。

職業婦人の增加に伴うて屢々論議せられる謂ゆる風紀問題の如きも、この低率賃銀の問題と引離しては論ずることの不可能な問題である。

生産者たるに必要な何分の豫備的訓練も與へられず、從つて最も不利益な職業の機會しか與へられない者が、何らの技術をも訓練をも必要とせず、苦痛な勞働をも伴ふことなしに、或程度の收入を保障せられるとすれば、これに赴くのは避け難い勢ひである。生活を維持するため、收入の不足を補ふために婦人を賣淫に走らせることに對して責任を負ふべき者は、生活を維持するに足る賃銀を仕拂はず、かつ絕えず益々增大する失業者軍を製造する資本家階級そのものであり、これを必然とする社會機構でもなければならぬ。

家庭に對する破壞的作用も亦た婦人の賃銀勞働に加へらるる反動的な非難の一つである。しかし實際にはこの非難は事實の半面をしか見てゐない。本來、婦人の賃銀勞働は、婦人の自主的要求によらず、資本主義經濟が家庭を破壞した結果として――即ち男子の收入による家計の維持を不可能にした結果として起つた現象であつて、決してその原因ではなかつたのである。がとにもかくにもこの二つが互ひに原因となり、結果となり合つて男性中心の家族制度の上に破壞力を振ふに至つたことはもとより否むべくもない事實である。この事實は、一方では婦人に經濟的獨立の機會を與へて、兩性關係を平等の基礎の上に置きかへるといふ進步的な任務を果しつゝあると共に、他方母親を家庭から奪つて、子供を保護者なき狀態におくといふ、過渡的な犧牲をも余儀なくしてゐる。この點について職業婦人一般の調査は存在しないが、在來明らかにされた限りでは、女工及び女教員の生產率の低下、難產死產の高率、及び其子供の發育不良又は高率の死亡等は、確認せられた事實である。

是等は在來、婦人の賃銀勞働の必然的な伴隨物として認められて來た。然し事實は必ずしも然らず、外國における多くの調査は、かゝる弊害もまた、婦人の賃銀と密接な關係のあることを示してゐる。即ち熟練工の場合には短い勞働時間と、高い賃銀とが保證される。短い勞働時間と高い賃銀とは、住民の安と教養を保障し、同時により良き生活を可能にする。健康にして教養ある母と、よき生活は、子供に健全な發育を保障することが出來る。斯の如く、母性の破壞は婦人勞働の本質的な要素ではなくて、その奴隷的な條件にあることが、資本主義下においてさへも既に證明せられて居るのである。婦人を高級な、熟練せる生產者として訓練し、自己の性能に適した職業を選擇する機會を與へ、全社會と自分自身の利益に一致する勞働條件を選定せしめる社會において、始めて婦人勞働の一切の弊害は除かれ、その有利な點のみが發達せしめられるであらう。

四

婦人勞働の組織運動は、吾國では未だ初步的段階に留まつてゐる。一般に、婦人勞働がその發展の初期にあつて、少數の產業部門の、しかも下級な勞役に留まる限りは、その極度の悲慘にもかゝはらず、この新しい社會的事實とそのもたらす社會的意義とについて、ブルジョアジーも、プロレタリアも、共に明確な意識を缺くのが常である。が、資本主義の成熟と共にこの過程が進行して、筋肉勞働の方面においても、婦人勞働が、最も粗雜な、低廉な不熟練作業に留まらず、在來男子の獨占に歸

してゐた比較的高級な作業にまでその範圍を擴大し、更に多少の智識や技術を要する下級頭腦勞働の方向にまで進出し、しかもこの傾向が一時的なものでなく、確實にその將來の發展を豫期せられるところの永久的な事實たるを見るに及んで、にはかにその重要性が注意をひき始めるのである。

歐米において、婦人勞働者の組織が重要視せらるゝに至つたのは、それが、男子の獨占區域と見なされてゐた機械工業の方面に侵入した結果である。戰時中及び戰後にわたつて、各國を通じてこの傾向は著しく、例へばドイツでは一九一七年には金屬産業における婦人は六・二%であつたのが、一九二〇年には一九%になり、英國では一九一四年より一九二一年までの間に、金屬業に從事する婦人の數は四四・四%の増加を見、化學工業では一九一四以降一九二三年までの十年間に、七%の増加を示してゐる。合衆國では鐵及び鋼鐵業に從事する婦人の數は、一九一〇——二〇年の間に二倍以上に達し、その他の職業における婦人の増加率を遙かに凌いでゐる。

然るに日本では、勿論すべての産業に婦人が分布されてはゐるが、全婦人勞働者の八割までは傳統的な女性工業に留まり、機械工業におけるその率はいふに足りない程度のもので、男子の獨占的地位を脅かすには至つてゐない。（女子工場勞働者の八二・二%は纖維工業に、機械金屬に從事するものは一・一%にすぎない。）我國の勞働指導者が、歐米の如く、婦人勞働を積極的に排除することもない代り、進んでこれが組織に當らうとする熱心もなく、在來常に無關心に留まつて來たのは、その競爭が未だ重大化せず、從つて痛切な利害關係を感知する機會が少かつたせいもある。今日までの所、わが國の婦人勞働運動は、紡績女工の深夜業及び寄宿制度の如き、純粹な經濟問題よりは、女子勞働者の初歩的な人權問題をその中心題目として來た觀がある。これはもとより重大であるには違ひないが、いはゞ封建的勞働制度の斷片的遺物に對する鬪爭であつて、その性質は暫定的であり、その影響もまた局部的である。實際は、問題がこの傳統的な女性産業の範圍内に留まつてゐる限りは、その解決も簡單であり、容易なのである。然るに婦人が一旦この與へられた女性産業の限界を突き破つて、謂ゆる男子勞働の領域に立入るや否や、問題は頓に複雜と深刻を加へて來る。そしてここに始めて、婦人の勞働運動が、局部的な封建的遺物に對する、特殊的な鬪爭の範圍を脱却して、一般的な無産者運動の一環として、純然たる反資本主義的鬪爭に發達する巨歩が踏み出されるのである。

婦人が傳統的女性産業に留まる限り、男子は婦人勞働の領域

を受くること少く、従つて両者の間に共通利害の意識の発達する機会が少い。男子は依然として所謂家長的意識に捉はるゝにまかされ、男子は男子としての伝統的優越感に傲り、女子は女子として伝統的な奴隷根性を保つてゐる。婦人労働者の圧倒的多数が専ら女性産業に留まる吾国の労働運動において、深夜業の撤廃、寄宿制度の改善、外出の自由等が当然の要求として認められながら、一層広般な、一層深刻な、一層永久的な問題である差別賃銀率撤廃の要求が、最近まで、左翼労働組合の指導者によつてまで、一笑に附せられてゐたのも偶然ではない。しかし技術の発達と産業合理化とは、吾国においても、婦人を駆つて女性産業の限界を突き破つて、機械金属等の謂ゆる男性産業の領域にまで進出せしめつゝある。差別賃銀率の問題が漸く労働運動者の注意を惹き、婦人を組織する必要が真面目に認められ出したのは、この一転機を語るものである。わが国の婦人労働運動が、あらゆる努力にもかゝはらず、婦人が絶対多数を占め、かつ労働状態の最も悲惨な繊維工業の間に発達させることに成功せずに、婦人が少数を占むるにすぎぬ金属、印刷等の女工の中にその中堅的な勢力を結成し得たことは、婦人が婦人のみの集団の内部にその活動と視野とを限定されてゐる間は、一般的な階級的運動に進出する基礎を与へらるゝに至らず、進んで男性の過程にまで侵入し、男女が同一産業部門に雇はるゝに至つて、この一時的、外面的な利害の衝突と、更にこの矛盾を階級的団結の力によつて切り抜けようとする努力の過程を経て、始めてこの客観的基礎が吾国に築かれることを最もよく説明するものではあるまいか。

五

筋肉労働の諸部門における男子労働と婦人労働との関係を支配する方則は、そのまゝ頭脳労働対筋肉労働の間にも適用される。教育を支配階級の男子の特権とした封建的伝統が、教育を必要な条件とする頭脳労働をも、女人禁制の、侵すべからざる神域であるとする観念の基礎となつてゐる。婦人が、最も卑賤視されてゐる筋肉労働に従事する場合には、いかに過激な労働たるを問はず母性の破壊、女性美の什潰等は口にされないにかゝはらず、一旦男性の独占区域たる『高貴』な頭脳労働の分野に一歩を踏み込むや否や、家庭の名において、母性の名において、ありとあらゆる神聖なるものゝ名において、この許すべからざる自然への叛逆が批難される。婦人の奴隷的な筋肉労働は、国家の繁栄のために祝福せられねばならぬ。しかし、より軽易な、比較的高率の賃銀を受ける頭脳労働に従事すること

は、兩性の自然的分業の方則を蹂躙し、社會を混亂と滅亡へ導く危險行爲でなる。前者は社會的必要であり、後者は輕薄な流行である。今日の社會は、この二つの間にかういふ差別を設けてゐるのである。

『…現在我國の狀態を見ると、男子の失業は多くの場合、婦人と少年の安價な勞働の提供に原因してゐるやうです。嘗てジュネーブで目下來朝の途にある國際勞働局長アルペール・トーマ氏の令孃が某銀行の記帳係りに傭はれた時、世論は二つに分れ、さすがに勞働局長の娘だと讃める說と、一つは勞働局長ともあらうものが、自分の娘を勞働市場へ送り出し、失業者に喘いでゐる人間の行く手を妨げるのは不都合だといふ非難がありましたが、日本の現狀を見ると後者に似た場合が非常に多いやうです。卽ち職業婦人になるといふことが婦人の必然的な要求から出たものでなく、一種の流行的傾向から出發したものが多い。從つて使用者の立場になつて見ても、何等の基礎的技能を有しない婦人が勞働市場へ出るといふことは、たとへ賃銀は廉くとも全體の能率の上において好結果を得られる筈がありません。故に婦人としては女性の能力に當嵌る職業例へばタイピストとか看護婦とかの職業を選び、その他は斷然引退して貰ひたい。また職業の性質條件によつては、女性みづからが之を拒絕するだけの見識を持つて貰ひたいものです。一方使用者側でも單に自己採算上から勞働婦人や職業婦人を使ふことを斷然廢止するならば、この失業問題は直ちに解決するでありませう』。(社會局職業課長　川西實氏談――昭和三年十一月廿四日、讀賣新聞)

これなどは頭腦勞働における婦人排斥の代表的な意見である。失業問題解決の一策として、有產階級の女子に就職の權利を與へないことを主張される川西氏が、その說を更に徹底して、同じ階級の男子にも適用されたなら、一層の卓見を稱せられたことであらう。今日、高等の職業は、俸給以外の、財產による收入によつて生活し得る有產者の獨占に歸してゐる。失業者のために道を讓る彼等の義務である！有產者の子女は、祖先の遺產と親の收入に寄食せよ！無爲徒食に滿足せよ！俸給によつて衣食するの要なき『遊び半分の』お坊ちやん重役、お坊ちやん官吏、お坊ちやん求職者は『斷然引退』せよ！失業問題はかくて解決される！まことに近來の名案である。

もし婦人を男子と同じ人間として見るならば、親の脛をかぢることは、男子にとつての屈辱なるが如く、婦人にとつても屈辱でなければならない！然るに川西氏によれば、婦人の場合には、親の脛をかぢらざることが罪惡なのである。少くともかぢるべき脛があるにもかゝはらず、それを捨てゝ自己の勞働によつて衣食しようとすることは、失業者の道を妨げる反道德的な行爲である！男子の失業を救濟するために、婦人は『斷然引退』しなければならぬ！そこで婦人の失業を救濟するためには！どうしたことか――川西氏は、男子に向つて『斷然引退』の勸告を發する義務を忘れてゐられる。否な、婦人の失業救濟の最も

有力な神話が言はれに、酒場に、カフエーに、待合にその捌け口を廣い網を張つて待ち受けてゐることを知るために、氏は故らに婦人の失業者について一考する必要を認められなかつたのである。男子のために、婦人は勞働市場を『斷然引退』せよ！勞働市場より人肉市場へ！これが婦人に對して與へられた氏の忠告と解せられる。

『職業の性質條件如何によつては女性みづからが之を拒絶するだけの見識をもつ』ことを川西氏は希望してゐられる。『職業の性質條件』を思へばこそ、婦人は人肉市場へ走ることを『斷然』『拒絶』して勞働市場へ殺倒したのではなかつたか。又職業の『性質條件』を思へばこそ、最も奴隷的な條件の下にある傳統的な女性の勞働を『拒絶し』て、多少なりとも有利な頭腦勞働に殺到するのではなかつたか。しかもかゝる傾向は、『贅澤な選り好み、』『我儘な注文』として批難せられ、『職業に貴賤なし、』『勞働は神聖なり』等々のスローガンの下に、『職業の性質條件』を問はず、いかなる勞働にも無條件で服するのが、求職者の義務とされて來たのではなかつたか。男女を問はず、職業を求めるに當つてその『性質條件』を問うてゐられないのは、『見識』の問題ではなくて、パンの問題である。しかしこれは『見識』を食つて生きてゐる高貴な人種には縁のない問題であらう。

日本では、婦人に對する教育を制限することによつて、知識職業の方面におけるその競爭は辛くも防止されてゐる。從つて婦人の競爭が現に問題となりつゝあるのは、主として下級頭腦勞働の方面である。婦人の求職を道樂と罵り、流行と嘲る裏には、男性の特權侵犯に對する時代後れの恨みが含まれ、またこの猛烈な競爭によつて脅かされる自己の地位に對する不安がひそんでゐる。婦人勞働の排斥！婦人に對する自發的引退の要求！この利己的、排他的な叫びこそは、階級意識なき小ブルジョア男子の代表的な聲である。大浪に向つて『波よ退け』と命ずる者、それが彼の姿である。

六

けれども低廉な勞働は資本の糧である。道德や宗教や、家庭や母性や、ありとあらゆる舊い神々の名において呪はれながら、婦人勞働は、資本の貪婪に培かはれて動かすべからざる一大勢力に發達した。單純な敵意や、センチメンタルな女性美や母性論の神輿をもつてこれに手向ふことは、一片の木片をもつて洪水の力と戰はうとするにも似た無力な試みにすぎないことが明かとなつた。

腐敗した舊い社會を破壞し、押し流すには、この洪水の盲目的、無意識的な氾濫だけで足りる。けれどもより高度に組織された新しい社會を作り出すためには、この强大な勢力を利用しつゝ、これに一定の進路と明確な意識とを與へねばならぬ。婦人勞働者の中の意識的な要素は、既にこの高く揭げられた目標に向つて、男子に伍して勇敢な進軍を開始してゐる。勞働組合、農民組合、無産政黨は、個々の男子と個々の家庭に代つて、彼女らを保護し指導する組織であり、彼女らが、それに據つて資本家と戰ふべき軍隊であり、保壘である。しかし婦人勞働者の大部分はまだ、突如として襲ひ來つた洪水の盲目的、無意識的な力に飜弄されて、その行くべき方向も知らず、取るべき道も辨へずに、自由主義的女權運動の藁しべに縋りつき、或は安價な享樂主義の根もない花に身を托さうとしたりしてゐる。そして同じく渦卷く泥水に飜弄されて行方を定めぬ半潰の家庭や個々の男子に救ひを求めようとしてゐる者が多い。特に中間層の職業婦人は、その屬する階級そのものが浮動的な地位にあり、更に婦人は婦人としての特殊な傳統的領域にその視野を限定されてゐる關係上、二重に階級意識をぼかされ、二重に目かくしをされてゐる狀態にある。この二重の目かくしをかなぐり捨て、二重の障害を突き破つた時、そこに生産者として、賃銀奴隷としての赤裸々の自己を見出すことができる。彼女らの救ひはそこに始まる。盲目的な洪水の力に飜弄される代りに、意識的にその强大な力を指導し、統制して、より高き文化へ、より高度の社會組織へ導く第一歩は、まさしくその刹那に踏み出されるのである。

職業婦人に關する保護立法は、女教員の場合に極めて低度の恩典がある許りで、他には全然存在しない。

資本主義日本は何處へ往く

資本主義の功罪を論ず

高畠素之

一

今日の經濟組織社會制度は、資本主義を基礎とし、その要望のまゝに形成されてゐる。そこで、現代は資本主義時代と呼ばれ、その經濟組織社會制度も資本主義の權化のやうに看做されてゐる。資本主義といふ言葉が、今日の經濟組織や社會制度をも包括するものとして通用してゐるのは、全くそのためだと言つてよからう。經濟學者の一部には、その概念が明らかでないとして資本主義なる言葉を斥けやうとする者もある。然し、資本主義の概念が明瞭を欠くのは、資本主義を可能ならしむべき一切の制度や組織が包括されるからで、若し學問的用語として役立たぬといふなら、これらの挾雜物を排除してしまへばいゝのである。

狹義における資本主義は、資本の私有によつて餘剩價値を收得しようとする經濟的欲求だと解して差支えあるまい。資本主義は、生産機關の私有と生産物及び勞働力の商品化とを前提として成り立つ。資本とは、餘剩價値を收得せしめる價値である。餘剩價値收得を目的に商品生産を行ふべく勞働力を充用する

る時、生産機關は玆に始めて資本となる。餘剩價値收得に役立たしめられぬ生産機關は、單なる價値であつて資本でない。

餘剩價値は、商品生産のため勞働力を消費することに依つて産出される。價値の源泉は勞働力にあり、これなくしては餘剩價値は生じない。然し餘剩價値は、勞働力の賣手たる勞働者の手には歸せず、生産機關の所有者の手に歸するのである。勞働者は、一定の價格（即ち賃銀）でその勞働力を資本家に賣る。隨つて彼れは、勞働力の消費された結果に關し何等の義務を持たぬと同時に權利をも有し得ない。一切の權利義務は、勞働力を買入れて自己の生産機關に充用した資本家の側に存するのである。この過程を經て餘剩價値を收得しようとする要求が、狹義に於ける資本主義であり、現代經濟組織の根柢をなしてゐるものである。

マルクスによると、人類の生活行程一般は、物質的生活資料の生産方法に依つて決定される。今日では、上述の資本主義的な生産方法が專ら行はれてゐるから、經濟組織も社會制度も勢ひ資本主義化せざるを得ない。それは、資本主義と密接不可分の關係を有してゐるのである。隨つて、一般に資本主義と呼ぶ場合、これ等のものが包含されてゐることも、深くとがむべきでなからうと思ふ。筆者も玆では、資本主義といふ言葉を、一般の用語例に從つて廣義に解して置く。

二

資本家が直接の目的として追求してゐるのは、貨幣であり經濟的利益である。餘剩價値の收得といふ資本主義の目的も、詮じつめれば經濟的利益の追求に歸する。經濟的利益の追求は、勿論、資本主義に限られたものでなく、人類の歴史と共に古い。然し、資本主義の下では、この經濟的利益の追求が、自由と平等とを根柢として行はれる。餘剩價値として經濟的利益を追求することが、抑も自由平等の現はれなのである。この點に、他の時代との區別さるべき資本主義の本質的特徴が見出される。要するに、資本主義の眞髓は自由と平等とにあり、他の諸特徴は悉くこれから派生するものと言はねばならぬ。

資本主義は、封建制度の外殼を破壞することに依つて成立した。封建制度は、あらゆる部面に於ける權力的統制を特色とする。財貨の生産も分配も、權力的支配の下に行はれ、個々人の自由と平等は全く犧牲に供されてゐた。けれども、十六、七世紀に於ける生産力の發達は、遂に封建制度を崩壞せしめたのである。封建制度の廢墟に立つた資本主義は、反動的に自由平等を强調した。營業の自由、企業の自由、投資の自由、競爭の自

由、而してまた勞働の自由！

自由の一面は平等である。企業の自由も競爭の自由も、勞働の自由も投資の自由も、個人的權利の平等が伴はねば一場の夢に等しい。かの『人權宣言』に記されてゐる如く、人は生れながらにして自由且つ平等だといふのが、資本主義のモットーである。自然法を重んじ、自然的權利と自然的自由とを認める當然の歸結として、資本主義は經濟的活動を全然個々人の利己心に一任する。營利衝動に基づく個々人の自由な活動を經濟上の原則とするのである。謂はゆる營利主義であり、自由放任主義である。

營利の原則に基づく資本主義は、封建主義と全然相背馳してゐる。然し、經濟上の制度としては、決して後者に劣るものでなく寧ろ多くの長所を有してゐる。自由放任の結果、獨創と冒險とが盛に行はれ、經濟的發展が促進される點は、封建主義に見出し難い特徴であらう。しかも、資本主義は封建主義のやうに權力を要せずして、生産と消費との調節を果たし得るのである。封建主義は、權力に依つて經濟的統制を行はねばならぬ結果、自由を抑壓し獨創と冒險とを阻止することになつた。けれども資本主義は、この弊を避けながら、經濟的混亂と無秩序とを制御することが出來る。一切の經濟行爲が個人の自由に任されてゐても、各種の商品は、需要と供給との關係に依つて、其價の騰落を通じて、巧みに經濟界の混亂を調節してしまふ。即ち、商品の供給が需要を超過すれば、忽ち價格が下落し生産者の獲得すべき利潤を減少せしめるから、該商品の生産に投下されてゐた資本が他の生産部門へ去り、需要と一致する點まで供給が低減するのである。この調節作用は、國家的統制に倚賴することなくして經濟生活の混亂を防ぎ得る資本主義の長所だと言はねばならぬ。

三

營利の原則に依つて運用されてゐる結果、資本主義が種々なる不正行爲を生むといふ見解は、今日でも相當に廣く行はれてゐるやうである。資本主義には不正な營業が附き物であるかの如く說く人も無いではない。或る商人が、牛肉の鑵詰と詐稱して砂利の鑵詰を軍隊に納入し、それによつて富を積んだといふ話がある。廣い世の中だから、それに似た不正行爲を營む者も絕無であるまい。然し嚴密に言ふと、さういふことは資本主義の神樣からも決して許さるべき行爲ではないのである。

資本主義の神樣は、自由と平等に基づいて、價値相等しと看做し得る商品の交換を命ずる。等價的交換に依つて餘剩價値を

收得するのが、資本主義の下で利己心を滿たすべき最上の方法なのである。不正行爲で利益を得んとする者は、結局自由競爭の上で落伍者たらねばならぬからである。平等の觀念は交換さるべき價値が相等しいことを要求するし、等價的交換によつて充分の餘剰價値が收得出來る筈なのである。

若し詐欺的商業が資本主義の本質であるならば、今日の如き信用經濟と大量取引との發達も見られなかつたに違ひない。信用と正直とを重んずる商業道徳は、實に資本主義成立の一條件だつたのである。封建時代の末期において商業道徳が發達してゐたのは、殆んど普遍的現象であつた。我國でも徳川時代の大阪商人は、頗る信用を重んじ信義を守つてゐた。彼等は金錢の借用證文に、負債を返濟出來ぬ場合には滿座の中で嘲笑されても差支えない旨を認めてゐたといふ。滿座の中で嘲笑されてすら、商業信用の破産となる。況んや詐欺的商業においておやである。砂利を牛肉と詐る如き行爲が嚴密に言つて資本主義の精神と相容れぬことは、殆んど疑ふ餘地がなからうと考へる。

商業が詐欺的性質を有してゐたのは、自由平等の精神が生ずる以前のことである。原始商業には、掠奪的詐欺的性質が伴つてゐたに違ひない。ギリシア神話におけるマーキュリは、商業と幸福との神であると同時に、また盗賊と詐欺との神でもあつた。原始商業が平和と掠奪との二重性を有してゐたことは容易に想像出來る。オッペンハイマーに依れば、都市成立の萌芽は掠奪者の營む商業にある。彼れは、海上乃至陸上の掠奪者が直接自己の消費に役立たぬ物品を販賣したために、市場が創設され、やがて都市が生じたのだと説く。商人と掠奪者とが同一であつた關係が、交換そのものに反映した場合も尠なくなかつたに違ひない。この商業に伴ふ掠奪的僞瞞的性質は、封建時代に至るまで失はれなかつたらしい。商人を卑しむ風潮は、彼等が貨幣に愛着する點からのみ生じたのではない。徳川幕府が、農村に商人を立ち入らしめまいとしたのも、農民の生活程度が向上することを嫌ふためだけではなかつたやうに感じられる。

封建時代までは、ひとり商業方面ばかりでなく一般に掠奪的行爲が盛んであつた。生存慾を滿足するためには、他人の勞働を無償で徴發するか、自己の勞働に依るか、或は他人の勞働と自己の勞働とを等價的に交換するか、そのいづれかの道を選ばねばならぬ。然し封建時代までは、自由平等の觀念が確立してゐなかつたから、無償徴發即ち掠奪の行はれる機會が多かつたのである。今日では、理由なき財物徴發は許されない。無償徴發を罪惡視する風潮は商業にも及んで、其處に掠奪的分子の介在することが許されなくなつた。我々は、すべての商品を安

心して購入し得る。價格だけの滿足は與へられるのだから安心していゝからである。價格を値切るべく、餘分な手數や時間を費やす必要がなくなつたことは、沁み沁み資本主義の賜物だと感じられる。

四

資本主義は營利原則の上に立つから、利潤の獲得が出來る物なら何でも生産する。一本千圓の帶も生産すれば、一枚數百圓の羽織も生産する。そこで、資本主義が奢侈を助長し、多くの資本が奢侈品の生産に投ぜられ、生活必需品の生産額が減少するといふ點から、資本主義の攻擊を試みる論者も現はれた。奢侈品と必需品との限界を定めることは困難であるが、大體に於いて、專ら上層階級の消費に歸する高價品が奢侈品だとして置いて差支えあるまい。成る程、資本主義が奢侈を助長することは疑はれない。然し、奢侈が、盛んになるから生活必需品の生産が減退するといふ虞れは先づなからう。奢侈品は價格が高いから、一個一個について見れば、或は利潤が多いかも知れぬけれども、その代り需要が尠いから多くの利潤もなからうと思ふ。需要の尠ない商品を生産するために、多くの資本が投ぜられる筈はない。數は力である。薄利でも多賣した方が利益は上るのであるが、さうすることの[illegible]やうなことはまづ絶對にあるまい。

一方、奢侈はそれが普及するにつれて、資本主義と關聯して社會進化の促進上大きな効果を持つものである。上層階級の生活樣式は絶えず下層階級から模倣渇仰されてゐる。上層階級の生活に、型ばかりでも追隨したいといふ欲望は、多くの無産者に依つて抱かれてゐる。この欲望が目立つて來ると、次第に模造品が現はれ、安價に模倣を果させてくれる。お召に對する文化お召、銘仙に對する新銘仙、メリンスに對する新モス、絹手製品に對する人造絹糸等がそれである。これ等の模造品出現は、下層階級の生活を豐富にするものとして歡迎せねばならぬ。

模造品出現は、實業道德の頽廢でも何でもない。勿論、銘仙よりも新銘仙の、メリンスより新モスの品質が劣等であらうことは疑はれない。その代り、價格も亦低廉な筈である。同一の價格で模造品の賣れる筈がない。價格が低廉なら、それだけ品質が劣等でも止むを得ない。模造品だつて、進歩すればそれ獨自の存在を保ち得るやうになる。更らに進めば、模型品と差異がつかなくなるかも知れぬ。その時には、模型品の價格が低下し、模造品の價格が上騰して差異がなくなるであらう。

昔は、絹物づくめであることが最上級の服裝的奢侈を現はし

てゐたやうであつた。然し今日では、誰れも彼れも絹製品を身につけてゐる。それが模造品であるにせよ、棉製品よりは美感なり觸感なりを滿足させて吳れるであらう。また、毛織物類にも、棉入りでゝもあるのか低廉なものが殖えて來た。そのために、自由勞働者でもモヂリ外套やズボンで寒さを防ぐことが出來る。欲望充足に役立つものの種類が殖えるといふことは、これは寔に結構なことに違ひない。

奢侈を罪惡視する思想は、封建時代に於いて特に盛んであつた。ヨーロッパ諸國では、マーカンチリズムの風靡する頃まで、衣服や食物等に關して盛んに奢侈禁止令が出たやうである。我が德川時代の奢侈禁止が甚だしかつたことは、改めて言ふまでもあるまい。封建時代には、獨創と冒險とが阻止されてゐたため、すべての進化が遲々として緩慢だつた。社會は化石したやうに靜止的狀態を保つてゐる。隨つて新らしい欲望が發生し、新らしい經濟的活動が行はれると、著しく目立つ。それは社會的秩序の紊亂として、支配階級に脅威をさへ感じさせたのである。

資本主義の下でも、奢侈の普及は兎角罪惡視される。質素勤儉が唱導されるのである。それは封建的傳統にも依るであらうし、勞働階級の浪費を防ぐ意識的目的に出づる場合もあるであらう。然し、權力的に奢侈を禁ずるやうなことはない。封建時代に比較して見ると、奢侈を排除する風潮は驚くばかり微弱になつた。自由主義の段階に入つたお蔭である。

五

資本主義は機械の利用に依る大量生產と密接不離な關係にある。家內工業や手工業は、機械に依る工場工業のために征服された。商業及び交通の發達は市場の擴大となり、個々人の消費物は奢侈の普及に依つて增大した。商品の需要は、次第に大量化して來たのである。大量需要を滿たすためには、勢ひ機械の發達が必要とされる。機械の改良と發明が進めば、個々の商品の價値が減少し價格が低下する。價格の低下は、多くの場合新たなる需要を喚び起す。資本主義と機械とは、斯くして原因結果的に相作つて發達して來たのである。

この機械の發達と生產の大量化に依る商品價格の低落とは、農村の自足經濟を破ることになつた。『商人入るべからず』でなく、今やいづれの村落も商人を無視しては生活をなし得なくなつた。酒も醬油も、自家生產することなく、商人の手から購入しなければならぬ。多くの生活必需品が、自家生產をするよりも低廉に買へて來たのである。昔は、手織木綿の着物が質朴な

農民の通の對象であつた。然し今日では、そんなことは殆んど見られなくなつた。自家生産をやつてゐては生活出來なくなつてある。

自足經濟が破れた結果、農民が都市の商工業者に依つて搾取されるやうになつたといふ點から、資本主義の攻撃をする者もある。如何にも農民は、商工業者に依つて搾取されてゐるであらう。然しそれは、彼等が工業製品を消費するやうになつたからではない。農民が商工業者その他に依つて搾取されるのは、農産物價格の上からである。農産物價格が、絶えず價値隨つて生産價格に達し得ないといふ點で、農村は都市に搾取されてゐると言へる。けれども、工業製品を消費する點では、恩惠こそ受けて居れ、決して不利益な筈がない。醤油の價格、木綿の價格は、都市の住民たると農村の住民たるとに依つて區別がない。區別があるとすれば、地理的關係による運送料位ゐたものであらう。

ひとり農民ばかりでなく、一般國民も亦、機械の發達による大量生産、生活資料の低廉な供給等に依つて便益を與へられてゐる。あらゆる生産物が商品化した結果、從前はみづから加工しなければならなかつたものも、精製品として容易にこれを獲得し得る。生産力の發達は、嘗て存在しなかつた新商品を生み[illegible]、我々の[illegible]生活の資料は、殆どところか全て資本主義の商品に仰がなければなるまい。

六

資本主義は、我々の生活を簡便ならしめたのみでなく、また勞働時間の短縮に依つて生活の享樂化を助長する傾向がある。資本主義の下では、機械が發達し分業が進む結果、各人の受持つ勞働行程が著しく單純になつた。資本主義の成立以前には、勞働の多くが手工的熟練を必要とした。然るに今日では、反對に大部分の勞働が、特殊の熟練を要しなくなつた。幼少年工や婦人勞働者が増加したのも、勞働が單純化したからである。

斯く機械化單純化が進むに從つて、勞働が無味乾燥になるのは當然の勢ひである。そこで、勞働の機械化單純化を呪咀する思想も現はれて來た。ウキリアム・モリス等の唱導する藝術的社會主義などがそれである。彼等に依れば、人間の眞の悦びは、勞働に於ける創造の自由にのみあり、人間的喜悦は勞働の藝術を措いて得られない。勞働の機械化と單純化は、創造の自由を窒息せしめるものだと言ふのである。

然し勞働は、所謂絶對の自由などと兩立するものでない。消

費者の悅びのためには、生産者としての悅びを犧牲とするところに、勞働の勞働たる所以がある。消費者の使用價値を第一位に置いて、創造の自由と人間的喜悅も沒却することが眞の勞働でなければならぬ。消費者の使用價値を無視する程に創造の自由が發揮される勞働は、寧ろ道樂と呼ばるべきである。農民には創造の悅びがあると言はれるが、その農業勞働にさへ多少の不自由や苦痛が伴ふに違ひない。よしまた農業勞働に悅びが多いにしても、現在の如く長時間の活動を必要とするのでは、あまり幸福でもなからうと思はれる。

我々の生活は、勞働だけから成り立つてゐるわけでない。勞働の生活以外に享樂の生活がある。勞働の悅びを追ふまでもなく、その時間を短縮し得たら享樂的部分が增大するのである。勞働の單純化と機械化とは避け難い事實として忍從して置くべきである。機械の發達と勞働の合理化とは、勞働の密度を高めるものの、一方に勞働時間を次第に短縮して來る。資本主義初期の勞働力濫耕時代を除けば、一體に勞働時間が短縮されてゐる。時間さへ短かければ、少し位ゐ苦痛が增加しても驚くに當らぬ。享樂の時間が延長されさへすれば、生活の享樂化は進むのである。

若し勞働を享樂化することが出來るとしても、一日の全部が享樂と化しては人生がさぞ寂寞とするであらう。歡樂極まつて哀愁生ずといふ諺はこの場合當てはまらぬだらうか、享樂の効用が無に等しく低下することは確かである。雨の日もあるから晴天の有難味も存するので、太陽の惠みと雖も明け暮れ續いては助からない。勞働の享樂化などと言つて、降りみ降らずみの日を喜んでゐるよりは、降るなら降るらしく豪雨でもある方が望ましい。その代り、降雨の時間を短かく、晴天の時間を長くして貰ひたいものである。資本主義が勞働の時間を短縮し、多くの享樂對象を生み出して吳れたのは、この點から言つて一大功績に屬すると思ふ。

七

資本主義は、科學的合理的精神を重んずる。隨つて、單に工場內の勞働が合理化されただけではない。嘗ては「大福帳」を利用するに過ぎなかつた小賣商人も、今ではキヤツシユ・レギスターを用ひ、簿記式帳簿に記入する。この傾向は我我の日常生活の上にも及び、封建的繁禮縟節を大半驅逐してしまつた。家庭生活も社交的儀禮も、著しく合理化されて來た。理由のない傳統的虛飾は、次第に排除されてゐる。

例へば、飮酒に關する傳統的虛飾なども消滅の傾向を辿つて

ゐると思ふ。元來、酒の國內消費が著しく減少してゐるさうである。酒そのものを享樂するのでなく、單なる見榮のために豪酒を競ふ風習などは、排除されて然るべきものだと思ふ。家長制社會では、一般にアルコール飲料の消費が、門閥に生れ高い教養を積んだ男子の特權とされてゐた。この傾向は、飲酒の習慣と豪酒とを優越の表章たらしめたのである。日本でも講談本に現はれる英雄豪傑が平然として大盃を傾けるところを見ると、豪酒に一種の尊敬が拂はれてゐたものと考へることが出來る。地方の舊家で子弟に對し、如何なる豪酒にも酩酊せぬやうな修練を積ましめたところがあつたと聞いたことがあるが、下らぬ努力を拂つたものだと思ふ。この種の理由から生ずる豪酒が、合理的能率的な資本主義の精神と一致し得る筈がない。今日、酒の消費量が果して激減してゐるならば、それには生活の合理化能率化の要求が與つて力あることであらう。かうして、無意味な傳統的虛飾を葬つて來たところにも、資本主義の功績が認められる。

八

次に、資本主義の弊害としては、勞働者の窮乏化、家族的結合の弛緩、金錢至上主義の瀰漫等、大小樣々なものが數へられる。然しこれ等の[illegible]、いづれも起るべくして起[illegible]てゐるもいたから甚[illegible]

資本主義に伴ふ弊害の中で、最も根本的なものは勞働力の商品化であらう。勞働者の窮乏化も、失業者の增加も、基くところは勞働力商品化の事實にある。資本家の餘剩價値取得もこれに依つて可能となるし、階級對立の助長、階級鬪爭の激成も亦、勞働力の商品化に原因すると言はねばならぬ。

資本主義の社會は有產者と無產者との二大階級に分かれてゐる。無產者は自己の勞働力を賣る以外に生活の方法がない。彼等は、他に何等の生產要素も持たないからである。勞働力が商品化するのは、即ちそのためである。餘剩價値を收得し、これを更らに資本化するのが資本主義であるから、少數資本家の手にはます〳〵多くの資本が蓄積され、ます〳〵多くの餘剩價値が歸屬してゆく。かうして富が一方の階級だけに集中する結果は、貧富の懸隔が甚しくなり、相對的意味に於ける勞働者の窮乏が增大するのである。

プロレタリアの數は次第に增加してゐる。けれども、勞働力の需要はその割りに增大しない。機械が發達しその利用範圍が擴大されるため、同一量の商品を產出するに必要な勞働力が、ヨリ尠なくなつてゆくからである。生產が盛んになる結果、勞

働力の需要は絶對的には減少しないと言へやう。然し、相對的には漸次に減少してゆくのである。勞働力の供給が需要を超える時、そこに失業が生じ、勞働力價格の低落が醸される。隨つて、勞働者の失業や生活苦の根本原因は、勞働力の商品化にあると言はねばならぬ。

勞働力が商品化し、勞働力の價格が需要供給の關係で變動する結果は、機械や分業の發達に依る勞働の單純化と相俟つて、勞働者の妻子まで工場内に流入せしめる結果となつた。即ち賃銀が低下して、夫たり父たり勞働者の所得だけで一家の生計が支え難くなるから、妻も娘も勞働者と化して來るのである。勞働の單純化は、婦人勞働の範圍を著しく擴大したから、今日では婦人勞働者を採用する勞働部門が多い。托兒所の如きものが現はれたのは、家庭外に出て勞働する婦人が增加したからである。

プロレタリアの窮乏化は、單に婦人の工場勞働者を多からしめたばかりでない。店員、事務員、看護婦等の如き職業婦人の群を非常に增加させたのである。職業婦人出現の根本原因が、生活上の必要にあつたことは言ふまでもない。然し、勞働を神聖視する精神の影響は、必ずしも絶對的生活の必要に迫られなくとも職業を求める婦人をさへ生んだ。

封建時代には、生産的業務に從事することなく、無爲徒食してゐるのが誇りとされた。それは身分の高い者にのみ許される特權だつたのである。生産的勞働は、身分の卑しい者が從事すべきものであつた。けれども、身分格式の低い商工業者によつて確立された資本主義は、勞働を蔑視するものでない。無爲にして徒食することは、資本主義の精神と相反する。「勞働は神聖なり』といふことは、決して勞働者を僞瞞するためにのみ生れた思想ではない。

婦人は概して傳統的精神に捉はれることの多いものである。けれども、資本主義精神は婦人の間にも浸潤せずにゐない。その結果、謂はゆる婦人の覺醒なるものが行はれ、男女の平等と經濟的獨立とが叫ばれて來た。男女間に於ける教育の機會均等も要求されて來た。婦人界に於けるこのブルジョア的革命運動は、次第に封建的傳統を驅逐し去つたのである。

これ等の種々なる事情によつて、婦人も經濟的にます〳〵獨立化して來る。戀愛の自由、結婚の自由、離婚の自由といふ如き婦人界の自由思想も、經濟的獨立化が進むと共に現實性を強めて來た。全家族が工場に赴いて賃銀を獲得せねばならぬ勞働者の家庭が、家長の權威を失はせ一の合宿所と化したばかりでない。家族的結合が一般に弛緩してきたのである。現代の享楽

主義や自由主義は、男女關係を著しく淫蕩せしめる。男女關係の永續性が著しく失はれ、家族的生活が動搖しつゝあることは、資本主義の生んだ弊害の一つでなければならぬ。

最後に、あらゆるものを貨幣化し、黄金至上主義を盛んならしめたことも、資本主義の弊害であらう。今日では、貞操も貨幣化されてゐれば、人命も亦貨幣化されてゐる。貨幣には萬能の力があり、その力には一切のものが屈服せしめられる。貨幣で計量されるのは、單に選擧の投票ばかりでない。金力さへあれば、謂はゆる輿論なるものを動かすことも出來れば、政權に近づくことも出來るといふ傾向は、決して喜ぶべき現象でない。

九

資本主義には、如上の功罪が認められゐるけれども、この中には資本主義と共に滅亡すべきものが尠なくない。資本主義が一の歴史的過程に過ぎぬことは今更ら言ふまでもなからう。資本主義は今や自己否定に陷つてゐる。自由と平等とを本質とした資本主義は、みづからこれを放棄せねばならなくなつた。資本主義の生命は次第に最後の土壇場へ近づいてゐるのである。

資本主義は自由競走を自己確立の手段としてゐた。即ち、自由競走に依つて資本を集中しようとしてゐたのであるが、然るに自由競走の結果、大資本企業による小資本企業の征服が進められ、會社企業即ち個々人の資本を集めて行ふ企業が生れた。この會社企業の間にも更らに自由競爭が行はれ、中小の會社企業が征服されることとなり、遂には會社企業の結合であるところのトラストやカルテルが現はれた。カルテルやトラストは、市場に於ける自由競爭を目的とするものでなく、供給の獨占を目的とする。供給の獨占によつて、商品の價格を獨占的に決定し、獨占利潤を擧げようとするのである。

トラストやカルテルは、等價的交換を望むものでない。產業を獨占して掠奪的な商業を行はうとするのである。資本主義は、この自己否定の段階に達すると、國家權力との結合を必要とする。例へば、國內の獨占價格を維持するためには、同種商品の低廉な輸入を阻止せねばならぬ。それには、政治權力に依つて獨占的關稅を課さねばならぬ。また、著しく增殖された資本を海外の後進國に輸出してヨリ高率な增殖を遂げしめるためにも、國家權力を背景とする必要がある。

今日では、世界各國の資本主義がこの段階に入つてゐる。各國ともに自由黨の勢力が衰へ、保守黨が再び頭を擡げてゐるのは、自由平等主義否定の時代に入つたからである。國家主義と

權力主義とが要望されるのは、資本主義國共通の事實である。世界に瀰る『反動的』風潮として左翼理論家の眼に映ずるものも、この現象に外ならぬ。自由主義に立脚してゐる限り、それは好ましくない傾向に違ひない。然し、社會進化の上から見れば、それは反動ではなく必然の推移なのである。この必然の推移を必然の進化として直視し得ないやうな回顧的自由主義こそ、寧ろ斥くべき『反動』思想であり時代錯誤であると言はねばならぬ。

資本主義は今や、功罪ともに終らんとしてゐる。産業の統一と社會化も、地ならしを行はれてゐる。社會の經濟的發達は、資本主義を必要とする段階を超え進んで來た。資本主義は今や、その根本精神と共に存在の理由を失ひつつある。

資本主義日本の現在の流れと其歸趨

高橋龜吉

一　はしがき

一方に資本主義それ自身の腐敗墮落の流れがあり、一方に資本主義打倒運動の流れがある。前者は資本主義の消極的否定にして、後者は資本主義の積極的否定である。此の兩極端の間に介在して更に四つの流れがある。(一)は資本主義の外延的發展の努力であつて、所謂帝國主義的運動である。(二)は資本主義の内延的發展の努力であつて、所謂「合理化」運動である。(三)は資本主義の末期的弊害除去の努力であつて所謂「新自由主義」運動である。(四)は資本主義の破綻を社會主義原則の部分的採用に由つて補修せんとする努力であつて、一種の折衷運動である。尤も、此の(四)の運動は、斯く資本主義維持の立場から見れば、一種の「補修」運動であるが、しかし之を打倒資本主義の立場から見れば、旦に資本主義の手を拔き、夕べにその足をもぎ取る資本主義打ち壞しの「漸進」運動に外ならぬ。斯くて、此の(四)の流れは、之を支持する者の立場の差

與、その意圖の如何に由つて、その方向は或は左に、或は右に別れるのである。

以上が、大體に、日本資本主義の淵原を、發して現に流れつゝある種々なる水勢の鳥瞰である。云ふ迄もなく、これ等各種の水勢は、互に相牽制して、時には淀み、時には急落する。が、結局、此等の諸水勢は、その中の最も強大な流れの中に吸ひ込まれて、或は右に、或は左に、流れ行くのである。我が資本主義の歸趨は結局如何なる方向に流れ行きつゝあるのであらうか。以下、その狀勢を概觀するであらう。

二　資本主義を消極的に否定する激流

資本主義は現に何處に流れつゝあるか。之を見極める最も端的な、最も標準的な羅針盤は、その資本主義制度の下に於て、生産力は愈々伸び、民衆の生活程度は益々向上しつゝありや否やである。若しもこれ等が肯定的であれば資本主義は愈々發展しつゝありと見て間違なく、若しそれ等が否定的であれば資本主義は沒落の途を辿りつゝありと見て過誤は無い。扨て、いま我が資本主義の現狀を見るに、大略、次の四點を綱目として、その生産力は多かれ少かれ萎縮し、或は退歩しつゝあることを發見する。

(1) 營利行爲の反生産化
(2) 資本權力の反生産化
(3) 資本家特權に由る資本の喰潰
(4) 資本家階級の腐敗頽落

一體、資本主義制度の原動力たる營利行爲は、初め、生産力の增進と云ふ調帶を通じて常に働いてゐたものであつた。従つて、資本家の營利行爲の追及と云ふことには、常に、生産力の增進と云ふことが附隨してをつたのである。然るに、我が資本主義の漸く早熟するや、資本家は、生産力增進と云ふが如き努力を要する調帶に據る代りに、或は資本力に由る獨占、或は政治的諸特權等、單に金儲けの出來る他の調帶を利用して、その營利行爲を逞ふするに至つた。就中、最近の我國に於て行はれる最も根幹的な、最も大規模のものは後者の政治的諸特權を調帶とする營利行爲である。蓋し、前者の資本に由る獨占と云ふ調帶を最有利に利用するためには、廣大なる販路を有する生産事業の存在することを必要とするが、斯くの如き事業は、いま我國には極めて乏しい。勢ひ、その方向を主として政治的特權の獲得に向けたのである。

然らば、謂ふ所の政治的特權に由る營利行爲の追求とは、そ

も〳〵、如何なる方法による營利行爲であるか。試に、その重なる手段を例示せば實に左の如きものがある。

(イ) 保護關税の引上げに由る利得。

(ロ)「國家事業」その他の名に由つて補助金を得ることに由る利得。

(ハ)「財界救濟」乃至は「國家事業」救濟等の名に由る利得。

(ニ) 鐵道、鑛山、水力電氣、電氣供給線路、瓦斯等の特許、國有土地及林野の拂下、國營事業の請負、用地買上、等々に由る「利權」乃至「特權」に由る利得。

(ホ) 國産品奬勵その他の名に由り、高價にて政府買上の特約に由る利得。

(ヘ) 低利資金貸下の名に由る利得。

(ト) 預金部資金貸付の名に由る同資金喰荒に由る利得。

(チ) 特種銀行の貸出と云ふ名に由る資金の濫用による利得。

(リ) 米價調節その他に由る利得。

(ヌ) 税金免除、脱税看過、課税輕減、その他に由る利得。

その他、細かな點を擧げれば際限もない。右の中、多くは説明なくともその意味を理解して戴くに難くないと思ふが、念のため、その具體的事例の一端を示さんに、(イ)については大正九年以降に於ける關税の引上、就中大正十五年に於ける關税の大改正を擧げることが出來る。思ふに、このため、我が資本家は年々數千萬圓の巨利を寢てゐて儲けつゝあるであらう。(ロ)については我が私設鐵道、汽船會社、航空會社、無電會社等幾多の例を擧げることが出來る。又、(ハ)については單に最近のことのみを擧げるも震災手形關係二億七百萬圓、台灣銀行及日銀特融關係七億圓、と云ふ巨額を國民の負擔で貸付け、(事實に於てはその過半は呉れてやつたわけ)尚ほ、此の外にも、預金部の金數千萬圓が同樣に濫費せられ(例へば國際汽船の如きその代表的のもの)てゐる。次に、(ニ)についてはわれ等はその事件を日々の新聞で殆んど年中行事の如く見受けるのである。誰々が〇〇方面へ運動して、〇〇〇利權を得たと云ふが如く行はれてゐる。その中、たま〳〵、「賄賂」事件で最近世人の注目を惹いたのが、東京市會の京成電車市内乘入事件、瓦斯事件、魚市場板船權賠償事件等々である。(ホ)の代表的のものとしては我が兵器、造艦、その他の軍需品、國有鐵道の車輛、汽罐車等の注文の如きである。(ヘ)及(ト)に至つては政界の「伏魔殿」として有名であつて、政府自らその濫用に苦しみ、遂に預金部運動用委員會を設けた程であるが、今日尚ほ、その濫用は鮮少でない。次に(チ)に至つては、臺灣、朝鮮兩銀行の大不始

本が何よりも痛切である。この點、多少の程度の差はあるが、他の特殊銀行も同じく濫用されてゐる。例へば、坪十錢位ひで買つた荒地數百町歩が、坪一圓位ひの擔保で某々銀行より貸出され、これが選擧費となれりと云ふが如き噂の頻々たるが如き、又、地方農工銀行が常に政爭の具に供せられてゐる如き、何れもその片鱗である。その他（リ）及（ヌ）等は改めて例示を要せぬであらう。

これ等の方法に由る「營利」は、毫も生産力を增進するものでないこと云ふ迄もない。否、却つて、生産力の進歩發展——それは資本主義の下に於ては競爭に由つてのみ齎らされる——を政治的特權に由る安逸化に由つて去勢して了ふものである。加ふるに、斯く、政治的特權を與ふるためには、一方に、非特權者に各種の犧牲を荷はしてその生産力を壓迫せねばならぬ。のみでない、此の種の政治的特權を獲得するためには、資本家は合法的及び非合法的各種の方法に由つて政界に巨額の黄白を振り蒔かねばならぬ。即ち「議員」乃至「官吏」の供飼、又は、買收は、いまや、資本家營利行爲の、根幹としての位地を愈々大にしつゝあるのである。これ、最近年に於て、所謂、政界の腐敗が愈々熾烈に、露骨に、大規模になりつゝある社會的理由である。

斯くの如き現象は、資本家自ら資本主義を否定するものなることは證明を要せないであらう。封建を否定したものは他ならぬこれ自らであつた。資本主義を否定しつゝあるものは、實に、我が資本家階級それ自らである。

資本主義の生産抑壓は茲に止らぬ。その他、例へば、生産增進の目的を以て發達せし土地及資本の私有財産權の如きも、投資制度發達の結果、その所有權者の多くは自らその資本を利用して生産に從事せざる者となり、こゝに、私有權の效果は、生産從業者を壓迫して、不勞資本家（その所有權に歸屬する土地及資本より見る限り）を擁護する道具と變質するに至つてゐる。現に、農業に於ては、不勞地主の土地所有權を保護するため、立入禁止、耕地の荒廢、農事放棄等の如き生産力の破壞を法律で保護するが如きホコトンあり、商工業に於ては、不勞債權者を保護するために、生産事業を倒壞（利子の過重負擔に由る事業の破壞、乃至は債權の主張に由る破産者等々に由る事業の潰滅）せしめつゝある。又、資本の增大は初め生産力の增進と同意語の如く使はれしものが、いまや、資本の增大は「獨占」を招來し、已述の如き生産力の痲痺作用を意味するに至つてゐる。

その他、我が資本主義が生産力抑壓の制度化せる事實と

は、前掲(3)の資本家階級に由る資本の喰潰しと(4)の資本家階級の腐敗墮落とがある。しかし、(3)は「經濟往來」七月號の拙稿に於て已に詳述し、(4)は本誌八月號の拙稿「現代重役論」に於て已に或る點まで詳叙したところであるから、紙數の制限上、之を玆に省略する。

三　資本主義に對する補强運動の歸趨

以上の如く、資本主義そのものは、その營利行程その他に於て、その生産力の抑壓、減耗、退化を齎らしつゝある。その結果は云ふ迄もなく資本主義的發展の行詰であり、その衰弱であり、大衆の生活難加重であり、資本主義に對する積極的否定運動の勃興である。玆に於て、資本主義の陣營内に於ても、之を此のまゝに放置すべからずとなして、各種の頽勢挽回運動が、已に關說せし如く、現に試みられつゝあるのである。

その第一は所謂帝國主義的發展運動であつて、現に、大將田中内閣が支那に對してとりつゝある所謂「强硬」政策が即ちその表現である。さり乍ら、今日の「時勢」に於て、武斷的帝國主義政策の成功し得る見込の斷じて無きことは、現に、濟南事件の出兵が結局何ものを齎らしつゝあるかを一顧する丈けで十分理解し得られることであらう。されば、此際、日本資本主義が帝國主義的に發展せんとする餘地は、所謂、經濟的進出以外にないのである。所がその經濟力はいまの日本には欠けてゐるのである。(拙著日本資本主義發達史第六章の帝國主義的發展の挫折を參照)。現に最近の新聞は、南滿の解放に由り、南滿鐵道が外資の誘導に志しつゝあることを報じてゐる。斯様のわけで、我が資本主義の補强運動としての帝國主義的發展運動は、いまや、殆んど、一般に絶望視せられ、その意圖するところは、専ら、已得權の擁護――それもその全部ではなくて、出來るだけ已得權の喪失を少くなくせんとする――に限られつゝあるの狀である。

されば、資本家階級一部の「愛國者」は、現在に於ける資本主義の行詰打開の血路を、主として、所謂「合理化運動」に求めんとしつゝある。いかにも、その限り、資本主義の能率は或る程度まで向上せられるであらう。さり乍ら、所謂合理化運動には限度がある。就中、日本經濟の現狀の如く、鐵工業關係、機械工業等の位地極めて小にて、且つ大販路を有する商品生産の極めて僅少なる場合に於ては、その適用範圍も極めて限られてゐる。

然るに、日本資本主義經濟の行詰を打開するためには、第一にその生産力を増大せねばならぬが、それには先づ現に衰退し

つゝある技術を更に擴大するに代つて大矛盾を示すものであり、第二には、現に我が生産力を或は抑壓し或は退化せしめつゝある現在資本家に對する各種の政治的特權（已述第二項の如き）、を剝奪することを必要とする。が、右の如き資本家已得權の剝奪、又は、科學の發達と云ふが如き「非營利」事業に大金を投すると云ふが如きこと、等は到底資本家の「合理化」運動には出來ない相談である。のみでない、我が資本主義を現に行詰らし、之を衰弱せしめ、之を否定しつゝあるものは、以上の外、前記第二項に列擧の(2)資本權力の反生産化、(3)資本家階級に由る資本の喰潰、(4)資本家階級の腐敗惰落があるが、斯くの如き點に對しても、所謂「合理化」運動は何等手を下し得ないものである。斯くて、合理化運動の精々なし得るところは、生産用具及消費品の一部に對する規格の統一、カルテル其他に由る競爭的浪費の排除（但しその反面に生産力發展の刺戟除去）及び勞働者使役の合理化と云ふ名に由る勞働階級搾取の增大、等に止るであらう。即ち、所謂「合理化」運動は、現に我が資本主義の生産力を抑壓退化せしめつゝある主因たる前記第二項の(1)(2)(3)(4)の諸點を少しも克服することは出來ないものである。

こゝに於て、主として、營利行爲の非生産化の傾向を克服し、之を生産增進の中にまで轉換せんとする運動が、所謂「新自由主義」の名に由つて行はれるに至つた。その新自由主義は武藤山治の率ゐる實業同志會であるが（民政黨にも國際的自由通商運動として登場せるが如く政策の制限上より行く）、だが、第一に、資本主義初期の自由主義は、資本家の利益擁護のために、封建的政治勢力除去の運動として擡頭したものである。然るに、いまや、已述第二項の如く、政治は資本家の利害と完全に同心一體となり、資本家の利益のために働きつゝあるのである。此際に於て、資本家階級が自由主義を謳歌する筈がない。現に、實業同志會は實業界に於て少からず不評判である。

第二に、世界はいま帝國主義的獨占時代に在つて、資本家の營利追求の方法は、益々、政治的保護の大資を利用しつゝある。就中、關稅政策に於てそれが著しい。斯かる際、新自由主義運動が、その政策を實現さすためには、先づ、國際的協調を必要とするが、その實現の見込なきこと、現に、最近に於ける國際經濟會議の結果に見て明かである。

更に、新自由主義の實現のためには、自由競爭のフエアープレーのために、資本大小の差異が或る程度以上大ならざることを必要とするが、資本の集積異常の程度に達し、三井、三菱等の財閥の威力壓倒的なる今日、到底、自由競爭の行はれ得べき

餘地はない。反對に、いまや、社會は、國家權力を以て、この異常に膨大せる少數大資本家の專横をコントロールせねばならぬ必要の下に置かれてゐるのである。即ち、一國の經濟活動に對する國家權力の干渉を出來るだけ除去すべきでなく、益々その干渉を大にし、その統制力を强大にせねばならぬ時代にあるわけである。

以上に由つて容易に看取し得る如く、筆者の所謂資本主義の補强運動は、之に由つて極めて局部的効果は擧げ得るかも知れないが、之に由つて、資本主義の頽勢に補强工事を施し得る見込は殆んどないのである。即ち、それ等の運動は、譬へば、大厦の倒れんとするを、區々たる柱枝を以て支へんとするの空しき努力である。

四　資本主義に對する積極的否定運動と其の歸趨

已述第二項の如く、資本主義それ自身が、消極的ながら、資本主義そのものを自己否定するが如き傾向を呈すると共に、之に照應して、資本主義を積極的に否定する運動が著しく擡頭するに至つた。所謂、廣く無産階級運動として登場するに至つた「流れ」がそれである。蓋し、已述の如き資本主義の自己否定的狀態は、第一に、國民の大多數を占むる無産階級の生活を壓迫し、或はそれの生活强度の低下を强ひ、或はそれの失業を脅かし、或はそれの就職難を加重し來つて、遂にその打開運動としてこの種の運動の擡頭を餘儀なくしたものである。なる程、此の種の運動の擡頭は、外國の刺戟に負ふ所が多大であつた。だが、その刺戟に應じて、斯く、實際運動として發達するに至つた所以は、以上の如き理由が已に存在してゐたからである。

然らば、此の運動は、已述の如き資本主義の自己否定的狀態に對し、如何なる對策を主張するか、と云ふに、宛かも、幕末封建的制度の自己否定的行詰の打開には資本主義制度の實施を必要とせし如く、資本主義已述の如き自己否定的弊害を除去する途は、唯一、社會主義的制度の實施以外に方法なしとするものであつて、現にそれの實現に全力を擧げつゝあるものである。

扨て、社會主義制度とは何か。誤解が少からずあるので一言するが、之を砕いて云へば、社會主義制度とは、要するに、一國、一社會の生産能力の增進を最高目標とし、その目的のため、第一に、それの障害になるものは、如何なる特權階級にても、宛かも明治維新が同じ意味に於て武士階級を撤去したるが如く、之を撤去せんとする、又、その國、その社會の生産力を

増大する政府の方法に、現實に生産に[illegible]に從事しつゝある人々の利害を本位にする外になく、然らざる者の利害は前者の利害のために犠牲に供せらるべきものとする。勢ひ、政治そのものも、これ等現實に生産に從事しつゝある者を主とし、現在の如く、生産に直接從事するところなき、株主、公社債主、銀行預金者、不勞地主等を主とするが如き政治を改廢すべきだと主張する。之れ、宛かも、明治維新に於て、農商工等の生産階級の利益のために、武士階級の利害を犠牲にし、從來武士本位の政治なりしものを、農商工本位に變革したと同じ意味である。

しかし乍ら、斯くの如き目的を達するためには、自ら、それに適應した制度を必要とする、今日の如き資本家本位の制度に於ては、到底その實現の出來ざること、宛かも武士本位の封建制度の下に於て、農工商の利害を第一にする政治、經濟の實現不可能なると同一である。蓋し、折角、形式だけは生産者本位の制度にしたところで、今日の如く、資本家階級が政治經濟の實權を握つてゐたのでは、結局、資本家は自分の利益のある部分のみを働かして、都合の悪い點は之を窒息せしめることになるからである。例へば、等しく公營でありながら、資本家的支配の下に於ては、結局それは單なる資本家保護に終ること、現に、消費、貯蓄、[illegible]ある。

さり乍ら、此の種打倒資本主義運動の大勢を見るに、若しも、無産階級運動の現勢力を標準にせんか、例へば之を勞働運動から云ふも、之を農民運動から云ふも、更に之を無産政黨運動から見るも、その力は未だ大勢を左右する程のものでは決してない。否、或る觀點から云へば、寧ろ、その勢力は一時に比し凋落しつゝありとすら云ふことが出來る。就中、極左的運動の凋落傾向は世界的に著しいことである。

だが、斯くの如き標準に由つて、我が資本主義の歸趨を測定せんとするが如きは、要するに、型式的、表面的見方であつて、その底を流れてゐる水勢を洞察する所以では決してない。如何測定の標準は他に在る。即ち、國民の大多數が、果して、如何なる性質の政策を要求し、之に共鳴しつゝありやである。若しも、此の觀點より我が資本主義現在の大勢とその歸趨とを測定せんか、それは、明かに、資本主義に對する積極的否定を意味する社會主義經濟原則の採用（意識的なると無意識的たるとの差はあるが）を要求し、之に共鳴しつゝあるのである。

例へば、已に成文法律化せるものについて見るも、大正十年の借地借家法、同十一年の破産和議法の如きは、その立法精神

に於て、單なる所有權乃至債權者よりも、それの現實の利用者の權利をヨリ多く尊重せんとする革命的意味を包含してゐる。又、現に問題となりつゝある小作法、レシーバー制度等の如きも亦、同樣の精神の下にあるものである。更に、金融の統制について見るも、從來は單に銀行家乃至資本家の營利心の發動にそれを依賴し來つたのであるが、最近に於ては、之を不安として、或は日本銀行を公的機關化し、之にその統制權を與えんとする要求あり、或は、資金の使途をその國に必要な產業それ自身の發達に限つて、特權融通法を設けんことを要求するなど、資本家的調節を否定する政策が愈々强調せられつゝある。又、米價の調節、肥料の管理等に於ても、從來の如き資本主義的調節を以て滿足せず、之を國家機關を以て統制せんとする要求は漸く大となりつゝあり、その他、電力に對し、交通機關に對し、同じ意味と目的とを含める要求は愈々大を加へつゝある。

更に又、新資源の開發に必要なる理化學の研究に對しても、精密工業の發達——鐵資源其他に不足の我國は原料を多く要せず、主として人力に賴ることを必要とする精密工業の發達を可とす——に對しても、農村經濟打開策としての「副業」の發達についても、それの實現は、之を資本家的營利行爲に委しては到底不可能にて、國家活動に由る計畫的施設を愈々多く必要としつゝある。

以上、何れも、資本主義的機能の代りに、社會主義的原則を代置せんとする要求である。たゞ問題は、それ等の政策が、資本主義の彌縫といふ立場から欺瞞的に利用せられつゝありや、將又、資本主義打倒の一歩として採用せられつゝありやである。が、今日の場合、それは尙ほ前者に基く部分が大であると見て大過ないであらう。

さり乍ら、他面に於て、無產階級運動は、異常の彈壓の下にありながら、その底流はいよ〳〵深く大衆の心を摑み、大衆の信賴を獲得しつゝある。而して、此の力の漸增すると共に、右の如く、今日に於ては資本主義彌縫のために利用せられつゝある社會主義原則は、いよ〳〵急激なる勢を以て、資本主義の一角一角を崩す打倒資本主義の勢力として働きつゝあるのである。換言せば、いま、我が資本主義は、その表面の比較的穩かなるに反し、その底流は、急奔せる勢ひを以て、打倒資本主義の大流に向つて流れつゝあるわけだ。問題は、此の底流が、何日如何なる形式を取つて表面に現はれるかである。

大資本主義は何處へ往く

下川將美

一

グスタフ・カッセル教授が一九二五年にロンドン大學の招聘に應じて最近の經濟學に就て講義をした時、第一講に於て經濟理論の目的並に方法を說き、「經濟問題を取扱かふ上に、社會經濟と個人經濟との間には根本的の相違が横はつてゐる。個人經濟の觀念から見れば全く正しいことであつても、これを社會經濟に適用する時には絕對的に誤りとなるやうな問題などに就ては特にこの相違が著しいのである。たとへば個人經濟から云へば要するに金さへ儲かれば利益だといふに間違ひはないが、社會經濟から見れば決してさうではない。個人經濟の立場から見れば易々と出來うべきことも、これを全社會の經濟といふ範圍に押ひろめて行くと實行の不可能なものもまた少くはないのである。たとへば資本の消費の如き、個人の資本家から云へば何でもない簡單なことであらう。しかし社會として見れば特殊な條件なしには易々となしうべきことではない」といふことを述べてゐた。この見方はいろ〳〵に蔓延してゆくことが出來る。經濟問題を單に資本階級の利益だけを主眼とした資本主義の見地から見たものと人類一般の幸福と云ふ見地から見た場合とでは無論大きな相違點がそこに現はれてくる。歐米と云ふ大地だけを目安にした經濟と全世界を目安にしたものとの間にもまた大きな差異が現はれて來るのは當然である。過去の經濟學はすべて行詰つた。經濟の理論も、實際も新らしく立直されねばならない時代に入つてきてゐると云ふ聲が頻りに聞えるやうになつて來てゐるのは、要するにこの矛盾を立直せと云ふ言葉に他ならないであらう。今日までの經濟はいろ〳〵の立場から見て要するに部分的であり、一局部の分析解剖から脫し得なかつたものであることを悟ると共に、階級的にも地理的にも、すべて

の方面に本當に廣い意味の人間の幸福を希求する念が生じてきたからのことであらう。私は今日の世界の經濟の大きな惱みの姿、大きな苦悶の跡を、この意味から非常に興味深く觀察しておるものである。同時にわが國の經濟が今日では混沌としてどこに歸着しやうとするのであるかわかりかねるやうな狀態を以て流れ進んで行つてはおるが、結局は矢張り大きな世界經濟の浪に乘つて、同じ潮のさしひきに左右される運命をもつ他はないと考へるが故に、この點に於て根本的の觀察をして見たいと考へるのである。大資本主義は何處へ往くといふ題を選んだのは、今日の世界的の經濟政策が、一言にして云へば資本の大集合、企業の集中合同によつて表現するのが一番近道だと思つたからのことである。

二

今更らしく戰時戰後の世界的の經濟界の風潮をこゝに書き記す迄もないであらうが、近年に於て最も産業界に人氣があり、且つ實際の財界を支配しておるものは産業合理化と大量生産との護符である。本家とも云ふべきアメリカの事はしばらく置くとしても、獨逸、英國をはじめとしてこゝ二三年來の歐洲産業界は全く合理化運動に風靡されておるものと云つても過言ではないであらう。商品の單純化、標準化、機械の利用の極致、生産手段に、經營に、勞働に、どこまでも徹底を期した科學的能率上進の手段、あらゆる方面の無駄の排除、高い勞銀と安い生産費との併立をねらつた合理化運動はたしかに産業界に一つの新らしい時代を劃し出すやうになつて來たのは事實である。これを産業經營の方面から云へば驚くべきカーテル運動の促進である。ドイツがこゝ僅か二三年のうちに英國人をして、これ企業界のミラクルなりと歎ぜしめたまでの驚くべき産業恢復をなしとげ得たのは、何と云つても所謂産業合理化の賜であることは何人も否むことの出來ない事實である。このドイツの成功は颶風の如くに歐洲の全土に模倣熱を呼び起した。ゼネヴアの國際經濟會議に於て背拔きの形となつた國際カーテル問題が、その後著しく事實の上に進歩して、今日では歐洲だけで百餘の國際カーテル運動が計劃され、その何れにもドイツが參加を見ておることなどは、いかに所謂産業合理化が一世を風靡した思潮となるにいたつたかの良き一例であらうと考へる。

私はこの上産業の合理化そのものについて多くを語らうとは思はない。たゞ一言したいのは米國の合理化と歐洲のそれとの間には自ら違つたものゝ存することである。何が違ひであるかと云へば大量生産といふ立場から見ての相違である。云ふまで

もないことではあるまい。今日の世界の經濟的變動は一口にして云へば戰後の反動に對する對策として生れ來つたものに他ならない。戰時中の軍需の需要旺盛に伴ふ產業界の活動は世界の各國をして極度にまでその生產力を激增せしめた。企業家の利潤は新らしい標準を造り出すまでに增加した。勞働者の勞銀も亦新記錄を以て上騰した。企業は自然の成行きとして擴大され、資本は增大し、工場の機械力は激增した。しかし乍ら戰爭が終つた時に當然襲來した反動期に面して、際限なく膨脹した產業界は忽ちにして行詰らざるを得なくなつた。此行詰りに面した時にアメリカと歐洲とでは非常にその立場に相違を來しておることに氣付かざるを得なかつた。申すまでもなくアメリカは戰爭によつて莫大なる國富を增し、世界最大の債權國として富を一手に握つた國と化してしまつた。このアメリカにして繁榮をいつまでも續けやうとすれば消極策はとれない。アメリカは敢然としてどこまでも積極的に出た。かうして成功したものが所謂大量生產の徹底的實現であつて、この方面に事業の合理化は殆んど間然する所なく行はれたと云つてよいのである。あらゆる無駄は省かれ、あらゆる科學的能率增進は採用され、大量生產は繁榮と同意味に用ひらるゝやうにまでなつたのである。

しかし乍ら歐洲方面はアメリカとは自らその立場に根本的の差がおきた。アメリカにおいては[illegible]前の結果に逆に積極的となり、[illegible]によつては[illegible]なる發展をもたらすに至つた。從つて歐洲の產業合理化は決してアメリカのそれのやうに、まつしぐらに大量生產に突進するものではなくして、寧ろこれに反した生產制限のための企業聯合が少くはないのである。もとより歐洲の國際カーテルなどは大部分はアメリカの壓迫に對する聯合組織とも見るべきものであつて、積極的の對抗手段も當然採つてはおるのであるが、ともかくも歐洲の合理化が決してまつしぐらに大量生產ばかりを目的にした生產費の引下によつて、安い市價のみに進んだものではないことを記憶しなければならない。云ひかへれば戰後の產業界の反動期に際して當然とらるべき二つの手段即ち、生產制限か、大量生產の徹底かの兩道が、アメリカと歐洲とに於て、同じく產業合理化の手段によつて、目的は異つても同じ道を通つて進んで行つたことに注意せねばならぬのである。

日本は然らばどこに向つて進んだか。近年わが國に於ても產業合理化は矢張り企業界の一つの誇りのやうに流行し出してきておることは事實である。その中にはアメリカに倣つて大量生產に押すゝんだものもある。漫然と利潤の增加を勞働者の壓迫

によつて購はんとしたものも少くはない。しかし事實に於て現はれたる結果から見れば、企業者の聯合によつて生産制限を計つたものが最も多いであらう。現實の問題から見ても所謂海外の合理化運動によつて目に見えた利益を得たものは矢張り生産制限の餘得を得たるものである。

一例をあげれば恐慌のあとを受けた昭和三年は不景氣をもつて終始した。産業界は何れも不振を續けたものが多い。その中にあつて例外的に活況を呈したのは鐵鋼業であつた。總括して市價は一割以上の騰貴となつて製鐵會社は官民をとはず何れも久しぶりの春に甦つたやうな氣色を見せた。何故にこの大きな變化が來たかと云へばいろ／＼の原因を擧げることも出來やうけれども、歐洲の國際カーテルによる生産制限の効果に作つた市價上騰、並に鐵鋼材の販賣業者組合の價格協定が關東のみならず關西に於ても協同的に行はれるやうになつたことが大なる原因であることは爭はれないであらう。言ひかへれば、國際的の市價維持乃至上騰のカーテル作用の恩惠に他ならないのである。

等しく産業の合理化と云つても今日の經濟組織の下に行はれてゐる合理化の內容を檢するとかやうに相異る多くの分子をもつてゐる。私はこれらについて一々批判を下してゆくの餘裕をもたぬので、急いで先きに進んで行くことにする。最後にこれらを總括して産業界は然らば大量生産を以て進むべきであるか、生産制限を以て調節してゆくべきかを考へたい。くだ／＼しい說明を一切拔きにして結末だけを云へば私は矢張り生産制限は一時のことであつて大勢としての産業界は結局大量生産を以て押流されてゆくのが自然の成行きであると考へざるを得ない。云ひかへれば大量生産は企業界の進步に伴ふ自然の現象である。機械の利用は今後もいよ／＼發達してゆくことが明白である以上は、その發達に伴つて生産はいよ／＼大量ならざるを得ないからである。この自然の大勢に對して、人爲的の調節策は結局は力弱きものでなくてはならない。利潤を目的とする企業家は、調節された價格を見れば直ちに生産の增加を計る。生産增加のためには機械の利用を多くし、このための設備に多大の固定資本を投ずることになる。かくして調節は結局一時的であつて、大勢としては止むにやまれぬ勢を以て大量生産の一路を流れてゆく他はないからである。かやうに考へて來ると、矢張り經濟の自然の大勢である大資本主義の傾向と共に、將來の産業界を考察するためにはアメリカの大資本主義並に大量生産について一層徹底した考察を下す方が大切であることがわかるのである。換言すればアメリカの今日の産業界は、やがてはすべ

[illegible]したもの[illegible]からである。

三

アメリカの今日の繁榮が大量生産のたまものであることについては何人も異議を挾むの餘地はないであらう。フォードをはじめアメリカの諸産業がいかに人智の限りをつくして生産上の無駄を排除し、徹底した産業合理化の効をおさめ得たかは正に一つの驚異と稱しても差支へないものであらう。勞銀のレベルはそのために引下げられずにすんだ。勞働時間も短縮され、その他の勞働條件も向上したまゝに保たれた。生産費は勞銀の上騰と矛盾することとなしにます〱引上げられて行つた。浪費の影は産業界から抹殺せられたものゝやうにも見えたのであつた。これはひとり産業界だけからのみではなく、人類の幸福なる生活といふ點から見ても慶賀すべきものであつたことは疑ふべくもない。けれども今日ではその大量生産が正に行詰つて暗い影が前途にさして來るやうになつてきてゐる。何故かと云へば生産と販賣との矛盾が年と共に明白になつてきたからである。

アメリカの企業家が大量生産を唯一の旗印としてまつしぐらにでき上つた當時にあつては、[illegible]、くらい限りをつくして能率をあげ、消費者に對し從來にない[illegible]ものを供給さへしたならば、生産はいかに大量であつてもどうにでも消費されるものと考へておつたやうである。最初は正にその通りであつたに違ひない。企業家は云はゞ消費階級をあまく見てゐられたのであつた。しかし乍ら大量生産そのものが決して大量消費を伴ふものでないことをはつきりと自覺せねばならぬ當然の時が來た。購買力の過少がそれである。

大量生産萬能の夢は早くも足もとから崩壞し出した。しかもアメリカのやうな極度にまで大量生産の基礎を築き上げてしまつた産業界にあつては、今更購買がこれに伴はないからとて大量生産主義を放棄することは出來ない。利潤の多からんことのみを願ふ企業家としては生産力を思ひ切つて縮少することも出來ることならば敢然としてこれを行ふに躊躇する筈はないのではあるが、すでに大量生産の目標のもとに機械、設備その他に莫大なる資金を投じ、大量生産をなしてのみ初めて引合ふべき生産費と諸經費の基礎を造り上げてしまつた今日となつては、いかに購買力の過少に惱まされ出したからとて、今更大量生産そのものを放棄することは絶對に不可能のことゝなつてしまつておるのである。自ら作り出した嚴重なる繩に身をしばら

れて、進歩すればする程緊縛の度の強くなるやうな姿になつてゐるのが大量生産の現實なのである。しかもこれを解きすてる道はない。苦しみながらもいや應なしの力でます／＼大量生産の國へと馬をすゝめて行かねばならなくなつてゐるのがアメリカの今日なのである。ひとりアメリカだけではなく資本主義經濟の下に行はるゝ産業の進歩はいづれも最後には同じ道を辿るであらうが、自縄自縛の一見不思議にして、しかも當然なる成行きがそこに嚴として存するのである。

打開策として大量生産は當然大量販賣への苦心に轉換されて行つた。月賦年賦の販賣制度の如き、チエーン・ストアの如き何れもその結果すばらしい發達を見せた。かやうな新大量販賣制度の發達と同時に、生産家は消費者の購買力をそゝり立てるためにあらゆる苦心をもつて商品の購買慾刺戟に努めねばならぬやうになつてきた。目新らしい流行の創造によつて新奇を逐ふ人心の機微を囚へやうと腐心されてゐるのもその一つである。しかしてこれらのすべてを通じて販賣費の激増が現はれた。廣告費と宣傳費のために使はれる金がすばらしいものとなつてきた。さうして最後の結論は生産と販賣との矛盾から生れる阿呆のやうな無利潤といふ妙なものが出てくる傾向を見せるやうになつて來ておるのである。言ひかへれば大量生産と産業合理化のために現實の生産費は極度にまで引下げられ得たけれども、販賣方面の費用は逆に激増して、これを双殺すれば企業家の利潤は減退すると云ふ不幸な結果になつてきたのである。生産方面の浪費は一掃されるまでに進みながら、販賣方面の浪費はいよ／＼激増してゆかねば立行かぬと言ふ矛盾こそ、今日のアメリカの姿なのである、所謂、プローフヒツトレス、プロスペリチーこそ最後の姿なのである。商賣は非常に盛んでありながら利潤は生産家に與へられない。アメリカの繁榮のうらにはかやうな現象がある。かくなつては繁榮必しも羨むには足らぬと云はねばならない。喜劇の面をかぶつた悲劇こそアメリカの繁榮である。

私は産業の最も進んだ國の標本としてアメリカの矛盾がそのまゝにわが國に現はれておるのは近年の圓本であると思ふ。この意味に於て私は圓本經濟なるものに非常なる興味をもつ。圓本は言ふまでもなく大量生産によつて生産費を思ひ切つた所まで切下げてゆく新らしい産業運動のよき縮圖である。最初に圓本が現はれた時、消費階級は此上もない恩惠をうけたやうな觀があつて、大量に安くさへ賣ればその消費にはきりがないやうにさへ見えた。しかも企業家としてはかやうな安いものを賣りながらも十二分の利潤を獲ち得たるものが多かつたであら

う。しかし今日ではさうであるか。アメリカの需要の無限をそのまゝに見るやうに大量生産だけでは何の大量販賣をも作に[illegible]ないことを如實に現はし出した。さうしてどの圓本も廣告費、宣傳費のために莫大なる費用を止むなくされてゐる。生産費は大量生産によつて切下げられたであらう。しかし販賣のための費用は常規を逸したまでに激増して結局出版者から云へば、利益なき大繁昌の結果に終らないものがどれ程あるであらう。私は圓本出版者の經濟の内容についても多少は知つてゐるつもりである。そしてその内容が、月と共に年と共に、プローフェツトレス、プロスペリチーの一路に進んでゆきつゝあることを疑ひ得ないものである。

圓本は何處へ往く。これやがて今日の世界的の大資本主義は何處へ往くの一つの解答となるものでなければならない。

四

産業界が機械の利用の進むに從ひ、自然の大勢を以て大量生産の一路を辿るものであり、資本は今後ますく集中されてゆくのが當然の道であるとするならば、この前提の下に生産と消費との矛盾をいかに解決してゆくべきものであらうか。

資本主義經濟は消費をはなれても猶繁榮をつゞけてゆくべきのであると云ふ者もある。生産財の需要が無限に續くかぎり消費のみを以て存在する生産の[illegible]と云ふのである。しかし乍ら生産は消費を離れて存在すべきものでないことは明白であつて、大量生産は[illegible]消費が解決されねば存在し得ないことになる。しかるに今日のやうに大量生産と大量販賣とがうちに於て相容れない矛盾を來し、企業家の利潤減少が最後の結論となるやうでは、産業は少くも資本主義經濟の原則のもとには行詰りとなるの他はない。しかもこの矛盾した二つを切放すことは絶對に不可能である以上は今後の方策としては生産と販賣との資本主義的調和が計劃されるより他に道はない。今日まで産業の合理化は主として生産方面の科學的進歩にのみその力を集中してきた。しかし乍ら生産界の進歩だけでは企業家の利潤は増加するものではなく、寧ろこれに逆行する傾向にさへ循ることが明らかとなつた以上は今日は販賣方面の科學的進歩が一層進んでゆくであらう。販賣合理化は生産の合理化と相作つて、双方が企業家の利潤を減退せしめない程度に協調の道を見出さうとするであらう。事實問題として見れば、今日、生産方面を主としたるカーテル運動は恐らくは販賣方面のカーテルに一層の進歩を見せてゆくであらう。資本集中はすでに、世界經濟界の大勢である。この大勢が販賣によつて結合の程度を強めてゆく時に、カーテルは今日のカーテルとは自ら別種のものとなつてゆかざるを得ないであ

らう。同時に生産方面のカーテルも今日こそホリゾンタルのものが多く、ヴアーチアルなものはスチンネスの破綻を一つの轉換としてドイツに於てすら振つてはゐない。しかし將來のことを思へば、カーテルは運動は恐らくは再びヴアーチカルなものへの執心を強くする時が來るであらうことは想像するに難くはない。

生産と販賣の組織そのものについて、當然何等かの新しい聯合、合同の氣運の進みゆくと共に、この新らしい組織を以て産業界は新販路の開拓といふ見地から、比較的進歩の遲い國々への多數の消費階級に新たに購買慾刺激の道を見出さうとすることも考へられる。殖民政策は改めて産業販賣の打開として一つの重要なる題目となる日も來るであらう。未開地は大量生産國の新らしい競爭地ともなりゆくであらう。大量生産は元來民衆を對手のものである。過去に於る資本主義企業は利潤の多きがためには金持階級の消費するものを生産することにのみ着目した傾もある。しかし産業の自然の進歩はいやでも大量生産の一路に進まざるを得ないことにした。大量に生産されるものは多數の民衆を對手にせざるを得ない。すでに國内市場に於ける大衆の購買を行つまらせる所まで押進めた以上は、國外に於る大衆に新たなる販路を見出さうとするのは自然の順序であるからである。

五

現在行つまつて來て居る大量生産がいかなる展開策をとるかは以上の他にまだいろ／＼に想像もされやう。しかし是等は大資本主義は何處へ往うかの窮極の解答にはならないであらう。すべてをつきつめて最後に猶依然として殘される問題は利潤を重ねて大きくなつてゆく企業家の生産力と、いつも少い分前をとつてゐる民衆の購買力減少との、いつまでも平行し難い食ひ違ひである。生産と消費との絶對的の不並行だけが解決し難いものとして殘されてゆくであらう。この解決は單に生産や販賣の組織や制度の轉換だけでは解決することを得ない。もう少し深い徹底的な考察が必要である。私は本稿の最初に、要するに局部的の經濟はすでに時代に遲れたるものであり、今後の經濟は廣く人類といふ立場から大きな見地に立つ經濟でなければならないと書いた。かうした新らしい轉換が經濟の上に徹底し出した時に、大資本主義は當然新たなる進路を見出して轉換せざるを得ないであらう。大資本主義が單に利潤の多からんことだけによつて生くることが根本的の矛盾であることを知つて、絶對的購買力過少の事實を改める方面に目を見開いた時に、新たなる産業の世界は、人類の無限の慾望がそのまゝ無限の消費となつて現はれて來る日もあるであらう。

PONTIAC

廉價の高級車
ポンテアク號

誰れでも高級車を持ちたいに違ひありませんが夫れには買入値段と運轉諸經費を考慮に入れる必要があります。ポンテアク號は高級車の有する凡ての品質特徵を具へてゐる六氣筒車であります。只だ其の輪距が稍や短かく車體も幾分小さく出來てゐる爲に非常に格安値段で買入れることが出來、且つ運轉費用が僅かで濟みます。本車は惡路にも運轉し易く、雜沓の巷にも操縱し易く、而して何よりも大切な事は、買入値段の安いことであります。ポンテアク號發賣以來夥しい賣行を示し、到るところ「成功の六氣筒車」として知られてゐるのは決して偶然ではありません。

是非御試乘の上御買入を願ひます。

幌型 定價金參千貳百[illegible]拾五圓（大阪渡）

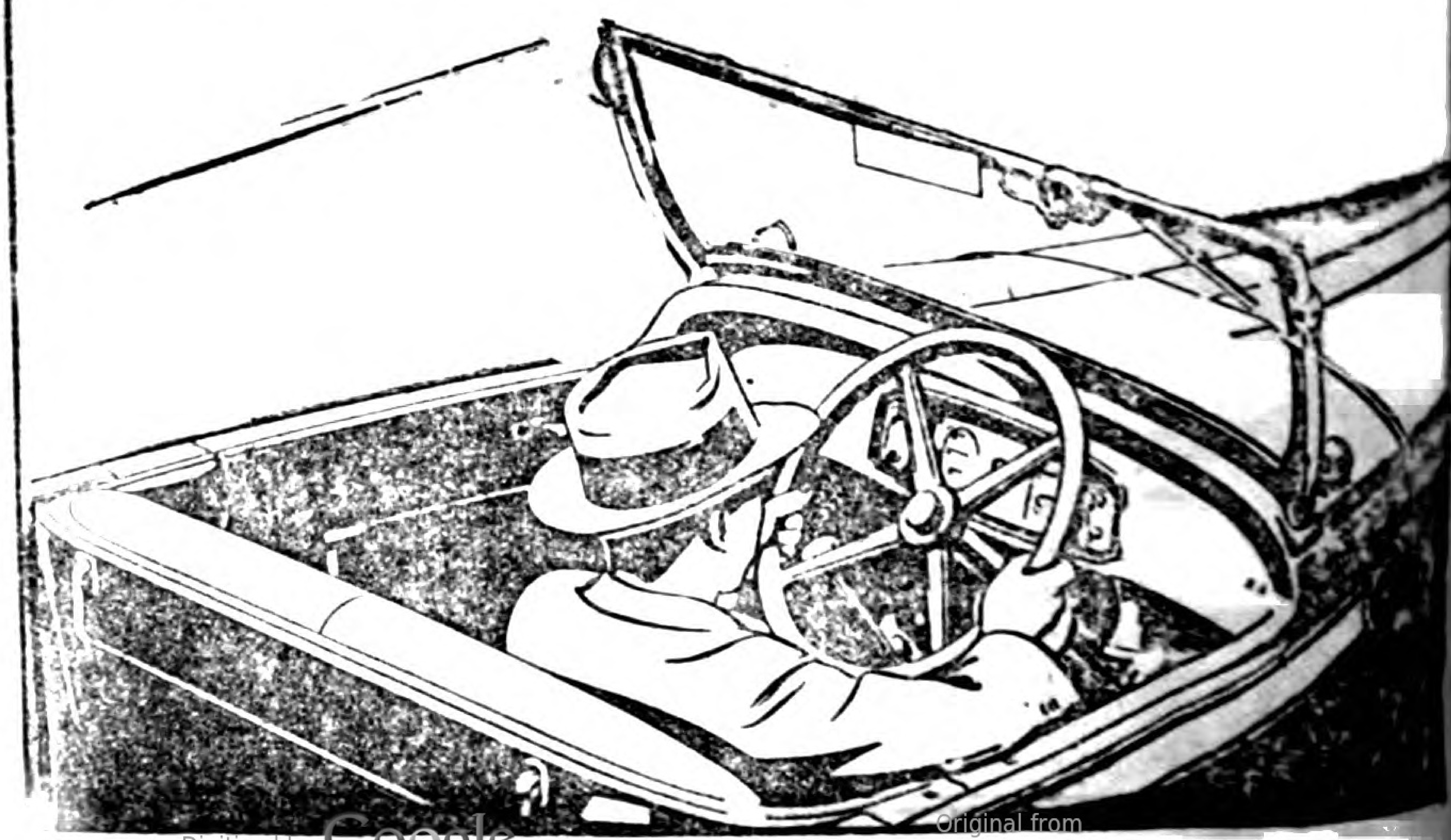
セダン型 定價金參千[illegible]百貳拾五圓（同渡）

ポンテアク號はゼネラル・モーターズ金融會社による月賦販賣の便あり
型錄は販賣店にて進呈・純正部分品は必ず特約販賣店でお買求め下さい



日本ゼネラル・モーターズ株式會社

ポンテアク號はゼネラル・モーターズの製品なり



河北新報

神効不思議な 湊式吸癒療法

『科學畫報』『主婦之友』推奬

最新發見の科學的療法

鼻

湊式吸癒療法は切開手術をせずして治る最も進歩した最新療法であります。痛い目を忍び、澤山な金を使ひ、長い間入院してよく治らない蓄膿症が吸入などで治るものかと思ふ人もあるか知れませんが、湊式吸癒療法では、藥が極小さな霧煙となつて鼻の奥の小さな穴を通して膿のたまる粘膜に作用するのであるから、如何なる難症でも見事に根治します。

肺

肺病の人の症狀の一である咳には、誰でも困るところで、咳のために喀血を誘發することもあれば、咽喉を痛めて喉頭結核ともなります。湊式吸癒療法は今咳きこんで今試み、即座に咳を鎭めることができるばかりでなく病者自らの黴菌を利用して一種自家ワクチン的のものとなし、自己免疫の原理によつて、肺病の本体を根治せしめんとするものでその効驗の著しいことは驚くばかりです。喘息や百日咳にも又特効があります。

腦

頭痛持ちと申せば、死ぬまでつゞく持病だと大底の人は諦めてゐますがこの吸癒療法を試むれば余程のひどいのでも驚く程速かに全治します。これは吸癒療法は腦全体の血液循環を旺盛にし、腦の內部に滯つてゐる疲勞廢物を除去する活力を送り込むからであります。そればかりでなく腦貧血や腦充血は勿論、神經衰弱や不眠症等も見事に根治します。

科學畫報・主婦之友 實驗證明附

說明書

雜誌名記入ハガキ申込次第進呈

定價

湊式吸癒器一揃及吸癒液(六十日分)

定價金四圓五十錢也

荷造及郵稅送料

內地 廿五錢

滿鮮 五十五錢

東京市麴町上二番町七番地

湊式吸癒液發賣元 **明光社**

振替東京六〇七九六

正宗白鳥論

近松秋江

今日(十二月三日)の新聞に、一日、ホノルル發電として、正宗白鳥氏夫妻が恙なくホノルルに着し、元氣で上陸見物したとある。

先月廿三日午後三時横濱埠頭を解纜して、靜かに動き出したコレア丸の巨體が、今尚ほイメージに殘つてゐるやうな思ひをして、「正宗も昨夜は初めて太平洋の上に一夜を明かしたな、どうしてゐるか。…………今日で、もう三晩めの海の上だ、今日でもう五晩めになる、…………今日はもう八日めだな。」などゝ、時々一人で思ひ起してゐた間に、日は瞬く間に過ぎて、もうハワイに寄港したのだ。あと五六日で、風帆恙なく、愈々桑港に安着することであらう。

私が横濱埠頭に洋行の人を見送つたのは、今回の正宗で、わづかに三人である。初は、明治三十五年の二月、故島村抱月氏の渡歐を見送つた時、次は、明治三十七年の五月自分の兄の渡米を見送つた時。——こゝで、その兄のことをいふのは、脫線であるが、その時くらゐ寂しく佗しい見送りをしたことはなかつた。勿論、無名の人間が三等船客となつて米國に出稼ぎに行くのであるから、景氣の好い筈もないが、見送りは自分が一人きり。兄も暗然として、離愁が胸に溢るゝ風情であつた。それでも何年かの後無事で歸國すれば、その時の事は忘れてしまふのだが、彼は遂に在米四年めに、突然腦溢血で、三十八歳を一期として夭死してしまつたのだ。私は強ち、一を以て凡てを律するつもりはないが、しかし、その一事を以て考へても人生は、樂天派の人間が考へてゐるほど、そんなに、幸福で愉快なことの連續とは考へられないのである。——

正宗白鳥氏も、その點に於ては、隨分強い確信を以て、人生

は要するに不幸なるものであるといふ哲學を持つてゐる。——
——そんなことは後でいふとして、——これから、私は少しく文學者としての正宗白鳥について考へてみたい。ところで一體、正宗といふ人は、狭い意味でいふ作家であらうか、どうかといふことである。なるほど今日のやうに、原稿料が騰貴してゐる時代になつては、一と口に、小説の作家で押し通し、又、通された方が、先づ、何はさておいても物質的には好都合であるにちがひない。今日の流行兒の通俗小説の大家になると、基礎の固い大會社の重役にも匹敵するくらゐの收入が得られるのであるから、文筆に依つて生活してゐる人間を、一も二もなく作家として推奬することは、或はその人に敬意を表する所以であり、又、推された人自身も滿足するか知らぬが、眞實日本の現在、作家として西洋の作家に比して遜色のない者が果して幾人あるであらうか、一人でもあるであらうか。なるほど收入は相當にあつて、——それも歐米の大作家ほどの收入はない——物質的生活は、これを二十年前三十年前の小説家の慘めな生活に比べて隔世の感があるが、しかし、小説作家として推すは、一應その人を敬稱するごとく思はれて、その實あんまり難有いことではないのであるまいか。正宗白鳥も小説家といはれて一生を通した方が、何かに附けて都合はよいであらうが、私は、彼を、狭い意味の作家として呼びたくないやうな心持ちがするのである。これは、少くとも私一個の見解に從へば、決して、一朝一夕の觀察ではないのである。勿論、小説家が悉く、里見弴氏とか長田幹彦氏のやうな艶物や濡れごとを書かなければならぬ道理もないし、又三上於菟吉氏や中村武羅夫氏などの如く半歳も一年も新聞の續きものを書きつゞけたり、一年も三年も婦人雜誌に長篇を書きつゞけなければならぬ理由もない。わづかな短篇小説にも、意味深長な人生の縮圖を暗示することも出來るのである。

が、私の正直な、遠慮のない告白を語ると、正宗君が、今から二十一二年前「趣味」といふ雜誌に、殆ど處女作ともいふべき「塵埃」といふ短篇小説を書いて、その、一種の深みのある、生活上の感慨を洩らした時、それから、今から十八年ばかり前、明治四十三年の九月の「中央公論」だつたかに「微光」といふ倫落の女の生活を書いて、相當シャープな觀察と、それを藝術的に表現した技巧の、可なり光彩を放つてゐたこと、それ等二三の場合を他にして、正宗白鳥は、小説家として及び難いなとか、又は「あゝ巧いな、こゝのところを、うまく書いてゐるな。なるほど、かういふ樣にやるといゝのだな。」とかいつた具合に、例へば、私が、德田秋聲氏のある物に感歎の聲を獨

り殺するとか、永井荷風氏の物に感激するとか、又は長田幹彦氏のある物に舌鼓みを打つとかいつたやうなことは、正宗君が處女作發表以來二十有餘年の長い間の文藝家生活をつゞけて來てゐるのを、始終注意してゐるにもかゝはらず、そんな場合に出會したことは殆どない。

私が秋聲幹彦兩君に舌つゞみを打つといへば、あるひは、自己の好む所におもねるといふ嫌ひがあるかも知れぬが、私は、ひとり二氏に舌皷を打つばかりではない、たとへば、谷崎潤一郎君の物を讀んでも、菊池寛氏の物でも、又、三上於菟吉の物でも、いづれの作も恐く、さうであるといふのではないが、時時「うまいなあ！……とても、かうは書けない。……やつぱり私には書けないのだ。」と、及び難い感を痛切に抱くことがある。ところが白鳥の作を讀んで、そんな感じのしたことは、前にいつたとほりに無い。比較的最近の戲曲で「人生の幸福」などを讀んでも、又演劇で觀ても、その當時、試演劇團の（大衆演劇に非ず）若い觀衆の間に好評のあつたほど私は興味を感じなかつた。たゞ「人生の幸福」を「太陽」誌上（？）で初めて讀んだ時、特に戲曲としてといふ意味に限らず、一つの藝術品として、多くの場合技巧的表現法の貧少な正宗氏の物としては、ちよつと珍らしく、會話など落着いて、客觀的であると思つたら。しかし、これも設定の文だけのことで、か……後になると、妙な思は世故の小怜悧さであつて、あの深刻な人生の謎を暗示してゐるなどと思ふのは、畢竟、若い男の買ひ被りに過ぎないので、作者の手腕が行き屆かないといふのか、書き足りないといふのか、要するに大した物とも思はれない。

又、他の一例についていへば、「光秀と紹巴」なども、私は一向感服する所以を知らない。その當時に於て、私はそのことをいつたが、他人の作を、他人が賞讃してゐるのを、何も此方が余計に出娑婆つて「イヤ惡い〳〵」と宣傳する必要もないので默つてゐた。劇界の玄人であつた小山内薫氏などが、どこを見込んであれを激賞したのか、私は了解に苦んだ次第であつた。その時分中村吉藏氏の門下の人達でやつてゐる「演劇研究」他一つの、何とかいふ演劇雜誌に、ぜひにと依頼されて、止むなく演劇雜感を書いた場合、二つ處で「光秀と紹巴」を貶したものだから、正宗が「中央公論」の文藝時評欄で、私の説を反駁してゐたが、私は、その時、熱海から、輕井澤に避暑をやつて二ケ處にも、惡評を書いたが、そんなに執固く考へてゐる譯でもないといつて置いた。藝術論に公私を混同するやうだが、最も懇意の間柄で、雜誌の上で、さう議論を戰はす必要もないと思つたからだ。しかし、白鳥氏と私とは、見方、考へ方にも各

相異があるから、他人の自由な見解を、強いて、自己流に捷め直さうとは、決して思はないが、あの紹巴について言つても、私がもし、「光秀と紹巴」といふ課題に應じて書くとしたら、紹巴を、あゝいふ風には取扱はない。愛宕山の連歌の場は、あれでよいとして、下の鳥羽の陣營の場では、紹巴を、もつと違つたものにする。藝術の上では、歴史の記錄は、どう變更しても一向差支へないにしても、古來相當信用を置かれてゐる記錄に、紹巴は膂力衆に優れて膽勇ありといふやうな事實もあるし、又、本能寺の變のあつた當夜、勝ちに乘じた光秀の軍がつづいて二條城に篭してゐた織田信忠を包圍したところへ、拂曉恰も紹巴が、何處かの連歌か何かの會から歸り合はして、その夜の騷ぎに、二條城に御座つた陽光院にはお乘物に困らせられたところを、丁度紹巴が輪輿に乘つて、二條城外を通り合はしたので、自分は輿を下つて、急場に陽光院をお乘せ申して、宮家は無事に御所に還御あらせられた。それに依つて、紹巴は、法橋かの位を授けられたが、彼は、上の意を見て、當然のことをしたまでゝあるから、殊に賞に與かる理由はないといつて御辭退申上げたといふ記錄が「野史」にある。

藝術くらゐ自由なものはないのだから、紹巴を、どんなに取扱はうとも、凡て勝手であるが、既に歴史劇といふ以上は、そこに、自から、多少の史實を參酌するのが當然である。で、もし私が同じ課題で作劇をやらされたとしたら、私は、正宗氏のやつたやうに紹巴を用ゐないで、鳥羽の陣營で、もし紹巴が光秀へお眼通りしたとすれば、愛宕山の深夜のこともあるから、「殿には、たうどう思召立ちになりましたなあ。しかし、まあ首尾よく御勝利で、京中の上下の者共は、地子錢を省かれまして、御仁政に恐悦いたして居ります。實はあの騷ぎの晩、私も丁度二條城の傍を通り合はしましてかくかくの次第でございました。」とか、何とか、たとひ一面、當時の武將達の幇間である連歌師茶坊主の比ひにしても、おべつかをいひながらも、もつと豪雄で磊落な人物に書いた方が史實を活かすことになり、且つ客觀的だと思ふのだ。しかし、私は、それを、人に强ゆるのではない。正宗君にも決して强いはせぬ。

けれども、正宗君の小說や戲曲にはひとり、この紹巴の取扱ひばかりでなく、現代の人物を取扱つても、あまりに自身の抽象的觀念ーー或は人生哲學の傀儡に矯め過ぎて居りはせぬかと思ふのである。そして、これは、今更私一人の一家言でなくして、殆ど正宗氏の小說戲曲に對する世間の定評の如くである。然らば、正宗白鳥氏は多年小說家で通用してゐながら、肝腎のその小說が、あんまり感服されないとすれば、何の取り柄も

ないではないかと反問されたとするに。その場合には[illegible]答に苦しまないのである。正宗氏は、現在の秩序の小説作家ではなくして、寧ろ文學者であるのだ。私は、かねてから思つてゐる。今日の慣習上、創作家といへば、どんな詰らない物を書いても小説家に限つてゐるごとく思惟されてゐるのは、變な間違ひだ。そして、小説家と名づけられる者が、厭に巧いことをもしてゐるのにも係らず(尤も、一と口に小説家といつても、長篇作家でなければ、あんまり旨い儲けもないが)今日では、文學者といふ者が、一向世に榮えない。私の考へでは、小説家ばかりでなく、文學者といふ者の存在の意義を、もつと明確に刷新してもいゝ時分だと思ふ。固より、今日の產業主義が、文化的營利事業をも、經濟的に左右してゐる時代にあつては、大衆受けのする通俗雜誌に向きの好い小説家でなければ、立派な文士でないかのごとく誤想されてゐるが、それより以外に、儼然確乎として文學者といふ種類の文士又は立言家が存在することを知らしめたいと思ふのである。或はそれを、一概に評論家といつてしまへば、それでもいゝ譯であるが、今日普通に評論家といへば、單に文筆によつて生活をする所の所謂評論家(ソーコールドクリチック)と同一視される憂ひがある。さういふと、正宗白鳥だつて、正しくその一人ではないかと反詰されるであらうが、それなら、それでもないとして。正宗氏は。[illegible]色があり。優れたる[illegible]を取に、他人の作の[illegible]れたる文學者であると思ひたいのである。

文學者といふ名稱は、古くから用ゐられてゐるが、今日では現代に活躍してゐる個の文學者は、文學者といふ名稱を以て呼ばないで、專ら小説家又は創作家を以て呼ばれてゐる。そして文學者といへば、主としてアカデミツクな、文學史家的文學研究者に對して用ゐられてゐる。例へば、平安朝文學研究の權威であるとか、徳川朝文學研究の權威であるとかいつたやうな場合に用ゐられてゐる。それ等の人は、なるほど平安朝文學、徳川朝文學については、實に細微なる點にまで立入つて研究を重ねてゐるにちがひないが、現代の生活又は世態人情とは殆ど風馬牛である。彼等は平安朝文學の思想感情乃至當時の生活世態には通じてゐても、それを現代の生活と關聯して哲學的に思考することを怠つてゐるのではあるまいか。換言すれば、彼等の文學研究は、彼等自身の生活と何等の交渉がないのである。

正宗君は、青年時代から、非常な讀書家であつたが、多くの場合漫然たる雜讀家亂讀家の態あり、決して文學史家的の文學研究家ではなかつた。今日といへどもさうであらうと思ふ。予

つ取り早い例をいへば、彼は　故片上伸君や、又本間久雄君等の如き謹乎たる、律義な文學研究者ではない。

　私は、文學者といふ名稱が何となく好きである。どちらかといへば、小說家といふ名稱の具へてゐる、ある聯想を甚だしく好まない。それは戯作者とか、ローマンステーラーといふ文字を、かならずしも聯想する理由からではないが、小說家といへば、何となく、その職業的（プロフェッショナル）な意味が狹くなるやうな心持ちがする。又、創作家といふ名稱を、特に小說家戯曲家のみに用ゐるのは誤りである。作曲家又は畫家も立派な創作家である。さりとて文學者が片上伸氏とか本間久雄氏とかいつた種類の文學者に對してのみ用ゐらるべきものでもないと思ふ。

　正宗氏は、自身屢々感想に洩してゐるとほり、たとへば一見無價値のごとく思はれる文壇的ゴシップからも現代を解する方便として興味を持つてゐるといつてゐる。所謂大山は土壤を讓らず、大川は細流を選ばずであつて、彼の鋭眼は、いかなる細微にして一見無價値のごとく思はれる事物からも、そこに現代生活の吸呼の音を聽かうとしてゐる。

　諄々として律義なる讀書法は、無論、多くの場合に惡いことではないが、正宗氏の場合にあつては、そんなことはしてゐられない。彼は、系統立つた讀書法に累せられて、肝腎の讀書の精神を喪失するやうな頭ではない。彼には死學者たることは、どうしても我慢出來ない。所謂書籍を肉讀體達する類ひの生きた讀書家であるのだ。溫故知新の讀書家である。

　私は、彼を、廣義の文學者と呼ぶにふさはしく、狹義の小說家と呼びたくないといふ理由について、もつと委しく語りたいと思ふ。人は、何人も自己の職業とする所に堪能練達でさへあれば可いわけであるが、又、必ずしもさうでない場合もある。左官なれば、五代目菊五郎の演じた長兵衛の如き泥醉漢であつても、左官の技術が巧ければ、それでいゝ譯である。畫家ならば如何なる、生活の脫線者であつても、繪畫そのものが名品でありさへすれば、それで可い譯である。然らば小說家も亦た小說を書いて堪能でありさへすれば、それでいゝ譯である。その點に私も異存はない。

　私の最も親しい間から人物の實例をとつて語れば、長田幹彦氏がある。長田幹彦氏は現代最も堪能なる小說家の一人である。そこらの反早稻田派の評論家（低義の）は、屢々、早稻田からは碌な小說家は出てゐないといふ。なるほど夏目漱石も、谷崎潤一郞も、菊池寬も、又當時人氣の好い大衆作家の大佛次郞も東京帝國大學から出てゐる。乍併、早稻田に碌な小說家の

出てゐないことだない。――これは、強ち私の狹い主義から見てからいふのではない。長田幹彦氏などは早稲田出身の小説家では、これを、今日一般の小説家中に押並べてみて決して遜色のある作家ではないのだ。長田君は、その本來の風格傾向からいへば、自然主義時代の早稲田人(ワセダマン)とは非常な相違があるが、しかし、彼も學籍からいへば早稲田出身者である。そして正宗君との交際に比べて、長田君との交際は遙かに遅れてゐるが、どちらも私には親しい關係である。そんなことから引合ひに出すのであるが、長田幹彦氏は、所謂狹義の、即ち最も職業的(プロフエッショナル)な小説家としては最も堪能なる作家である。氏についても、いろ〳〵缺點を擧げていへば、不足はある。三上於菟吉にも、菊池寛にも、久米正雄にも、加藤武雄にも、中村武羅夫にも有ることく、長田幹彦にも不足はあるが、何も幹彦に對してのみ批評が峻酷でなければならない道理はない。長田君が堪能なる小説家であることに、世人は私と同樣恐らく異存はないであらうと信ずる。ところで長田君は、小説家としては、私の見解によれば、正宗白鳥氏などよりも遙かに堪能練達である。正宗氏は、島村抱月氏の早稲田文學が自然主義を高唱した時代より、早稲田派隨一の有望なる作家として、又寵兒として支持後援せられて來た作家であるが、前既に述べたごとく、單なる小説家としては、正宗君の側には、こんなタレントが[illegible]あつたらうか[illegible]い。勿論、題材や扱ふ事を書くばかりが小説でないことは、よく分つてゐるが、さうでない人間觀察と、その藝術的表現にしても、小説家として、正宗氏のどの點が優秀であるかといふことは、因習的定評を、一擲打破して考へてみても可いと思ふ。そして、これは、何にも長田君だけを引合に出すに限らない。秋聲氏でも、菊池寛氏でも、谷崎潤一郎氏でもよい。が、先づ長田幹彦氏と思ひ比べてみるのに、幹彦氏は小説家としては、實に堪能練達であり、正宗氏は堪能練達とはいひ得られないのであるが――――よく、先の内、正宗白鳥の技巧の冴えとか、名匠の腕とかいつて、譯もない、無内容の類型的評語で賞揚してゐた時代があつたが、私は心の中で贊成しなかつた。そんな形容は、むしろ徳田秋聲氏の場合に適合してゐる。――――

しかし、幹彦氏は小説を書くに申分なき練達堪能であるが爲めか、否か、幹彦氏から小説を除いてしまへば、その後に何物が殘るであらうかといふことが考へられるのである。それは、前申したごとく、小説家は小説を書いて巧くさへあれば可いのであるから、幹彦氏から小説を除いて後に何物も殘らなくつても可いのだ。久米正雄氏などは、世間の傳ふる所に依れば、此の頃は、もはや單なる小説家でなくして、社會的名士ださうで

あるが、說の當否は、僕は知らないが、暫く僕の見解に從へは、久米正雄氏なども、長田幹彥氏の場合と稍々同じく、久米氏から小說を除いてしまへば、後に何物が殘るであらうかと、僕は久米氏を觀察する時、迷はさるを得ぬのである。即ち長田氏や久米氏は實に堪能なる小說家であるがゆゑに、小說家として働いてゐる點に、その人達の最も好き部分が遺憾なく發揮されてゐる。幹彥氏正雄氏の長所が最もよく表現されてゐるのだ。長田氏、久米氏等が小說家を終生の職業として選んだことは、最も賢いことであつた。尤も正宗君が小說家を職業に選んだことを、あの賢い人間が、愚かな事をしたものだといふのではなく、又、長田君にしても久米君にしても、今日の小說家仲間では、最も融通の利く才人であり、所謂潰しの利く、食ひはぐれのない完全な常識人である。長田君などは、もし彼が小說家にならなかつたならば、曾て自分で、私に話したやうに、きつと父君の業を繼いで開業醫になり、その方で流行醫者になり、如才なく金も拵へたであらう。又、久米君などは、官吏になつても、會社員になつても相當世間に名の聞える地位に到り得たにちがひない。然らば潰しの利く人間といふ點からいつても、一寸正宗君などの比ではなささうだ。白鳥氏は以前よく、感慨を洩して、自分は、他に何にも出來ない人間だから小說でも書いて糊口してゐるのだといつてゐたが、なるほどさういふ意味からいへば、正宗君などの方が、その人から小說を除却すれば、後に何物も殘らない人間であるかの如く思はれてゐるのであるが、私が茲に言はんとする意味は、小說家にでもなるより他に潰しの利かぬ人間であるか、ないかの論ではない。

實のところ長田君や久米君は、あんまり小說の道に練達堪能であるが爲めに、その人達の持つてゐる好き部分が、洗ひ浚ひ吐き盡されてゐる形である。これに反して正宗君は、前にもいつたとほり、(私の見る所に從へば)本來小說の道にあんまり練達堪能でないが爲めに、彼の本具してゐる所の身上がエキゾースチーブに發揮されてゐないと、私は思ふのである。

彼は嘗ていつたことがある。人間界のことを、いろ〳〵觀てゐると、あれを書きたい、これを書きたいと思ふことは多くあるが、それを感じたとほり小說に書き表はすことに不可能であると。これは、必ずしも正宗氏に限つたことでもなく、長田君にも久米君にも、この數は深いに違ひない。けれども、まづ一とほり長田氏、久米氏などは、自分の見聞を相當エキゾースチーブに藝術の上に發揮してゐるのである。或はそれ以上に。ところが、正宗君は、久米長田氏よりも、もつと餘計に發揮し殘されてゐると思ふ。しかし、私が、さういつたからとて、決し

て誤解しては困る。正宗氏が小說の上で書きうる事の外に、もう殆どこれも、迷ひ淚ひ、反復し、繰返されて、千篇一律になつてゐる次第であるが、小說以外に殘つてゐるものが可なり多いのである。即ち言葉を更へていへば、彼は、嚴密なる意味の小說家であるよりも、外のある者である。文學者である。立言家である。

彼は幼少の頃より文學書類を耽讀して止まなかつた。今日五十歳を越しても尙ほ、老の到るを知らざるもの丶如く依然として文學書類を愛讀してゐる。僕などは、何か必要のない限り、遠うの昔一度讀んだことのある本を再び取り出して讀む氣にはなか〳〵なれない。近松や西鶴の名篇ならば知らず、明治年代の文學書など、改造社の文學全集が屆いたといつて、それを、又初めから通讀する氣などには容易になれないが、彼はそれを讀む。そして、何かにつけて、言ふべきことを多く持つてゐる。それは、特に、いふために讀むのでなく、むしろ讀書に淫するから、必然の結果として、いふべきものが蓄積されるのである。

過日もある席で、新進の人達が正宗白鳥の小說家として、あまり買ふに足らざることを盛にいつてゐたから、私もそれにはほゞ同意したが、私はいつた。しかし彼は、小說家としては遺憾の點があるにしても、文學者として最も面白いカラクタアではないかと。すると、[illegible]に、しかし、評論家としても、もう古く、社會科學の何等もないし、といふ。

僕曰はく、なるほど社會科學の智識はないかも知れぬが、そんなに無くつても可いではないかと。私の考へでは、何處までも、正宗白鳥を文學者として見ることに於て、彼の比類なき長所を見ようとするのである。前に引例した文學史家的文學研究者、又、今日流行ツ兒の小說家中の何人と比肩としても、正宗白鳥くらゐ、肉迫的といはうか、面と面、ヹールを剝ぎ去つて、率直に人生世界を觀察して、哲學的思考に耽り、反省する人間があるであらうか。こゝに哲學的といふのは、抽象的論理的の哲學といふ意味でないことは、いふまでもない。彼は、先日も宇野浩二氏に對していつてゐたやうに、決して、現代の文學書類を耽讀するばかりではない。それよりも寧ろ古典を多く讀む。そしてギリシヤや、ローマや、イタリーの古典の中から、直ちに自己と聲息相通ずるものを發見して來る。或は、自己と共鳴しないものを抉剔する。つまり古典を生讀する。さうして、自己獨得の思ひを練る。私は、實に此の點に於いて、白鳥氏は當代無比の、興味ある文學者型であると思つてゐる。小說を書かしたならば、前來屢言したとほり、彼よりも遙かに拙

能なる才人が少くなからうが、さういふ意味に於ける含蓄ある活きたる文學者は二人とない。

　これから私は、社會科學の智識の有無が、私の謂ふ所の文學者としての正宗氏にどれだけの關係かあるかないかを考へてみたい。なるほど智識は博い上にも博いに越したことはない。正宗氏が、現在蓄へてゐる智識と興味以上にもつと社會科學について知つて居り又、關心してゐたならば、それは勿論一層彼を豐富なる文學者たらしめるであらう。けれども人間には限りがある。德富蘇峯氏は、最早今日の新人思想家には、あんまり歡ばれなかも知れぬ。しかしながら、先生も嘗て自から述懐せられて、「蘇東坡は萬卷の書を讀めども、いまだ律書を知らず」といつたといはれた。これは、私の聞きかぎりであつて、蘇峯先生の引用せられた蘇東坡の言辭は、無論精確なものであつたらう。昔は蘇東坡のいつたことは勿論彼の自信と自負から出た言葉であつたにちがひない。蘇峯先生のそれを引用せられた深意も、亦た謙遜の裡に多少の自負があつたにちがひない。蘇東坡ばかりではない、一體支那の文明には科學の發達が乏しい。物質的にも精神的にもさうである。しかし支那古代には支那特有の文化があつた。文人としての蘇東坡が萬卷の書を讀んだにもかゝはらず、法律の書を讀まなかつたといふのは、面白いではないか。德富蘇峯先生がもし、その郷黨の先輩である所の故井上毅子爵のやうに法理の學問に精通してゐられたならば、或は、今より、もつと異つた學者となられたかも知れぬが、その代りに今日見る如き德富蘇峯は出來なかつたかも知れぬ。法律學者には必ずしも蘇峰先生を煩はすに及ばない。故梅謙次郎氏の如き、又故穗積陳重氏の如き、或は富井政章博士の如き人を欠かない。實のところをいふと、私には、ひとり法律學者のみならず、經濟學にも、社會學にも、倫理學にも、社會科學者は、寧ろその多きをこそ憂へ、少きを苦しまないと思つてゐるのである。正宗君が、藝術的直觀（アーチスチックインチュイション）を以て押し通す綜合的の立言家であることは、紛々たる理論闘爭家の多い中にあつて、最も珍重するに足ると思ふのである。

　先年來正宗氏が、左翼的社會評論家と論爭を交へてゐた時分たしか青野季吉氏であつたか、日本には古來思想家が無かつたと言つたのを反駁して、正宗君は、「生活のある所に思想のない道理はない。」といつた。これは、實に、傍から見てゐても、短刀直入的の批評であつたと、私は思つたのであつた。由來翻譯的評論家は、得て屢々そんなことをいふものだ。そこへ持つて來て、正宗君がそんなことをいつたのは、例の正宗氏の冷徹的な常識で物をいふのだと思つたであらう。乍併他ならぬ此の私

ことは必ずしも、さうとばかりは思はなかつた。又は、正宗君が、それをいつたのは、氏の自發的常識からいつたのであつたかも知れぬが、私にしては可なり由來ある意見として受取つた。正宗君や僕などは、早稻田に居つた時田中王堂氏から倫理學その他いろんな哲學思想について講義を聽いたものであつた。田中氏は常に、歐化された知行合一の説を説いてゐた。その中に、人は、いかなる場合でも、よりよき生活をしようと思考する場合には即ち思想的に動いてゐるのである。生活のある所に思想があるので、生活を離れての思想は空想であるといつたやうな意味のことを述べた。正宗君が、青野氏に對へていつたことが、果して、その當時の學説を想起して利用したのでないことは分つてゐるが、乍併田中氏の哲學思想の影響も全然正宗氏の頭から拭拂することも出來ない。

私は單にその一事を以つて、決して、正宗氏の頭が科學的にロジカルであるといふのではないが、むしろ、正宗君の如き、直覺的の頭は、生半の社會科學者が、死學に累はされてゐる間に、直ちに事物の眞相に突入することをいひたいものである。正宗君が文學者としての立言者である上に、更に經濟學や政治學や社會學の智識を具へてゐたら、それは一層好いことであるかも知れぬが、或は又、その反對に正宗君の頭に累ひするかも知れないのである。一體今日の吾人は[illegible]が、社會科學を[illegible]にするのが、私には[illegible]。しかし學問といふものゝ成立を考へてみるがいゝ、科學といふものは、人間の常識を整理し系統的に組織したものに他ならぬではないか。

正宗白鳥氏について私の最もエンフアサイズしたいと思つたことは、氏が何處までも文學者として特異の個性であることにあつた。勝手に本を讀んで勝手に物を言ふ。さうして彼は努めて、何物にも煩ひされず、直ちに自己の心頭に觸れるものについ、格式を打破したことをいふ。

現在、差當り思ひ起すだけでも、私の知つてゐる文士で洋行してゐる者は可なり多い。中村星湖、本間久雄、吉屋信子、木村毅、久米正雄、正宗白鳥の諸氏であるが、彼土にいつて所謂勉强して來る人は中村星湖氏なども、その一人であらうと思ふし、又、久米正雄氏は到る處に世界の舞台を見聞して、愉快なる通信を寄することであらうと想像してゐるが、私の最も期待して興味を以つて迎へてゐるのは、何といつても正宗君の特得の歐米觀察である。彼はきつとユーロピアンライフ、アメリカンライフについて面白い、深味のある觀察を下すに相違ない。

（十二月五日）

久原房之助論

馬場恒吾

久原房之助氏は現在の政界に於て問題の人である。彼れは今は遞信大臣であるが、それが外務大臣になることは時間の問題とせられる。只外務大臣のみならんや。田中現總理大臣の後繼者として政友會總裁、總理大臣となる可能性さへ充分に認められて來た。半年以前に、彼れが入閣するとき、閣僚が進退を賭しても彼れの入閣に反對すると公言し、政友會の公開の會合で、黨員が其爲めに田中首相に對して、彈劾的な演説をしたことを思へば、殆んど隔世の感がある。久原は如何なる人物なれば、かうまで短日月に人氣を恢復し得たか。それは金の力だと簡單に片付けるのは、餘りに世間知らずだ。三菱三井の主人公等は久原に何倍の金を所有してゐるか判らぬ。それでも、彼等が政界に乘出して、久原の眞似が出來るか否かは疑問である。殊に久原が金を持つてゐるか否かも疑問である。

彼れの財産は田中首相と親友であることであらうか。それは勿論親友ではあらうが、そればかりではない。このことは後に述べる。

今から二十年も前の事であつた。三菱の功臣莊田平五郎が交詢社で話した事がある。或人が莊田に向つて、將來日本の實業界で大立物となるもの、例へば澁澤の後繼者となると云つたものは誰れだらうと質問した。莊田は言下に、それは久原さ。中野武營にあらず、藤山雷太にあらず、久原に決つてゐる。彼れは國家を土台にして考へるから、外の實業家とは比較にならぬと云つた。莊田は三菱の柱石でありながら、死んだときにはこれと云ふ財産を殘してゐなかつた。それほど彼れは眞直ぐな男であつた。自分が眞直ぐなるが故に、人を批評する眼が曇らない。久原が只の商賣人でないことは其時から認められてゐた。

何故彼れが政界に乗り出したのは田中と結んであつたからである。併し其親友と云ふのだ、久原が田中に政治家となる資本金を貢いでやつたとか、田中が首相で久原が閣僚であるとか云ふ如き、簡単な標準で推測される性質のものでない。其例は、田中が京都に於ける御大典が終つた時、狭心症を起して倒れた。其日京都大學で尊攘堂の式があつて田中は長州の先輩としてどうしても出席しなければならなかつた。田中は出席したが顔色も冴へず、フロックコートの懐に手を入れて、始終胸を押へてゐた。午后二時から自分の宿で外國人に面會する要事があつて、早く引揚げた。二階で外國人に會つてゐる內ちに、心臓が痛み出して、終に其座に耐へず、下に降りて自分の室で倒れたときは、最早口も利けない程の重態であつた

然るに此狭心症はその發作の時は非常な苦痛で、且つ危險なものだが、發作が止まると、ケロリとして普通の身體になる。此發作があつて翌日の十九日に、陛下が伊勢神宮に行幸される。田中は自分は死んでも關はぬ。どうしても供奉申上げると云つて、周圍の閣僚、其他が何んと云つても聞かなかつた。皆んな困つて久原に此事を話すと、久原はそれなら、僕が話して見やうと云つた。久原は田中を見ると直ちに、

「貴様、なんと云ふ馬鹿な事を云ふのだ。貴様が死なうが、生きやうが、そんな事は何んでもないが、其日に陛下の御供に参列して、若し其場で斃れやうものなら、それは一身の問題でない。帝國の不吉になる。それを考へないで、無暗に供奉申上げると云ふ事があるか」

と、かう云ふ言葉で云つたと、私は或政治家から聞かされた。田中は成程、神前で若しもの事があつては申譯けがないと云つて、伊勢への供奉は拝辭した。

久原と田中の關係が一通りや二通りのものでないことは、久原の政界乗り出しの時の事實を見ても判る。久原は愈々政界へ乗り出すこと、即ち衆議院議員の候補者となつて打つて出ると決心したのは、昭和三年春の總選擧前の二月三日夜半過ぎであつた。彼れは決心すると直ちに、夜半過ぎであるに關らず、田中に電話をかけて、これから訪ねると云つたのである。

玆で一寸説明して置き度い事は久原は夜半でも何時でも人に電話をかける癖がある。彼れがまだ純粋な實業家であつたときは、夜三時でも、四時でも、目が醒めて何か考へ付くと、直ちに枕元の電話機を引き寄せて、關係の人に方針を示したものである。彼れは大抵、夜は四時間位眠る。正午の食事後一時間必ず寝る。それで六十歳の今日になつて、血壓は六歳の小兒位低いと誇つてゐる。彼れは京都の或漢法醫から教はつたと云つて、

三毒を避ければ人間長命疑なしと信じてゐる。三毒とは酒、女、烟草である。それの毒を受けないやうにしてゐると云ふ。

彼れは政界乘り出しに躊躇してゐたのである。久原商事會社の債務を一身に引き受けて、財政の狀態も良好でない。それ故に政界に乘り出すには一種の引け目があつた。だから田中首相は勿論、政友會の領袖連が代る〳〵彼れに政界進出を薦めたが彼れはまだ決心せずにゐた。其内に鐵道大臣小川平吉氏が勸告したのが最も彼れの胸に徹へた、と告白してゐる。小川の云ふ所は、

『田中總理は内外多事の時に、國政を掌つてゐるのであるが、どうも腹の底を割つて相談する相手がない。維新當時の長州の先輩政治家のやつた事を見ると、眞に國事を憂へて一心協力してゐた風が見へる。君も總理とは同鄕であるのだから、一つ政界に出て、總理を助けて貰ひ度い』

兎も角も久原は小川の云ふ事に最も心を動かした。それでも彼れは尙考へた揚句、前に云つた如く、夜半過ぎに田中に電話をかけたのである。それから田中に會つて、愈々選擧に出ると決心したと云ふと、田中は手を取つて泣かん許りに喜んだ。扨選擧に出るとすれば、直ちに選擧區を決めねばならなかつた。久原は日立礦山を有つてゐる。其所では麻生久君の率ゆる礦夫組合を相手に、深刻な勞働爭議があつたのであるけれども、久原の方から云へば、種々社會政策的な施設をしてゐる爲めに、久原が其所から選擧に出れば、勞働者の投票を勘定に入れて優に當選出來ると考へられた。事業關係で神戶からでも出られる。併し久原は一つの信念から、鄕里の長州から出馬する事に決心した。其信念と云ふのは、彼れは常に云つて居る。人間が鄕里から捨てられるやうでは、何處へ行つたとて碌な事は出來ないと。だから、彼れはふだんから、鄕黨に貢ぐ事を怠らなかつた。だから選擧に出ると決心しても鄕里より外に選擧區を考へなかつた。

所で長州からは其時已に田中の子分である藤田包助氏が立候補してゐた。田中は大阪の演說に行くと同時に、藤田に向つて、至急來いと云ふ電報を打つた。藤田は其電報を見ると、これは久原が立候補をするので、己れに引込めと云はれるのだと云ふ豫感に打たれた。田中に會ふと、果してさうであつたので、藤田は引きさがるの餘儀なきに到つた。久原は悠々として最高點で當選したのである。

政界に於ては久原は田中の庇護の下に生長した如く見へるが、何方が指南役であるか、私の疑問の一つである。其前に田中が内閣組織の大命を拜する日の朝、青山の田中の邸の庭の植木

の態を窺つて、田中の隠居所へ行く久原の姿を見たものもある。久原は田中が愈々内閣の首班になれば、豫め注意しておく事を有つてゐたのである。彼れは田中に逢つて、自分は政治の事では素人であるが、内閣を組織するのは比較的容易だと聞く。然るに内閣を退却するとき、閣僚と政黨が無理に引止めんとするが故に、屢々醜態を暴露する。それ故に、内閣を組織する時に當つて總理になる人は閣僚から辭表を取つて置くべきだと注意した。田中は例の調子で、

『ウン、其邊は旨くやる』

と云つた。田中にして見れば、流石に辭表を取纏めると云ふ事は、其場合出來なかつた。併し各大臣の親任式があつて皆んな首相官邸に引揚げて來たとき、田中は形をあらためて、

『愈々親任式も濟んで、内閣が出來上つた上は、諸君は專心國家の爲めに働かれるであらう。所で、今迄の内閣は其退け際に醜態を暴露する事がある。だから、自分はさうした見つともない事を仕度くない。自分が辭職すると云ふときは、諸君も奇麗に進退を共にして貰ひ度い』

と云つた。閣僚を代表して小川平吉が立つて、それは充分に諒解したから、首相の意に叛かないと云ふ事を誓つたのである。

久原自身が云ふ如く、彼れは其時は田中とは深い關係もあつたにせよ、政治の事にはまだ素人であつた。然るに今は政界に大立物となつてゐる。吾々の問題とするのは、彼れが政治的に何の抱負があるか。如何にして其抱負を有つに至つたか。其抱負は果して實現するか否かである。

彼れが政治的に一見識を有するに至つたのは、田中内閣成立後に、經濟調査の目的の爲めに歐洲各國を視察した時から初まると見られる。田中が久原を歐洲に派遣するのを久原を外務大臣にする下地と評するものがあつたが、それは或はさうであつたかもしれぬが、久原は兎も角も此旅行に依つて、一つの抱負を得て來た。

彼れは歐洲各國に於て有名な政治家に逢つたが、歐洲の政治家が世界的に有名なるに關らず、何れも大いした人物ではないと考へた。只彼れが感心した事は、各國共に、大戰の餘波を受けて、經濟的にも行き詰つてゐる。各國共にどうにかして此苦境を逃れんとして踠いてゐる。そして、政治家も學者も實業家も力を合せて、此問題の解決に當つてゐる。それが出來れば戰後の復興が出來るのである。然るに歐洲の政治家、學者、實業家が協力して一生懸命に働いても、其解決の方法が發見せられない。顧みて日本を見れば、經濟的の行き詰りは歐洲各國と異

る所がない。只異ふのは日本では政治家、學者、實業家が意識的に協力してゐない所丈けだ。若し此日本が努力して、經濟的復興の事業を成し遂げる事が出來れば、日本の幸福なるのみならず、歐洲諸國に範を示す事になり、世界復興の大なる槓杆になると云ふのである。

然らば日本は如何にして此經濟的行詰りを打開するか。それは滿蒙を自由の樂園にするのだと云ふ。支那は群雄相戰つて、民衆が塗炭の苦しみを嘗めてゐる。然るに滿洲、東蒙古丈けは日本の勢力に庇護されて、戰爭が起らない。從つて支那人に採つては此所のみが安住の地となつてゐる。そして支那各地から、支那人の移民が潮の如く流れ込んで來てゐる。だから此趣意を徹底せしめるやうに、滿蒙の治安を維持すると共に、それを世界列國に開放する。各國の資本が安心して投下されるやうにすると共に、滿蒙の富源を開發する。さうして滿蒙を自由の樂園としておけば、支那全土もそれを見習つて、馬鹿々々しい武力鬪爭を止め、民衆も自覺する。其所で支那全體の立憲國が出來上る。支那全土が東洋の樂園として、世界に開放されるとき、其所に世界の復興があると云ふのである。

久原は歐洲から歸りがけに、北京に張作霖を訪ねた。そして彼れの抱負を述べたが、さうした理想的な考へが、張作霖のやうな頑固な頭に這入る筈がなく、久原は張作霖は話にならぬと結論を下して歸つたのである。併し其後になつて、田中內閣が滿蒙の治安維持の聲明を出し、滿洲に於ける鐵道布設、土地商租權の談判を初めるなど、久原の方針が實現してゐるのではないか。

さう云へば、思ひ當る節が幾つもあるであらう。田中外交の眞髓と唱へられ、そして聞くものをして、一寸成程と感心せしめたのは、「支那の民衆が多年の戰亂に苦しんでゐる。其悲慘の狀況は同情に値する。常に滿洲丈けは戰亂を免れて、別天地の觀がある。こゝ丈けは、支那人安住の地に仕度い。」と說かれた點である。田中外交の腹の底は此所である。それは田中外交でなくして、久原外交の匂がする。

張作霖が不慮の死後、日本が作霖の後繼者の張學良に向つて、南方と妥協すべからず、青天白日旗を掲ぐべからずと云ふ意味の警告を發した事は誰れでも知つてゐる。其警告は閣議に掛けられたのでなく、田中が久原と相談して、森外務政務次官に云つて電報を打たしたのである。それが後に閣議に報告されたとき、さうした重要政策を閣議に掛けずに決せられると云ふ事が問題になつた。併しそれは間もなく泣寢入りになつた事は勿論である。公平に見て、久原の意見はそれが妥當であるや否やは

別として、一つの見識であると一般に首肯されるが、今の内閣で、それ丈けの抱負のある外交上の意見を立てゝ居る者が、久原以外にあるとは思はれない。久原の外交上の意見が、田中を含めての現内閣を指導してゐると云つても、益し誇張した言葉とも云はれまい。

久原外交の價値は後に批評する積りであるが、久原は果して其意見を貫徹する事が出來るか否か。それを先づ考へる必要がある。久原は今日の世界の難局は今迄の方程式では解決出來ぬと信じてゐる。何か其所に新規軸を出さねばならぬ。それには傳統的に教育された外交官よりは却つて素人の方がよいかもしれぬ。自分は素人であるが、全身を打込んでそれに努力すると決心してゐる。

彼れがかうした意氣込を有つに至つたのは彼れの實業界に於ける經驗と試錬とに負ふ所が多い。彼れの人物やら性格が如何にして作り上げられたか。人間は生るものでなく、作られるものである以上は、彼れも一朝一夕に出來上つた男でない。其經歴を見ずしては彼れを評價する事は出來ない

久原は廿一歳の頃慶應義塾を卒業すると直ちに森村組に入つた。月三圓の月給で倉庫の番人になつたのである。森村市左衛門老が時々慶應義塾に講演に來て、外國貿易の事を話す、久原は海外に進出すると云ふ必要からで森村組を組織したのであつたのである。倉庫番をやる事一年にして、久原は森村組の店員として紐育に派られる事になつた。久原は海外に行くと云ふ[illegible]せられるので、非常に喜んで洋行の仕度をした。汽船の切符も買つて、明後日には出發と云ふ時になつて、彼れは今迄も色々世話になつた井上馨に呼び付けられた。そして今日本に於て爲すべき重要な仕事が澤山あるのに、個々として外國なんかに往つて居るべき時でない。どうしても外國に行き度いと云ふたならば、今後はお前の世話は一切しないぞと云つて叱られた。何分長州の先輩で、今迄の恩人であるが故に、青年久原は井上の言ふ事に叛く譯けに行かず、折角希望してゐた洋行を斷念しなければならなかつた。それと同時に彼れは森村組を退いて、井上が世話をしてゐる藤田組の小坂礦山に働く事になつた。久原の主義で、何の仕事をするにも最下級から初めねばならぬと云ふ方針で、初めは一坑夫として礦石掘から初めたのである。茲で彼れが七年許り働いて、其地位も伍長か酉長格になつたとき、此礦山に大變動が起つた。

小坂は後にこそ日本屈指の銅山になつたが其頃銀山であつた。所で日清戰役後、松方が大藏大臣として、日本の貨幣を金貨本位にしたとき、銀は大暴落、小坂銀山は最早收支償はなく

なつた。これが藤田組一個のものであつたならば、まだどうにかなつたであらうが、小坂鑛山の經營は長洲藩主毛利家の資本で行はれてゐた。井上馨は藤田組の大御所であると共に、毛利家の財政監督であつた。毛利家の資本を運轉する小坂銀山が立ち行かなくなつた以上は、毛利家の財産を保護する爲めに小坂を閉鎖する外に方法はなかつた。井上は藤田組に命令して小坂を閉鎖させたのである。小坂銀山では高級社員を全部馘首し、器械類は片端から賣拂ふと云ふ悲劇の場面が展開された。

久原は自分が働いてゐる鑛山が沒落するのが殘念でたまらず、何んとかして、之を維持する方法はないかと考へた。畢竟するに毛利家に損を懸けなければいゝのだ、小坂が自給自足でやつて行けるものなら、誰れも文句はないだらうと云ふ見當を立てゝ、同志と共に小坂に立籠る決心をした。

小坂を如何にして經營するかゞ彼れの苦心の焦點であつた。銀は暴落して、問題にならない。所で小坂には銅が出る。其銅は黑鑛と云つて有名な貧鑛である。銅の含蓄分量が非常に少ない。之を普通に石炭を燃いて精錬したのでは到底商賣にならない。何か分別はないかと考へたものである。其方の相談相手には竹内維彦と云ふ技師が居つた。後に久原と協同して日立鑛山を經營した人である。

其頃或西洋の冶金學の書物に、銅鑛に含んでゐる硫黃を燃燒せしめて銅を取れば有利であると書いてあつた。それが只一行書いてあるのみで、如何にして、鑛石中の硫黃を利用するかの方法が明かでなかつた。併し久原は何か其所に方法があると思つて、竹内技師と苦心慘憺する事二年、漸く黑鑛の自家燃燒の方法を實現し得た。これなら、小坂を銅山として有利に經營することが出來ると云ふ結論を得て、久原は小坂再興の相談の爲めに東京に來た。其時は井上は病氣で赤十字病院に入院してゐた。久原は井上を口說く爲めに、一週間每日病院に行つた。初めは井上は容易に動かなかつたが、一週間目に、それなら遣つて見るがよいと云ふ事になつた。

黑鑛自家燃燒は銅の鑛業の革命であつた。其爲めに小坂鑛山は今迄捨てゝあつた鑛石が悉く金になる。其鑛石は、山を上から〳〵野天掘にして往つてもよいほど多量にあるのだから、小坂は日本の有數の銅山になつた。古川の足尾、住友の別子銅山が辭を低うして小坂の精錬法を學ぶと云ふ有樣になつた。久原の友人は、此冶金法は世界的に認められたと云つて居る。

兎も角も此難關突破は久原の性格を作つた。一寸見ては人間業では不可能と見へることを、自分には忍耐と努力と方程式以外の創意で成し遂げて見せると云ふ體驗をしたのである。幸か

不幸か、[illegible]、今日の[illegible]の[illegible]をなしてゐる。

一つの難関は突破された。併し久原には第二の難関が横つてゐた。小坂が立派に立ち行くやうになつた後、久原は竹内と提携して藤田組から独立した。そして茨城県の日立鉱山を経営することになつた。段々事業が発展するに従つて、九州でも鉱山を育ち、佐賀関には東洋第一の烟突を立てるほどの景気であつた。久原鉱業会社は七千五百萬圓の資本で、欧洲大戦中は何億も儲けたと云はれる。久原は初め銅を主とする鉱山業であつたが、戦時中は欧洲へ如何なる種類の物資を供給しても儲かるので段段手を拡げた。鉱山専門の時は欧洲主要の地へ小さな出張店を設けて、金属の輸出をしてゐたが、其規模を大きくする為めに、大正六年に久原商事会社を作り、津村秀松氏にまかせて、一般の貿易をやらした。そして諸外国に支店を置いて、愈々此れから大に儲けんとした矢先に休戦の電報が来る。大正九年の瓦落に遭ひ、久原は無慘に叩きのめされたのである。

此頃の手違ひに関して一つの挿話がある。久原は欧洲戦争が熄めば、商賣の方針を一變せねばならぬことを充分に承知してゐた。だから、愈々戦争が熄むと判つたら、直ちに打電させよと云ふ事を各地の主任に命じて居つた。其中で、巴里の主任であつた[illegible]と云ふ人に[illegible]てゐた。そして其電報は「プラチナ高い」といふ[illegible]さうすれば戦争が了ると諒解すると云ふ聞かされてゐた。

それから二三年経た後、大正七年の九月二十四日倉林は何か用事があつて、巴里の大使館に行つた。玄関を入らうとすると豫ねて懇意にする日本の或武官が出て来る。其武官は倉林の顔を凝つと視て、

『君、戦争は熄むぞ』

『それはどうして』

『これはまだ世間に知れてゐないが、ブルガリヤが降参したのだ。ブルガリヤが降参すれば独逸と戦争を熄めるに違ひない。これは大丈夫、間違いなしじや』

倉林は其儘引返へして、東京の本店に向けて『プラチナ高い』と至急報を打つた。

独逸はそれから十日目に休戦を申込んだのである。其場合十日も猶豫があれば商賣上にはどの位利益があるか判らぬのである。

所で其所に手違ひがあつた。久原商事は出来立ての会社であつて、其社員には新らたに入れた人も多かつた。『プラチナ高い』と云ふ電報を見て、それが久原が生命を打ち込んだ暗號だ

と氣が付く者がなかつた。何んだ。今時分、プラチナが高いなんて、何の事だと、此電報は日本に於ても休戰の號外が出るまで、其所らの抽出しに投り込まれてゐたのである。

戰爭が熄む。最早物資の必要も峠を越したのである。然るに久原の雇船は世界各地から貨物を滿載して歐洲に到着する。船は港に入り切れない程來る。入港しても荷を揚げる場所がない。荷を揚げても誰れも引き取る者がないと云ふ有樣であつた。其ドサクサ紛れに、會社には損をさしても、自分は儲けやうとするのもある。久原商事會社は資本金一千萬圓であつて、久原は其四分一の責任を負うてゐた。然るに久原は他の株主に迷惑を掛けるのを厭つて、自分一個で全部の借金を背負つた。そして自分の所有する全ての財産を投げ出して債權者の處分を待つた。其態度が男らしかつた爲めに、其破綻が公然のものとならなかつた。一時は西に鈴木、東に久原と云ふ如く、借金の二大關とも云はれたが、鈴木商店は沒落しても、久原は生き殘つてゐる。彼れが大臣になるとき、彼れが震災手形で約二千萬圓の國家の救助を受けてゐる事が問題になつた。併し之を問題にした三土藏相が矢張同じ内閣の閣僚となつてゐるので、此問題も立消えの姿である。今一つ、彼れが英國政府から三百萬圓かの債務者である事も問題になつたが、其借金もどうかして返濟された。久原は彼れの一生に於ける第二の難關を突破するのではないかと思はれる。

此れ丈の浮世の波を押し切つて、兎も角も一時は財界に於て久原王國を立てた男である。それが一つの外交上の抱負を實行せんと決心して來るとき、吾々は普通の外交官の外交方針に對するとは態度を更へなければならぬ。普通外交官が如何に名論卓說を唱へても、それは只の名論卓說として聞いて置けばよい。久原外交方針はそれに猛烈な實行性が伴うのであるから、机上の名論卓說と同一に視る譯けに行かぬ。

彼れが滿蒙に於て自由の樂園を作ると云ふ理想、即ち其所を資本の投下、富源の開發、民衆の住居に安全なる土地とすると云ふ理想は、畢竟するに資本主義の樂園を作ると云ふことである。資本主義の樂園だと云つて、必ずしも之を貶するのではない。民衆は露西亞のやうな社會主義の地獄よりは、寧ろ資本主義の樂園を喜ぶであらう。少くとも、封建的戰亂の巷たる支那本土よりはよいに極つてゐる。だから其理想が惡いと云へない。只、今迄久原が指導して行つたと見られる所の現内閣の外交方針でそれが出來るか否かゞ疑問である。

今玆に支那問題を議論する暇はない。併し何人の目にも明かな事實は、現内閣の對支方針が、從來の對支方針に比較して、高壓的であり、武斷的であつた事である。それは政府を否認しないのみならず、或は撒りとなしてゐるかも知れぬ。幣原外交

を顧み外交と驀進する處に、現內閣の外交に狂奔してゐると云ふ意味が含まれてゐる。

　高踏的な外交も必ずしも排すべきでない。或時代或國家に對してはそれが成功した。他の時代他の國家に對してはそれが失敗する。それは客觀的狀勢の判斷に待つより外はない。只併し、爭ふ餘地のない事實は、高踏的、武斷的、强硬主義の外交は、國際關係に危險の伴ふ事である。獨逸皇帝はさうした政策を行つて遂に大戰を惹き起した。乾坤一擲の意氣は壯烈であるけれども、日本の國家を賭して或仕事をすると云ふ事は、久原商事會社を賭して冒險をするとは違う。滿蒙に自由の樂園を作る爲めに、日本の運命を賭ける事は久原にも田中にも、誰れにも許されてる仕事ではない。已に議會制度の確立してゐる今日では、日本の運命は日本國民の意志を無視して決せられるべきものでない。其志がよくても、其取るべき手段に付いては、久原はまだ一段の考慮を必要とする。

　兎も角も久原は快男子である。或は一種の英雄と云つてもよいかも知れぬ。彼れは古今の英雄を批評して誰れにも感心しない、と云ふ。秀吉、家康、さほどの人物とは思はぬ。只彼が崇拜して措かないのは神武天皇のみである。と云へば、彼れは只日本の傳統に迎合してゐるかの如く聞えるが、實はさうでない。彼れは彼一種の見解を有つてゐる。彼れの云ふ所によれば、神武天皇は日向の高千穗から東征されたとき、大和を目標として進まれた。然るに河內から大和に進まんとして、ながすねひこの爲に遮ぎられて、非常な苦戰に陷られた。其所で天皇は一時退却されて、再び海に出でられた。それから紀州を廻つて熊野の近くに上陸され、熊野路への艱難辛苦に耐へて、漸く背後から大和に乘込む事が出來た。建國の大業はかうした曲折を經て成し遂げられたのである。人生決して順風に帆を上げて彼岸に達するものでない。必ず一度は挫折する。其挫折したときに、屈して了へば、大志は遂げられない。迂回しても何んでも、目的地迄は必ず漕ぎ付ける。其所に神武天皇を崇拜する所以があると、それを久原は彼れの人生觀としてゐる。そしてそれを實行してゐる。久原の容貌が柔和て、其言葉が丁寧だと云ふのを以て、彼れを生やさしい人物だと思ふと非常の間違ひだ。

　彼れは又富士山に憧憬してゐる。そして富士山の額、繪、盆物を道樂にして集める。何故にそのやうに富士山を愛するかと、彼れの周圍のものが聞くと、只好きだからとのみ云つて多くは語らない。彼の友人は註釋を加へて、富士山が風雨の間に立ちて、千秋萬古、何日も巍然として立つてゐるのがいゝのだらうと云つた。私には其意味が判らなかつた。

　私は或時汽車の窓から富士山を見た。周圍の山が皆蹲んでゐ

るのに富士山のみが麓まで雪に掩はれ、そして獨り高く沖天に聳へてゐるのは淋しい。何んとなく孤影寂寞だと云ふ感じがした。

これは純粹に私の想像であるが、久原が富士山を愛するのは、群雄割據の中に、彼獨り、孤影寂寞の感を持つてゐるのではなからうか。もしさうだとすると、それはよくない考へだ。今は民衆と共に生き、民衆と共に働く世の中だ。久原の實業界の事業だつて、それが小坂、日立程度のときは、久原個人の努力と才幹とに依つて成功する。それが世界的の事業になると世界の動きもあらうが久原一人の努力、才幹ではどうする事も出來ない。矢張社員全部の同心協力を待たなければならない。久原が政治家になつた今日は尙更其心懸けが必要になる。內政に於ては國民と事を共にし、對支外交では支那國民と協力する。それでなくして、政治家が現代に生きる途はない。

最近の久原が大隈一黨、憲政一新會、床次新黨に渡りを付ける行き方は、彼れが餘りに金の力で押し切らんとするものだどして、無用な世間の反感を挑發する。恰かも支那に於て、日本が優越な武力を振り廻はす事が不必要な程度に迄、支那人の反感を挑發したと同じ事である。吾々は久原が力強き人物である事を認める。併し自分の力の及ぶ範圍を過大に見積るのは、かうした人物の悲しき錯誤である。

支那外交の大立者　王正廷論

神田正雄

世の中は、何が幸にならぬものでもない。日本の出兵が、昭和二年度の分だけですみ、その明けの年の北伐が、蔣介石の思惑通りに捗どつてゐたとしたら、王正廷の出て來るやうな幕はなか〳〵開けなかつたゞらう。だが事實はさうではなくて、昭和三年度の出兵となり、濟南事件が起り、時の外交部長黃郛の失脚となつて、王正廷が日支外交の檜舞臺に躍り出るやうになつたのは、勢と云へば勢であるが、春秋の筆法をもつてすると、日本の出兵、王正廷をして外交の花形役者たらしむ、である。

　われにとつては對支外交の雜物、王のごときは引き込んでゐて貰つた方がいゝやうな氣を、起さぬ者もないでなからうかに思はれもするけれども、引つ張り出した因緣からすれば、今更回避も出來ない筈。否、うまくさへ行けば、彼だからこそ、黑白明らかに、存外迅速に、懸案の解決を見ることが出來ようも知れぬ。王正廷はテキパキした男だ。

　況んや支那内部の人材の配置、各巨頭の勢力上の關係から見ると、現在で支那外交界の第一線に立たう程のものは、彼を措いて他にはない。山西の閻錫山、直隸の馮玉祥、みな蔣との同志ではあるが、その背後に隱然として馮のあることを蔣は忘れない。だから外交の折衝をさせるにしても、蔣は決して馮に氣兼ねなしにはやれないのだ。黨派を離れて日本の使臣が、任命されるやうな事情には、實のところなつてゐないのである。

　黃郛は無論のこと、馮によかつた。黃は前清の學人で日本の陸軍士官學校出、第一次、第二次の革命には陳其美の下に參謀長として、活躍し、國民黨浙江系として、或は徐世昌を助け、華府會議の支那側顧問となり、或は張紹曾內閣の外交總長とな

り、高凌霨攝政內閣並に顏內閣の教育總長となつたが、民國十三年馮玉祥のクーデターに參劃して同年十一月攝行內閣を組織して總理となつた。この時以來馮との關係は切つても切れぬほどに密接とはなつたのである。機を見るに敏なる彼れは、關稅特別會議全權、駐獨公使を經てたま〳〵民國十六年、蔣介石の招くあるやこれに應じて南下し、爾來蔣と日本側の聯絡に盡したのであるから、由來親日派として知られた彼れは、蔣馮の間、日支間のとりもちをする役としては最も適任に思はれてゐた。

更に個人的關係から云へば、馮玉祥及び同夫人は嘗て黃の下に師事した謂れもあり、蔣介石は黃郛が民國二年師長たりし當時は、屑々たる一部下であり、一團長を勤めてゐた事から見ても、淺からぬ關係がある。然し時勢は移つた。民國十七年五月、その初めの頃の二日から三日にかけて日支間の衝突を惹起し、所謂濟南事件として一大暗礁が橫はると、已むなく彼れは外交部長の要職を拋たなければならなかつた。

黃は何故に職を辭したか。折角であるからこの間の秘密は、も少し深く物語らなければならぬ。第一次日本の出兵に憤り拔いてゐた蔣介石は、再度の北伐を企つるに當つてや、日本の態度ばかりを氣に病んだのである。それが爲に黃郛は屢々矢田總領事を訪問して、日本の眞意を確かめた。而して一方殷汝耕を日本に派遣して、その內情を探らせたのであるが、强硬派〇〇方面の態度からしても、今度こそ出兵すまいとの推察が出來たわけである。殷の電報は飛んだ。蔣は軍を動かした。が、動かぬと思つた日本の兵が動いたのである。

これ以上に、この場合には物語るの必要がない。かくて、王正廷が、飛び出すやうな幕も開けて來たのであるが、決して、ひとりでに飛び出て來たのではないのだ。王もまた馮の配下であつた。彼は北洋大學を卒へて日本に留學したが直ぐに米國に渡つてミシガン、エール等で最新式のハイカラ教育を受け、歸國後中國基督教青年會の幹事なぞを勤めてゐた。ところが宣統三年末になつて革命が勃發したので、進んでこれに投じて黎元洪の下に活躍し、支那式に立身出世をして民國元年には北京第一次內閣に工商部次長となり、同年北京に召集された國會には議員となつて、參議院副議長といふ要職にさへ、年若くして就くことが出來たのである。

二年國會が解散すると、彼は再び南旋して中國基督教青年會に牛耳をとり、同四年袁の帝政問題が起るとこれに反對して孫文、唐紹儀等と連絡を取り、倒袁を策し、同五年袁の歿後唐紹儀の代表として入京した。そして國會の召集と同時に、再び參議

院の副議長となり。七年の秋南方政府から米國に派遣せられて。大統領ウイルソンに會見し。參戰に對する米國の諒解を求め。更に同八年巴里講和會議には北京政府から支那全權委員に任命されて。大活躍を遂げたことは。華府會議における暗中飛躍と共に。當時を知るものが。彼の敏腕に對して舌を捲くところである。

暫くもジツとしてゐることの嫌ひた彼れは、政治外交に干與せぬ時には。實業界にその敏腕を揮つた。その敏腕がそんな仕事にまで敏腕で終始したかどうかは多少疑ひもあるが。上海の輸出入會社、呉淞の華恒紗廠なぞは自ら副社長若くは總董事となつて力を傾けたところである。

然し彼れの聲望を以つてすると。久しく野に捨てられて居ることは出來なかつた。和約研究會長から。民國十一年には山東問題善後事宜督辦に任ぜられ。わが小幡全權と折衝する準備中。同年の晩秋に出來た汪大燮内閣に外交總長となり。更に同年十二月特別關税改訂會議籌備局長を兼ね。同月五日山東協定全部調印濟となつて。同月十日青島で日支兩委員間に無事膠澳租借地の引渡を了した。然しこれを機會に。汪總理は辭職したので。王正廷は十一日から十日を限りの代理總理となり。同十二年正月内閣の更迭と共に今度は司法總長代理に任ぜられたが。これは一時の間に合せで。その三月には中俄交渉督辦となり、ソビエツトロシヤとの交渉準備に當り。その秋に又更に[illegible]内閣の司法總長に任ぜられて辭退し。代りに日本の關東大震災後の支那留學生及び在留民の狀況視察の爲めに來朝し。歸ると直ぐに中俄交渉を始めて。ヨツフエ及びカラアンと次々に折衝すると云ふ忙しさであつた。而して。同十三年三月豫備條約に署名するまでになつたのであるが。反對派がやきもちを燒いて。署名の資格問題が起り。中俄交渉はこゝのところで外交總長の手に移つた。

その後民國十三年の十月に馮玉祥のクーデターによつて、政權を把握するや黄郛と共に活躍する處少からず、同十四年三月再び中俄交渉事宜督辦となり、上海五卅事件の善後辦理を兼ね、更に關税特別會議の特別委員となり、その秋會議の開かるるや、その十二月許世英内閣の外交總長となり、關税會議席上、支那の自主權聲明演説に大いに名聲を博し、更に十五年の政變により國民軍の北京撤退と共に南下、同十六年夏、蔣介石から聯絡の爲めに馮玉祥の下に派せらるゝこととなつて開封にある間、馮とは愈々靈犀相通ずるところあるに至つたわけである。そして十七年五月濟南事件により黄の外交部長を辭するや、その後任として同年六月十四日、正式に國民政府外交部長

とはなつた。

彼れは云ふまでもなく國民黨馮玉祥系、熱心なクリスチャンで親米派、蔣馮のいづれからも、信頼を受けてゐる人物である。

全支統一をもくろんで立つてゐる蔣にとつて、一ばん畏いのは馮の離反でゐる。更にその勢力を利用する上からも、蔣としては馮に接近してゐる黄を重用し、王を使ふことが必要である。ずつと以前から、南方派は、その自らの大をなさんが爲めに、黄や王を使はねばならなかつた。實際の上からも、使つて來たのである。若しこれを除外したらば、蔣馮間にどんな縺れが起つた來たか。蓋し測り知るべからざるものがある。

試みに、民國十六年の夏、徐州における蔣馮會見の手引をしたものは、誰れかと探つて見るとそこにはチャンと、黄が控へて居たのである。その黄が行き懸り上面白くないと云ふことになると、今度は王が出て來るのは當り前である。初めからフヰルムがさう出來てゐるのである。無暗にカツトされることがなかつたら、スクリーンに映るのは、原作者のプロツトと、テーマ以外に何ものでもない。

搗て丶加へて、王には前述のやうな經歴がある。彼のやり口は新しい。しかも手腕にかけては何人にもひけを取らぬ。とかう世間では見てゐる。その點では近來稀有の人物だ。支那で外交といふ外交が初まつてから、確實にその手腕を信頼されその爲めに成功したものに陸徴祥がある。尤も日支交渉の折は彼を助けた曹汝霖がなければあれ丈の手際には行かなかつた。曹は新舊の間を行く古い時代の外交家でありながら、支那には珍らしい人物で袁世凱にも信用が厚かつた。そこへ行くと、王は、なほ未知數ではあるけれども、頭もよく腰骨もつよく、テキパキと黒白を辯ずるところなど、何といつても新しい型の外交家である。この王を蔣が表面に立てたことは、蔣としては王を見るの明あり、王としては頼るべき樹蔭をしるものであると云はなければならぬ。そこへ行くと、日支外交における日本の態度の方は、ともすると、一本筋に行かぬかに見えるところがある。どだいわが外交の中心が、どこにあるかさへ判らぬか位であるのは果して見るものの僻目からであらうか。乃至また盲目なからであらうか。

田中兼攝外相の曰ふところによると、わが對支外交は本舞臺の方がどんなになつてゐようとも一向お構ひなしで、聲明に談話に演說に一切合切好轉また好轉である。その間に新黨クラブと云ふのが、對支外交を鞭撻すると云ふので飛び出す。更に憲政一新會と云ふのが、ゆるんだ箍のシメ直しだと云つて飛び出

して來たのである。間違ひなしに政友會内閣の記憶で、對支外交の好轉については、閣議で度々にきかされてゐよう筈の久原大臣までが、近頃政府の對支外交は腰が弱いとあつて、新黨クラブ、一新會あたりにも是非鞭撻して貰はねばならぬと、ひどい御執心である。

内政問題でないと云ふ口の下に、實は頭數を揃へる爲めの内政問題以下の政爭をやつてゐるのである。そして床次クラブ總裁あたりをツヽイて置いて、南京あたりへ出蒐けて貰はうと云ふのであるから、全く何の爲めか譯が判らぬのである。尠くとも正眞正銘の對支問題の解決の爲めでないことは明らかだ。そこへ行くと、支那の方は却つて、日支問題の重心をキッと見つめてゐる。實際を云へば、日本は、決してグズ〳〵してゐる時ではない。床次サンに出かけられては、脫黨當時の聲明書から見ても、今後日支關係を益々惡くするといつて外務省は騷ぐ。しかしかうすることが、政府にとつて議會切拔けの第一策であると云ふのなら、外交など何うなつて行つても構はないのかも知れん。

事實、對支外交の刷新をもつて、現内閣は重要使命の一として相當力は用ゐて來たらしく思はれるが、諸懸案交渉の前途には、幾多の難關が横はつて居り、總ては未解決のまゝに殘されて、近頃にまた面倒な難問さへも孕んできさうな形勢である。この夏以來、幾度も幾度も、田中内閣によつて好轉を傳へられた日支關係は、かの支那側からは七月十九日、わが國からは七月三十一日付で交換した日支通商條約の改訂問題に關する公文の通牒以後、日支の外交關係は睨み合ひの姿で、好轉どころか、益々軋轢を深刻にした丈けである。何故ならば、支那側は關税增收を目的にして、新年の一月からは何とあつても關税自主を決行する考であり、その小手調べに、去る十月一日から過渡税率として差等税率を實施せんとする氣勢を示したのであつた。ところが若しこれが實現を見る時には、我が對支貿易は一層深い影響がある恐れがあつたので、わが外務當局は日支關係をにらみ合ひのまゝ、支那に勝手の振舞をさせれば、その結果は憂慮すべきものがあると做し、差等税率を十月一日から實施することの喰止めに極力奔走したのである。一方、日本としても關税會議當時、日英米佛支間に成立した七種差等税率ならば付加税の變更であるから、當時の實施條件によつて、支那がこれを實施するのは差支ないといふ考のもとに、十月六、七兩日に亘り、上海に於て矢田總領事と宋子文の會見となり、これさへ完全に諒解し合へば、條約問題も自然に解決するかに思はれたのであるが、事實はさう單純にはゆかぬものだ。

日支間、一方の障害たる濟南事件については、七月十九日の日本政府の覺書に對して、支那側は交渉地濟南、及び交渉員藤田總領事を忌避する意を非公式に示し、兩者暫く水入れの形であつたところ、今度は王正廷の方から懇請があつた。ではと云ふので、矢田總領事は十月十八日、南京を訪問し、他の諸懸案と一しよに、意見の交換を試みたのであるが、會見九回、濟南事件に對する日支双方の主張は略ぼ明らかとなり、未解決のままの漢口、南京兩事件の解決については、完全なる意見の一致を見、條約改訂問題についても、交渉の端緒を見出すといふ程度にまで行つたことは、表面上、順潮に捗つたに相違なかつた。しかし、實は、税率問題の打合せさへ出來ないうちに、交渉の範圍を懸案全部にひろげたことになつて、わが立場は愈々不利に導かれたのだ。矢田總領事の努力もさることながら、田中外相のいふやうな對支交渉の好轉には、どこをつゝいて見てもなつて居らない。のみならず、矢田總領事が撤兵問題について王に開陳した緩和意見は、政府の方針と合致せず、七月十九日の覺書に示されてゐる日本の强硬方針が、ぐらついてゐるといふことを、暴露した結果に陷つたとは、決して笑つて見ては居れることではないのだ。

かゝる間に矢田、王正廷第一次の交渉は終つた。そこで、わが政府としての手段は、有田アジア局長を上海に派して實情を調査し、また政府の方針を、矢田總領事に嚴達するといふのであつた。而してホンの今まで、總括的にやつて來た諸懸案を分離して、條約問題は芳澤公使、南京、漢口兩事件は矢田總領事、濟南事件は基礎交渉を矢田總領事、細目交渉を前田、西田總領事にやらせようとする政府の轉換策は、矢張り一揆の外はないとの、夢が覺めたばかりである。

何となれば、日本側は切り離して車がゝりでやつて來ても、支那側で、大手を擴げて待つてゐるのは王正廷たゞ一人である。尤も、宋子文あたりも、事の性質によつては引き受けるが、大綱を繰るのが、外交には決して素人でない王正廷である。支那側の態度は却々强硬で、日本の考へ通りに行かないことは勿論、樂觀論者の有田局長の頭にも、さすがに應へたと見え、これが判つた政府では、改めて濟南事件は後廻しとし、先づ直ちに解決出來る南京漢口兩事件を矢田總領事にやらせ、條約問題もそろ／＼準備するやうにとの訓令を發したわけであつた。ところで矢田總領事の十一月廿日の第三次南京訪問は、却つて向ふから高飛車に出られ、日本の撤兵こそ、諸懸案解決の先決條件とする旨を明らかにし、總領事態々の來訪ではあるが、最早や會見の必要なしとさへ王をして放言せしむるに至つたの

である。然しそれもあんまりなつて、會ひは會つたが、會つて見ると、支那側の豫定計畫通り、十月十八日以來の交渉は全く水泡に歸することゝなつて、日本側では今更のごとく、貿易上の重大問題として、差等稅率の交渉だけは、貿易上、又無擔保借款の確保上、重大關係があるからと云ふので、續けられてはゐるが、足許を見られた矢田總領事としてはこの交渉、なかなか容易でなからうことが察せられる。

それにつけても思ひ出されるのは、田中外相が滿洲王張作霖の御曹子、張學良に決して南方政府とは合流するなぞと勸告らしいことをやつた、七月の十八日前後の事情である。その明けの日の十九日に、南京政府は前記日支條約の廢棄を日本側に通告したので、だから曰はぬことぢやないと云つたのは田中外相である。かう云ふ無謀を敢てするやうな南京政府だから、一しよになつてはいけないと、學良にも忠告したんだなぞ、オラが首相は鼻高々であつたとやらだが、奉天派の南方歸順はただ三箇月の延期だけであり、更に日支關係が今日のやうになつてゐては、どの面さげて、も一度、奸棟なぞと云へた義理であらう。

然し、こゝで對支外交の失敗を痛撃するのは本文の主旨ではない。わが外交も、外務省あたりが痛感してゐるやうに、これ

から‥、[illegible]日に[illegible]やうな[illegible]けて、十月末以來の[illegible]和方針こそ、現に向つてゐる各種事件直後よりも更に一層鮮明な日本の立場を、有利に導くと共に、一方支那內政の實情、王正廷の性格等を隅なく知悉し、眞價を見附け底を見拔いてゐることが、誠意ある交渉の緒に入る第一歩であると悟らねばならぬ。それには田中外交が、幣原外交の後を承けて、是が非でも對支强硬外交を振り翳さなければならなかつたやうに、背部の後を受けた王正廷は、强腰に出なければ行き懸り上、立つ瀨がない內政上の關係があつたことを知らなくてはならない。南方政府日頃の主張を、彼れ王は背負つて起つて居る。不平等條約の撤廢から始めて、國民黨の主張を貫徹しなければならぬ大任務を、王正廷としては持つてゐる。王の肚を割つて見ると、成功したいが山々である。況んや華盛頓會議後の山東條約では、小幡全權と交渉して、首尾よく仕事を了へた經驗もあるから、日本との驅引ならば自信がある。そこへ持つて來て、內政關係が前述のやうであつたから、王の放つた第一彈は、思つたよりも强硬で、條約破棄と出たのである。更に最近先決問題としての山東撤兵の要求であるから、王としても、內心或はハラ〳〵してゐるかも知れぬ。或はもつと穩當にやりたいのかも知れぬ。然し飽くまで强硬と見せて來るところに彼の性格の閃めきがあ

る。何でも矢田總從事が、嘗て日本の主張を聽かぬならば、國交斷絶するかも知れないとまで、極言したと傳へられるが、その時王の言つた言葉は、簡にして明『致し方はない。』と云ふにあつた。

彼は支那人に似合はず、イエス、ノウのはつきりした男である。久しい間の駐日支那公使汪榮寶もこの點にかけては珍らしい人物であるが、ともに頭は頗る明晰で、膽斗の如き近世の雄である。而して王はアメリカ仕込みの英語を操つて、多少キザな所さへある位にテキパキしてゐるが、汪は漢學の素養が深くて重厚である。たゞ左樣に支那人放れがしてゐる王正廷にしても、生れが既に支那であるから、濁つた世に、大官たちの間にさへ行はれる支那の特有賄賂の風なぞに對する考へはどうであらうか。潔癖なクリスチヤンとして立つてゐる彼れに、さうした惡弊のつきまとうやうなことは斷じてあり得ない。よつて王に對するわが特使の態度としては、その邊をのみ込んで先方がプラフをかければ、こちらもそれに應ずる丈けの心の準備がありさへすればよいのだ。

實を言へば、彼の立場は、日支交渉を纏めるには、一番有利な地位にある。黄郛のやうな親日家だと、僅かの讓歩にも國民が騷ぎ立て、よし日本の讓歩でもこれを正解せずして危險が身に迫る。けれども王は親米家で、山東交渉の成功も彼れの不斷のこの地位が彼れを有利にしたのであつた。そして支那人らしくないテキパキした所があるから、交渉をするにしても餘り面倒が伴はぬ。日本にとつてはよき對手、しかも必至の對手である。日本側で王を忌避するならば、蔣介石は或は後任を選定するに手古摺るだらう。而して若し章宗祥や曹汝霖が選ばれてゐたとしたら、支那にとつての成功さへも、非難され攻撃されて、殆ど立場を失ひ、最後を完うし得ないやうに迄なるかも知れぬ。

王正廷の相貌には引き締りがある。ノビてゐない。筆者は民國二年であつた、フランス語に巧みな張繼、當時參議院議長、並に英語に堪能な王正廷、當時同じく副議長の兩名を、北京の朝日新聞舍宅に招待し、英米露獨佛の記者諸君との引接役を勤めたことがあるが、若冠よく諸大國の間に伍して、巧に談じ莊重に振舞ふところを見て、この男他日大いになす所あるべきを豫期してゐた。更に故加藤高明伯支那來遊の砌、參衆兩院議員の歡迎會に臨んで、王のなせる演説をきいたが、それがまた驚くべき出來榮えであつた。高明伯をして『立派な英語だ。』と賞めしめた彼れは、果して今日、支配の實力ある手腕ある大立物となつてゐるのである。かう云ふ人物を前において、日支交渉の遷延を傍觀することは、延ばせば延ばす丈け、混亂するのを支那外交の常例とし、縺れる糸を承知しながら、わざと放つて置くやうなものだ。

新歸朝者 市村羽左衞門論

三宅周太郎

一 その「人」

明治四十年前後であつた。今から考へると、餘りに突飛な沙汰だ。が、當時世を驚かした事實に、彼の有名な「貴婦人の役者買ひ」の事件があつた。

この騷ぎの槍玉に上つたのは、云ふ迄もなく當時の市川高麗藏であつた。そして彼はその災難のために、東京俳優組合から除名されようとさへした。理由は夫ある婦人と親しんだのが、德義上許せないからとのためであつた。

所で、他の大勢の俳優はと云ふと、高麗藏の災難を全くの他人の出來事のやうに傍觀してゐた。そして我々は君子ですと云ふやうに平氣ですまし込んでゐた。が、この時、獨り羽左衞門はさう云ふ態度に出なかつた。いや、それ以上、高麗藏がそのために危くも葬られようとしかけた時、彼は堂々とこんな事を云つた。「べら棒め、役者で間男をしない奴があるものか」

この言葉は無論不穩である。私はこれを證據に役者の生活を云々しようとするのでない。又、羽左衞門としてもこの言葉に、多少の自己辯護があつたのも事實であらう。併し、思ひ切つて大膽なこの意見は、妙に一部の堅苦しい意見を征服した。そして死地に陷つてゐた高麗藏に、見事に一脈の光明を與へる好結果を生むに至つたのであつた。

但し、當時具眼者はゐた。その頃の思想界の權威、雜誌「丁酉倫理講演集」か「新佛教」(?)かだと思ふ。その誌上で主筆者の某博士は、羽左衞門のこの言葉を引用して、彼は却つて人格者だと論斷した。主旨は多くの役者が、さう云ふ私生活を隱蔽して君子面をする。そして△△などは人非人のする行爲だと

云はんばかりにすましてゐる。それを羽左衛門のみが敢然として以上のやうな言葉をはいて、高麗藏を救つたのは、誠に天眞爛漫で正直の美德と見得ると云ふ風な意味であつたと思ふ。

尤も、これは私の十五六才時分の記憶である。從つて、多少の誤りはあるか知れない。それは幾重にもお詫びしておく。併し、この事件を中心にしたこの記事は、大體にこんな風であつたと覺えてゐる。――今でざつと二十何年前の話になる。が、私は羽左衛門と云ふと、未にこの言葉をふいと思ひ出す。それと共に、時の權威の某博士が、彼を人格者だと論じた見方には、今に私の同感尊敬痛快が相混じた氣持を以て、十分推服する所である。

○

大正年間の初め迄、劇作、劇評、或は幕内の半くらうととして、劇壇に活躍した××××と云ふ人がゐた。この人は羽左衛門のために脚本物を脚色上演したりして、中々の勢力を持つてゐた。但し、何か一身上の都合であらう。近年その人は東京と劇壇とから離れて、文筆とはやや緣遠い仕事をしてゐられるやうである。

が、一時この人は、這入るに困難な芝居道に見事に這入つた。そして名を成し力を成すのが早かつた。今の岡本氏松居氏、それに近い位の晴れ業を、羽左衛門中心に、突如として出現して實行し得た。で、××氏の行動はかなり人の目を聳てしめた。又は一寸珍しいやり手と評判されてゐた。

我々はそれを後になつて知つた。この××氏の活躍は、その背後には實に羽左衛門の多分の助力加勢があつたからだと云ふ。××氏は羽左衛門の小學校時代の友達であつた。竹馬の友であつた。その緣故で羽左衛門に接近した。と、羽左衛門はその緣故に篤實であつた。當時は一にも××氏二にも××氏で、芝居だけでなく、家庭的にさへ親しんでゐたさうである。一體、芝居は今でさへ德川幕府の鎖國時代と變らない。まして二た昔位以前の話だ。劇場側が顧問か何かで雇つてゐる文士の外は、どんな高名の文筆家でも猥りにその内部へ入れるわけがない。もし強て這入らうとでもすると、深刻な打擊か痛棒かがその頭上に、どこからともなく降つて來る筈である。それを××氏のみは不意に現はれて、何年かは歌舞伎座で派手な働きをしたのであつた。

尤も、××氏が有名な人なら、これはまだしもあり得る話か知れない。が、氏は羽左衛門のために有名になつた感じの人である。即ち、羽左衛門の友情的庇護の下に脚本を書き、芝居道に名を出した形であつた。つまり、それ程有名でもない人を、

單に子供の時の知り合ひと云ふだけで財界全般には信任したのだ。そして縱横に歌舞伎座で活動させたのだ。××氏の方に引左衛門と接近する利益こそあれ、羽左衛門には氏に近づく何の利得もなかつたのは明かだ。それを單に情義づくで親しみ、大きに引立てもしたのだ。當時斯界ではこの羽左衛門を勿論「愚」と嘲笑した。羽左衛門と雖もそれを滿更知らぬでなかつたらしいに拘らず、よく昔のよしみを守つてゐたと仄聞してゐる。

どうあらうと、一旦情義で結ばれると、日頃の名高いずぼらと逆に、うんと力瘤を入れる。それが有名無名を問はない。損得をさう顧慮しない。時に外から「愚」の誹りを受けても、恬として恥ぢない。これが案外世間に知られてゐない方の羽左衛門の一面の氣質らしいのである。「顏」「格」「地位」一流は一流同志と云つた哲學で、人づき合ひの上で、相手を取捨選擇する事が、中學校のどの採點のきびしい數學の教師にも劣らぬ世界で、羽左衛門のやうな人は珍しい。現に角××氏と羽左衛門との釣り合ひのとれぬつき合ひは、確に空前絶後であつた。今日でもそれが一つの語り草に殘つてゐるのを見ても分る。が、その結果は假りに「愚」としても、根本の考へ方に於て、私は却つて羽左衛門の方に同感する。それに一理あるとして、人に對する場合、この相手の力、地位、富、才幹はいくらいくらと、さうさう人々にかいてかゝることはあるまい。人…第一條件ではあるまいからである。

○

これも大正の初期だと思ふ。澤田正二郎が全く無名時代で、宙にさ迷つてゐた頃である。確か上山草人の「近代劇協會」に屬して、下山京子なる女優と、「都新聞」の「役者の妻」を演じた時であつた。澤田としても日本のさうした通俗劇は殆ど最初の時代だ。それにこの作の主人公は羽左衛門をモデルにした作品だと噂されたりしてゐた。で、澤田は突然羽左衛門を訪ねた。そして右の芝居の主役の扮裝萬端に就いて教へを乞はうとした。

重ねて云ふが澤田の窮してゐた頂上の時代である。が、羽左衛門はこれを丁寧に待遇したと聞く。懇切に教へ導いた佳話が當時一寸人の心を明るくした。流石の澤田も舊恩は忘れないと見える。去年市村座で「桃中軒雲右衛門」を上演した時、「内の場」に小道具の羽子板が飾つてあつた。私はそれをよく見ると、目立つ方の分は確に羽左衛門の「め組の辰五郎」であつた。澤田の舞台用の羽子板にこれを發見して、そこに何となく澤田の謝恩の心持を感じて私は微笑した。無名時代の澤田にさへ、彼はかうして分け隔てなく近づけ親しんで來たのである。

○

大正十五年一月、羽左衛門は歌舞伎座で二番目に右の「め組の喧嘩」をやつた。その時の女房のお仲は、女形の顔ぶれから考へると秀調の筈であつた。所が、案外にも松蔦がお仲に廻つてゐた。

その時偶然、私はその方面の實務に携る人の話を聞いて、お仲を松蔦にやらせたのは羽左衛門の註文であるのを知つた。それだけなら何の文句もない。が、面白い事には、羽左衛門がさうした誰でなく誰にやらしてくれと、相手の役者のえり好みをしたのは、この時が殆ど最初と云へる位だと云ふ。我々でも役者とはさうして相手をえり好みするのが當然だと聞かされてゐる。それを羽左衛門は殆どしないと云ふのだ。或は、しても極めて稀で、この松蔦のやうな場合は珍しいと云ふのだ。恰も、それは平素の彼が相手の身分高下に拘泥しないやうに、舞台上でも役者にあり勝ちな相手の不足を滅多に云はぬと云ふのである。時には「蟲」の加減で例外はあるであらう。が、大體に一貫して人の身分地位の高下を區別しないおほらかな彼の心が、これ等の實例で一層よく分ると思ふ。

○

羽左衛門と女性とは離して考へられない。で、聊か俗事に亘るが、順序として聞いて貰ひたい。——

私の知人の話に、兜町に七人の妾を持つ相場師があるさうである。七人の妾のある相場師、と云ふと人はすぐと豪奢な人間を聯想するであらう。が、事實は大變な相違で、その男は年中ひどい貧乏ださうだ。一年中齒入れのきく粗末な日和下駄をはいて、木綿同様の着物を着てぴいぴいしてゐる。即ち、彼は七人の相手の生活のために、自分は贅澤は愚か、その日暮しの日給取りの腰辨同然の生活をしてゐる。さうして貧窮極まる生活に堪へ、精一杯の努力をしながら、辛うじて彼は七人の生活を支へてゐると云ふのである。

その上、その男は七人の相手を、必ずしも愛してゐるのではない。もし幾分でも所謂不實な眞似が出來ると、七人の誰もと手が切れるらしい。七人の方でもどうにか面倒を見てくれるので、その儀彼に從つてゐると云ふ程度だからだ。が、その男にはその仕打が出來ない。又、なぜ七人の相手が出來たかと云ふと、最初の一人は何かの行がかりでさう云ふ關係になつた。で、捨てるに忍びないと思つてゐる中、つい次の相手に出合つた。それも何年かたつて捨てるに忍びない中に、又次の相手に出合つた、と。かう云ふ關係でいつの間にか、その數が七人になつてしまつたと云ふのである。

彼を道徳的に見ると、一も非難すべき點などはない。まるでた不心得者と云ふのにつきる。が、これを人間的に見ると、とこかに温いものだけはありさうだ。自分が貧困を極めてゐて、七人の人のために心配してゐる。そして年中齒の下駄をかちかちと鳴らしつつ、養ひ料を配給して歩く。他に百の不徳はあるとして、兎に角不思議なユーモアと、一味の温情とは感じられると思ふ。

この男と羽左衛門とを毛頭一緒にするのでない。併し、神の目から見ると、羽左衛門は幾分この系統の温情家ではなからうか。松居松翁氏は彼を「戀の勇士」と呼んだ。その意味の火の如き戀の試練を經て來たのも事實だ。が、私はそれと趣きの變つた話も聞いてゐる。それは震災の少し前ださうだ。彼はある蓄音機會社へ自分で聲色の吹き込みを云つて來た。それが貧乏の餘、金がほしいからと云ふのだ。裕福な今の一流の役者には全く案外な話であらう。が、事實派手な浪費家の羽左衛門は金に困つて殆んど徹宵でその仕事を續けた。そして夜明け前になつて一段落つく時分になると、彼を迎へに來る婦人がある。所が、その仕事の數日間、毎日來る婦人が一々違つてゐたと云ふのだ。——七人の妾、さう云ふ突飛事でないにしても、兎に角彼がさうした流儀の人であるのは、この話で幾分分らうと云ふもつた。

これも羽左衛門には、[illegible]だけに、いつも[illegible]を掛て、相手を選んで愛してかかるのださうだと聞く。で、これまで一つ二つとふえはするが、過去の者も決して振り捨てない。その結果、迎へに來る人が一々變るやうな結論に達するのではあるまいか。(震災後の現在はさうでないと聞く。)しかも、その結果になるのも、根柢に於ては一種の温情家の氣質に根ざしてゐるわけになる。別に、これは街頭の風聞で、眞僞は保證の限りでない。が、右のやうな拙くない女性を知つてゐた彼は、震災でひどく困つた。で、物質に窮して震災後仕方なくそれぞれ整理したと云ふ噂さへある。整理すべき數の愛人を持つ、先きの兜町の七人と件と同じく、根本の心持の温さに於ては、よく人を微笑させるやうな所があると思ふ。私の俗な觀察が誤つてゐなければ幸である。

要するに彼は所謂「冷い者は役者」の世界で、稀に見る人情家と云へる。××氏の場合、澤田の場合、愛人の場合、共通してそれが察せられはすまいか。險しいこの世の中で出世した人に珍しい氣質と云つて過言でない。

二　will を will する人

文豪ヘンリツク・イブセンは「汝の欲する所を行へ」と云つた。したい事をしろ、これは平凡に聞える。が、人間がしたい事をするとは、畢竟、理想を如實に行ふわけだ。夢を實にするわけだ。で、この言葉を比較的の意味ででも、やり了ほせてゐる人はいくらあるかと思ふ。

云ふ迄もなく、したい事をするには意志が入る。力が入る。決斷力が入る。金が入る。反對に外聞、世間、地位身分を恐れては不可能だ。故に役者のやうに外聞世評を憚ろ商賣の人で、「汝の欲する所を行へ」を實行してゐる人はいくらあるであらうか。

それは多分に見出すのは甚だ困難だと思ふ。併し、唯一人あるとははつきり云へる。即ち、市村羽左衛門がそれである。彼だけは昔からイブセンの言葉の如くしたい事をして來てゐる。彼は臺灣へ行つて見たいと云つてゐるかと思ふと、大正二年六月にふいと臺灣へ興行を口實に行つて來た。そして當時のある雜誌にしたい事をした嬉しさからであらう。蕃人の中にまじつて寫した寫眞を上機嫌な顔つきで發表してゐる。これはどうして奇抜だ。それは今度の外遊で、アメリカで上山草人と一緒に寫眞を寫してゐる。映畫俳優のチャールズ・ムーレエと變な姿をして寫眞を寫してゐる。その程度のもでない。何しろ蕃人の中に、あの大きな井をとがらして突つ立つてゐるのだ。蕃人と彼とのとり合せ、再び云ふが今度の外遊の寫眞には見られない圖である。

かと思ふと、その臺灣で彼は「車曳」の梅王をやつた。何分夏の烈しい暑さだ。梅王の紅の隈が舞臺の炎熱で流れ出して、顔中眞つ赤になつてしまつたと云ふやうな話を殘してゐる。又、その「車曳」に使ふ車が大道具にないため、ポンプに布をかけて車にした。それを時平公の役者が舞臺でつい足で布を飛ばしてしまつた。で、ポンプの正體を現はしてしまつた。――こんな話をも殘してゐる。

別に、その頃、自動車を手に入れると、自働車で遠方の旅行がしたいと云つてゐた。と、關西迄すぐと自働車旅行をした。近年一度世界を廻つて見たいと彼が云つてゐる噂を聞いてゐた。と、この春の外遊である。萬事がこんな風である。そこにこの社會の人に珍しく、宣傳意識が尠い。商賣意識が尠い。單に行きたいから行くだけに終つてゐる。

○

彼の三十四才明治四十一年一月の「演藝畫報」の「名家眞相錄」に、彼の自傳が出てゐる。それは到底現在の彼でない。ま・準備時代の筈だ。所が、その若い三十四才の時ですら彼よ

「宿つ私は自分のしたいと思つた事はして來ました。市村の家も十五代にしました。これで親さへ見送つてしまへばいつ死んでもかまひません」と語つてゐる。三十四才の若さでこの言葉を淡々としてはく。そこに多少無智の强味があるにしても、あらゆる障害、難儀、危險、犧牲を拂つて、ウヰルするものをウヰルして來たからの得である筈である。

○

序に、彼の今度の外遊中、何を見て來たか、私は間接だが一二の方面でその消息を聞いて見た。が、それもその言葉通り一と通り歩いて來たと云ふだけで、特に意見や所得がないらしい。フランスのオデオン座で、岡本綺堂氏の「修善寺物語」を上演した役者のデミユース氏に會つて來たと云つても、單に會つただけらしい。歸朝土産があの探偵劇とダンスであるのを見ても、何かを摑む意識より遊ぶ意識が多かつたのが分る。

そして特種として話す事は、細君の「足」であつたと云ふ。何でもドイツとか迄は細君は日本服で押し通させた。所が、それで一緖に歩くと實に大變な人だかりがする。それは覺悟の上として、肝腎の和服を見に集るのならまだしも不氣味でない。が、下の方をじろじろ見る。即ち「足」と「足袋」とを見に來て仕方がないと云ふのだ。兎に角下の方ばかり見られるので、渡世の我もがにして細君のために中途で洋服を作ら[illegible]のだ。

その外は、言葉が通じたかつた失敗位のものさきいと語いた。例の如く「役者」としてより「人」として歩いて來るわけだからである。複雜な職業の役者でゐて、事を行ふのに彼位他に餘念のない人は珍しい。あらゆる人間にこの氣質が惠まれてゐたら、イプセンもこの金言をはかなかつたであらう。

三　警句と「いい店」と手紙

芝居道で俗に「市村式」と云ふ言葉がある。羽左衛門獨得の行爲、哲學、處世法を、いつの間にか「市村式」と呼ぶに至つた。畢竟、彼が以上の意味に於ける人格者、情義の人、溫情家、そして欲する所を行ふ性格が、今の世では稀有な人だからである。又、その稀有な人格なればこそ、彼として何の氣もなしにした事が、直ちに「市村式」になる所以である。

先きの貴婦人事件の言葉も亦立派に「市村式」だ。が、この「市村式」のさうした言葉は一種の警句と云ふべきではあるまいか。私は無論羽左衛門のやうな大家と交際出來る身分でない。で、私などがこゝに集め得た「市村式」の警句はその親しい知友から見ると、彼の警句としては貧弱揃ひであらう。が、

兎に角その二三を書いて見る。

一、ある時彼が舞臺監督のつく芝居の稽古を見てゐた。すると舞臺監督が役者にとつて隨分厄介な伯父さんであるのを感じたらしい。で、傍の者に彼は云つた。「俺はあんな事で頭を使つちや叶はない。精々樂をして長生きをしなくちやならないからね」

こんな不心得な言葉を、彼の警句と見做す私の不心得を許されたい。が、芝居に對しては立派な犯罪ながら、彼の場合ではどこかに僅少の情状酌量の餘地が殘されてゐるかと思ふ。兎に角間違つてゐても、この言葉のニューアンスが一寸面白い。

二、既記の彼の三十四才の自傳中、彼は賑かな事が好きだと云ひ、「横になると三十分と起きてゐた事がない」と云つてゐる。又曰く「ぽつねんと一人でゐるといつでもすぐ眠くなつてしまひます」と。彼の如きは生を昭和の御代に享けてゐて、不眠症を殆ど知らぬ人であらうか。

三、今度の外遊中、フランスにゐた時だ。彼は有名なエトワールの凱旋門の名を呼び難がつた。で、彼は云ふのに「玄武門でいいぢやないか」と。滯佛中彼はそれを例の原田十吉の玄武門と呼び續けてゐたさうである。

四、益々駄句を取次ぐ。先達帝劇で「源氏店」の通しが出た時だ。ある日大入り祝ひに、各俳優が食ひ物を持ち寄つてそれに句を添へる「遊食會」を催した。それぞれこつたものであつたさうだ。と、彼は手輕に菜つ葉のおしたしと、鮪の切り身とを持參した。そしてその與三郎の「いやさお富、久し振りだなあ」になぞつて曰く俺のは「したし鮪だ」よ。

五、彼の愛嬌、それは誰知らぬ者もあるまい。その持前の愛嬌で敵も味方も參つてしまふ。故田村成義翁さへそれを憎々しいと迄云つて屢々感嘆してゐる。で、これは彼の警句と云ふより、故市川段四郎の警句である。段四郎はよく口癖のやうにかう云つたさうであつた。「市村は困るよ。男を惚れさせて困るよ」

段四郎はこの氣持のために、晩年迄後進の羽左衛門のために、時として松助もどきに輕い脇役をつき合はされてゐたのであらうか。——かう云ふ句を紹介してゐては限りがない。この程度に止めておく。

で、昔からの友の梅幸は事毎に述懐してかう云つてゐる。「市村はいい店を出したよ」と。その言葉にも中々味がある。が、梅幸云ふ所の「いい店」と雖も、どうあらうと「いい氣質」があればこそだ。單に無鐵砲や强氣や度胸では出せない。「いい店」は必ずしも偶然に出せたのではあるまいと思ふ。

○

併し、この人にも苦い修行期はあつた。それも随分の長い間であつた。今にかう云ふ風采な大向はなくなつた。手烈しい言葉は鈍くなつた。が、彼の若い間「大根」と云ふ大向のやつつけ方は、寧ろ彼の影法師のやうにその身について廻つた。大根と云へば若い時の彼、若い時の彼と云へば大根の言葉を聯想する位である。流石の彼もそれを後年某誌の上でうんざりして話してゐる。「いくら拙からうと、舞台に出てゐる以上は、自分ではいい積りでゐるのです。それを「大根」と食はせられるのですから、これだけは本當に情ないと思ひました」

但し、さう云ふ時代でも、その天稟とも云ふべき舞台的魅力（それは時に悪用して困るが）は備つてゐた。彼の十二才の竹松の子役時代に、既にそれを現はしてゐる。そして却つて出世の緒にありつけた話がある。

今の明治座の千歳座時代分であつた。五代目菊五郎が「加賀鳶」を出した時、子役の彼は小按摩の役で、菊五郎の梅吉の肩をもんでゐた。ある日、舞台で菊五郎が突然「おい按摩さん、お前のお父さんは達者かね」と聞いた。彼はびつくりした。そんな白の受け渡しはないからだ。が、その場の出來合ひの白で「いいえ、死にました」と答へた。と菊五郎は「お母さんはあるだらう」と聞いて[illegible]た。すると菊五郎は可笑さうにと云つておいて又「さうして今前の口はどうしてつぶれたのだ」と聞く。

何分十二才の子供だ。一寸切りぬけやうがない。が、だまつてゐては舞台に穴があくと思つて「臨月でつぶれました」と云つてのけた。で、菊五郎もそこで句切りをつけていい工合に、竹松の小按摩に引つ込む手順をつけてくれたのであつた。

幕になつた。菊五郎は彼を呼んだ。そしてよく即座の返事が出來た「えらい〳〵」と云つてはほめる。褒美に當時流行の毛糸を三把與へて、その舞台度胸と頓智とを賞したのであつた。これなど後に彼が特に五代目菊五郎に見込まれた理由の一つになつてゐるわけであらう。（主として彼の「名家真相録」による。）

○

明治三十九年十月の「文藝倶樂部」の臨時増刊に、「藝人出世譚」號が出た。當時の藝界のあらゆる大家の出世譚が出てゐる。その中で「市村羽左衛門」の項目を見ると、これは一寸風變りである。外の大家がそれぞれ自分の出世譚を話してゐる中に、彼はさう云ふ手前味噌でもあるまいと云ふのであらう。その時市村座で自分が「一の谷」の「熊谷」をしてゐたのを幸

に、一つの舞台的逸話を話してゐる。尤も、それは談話と違つて、珍しく彼自身の筆になる手紙の文章で發表してゐる。

その前「文藝倶樂部」記者が「出世譚」として彼の話を聞きに行つた。その時彼は舞台へ出る前で忙しかつたらしい。で、後より手紙で申上げますと云つた。それを本當に守つて、談話でなく自筆の手紙で云つて寄越してゐるのだ。それが外の人々の「出世譚」と違つて、逸話であるのが珍しい。が、更に話でないと云へぬ筈の役者が、手紙にしろ文字で答へてゐるのが珍しい。この増刊「出世譚」號中の一異彩である。その上、文體と云ひ、云つてゐる事と云ひ、全體が「市村式」であり、「警句」であるとさへ云へる位だ。試みにここへ全文を掲げて見る。

前略。思ひ出せし事實御許まで差上候御取捨御心まかせに候扨明治廿年頃堀越の芝居にて築地の伯父さん（團十郎）が檀特山と陣屋の熊谷をつとめ候時同じく本所壽座にて荒次郎丈が同役に扮し候事有之例の肥滿の大兵ゆらりと馬に跨がれば何條雜用飯の馬共此布袋どのを乘せ得らるべきオーイくくと云ふ間もあらばこそ胴骨折れてメリくくくく直實どのはつんのめる是非なく馬の口取りてどうくく見物イヨー鬮取とほむる。

是につき嘗てをぢ（團十郎）が上州太田にて同じ熊谷役にて馬上ながら花道を駈出せしに如何しけん其時の前足綱十郎足をつき前へのめる所を直實さそくに飛降りすぐと乘直せし見事さ其時團十郎は馬術の心得さへありとて大評判なりしと。この興行には右の荒次郎も一座せし故云はば兩熊谷の出會なれば堀越荒次郎に顏をしかめて曰く外の事はお前に負けぬが檀特山の熊谷だけは叶はぬくく。

右よろしく。

これがその記事の全部である。この手紙を當時、藝界を威壓してゐた「文藝倶樂部」に送つてゐる。ここにも見える天眞爛漫は、寧ろ英雄と云へるやうな氣がする。私はこの古い記錄をやつと手に入れて、今更その感があつた。かうして彼の赴く所に、「戀」と「警句」とがあると云へば誇張であらうか。

四　缺點

元より彼も人の子だ。缺點はあるであらう。その人格者と云ふ意味も、「人格者に非らざる人格者」とする方が正當だ。併し「人」としての缺點など、私如きが數へ立てる資格はない。で、ここに「藝」の上だけに就いて彼の缺點を云つておく。

一、氣質の長所が缺點となつて、時に藝に苦勞の不足が見える點。

一、三五ダクの共兵一のやうな色気ある演出をする。併し、た殊に新作と云ふと其の役が殊にいつも同じやうに見える點。即ち、舞台は新しい作をやつてゐるのに、羽左衛門の役だけに、いつかの羽左衛門の新作の役が又出て來てゐるやうな感じのある點。

一、古い物でも近年手がけた初役の拙い點。

一、女形をすると妙にアラが見える點。例、「春日局」の高尾」「辨天小僧」の娘の間。「八汐」等。

五　結論——その生活態度

私は主として羽左衛門の人間のみに就いて論じて來た。そして「缺點」以外には、その舞台と演技とに對して云ふ所が尠かつた。併し、それは私の故意に企てた點である。なぜと云つて、彼のやうな存在は、「藝」よりも「人間」が却つて獨得だからだ。又、見方によると「藝」より、「人間」に價値がある位だからだ。羽左衛門の「藝」は容易に語りつくせる。が、單純に見えてもその「人間」と、その「人間的興味」とは一朝一夕に語りつくせない。さう云ふ意味の人間としての方が偉大な藝術家であるのが、却つてこの人の本體ではあるまいか。名優と相場のきまつてゐる彼に、私のこの見方が、そのファンを怒らせたければ仕方がないことである。

一方、今迄私が「藝」の賞讃をあまりしないのには、既に定評が出來てゐるからでもある。しかも、この世間の定評に必ずしも服せない演技はある。が、誤つてゐるか知れぬが今迄私は自分の信じる所によつて、羽左衛門の數多の作作を觀賞して來た。私の佳作とするものは「盛綱」「實盛」「富樫」「細川勝元」「若狭之助」「勘平」「貞」「木村長門守」「清心」「與三郎」「御所の五郎藏」「大月藏人」「藤井紋太夫」「勝頼」「久我之助」「三浦之助」「判官」「此下東吉」等を主とする。

世人と幾分見方が違ふか知れない。が、これにしてもこれ等の妙技の理由をここに語るのは全く無用の沙汰であらう。で、再び羽左衛門の「人」を考へつつ、この稿を完了したいと思ふ。

以上述べたやうな人格、溫情、したい事をする、市村式、それ等を包むに、この持前の明るさ、率直さを以てする。——羽左衛門が誇つてゐる「江戸前」と云ふやうな好みは、東京が地方人の都になつてゐる現在、或は段々と知己を失ふか知れない。影が薄くなるか知れない。特に藝の上のその「江戸前」は、案外「寶の持ち腐れ」に終る日が來るか知れない。併し、一方の人格的輝き、人間的光りだけは、人間の本能がよき人を

好み、人格者を尊ぶものだけに、いつの時代でも彼はその存在を曖昧にするわけがないと思ふ。即ち、「藝」でファンを拗くする日が來ても、「人」で一方にファンを多くする役者ではあるまいか。云ふ迄もなく、特有の「江戸前」の藝は郷土的に狹い。が、「人」の光りはどの地方でも、日本人である限り幽かながらもそれに打たれる道理だからである。そしてそれは結局役者としての彼のファンになつてしまふわけだからである。

しかも、彼は一切さう云ふ人格者らしい感じは愚か、片影をさへ自身で意識してゐない。又、どこから見ても彼はさう云ふ人格者的人物らしい所が見えない。それだけに某博士の人格者論は、今でも反對者がありさうな位だ。が、そこが却つて本物だと思ふ。同じ役者でも多少共さう云ふ人物意識を持つ傾向の人がある。が、さう云ふ意識があるのは一番本物の資格から離れる。役者中で非人格者と見えて案外な人格者、人格者らしからぬ人格者、それがこの人に存外當てはまる評價ではなからうか。

繰り返へして云ふ。その羽左衛門襲名の「柄や細い幹でも十五代」に何となく祭せられる所の、江戸つ兒の誇りと云ふやうなものは、遠い將來では亡ぶ日があるか知れない。が、いくら百千人の世の中が來ても、難解なバルザツキアンは別として、人間羽左衛門などの純な人格位は、ある程度迄人は理解すると思ふ。藝術家は「藝」か「人間」かで賣れればいい理屈でないか。彼が「人間」で賣る氣なら、それは本性だけに、「藝」で賣るよりも樂であるか知れない。しかも、人間はさう云ふ自然に流露するものを一番尊び愛する者だ。彼は「人」で却つて特異な立場を作つて行くのではあるまいか。

この十一月、歌舞伎座の歸朝興行で彼は大切に「胡蝶の舞」の舞踊を見せた。それに關して私は自分の劇評にこんな事を書いた。僭越ではあるが、便宜上ここに重ねて引用するのを許して貰ひたい。

「胡蝶の舞には云ふ事はない。羽左衛門が新舞踊で目先を代へようとしてゐる無邪氣さを見ればいゝだけであらう。そしてこの人のから云ふ無邪氣は、世相險惡人心苛酷の今日では、却つて一つのオアシスであるか知れない。……」

右の羽左衛門人格者說は、一歩讓つて考へる餘地があるとする。併し、他の一面のからした無邪氣、それだけは特に今の芝居國に限つてのみ、よき「安息日」をなすのではあるまいか。私はこの感想をなるべく眞實としたいと思ふ。理由は歌右衛門亡き後の劇界は、當然の順序として彼が首位に上るべきだからだ。さう云ふ日、彼の存在が私の感想を實際に影響させるとす

れば、今の芝居國さへ、もなは前日を迎へ[illegible]にた[illegible]だ。斯界にさう云ふ役者を頭に頂く明るい[illegible]た日の來る事を期待してゐるのは、單に私一人でないと思ふ。

○

猶、序ながら羽左衛門の生活態度の立派さをも附記したい。それも畢竟、欲する所を行ふ氣質にもよるのであらう。が、彼の生活態度は常に曇りがない。暗さがない。そして男性的に雄々しくて、大部分の役者が女性的生活人である中に、珍しく男一匹の感じを與へてゐる。で、彼は多く言行一致である。或は、嘘や駈引が尠い。故に、好きとなるとどんな女性でも相手にしてしまふと云ふ勇士の俤は、その戀愛以外の生活上にも、屢々見受けられる所である。

役者と立派な文筆の人とを一緒にする不當を許されたい。私は思つてゐる。この羽左衛門の生活態度の立派さは、どこかに小説家谷崎潤一郎氏と相通じてゐはすまいか。谷崎氏の生活態度は、私のひそかに敬服して止まない所である。が、羽左衛門もややそれに近いかと思ふ。併し、我々はこの傾向の人々の生活態度の立派さに打たれつつ、多分、意志することを行爲として現はし切らずに終るのであらう事を感じる。最後に羽左衛門の生活態度の立派さを説くのは、それが凡庸の者には、どうし

一つ見て置い[illegible]

別に参考迄につけ加へる。以上私は羽左衛門をや一寸褒めすぎた嫌ひがあると思ふ。併し、それは決して彼の[illegible]を[illegible]と見てゐるのではない」が、今の役者を對象とすると、羽左衛門に云ふ評價は必ずしも過賞ではないと信じる。一般の社會人の場合、羽左衛門の人格は、或は人格者の譽れはないであらう。羽左衛門の溫情や無邪氣すら、或は譽れに値しないであらう。併しながら、彼は斷る迄もなく一般人と云ふより藝術家、いや役者である。即ち、「役者」と云ふ一制限」にゐる人である。で、私のこの稿のすべての文字は、悉くこれを「役者」なる範圍内で云つてゐるのに過ぎない。故にすべてを一般人に語つてゐる文字と混同されると一寸意味が違つて來る。日本の實狀が役者を藝術家視こそするが、全然制限なしには見ない以上、私は自分の態度を一應辯明しておく必要があるとかへるからである。（三、十一、三〇）

スポーツとマルクスとシネマ

冒險の偶像へ、冒險の偶像へ

出井盛之

マルクス學の流行、スポーツ熱の旺盛、シネマの愛好は、それぞれ機械生産的平和時代に於て、偶像を造り、多くの人々に安心と滿足とを與へて居る。

マルクスの學問ほど、異つた人によつて、異つた評價を與へられるものはないであらう。ロンドンのハーンショウは、四十箇年の間、英、米、佛、獨、伊、露の著作を研究した結果、「マルクスの學問體系は、約言すれば、偶像病的であり、亡國的であり、而して語らないものである」と斷言して居る。これに反して京都の河上博士は、十箇年の間、主として英、獨の書物を研究した結果、「マルクスの資本論は最上の經濟原論である」（河上肇、經濟學大綱序）といふ斷定に到達された。これら兩極端の間に、多くのマルクス研究者は樣樣の程度の價値を、彼の學説に於て見出して居る。ウキンストン・チャーチルを、古今無比の大政治家であると心得て居る、ロンドン大學教授ハーンショウが、マルクスの學説に腐敗した卵ほどの價値を措かなかつたのは、敢て不思議とするには足らぬ。それにしても、事實、わが河上博士は學者マルクスを、學席に列せしめておくのを冒瀆なりとして、エホバの右にでも座せしめるつもりで居るらしい。

話はこうだ。最近改造社版經濟學全集の第一卷、河上肇著經濟學大綱が、私の机上に來た。これは寫眞入りの堂々たる大册である。誰しも厚い頁を繰る前に、繪を先づ見る。口繪は鹿子木氏筆著者の肖像。卷の後半にはヒユウム、スミス、マルサス等等より、テイラア夫人の寫眞まで挿入されて居る。けれども大切なマルクスの肖像寫眞は、どこにも見えないので、不思議な次第と思はれた。ところが同書九頁に於て、このことに關しての斷り書の用意があることに氣がついた。その文にいふ

一下[illegible]に挿へせる資格に、[illegible]のまゝを存したのである。そこには吾々の偉大なる教師の肖像が脫してゐる。彼れは他の學者たちと共にそこに伍すべく余りに偉大であるであらう」と。こゝにいふ「偉大なる教師」とはマルクスを、しかして「他の學者」とはヒュウム、スミス、マルサス、リカアドウなどを指稱してゐるのは勿論だ。しかるに、同著述の他の箇所に於て、それはすなはちアダム・スミスを研究した最後の言葉に、スミスが「偉大な思想家」であつたことを、著者は立派に折紙をつけて居られる。本書下篇「資本家經濟學の發展」は、往年の「資本主義經濟學の史的發展」に多少の加筆をなしたものに過ぎないとはいへ、スミス、リカードの勞働價値說が附け加へられたほどのものであれば、矛盾の許容さるべき習作とは申されまい。そうすると、偉大なるスミス等と伍すべき、マルクスは餘りに偉大であると河上博士は斷じて居られるのである。もつとも、前揭斷りの文句は「であるであらう」といふ言葉で終つて居るからといふ議論が起り得る餘地がある。しかし著者と[illegible]、日本ことに[illegible]せずしては、肯定か否定か疑問？ そのいづれであるか判斷しかねるやうな文章を綴る節はない。少なくも學說上のある部分ではスミス及びリカアドウの學生――講義ノートを編輯するを能事となすやうな不心得な學生といふ意味ではない――であつたカール・マルクスは、この席次の問題に就いては、大いに苦笑を禁じ難いに相違ない。

由來、人間の所有物の中で、科學といふものは最も新らしいものゝ一である。であるから人間の頭腦の機能としての科學心は、未だ發達が幼稚である。飽くまで冷靜に、些の偏見も交へず、いろいろな現象を觀察し、學說を評價するといふ位、人間精神にとつて六つかしい仕事はないのだ。科學よりずつと早く發達した、魔術や迷信や宗教は人の頭腦を少しも疲勞せしめないほどに全く、人間のものになり切つて居る。それ故この種の精神作用が抑壓さるゝならば、人間は安心と立命を失ひ、行くべき方向について全く盲進するのほかはないほどになるのである。人間にとつて[illegible]い。[illegible]るのみである。故に偶像は何よりも人類にとつて、どんなに欲しいものであるか知れない。偶像を欠いた人間生活は存在し得るであらうか、偶像のない人生はあり得るとしても、如何に乾燥したるものであらうか。

偶像は人間が勝手に造り、勝手に破壞し再造するものだ。ファンダメンタリストと進化論者の討論が終結にならないとても、現代人はすでに、神の實在に對しては、大いに疑問を持つて居る。各人の理想に從つて、神と宗教を認めて行かうとして居るのだ。しかして現今、青年男女の理想と關心を養成する場所は、學校とフットボールと映畫劇場であることは爭はれぬ。ボストンのプロテスタント教會の日曜が淋しかつたり、巴里のマダレーン寺院が華麗な衣裳の見物場となつてゐるに對照して、何處でも教室が狹隘を感じ、競技場が新設され、劇場が常に滿員であるのは事實である。從つて偶像の祭司の役も變じて、學者、チャンピオン、スターとなつた。

何故、學問やスポーツやシネマが時代の偶像を造るのであるか。それはこれらが一樣に何かに冒險を伴つてゐるからである。元來、人間は冒險から生れ出でた。結婚も出産も冒險であれば、火を造り、獲物をとり、河海を渡るなど皆冒險を要する。現代の如き平和であつて、人類の苦痛――饑饉、惡疫など――が征服された時代にあつては、抑へ難い人間の冒險心は學問か競技か活劇に向ふよりほか、他に途がなくなつて居る。

學問のなかでマルクスの學問が比較的に冒險性を我國に於て有したことが、他の學問に比してマルクスの大流行を見た所以である。例へば齲齒の代用を勸めさするのに最も適し居る金屬である金を、貨幣制度の基礎とすべしといふやうな、黄金崇拜な正統派經濟學には偶像は存在しても冒險性を少しも有して居らないことは明瞭だ。故に人氣を呼ばない。しかし今日のわが國に於ける大學の教室で、マルクス學の講義をする位、冒險のことはないではないか。學者と言つても、その中には二種の差別がある。すなはちその第一は、第一次的な材料に直接觸れて研究をなす學者であり、その第二は、第二次的のつまり他の學者の遺した業蹟に依つて研究するものである。この第二種の學者は、書齋を唯一の仕事場とするのであるから、野口英世博士の如く身命を賭するやうな冒險に出會ふことは、萬萬絶無であるといつてよい。そこで學者自身と、學問憧憬の讀書人士の冒險心を滿足せしむるために、書齋の中で思想的飛躍といふ冒險が屢々企て行はれるのである。思想的飛躍とは、チェック・アップする根據を有せずして結論を下すことをいふのである。文明の恩澤といふものが、種々の人生の危險を奪ひ去つた現代に於ては、かゝる軟柔なる程度の冒險でさへ、非常なるセンセーションを社會に惹き起すのに充分の力を有するまでに至つて居る。

スポーツの本質が、人間の有する原始的冒險本能を、最も上品化したものにあることは明白だ。例へば野球を御覽じろ。投げる、擲つ、走る、盜む、殺す等、皆今日の人間生活には不用となつた本能的活動の組合せではないか。原始人にとつては、これらの諸行動は遊戲的ではなくて、日常の生活にとつて眞實必須の勞働であつたのである。それが今では運動場の外でこれらのことが行はれると、犯罪を構成するといふことなつて了つた。しかし人間の本性は容易に變化しないから、文明が進むにつれて、原始本能の發露を合理的に行ふ形式としてのスポーツが全盛を極めるのは、自然であり、また人生を最も充實せしむる手段として、その發達と普及は喜ぶべきものである。たゞスポーツは學問とともに、その特質が有閑階級的である點に關し、多少の注意を拂ふ必要がある。詰襟の制服を着て、米國に遠征するほどの勇氣ある學生野球團を有する日本に於ては、幸にしてスポーツのブルジョア性は餘り感ぜられない。先頃ある處のテニス・トーナメントに出場した青年男女は、首の廻りに汚れたタオルを結びつけて居た。もし米國のクラブや、フランスのサークルのやうに、テニスコートに於ては、ラケットの如く、荒い立縞の華麗な上着が缺く可からざるものとなつたなら、スポーツの普及などは忽ち止んで了はねばならぬ。だから佛國

勞働者階級のスポーツは自轉車乗りであり、獨逸青年のスポーツは徒歩旅行(ワンデル・フォーゲル)であり、しかして英國無産階級のスポーツは居酒屋(ペアロファ・ハウス)とハイド・パークでメートルを揚げることにきまつて居るのである。

映畫は學問やスポーツが到底問題となし難い性質の冒險を、巧に取り扱ふことができるといふ特性を具備して居る。スタヂオンに於て、如何なるスタンツが演ぜられるにせよ、それは常に戀愛冒險を中心として居る。教室や競技場の中では、戀愛冒險ばかりは行ひ得るものではない、そこでこの種の冒險についてだけは、シネマが獨占をなして居る有様である。現今のやうに結婚も家庭生活も餘りに常識化した時代にあつては、せめての冒險をスクリーンに見て慰藉するほかはない。故にこの普遍的訴求力を有するシネマが繁昌して役者が最も金錢的報酬の高い職業となつて居るのは怪しむに足らぬ。ケンブリッチやハイデルベルグの學者が一週間に一度のほか、ビーフステーキを食べられないことになつても、ホリウッドの女優は、豪奢を極めた生活をつゞけて行くに相違ない。

しかし、シネマのスターでさへ、時代の流れによつて何時までもその偶像的人氣が、維持されるかどうか最近はやゝ怪しくなつて來た。況んやスポーツマンやマルクス學者に於ておや。マルクスの資本論が新聞紙全頁の廣告を以つて販賣せられる圓本商品と化する時代に於ては、スポーツもシネマも相共に、ステレオタイプとなつて了ふのである。今日ではマルクスもスポーツもシネマも、定型的、常規的、常識的で、あまりに衛生健全のものとなり果てたことは否定し難い。現代人の前に、マルクス、スポーツ、シネマ、シンフォニー・オーケストラ、ジヤズ、ダンスと陳列した處で、彼等を退屈させるばかりだ。彼等の要求して居る感激は、もつと大きな冒險と衝動とである。哲學者ウヰリアム・ジエームスは、久しい以前、如何に機械生産的平和文明が堪へがたき單調であるかを、物語つて居る。ジエームスはある夏の一週間を、ショトウクワに逃つたといふことである。そこはすべてが理想的で、秩序と喜悦とが空氣を潤だして居た。それにも[illegible]處であつた。彼等の人達は[illegible]られた娯樂に依ふ、すべての慾望を滿足する設備に於て、少しの遺憾もない。素ばらしいセ百人の合唱團と、世界に比類なき野外講堂もあれば、水泳、舟遊、野球等ありとあらゆる運動設備は完全して居た。立派な學校もあれば、各派の教會もある。流れて絶えないソーダ水の泉もあれば、聽講無料の名家の講演は日々に催された。病氣なく、貧困なく、泥醉なく、犯罪なく、巡査なき世界だ。文化と、友愛と、安價と、平等とそれから、文明の名に於て人類の造り出した最善の結果のみが見出される宇宙であつた。この地上の天國に、ジエームスはある日好奇心を以てはいつて行つた。彼は貧罪も犠牲も汚辱も、汗泥もない一週間の生活を、この中産階級的樂天地に過したのであつた。そうして彼がこの暗い邪惡の社會に歸つて來た時、無意識に發した第一の言葉は「Oh! What a relief!」(やつと、ここで助つた)といふ嘆息であつたといふ話である。

ジェームスと同感を現代の文明に就いて有して居る人は、決して少數ではないであらう。そこで今日は、空だ、空の冒險だ。リンドバーグがアメリカからブールジエの飛行場に、單身大西洋を越えて着陸した瞬間から人氣の焦點であつた、シネマスターの羽振りは昔日の狀態を最早保持しなくなつた。世界の人々は今や天を仰いで、空に冒險の偶像が出現するのを待つて居る。我國のみ獨り、幕が上げられて、登場人物が現はれないやうな、拍子拔けの態であるのは、何人とあぢきなきことであることよ。（三・二一・一二）

否、然り、然り否

金子洋文

アメリカからいい映畫が生れるか

文化のアメリカ化。

この事はやむを得ない。悲しむべきではない。ブルジョア文化は、ヂヤヅの喧騷をともなひながら、アメリカと共に亡びへと行進するだらう。行くものをして行かせるがいゝ。

映畫は流行する。

アメリカ映畫は流行する。

明るいカメラ。

半裸體の渦。

資本と一緒に集中する傑れた俳優と監督。

アメリカは文學をもたない。文學をもたぬアメリカは、各國からあらゆる音樂家とダンサーを狩り集めた。俳優と監督と寄せ集めた。巨大な資本によつて藝術を征服しようとした。アメリカ映畫は全世界に無數の熱心なファンを得ることに成功した。

資本と映畫。

この二つのものの一致、その一致は金融資本主義アメリカの全世界に投げる皮肉である。

フランク・ムルノウもまたアメリカに招かれて全世界のファンの寵兒となつた。「最後の人」の作者は「第七天國」と「サンライズ」をつくつた。

「最後の人」は暗い。

だが後の二つの映畫には淚によつて齎らされた幸福がある。

プロレタリヤは不幸だ。けれども忍耐は不幸を救つて呉れるだらう。淚は幸福を呼び寄せるだらう。二つの映畫は觀衆に向つてさう敎へてゐる。

道路掃除夫の夫が出征した。

彼は戰死した。

妻は待つた。信仰をもつて待つた。

淚と信仰は死せる夫を甦らした。

それが「第七天國」だ。

都會の女が若い百姓を誘惑した。

男は妻を殺して都會に逃れやうとした。

妻の可憐な良涙はしかし夫を感泣させた。夫の良心と妻の可憐とは家庭を救つた。

それが「サンライズ」だ。

其處には忍耐と良心と信仰と涙がある。しかしプロレタリヤの現實の姿はない。

ジヤネット・ゲイナーはアメリカの涙だ。この涙は現實をぼやけさせる。

「最後の人」は現實に接近した。「サンライズ」は涙の暈をかけて現實から退いた。

ムルノウは聰明な監督だ。彼は現實を知らない筈がない。同時にアメリカ及びアメリカニズムの及ぶかぎりは、涙でも足りない事を呑み込んでゐるに違ひない。

その必要は先づ「サンライズ」の田舍を中世紀のそれにさせた。そして都會を歡樂の都にした。それは二つながら現實を回避する手法である。

都會は肉感的刺戟がなければならない。

ムルノウは出來るだけあくどい刺戟を澤山投げ込んだ。フアンを喜ばせるためにはそれが必要だ。

アメリカ資本の流行はお蔭である。

資本主義のドン詰りに來てゐる資本主義國は、腹のふくれたアメリカを假想せずには居られない。すくなくとも不安を忘れる必要がある。アメリカ映畫はその假想を質らうとする各國のフアンにとつて、失はれやうとする、また失はれた夢に外ならない。

アメリカから眞の意味のいい映畫が生れるか。

聰明なチヤツプリンさへ、ゴールド・ラッシユに愚にもつかない結末を餘儀なくされた。

これが一つの解答である。

スポーツに階級があるか

支那人は木や石を枕にして平氣で眠ることの出來る不思議な國民だ。

と外國人は冷笑した。

誰が木や石を枕にして眠りたい奴があるものか。

西洋人がテニスをして居た。支那の勞働者は聞いた。

「あゝして動いてゐると一日に何貫へるんだらう」

西洋人は吹き出した。

勞働から離れたスポーツを知らない支那勞働者も、それが遊びであると知つたら、さぞ腹立たしさを感じなかつたか。

支那人にかぎつた事ではない。小學校の運動會しか見たことのない百姓が、學生たちの運動競技を目擊したら同じやうな氣持を抱くに違ひない。

埃と汗に眞つ黒になつて働いて居るお働者にとつてはテニスも野球もない。學校へ上ることの出來なかつた人間は、テニスやラグビーの何物であるかを解しない。それはノラ息子どもの道樂でしかない。

ゴルフとはどんなものか。

その遊びの爽快さ。

ヨボヨボの政治家か貴族の坊つちやんのみそれを知つてゐる。

スポーツはダンスの一種だ。

ヂヤツが鳴りわめいてゐる。

ダンサーは、何處のホールにも二十人は居る。どの踊子でもお望み次第だ。

警視廳は當然踊子たちの浮氣なまなざしか取りしまるべきだ。

資本主義社會の矛盾、矛盾の深刻化から生れる苦悶、不安、動搖、それを忘れるためにインテリゲンチャは何處に行くべきであらうか。

小說か。

芝居か。

キネマか。

がそれ等のものはその不安と動搖とを忘れさせては吳れない。寧ろその傷を疼かせるばかりだ。

スポーツには階級があつて階級がない。ダンスは階級を超越してゐる(?)すくなくとも時代の苦悶と呻吟の聲を聞かずに濟ませる。彼等は無意識にスポーツとダンスに至らざるを得ない。

政府就中文部省のスポーツの奬勵は心得たものだ。愛國映畫を奬勵することは、やがてアンチ愛國映畫をひろめることになりかねない。(頭のある觀衆は愚かな愛國映畫からはその反對のものを感ずるからだ。)

スポーツにはその危險はない。スポーツで學生の頭をしびれさせて了へば科學研究を禁ずる必要も無くならう。

將校が學生の一隊の先頭に立つて野原をかけ廻る。

スポーツマンの頭上には首相杯が輝いてゐる。

ある、大會のマラソンで車夫が優勝した。しかし、オリンピック豫選には出られなかつた。

選手は學生諸君だ。

プロレタリヤにとつてオリンピックは他の階級のそれである。一方に運動競技をしたくても出來ない勞働階級を措いての氣まゝにそれの出來る階級のオリンピックだ。

全世界のプロレタリアートの運動競技を考へることは愉快である。が今日のオリンピックを考へることは不愉快である。

神宮球場のスタンドは日々觀衆にみちてゐる。それは壯觀だ。が吾々はそれとは緣のないプロレタリヤの階級を考へなければならない。

運動は愉快なものだ。

が吾々にとつてそれは愉快でない。

無心に見て居られない。

それがプロレタリアートのものになつたとき、スポーツは始めて愉快な、明るい、輝やかしいものになるだらう。

現在の運動競技は明るい輝きをもつてゐない。半面に暗いかげがある。

プロレタリヤのスポーツ、現在ではそれは考へられない。勞働時間が短縮され、賃勞働から解き放たれたとき、プロレタリヤは始めて自分の手にスポーツを握るだらう。

その時になつてスポーツは明るく輝き出すだらう。

マルキシズムは流行するか

一昔前の青年の間に最も讀まれたのはトルストイだ。

古本屋である著者のものを探し出すのは容易ではない。がトルストイは何處の店の書棚にも並んでゐる。資本主義が峠の頂上をめざしてゐた時代を背景にしてゐた當時の青年は

トルストイの思想によつてなぐさめられた。

資本主義社會は生長した。

それ以上の生長が容易でなくなつた。

矛盾が深刻になつた。

ブルジョアの足場はぐらつき、プロレタリヤは我慢しきれなくなつた。

マルクスは一般に讀まれることになつた。

讀まれる。以上に流行にさへならうとしてゐる。また現に流行になつた。

神田へんの大きな本屋は、書棚を宗教、社會哲學、文學の各部門に分散してゐる。そして更にマルキシズムの一部門を設けてゐる。

マルキシズムは全世界のプロレタリヤの思想である。同時にマルクスの個人の所産である。一個人に關した思想が本屋の書棚の一部門を爲して居る様は見事である。

流行とは流行に過ぎない。

マルキシズムは普遍化すべきだ。

また必然に普遍化するだらう。

が流行すべきではない。

マルクスは讀まれなければならない。其ためあらゆる努力が拂はれなければならない。

が流行させてはならぬ。流行として受け入れてはならぬ。

流行として受け入れるものは、ブルジョアと共に、その足もとに彼自身の手で墓穴を掘ることになるだらう。

ウルトラのやうに、マルクス・ボーイのやうに……

アメリカからいい映畫が生まれるか。

否。

スポーツに階級があるか。

然り。

マルクスは流行するか。

然り。

否。

映畫とスポーツのつながり

村山知義

編輯者な現在の三つの大きな「流行」として、スポーツとマルクスとキネマをと並べた。

だが果してこれ等は「流行」だらうか？

「流行」とは何だらうか？

その本來の意味では、「流行」とは、それを生んだ内容——廣く同時代人の心を打つた所の——が消滅してしまつたにも拘らず、形式だけが殘り擴まり、その持つ形式的特徴が益々強調される——さういふ形式の普遍性を呼んだ言葉である。

所が、言葉の意味が段々に曖昧に擴められて來た。何に限らず、廣く盛んに行はれれば流行だと云ふやうになつた。

言葉の意味が曖昧に擴まつてしまつたのだから仕方がないが、しかし矢張りその本來の意味は失はれず、或る觀念か、或る主義が、流

行すると」いふ場合に、その觀念なり主義なりが、形式的に、問ふ內容と件はずに廣く盛んに行はれることを意味してゐる。

スポーツは流行してゐるだらうか？

スポーツ全盛の時代であることに疑ひはない。

三段跳といふ特殊な跳躍法で一等になつた者は國寶であると云はれる。

甲子園や外苑のグラウンドの景氣は比較を絕してゐる。

新聞は每日のやうに大きな紙面をさく。

この魅力は何處から來るか？

一切の面倒臭い思想的なものをヌキにした肉體性。

明快な勝敗の決。

速度、健康さ、若さ、惨忍性。

名譽心。鬪爭心。

愛國心。

スポーツは單なる遊戯ではない。しかし何の內容をも持たない。

あとからくつつけられる種々の意義はある。國際的親善のため、日本の名譽のため、健康のため、何か一種の「魂」のため等々。

だがこれ等はその內容ではない。

スポーツはかくて確實に「流行」してゐる。

盛んに流行するものは利用される。

かくて支配階級はスポーツを利用する。スポーツの持つ魅力はそれ自身反動化の多くの危險性を持つてゐる。その肉體性は民衆を政治に無關心にし、スポーツマンシップ、フェアプレイ等の觀念は小市民的な自己滿足の意識と共通點を持ち、スポーツの効能として騷ぎ立てられてゐるインタナショナリズムは、實は階級鬪爭の事實をおほひかくし、愛國心を刺激する。これ等の傾向を支配階級は見逃さない。精神的物質的に補助奬勵し、灰色スポーツ團を作り、反動の一陣營とし、彈丸の餌食の養成所にする。

ブルジョア・スポーツは流行してゐる。そしてその流行は危險である。

キネマは？

キネマ全盛の時代であることに疑ひはない。

一番多くの觀衆を持つ觀物はキネマである。一番大きな人氣を持つものはプリンスと映畫俳優だ。

この魅力は何處から來るか？

美男美女。

一切の面倒臭い思想的なものをヌキにしたストーリー。

速度、センチメンタリズム、エロティシズム、遊蕩性、ナンセンス。

キネマは娯樂を賣つてお金を貰ふための商品であり、何等の思想的傾向をも持たないことを標榜してゐる。

キネマはかくて確實に「流行」してゐる。

盛んに流行するものは利用される。

かくて支配階級はキネマを利用する。これ位ゐたやすい事はない。製作者の幹部は自身ブルジョアジーであり、支配階級の意識を意識としてゐる。封建的な製作組織と、官廳からの少しばかりの色目と、陸海軍省のちよつとした援助と、「道にはづれた」ものの峻嚴殘暴な禁止とそれだけでキネマは完全に支配階級の武器になつてしまふ。

ブルジョア映畫は流行してゐる。そしてその流行は斷に積極的に惡である。

マルキシズムは

マルクスの學說に依り認められ、その學說に導かれた全世界のプロレタリアートがその獨立的組織を益々增加しつつあることに疑ひはない。

何となれば支配階級は、憲法と階級裁判と、其他のあらゆる武器をもつて愈々益々必死になつて喰つてかかつてゐるから。

マルクス主義が現に多數の人に信奉され、また愈々盛んに信奉されるだらうことは當然である。

從つてこれは「流行」ではない。

僞か本當か知らないが、或る映畫雜誌に映畫女優クララ・ボウの告白として次のやうなことが載つてゐる。

「私は力强さを崇拜します。ハンサムなスポーツマンが澤山ゐるのに、二枚目俳優の優さ男と戀に陷るなんて到底考へられない事ぢやありませんか。

モダンガールには一樣な刺激をスポーツは感じさせると思ひます。武士道華かなりし頃勇敢な騎士だけが遂に許して愛されたのと同じだと思ふのです。競爭のあるものは何んでもよく誰にでも誘惑を與へます。そしてスポーツ程澤山競爭を含んでゐるものは、現代には他にありません。そして女は自分の知つてゐる男が他の人々を追ひ越して、勝利の月桂冠を獲得するのを見ることは大好きなものです。」

松竹キネマ會社提供JOAKより最近放送のラヂオドラマ「輝く昭和」の一節は次の通り。

「說明。やがて光りかがやく昭和の御代が來ました。（詠嘆的に）

（音樂よろしく）

說明。昭和は「世界的」の時代であります。種類のなんたるを問はず、すべての偉大なる者そして世界的なる人物が國民の華であり憧憬の的であります。第九回オリムピック大會に於て選手權を握つた陸上の織田幹雄、水上の鶴田義行それはただにスポーツ界の代表者であるにとどまらず、實に大日本帝國の「昭和時代の國民」を代表したものと云ひ得られるのであります。ここに昭和時代こそは青年の時代、青年の時代であります。

（勇ましく朗かな音樂よろしく）

それから同じくその放送。

「說明。やがて御大典の近くなる頃。

（音樂、御大典祝の唄）

說明。將軍をはじめ渡邊、小夜子の親子三人は上京の汽車中にありました。

驛員の聲。うらわ、うらわ。

小夜子。新聞を下さいな。

（發車の汽笛、進行し初める汽車の音。）

小夜子。（嬉し相に）あらおぢいさま御覽遊ばせ。その運動欄よ。

將軍。なんぢやな。

渡邊。なにか出てゐますか。

將軍。おゝこれは吉一と武雄との寫眞ぢやな。棒高飛に新記錄をつくり、味方を勝利に導いた東邦の上山と織田、うむ、偉い！

將軍。どうかや。嬉しいのに小夜子はな

りぢやあるまい、

小夜子。いやな、おぢいさま。

將軍。時勢は移るぢや。若い者の時代ぢやのう。

――幕――」

これ等は昭畫とスポーツとの、ごく、ごく子供らしい。が、しかし現在では本質的なつながりの一例で、流行の根據を説明してゐる。

だがキネマもスポーツもこんな「流行」を持たなくなるのだ。

さういふキネマはもうサウエート聯邦にある。

さういふスポーツは各國の勞働者スポーツ團や、その頂點としてのサウエートの「スパルタキアーデ」にある。

現代を象徴するもの

平林初之輔

一

かつて、中央集權の前に、國民統一の前に、國民主義(ナシヨナリズム)の前に、すべての地方性(ローカリテイ)が消滅し、凡ての文化の上に國民的標準(ナシヨナル・スタンダード)が樹立されたやうに、今や、全世界は更に大きな統一へ、更に高度の生活樣式へと、鬪ひ、喘ぎ、進んでゐる。國民性(ナシヨナリテイ)はこの大きな流れの中に次第に影を薄くし、埋沒せんとしてゐる。世界化の方へ、二十世紀の凡ゆる文明は、生活は、悉くこの軌道の上を走つてゐる。國家主義から國際主義へ！　これが、地球の上に棲息する凡ての人間の、次に進むべき決定的な進路である。

・

シネマとスポーツとマルクス、この三つは、それぞれ異つた形に於て、この世界化の流れを象徴してゐる。

ハリウッドは、今や或る意味で世界を支配してゐる。日本も勿論この支配から免かれない。機械の運動と人間の動作との結合から生れたシネマは、それが全く視覺的である故に、言語、文學等の表現形式を仲介として全く必要としない故に、却つて從來の凡ゆる藝術にもまさつて、世界化の使命をはたすに最も好適な藝術となつてゐる。

クララ・ボウとか、リチヤード・バーセルメスとか、アドルフ・マンヂウとか、チヤーリー・チヤプリンとかいふ名前は、今では全世界を通じて、最もポピユラーな名前となつてゐる。ドイツの大統領の名前を知らなくても、イギリスの首相の名を知らなくても、フランスの大美術家の名を知らなくても、映畫スターの名前を三つや四つ知らない人は稀である。それは、映畫が、他の何物よりも普遍的に、且つスクリーンだけを通して直接的に、感覺的に世界の大衆に觸れるからである。

ハリウッドは銀座の風景を一變した。モダン・ガールとモダン・ボーイとの最も直接な

生みの親がシネマであることは疑ひない。

シネマは機械の藝術である。現代の文明は機械の文明であり、現代の生活は機械の生活である。シネマは動的藝術である。現代の生活は動的生活である。こゝにも、シネマが現代生活と密接に交感しあふ理由がある。シネマ、特に西洋の、アメリカの映畫が盛んになつてから、日本人の動作はたしかに輕快に、迅速になつた。シネマは、美の概念を革命して、それに世界的な一のノルムを與へつゝある。

二

スポーツは、こゝ三四年の間に、日本人の生活の中に、非常に深く食ひ入つて來た。新聞の隅つこに、虫眼鏡で探さねばわからない位な存在をつゞけて來たスポーツ記事は、こゝ二三年の間に、殆ど毎日、新聞紙の一頁を埋めてゐる。

スポーツは、主觀的には、解放を象徴する。靜的から動的へ、屋内から戸外へ、拘束から自由へ――あらゆる意味に於ける解放を象徴する。シネマが現代の生活へ明るさを點じたよりもより多くスポーツは明るさを撒きちらした。

そして、映畫が、感覺的、機械的藝術であるがために世界化に有利な條件をもつてゐたと同様に、スポーツは、それが物理的な人間と人間との交渉であるが故に、シネマと同様に、世界化に有利な條件をそれ自身に備えてゐる。

今年になつてから、日佛競技、國際水上競技及び、アメリカの多くの野球チームの來朝、特に最近、タイ・カツプ一行の來朝によりて、私たちは、特にこの感を深くしたのである。これ等海外のスポーツマンの來朝は、小さい出來事であるにも拘らず、私は敢へて言ふが、日本人の生活を明るくし、陰氣な、引つ込み主義な、日本人の生活に、強い刺戟を與へることに大變役立つた。

たとへばミス・ミーニーが下駄をはいて觀衆に愛嬌をふりまきながら多摩川プールの岸を歩いて行つたとき、ワイス・ミユラーが、河馬のやうな鳴き聲を出して、水の中から浮び上つたとき、タイ・カツプがチユイング・ガムを嚙へながら、キャメラの前に立つて色々なフォームを映寫させてゐた時、觀衆は非常に快い感じに打たれた。これらのさゝやかな動作が、日本人の生活樣式に及ぼす影響は案外強いに相違ないと私は思ふ。

スポーツマンシップ、スポーツマンスピリツトといふことが盛んに言はれる。だがこれを所謂武士道のやうなものと同一視するのは間違つてゐる。武士道は暗いが、スポーツマンシツプは明るい。武士道は拘束的であるが、スポーツマン精神は解放的でなければならぬ。日本のプレーヤーは、明るい意味の、自由な意味の、運動家精神の洗禮を受けねばならぬ。

スポーツはまた觀者の方には近代生活が要求する高度に壓縮された刺戟を與へてくれる。競技のクライマックスを觀る刹那に、私たちは、最も高度に充實した生活感を覺える。スポオーツは現代生活に益々缺くべからざる要素となりつゝある。

シネマ及びスポーツをブルジョア文明と密接不離の關係をもつてゐる如く見る人があ

が、それに間違ひである。たゞ今日では、シネマもスポーツもブルジョアジーのために一定の歪みを受けてゐるといふことができるのみである。ブルジョアジーの支配が滅びても、シネマやスポーツは決してあとをたつものではない。それは近代の高速度文明と、世界化的潮流とから生れた必然的な所産である。その未來は長くして明るい。

三

「萬國の勞働者團結せよ」とさけんだマルクスも、シネマやスポーツと同じく現代文明の世界化の潮流を象徴してゐる。

シネマやスポーツがたゞの一時的流行でなくて、現代生活、現代文明と密接に結合し、その中から離れたものであるやうに、マルクス主義も決して、一時的流行ではなくて、現代の經濟生活の矛盾の中から必然的に生れたものである。

たゞマルクス主義が前二者と異つてゐる點に、階級的であるといふ一點である。世界の凡ゆる文明は、今や、その銳敏な觸角をのばして、世界化への道、世界的統一への道を摸索してゐる。マルクス主義は、これを一定の條件の下に實現しようとする。即ち現代の支配者たるブルジョアジーは、その軍備と、關稅と、國家的偏見と、一言にして言へば、「資本主義最近の段階としての帝國主義」の故に、世界化を實現する力をもたぬ。世界化は、ただ××をもたぬプロレタリアによつてのみ實現されると主張する。

マルクス主義が全世界の勞働階級の運動をつらぬく指導精神となつてゐるのは、それが、世界化の過程を――即ち人類全體の意識的無意識的にさし迫つた要求を、促進し、滿足せしめる明確な基準を示してゐるからである。プロレタリアこそ、次の文明の段階へ飛躍し得る唯一の階級であることをはつきりと科學的に指定してゐるからである。

シネマにシネマ・ファンがあり、スポーツにスポーツ・ファンがあるごとく、マルクスにもマルクス・ファンがある。シネマに一定の魅力がありスポーツに一定の魅力がある如く、マルクスにも一定の魅力があるからである。

映畫ファンと、野球狂（やがてはラグビー狂も出るであらう）と社會科學研究會とは、それ〴〵違つた意味に於いて、現代の先端に立つてゐる。現代文明の觸手である。といつても私は、迫害の中に苦鬪してゐる社會學徒と、映畫ファンやスポーツ・ファンとを何から何まで同一視してゐるわけでは無論ない。社會學徒が、一定の計畫のもとに、意識的に推進せんとしてゐることを、前二者は漫然と、無意識的にやつてゐるといふまでゝある。

私は一體新しいものに對してはついぞ反感をもつたことがない。新しいものに對してあまりに寛容的であることは自分ながら意識してゐる。併し、新しいものが生れるには必らずそれだけの必然性がある。無暗に新しいものを毛嫌ひしたり、偏見をもつて手厳しい吟味をしたりするのはよくない。何となれば、新しいものは、必らず、私たちの思ひがけないところに、思ひがけない意義をもつてゐるからである。

シネマも結構、スポーツも結構、マルクスに至つては必然の中の必然である。



銀座繁昌記

魯庵生

（一）銀座は今は市民の遊歩區域

銀座が文明開化の實物教授として煉瓦樓の出現よりも驚嘆された頃には新橋の橋の袂にはイツデモ赤ゲツトの三人や四人は屯ろしてゐた。

赤ゲツトと云つても之からの青年には字引を引かなければ通じなくなるだらうが、地方人が一生の思出に赤ゲツトを背負つて東京見物に出掛けた頃の銀座は東京名所双六の振出しでもあれば上りでもあつた。交通の進歩が地方と東京との距離を短縮し都鄙の文化を平均して、南は琉球の石原小石原、北は蝦夷唐太の果からでも着流しのフエルトでブラリと來られるのだから、銀座は最早プロムナードの一つで、一生の憶出にポカンと口を開いて見物する場所では無くなつた。紐育の五丁目の自働車事故が一週何件、倫敦のリジエント通りで捕まる萬引（ショップ・リフター）が一日何人、モンマートルにはカフエが何軒、クルフユルステンダム通りのキネマの小屋が何軒あると諳んじてる世界的地廻りがウヨ／＼してゐる此頃銀座の總譜でも無からう。夷人の國にもこれまた賑かな奇麗な町は無かんべエとブツ魂消た五十年前の赤ゲツト心理で銀座を語るのは丁度我々が適り役だらうと、其のツモリで銀座を見物する了簡で、先づ振出しの新橋驛まで省電へ乘つた。

（二）新橋は本とは東京見物の振出し

以前は新橋がお上りさんの捌出し口であつた。赤ゲットを脊負つた善男善女が鞄と合乗で物珍らしさうに四方をキョロ〳〵しながら送り出される關門であつた。が、今では都人士の遊歩區域の唯の電車の乘降口であるから、縒れ〳〵の色の褪せた時代物のインバーネスの黴臭い不精髭を白髪髪から露け出すのは些か氣が引ける。が、驛を出ると正面はトンネル長家とでも云ひさうなバスのギャレージで、骨組が出來たばかりの板構ひや半分破壊された儘の家で前後を圍繞されてゐる。堀返された泥が土鼠の土のやうに處々に盛上げられ、バラストやセメント樽や煉瓦の古板が道を塞げてゐる。芝口の本通りは片側は大抵取拂はれ、取殘された家が慘澹の跡を殘してゐる。路面は電車線の敷石道の外は盡く削られ、蒲鉾形になつてる兩側が中央から五六寸も低くなつてるから、橋へ掛ると欄干へ沿つた歩道は一段高くなつて、ウントコドツコイショと一段登らなければならない。驛から橋上まで一丁半かそこらだが、漸とこさと難路を突破してヤレ〳〵と一息つくと、本とは博品館と新橋ビヤホールとで銀座の入口の兩角を花やかにしてゐたのが、區整困難は姿をも朽かしてゐると見え、東側の一角が取毀たれて空地となつてゐる。鄰屋の電友社、宇都宮同滴店、皆板普請の假建で地震の名殘を留めてゐる。

銀座は表側は區劃整理を免かれてゐるらしいが、東西を通ずる横町の角々は多少づつ破壊されてゐる。尾張町の十字大道は兩側共に廣げられるので、ライオンと對角する山崎洋服店が強制の鶴嘴を揮はれて白雲濛々の砂塵を揚げ、銀座を行樂するテイツター・パツターの肝を冷やさしたのはツイ數日前の事である。南角のライオンは既に取毀たれてるので、山崎と隣りする蓬萊、木村屋等は疾くに立退き、其跡が銀座會館の建築敷地として板構ひとなつてゐる。銀座の本建築が揃つて竣功し、近代都市の體面を具備するまでにはマダ少くも六七年掛る。夫からでなくては觀光團のお座なりお世辭をも受ける事は出來ない。だが、銀座が餘り歐化し過ぎると、亞細亞臭過ぎる我々時代錯誤黨は義理にも遠慮しなければならなくなる。西條八十の銀座行進曲を口笛吹きながら行く喇叭ズボンや、スクリーンから拔け出したやうな極彩色のフラツパースの踵から尾いて失業者然たる不景氣面をキョロ〳〵さしても巡査に叱られないで軒並を覗いて行かれるのは今の中だ。

（三）味覺極樂の銀座

東京に生れて東京に育つた私は矢張り町の子である。田舎道の氣拙じた散策も惡くは無いが町のジャズや色彩により多く惹かれる。銀座に流れる空氣をヨルダンの水のやうに難有がるわけでは無いが、月に一度や二度は銀座の空氣に觸れないと郊外の肥料臭い頭が洗はれないやうな氣がする。自然銀座へ足の向くのは珍らしくないが、東西を通ずる交叉點の前後二三丁を漫歩(ぶら)いてモダーン人の常訪(フレクエント)するカフエの食卓(テーブル)にボンヤリと向つてボンヤリと歸る所謂廬山に入つて廬山を知らざる銀座の不通人である。銀座見學のツモリの今日は昔の赤ゲットの道順通りに克明に新橋を渡つて、東側は角が空地になつてゐて不景氣だから西側の博品館前に佇立(ちよつ)つた。全體日本のモダーンを代表する帝都の一等道路の一端を今の字引に無い勸工場やビヤホールで振出させるのは些か時代錯誤の感が無いでも無いと、口裡(くちのうち)で呟きつゝ只見ると、博品館は博品館でも勸工場の本との姿は無くて今ではモダーンのマーケットである。入口で足袋の廉賣をしてゐるのが一等道路の第一印象として些か皮肉であるが、大衆向きだから相應に繁昌してゐる。

博品館の隣りは銀座の老舗(しにせ)の一つの大徳である。大徳の店は明治十五六年頃、父に伴れられて帽子を買つて貰つたので其頃から記憶してゐる。一筆描きの中折のマークが新聞の廣告欄を飾にすつかり懷しくなる。銀座日一流紳士人の大帽がおなじみだつた、此頃は復たメキ〳〵と頭を擡上げて京橋向ふの帽子はタムラーを凌がうとしてゐる。ファスチストの制帽と頭巾のスポーツマンの帽子を店頭に飾つて元氣のイヽ近代人を客にしてゐるのは間口は狹いが商賣は活きてゐる。三銀が土藏然し店構然しの道具を店頭に列べてるのは松屋は無くとも食味を誇る。青柳も明治十七八年、櫻田に下宿してゐた頃からのお馴染で、コヽの烏羽玉を十ウ喰へるか喰へないかと（今は海軍中將で故人となつた）其頃の下宿友達と賭をした事があるが、今でもクラシカルな菓子で鳴つてゐる。千疋屋は水菓子では東京一で此家(こゝ)のパーラーでアレキサンドリヤのムスカットを賞翫しなければ果實の味を談ずる資格は無いので、メロンやバ、ヤは月並だそうだ――

斯う一軒々々禮讃してゐたら、京橋まで行かない中に日が暮れて了う。だが、歡樂の町は食味の町で、唾を催したから談味するのも亦都會生活の一享樂である。新橋のトバロからして南柳があり千疋屋があり、一軒置いて支那料理の彩華が東側の秀華と相對して五加酒や燒豚や皮蛋を窓に列べてる。五歩に珍殺、十歩に美釀、三十歩に喫茶店、五十歩にレストランといふが銀座である。銀座の美味に飽滿しやうとしたら胃腑の一ダー

スギ二ダースあつても足りない。」

と云ふと銀ブラの興味は味覺極樂であるらしいが、談味も亦都市生活の要件、銀ブラ黨の自然に足の向くのは尾張町以南の西側である。西條八十の『虎と獅子とが晴に出る』銀座の二大女人國の一のライオンが東側の一角に據るを外にしては之と斜向ひにタイガーが軒の虎のコミカル・サインボールドで客を呼んでるを初め、之を挾んで各々數軒を置いて松月と小松食堂とがある。不二家洋菓子店がモボ、モガを充たして二階も下もイッデモ滿員であるは云ふに及ばず、二十年前のハイカラが幾多の艶話を殘した台灣喫茶店、其隣りの銀座食堂、尾張町端れの澤正食堂、モナミ、アルプスを通り越して竹川町、出雲町と二町に跨がつて兩角を占むる資生堂、中四五軒置いてコスキモト、續いて彩華、千疋屋、一々應接に遑あらずだ。更に横へ少し入ると風月、天金、竹葉、銀座の名物といふよりは全國的に響いてゐる。電車路を横斷して以北へ行くと赤瓢簞、銀ブラ、大橋食堂、京橋手前まで行けば菅川ビルのヤマトがある。名前を列べるだけでも食傷する。

西側に比べると東側は稍や輸色があるが、何と云つても銀座の女王たるライオンが（今は改築中だが）尾張町の一角に據つてゐる。松喜、早川亭、三幸、銀座ビヤホール、西側のモダーン味があるに反對へて世帶染みてゐる。ライオンが一軒で東側を背負つて立つてる感がある。尾張町以北も松屋を越すと銀座の場末であるが、キリン、クロネコ、バッカスは地理的不利の位置に在るに拘らず近代的の色彩を漂はしてライオン、タイガーに次いでの銀ブラ黨の出丸（でまる）である。佐々木の清涼飲料店は化粧品の副業であつて、資生堂ほどに身を入れないが、煖簾が古いので相應に繁昌してゐる。丸見家の大阪鮨は竹川町の三幸、西側の帆掛鮨と共に銀ブラの別働隊で亦相應に賑はつてゐる。千疋屋のフルーツ・ケーキ、不二屋のイクレア、田丸屋の揺餅あられ、ちとシュンはずれだが毛利のドッチャンダンネ、家庭園滿壽の銀ブラのお土産である。味覺極樂の此の兜率天が銀座の中心であつて、ラッシ・アワーの前奏曲が濟むと銀座の夜るの幕が開く。

（四）　買物遊獵家（ショッピング・スポーツマン）の獵場

西側は食味の町であるが、東側はドチラかといふと買物町（ショッピング・クオーター）である。銀座の王者の如く全街を威脈してゐる松屋と松坂屋のあるは東側である。之から建築される銀座會館の敷地も山崎洋服店と其の地續きを三四軒潰した跡で、更に新らしい鉅觀を東側に加へるだらう。日本の時計界を兩分して殆んど優劣と操との

みといふ団く相對峙する天賞堂も服部時計店も東側である。日本の蓄音器界の覇王たる濱松楽器會社の賣店、日蓄レコードの發賣元で、今はコロンビヤとも聯合した日本蓄音器會社も東側である。モガの家庭の憧憬となつてる洋風食器の十一屋、女學生が足の文房粧飾でなければ夜も日も明けないやうに吸付く文房具の伊東屋も（今は一時西側に假越しゝてゐるが本と古巣は）東側である。銀座には些と似合はしくないが東京一の大佛師として東洋癖の外國人間にも聞ゆる安田松慶の店も、本とは日本橋の東仲通りにあつたのが銀座の西側に進出した。暖簾はマダ新らしいが尾張町の二葉屋と四丁目のフヂヤとは高級洋物屋として頭角を抽んでて東京一の贅澤屋と稱されてゐる。二葉屋の大陸流行の雑貨、佛獨の小工藝品を集めた飾窓はブルを感嘆させプロを瞑行せしめる。"Hodiya" の屋號の羅馬字綴りは駈出しの羅馬字論者を頻に傚いて商賣振の新らしさを想はしめる。今は過去の憶出となつたが、岸田の精綺水も岩谷の天狗煙草も東側である。

だが、西側も亦老舗（しにせ）の軒並びである。毎年のクリスマス・デコレーションは銀ブラ人の足を留めずには措かない。銀座の名物の明治屋も亀屋も西側である。東側の天賞堂、服部と對峙する時計屋としては玉屋と山崎とがある。玉屋は銀座の老舗（しにせ）の一つで、明治十一年に時計商を營み始めた時、コンパス兵計を賣る店は玉屋の外には無いといふので鐵道馬車も無い時代に下谷から銀座まで歩いて買ひに行つた事がある。山崎が銀座へ進出したのは地震後であるが、時計屋としては古くから知られてる。メダルの縮刻機械を初めて日本へ取寄せた家である。蓄音器屋の山野、十字屋が音樂普及に功績あるは上野の諸君に讓るものでは無い。エルマンやハイフエッツの妙技を遍く認めさして帝劇の十圓の切符をも高しとしなかつたのは二店がヴヰクトルのレコードを九州北海道に行渡らした力である。玉糸の伊勢屋で何十年來賣込んだ三丁目の三枝は地震後卸部を横町に移して專ら主力を卸に注いでるが、東京一の洋物直輸入商たる實力は小賣部にも現れて、小賣の店は餘り大きくないが品物は潤澤で、且贅澤物屋として知られてる。敎文館は亞米利加版專門の上に品物が少しミツション臭いが、左も右くも洋書の輸入では丸善に次ぐ店である。丸八は江戸時代からの舊家、銀ブラ黨の仇には看過せない古い藥種店である。蚊取線香ばかりで有名なのでは無い。本とは三越から分離した呉服物の越後屋、贅澤屋の評判の高い田屋洋服店、世界に名の通つてる御木本眞珠店、ナショナルの金銭登録器、黒澤のタイプライター、鳩居堂の筆硯文房品、東京に唯一軒だけのブレイクサイド。七寶作店こ

無いが東側にも亦有名な店がある。

買物（ショッピング）も亦一つの享樂である。三度の膳の上の惣菜でも走りの初物や活きのいゝ生物や風味のイ、珍物でも買當てた時の得意と滿足とは臺所ばかりでは無い。況んや必需以外或は必需以上の欲求を充たして優越感を味はひ、或は價格に品質に意外の儲け物として所謂買物上手の誇りを感じた場合の買物（ショッピング）は丁度獵師が首尾よく獲物を仕留めた時と同じ會心の滿足がある。之からの競爭に方つて全身を停車場（ステーション）の赤帽然と買物包で滿艦飾をして勝誇つた顔をして雜沓を縫つて歩く紳士淑女を何人となく見受けるが、銀座は恁ういふ買物遊獵家（ショッピング・スポーツマン）に取つての好個の獵場である。且都會人通有の華美生活恂悅は（ブルの攻撃は姑らく措いて）買ふ買はないを第二の問題としても大商品の瞥見は生活の空想を豐かにする快樂がある。マルクス・ボーイやガールが案外銀座の買物を得意になつて渠等の仲間に誇つてをる。左傾も右傾も銀座をぶらつくと矢張カフエの卓（テーブル）に向つてカクテルの微醺を味ひ、ブル氣分になつて軒並の窓（ウキンドー）を冷かし、イ、氣持になつてタキシーを飛ばす。

（五）銀座の過去の憶出——松田の手水場

銀座は江戸の初め駿府から移した銀座の故地で、町名は金座の本兩替町に對する新兩換町である。恁ういふ考證は江戸ロギストの領分内で、今更反覆する必要は無いが、通稱の銀座が本當の町名となつたは維新後である。銀座の紀事が江戸の舊誌に一向見えないのは、寛政年中銀座が蠣殼町に移されるまでは京橋以南に銀座役人の役宅ばかりで町家が少なかつたのでは無からう乎。銀座が移轉した享和以後ボツ〳〵盛り初めても尾張町以北は銀座役人の役宅跡で、餘り賑かな町では無かつたらしい。江戸の買物案内を見ても古い時代のには餘り見えない。文化文政以後の買物帳には大分殖えてゐるが、名物らしい買物は無い。且儒者や國學者や書家や畫家や長袖が大分住んでゐたのを見ると、（中には町人の風流もあつたらうが）町家の軒並びでなかつたのは容易に推想される。『江戸名所圖繪』に載つてる金六町の信樂の店構を見ても何となく宿場らしい面影がある。同じ『江戸名所圖繪』の尾張町は江戸の繁華を想はせるものがあるが、此の殷賑は江戸末季であつて、江戸時代を通ずる新橋京橋間は、少くも尾張町以北は是と日本橋との間宿であつたらしい。銀座の繁昌は明治となつてからで、明治五年の二月、和田倉門の火事が銀座一帶を焦土にしたのが銀座の幸ひとなつたのである。が、改革の氣運に乘じ、新政府の威光を以て焦土の町に臨んだにせよ、此の道路改正、家屋改築を斷行出來たのは地價低

笠のドン寶い新吉原々にしろ、江戸時代からの土一升金一升の日本橋と違つて町續きの銀座の土地が買收し易かつたからであらう。之を以ても當時の銀座の經濟價格を知るべきである。

此英斷があつたればこそ銀座は一足飛びに文明開化の新市街を現出して、夫から以後メキ／＼と成長して日本橋を壓するの商業區となつたのである。處で、煉瓦石造の建築令が布かれたのは和田倉大火早々の明治五年二月であるが、此の建築令に據る銀座の新市街の竣功上つたのはイツであるか。之に就ての諸說は區々であつて、（マダ大程遠い昔でも無いから調べる筋で調べたら直ぐ解らうが）銀座の古老連の記憶もアヤフヤで、中には思切つた與太を飛ばす銀座通もある。が、確たる記錄が無くとも、銀座繁盛の魁を第一に掲げた『東京新繁昌記』の初編が出版されたのは明治七年四月であつて、銀座を禮讃しつゝも昔中に新市街を迎へる記事なり口氣なりが見えないので推すと、其時分は既に立派に出來上つてゐたので、六年頃に竣功したのでは無からう乎。斉生常編纂の『銀座』に收つた二三の遺老の噺に、銀座は其初め空屋が多くて塞がらなかつた。煉瓦を積んだ職人が煉瓦をつなぐ内壁の處理に馴れなかつたので、其爲め濕氣て居住者が無かつたから見せ物小屋が澤山出來たのださうだ。私が初めて銀座を知つたのは明治八年で、其頃銀座は見せめての時までで既に[illegible]で濕氣を恐れて逃出すものであるか[illegible]無いから、夫から一年前の明治六年頃に煉瓦街りが出來上つたと見るのが當らずと雖も遠からざる憶測であらう。

其頃私は銀座に近い芝の櫻川の堀端に住んでゐた。其頃はお內の交通がマダ不便だつたから山の手や淺草下谷の場末（其頃は淺草下谷は下町でも場末だつた。）から泊り掛けでソロ／＼煉瓦の新市街を見物に來る泊り客が絶えなかつた。左も無いものでも煉瓦（其頃は煉瓦の新稱で通つてゐた。）へ案內するのが泊り客への第一の御馳走だつた。其度毎に私はお伴をしたが、新橋へ行くと假に夜が明けたやうに明るくなつて氣が浮き／＼した。ハッキリは覺えないが、尾張町近所が見世物町で、貝細工や寄木細工や其頃流行つた覗眼鏡が列んでゐた。タシカ今のライオンの角だつたと思ふが、兒雷也と大蛇丸と綱手姫の妙高山の術くらべの人形が貝細工で出來てゐて、[illegible]油樹もある大蛇の貝細工が素晴らしい評判だつた。此の銀座の見世物町で私は初めて油繪といふものを見た。誰の筆だか其時は知らなかつが、後に高橋由一の社中であると誰からだか聞いた。尤も餘りアテにならない說で虛聞であるかも知れないが、ピナコーム一點張の質素な額で、鮭の片身が竿へブラ下つてる圖や行燈の大

影で婆アさんが雜巾を刺してる圖で、兒供心にホンモノのやうだと感心して二三度伴れてつて貰つた。畫家は誰であつたか忘れて了つたが、誰であつたにしろ洋畫の展覽會が貝細工や麥稈細工と鄰り合はした見世物から出發したといふのは確かに明治の美術史の興味ある一節に違ひない。

銀座の名物の松田は疾つくの昔に無くなつて了つてるのだが、狹い小路を隔てる玉鮨と鄰つて錦繪にすら載せられ、今猶ほ若い人たちにも知られてる。松田へ初めて伴れてつて貰つた時は繪に描いた龍宮へ行つたやうな氣がして茫ッとして了つた。其頃の私の家は可成なブルジョア生活をしてゐたし、父はハデ者では無かつたが相當遊蕩家だつたから、名ある旗亭へ伴れてつて貰つた事も夫までに何度かあつたが、幼時の記憶に一番殘つてるのは松田である。今考へると、ダヾッ廣い座敷でこそあれ、一つ室に幾組ものお客を衝立一つで仕切つて入れた、お茶漬茶屋であつた。立派と云つた處で、地震に燒けた前の淺草の常盤ぐらゐなもんだつたらう。入口は色硝子の市松格子で、正面は幅の廣い段階子、お客が來ると下足番が大きな聲で何番と叫る。餘んまり上等ぢや無かつた。が、階子をトン〱と昇ると廊下には繪硝子の燈籠が一間置きぐらゐに釣るされ、其頃マダ珍らしかつた瓦斯か大廣間に點火されてゐたから、其下に座らせられた田舍の爺さま婆アさまは眼を圓くしてブッ魂消て了つた。

大向ふの人氣は兎角下品な趣味が感服されるもんで、二十五六年前、大阪の或る牛肉屋の四方鏡張の雪隱が大評判とたつたので、一時大阪の各旗亭が便所の設計を競爭した事があつた。松田は此の雪隱政策の先驅者で、松田の手水場と云つたら大した評判だつた。別段變つた設計をしたわけでは無かつた。其頃の中以下の飲食店の厠と云つたら鼻持ならない不潔であるのが普通であつた。松田は特に便所の設備に手を盡して造作に念を入れ、便所の中を鏡のやうに拭込み、香氣の高い防臭劑をプンプン臭はし、手洗鉢に噴水を裝置し、水番が控へて一々水を掛けて與れた。松田の手水場は臭くなくてイヽ臭ひがする、お茶席よりも清潔だと評判された。松田が繁昌したには種々の理由があらうが、便所の清潔は確かに其の理由の重なる一つで、松田へ行くものは便意の有る無しに拘らず必ず便所へ入つたもので、手水場拜見が松田遊興のプログラムの項目の一つであつた。關根盆子の『銀街小誌』が松田の繁昌を記する一章に『松田樓雪隱』なる命題を撰んで、特に雪隱の設備に若干行を割いたのを以て推しても松田の便所が當時の話題の一つであつたを證すべきである。

松田の汚い臭か何であつたかは兒供の時で氣にも留めなかつたが、プン〳〵臭を術いたのは矢張樟腦の類らしかつた。夫から後、防臭劑の類が澤山出來て、飲食店に限らず公衆の集まる便所はアンモンニヤの代りに樟腦の臭ひがするやうになつた。時代は次第に移つて一の臭氣を防ぐ爲め他の臭氣を迎へる此種の防臭設備を賑ふやうになつた。帝劇の出來た時分、口の惡い故人の岩村芋洗が芝居は矢張アルボースの臭ひがしないと芝居氣分が出ないと皮肉を云つた事があるが、松田の手水場も當時の文明開化黨には嬉しがられたが、アレではお茶屋の氣分が出ないと江戸の通人の遺老の間には餘り評判が宜くなかつたのかも知れない。が、便所の設備が人氣を呼んだといふのだから、當時の文明開化の空氣は略ぼ想像される。

(六) 清新軒と箱館屋

が、其頃はマダ銀座も草創時代で、表通りにさへ空屋があつて裏煉瓦はマダ半成で、河岸通りになると日暮には人足が途絶えた。見世物が景氣を添えて人を呼んだが、盛り場としたら其頃久保町の原と稱した土橋の傍の空地の方が葭簾張の鮨や汁粉やおでん、豆藏や居合拔や講釋で賑はつてゐた。銀座からは少し離れてゐたが、芝の櫻田の賣茶亭といふが其頃の一流の大割京へ來て、[illegible]の中心となつてゐた[illegible]端へ抜け。イッテモ馬車の二三[illegible]で然ういふ方面の消息は一向知らなかつたが、其頃は[illegible]政治といふものも無かつたし、藩閥連中は市井の[illegible]朝廷の大臣參議は堂々と馬車を乗入れて飲歌亂舞の[illegible]たもんだ。私の家は恰も此の賣茶の隣屋だつたから、夜に入ると絃歌の聲が手に取るやうに聞えた。賣茶の閉鎖はイツ頃であつたか知らぬが、明治十八年の「東京流行細見記」には芝京橋では猶ほ相第一位に擧げられ、洋食としても精養軒に次いでゐるから猶ほ相當の聲價を維持してゐたのだらうが、其頃はモウ下り坂で寂れてゐたらしい。花月は明治廿々マダ煉瓦が出來ない以前から有つたさうだが、其頃の兒供の私に丸で沒交渉で名前すら聞かなつた。松田の鮓の照燒ときんとん蒲鉾の口取が天下第一の御馳走であつた。

其の翌る年は下谷の家へ戻つて銀座とは遠くなつて了つたが、私の家の菩提所の白金の寺へ墓參した歸途は必ず銀座へ廻つた。其頃下谷から白金へ行くのは今日箱根や熱田へ行くよりも時間が掛つたので、腕車で行つても一日掛けの大旅行であつた。墓參は附けたりで歸途に松田で鮓の照燒ときんとん蒲鉾で御飯を喰べるのが樂みで、墓參といふと二日も前から有頂天だ

つた。夫から暫らくすると私の家はソロ〳〵左り前で、下谷の大きな邸から鳥越の小さな家へ移轉し、鳥越の小さな家も賣拂つて三筋町へ店借した。何千坪の大きな地主様から三間か四間の借家人と一年經つか經たぬ間に九天直下に成下つたのだから最早松田の照燒どころでは無かつた。折々の墓參も父が單身で一直線に菩提所へ詣でたので、私は遠方だからと伴れて行かれなかつた。

明治十四五年頃芝へ下宿し、夫から三四年間芝と築地の間をアチコチ轉々した。銀座は遊歩區域だからチョク〳〵散歩したが、其頃は最う見世物町でなく、今ほど銀座を享樂するものは無かつた。其頃から銀座へ行けば贅澤物を賣つてるといふ評判だつたが、下宿住ひの貧乏書生の興味を惹く何物も銀座には無かつた。松田と並び稱された今の博品館の角の千歳は其頃既に繁昌してゐた。松田は十八年の『流行細見』には依然中食のお職になつてゐるが、其頃は淺草の闇屋のあとへ出した支店の方が榮え、銀座の本店は稍や寂れて、新らしい千歳に壓され氣味だつた。ドッチも同じ中食茶屋で、今なら何とか食堂と云ひさうな惣菜料理だつたが、千歳の方が稍や高等で、松田が衝立一つで幾組も入れたに反して、千歳は然ういふ廣い座敷の代りに一と組だけの別室も幾間か有つた。が、赤ゲット向きの色硝子の障子などが有つて萬事の設備が矢張餘り上等では無かつた。

だが、其頃は最う照燒きんとんでも無かつた。下宿屋書生共通の牛肉屋で、土橋の黄川田へ能く出掛けた。(黄川田は烏森が本店だつたさうだが、土橋の方が家が奇麗で繁昌した。)『流行細見』には銀座の吉川の名が見えるが、其頃私はマダ吉川を知らなかつた。具足町の河合は其頃から知つてゐたが、芝からは遠方だつたから、自然黄川田へばかり足が向いた。卑しい咄だが、生一人附きの鍋に御飯で十二錢五厘だつた。だが、其頃は十二錢五厘が中々な大金で、學資を請取つた時でもなければ散財出來なかつた。隨分蟇口の底を叩いて一厘一毛の餘裕も無い切詰めた算當で出掛けた事もあつた。大きな聲ぢや云はれないが、牛肉の誘惑に負けて教科書をポーンした事もあつた。あんまり善良ぢやア無かつたネ。銀座の其頃の飲食店(黄川田は京橋だが)の懷出としては此外に無い。

然う〳〵私が初めて洋食を味はつたのは矢張銀座であつた。其頃より二三年前の明治十五年、新らしい橋内の丸木(丸木が橋の外の今入町の堂々たる家へ越したのは夫から十年も後で、初めは橋の内だつた。)丸木へ寫眞を撮りに行つた歸りに從兄に伴れられて槍屋町の清新軒で生れて初めての西洋料理を喫つた。ドンナものが出たか忘れて了つたが、ナイフが巧く使へな

いゝでチキンの皿をガチャンと云はして皿から肉を茶碗にした事や、フヰンガー・グラスの水をガブツと呑んで笑はれた事を覺えてる。が、皿數が七ツばかりで、今の三圓の晩食よりも上等で、一人前が五十錢てのは安いもんだつた。夫でも其頃は洋食は贅澤視されて、兒供や書生は分に過ぎると省かれて仲間入りが出來なかつたもんだ。物價も安かつたが、生活の程度も低かつた。

其頃銀座に箱館屋といふ氷屋があつた。天賞堂前の西側、銀座食堂の處で、富士の山の形をした屋根看板が人目を牽いて銀座の評判となつた。主人の伸大藏といふは（尾州藩士ださうだが）榎本に從つて脫走した五稜廓の殘黨で、腹部に彈創を受けて暫らく民家に遁れてゐた。其後東上して銀座に氷屋を創めたのが明治九年、屋號を箱館屋と云つたは、其頃は天然氷だけで箱館が唯一の産地であつたからだが、一つは五稜廓が一生の忘れられない懷出であつたからでもあらう。麥酒樽(ビールだる)のやうな破裂(はちき)れさうな恰幅で、其頃町家には（銀座でも）珍らしかつた洋服に下駄穿(ばき)といふ珍妙な扮裝で、客を客とも思はず罵聲を浴びせ掛ける五稜廓當時の元氣が賣物となつて、富士の看板と共に忽ち銀座の名物となつた。

箱館屋は氷屋といふ條、其頃珍らしい洋酒を置いて一杯賣をした。月波バーといふ所があつた。下に亦一寸食堂といふのでも人が能く出入したが、明治の初め一番ハイカラだつたのは日本人で、箱館屋を贔屓にした後援者の藝人中には日本の最初の洋行者も澤山有つたのは爭はれない。後の伯爵林董先生なども其一の人だつたさうだ。此の箱館屋で其頃既にアイスクリームを作つてゐた。尤も横濱の居留地内には明治二三年頃からアイスクリームを喰べさせる家があつて一杯一分であつたさうだ。兩に米何斗といふ時代の一分は滅法界も無い高いもんだつたが、此の一分のアイスクリームの味が忘れられないで、私の父などは東京にはアンナ旨いものは無いと始終云ひ／＼した。箱館屋がアイスクリームを作り初したのはイツ頃からだかハツキリしないが、其頃（明治十四五年）は既に小耳に挾んでゐた。が、清新軒の料理屋は御馳走して貰つたが、箱館屋のアイスクリームは少年の私の口に入るものでは無かつた。（無論マダ其頃は精養軒は知らないが普通の市中の洋食店などではアイスクリームは作らなかつた。）金玉均が初めて來朝して宗十郎町の山城屋に滯在中、珍らしい頬ペタの落ちさうなものは無いかと註文されて、宿の主人の機轉で箱館屋のアイスクリームを出すと金君ホントウに頬ペタを落して了つた。夫から後箱館屋のお馴染となつて閑さへあれば能く遊びに來たさうだ。

箱館屋は牛乳と氷ではイツも率先してゐた。十數年前一時、カルピスの前身ともいふべきヨーグルトといふが流行した。アイスクリームの甘味が無くて酸味の強いやうなものだつたが、箱館屋のは殊に美味だといふので評判された。尤もヨーグルトとしての醫學的特効の方は疑問とされたが、箱館屋のヨーグルトは可成評判であつて、私の如きも態々使に買はせて賞味した事があつた。が、此のヨーグルトで賣つたのが箱館屋のラスト・スパークで、間も無く五稜廓の落武者の此の名物男は大往生をして、名代の富士の山の看板は卸された。箱館屋の名も今は過去の語り草となつたが、銀座の憶出の缺くべからざる一人である。（箱館の老寡婦は今は上野の山の片ほとりに氣樂な殘年を樂樂と送つてゐるさうである。）

（七）圓太郎馬車と鐵道馬車

清新軒へ行つた歸り、丁度鐵道馬車が開通そこ〳〵で、わざ〳〵鐵道馬車を見物に來るものさへあつたのだから、私も銀座へ出て尾張町から京橋まで乘つて見た。馬がレイルの上を車を牽いて走るといふ何でも無い事が珍らしがられたといふは、今聽くと馬鹿らしくて信じられないが、其頃は眞實珍らしがられたのだ。昔は近江の竹生嶋の住民が一生の憶出に大津の町へ行つて馬を見て來べエと云つたといふ一つ噺があるが、マダ京濱の鐵道を見ないものもあつた時代、馬車が汽車と同じにレイルを走るといふは大珍事でないまでも看物であつたに違ひないので、私の如きも多少の好奇心を以て試乘した。乘つて見れば格別の奇も無いが、マダ出來たてのホヤ〳〵であるから、今までのガタ馬車と違つて奇麗で、クツションも新らしくフカフカして乘心地が快かつた。

鐵道馬車が敷かれるまでの市内の交通機關は明治そこ〳〵に文明開化の先驅をした千里軒系統の乘合馬車であつた。千里軒系統の乘合と云つて今の若い人には貞秀の錦繪でも見なければ解るまいが、木部の屋根の附る粗糙な原始的の馬車である。今では僻遠の山里でも滅多に見られまいが、此のガタクリ馬車の脊骨が露れて處々皮膚の擦剝けた老馬をピシ〳〵と引叩きつゝ喇叭をプウ〳〵吹いて帝都の中央を走つてゐた。此の痩せさらばいた老馬が喘ぎ〳〵鼻から息を吹き〳〵脂汗を垂らしてガタクリ走つてゐたのが『お婆アさん危ないよ』と、今の自働車よりも恐がられてゐた。落語家の圓太郎が高座で此のガタ馬車の眞似をしたのが人氣になつて、乘合のボロ馬車を圓太郎と呼び、今日の自動車のバスまでが圓太郎と稱される。

之に就て先頃も或る新聞が、乘合を圓太郎と稱する語源を說

廻して、落語家の圓太郎が高座でガタ馬車の眞似をして喇叭を吹いてからだといふと、イヤ乘合馬車の方が圓太郎の眞似をしたのだと大に逆振つた明治研究家があつた。ツイこないだの事がコウも解らなくなるものかと本末顚倒を笑止に思つた。話は少し横道に入るが、銀座の中央を走つた電車以前の交通史のエピソードとして圓太郎の事を少し加へやう。

圓太郎といふは名人圓朝の前座を勤めた男で、圓朝歿後の三遊派を事實上に統率した圓喬の實兄だつた。弟の圓喬が圓朝の衣鉢を傳へた素噺の名人であつたに反對へて兄貴の圓太郎は破鐘聲で鼻に掛つた都々逸を唄ふ外には能の無い、陽氣といふよりは騒々しい男だつたが、デツプリ肥つた丸まツちい無邪氣な起上り小坊師のやうな身體つきと、高座へ上ると直ぐ都々逸を唄ひ初めて、ノベツ幕無しに一つ音曲噺をシヤレまで同じに臆面もなく毎晩繰返す毒の無い顏が愛嬌になつて相應に人氣があつた。ドウいふシヤレだか、持前の藝づくしの大一座の中に乘合馬車の掛聲の眞似をして『お婆アさん危ないよ』と云つたのが馬鹿に人氣を呼んでドツといふ大喝采だつた。段々圖に乘つて最後には買物の朱總の眞鍮喇叭(角笛型の)を高座へ持込んで、噺を初める前に先づお客に向つてプ、、ウと吹いた。之が又愛嬌となつて、高座で圓太郎が喇叭を吹くと割れるやうな騒ぎだつた。馬鹿々々しい下らない事で[illegible]、[illegible]たらぬ愛嬌者となつてゐた。之も[illegible]圓太郎喇叭で、[illegible]川談志の郭巨の釜掘踊の唄に『圓遊ステ、コ、圓太郎喇叭で、テケレツツのパア』何の事だか解らぬが、此の圓遊のステ、コ、圓太郎の喇叭、談志のテケレツツのパア、當時寄席藝人の三人氣男であつた。(蔦橋のヘラへラといふは夫より少し以前。)其中、圓遊は可成音曲手踊の相當の素地があつたが、圓太郎談志は全く無藝の藝人ともいふべきもので、江戸の音曲の敗頽した寄席藝術の表現派であつた。夫からして乘合のガタ馬車の異名が圓太郎となつたので、乘合が喇叭を吹いたのは圓太郎以前からだ。本とは矢張歐羅巴の田舍の飛脚馬車の眞似をしたので、銀座の大道を喇叭を吹いてガタ馬車を走らした圖はドウしても十八世紀あたりの風俗畫を憶出させる。明治の文明開化は圓太郎馬車で象徴される。(圓太郎は元氣だつたが、人氣の餘り落ちない中に、今から三十年ほど前、故人となつた。墓は谷中の蓮光寺である。)

圓太郎馬車の全盛時代は直秀が名所繪に氣を吐いた明治四五年から八九年時代であつた。が、十四五年頃は飽かれ氣味で、職人階級、勞働階級で無ければ乘るものは無かつた。官吏階級は旅にでも出なければ乘合などには乘らうともしなかつ

た。(其頃はマダ京濱間しか汽車は通じなかつた。奥羽線が熊谷まで開通したのは其の翌年だつた。)東京市中、シカモ銀座の大道を圓太郎がプウ〳〵喇叭を吹いて見苦しい車體をガタクリして通るは帝都の不面目だと頻に顰蹙してゐた。奏任車(蠟色塗の一人乘、其頃は抱へに限られてゐた。)にフン反り返つて行人を見下して走らせる資格の無い腰辨階級や中等商人は圓太郎へ乘る氣にもなれないで、人生行路難を東京市中で歎息してゐたんだから、圓太郎と比べて同一の談で無い鐵道馬車の開通を一齊に歡迎した。之でこそ文明都市に恥かしからぬ交通機關だと、中等階級者には盡く感服された。私の如きも感服した一人だつた。

之から暫らくは馬車鐵時代だつた。錦繪を見ても赤い圓太郎の右往左往する煉瓦通りの光景は義理にも文明の市街とは言憎かつたが、鐵道馬車となるとドウヤラ文明の首都らしくなつた。且開業當時は車臺が新らしく、圓太郎と比べて車體が大きく立派だつたから感服されたが、暫らくすると段々汚なくなつて徐徐飽かれ出した。第一、圓太郎でも馬車鐵でも馬が率く以上は排泄物を如何ともし難かつた。人夫が絶えず拾つても拾ひ切れないで、自然レイルの間は馬糞を堆積して、銀座の中央を通じて一條の馬糞溝が出來た。殊に停留所では定つてイヽ氣持さうに放尿した。銀座では無いが、就中日本橋の大倉書店前は有名な鐵馬の放尿所であつた。其頃は道幅が狹かつたから、稍やともすると通り掛りのものは飛沫を浴びせられた。倫敦のタワー・ブリツヂも寫眞で見ると壯麗だが、自働車の無い馬車時代、大船を通ずる爲めに橋板を開くと馬糞がコロ〳〵と轉がり落ちるにはロンドナーもお國自慢の鼻が折れたさうだ。日本一、日本橋の袂に馬尿の洪水が溢れてゐるのは『江戸名所圖會』には見られない圖だ。喇叭圓太郎氏高座で唄つて曰く、『ほれたほれたよお前にほれた、馬が小便して地が掘れた。』と。喇叭氏、有繋に馬車馬の通人だつた。

(八) 寄席とシネマ

其頃銀座には今の東明座の前身の金澤亭と、南鍋町の鶴仙と、モウ一軒銀座二丁目(?)に講釋場があつた。寄席のフアンであつた私には寄席に就ての懷出もあるが、寄席は大抵ドコでも同じだから銀座の寄席には餘り行かなかつた。其中金澤亭は都下有數の席で、大看板が常に掛つたが、マダ下谷の吹拔、淺草の並木亭、神田の白梅には及ばなかつた。(本郷の若竹、九段の富士本、牛込の藁店等の全盛は之よりマダ以後である。)

銀座には今「シネマ銀座」があつて金春あたりの美人が大分

だらうといふ評判であるが、十年ほど前、西洋の連續寫眞に金春館といふのがあつた。建物は小さかつたが、出し物は封切の西洋物ばかりで、之も帝劇の女優が來るといふので評判だつた。トウダンスで賣出した高木徳子が全盛だつた頃、數寄屋橋内のスケート場の歸りに必ず來たさうで、マネージャーのSが今、高木徳子が來てゐますと電話を掛けて來た事が三四度あつたが、徳子の素顔を見ても初まらないから一度も行かなかつた。金春館はイツ頃閉鎖したか知らないが「シネマ銀座」が其の株を取つたと見える。ここらの活動は、丁度銀座の散策がカフエよりも夜店の冷かしよりもモガのぞめきを見物するを主とするものがあると同様に、スクリーンの面白味よりは觀覧席の眼の保養を樂むものが有るらしい。少くも銀座のムーヴヰーは觀覧席が興行主の懐ろの痛まぬ大入の美景となつてるらしい。

シネマの無い頃の唯一の民衆娯樂は寄席であるが、銀座には前記の三席が有つた。講釋場を除いて寄席は正月の外は晝間は席を打たぬものであつたが、金澤亭には色物の晝席があつて、二三度聽きに行つた事があつた。が、晝間は何となく氣が沈滯かないで寄席氣分になれなかつたのと、夜るは、其頃の私の下宿(芝)から餘り遠かつたので、銀座の寄席には自然足が向かなかつた。何と云つても銀座の民衆娯樂は明治八九年の見世物時代が[illegible]であつた。が、[illegible]そ[illegible]細工、[illegible]たどに[illegible]で、[illegible]の故[illegible]の側に出ると、今なら竹山甲の[illegible]にも小屋掛けしさうも無い轆轤首、足藝、首切、因果物、神佛利生記、地獄變相のゼンマイ仕掛等が昔から矢張人の出盛る西側に列んでゐたさうだ。銀座が追々繁昌で賑がつてから山城河岸へ見世物は移轉したが、其頃の山城河岸と云つたら狐や狸の出さうな今の帝國ホテルのあたりと、蘆薮の茂つた濠一つ隔てた淋しい町だつたから、明るい瓦斯の町なればこそ轆轤首も見物はあるが、裏町の淋しい夜るは一向人が出なかつた。段々寂れて一つ減り二つ減つて、見世物町がイツカ裏枯れの、京傳の『稜楽九郎判勢談』に出て來さうなグロテスクな鐵砲粉の女の巣となつて了つた。

（九）新聞の發祥地

――毎日の編輯室の憶出――

新聞町は今は有樂町に移つたが、本とは銀座が優勢な新聞社の淵叢であつた。少くも京橋區内に旗揚げしなければ[illegible]の大を成し難い感が新聞創業者を共通してゐたらしい。『日新眞事誌』が明治四年（マグ[illegible]にならぬ前）ツイ[illegible]で破[illegible]れた尾張町の山崎洋服店の處に新聞社の礎石を置いたのが初

てゞ、其跡が『曙新聞』となり、之も今は取拂はれた本との服部時計店の角が『朝野新聞』、ライオンの處が『毎日新聞』、『曙』の隣りが『繪入朝野新聞』(今は區整で移轉したがパンヤの澀萊の處)で、各々銀座の要害に據てゐた。『讀賣』が京橋の一角の第百の支店の在る處、『日々』が銀座の中心のマツダ・ランプの賣店やタイガーの在る處に盤踞してゐたのはツイ先日の事だから誰も知つてゐやう。大通りでは無いが『時事』が南鍋町に、『朝日』が瀧山町に在つたのはマダ記憶が餘り新らしい。『國民』だけが舊地(日吉町)と餘り遠からぬ加賀町に移轉したゞけで、其他は皆有樂町或は有樂橋附近に集まつて了つた。が、其頃は銀座が新聞の中心地であつた。其頃の新聞は事件の報道よりは言論の機關で、實際新聞に干與したものは言論界の雄たるのみならず、政治界の重鎭でもあつたから、惣ての政治的、社會的、思想的の諸運動が銀座を中心とする新聞社の編輯局から屢屢捲起されたといふものは決して過言では無い。

新聞社の最近の膨脹は恰も魔法使ひの播いた種子から生へた頴割が忽ちスル〳〵と伸びて枝を生じ葉を茂らし、蕾をつけて見る〳〵脹れて爛漫と咲匂ふが如き異常な長足の大發達をした。城郭とも見紛ふ宏大なる大建築を構へ、駈出しの新米記者でも堂々自働車を飛ばして踏反返つてゐる。が、其頃の新聞社と來たら外見は相當に大きくとも印刷機械で場を取つてるので、―編輯局内はガラクタの椅子テーブルに禿筆缺硯、塵埃と紙屑で埋まつてゐた。而して記者先生は、古りたれども洋服、破れたりとも羽織袴で佐野源左衛門然と納まつてるのは主筆先生ぐらゐなもので、大抵が着流しの猜々が米琉ぐらゐの一枚看板であつた。中には洗晒しのヨレ〳〵の久留米の羽織を紙撚で結んでゐるのもあつた。が、氣位は材木屋の鳶よりも高く、昂々然として天下國家を論ずる處士横議の風があつた。新聞社の勃興したのは維新後薩長の祿を喰むを屑しとしない幕府や佐幕の殘黨、經綸餘りあつても當路に容れられない不遇人、若くは仕官も歸農も歸商も意の如くなる能はざる失意者が驥足を伸ぶる地が無くて燻つたのが勢ひをなしたのであつた。其頃、明治十四五年頃はソロ〳〵營利化して來たが、まだ維新の氣魄が殘つてゐて、天下の木鐸を任ずる意氣込があつた。少くも新聞社の存在は銀座の光輝であると高く自ら矜持してゐた。

其頃はマダ吾曹先生の文名が四海を壓してゐた。薩長の脅威であつたは勿論、健訟の弊風を論じて口も八丁手も八丁の代言人と戰つて屏息せしめ、賣藥無効を宣して賣藥業者のボイコツトに包圍されても一と睨みに縮み上らせ、人觸るれば人を斬り馬觸るれば馬を斬る『所』の金剛丸然と目を剝いて、官僚の

[illegible]。[illegible]に[illegible]ゐたが、其後幾何もなく御用記者となつてからは吾曹先生の勢望も忽ち失墜して了つた。『日々新聞』も亦其[illegible]には漸々影が薄くなつて、吾曹先生隱退後の日報社は篤實なる橋部先生の精勵も、碌堂先生の縦横の大文章も最早舊時の勢力を恢復す事が出來なくて、曾ては銀座の鎭[illegible]であつた堂々たる石造の大城廓が荒涼として恰も無住寺の大伽藍の如くであつた。（『日々新聞』が再び昔の陣容を立直して堂々の勢ひを張つて來たのは『大阪毎日』の經營に移つてからである。）

『朝野新聞』は、今は較や忘れられたが、成島柳北の適く所として可ならざるなき多方面の才藝學術と、江戸人通有の風流洒落とで鳴らした『日々』に次いでの有力なる新聞紙であつた。末廣鐵腸は本と『曙』社の勇敢なる闘將であつたが、後に『朝野』に轉じて柳北の裨將となり、其の諤々たる讜論正議は薩長藩閥をして新たに一敵國を加ふるの感あらしめた。且鐵腸は啻に侃諤の政論のみならず、狂言綺語の詞才に富むは『二十三年未來記』や『雪中梅』を以ても窺ふべく、柳北傘下に恥ぢざる文豪であつた。

『讀賣』は其頃の大新聞と小新聞の中間を覘つた中新聞で、文學新聞といふよりは家庭新聞であつた。高畠藍泉、中坂まど

き、[illegible]で、[illegible]の才人に其の技倆を[illegible]した『讀賣』は上記の新聞より稍や遲れた出發をしたが、[illegible]とした堂々たる大新聞で、發刊當初からゴスペル・オブ・ソロバンの使徒を任じた大新聞であつた。今は茶事風流に隱れて[illegible]の從跡に遊んでるが、當時の高橋箒庵に非ざる高橋義雄の拜金傳道は目鮮しいものであつた。『拜金宗』は實に洛陽の紙價を狂はした名著（？）で、其のお庇で大成金になつたものもあらうが、其のお庇で産を破つたものもあらう。

一番要衝の地（今のライオンの處）に據つたのは『毎日新聞』であつた。が、沼間守一の嚶鳴社時代から質實硬直の社風を一貫して沼南に傳へたので、有力なる大新聞の一つであつたが終に一回も人氣を振ふ事が無かつた。幹部は何れも[illegible]壇の粹撰で、個人としては皆社會の儀表であつたが、何故だか集團としての威力を缺いてゐた。沼南時代となつてから社說は益々光彩を加へ、常に一歩を時流に先んじ、絶えず時代の新味を入れるに踈そかで無かつたが、ドウいふわけだか推讃者は有つても愛讀者は乏しかつた。必ず目を通さねばならぬ新聞の一つであるを誰にも認められてゐたが、實際は餘り誰にも讀まれてゐなかつた。

其頃の私は普通（たゞ）の新聞ファンで、熱心なる新聞縦覧所の出入者の一人であつたが、新聞社の内部の事情などは勿論少しも知らなかつた。二三の新聞界の名士の演説を聴いて顔を見た事はあつたが、格別の興味も無かつたから何の印象をも留めなかつた。が、銀座を通る度に眼に殘つたのは誰が書いたか知らぬが『讀賣新聞』の看板と、誰が建てたか知らぬが日報社の建築であつた。日報社の建物は建築がイヽといふのでは無いが、一律平板に積木を轉がしたやうな赤い煉瓦家屋の中に圓柱を建てたローマネスク風の鼠色の建築が如何にも堂々たる感じを與へた。此の建築は十年程前まで有つたから記憶に殘つてる人もあらうが、明治の初期の共通の田舍臭い洋風趣味はあつても銀座第一の堂々たる建物であつた。

私が新聞社と交渉し初めたのは明治二十三年年からだが、一番度々遊びに行つて知つてるのは銀座では毎日新聞社の編輯局だつた。新聞社はドコでも汚ないのが通り相場だが、殊に毎日新聞社は他社へ輪を掛けて汚なかつた。故人となつた毎日の社員の横山源之助は今で云ふプロ文學の先驅者で、観音の緣の下の夜明かしもしたし、木賃廻りもしたし、汚ない方では容易に驚かない男だつたが、月給の安いのは辛抱（がまん）するがモ少し社を奇麗にして貰ひたいナと時々壁訴訟をしてゐた。殊に編輯者を閉口さしたのは編輯局が西向きで、冬はイヽが夏になると一杯に西日を受け、煽風器の無い其頃は座がらにして日射病になつて了ふ。丁度焦熱地獄の苦みに喘ぐ眞最中の午後四時から五時が編輯に忙がしい時で、原稿紙（其頃のは唐紙の巻紙）の上に汗がポタ／＼垂れて墨がにじんで了ふ。其頃編輯局の一人だつた戸川殘花は前額からポタ／＼垂れる汗を拭き／＼、寒時には寒殺し暑熱には熱殺すと云ふが恁う熱殺され通しぢや堪らんと、氷の缺片（かけら）を嚙みながら苦笑した事があつた。其中に獨り泰然自若として衆社員が苦熱に喘いでヘア／＼云つてゐるのを白眼冷視しつゝコツ／＼として筆を走らしてゐたのは編輯長のNだつた。Nは沼間門下の嚶鳴社の生拔（はえぬき）であつた。閲歴から云つたら隈板内閣當時に波多野や肥塚と同列に知事ぐらには拔擢されてゐべき筈だつたが、名利に恬淡な渠は默々として僻遠の榮位に就くを傍観しつゝ、晏如として西日の燬きつく如き毎日社の編輯室のガラクタ椅子を樂んでゐた。其後Nの消息はサツパリ聞かないが、毎日社の汚ない編輯室を憶出す毎に、默々として語らざる木像の如きNの朴茂なる無表情の相貌をイツデモ思浮べる。（横山源之助が毎日社に籍を置いたのは僅に半年か一年ぐらゐだつた。が、今でこそ殆んど忘られてるが、天涯茫々生の名

名は一時新聞に喧傳されて、其の貧民窟探究や木賃宿生活の記録は毎日の呼物であつた。毎日を去るとブラジルに渡航し、植民事業に計畫を立てたらしかつたが、ブラジルから歸ると間もなく疾を獲て陋巷に窮死した。無軌道の惑星で終に何等の足跡をも殘さなかつたが、此の人生の「アンフヰニッシド・ピルグリメージ」の遍路修行者も亦數奇傳の一人として後世に傳ふべきであらう。銀座には縁が無いやうだが、亦銀座生活者の小さな一人であつた。）

（十）銀座の本屋

——稻田政吉と東屋と鳳文館——

其頃（明治十四五年頃）の銀座人物誌として第一に擧ぐべきは博聞社の長尾景弼であらう。記憶が朧氣であるが、タシカ南銀座の西側の黒澤タイプライターのあたりだつたと思ふ。間口の廣い堂々たる店構で、書生ッぽの我々には入り惱かつた。其頃の出版界は新舊交代期で、江戸時代からの舊家の芝神明前の泉市は古い煖簾の餘威を張つてゐても強弩の末魯縞を穿つ能はざる頽勢をドウする事も出來ないで勞れ切つてゐた。江戸の書林の總元締とも云ふべき須原屋の大看板は日本橋の袂に黒光りがしてゐても祖業を守るだけで無爲に過してゐた。傳統のある是等の和本屋では木板和紙の漢文物又は國文物を旨として、活字の洋本とすべき性質の書物ではないらしい者で、何には殊に容易にはなかつた。從て飜譯系統の片假名交りの譯書を迎ふる出版者が起らねばならなかつたので、博聞社は此の先驅者でもあり又成功者であつた。社長の長尾景弼は播州龍野の藩士で、千葉縣知事から元老院議官となり最始の貴族院に列した柴原和と共に龍野の二人物と稱されてゐた。重に官版物を扱つたので、岩倉大使一行の『米歐回覽實記』五冊は博聞社の出版中の最も浩瀚なるものであつた。近頃明治文學研究の流行と共に記憶を甦生らした初期の飜譯家の井上勤の『魯敏遜漂流記』も博聞社から出版されたものだ。『魯敏遜』は井上の譯書中一番傑出してゐるが、裝釘も亦當時の出版として今日の新刊と列べても餘りに耻かしからぬものだつた。（博文館の名が『佳人之奇遇』を出版した博文堂の盛名に追隨したのだといふ說が屢々傳へられ、ツイ此頃も高名な某小說家の談話として某誌に載つてゐたが、私は大橋新太郎氏からも先代の佐平氏からも聞いたのでは無いが、然うは思はない。博文堂も『佳人之奇遇』發行當時は相當盛名があつたが、博文館が出版界へ乘出した時は最う躓いて神田の西小川町の屋敷長屋に逼息して辛じて出版を繼續してゐたので、印刷局を向ふへ廻して競爭するやうな空想に燃えてゐた先代佐平老人を羨ましがらせるやうな家では無かつた。博文館の名が假に若

し出版成功者の先蹤に迫つたとすれば、夫は博文堂では無くて博聞社で無ければならない。けれども之も私の想像で、或は然うで無いかも解らん。）

銀座には博聞社の外にモウ一軒新らしい活字洋本の出版者があつた。報告社大野尭運と云つてタシカ京橋寄りの西側の、今の安田銀行支店か、大倉商事會社のある角だつた。餘り大きな店では無かつたが、矢張官版を主として可成大きくやつてゐた。爰から逐月發刊された『法令全書』(?)といふは官報の提要のやうなもので、官吏や法曹界の人には調法された。今でも折々見える井上勤の『全世界一代奇書』(アラビヤ夜譚)は此の報告社から分冊連刊されたので、其頃の出版としては可成な部數が賣れたものだ。

上記は當時の銀座の新らしい文化を代表する出版社だつたが、江戸時代からの古い暖簾では山城屋政吉といふのがあつた。之も西側の銀座二丁目の、タシカ今の三枝小賣部の處に『江戸名所圖會』にあるやうな古い行燈着板を出してゐた。銀座の新市街を第一に讃美した『東京新繁昌記』の出版人であるし、本屋としても毛色の變つた男であつたから、矢張銀座人物傳の中に加へねばならない一人である。『東京新繁昌記』は其題名からして靜軒の『江戸繁昌記』を踏襲したには違ひ無いが、服部誠一には服部誠一一流の諷諭風誹があつて、啻に先後を以て輕重すべきでは無い。批評は暫らく預かるとして『東京新繁昌記』は洛陽の紙價を高からしめたも大袈裟だが、當時の人氣を沸騰した當り作だつた。此の旨い汁をシタタカ滿喫した山城屋は矢繼早に二度の浮味に飽かうとして當時の操觚界の獨參湯なる成嶋柳北の『柳橋新誌』を上梓した。果然讀者界の人氣は『新繁昌記』以上に湧いて山城屋はホクホク者で土藏の三つ四つも建築しする懐ろ勘定をしてゐた處が、柳北の洒落な筆禍が祟をして、出版幾何も無く風俗上の罪に問はれて禁止された。當時は政治上の危論が禍を買ふは珍らしくなかつたが、風俗上に問はれるものは滅多に無かつた。『柳橋新誌』がドウシテ禁止されたかは今に於て猶ほ疑問であるが、這裡の消息は別として山城屋は寢耳に水で、背戸の家鴨が鄰家の與太郎の空氣銃で打たれたよりも驚いた。丁度製本が出來て來たばかりの數百冊を擁して、途方に暮れて策の出づる處を知らなかつた。

が、山城屋稻田政吉は其頃の商人としては四角な難かしい字も讀み、後に府會議員となつて府政に與かつたほどの口利きで、默つて泣寢入する男では無かつた。其頃地獄の門を潜るより恐ろしがられた役所へ大膽に出頭して、お上の厳命となら

は夫れに答へた[illegible]。相上つて一分本までし[illegible]、[illegible]止されても押へられなかつたと見え）此儘紙屑として了つては商賣は立行きませぬ、何とか特別の御容赦をと哀訴した。其頃は今より出版に理解も同情もあつたと見え、評議の末に當局は從成らぬが殘本は寛大に見ると許された。稻田は百拜千拜、恩を謝して歸ると直ぐ、『柳橋新誌』禁止に就き殘本限り絶版と、筆太に認めた立看板を店頭に立てた。さア賣れるとも、賣れるとも、何遍消摺しても製本が間に合はぬほど賣れ、其頃としては今日の圓本の數萬部にも匹敵する何千冊が瞬く間に賣切れて了つた。あの頃は隨分ノンキでしたと、後に稻田が太ッ腹を抱へての懷出の笑ひ咄であつた。

稻田が出版した繁昌記物で一番賣れなかつたのは松本萬年の『新橋雜記』であつた。松本萬年は其頃土手三番町に私塾を開いてゐたタヾの漢學者であつた。が、曲りなりにも『新橋雜記』を書かうといふんだから滿更な子曰く一天張の腐れ學者でも無かつたらうと思はれる。が、假紅倚翠の風流學では酸も甘いも嚙め盡した柳北の敵では本より無かつた。『柳橋新誌』を出版した山城屋が『新橋雜記』を上梓すると聞くと、柳北先生冠を曲げて、藝者に酌をして貰つた事の無い花柳門外者に新橋の事が解るもんかと散〻な不興だつた。山城屋も恐縮して頭を搔き／＼、[illegible]いと頻に茶だカめた。[illegible]『柳橋新誌』[illegible]を占めたので『新橋雜記』でモウ一と儲けと目算を立てたのが『新橋雜記』は果して柳北に叱られた通り少しも賣れないで目算がスツカリ外れた。私の『銀座繁昌記』も、浪花節もウナれず、チヤールストンも踊れず、カクテルも舐めないやうな奴に銀座の事が解るもんかと、松崎天民氏あたりに舌舐めずりをして××を切られさうだ。

山城屋が段々商賣に身が入らなくなつたのはイツ頃だか知らぬが、府會でイヽ氣持さうに氣焔を揚げ初めてからで、隣家の伊勢與の親仁が、稻田も困つたもんだ、商人が政治に手を出しちやア商賣は暗黑だと、山城の家運を心配してゐたのは二十三年頃だつた。其頃の府議や市議には役所の内職もなく陣中見舞金の役徳も無かつたから、稻田は持出す一方で終に店を閉めるの止むを得なくなつた。商賣を廢めて了つてからは長い本屋の生活中に蒐めた藏書を擁して讀書家の仲間入をし、餘生を古板の趣味に樂んでゐた。稻田の蒐集は古板どころでは無い御一新草々からで、西鶴からげで流しに出たのを丹精して保存して置いたのが大部分だつたから、天平の寫經とか宋元の珍籍とかいふものこそ餘り無かつたが、正平の論語とか、師直の禁制[illegible]

とか、博多板とか大内本とか、直江板とか慶長の勅板とかいふ類は大抵揃つてゐたらしい。稻田は秘佛と稱して藏儲を見せ惜んだから、折々の古書展覽會に出陳したもの丶外はドンナ珍籍を持つてゐたか餘り知つてるものは無かつたが、死後藏儲の全部を雲邨文庫へ移した時、市川の閑居から運び出したのがトラツクに二臺あつたさうだ。ジャヅとカクテルの町の中に住て斯ういふ蠹魚の臭ひを鑑賞したものがあつたといふは、夫だけでも稻田政吉は銀座人物志の異彩として傳へらるべきである。

表通りでは無かつたが、裏煉瓦に兎屋といふのがあつた。兎屋と云つても今は餘り知つてるものはあるまいが、兎屋本で云つたら一時は全國を風靡した大量製産の出版の元祖であつた。夫ではドンナ本が出版されたかといふと記憶に殘つてるものが一冊も無いと云ふほど夫程愚にも附かない碌でも無いものばかり出版して、到頭馬車(圓太郎ぢや無い)を乘廻すまでに漕付けたといふは矢張銀座でなくては生れない怪物だつた。

ドコラであつたか、記憶は甚だ朧氣であるが何でも數寄屋橋に近い廣い通りだつた。間口の可成廣い店で、イツデモ新刊を山の如くに積んであつた。兎屋といふのは屋號で、望月誠が本名であつた。著者よりは出版人で賣る流義で、表紙にも扉にも兎屋誠と麗々しく署名したのが著者の名よりも目立つたから兎屋誠で通つてゐた。尤も多少文筆の才があつたか祐筆を抱へてゐたかして、自ら編述したもの丶出版が多かつた。無論糊と鋏で細工したものばかりで、兎屋の出版に一冊として碌なものは無かつた。『女房の心得』とか『亭主の心得』とかいふやうな『是だけは心得べし』式の安價家庭書が多かつたが、中には書名を擧ぐるだに顏を赤くするやうな露骨の題名の生理書や衞生書も澤山あつた。書名の出版を丸で緣日の賣物でも作るやうに心得て、剽竊だらうが、焼直しだらうが、一向お關ひ無しに矢繼早に數でコナして濫發した。著者や内容などは丸で問題にしなかつた。

昔も今も書籍の出版を糊と鋏で細工して印刷屋に製造させる家庭工業の一種として扱ふ出版者は珍らしからぬが、兎屋ほどに徹底して、其頃としては相當大仕掛けに組織的に刊出したのは前にも後にも餘り類例が無い。時代が時代だから今日ほどに大量製産したんぢや無いが、兎屋は多くセリーズ物を作つては數でコナしてゐた。例へば『實事譚』の如き、五十冊だつたか百冊だつたか忘れて了つたが可成な多冊のセリーズだつたから可成な部數に達したであらう。恐らく何十萬といふ數だつたらう。前記の書名を擧ぐるだに赤面する生理書の如きも亦何百萬といふ

發行部數だつたらう。

が、ドンナものが出版されたかと考へると殆んど一冊も記憶されないほど概其俗書並本凡本の濫出であつたが、案外の傾向を洞察する鋭どい着眼と、直ぐ其要求に適合する新書を案出する敏捷な技術があつたと見え、糊と鋏で粗製濫造したものが大抵中つてグン／＼伸して行つた。本屋で馬車へ乘つたのは恐らく兎屋が初めてであつたらう。其頃馬車を驅るといふのは今日の自働車どころで無かつたので、實業界の大頭株でも馬車へ乘るのは誰と誰とと數へるほどしか無かつた。本屋は今でこそ貴族院の多額納稅議員の有資格者もあるが、マダ其頃は微弱だつたので、『女房の心得』や『亭主の心得』で馬車へ乘つたのは、學子の御者が旦那の座席を失敬したやうなものだ。

が、兎屋も馬車を驅るやうになつてからは餘り振はなくなつた。最早『女房の心得』や『亭主の心得』でもあるまいと、少しは店の看板になるやうな名著をと心掛けるやうになつたが、扨て兎屋から著書を出版しやうといふ勇氣のある奇特人は無かつた。馬車を驅つて學者や操觚者の門に伺候してもマジメに兎屋の對手になるものは無かつた。今ならば高い印稅か原稿料を嗅はせれば、ドラッグの藥のやうな廣告をされても、バナナの叩賣のやうに賣出されても喜んで應ずるものがあるだらうが、其頃はマ[illegible]心得』[illegible]も不氣であるほど其頃の著作全部[illegible]と[illegible]しくはなかつた。夫から間もなく兎屋は馬車を[illegible]つたのがラスト・スパークとして、泡沫の影が段々薄くなり、誰も知らない間にドコへか消えて了つた。

兎屋本が村孃田夫の巾着を叩き出させつゝある時、經史百家を大上段に振りかぶつて田舍學者や漢學書生を搾取した鳳文館前田圓は南鍋町の以前の風月堂のあたりに堂々たる大厦を構へてゐた。前田は後に默鳳道人として餘生を書家に韜晦し、フイ數年前に故人となつたが、默鳳道人が嘗て雄飛した鳳文館であるのを知るものは甚だ少なかつた。

前田は以前は泉市の番頭であつたさうだ。デップリ肥つた不得要領な一見肝玉の太さうな男だつた。誰が金主であつたか知らぬが、南鍋町の店は其頃の本屋にしては珍らしい堂々たるもので、卒然蹶起して天下に號令するが如く『佩文韻府』や『資治通鑑』や『綱鑑易知錄』や『史記評林』のやうな浩瀚なる大部物を矢繼早に出版した。一體豫約出版の創始者は誰であつた乎。南傳馬町の稗史出版社の『八犬傳』が初めてである乎、鳳文館の『資治通鑑』や『史記』が初めてである乎。夫とも他に何[illegible]

者があつた乎、記憶は何分確かで無いが、漢籍では鳳文館が一番槍を付けて、廣大なる古典を矢繼早に續出したのは目鮮しい武者振だつた。

が、史記や通鑑は其頃の漢學塾の教科書であつたから販路は相應に廣かつた。大部物でも複刻するに少しも不思議は無かつたが、漢學知識の今より洽かつた其頃でも(鳳文館の複刻の前には)書名をだも專門家外には餘り知らなかつた『佩文韻府』の如き難物をドウシテ複刻する氣になつたであらう。察するに前田の周圍には漢學者が群がつてゐたから、原本の舶載が少なくて高價であつた其頃、世間の需要よりは渠等が欲しくて前田を挑て上げたのではあるまい乎。或は又、其頃の支那公使の黎庶昌は駐日中に支那に亡佚して日本に殘存する逸書を採訪して『古逸叢書』を編輯上梓したほどの熱心な好書家であつたから出版にも亦理解があつて『佩文韻府』が『支那、縮緬宜しい?』の行商人でも七言絶句ぐらゐ捻くる支那人に取つては日本の縮緬のやうなものだから、日本で賣るよりは支那へ輸出する目的で前田を慫慂し、公使の間が了解があつたのでは無い乎とも臆測される。

左に右く『韻府一隅』や『詩韻含英』で結構間に合つた日本に『佩文韻府』の必要や欲求があらうとも思はれないのを、難物を物ともせずに銅鍋でやつてのけた鳳文館の無鐵砲なる大膽さ加減は驚入つたものだ。果して何部豫約者があつたかは大抵思ひ半ばに過ぎる。夫から十年も經つて後、故人の野口寧齋を偶と尋ねると、座間に鳳文館本の『佩文韻府』が飾つてあつた。『エライものが有るナ』と云ふと、『僕らは之が無くちや詩が作れんのだ』といふ寧齋の挨拶だ。星社の連中が矢鱈と嵩の多い字を捻くる根原は爰に在るので、鳳文館が無かつたら我々はアンナ難かしい詩を讀まされないだけでも助かるのだと、腹の中で苦笑した事があつた。(だが、鳳文館が『佩文韻府』を複刻したのは無鐵砲でも豪かつたと思ふが、後に吉川弘文館が此の鳳文館を縮册して、蟲眼鏡をつけて景品附きで賣出したに到つてはピツタリしてシヤツタリが止まつた。)

一體前田は算盤を知つてゐるのか無茶苦茶なのか、成算があつたのか出たとこ勝負なのか、資本があつたのか借金で初めたのか、山師かホラ吹きか、大膽かズボラか、遠くから見たのでは丸で見當の付かぬヤリ口だつた。新館が落成した時は當時の明公鉅卿、翰林の名士、淸國使館の人々を招いて盛宴を張つた。日東作林の豪華は中國にまで響いて海內列ぶものが無い全盛を極めた。當時鳳文館の樓上は有らゆる翰墨の名士に開放され、黎公使、姚書記官、陶譯官を初め數多の淸客も屢々來集して詩酒

殘金日も足らず、斯く鳳文館の營業上たらざるを應づる嫌があつた。此の如くして有らゆる儲け時機を期待して商法の數を盡した鳳文館は漢籍界の計畫なら何事も成らざるは無い筈だつたが、ドウいふ破綻を生じたのか、門外漢には解らなかつたがイツの間にか店を閉鎖して了つた。花々しくはあつたが短かい壽命だつた。

鳳文館の新版でだも右にも斯文に貢獻し後世に殘るを値ひするは矢張『佩文韻府』であらう。だが、之が多分短命の素因を作つたのであらうと思はれる。『康熙字典』や『圓機活法』の銅鐫が一番世間に調法されたらう。其の版木が轉々して博文館の手に歸してからも可成な版數を重ねたやうである。一番人氣があつて廣く讀まれたのは依田學海翁の『譚海』であらう。學海翁の傳奇體叙事文は翁獨特の名文で、後の翁の小說や脚本よりも後世に殘るべき作である。矢張鳳文館から出版された翁の『斷蓬奇緣』は鳳文館が漢文物では到底立行かないので時文に手を着け初めた唯ツた一つの假名交り物である。鳳文館にも少し壽命を與へたら方面を轉換して更に興味ある活動を見せたであらう。

書店を閉ぢてから一二年後、不斗或る知人の家で同席したのが前田圓であつた。知音（しるべ）といふ關係では無かつたが、豫約者の一人として屢々鳳文館へ行つたから顏は知つてゐた。其時は向島へ引込んで、家禽を飼つてゐたのださうで、[illegible]には即ち神仙と云ひたげに、前日の事は噯にも[illegible]忘れて了つたやうなケロリとした顏をしてゐた。

『君、動物はイ、ナ』と私の友人に向つて、『乾つと早く家禽を飼うんだツけ。學者やチャンコロのやうに理屈も云はないし、怒りもしない。嫌らがりもしないし、欲張りもしない。家禽を相手にしてゐるとノウ／＼して壽命が伸びさうだ……』

『だが、儲かるかね？』と私の友人が訊くと、『儲かりはしない』とアグラを搔き直して、『尤もやりやうだネ。やりやうに由て儲からん事も無い。だが、儲けやうとすると何でも面白くなくなる。儲けやうとしないで金が殘るんでなくてはホントウぢやア無い。先ア一度來て見い。コツコツコツと餌を撒いてやると、遠くから何羽も駈けて來る。可愛いゝもんだ世。眞箇なんかは忘れて了う……』

と、鳳文館時代の事は丸で忘れて了つたやうに噯にも出さなかつた。が、前田の養鷄は決して隱居の道樂では無かつた。矢張其頃流行（はや）つた種禽で一と資本（もとで）作るツモリであつたらしいが、大玄關で"All or nothing"の一六勝負を張るのが前田流だつたから、養鷄などは間殺こくて結局面倒を見てゐられなかつた。間も無く向島の家禽場も人に讓つてドコへか影を消して了

つた。前田を知つてる私の友人も其後地方へ引込んだので、夫ぎり前田の消息も聞かなかつた。

夫から十何年か經つて、默阿道人としてリップ・ヴァン・ウヰンクルのやうに書家の假面を被つて現はれたのが前田圓だつた。大作黑主が頭を圓めて引拔きに喜撰法師に早變りしたやうな化け方であつた。が、風雅でもシャレでも無くて『All or nothing』を溝へウッチャつて來た灰汁拔けのした書家だつた。だが、前田は書家の生活を知り過ぎるくらゐ知拔いてゐた。昔の書道一遍では三跡でも三筆でも天下の書聖と崇められて象牙のお廚子に納まつてゐられないのを能く知つてゐた。大作黑主の髷を脫いだ喜撰法師は腰を低くして、看板でもビラでも選擇なく引受け、昔し取つた杵柄の本屋の新版の扉や脊文字の註文には喜んで應じた。昔は學者や詩人に取捲かれた剛愎な男だつたが、白龍魚服すれば豫且に苦められると堅苦しい惡癖も出さずに、往朝常得意の本屋や印刷所を弟子に廻らして御用を聞かせ、晦日になると、通は作らなかつたらしいが、酒屋や炭屋と同じ書出しして揮毫料を集めた。先生振らずに勿體がらないので、氣輕に頼めて面倒臭く無いと調法した家が相當に多かつたらしい。

前田は此の如くして一生の幕を終つたが、裝幀の熱心が全く銷磨したのであらう乎。默阿に韜晦したのは一度の雄飛を期してゐたのでは無いかとも思はれる。が、默阿をして再び出版界に進出せしむるには時代が餘り隔絶し過ぎて了つた。若し卅年の前田圓をして今日に在らしめたなら必ずや世間をアッと驚かす空中樓閣的計畫を實現しないでは措かないだらう。『ブリタニカ』の全譯、『四庫全書』の國譯を企てるぐらゐは何でも無い事、著作家協會、評論家協會、劇作家協會の大同團結を目論んで、洋行資金、邸宅資金を一手に引受ける位は朝飯前であらう。

兎屋も亦、若し今日に在らしめたなら、百萬部計畫の女の雜誌や講談の雜誌の五つや六つは無かつてたらう。商賣の行き方ややり口は各々違つてゐたが、エンタープライジングで大膽な冒險家であつたのは二者共に同じであつた。結局は二者共に失敗して末路は餘り振はなかつたが、又銀座の潑溂たる生氣が産出した快男兒であつた。當時博文館の先代佐平老人も新太郎氏も長岡の鄕里に雌伏してゐた。春陽堂は芝の今入町の雜誌店で、先代鷹城が帳場格子の中で小さな出版をして小遣取をしてゐた。三省堂も有斐閣も小さなタヾの古本屋で、富山房はマダ現れなかつた。兎屋、鳳文館以後、銀座には傳ふるに足るやうな本屋は一軒も出なかつた。指を僂すれば殆う四昔を越して五昔とならんとしてゐる。

（此項終、前出。）

接吻

酒嗜まず接吻せざる者これ死人に近し。(ゲエテ)

丸木砂土

日本の接吻

接吻と社會主義といふ二つの言葉位、日本で嫌はれた文字はない。今から十二三年前に出版された雜誌なり書物を開いて○○とあれば接吻、××××とあれば社會主義といふ字を當てはめて讀めば、大概間違ひはない筈だ。ところが今日になつてみれば社會といふ字が共産といふ字に入れ替つても、なにもすぐ××とするには及ばなくなり、接吻といふ字に至つては、確に日本の靑春男女諸君の、、、、になつたやうである。菊池寛作「第二の接吻」は、同氏の名作といふばかりではなく、日本に嘗つて無かつたこのやうな小説の名が、大膽明快に用ひられたといふ意味に於ても、日本接吻史の上から特記すべき作品である。その外日本に輸入公開される外國映畫でも、接吻の場面が禁止されるといふ事も、先づ少くなつたと聞くから、これ人文の進步か聖代の恩澤か、いづれにしても有難き次第である。

これならば日本には接吻といふものがなかつたか、といふと、昔の日本人だつて接吻は大いにしてゐたのである。世界で今日になつても接吻といふものを知らない人種は、かのゴオギヤンの「ノア、ノア」によつて知られたるタヒチ島の男女、新西蘭土、パプア、濠洲の土人、ソマル、エスキモオ等の野蠻蒙昧の連中だと言はれてゐる。今日まだタヒチ島の島娘が接吻を知らないといふ事は、僕に考へられない。なぜならば畫家ゴオギヤンが念入りに敎え込んだ筈だからである。然し接吻といふものは、人間の本能であるよりも、寧ろ戀愛文化の産物のやうに解してゐる學者が多い。その實例として、接吻は野蠻人にはた

いと述べる人が少くないのである。然し昔の日本人が接吻さへも知らざる蒙昧なる人種であつたと考へるのは、僕等の祖先に對して甚だしい無禮である。今日英雄待望論を高唱せられる諸君の大好きな豐太閤でさへも、淀君に與へる有名な手紙の中で、戰爭から歸つたら、必ず「、、、、」、、、戀々たる接吻の約束をしてゐる。あの手紙も日本接吻史の上の立派な文獻である。徳川時代の草双紙讀物小說を見ても、至る處に「口吸ふ音」といふものを聞かせられる。今日日本が西洋に誇ると稱せられる唯一の藝術品の浮世繪を見ると、歌麿、春信等の畫家が、、、、、、、、無數にある。日本の道德論者がそんなものは、、だと言つてごまかしても、西洋の風俗史には彩色入で立派な挿繪になつてゐるから駄目である。西鶴の作品は勿論、春水の「春告鳥」「英對暖語」に至つては、西洋小說と少しも變りのない纏綿たる接吻が描かれてゐる。

ところが僕は一二の西洋の書物に就て見ると、日本人は接吻といふものを知らないか、或は之を嫌ふ人種だと書いてあるのを發見した。ある本には日本の官憲がロダンの名作「接吻」の陳列を禁止したので、佛蘭西大使館が抗議を申出でたに對して、東京の警視廳は「接吻は甚だ厭ふべき風習である」と返事をした爲に、この世界の名作は遂に東京に公開出來なかつた、と書いてあつた。僕はこの事實の眞僞を知らないが、ロダンの「接吻」の寫眞ならば、日本にはいくらでも流布されてゐる筈である。又ある本には日本の女の接吻は、雪を欺く滿開の櫻の木の下にあつて、遇々鼻と口とに觸れた櫻の花のやうに、果敢なく賴りないものだと書いてあつた、或はこの本の著者の實驗から來た說かも知れない。

然らば今日の日本の女はいかに接吻するか。これは殘念ながら僕の如きものには分らぬ。然し日本にも不良外人と通ずる名流婦人が甚だ多いさうだから、やがては外國の書物を通じて、今日の日本の女の接吻振を知る事が出來るかも知れない。

支那の接吻

これならば支那の女は接吻するか。これも實は僕の甚だ知る事の少ない處である。西洋の書物に就て見ると、支那は接吻を知らない國だとある。支那の風俗稗史に通じてゐられる先輩は澤山あるのだから、いづれ教を乞ひたいと思つてゐる。然したとへ支那に接吻といふものが無かつたとしても、少しも恥じる處はない。かのコロンウエルの命によつて、瑞典王を訪問に來たバルストロオド・ホワイトロックがストックホルムから英國へ報告した文書によると、瑞典の女は接吻といふものを知らな

いと言ひてある。何も相見つる女は夜にこの人去るを目の前に見した

と言はれてゐるが、かの「百合の足を持てる女」と嘆賞される中國の美婦人が、この種のものを今日になつても知らない、といふ事は不可能である

ところが千八百九十七年に公にされた佛蘭西のダンジョイといふ人の「歐羅巴及支那の接吻」といふ本によると、支那人は接吻をしない代りに、お互に嗅ぎ合ふ、と書いてある。山岳地方（チタゴン）の支那人は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、と言ふさうである。ダンジョイ先生の説明によると、、、、、、、まづ相手の頬に鼻を押し付ける、次に鼻によつて靜に長く息を吸ひ込む、これと同時に目は自然に閉じる、それから頬に口を押し付けずに、、を輕くぴちやぴちやと鳴らす、のださうである。もとよりこの間に愛すべき鼻は微妙なる、、、、譯である。但しかういふものが接吻と言はれるかどうか、これは別の問題である。それよりも支那の文献の上に接吻といふものがあつたかどうか、その方を知るのが僕の急務だと思つてゐる。

現代支那に接吻を風靡せしめたのは、米國映畫のルドルフ・ヴレンチノだといはれてゐる。僕は映畫の上で最效果ある接吻を見せてくれるのは、アドルフ・マンヂウだと思つてゐるが、

これも好きすきこそかうた

なぜ目をつぶるか

僕はこのチタゴン地方の支那人の鼻の接吻の説明中に、目は自然に閉じる、といふ一節を讀んだが、接吻の際に目を閉じるといふ事實は、決してこの山岳に住む支那土民ばかりではないやうである。それどころではない、これは實は概觀すべからざる難解なる大問題として、昔から大に議論された問題だ。

接吻の時には目を閉じる。これは動かすべからざる事實である。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。この問題を提出したのは誰でもない、實に詩人ハインリヒ・ハイネその人である。ハイネの戀愛詩の一節に、

夜更けてより曉近きまで
絶え間なくかの君はたづね給ふ
「われ君が唇に接吻すれば
なに故に目をば閉じ給ふ」
なに故かわれ自ら知らず
なに故ともわれ答へず
唯わが眼を閉じて君に向ひ

君が唇に接吻こそすれ。

ハイネは「ロオレライ」の詩の初めでも「なに故かわれ自ら知らず」と言つてゐるが、この詩のこの一節こそ、多くの戀愛學者の頭を惱ました最初のものなのである。

嘗て伯林のある週刊雜誌が、この問題を讀者に提出して、その解答を募つた事がある。これに對して集つた夥しい解答の中から、一部を引き拔いてみると、

1、そんな事の御返事は、子供でも出來ます。昔から「戀は人を盲にする」と云ふぢやありませんか。

2、あたりが夜に成つて貰ひたいからです。

3、戀愛の流れは三つの瓣から出て來ます。二つの目と一つの口です。然しもつと強い流れを起す爲には、その中の二つの瓣を閉じなければなりません。

4、好い年をして、莫迦な事をするのを、見ない爲です。

5、接吻とは戀愛の快樂の波に浸る事である。水にもぐれば誰でも目はつぶる。

6、接吻とは第七天國です。下を見れば目がくらむ。だから。

7、接吻とは好いお酒のやうなもの。うまく味はふとするには、目をつぶつて飲むに限る。

8、戀愛の焔眼を射らざる爲。

9、じつとその味ひを覺えてゐたい爲です。

等、等、等。

そこで一等賞を得た解答は、どんな文句かといふと。

10、聖書に曰く、爾その隣りの者を愛して、その力なき術にも快く一つの眼を閉じよ、と。接吻の時には、實は二人とも力が拔けたやうに感じられるのです。だから一つはあなたの分、一つはわたしの分。かうして二つの目をつぶるのです。

基督の言葉を引用してくるとなると、成程接吻は第七天國のものらしい。兎に角この、なぜ接吻の時には目をつぶるか、といふ命題は、依然として難解を極めてゐるらしい。

エヴと蜂

接吻は第七天國に等しい、といふ一つの解答から考へると、抑々天國には接吻といふものがあつたか、といふ疑問が續いて起つて來さうである。例へばアダムがエヴから林檎を貰つた代りに、一寸接吻でもしてやらなかつたか、といふ想像も起るが、これはさすがに文書には殘つてゐない。然し舊約聖書に傳へられる處によると、エホバ神土の塵を以つて人を造り、生氣を其鼻に吹入れたまへり、とある。もしこれが鼻でなかつた

ら、實に世界最古の接吻であつたらう。と言ふ人もあるが、或はさうかも知れない。

然しアダムとエヴが接吻をした。といふ説を唱へる人は、かういふ事を言つてゐる。エヴが樹の下で横になつてゐると、無論エデンの花園の話だから裸であるが、そこに一匹の蜂が飛んで來て、エヴの赤く美しい唇を見ると、確にあまい蜜があると思つて、まさにまどろみかけたエヴの唇に飛び付かうとすると、これを傍で見てゐたアダムが、好奇心かそれとも嫉妬からか、蜂を拂ひのけて、その唇に口を押し當てた、といふ話がある。エヴは恍然として目を覺まして、このアダムの接吻を悦んだ、といふ事であるが、アダムに接吻を教へたのは、果してこの蜂であつたか、或はエデンの花園に飛ぶ蝶であつたか、その邊ははつきりしないのである。

アダムとエヴの接吻は少し怪しい點があるが、これは天國の話である。然しアダムが九百三十歳で死んで、大分後になつてくると、もう接吻といふものは珍しくなくなつてゐる。創世紀を見ても、イサクが我子ヤコブに向つて、近くよりて我に接吻せよ、と言ひ、ヤコブがメソポタミアに着くと、ハランの泉のほとりでラヘルに接吻し、ラバンはヤコブに向ひ、何ぞ我をしてわが孫と女に接吻するを得さらしめしや、なぞと小言も云つてゐる位である。こうしてもエサウとヤコブが接吻し、ヨセフが死んだ父の顔に接吻するなどから見ても、接吻は既に極めて普通の土地と人とには、不思議なものではなくなつてゐる。イサクやヤコブが接吻の發見者である、といふ事も言ひ出來ない。

東洋の接吻

舊約聖書に現れる土地は、すべて東洋に近い。そこで西洋に對立する東洋といはれる土耳其、亞剌比亞、波斯の接吻は、西洋からどう見られてゐるかといふと、「亞剌比亞夜話」に描かれたる接吻、土耳其のハアレムの女人の接吻等から考へて、その淫逸肉慾的な點に於て、遙に西洋に優つてゐるといふのが定説である。この點では古代埃及が最もすぐれてゐるやうに言ふ人もある。古代カイロの女の生活では、接吻が甚重要なものであつた事は疑ひない。單に接吻が巧であるといふ理由で、一躍王様に召し抱へられた奴隷の女の話も殘つてゐる。西洋では接吻は學ぶ男の技能であるに反して、東洋では女の秘技である。

土耳其の女もこの道にかけては、世界有數の技を持つてゐると稱せられてゐる。もつと東洋から極東に來てみると、いろいろの説を爲す者がある。例へばジヤヴの女である。ジヤヴの女は、踊りによつて生き、接吻によつて死ぬ、とさへ言はれてゐ

る。従つてジャヴの女は、踊つた後では接吻し、接吻した後では必ず踊り、物を乞ふ時は犬の如く、踊る時は女と成り、接吻する時は女神に等し、西歐婦人の接吻に飽いたる者は、宜しくジャヴの女を愛すべし、必ず君が魂を驚かすものあるべし、と說いた西洋人がある。その接吻振は母の乳を吸ふ子供のやうだ、と言ふが、然しこれは人の好きずきであらう。

印度の女の接吻は、專心そのものと稱せられるが、實はそんな簡單な言葉で言ひのけてしまふ程度のものではない。かの「カマストラ」は人も知る印度性慾の寶典で、西洋の文書で之に匹敵するものはないが、その第七章「愛撫」篇に於て、印度の接吻は精細を極めて描破し盡されてゐる。これを讀む者は、眞に印度の女の顚倒的氣魄に打たれてしまふ。

シャムの女は夢を見るやうに接吻すると言はれてゐるが、到底印度の女の威嚴の精神は持つてゐない。例へばシャムの女には、戀する者の甘き毒が欠けてゐる、充ち溢れたる生活力と死の熱望に乏しい、と非難されてゐる。

支那と日本の接吻に就ては、既に知る通りの有樣だ。東洋の接吻は「亞剌比亞夜話」と「カマストラ」に盡きるやうである。殊に接吻が女の秘技である思想は、東西全く相反する所で、東洋の接吻に就て、特に注目に値する點である。

西洋の接吻

然らばジャヴ印度の女に比べて、西洋の女はどうかといふと、これも中々複雑で、一概には言へない。

例へば露西亞の女は、甚だ多く接吻する。けれどもこの接吻は、戀愛の接吻ばかりではない。僕等が往來でも家の中でも多く見る露西亞の女の接吻は、別れの挨拶でもあり、敬意を表す身振でもあり、甚だ冷い乾いた接吻であるが、一度男女戀情によりて起る接吻に至つては、頗る密にして溫柔を極めると言はれてゐる。露西亞から波蘭に移ると、波蘭の女の接吻は、巴里の接吻の眞似に過ぎなくつて、期待すべき唇の痛みの快さなぞは更に無く、それに唇であらうが花であらうが、指先の爪でも煙草のパイプでも、何でも構はずに唇に近付けるので、甚だ賴りなく心細いと、さる通人の說く處である。

同じ西洋でも匈加利になると、東洋に近いマジャアル人であるが、熱烈なる戀はあつても、熱烈なる接吻はない、といふのが定評である。匈加利の女は、唇のみでなく、眉、腕、手、胸、腰を以ても接吻するといふが、ブダペストの美婦人が、眉や胸を、、、させる處は、ジヤツズの旋律に似てゐるといふ噂もある。接吻は魂の呼吸である。決して肉體の運動ではな

いゝ加減の女ならば哲學から見れば淫婦かも知れない。

スラボニアの女は歐洲でも稀有等な人間に思はれてゐるが、その肌の滑かさは北歐の女の如く、その口説のしめやかさは南歐の女の如く、身も心も投げ掛ける意氣は西洋的であるが、接吻丈は東洋的であると言はれてゐる。即ち僅かに微笑んで、首を傾け、夢見る如くに目をまどろまして、戀する男の腕の中に融け入らんとするさうである。

希臘の女の接吻は、まるで、、、で金齒でも引掛けやうとする調子だ、と惡口を言ふ人がある。その舌の先が、、、、、、、、、、、、といふ爲であらう。然し世界の接吻史の上から見ると、決して希臘はそんな輕視すべき國ではない筈である。

ホメエル

即ち古代希臘には、接吻といふものがすでに行はれてゐて、希臘から初めてローマに傳つたと稱せられてゐる。ホメエルを讀んでみると、ペネロオペが接吻を以て客に挨拶したとか、ウリセスがイタカ島に上陸した時に、その大地に接吻したとかアガメムノンが祖國に歸つた時にも、愛する故郷の土に接吻したとか、プリアムスがアキレスの手を接吻して、その息子ヘクトルの死骸を取戻す事を誓つた、とか書いてある。「イリアド」の中にも、ヘクトルの[illegible]愛する[illegible]静かにその腕にかき抱きてゆすぶれり」とある。「オヂツセイ」の中でも第十六歌と第十七歌に、ユウメウスがテレマアクを接吻する處や、乞食の風をしたオヂツイスがテレマアクに接吻するとか、テレマアクが父の宮殿へ歸つてくると、その母親のペノロオペと「百合の如き腕」の少女達に接吻されたといふ一節がある。古代希臘の接吻は恰も壺の柄を執るやうに、相手の耳を摑んで、その首を抱くといふ處から、接吻の事を「壺」(チトラ)とも言つたといふ事だ。いづれにしてもトロヤの戰爭は紀元前千百九十四年から千百八十四年であり、オヂツイスの十年の旅が紀元前千百七十四年前に終つたものでで、聖書に現れたアブラハム、イサク、ヤコブの時代とくると、紀元前正に二千年といふのであるから、世界の接吻史は實に紀元前二千年から初めなければならない筈である。

接吻は人間のする業ばかりではない。希臘の神話を讀んで見給へ。ユノが大神ジユピタアの嫉妬を接吻によつて治めたとか、不義者ヴヰヌスが人目忍んでマルスと接吻したので、ソルカンが立腹して網を冠せたといふ話がある。オリンピアの神々も、決して接吻といふ人間事がお嫌ひでなかつた證據は歴然とある譯である。

西洋の接吻（續き）

オリンピアの神々でさへ接吻が大お好きといふからには、現代の僕等がもつと研究しても差支へはあるまい。

芬蘭の女は男を戀する點に於て甚だ大膽であるが、その接吻は上乘でない。唇の上に心臟を置かざる世界唯一の女であると言はれてゐる。コペンハアゲンの女は國際的と言はれ、オスロオの女は固く短く接吻して、又さつさと仕事にかゝると味氣なく思はれ、瑞典の女は世界で最小さい口を持つと言はれてゐるが、好んで極めて上品な接吻をする。スカンヂナヰアの山岳森林地方の諾威ナイダの女は、接吻に際してそのブロンドの睫毛の間から、、、、、、、、、、、、、、、、、である。その接吻は重くして、朝の露に濡れた、、、、、、、、、、、、。

和蘭の女の接吻は、ごく無味乾燥と罵られ、英國の女は所謂お上品な奥さん風といはれて、接吻の間にも小遣帳の殘高と、次の週に招待をするお客の事を考へてゐるさうである。スコツトランドの女になると妙な風がある。愛する、、、、、、、、、、、、、、。つけるばかりではない。必ず、、、、、、、、、、、、、ゆくさうである。恐らく相手の目と目を合はさない爲かも知れないが、接吻として考へれば、中々に切なるものがあるさうである。

白耳義の女の接吻は、之を嘆賞する人が少くない。白耳義の女は男に向つて、、、、、、、、、、じつと微笑を浮べて眺め入つてゐながら、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、である。從つて本氣になつて女を愛してゐない男になると、心臟の鼓動でも止つて、死にはしないかとさへ思ふ位だといふ事である。

伊太利の女の接吻については、唯ミラノの女は接吻に甚だ選り好みをする、羅馬の女は、一粒選りの接吻をする。ナポリの女は一向お構ひなしの接吻をする、と言ふに止めておきたい。詩人ペトラルカはラウラを想ふの念に堪へずして、人に托して

かの君の白く美しい手と足に接吻し
かの君に傳へよかし
うち語らひに代るべき
接吻なりと。

と歌つてゐる。伊太利の接吻の心情を盡すものであらう。同じ南歐でもバルセロナからムルチアに至る南西班牙の女になると、接吻の前に先立つて、様々の技巧を弄すと言はれてゐる。、、、、、、、梨のやうに、、、。南西班牙の女は默

つてゐたから、男がどれ程接吻を求めたか、何度接吻されたか、と秘に勘定してゐるさうだから、恐るべきカルメンの誘惑である。その接吻の數によつて自分の價値を他と比較するのだといふ事だ。

エステルマツヅラの女は鳩の如くに接吻すると言はれてゐる。その接吻はエステルマツヅラの羊毛の如く軟かに、シトロン蝶の羽ばたきよりも輕く、けれども猛禽の爪の如くに、心臟に打ち込まれるさうである。

アンダルシアの女の接吻は、世既に定評がある。、、、、碎かれたる柘榴の如くに赤い。しかも固過ぎなく、軟か過ぎない、半ば熟したる梨のやうだ。アンダルシアでは接吻するといふ事は、愛すといふ事と同じである。愛すとなつたら、この土地の女は決して容赦をしない。又容赦されやうとも思つてゐない。アンダルシアの女は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。それから接吻に際して女は深く嘆息する。その嘆息は恰も女の魂がそこから飛び立つやうだと言はれてゐる。その嘆息する接吻から、男が再び氣を取り直した時は、既に冷い朝の風がミルテの花をそよがし、西班牙松の影の曉の光に、靜に月が消えてゆく頃になつてゐるさうである。

ポルトガルは歐羅巴で鰯の鑵詰の出來る國だ。道理である人

[illegible]接吻したか、[illegible]おしたといふ。巴里は[illegible]出來ない。

かういふ南歐から瑞西あたりへくると、女は冷靜になつて氣取つてくる。ゼネバの女の接吻などは、巴里のデパアトメントストアの賣子のやうな上品さを失はずに、且つマネキンのやうに模範的態度を以てする事に注意してゐるといふのであるから厄介だ。

ノルマンディの漁夫の娘にはかういふ氣取つた處は更にない。極めて無邪氣な詩的感覺を流露するといふ事である。その唇は力が籠つてゐて、しかもその皮は軟い。頬を頬にひしと寄せる。そして波に飛ぶ鷗のやうな早さを以て、、、、、、、、、、、、ながら、忽ち海豚のやうに不意に突進してくる。この唇を感じた人は、謝肉祭と昇天祭とが一日に來たやうな思ひがするさうである。

かういふ接吻に比べると、ルウマニアの女なぞは少々殺風景である。ブカレストの女は噛むと稱せられてゐる。

セヴンヌ地方の佛蘭西の女は、接吻の正統派であらう。この土地の女は先づ首を前に出して、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。その接吻は強烈な情熱を押し隱して、しかも極めて靜かに穏かである。サボヤアドの

女になると不思議な事をする。まづ唇を更の如くにそびやかして、鼻の孔の中へぷうと息を吹き込む、といふのであるから、これはどうも接吻の正統派ではあるまい。

ジプシイの女は接吻するか。僕等は小説でも舞台の上でも、ジプシイの女の戀を讀み飽き見飽きしてゐるが、實はジプシイの女は接吻なんぞしないのである。この點蒙古の女が接吻をしらないと同じである。

サモアの女が接吻するのは、歐羅巴人に習つたからである。その接吻は極めて軟く、全く我を忘れてゐながら、しかも日頃サモアの女が花を摘む樣子の優しさを失つてゐないといふから、立派なものである。

西班牙と黒人の血をひいた、シヤボテンの花咲くメキシコの國の女が、接吻に於てはアングルシヤの女に嬌嬈たるものがあるといふのは、僕等も想像に難くない處である。その意氣は火の如く嵐の如く、狂氣に近いと言はれるのも尤もである。

都會の女

都會の女は接吻に於て、田舎の女に優れてゐるかといふと、さうは一概に言へない。これも人の好きずきと言ふ外はあるまい。例へば巴里の女は接吻の時にほゝゑむ、伯林の女は目を細くする、といふ特徴もあるが、これなぞも男の好みによつて、何とでも考へられるであらう。巴里女の手練手管と一口に言へるかも知れないが、巴里の女にも、、、、、、、、、、なる接吻はある。伯林の女の接吻は、柔靱性に富むと言はれるが、少し劣等な肉慾的な處があつて、香氣と風韻に乏しい、と僕は思つてゐる。紐育の女の接吻も、表面はどうも禮儀に近いが、秘に接吻に對する非凡なる愛好力を示すさうで、紐育秘話として僕等は時々驚くべき報道に接する事がある。

けれども都會の女としての接吻は、維納の女に優るものはない、といふのが歐洲の定評である。維納の女の唇は、かの風に觸れて鳴る豎琴のやうだと言はれてゐる。維納の女は笑ひ、泣き、僞り、乞ひ、許し、與へ、誓ひ、しやべり、すねる。そして默つた時は即ち接吻である。維納の女は夫に不貞とならずに、愛する男を接吻する術を知つてゐる。夫と一緒にゐながらも、呼吸の如くにその友達の、、、、、事が出來る。その、、、、匂ひと、溫さと、しめやかさと、潤ひと、しなやかさと、、、、、、、、、、、とは、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、語る處である。

カウカサスの花

更にこの華奢の接吻にも劣らないとされるものに、カウカサスの女の接吻がある。小亞細亞カサスは、土地高燥、美しき花に富むところである。女は丈高く、髪金色にして豐に、眼潤ひあり、その頸の白きことカウカサス山脈の頂に降る初雪の如しと言はれてゐる。由來花多き土地であるから、女は革帶にしやくなげの花を挾み、僅かに胸を隠す胸衣の端には百合を飾り、優しく開き唇には、眞赤な石竹か龍膽の花を含み、髪には杏の花、櫻草、又は蘭の花を挿す。谷間の流れに秘に水を浴びる時でも、その口許には菫の花が匂つてゐる。

この女の戀人が例へば、たくましいコサック騎兵の一人だとする。女は何の躊躇もなくその男の前に立つて、半ば問ふ如く、半ばうなづくが如く、恐れながらも粗野に、男の眼をじつと見詰める。やがて徐ろに開かれたやうな歯の間に含んだ龍膽の花の莖を唇から噛み落して、暫くは左手の牧場をさり氣なく眺め、やがて突然に眞直に、、、、親つたかと思ふと、又暫くは右手の櫟の森の彼方に何氣なく眼をやり、思はず顔を地に向けたが、、、ると言はれるけ以てゐる。

接吻の年

これ程國と女とによつて異る接吻を、最上手にやりこなす女の年は、いつ頃かといふ問題も、中々小說的な問題ではあるが、同時に難解だ。例へば處女の接吻の如きは、情熱といふよりは、寧ろ期待と憧憬の接吻である。淡い不安の味も入つてゐる。こんなのは美しい接吻には入らない。そこで歐羅巴では北歐の女は三十と四十の間、南歐の女は二十と三十の間が、最美しい接吻をする年頃だとされてゐる。眞に心を籠めた接吻は、勿論後者の占める處であらう。

法律問題としての接吻

接吻の年頃といふ事は、小說的な問題であるとともに、頗る法律的な問題である。人生の多くの悲劇は、接吻に初まるやうである。まして北歐の女の三十、四十といふ年は、最危險なる年齡だとしなければならぬ。多くの歐羅巴の女の悲劇は、實はこの最美しい接吻をする年に起つてゐる。そこで接吻を法律問題として取扱ふ場合が、又甚だ多くなる譯である。

まづ昔よく問題にされた接吻に關する疑問に、次のやうな諸點がある。

1、婚約してゐない娘とか、或は婚約してゐる娘でも關はないが、それがある男から無理に接吻された場合、又は自由意思で接吻された場合に、それでも處女と言ひ得るか。

2、ある男が娘に向つて、僕を夫とする氣があるなら接吻してくれ給へ、と言つた場合に、女が一語も口には言はずに接吻したとする。これは固い結婚の約束と言へるか。

3、人の妻である女が拒む事なしに第三者の男と接吻した場合に、直ちに姦通の嫌疑をかけるべきものであらうか。

かういふ問題は第十七世紀頃の接吻學者の最好んで取扱つた問題で、今日から考へれば、甚だつまらない問題のやうに見えてゐながら、誰も之に直ちに明快な裁斷を與へる事は出來ない。かういふ接吻の機微は、エルンスト・ルウビッチの映畫にも縱横に描破されてゐるところで、今日に於てもなほ人生の喜劇悲劇の種となつてゐる譯である。

接吻が法律上最盛に研究されたのは、バロツタ時代で、獨逸羅馬法によれば、女は他人に接吻を許してもいいものか、或は誰に接吻させていいか、といふ命題が、議論の中心であつたらしい。千七百四十年迄はバジョンヌには「接吻法」といふ法律が存在してゐたものである。この法律によれば若い女が未婚の男に接吻をした事があるといふ證明さへ立てば、その男が死んだ場合には遺産を殘らず貰へたものである。その女が死んだ男と婚約をしてゐたかゐないか、そんな事は構はないとされてゐた。但しこの反對の場合には男の方で死んだ女の遺産が貰へるかといふと、それは貰へない。

この精神は實は遠く羅馬法から出て來てゐるもので、羅馬法の中で、女の接吻を大に擁護したのは、コンスタンチンである。例へばコンスタンチンの解釋によると、婚約をしてゐた男女が遂に結婚するに至らなかつた場合には、女が男から貰つた様々の贈物は、その半分丈を男に返してやれば好い、後の半分は女から貰つた接吻の受取證だといふのである。尤も羅馬に於ては、婚約者間丈にしか接吻を認めなかつたものである。但しこの場合にも婚約の女が一度も男を接吻した事がなかつたとすれば、その贈物は全部を返さなければならぬ。羅馬法に於ては、接吻は結婚の承諾として法律上認められた權威を持つてゐたものだ。けれどもこれは女に對して有利に出來て居るが、男の方には罰則などが設けられてあつて、羅馬法の精神はどこまでも婦人擁護である。コンスタンチンが羅馬の女に評判の好かつた譯はここにある。

法律問題としての接吻が、まづ女性にとつて不利な結果を與へてゐるのは、敢て羅馬法の時代ばかりではないやうだ。どうも多くの場合男の方から攻撃的に出る機會が多いせいか、接吻の訴訟といふと男が負けてゐる。千九百二十六年に維納で、ある男が女に舌を噛みつかれて、治療に十四日間を要したといふ訴訟があつた。調べてみると、男がおれはどんな女でも接吻してみせると威張つたので、女がそれをへこますと、男はその女を部屋の隅に連れていつて、無理やりに接吻を強ひたのださうである。そこで女は勇敢にも男の舌に噛みついて傷をつけて、男の腕を振り放した。男は意氣地なくもそれを傷害罪として訴へたのであるが、さすがに裁判官は、接吻とは愛着の證跡にして、兩者の自由意思の上にのみ、その道徳的根據を置くを得るものなり、と判決を下して、女は勿論無罪放免になつたものである。是は何と言つても男が意氣地が無さ過ぎる話だ。

かうなると法律は接吻を何と解釋してゐるか、といふ根本問題になるやうである。僕は千九百十四年に獨逸大審院の下した接吻の定義を次のやうに讀んでゐる。

「接吻とは相手方の身體に加ふる一の作用にして、常に被接吻者の承諾を要するものなり。もしその承諾なき時には、相手方が暗默に承諾すべき事情なる場合に於てのみ、接吻し得べきものとす。例へば[illegible]、愛人間に於けるもしくは[illegible]相手方の意外によりて[illegible]たる場合に於ける接吻は、不法なる人格の侵害及び身體傷害を含むべきものとす。もしこの状態に於て相手方に接吻を強行したるものは、行爲による侮辱の罪を免れざるものとす。」

してみるとかの維納の女が舌に噛みついたのは、立派な正當防衛である。日本の判例に接吻に關するものがあるかどうか、僕は調べてみなかつたが、昭和三年十一月某日の新聞記事によると、東京郊外で往來で知らぬ女に接吻をしやうとして舌を噛み切られた職人がゐる。女は自首してゐるが、無罪に違ひあるまい。

手の接吻

男の接吻にもう一つある。これは男に限つたもので、女の手に接吻するやり方である。これは接吻として甚懇切なものであると共に、女に對する尊敬の表示としては極めて平凡なものになつてゐるが、然し大の男が恭々しく頭を下げて、その唇を手の甲に當てるのであるから、女の虚榮心は十分滿足させられる。この場合に女はどうするべきかといふ事は、未だ曾て本に書かれた事もない。唯女はその小な拳を少しばかり上に向け

て、胸を反らしてゐれば好いのである。この接吻は米國人に少くて、佛蘭西人露西亞人獨墺人に多い。アニタ・ルウス女史の西洋お妾日記「殿方は金髪がお好き」の中の主人公も、「佛蘭西人が手にキスしてくれるんだつて悪かないけれど、ダイヤモンドとサフアイアの腕輪のはうが、やつぱり永もちするわ」と言つてゐる。ダイヤモンドと手の接吻を比較するのも、いかにも米國の玄人女らしい。

けれども忘れてならないのは、手の接吻は昔の衣裳の裾に接吻した風習から發達したもので、どこまでも婦人に對する尊敬を意味するものである。更に好色的な意味はない。けれどもこれが女の上膊にうつり、或は手の甲でなくして掌になつてくると、尊敬禮儀の意味は無くなつてくる。掌は手の甲に比べて、外部に對して保護され隠されてゐる體の部分と考へなければならぬ。

舌の接吻

接吻は唇以外に手にされる。然し手にばかりに限つた事はあるまい、接吻として、、、、、、、、、、、、接吻である。どうするか。これは一寸申上兼ねる。

獨逸の詩人グリルパルツエルの詩にかういふのがある。

手に接吻するは敬意
額に友情
頰に喜悦
口にこそは樂しき戀なれ。
閉じたる目に憧憬
掌に熱望
腕と頸に情欲
その他にこそは狂氣なれ。

鼻の接吻

ところが詩人グリルパルツエルは一つ忘れてゐる。それは鼻の接吻だ或はこれは「その他」のうちに入るのかも知れない。鼻は性慾器管と深い關係がある事は明であるが、「鼻の挨拶」といふ言葉もある通り、鼻の接吻は相當重要なものだ。これは支那の嗅ぎ合ふ接吻とは違ふ。どうするのか。そんな事は御承知になるに及ばぬ。戀愛の詩人グリルパルツエルでさへ忘れてゐる位であるから。

その他

その他の接吻としては、もし夫なる者が愛する妻から何かの

三強で花を買つたら、お[illegible]て妻[illegible]に[illegible]すで[illegible]る。頬の接吻は與へる者が丁寧に、受ける者が女らしい上品さを持つてゐたら、最高雅なる接吻となるのである。頬の接吻は夫たる者心から、、、、與へなければならぬ。妻が欲しがつてゐた物を思ひもかけず夫が買つて來てくれた時、妻の許すべからざる不注意を夫が咎め立てしなかつた時、いづれも、、、、心からの接吻をしなければならぬ。夫婦喧嘩の後の仲直りには、夫は妻の頬に柔く、妻は、、、、、、、接吻を與へて貰ひたい。永い旅から歸つて來た夫を迎へた妻が、嬉しい餘りに言葉も出なかつたら、默つて、、、、、、、、、、、、。然し夫の側から見て、もし妻の悦びが本當であつたら、接吻なぞは忘れて夫の胸に頭を埋める筈である。

髭と接吻

髭と接吻とは一寸關係がある。それは接吻の名人アドロフ・マンヂウの映畫をよく注意して御覽になれば自づと分る。髭は一種の麻痺劑である。

昔の接吻

僕は餘りに現代の接吻に深入りしたやうである。けれども接[illegible]の起[illegible]といふあつ[illegible]したも[illegible]によれば、[illegible]には母の乳房を吸ふ子供の動作から起つたものといひ、歴史的の理由には羅馬時代に妻が葡萄酒を隱れて飲んだかどうかを試みる手段であつたともいひ、甚だこの説の攻撃は面倒である。從つて戀愛以外のものにも「契約の接吻」「婚約の接吻」「平和の接吻」「上帝の接吻」「王の接吻」「拜天祭の接吻」「クリスマスの接吻」等種々の儀式と風習の接吻がある。英吉利の習慣として、クリスマスの晩に天井に吊した寄生木の枝の下で、人の妻でも娘でも、勝手に接吻してよい習ひがあつた事は有名である。中世紀では賓客に對する禮として、接吻は極めて重大事だ。「ニイベルンゲン」の歌の中にも、女がお客一同に歡迎の接吻をする處がある。佛蘭西なぞでも貴婦人に仕へる小姓は、主從の固めの接吻を貴婦人と取り交はす風習が騎士時代にあつた。十六世紀には英國で、女が自分と一緒に踊つてくれた男に、踊りがすむとお禮の代りに男に接吻する習慣があつた。こんな風が今でも殘つてゐたら、、、、、、、、、、、。その代りには教會で結婚をすると、坊さんがまづ花嫁さんに接吻してやる風も長く殘つてゐたから、それで[illegible]引かれるかも知れない。

接吻の遊戯

接吻の效力は敢て儀式や戀愛にばかりあるのではない。遊戯にさへ用ひられる。接吻の遊戯は今日では殆どすたれてしまつたが、今から四五十年前までは盛に流行したものである。今日からういふ遊戯がはやるには、餘りに時代が危險となり、且若い人達はなにも遊戯にまで接吻する必要がなくなつたからである。名前丈擧げておかう。どういふ風にするか。これも申上げ兼ねる。

一、接吻の賭
二、ザビイネの女の掠奪
三、格子越しの接吻
四、アリストテレスの馬
五、悲しき姿の騎士
六、キユウピツドの橋
七、縛られた森の神
八、哀れな悲める男
九、間違つた接吻
十、ベエコン切り
十一、自分の影の接吻
十二、相手を知らぬ接吻
等、等、等。

接吻反對論

ところがこれ程美しく尊ぶべき接吻にも、難癖をつけて反對する人が、この世の中にあるといふ事を記憶しておきたいのである。

歐羅巴で接吻に反對するのは、これが非衛生だといふ極めて平凡な理由からで、しかもこれを主張し初めたのは、外でもない露西亞である。千九百二十四年にソギエトの國民衛生委員會は、全國に命じて一般的接吻禁止の命令を發してゐる。尤もこの命令は決して男女相愛の接吻を禁ずる野暮なものでなくして、露西亞の百姓が挨拶の代りに逢ひさへすれば歡迎の意味で接吻する、昔からの習慣を禁じたまでである。ところがその同じ年に西班牙マドリツドに、不健全なる「接吻の苦み」に反對する同盟の設立された事を新聞は報じた。秋波を送つてさへ罰金だといふ新しい法律が出來たと、同じく新聞には書いてあつたのを見ると、このドン・ホアンの國は不思議な所に違ひない。千九百二十六年には倫敦に「婦人接吻反對同盟」といふのが出來た。これも男女の接吻に反對するといふのではなく、仲

の好い女の友達同志が會合のやうな場合に逢へば、必ず接吻をする風習をやめやうといふ運動である。これと同じ仕方で巴里にも續いて出來てゐる。米國では千九百二十六年にニュウ・ジャアシイ州の衛生局が、接吻制限の訓示を出してゐるが、これは傳染病媒介を誡めたものである。

唇の接吻又は手の接吻に反對する説は、決して今日事新しく唱へられたものではない。千七百九十年にすでに獨逸の醫者のスチッレといふ人が「友愛の接吻並に抱擁の濫用に就て」といふ接吻反對の演説をやつてゐる。今日主として唱へられる接吻反對の理論は、これによつて黴毒が傳染するといふ説が主である。しかしこれは互に今迄相知らぬ男女又は他人同志の間の場合が多いから、相愛する人の接吻は大丈夫と見て好からう。

接吻とは

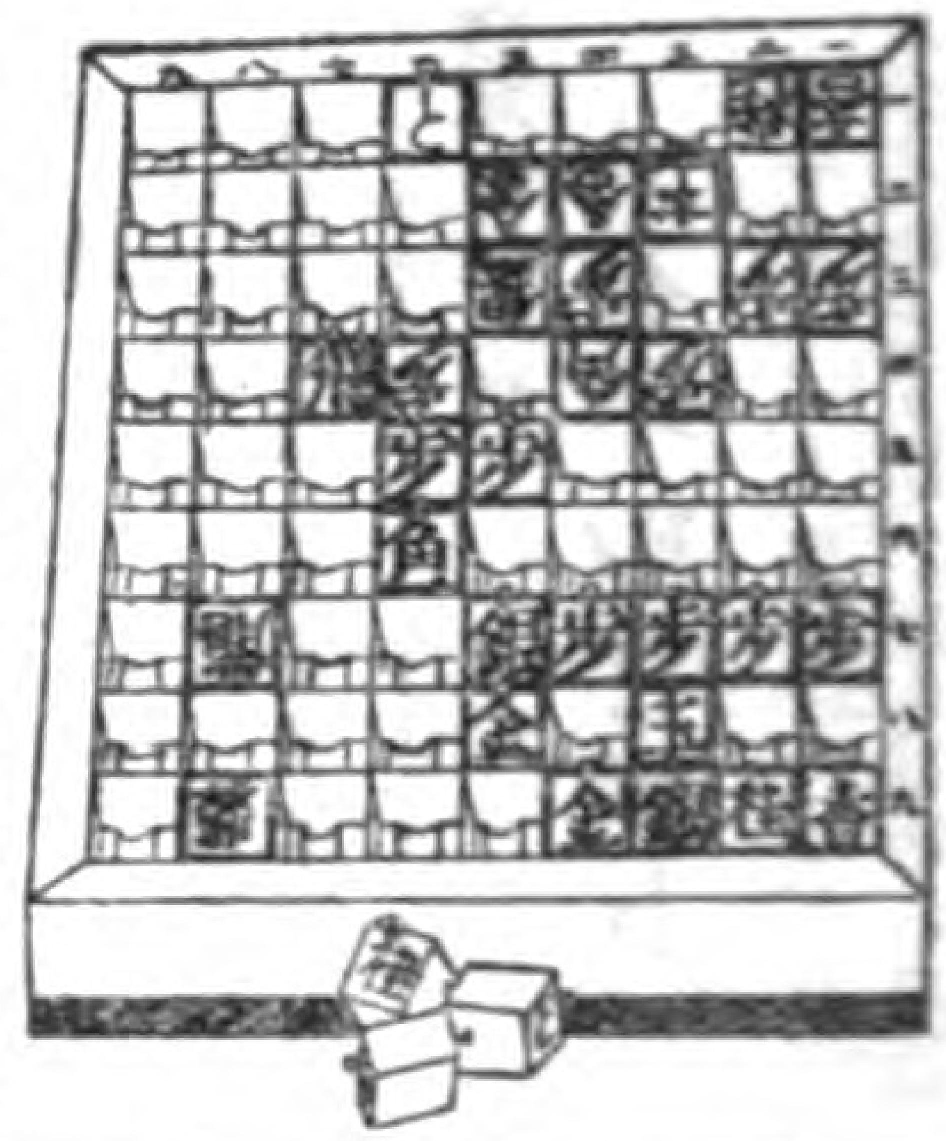
そこで最後の問題は、接吻とは何か、といふ事だが、これは昔からの喧しい問題ではあるが、今更そんな研究をなす興味は僕にはない。唯今日の接吻の三つの要素としては、觸覺と嗅覺と味覺と、この三柏子揃はなければ、完全なる接吻と言へない事は確である。それから接吻の道德的意義に就ても、今日の人は餘りによく知つてゐる筈である。然し接吻は童貞を破つたものださうな。これは一寸想像も出來ないものと思はれるが、いろいろの意味が含まれてゐる。殊に伊太利には「接吻された女は、汚された女」といふ諺があり、更に「接吻された女は、半ば身を許したもの」といふ言葉もあるといふに止めて、若い人達の參考にしておかう。

ゾラは五十の誕辰を祝はれた時に、巴里の新聞に發表した感想の中で、一切の才能も、一切の榮譽も、我が過去にあり我が未來にあるすべてのものも、十六の少女の口から與へられる新鮮なる接吻の前には、わたしは捨てて顧みないであらう、と述べてゐる。若き女の接吻は、それ程美しく尊ぶべきものであらう。

「少女の唇の上には、父と母の接吻が靜かに安んじてゐる。その接吻こそ花の如き我が子に、尊い封印として贈し與へられたものだ。若き人よ、心して濫りにその封を破るなかれ」

これはフリイドリヒ・ヘッベルの溫情家の如き言葉である。接吻を性交の前提と見た學者は甚だ多い。かういふ今迄の接吻哲理を今日いかに解釋すべきか。若き人々には自ら新たな接吻哲學が生れてこなければなるまい。（昭和三年十一月）

閑を得て、又は忙しい旅の車中に或ひは湯上りの腹ばひのまゝで、



或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る好棊家にとつてこれ程便利なものはありません。

定價（駒全部附）**金壹圓八拾錢**
送料東京市內十二錢　內地十八錢　領土四十五錢

高桒式

野球競技盤

約二平方尺の盤上で野球の實戰と同じ興味と緊張味を味へる樣に工夫されたのがこの高桒式野球競技盤です

盤面は飛行機から見た野球場そのまゝで、投手は直球・曲球・軟球剛球自由自在に、打手も亦恰度選手がボックスに立つた時の緊張した氣分で、バツトの振り方一つに美事本壘打を飛す事も出來れば、油斷をすれば投手に計られて三振「アウト」にされて了ひます。



實戰に臨む人も之によつて自らの技量を試し、又高尙な新しい家庭遊戲として一般の御家庭におすすめ致します。

小型（長一尺四分 巾七寸五分）**金壹圓參拾錢**
送料內地二十七錢領土五十五錢

中型（長一尺六寸 巾一尺二寸）**金參圓八拾錢**
送料內地三十六錢領土六十五錢

高級で低廉な

アテナ萬年筆

使ふに從つて忽ち執筆者の手と書風になじみ、使へば使ふ程愈書きよくなるといふ定評を得てゐます。低廉にして、シカモ舶來品にも遜色なき高級品であります。（郵參二錢封入請求者に型錄進呈）

定價　參圓五拾錢　四圓五拾錢

回轉式自働吸入型

定　價　參圓五拾錢

送料市內十二錢　地方十八錢　領土四十五錢

インターナショナル式

新聞綴器

近來の新聞はみな欄外が狹くなつたゝめに、普通の新聞綴器では折目に近い部分は讀む事が出來ず一々取はづすのは余りに煩瑣極ると云ふ缺點を、完全に一掃した新工夫の新聞綴器です。

本器は、新聞を挾んだまゝ欄外その他の部分も完全に讀む事が出來、廻轉裝置で任意の一枚でも容易に取はづせる點に最も工夫をこらした、凡そ新聞を讀む御家庭には是非備へ度い品です。

定價金壹圓貳拾錢
送料內地二十七錢領土五十五錢

最も安全で低廉な

電氣湯たんぽ

電氣アンカや電氣フトンのやうに、發火する恐れは絕對に無く、普通の湯たんぽのやうに數時間毎に湯を取換へる手數も要らず、熱湯を用ふる危險もなく常に攝氏七十度內外の快い溫度を保つ。絕對安全、使用法簡便、堅牢、養老に保育に、ぜひ家庭に備へねばならぬ品です。



定價（二燈用ソケツト及びカバー一つ附）**四圓五拾錢**
送料　市內十二錢　內地四十五錢　領土七十五錢

防濕防蟲毛織物入

昭和文庫

厚い鐵板張り、タテ二尺七寸、幅一尺二寸、高サ八寸五分の堅牢な箱形の容器で、中にナフタリン樟腦の入れものがついてをり、絕對に外氣の侵入を防ぐやうに出來てゐますから、毛織物その他の大切なものをしまつておくのに必須な品です。簞笥や支那鞄より遙に便利です。

トランク代用特製（深形）七圓
上製（鐵板製タテ二尺四寸）四圓五拾錢
並製（トタン板製タテ二尺四寸）三圓三拾錢
市内送料　二十錢　地方運賃とも四十マイルまで九十錢

舶來・自働研式
バレイ安全剃刀

安全剃刀には多種多樣ありますが、バレイほど完全かつ簡便な優秀品はありません。巧妙な機械装置によつて、いかなる素人にも立派に砥げます。從つて毎日使用しても一枚の刄が半年以上はもちます。その切れ味に就ては廣光の古銘刀のそれに匹敵することが既に證明されてゐます。

C型（砥石、替刄三枚つき）　一圓八十錢
同　同　二圓
B型（砥石、替刄一打つき ニツケル箱入）十三圓五十錢
送料市内十二錢　内地十八錢　鮮上四十五錢

理想的美髪料
スタイルセット

油やアルコールを絶對に含まぬしかもあまりばさばさしない理想的の新美髪料で、フケトリとポマードとを兼ねた合理的新製品であります。使用法はまづ髪を少量の水で濡らしておき、掌に少量のスタイルセットを滴らして、毛髪全體にゆきわたるやうに塗りつけるのです。

定價　六拾錢
送料　内地十八錢　鮮上四十五錢

輕便容器入
ユトマ・ポマード

毛髪の營養を兼ねた純良なポマードを棒狀輕便な容器につめたものです。使用法は蓋をとつて容器から直接に毛髪に塗りつける丈で、少しも手に脂がつかず、使はれた丈の脂は常に表面の網を潜つて出て來る裝置の、一抹の無駄もない、至極重寶な、特に外出前や旅行先での使用には一層便利を感じます。
後は何回でもつめ替へがきく單に容器としても價値のあるものです。

定價　金六拾錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢　鮮上四十五錢

佛蘭西化粧界の驚異
除毛劑タキー

顔はもとより手足その他の部分の毛を剃刀を用ひないで、容易にしかも綺麗に除る藥がロージエ化學研究所で發明されました。
これはチユーブ入のクリームで、これを手でも足でも腋の下でも、任意のところに塗つて五分か十分おき、水で洗ふと剃刀で剃つたよりも綺麗にすつかり毛がとれてしまひます。これを五六度繰返して使つてゐるうちに次第に毛が薄色の弱いものとなり、遂に全く發生しなくなつてしまふのが「タキー」の特色であります。「タキー」は赤液臭を除く效果があります。

定價　二圓二十錢　マス・クリーム附
送料内地十八錢　鮮上四十五錢

強精劑ルンブリン

一時性の昂奮劑でなく、其の吸收性は極めて敏活で、血肉細胞の新陳代謝を旺んにし、全身神經を强壯にして、特に神經衰弱に偉效を奏する最新强壯劑であります。
類白色の錠子に造られた本劑は極めて佳快な獨自の芳香を放ち、本劑の服用を懐忌する婦人であつても喜んで用ゆる事が出來ます。

定價（一箇月分）　金參圓五拾錢
送料市内十二錢　内地十八錢　鮮上四十五錢

紋染紙製
洋服カバー

防水防濕防蟲の效用を具備し、シカモ布よりも丈夫で洗濯が出來るといふ重寶な品です。この紋紙製品は婦人公論代理部で好評を博してゐますので、本誌でも特に格安にお取次いたします。

定價（大）一圓廿錢　（小）八十錢
送料市内十二錢　内地十八錢　鮮上四十五錢

古書案内・取次

最近地方在住の讀者諸君の切望を容れ「古書案内部」を特設いたします。當分の間、讀者諸君の紹介註文にのみ應じます。但し左の條項厳守のこと。
A、紹介は往復葉書又は返信料添付のこと。
B、註文は成可く振替を利用せられたし但し送本は前金後一週間以内の事。
C、宛名は中央公論社古書案内係。振替東京七八四七五番。

新支那訪問記

村松梢風

南京

蘇州から南京へ

蘇州(そしゆう)の停車場(ステーシヨン)の特別待合室には五六組の客が上海(シヤンハイ)から到着する筈の南京行の普通急行列車を待ち合せてゐる。其の待合室は食堂及び賣店を兼ねてゐる。天井まで屆く大きな戸棚の中に酒類や名産菓果の罐なぞがギツシリ詰められてゐるかと思ふと、片側の棚には骨董品が陳列してある。なま〳〵しい梅の古木をかいた大きな花瓶、ケバ〳〵しい五彩の南京皿、鑄物の佛像、紫檀、翡翠、玉(ぎよく)、硯、――いろ〳〵な色彩がにせ物らしいうす笑ひを浮べて棚の上で光つてゐる。

お客達はそれ〴〵の相手と喋りながら時々思ひ出したやうに蓋(ふた)つきの茶碗に口をあてゝ茶を啜つてゐる。ひとりの商人風の男はライスカレーを註文して大急ぎで食ひ始めた。黒い中折帽を冠つて巨きな體にセルの服を着た地方の政治家とでも云ひさうな五十恰好の紳士は悠揚とした態度で煙草をふかしてゐる。私達の直ぐ前の卓には三人づれの客がゐた。其の二人は若い婦人でどちらも毛皮付きの羅紗の外套を着て洋袴をはいてゐる。そして斷髮の上に紅色の西洋帽を冠つてゐるが、同行の若い男は繻子の服に馬褂(マコ)を着て近頃の若い人が餘り好まない帽子(モツ)を正しく冠つてゐる。男は色の白い綺麗な顔だが、薄茶色の素通しの眼鏡を肉のうすい鼻柱で支へてゐる容子が殘念なことに厭味に見える。

窓の外の廣場には黄包車(ワンポツァ)が群れてゐる、幌なしの馬車が五六台ゐる。驛の建物の軒下に饅頭賣りだの梨賣りが一尺四方位の小さな店を出してゐる。廣場の向ふのはずれには葉の黄ばんだ

楊が並んでゐる。其處から一段地形が低くなつて、城外の人家が黒い屋屋と白い壁を擴げてゐる。其の向うに煤びたやうな色をした城壁がうねうねと横に長く續いてゐる。

空は十一月十日の冷たい色をして澄んでゐる。

二時五十分發とある急行列車は三時を過ぎても姿を見せなかつた。

「此の急行列車は餘り當てになりません。特別急行列車だと時間が正確ですが、支那の汽車は大概道草を食つて來ますから」

同行の歐陽予倩君は五度の近眼鏡の奥から優しい眼をにこにこさせながら私に云つた。

「前の人達は蘇州人でせうか、それとも上海人でせうか」

「蘇州人ですとも。此の女達は上海へ行つてこんな風俗を覺えて來たのですよ」

「女はハイカラだが男は莫迦に舊式ですね」

「えゝ、蘇州の男は是れ位のものですよ」

私達はそんな話をした。側には歐陽さんの門人で脚本なども書いて蘇州の芝居の會計係に勤めてゐるといふ龔さんといふ人が私達を送つて來てゐた。私達は昨日上海から此の土地へ來て、龔さんの案内で方々見物したのだつた。

前の女連れの男は卓に凭れて締り無く居睡りをはじめた。

卅分位遅れて改札が始まつた。改札口の前は一杯の人で押し合ひへし合ひしてゐる。私達は其處で龔さんと別れの言葉を交してプラツトホームへ出た。

私達が乘つた二等車も可成り混んでゐたが漸う一番隅の處に座席を見出して並んで腰を掛けた。支那の汽車は座が向き合ひになつてゐて其の間に幅の狹い卓が造り付けになつてゐる。乘ると直ぐ茶房が茶を持つて來る。

汽車は蘇州城外の人家の屋根の間を走つた。人家の中を運河が流れてゐる。白壁や黒い屋根が水に映つて、其の中を民船が通つてゐる。彎曲した石橋が架つてゐる。ところどころに楊が水邊の風情を見せて立つてゐる。

遠く右手の方にきのう見に行つた虎邱の塔が地上の秋の色の中から赭ちやけた姿を寂しく聳立してゐる。

予倩君は殆んど完全に近い日本語を使つて盛んに談話をする。きめの細かい色白のまる顏で漆黑の頭髮を長くのばしてうしろへ掻き上げてゐる。ひどい近眼だけれども其の眼は常に莞爾々々笑つてゐて愛嬌がある。音聲に美しい響をもつてゐる。私は予倩君が大きな聲をだして呶鳴るところを未だ嘗て見たことがない。しかし、同君の容貌や風采は有名な青衣の俳優であるといふよりも寧ろ學者らしい上品さの方を多く有つてゐる。

歐陽予倩君は湖南省の人で、日本へ留學して早稻田大學を卒業した。支那の劇壇第一の學者で且つ新人である。予倩君が新劇運動を起したのは恩師島村抱月の影響をうけたからだつた。そして、日本の新劇運動がさうであつたやうに彼の新劇運動も結局は失敗に了つたけれども、抱月氏と異つて自身で舞台に立つて働いた予倩君は何時の間にか一流の女形俳優としての地位を舊劇壇で占めてゐた。しかしそれはどこ迄も彼の滿足することではない。彼はもう二年程前から殆んど舞台を退いてゐる。

予倩君は演劇改良について熱烈な理想を抱いてゐる。

「私達が以前考へたやうな西洋の芝居を直譯的に輸入することは無理な話でした。支那には支那の好い芝居があるのです。私は在來の舊劇に新しい生命を吹き込んで見たい」



歐陽予倩の「潘金蓮」

さういふことを彼は人にも話してゐた。彼の其の新しい試みの一つを私は三日前に上海の蟾山舞臺で見ることが出來た。それは彼の自作の『潘金蓮』を上演したのだつた。潘金蓮を予倩がやり、武松を麒麟童、西門慶を高百歳がやつた。水滸傳や金瓶梅で極端な淫婦とされてゐる潘金蓮といふ女の心理に新しい解釋を加へたものだつた。めつたに舞台に出ない歐陽予倩を看るために其の日の蟾山舞台は立錐の餘地もない大入りだつた。脚本にも演出にも從來の型を破つた新しい表現が澤山あつたが看客は不思議なくらい感動して予倩が獨特の名科白を發するごとに割れるやうに拍手を送つた。芝居がはねて卅分も經つてから予倩が樂屋口の階段を降りて來る時まで往來に黒山のやうに人が立つて彼を迎へてゐた。

予倩君も南京に或用事が出來たので私と同行することになつたのだつた。

行けども行けども果してない平野を汽車は走つてゐる。桑畑、農家、黄いろい落葉樹、楊、鷄、家鴨、豚。水牛が田を耕してゐる。蘆の原が二里も三里も續いて、其の中を水路が縱橫に通つてゐる。蘆を刈る舟や、小さな民船が動いてゐる。

無錫へ來るとはじめて山があつて、山脈の突端に素晴らしい古塔が立つてゐた。

車掌が乘車劵を調べに來ると其の後へ鐵砲を持つた憲兵が五六人くつ附いて來る。車掌の態度も橫柄だが憲兵が客車内をドカ〳〵押し歩くので不快な印象を與へる。しかし現在の支那ではかういふことも止むを得ないかもしれない。

私達の前の二人づれの客はどちらも黒羅紗の馬褂を着た地方人らしい人達で、四十恰好の年長者の方は肥滿つた巨きな體で、薄いだらりとした口髭をはやしてゐる。二人ともごく無口で、尤も大概居睡りをしてゐたが、眼をあいてゐる時でもめつたに口をきかない。

「此の人達は何でせうね」

「地方の役人かそれとも軍人でせう。この髭を生やした人は軍人らしいところがあります」

と先刻予倩君は私に云つた。乘車劵調べが始まつた時此の人は一枚の大きな紙に書いた無賃乘車免狀のやうなものを車掌に出して見せた。それによると此の人達は何處か田舍の災賑會の代表者であることが判つた。處が、其の乘車免狀には一人の姓名しか書いてないのに二人乘つて來たのは違法であるから一人分の賃金を拂ひなさいと車掌が云つたゝめに大爭論が持ち上つた。すると年の若い方の男が今までの無口とは似ても似つかぬ態度で手を振り體を動かし乍ら、災賑會の代表者は一名と限らない、且つこれ迄他の鐵道は我れ〳〵二名何の苦情もなく乘車して來てゐるのに此の鐵路に限つて許されぬといふ法はないといふことを非常な能辯で論じた。車掌は自分の立場を固持して飽く迄も讓らない。憲兵が物々しく詰め寄つてゐる。

私は、支那の人が自己の利害關係に臨んだ場合に訥辯であつた例を見たことがない。

車掌と乘客の議論は各々自己の主張を言ひ張るだけで何處まで行つても盡きなかつた。もう一人の髭を生した人は自分に關する問題を隨行者らしい若者に委せて置いて、時々眼を細めて車掌の顏を見るだけで一言も挾まなかつたが一番最後に「そんなことは今爭はなくても好いだらう、南京へ着いてから解決したらよい」とまるで仲裁者のやうな態度で云つた。すると車掌

もそれで[illegible]同伴して憲兵[illegible]と一緒に大きな[illegible]た。

私は汽車へ乘る度びに此の無賃乘車免狀を持つてゐる人を見た。現に此の二等室だけにも他に二人も居た。此の免狀は鐵道局から出した物ではなく地方の省政府や軍隊が勝手に發行したものばかりだ。中央政府の交通部がそれを禁じる法令を發したにも係はらず少しも勵行されてゐない。軍隊の古手の師長などと來ると交通部長などは小僧のやうに思つてゐてちつとも云ふことをきかないのださうだ。それでも非常に好くなつたと誰でも云ふ。戰時中や戰爭直後の頃は兵隊は勝手に汽車に乘ることが出來た。賃銀を拂つて乘る客は兵隊が占領した餘りの座席しか買へなかつた。軍人の無賃乘車を嚴禁した當時のこと、從來の習慣で無理に乘る者がある。さういふ時車掌が降車を命じても承かない者は憲兵が引きずり卸して銃殺の刑に行つた。二三人銃殺して見せると忽ち無賃乘車をする者が無くなつたさうだ。

九時に南京車站へ着いた。手荷物運搬人がドカ／＼車内へ入つて來る。

「此處の人間は惡いです、荷物は自分で持つ方がいゝです」と予倩君は云つて鞄を棚から卸ろして自分で持つた。見ると[illegible]の下關といふ土地は揚子江を控へて漢口と相對してゐて[illegible]に近い要路になつてゐるだけに此處の下級勞働者は他の土地に比べると非常に性質が惡いのださうだ。私も重たい鞄や蘇州の柿を買つた柿果の籠などを兩手に提げて予倩君のあとについて車外へ出た。プラツトホームは殆んど眞つ暗だ。建物の中も電燈が暗くて改札所の邊りはまるでランプの光線位の覺束ない光が漂ふてゐる。その眞つ暗い中で群衆がガヤ／＼騷いで押し合つてゐる。私達は漸う人混みを押し分けて廣場へ出ると黄包車や馬車や自動車をうるさく勸める。私達は城内の東方飯店といふ支那旅館へ行くことになつてゐた。

「馬車でもいゝでせう、少し時間は掛るけれども安い」と予倩君は云つて馭者と値段をきめて馬車を傭つた。賃銀は一圓八十錢といふのを一圓四十錢に値切つて乘つた。

舊式な箱馬車である。一本の蠟燭の灯が微かに馬車の中を照してゐる。道路にまる石が敷いてあるので車がガタ／＼揺れて乘り心地が惡い。其の上馬が疲れてゐるのだらう、車は遲々として進まない。馭者は無闇に鞭を振つた。街は車馬が激しく往來してゐる。馬は時々歩みを留めた。

「此の馬は行き度くないのです」と予倩君は云つた。

「支那の傳説では、かういふ時は前途によくないことが待つてゐると云ひます。馬がよくそれを知つてゐる」

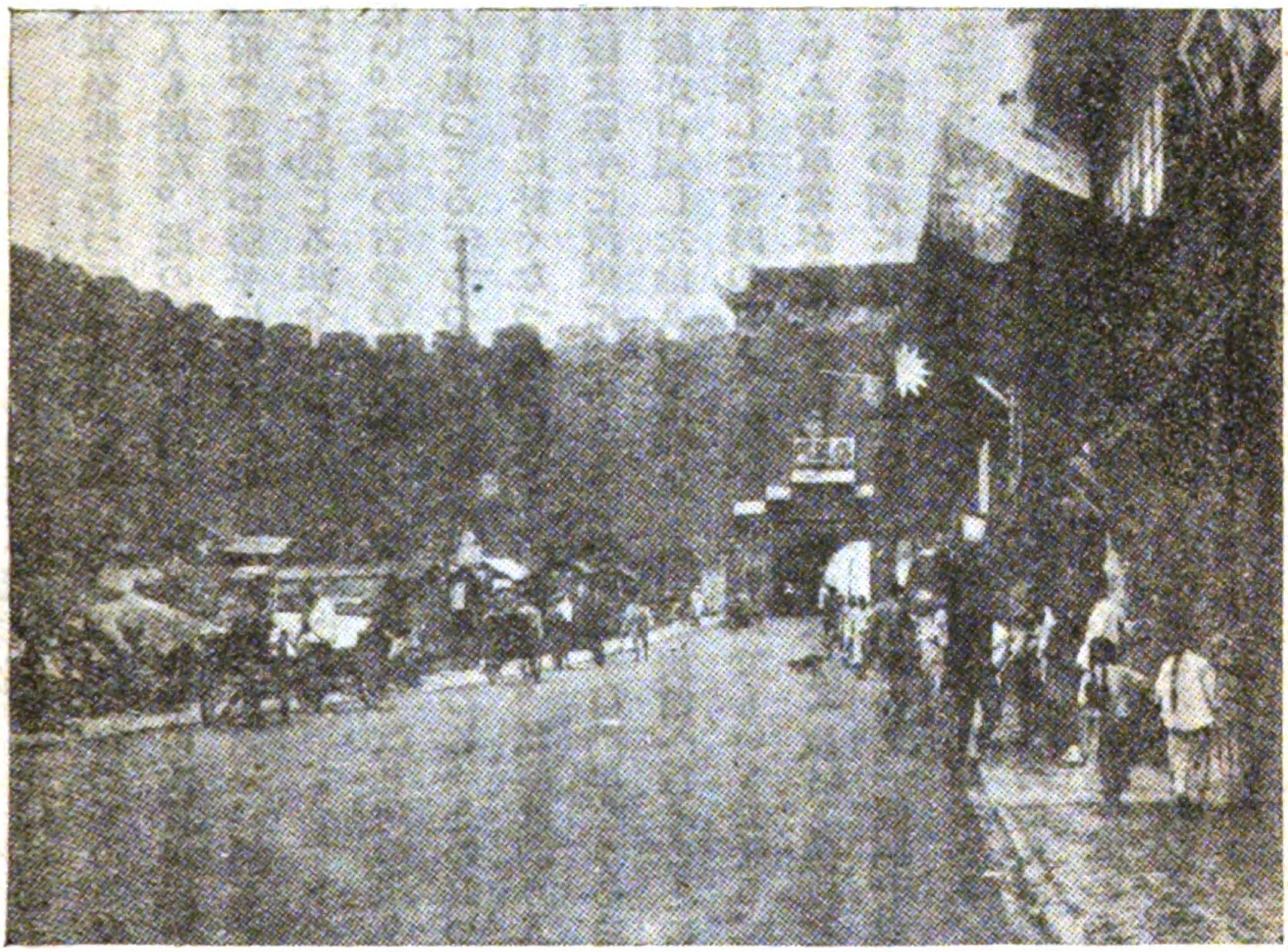
「それは日本でも云ひますよ」

又少し行くと馬は立ち留つてしまつた。馭者は台から降りて馬の口を取つて曳つぱつた。

「どうも此の馬は行き度くない」と予倩君は或る不安に脅やかされてゐるやうな暗い表情をして云つた。

城外の街を通り抜けると城門の前へ出た。儀鳳門といふのだが夜のことで何も見えない。すると突然此處で馬車が留められた。城門の前に劍付き鐵砲を持つた憲兵が立つてゐて通行人の身柄や荷物を一々調べるのであつた。

「片子（ペンツ）を持つてゐるか」と馭者は台を降りて來て云つた。



（儀鳳門）

予倩君が名刺を出して渡した。憲兵は其の名刺を受け取つてから車の中を一寸覗いたゞけで「よし」と云つた。

それで難なく通行出來ると思つてゐると、突然闇の中から二人の男が現はれて馬の口へ手を掛けながら馭者に向つて頻りに何か云つてゐる。すると予倩君は馬車の扉をあけて外の男に向つてすさまじい劍幕で何か云ひ出した。私は彼がこんな荒い言葉を吐くことを今迄見たことがなかつた。それで外の男も漸く馬を離したので馭者は鞭をくれて眞暗な城門の中へ乗り入れた。

「いまの人間は一體何んですか」

城門を通り抜けて見窶らしい家並みの間を走つてゐる時私は予倩君に尋ねてみた。

「あなたはその次の馬車へ乗せて呉れといふのですね」

「只乗りですか」

「いゝえ、幾らか錢を出すから馭者台へ乗せて行けといつて談判してゐたんです」

「他人の備つた馬車を捉まへてそんなことをいふとは變ですね。多分田舍の人か、或ひは悪い人間だつたのでせうね。淋しい處でピストルでも突き付けやうといふ手合ひなんでせうか」

「いや、今の人は悪い人間ではないんです、あれは普通の人です。支那にはよくかういふ事はあるんです。支那に占便宜（チャンペンイー）といふ言葉があります。それは詰まり、他人を利用して利益を占めるといふ意味で、今の人も一台の馬車を備ふ氣はないが、私達の馬車へ十錢か十五錢出して乗せて貰はふといふ意味なんです。さういふことを占便宜（チャンペンイー）といふので、一寸した知り合ひの他人の名前を利用するとか、或は他人に散財させて自分の義理を果すとか、すべてそれに類似した行爲を指して云ふのですが、支那人の性質の中に大變これが多いのです。日本ではさういふことを何と云ひますかね」

城内は何處迄行つても眞つ暗い。處々に日寒らしい店があるかと思ふとそれも直ぐに絶えてしまふ。小さい食ひ店などでは電燈の代りにカンテラを入れた角燈を吊してある。處々に巡査中途に立つてゐる。田畑が続いてゐるかと思ふと広々とした野原がある。遙か遠方に燈火が二つ三つチラ〳〵と光つてゐる。

「どうしてかう暗いんでせう」

「南京は電力不足です。人口が急に殖えたが電力に限度があるので街中暗いのです」

汽車を降りてから南京の第一印象は只「暗い」といふことだつた。

一時間以上掛つて馬車は東方飯店に着いた。

雨花臺見物

ドアをとん〳〵とノックする者がある。私は白い帷で包まれた寢台の上で喚び起された。

「村松さん入つてもいゝですか」

「お入り下さい」

と云つたが非常に睡たかつた。昨夜此の宿へ着いて床へ入つたのは一時頃だつたが、旅行中の習慣で三時頃まで床の中で本を讀んでゐるのでまだ幾時間も睡つてゐないやうな氣がした。起き乍ら時計を見るとそれでももう七時だつた。こんなに早く人を叩き起すのは一體誰だらう？

厚い霜降りの背廣を着た堂々たる體格をした人物が入つて來た。

「やあ、早く起して濟みませんね。實あ上海で貴君方が南京へ行つた話を聞いたから後を追つて來たつもりだつたが、僕の方が早く着いてしまつた。僕あ昨日の夕方此處へ着きましたよ。處が、今朝起きて見ると貴君の名札が掛つてゐるから、早速お尋ねしたわけですよ」

と其の紳士は立ち乍ら威勢のいゝ調子で云つた。私は大急ぎでヅボンをはき、メリヤスの上へコートを引つ掛けた。

「まあどうぞお掛け下さい」

と云つたが私はどうも此の人を見覺えがないのである。鍛え上げたやうなガツシリした巨軀で、一見魁偉な印象を與へる。頭髮を蓬々と亂して、角張つた團顔に鼻が大きく横たはつてゐるが全體としては愛嬌に富んでゐる。

「失禮ですが貴君は何方でしたかな」

「あ、さう／＼、僕前田河です」

それは前田河廣一郎君だつた。

「二三日前に上海へ着いたんですがね、貴方と歐陽予倩氏が南京へ行つたといふ話を聞いたんで、少し貴君に打ち合せたい事もあるし、かた／＼で一寸やつて來たんです」

私は前田河氏と南京で初對面を遂げたことは意外だつた。

「貴君顔を洗ひましたか」

「いやまだ洗はない、言葉は分らないしどうしやうもないね」

「ぢやあ此處でお洗ひなさい」

茶房（ボーイ）を呼んで湯を持つて來させとる前田河君は熱いタオルで顔を拭つて

「ヤレ／＼、これでやつと人心地がついた」

と云つてソフアーへ一杯に體を沈めながら煙草をふかし始めた。前田河君と私とは初對面だが手紙の上では從來も多少交際があり、且つ話題になるべき兩者に共通の友人は澤山ある。同君は今度支那を小説の背景に取るためにやつて來たことや、其の小説を中央公論へ掲載する約束になつてゐることなどを話した。

「處が、僕も方々ゴロついて見たつもりだが、支那は一寸見た處ぢやあ手の付けやうがないやうな氣がするね、とにかく呆れ返つた處だね」

と前田河君は云つた。

「時に、南京には幾日位居るつもりです」

「いや僕は直ぐ上海へ歸る、今日晝の十二時の汽車で還る筈になつてるんです。昨日汽車で道伴れになつた人の友達が此の隣

の部屋に居るんだが、其の人も上海へ行くといふから一緒に返らうと思ふ」

「それあ餘り早過ぎる、もう少し延ばしたらどうです」

「僕あ構はないんだが、伴れの人の都合を聞いて見やう」

私は前田河氏に連れられて隣室を訪問した。其處には日本のD通信社の派遣員のK氏が事務所を持つてゐた。そして昨日上海から前田河君と同行して來たT君といふ青年も其の室に居た。前田河君とK君とは相談して今夜の十一時の列車に延ばすことになつた。

今朝は空がビツシヤリ曇つて今にも降り出しさうな模様だつた。K君と前田河君と私は雨花台を見物しやうといつて八時頃から宿を出た。黄包車で秦淮まで行く途中からすでにパラパラ降り出して來た。秦准の夫子廟の附近に大きな茶館が幾軒もある。私達は六朝居といふ茶館へ入つた。非常に大きな家で數百の卓が据へてある。客も澤山入つてゐる。階下の表に近い室の一つの卓を選ぶと直ぐに茶を持つて來る。K君が註文して豆腐乾だの、饱子（パウツ）だの、麵などを取つた。豆腐乾といふのは固く乾した豆腐を麵のやうに刻んで豚肉なぞ入れて煮たもので、饱子といふのは肉や野菜を入れた饅頭のやうな物でどちらも朝の食物であるどの部屋にも一杯の客が入つてガヤガヤと途方もない緊張した事である。[illegible]思ふ暇がない。

「呆れ返つたもんだネ」と前田河君は「呆れ返つた」を連發した。

支那で十何年暮らして足跡十省に跨がつてゐるといふ支那通のK君は私達に向つて支那人の個性に就ていろんな話をした。

「要するに、愛に居るこんな奴等には何んにもないんですよ。私は能く云ふが、支那人との交際は煙草一本で始まるんです。節操だの信念だのいふものは彼等にはありはしない」

私達の隣の卓に一人の五十恰好の好々爺がゐた。話し相手がないと見えて、うす菊石のある好人物らしい顔をニコ付かせて頻りに私達の方を見てゐる。

「さう云へば此の老爺などは正に何もないね、たゞ下らん人間といふより外に言葉はないな」前田河君は饱子をつまんで食ひ乍ら云つた。

「Kさん、一寸其の煙草の交際をやつて見せて呉れませんか、」

僕も呼吸を覺えたいから」

「譯ないですよ」

さういつてK君は煙草を一本其の老人の方へ差し出して

「先生、煙草はいかゞ」

すると老人は相恰を崩しながら「謝々、謝々」と云つて、片方の拳を片方の掌で包むやうにして小さく振つて、それからお

づく煙草を貰つた。K君はマッチを擦つて遣つた。老人は又「謝々」を繰り返す。

「貴名は」と老人は問いてきた。

「私達は日本人です。貴下の貴名は」

老人は「胡某」と名乘つて、それから自分は上海の者だが中山墓の工事のために南京へ來てゐるとか、貴君方が中山墓を見物される時は自分を尋ねて來て貰ひ度いといつたやうなことを話し出した。

「かういふ調子で直ぐに交際が始まるんです。僕達はこんな人間からでも意外な材料を掴んだりすることもある。支那人の交際主義の發達は非常なものです。今度國民政府が賭子（賭者）や麻雀を禁止したのも要するに交際主義打破が目的なのです。所謂貪官汚吏は皆此の交際主義の産物ですからね」

K君はかう解說した。

茶館を出て再び黄包車に乘つた。夫子廟の前を通つて二三丁西へ行くと南門の通へ出た。狭い街路を一杯人が歩いてゐる。其の中を黄包車、馬車、一輪車、驢馬、荷擔ぎ、水汲み——いろんな物が陸續としてつながつてゐる。何んとも名狀しがたない喧囂の聲が其の界隈を占領してゐる。車は先きがつかえてゐるので容易に進行しなかつた。城門が直ぐ鼻先に見えてゐる。素らしく高い城壁が古代的な威厳を見せて雨催ひの空をカッキリと仕切つてゐる。城門の内外をウヨウヨと押し合つてゐる群衆の喧々囂々たる光景。それは直ちに支那の太古を彷彿せしめる。黄包車も馬車も此處では何等近代的感覺をもつてゐない。すべての者が封建制度の偉大な權力を象徴してゐる城門の下にうごめいてゐる蟲のやうな人類に過ぎない。

南門は城壁が四重になつてゐる。城壁と城壁の間にも家が並んでゐて、竹の籠を賣る店だの、鍛冶屋だの、繩を賣る店などがある。

城外へ出て五六丁行くと雨花臺の麓へ着いた。雨がパラパラ降つてゐる。車を降りて枯草に包まれた山といふよりも稍小高い丘の頂上をさして登つた。樹木は一本も立つてゐない。乞食の女の兒が二三人小石を買つて呉れといつてうるさく附きまとつて來る。紅味を帶びた石で水盤に入れると美しい光澤が出る。六年前に私は此處へ來た時老婆の乞食と話しをしたことがあつた。しかし其老婆はもう生きてはゐまい。子供の乞食に一錢宛やると漸く離れた。頂上迄は二三丁あつた。頂上には新しい亭のやうな物が建てゝある。此處から見ると南京城内が一目に見える。が、其の時雨が少し強く降り出したので遠くの方は見えなかつた。六朝時代の傳說にある高僧が此の丘上に登

つて說法をしてゐたら天から花の雨が降つて罪障のある者の體に其の花片が附いたといふことだ。前田河君は歷史的回顧の興味はもつてゐないと云つたが、南京の地形を觀望するには此處が一番適當だからといつて誘つて來たのだつた。

「明の――年に倭寇が六十三人で南京を占領しにやつて來たことがあります。すると四方の城門を鎖してしまつた。倭寇はどうかして城壁を乘り越さうと思つて三日三晩城壁の外をうろついてゐたが、いかに倭寇でも此の城壁は破れなかつた。そのうちに食糧が盡きて弱つた時に城內から攻め出て六十三人を一人殘らず殺してしまつたといふ記錄があります」

倭寇を研究してゐるといふK君はそんな話をした。私達の側には三四人づれの地方から獵官運動にでも來てゐるらしい田舍風の紳士がゐて矢張り何か話し合つてゐる。

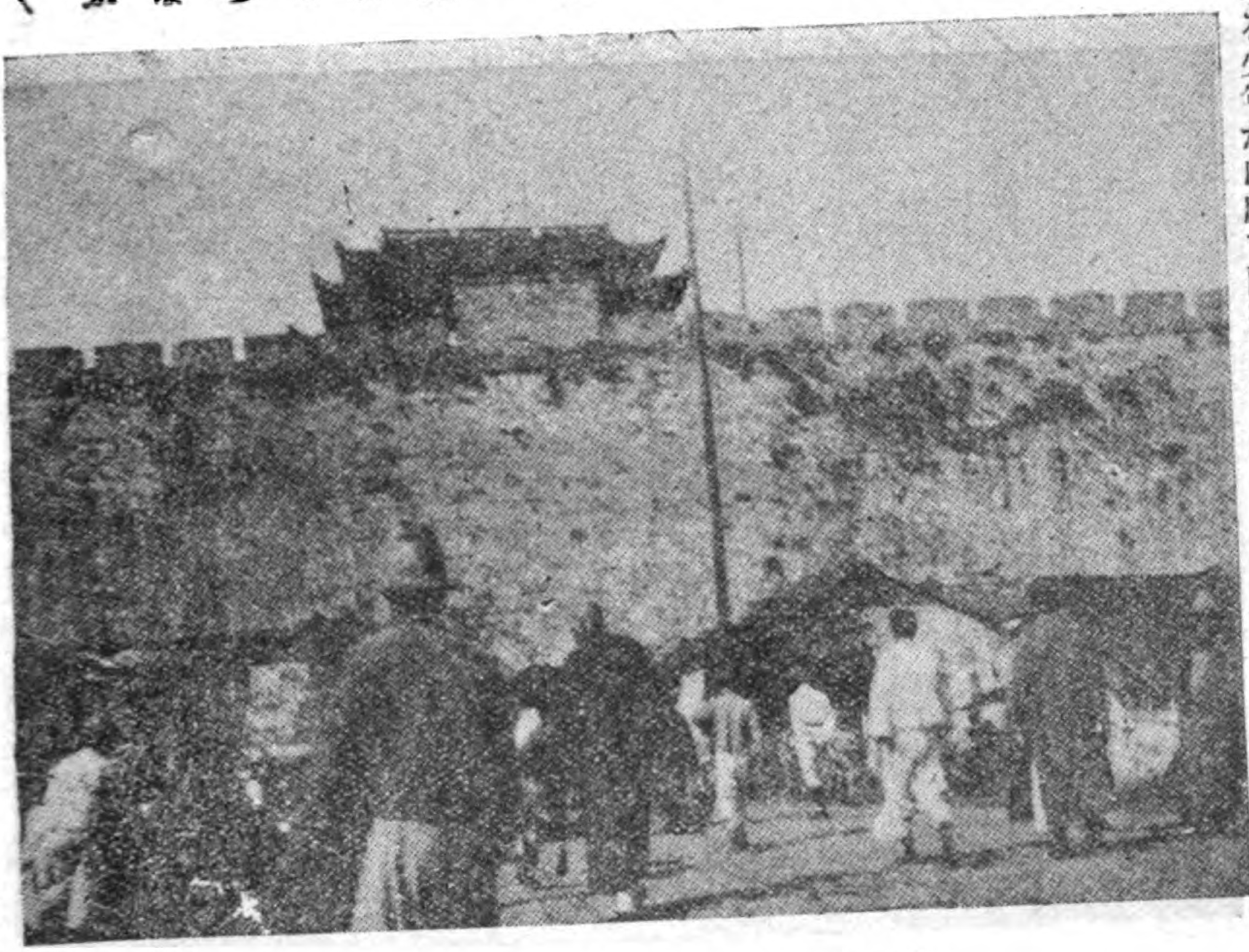


（雨花臺）

雨はます／＼強くなつて寒さを覺えて來たので私は誰より先きに以前と違つた方角の道を驅けて降つた。あとの二人も降りて來る。私は此の南麓に氣持のよい茶館があつたことを思ひ出して、其處で雨を避けやうと考へたところが道を取り違へたと見えて茶館らしいものはなかつた。路傍の一段高い處に一軒の家があるが戶が閉めてある。石段を上つて其の家の檐下へ入り込んで私達は雨宿りをした。すると、戶は閉めてあるけれども中では女達の話し聲がしてゐる。よく見るとそれは普通の家らしくはなく、以前は宗廟か何かだつたに違ひないやうな構造

だつた。地方から來た貢試を受ける少年が此處で雨宿りをしてゐると突然戸が明いて中から美しい女が顏を出して少年を呼び入れる。さういふのが昔の支那の小說だが、今日の雨宿りの主人公は日本のプロレタリア作家及び其の友人であるから左樣な傳奇が生れやう理屈はない。

雨が小止みになつたので元の方へ戻つて再び黃包車に乘つて歸途についた。城門の混雜は先刻よりも猶激しかつた。車は一つの場所で十分も十五分宛も立ち往生をした。此の城門の外に井戸があると見えて桶を擔つて水を汲みに來る者が一番多かつた。米を擔つて行く者、大きな醬油瓶を運ぶ者、石炭を運ぶ者、鷄を籠に入れて擔いで行く者、野菜を手に提げてゐる者。老、幼、男、女、其の中を長い材木を擔いで行く。馬車、黃包車、一輪車、それらが數百台前後につながつてゐる。一輪車の軋る音、掛け聲、呼ぶ聲、罵り合ひ、喚き。行き違ふ車と前後の車とが互ひに路を塞ぎ合つて全部のものが後にも先にも動かれなくなつてしまふ。



（南門及び城壁の一部）

何といふ混亂、何といふ無秩序だらう――。一と口に云ふと火事場騷ぎの狀態である。これは明かに支那以外の國では見られない光景だ。かういふ狀態は非常時に於てだけ想像することが許されるが、支那では都會でも田舍でも日常是れに類似した事實は澤山ある。是れを古來の支那の民衆が支配者のために虐げられてゐる一例とも見ることも出來るが、混亂といふことが傳統的な支那の國民生活の一面であるとも云へる。とにかく支

[illegible]いふ通りに[illegible]つてゐる。どんな混亂の渦中に置かれても[illegible]ないだけの餘裕がある。一見無秩序に見えてゐるが其の奥には常に一種の統制がある。城門が塞がれてしまはない限りは、何時間掛らうとも結構は通り拔けることが出來るといふことで安心してゐるやうな様子がある。支那人の陰忍性と無抵抗主義がよくそれを證明してゐる。支那の民族が五千年を通じてあらゆる災禍や迫害にあひ乍ら滅びないばかりか益發達してゆく原因は此處にもあるのだと私は思ふ

さう思つて見ると、群衆の中には頭に花を附けてゐる女乞食なぞが混つてゐる。品のよい老婆が黄包車の上で可愛い孫を膝に載せて莞爾々々笑つてゐる。一人の若者は他人の馬車の尻へ後向きに腰を掛け込んでうまさうに饅頭を食つてゐる。私を載せてゐる俥夫は暗い城門の中で車の靴を片つぽ拾つて急いで車の柄にブラ下げた。混亂の中にある長閑さがあり、喧噪の中に平穏がある。私は知らず識らず彼等と同じ氣持になつてゆくのだつた。いら立たしい氣分がなくなつて車の上で緩り煙草をふかし乍ら此の光景を眺めてゐた、

殆ど卅分位かゝつて城門を通り拔けた。

日本領事館

當日[illegible]君とK君と三人は[illegible]ここになつた。

K君は私達二人をO領事に紹介して貰はうと云つた。それから領事館へ電話を掛けたりして領事の承諾を得て夕方から馬車に乘つて私達を日本領事館へ連れて行つた。

前川河君は厚いスコッチの背廣の上にレインコートを着て、鳥打帽子をスッポリと耳まで冠つたあとでグイとうしろへ引つ張つた型は勞農式とでも云ふのだらう。K君は黒い厚い外套を着てゐる。私は不覺にも上海から薄い間服でやつて來たので肌寒かつた。

領事館は有名な鼓樓の側の可成り小高い丘の上にあつた。其の附近は公園になつてゐる。建物は古風な煉瓦造りでドッシリしてゐる。

玄關の直ぐ脇の廣いサロンへ通された。壁も装飾も眞新らしくて、此處だけは電力不足の南京とは思へない明るさだ。間もなく大島紬に仙台平の袴でO領事は客間へ出て來て私達に向つて外交官らしい如才ない態度でいろ〳〵物語りをされた。此の客間などは南京事件の時滅茶々々に掠奪されて荒れ果てゝゐたのを修繕したのだといふ。

其のうちに段々客間へ人が集つて來た。領事は一人々々に私

達を紹介して具れた。陸軍駐在武官のS中佐、海軍のK中佐、第一遣外艦隊參謀のN中佐、S副領事、其の他の領事館員、在留邦人の主立つた人々などがゐた。昨日(十日)は御大典日で此の領事館へ在留邦人全部集まつて盛大な奉祝會を行つたさうだ。それで今日は領事が此の人達をお客にして慰勞の宴會を催すについて私達も好機會であるとして偶然其の席末を汚す光榮に浴したのだつた。しかも其の事は私も前田河君も此處へ來る迄は知らなかつた。

S中佐は陸軍部內有數の支那通だが、濟南事件の際支那の軍隊から監禁迫害を受けたことで兩國間の問題になつた有名な軍人だ。軍神廣瀨中佐に一寸似た顏立ちでいかにも軍人らしい風骨が見える。此の人は文章も達者で日本の某新聞へ連載した濟南事件の當時の遭難日記は私も時々讀んでゐた。前田河君はそれを更に愛讀したものか其の切拔きを保存してあるといつて內容の一部分についてS中佐と話し合つたりした。

食堂には支那料理の大卓が四台用意されてゐた。一つの卓へ領事、副領事、K醫師、S中佐、K中佐、N中佐、前田河、私などがついた。料理は四川料理だつた。領事が簡單に挨拶すると、在留邦人でも古顏のK醫師が起つてこれまた簡單に謝辭を述べて其の後で御馳走がドシ〱運ばれた。私は酒がのめないが前田河君は酒豪である。領事もS中佐も其の方では可成り豪の者らしかつた。

「前田河さんは隨分强さうですね」と領事が云ふと

「酒なら幾らでも飲みますよ」と前田河君は答へる。

「幾らでも飲めるは偉いですな、では老酒では物足りんでせう。變つた酒を差し上げませうか」

「さうですな、願はくはウヰスキーの方が有難いですな」

「ボーイ、ウヰスキーを持つて來い」と領事は我が意を得たやうな顏をして命じた。

ウヰスキーの大瓶が持ち出されると前田河君は盛んに煽つた。S中佐も負けずに飲んだ。昨日の祝賀會の話が卓上を賑やはした。

「昨日領事は隨分醉ひましたな」と誰かゞ云つた。

「あれはシヤンパンが良くなかつたらしい」と領事は云つた。

「奥さんに頭を揉ませてゐらつしやつたから餘程苦しいんだらうと同情しましたよ」

「然し、あゝまでして見せ付けなくてもよさゝうなもんだと僕は思つたね」K中佐が橫槍を入れた。

「あはゝゝゝゝ」領事は愉快さうに哄笑した。

色の白い端麗な顏に美しい口髭のあるO領事は見かけより餘

理家業風の人物らしく思はれた。

前田河君はＹ海軍中佐を相手にアメリカの人種問題について論じてゐた。彼の氣焰が揚まるに從つて、ウヰスキーの大瓶は目に見えて中味が減つてゐた。彼はいかなる問題に對しても自家一流の、それは世界プロレタリア運動家に共通の眞理に立脚して厳しい判斷を下さねばやまない男だつた。彼は相手が私だらうが海軍々人だらうが、場所が帝國領事館だらうがそんなことは顧慮する必要を認めなかつた。ウヰスキーの瓶が更にもう一本持ち出された。

他の三つの卓はわれ〳〵とは全然沒交渉だつた。其の三つの卓から突如として唱歌の聲が起つた。

道は六百八十里
長門の浦を船出して
はや二たとせをふるさとの
山をはるかに眺むれば

數十名の唱歌の聲が響くの間に食堂を震撼した。私は全く忘却してゐた廿年前の或時代を想起した。そして自分も人々と一緒にその歌を歌つて無邪氣に少年時代のやうな軍國主義的感激に浸つて見たいと思つたが何故かしら私には歌へなかつた。

宴會は軍歌で幕が閉ぢられた。人々は再び客間の方へなだれ出た。前田河君はまだむ[illegible]ウヰスキーの[illegible]さしく振り上げた。

「ウヰスキー黨はこつちへ集まつて來たまへ」

其の時Ｋ君は私に耳打ちして、領事の好意で私のために風呂があけてあるから此のひまに入つてはどうかと云つた。私は喜んで好意に甘へて風呂に入れて貰つた。南京に滯在してゐた間不自由を感じたことは風呂だつた。日本旅館へ泊れば毎晩風呂に入れるが支那旅館にはそれがなかつた。市中に錢湯があるといふことを聞いてゐたが探し當てることが出來なかつた。

私が浴室から出て來た時はまだ大勢客間に居た。

「わが、無産階級のためにだ……いゝか、わがといふのは日本の無産階級といふ意味ぢやないぞ、日本も支那もないんだ、無産階級は共同戰線を張つてるのだ……」

前田河君は安樂椅子から體を起さうとしては幾度びか失敗したから右の手だけを盛んに水平に運動させた。其の前には廣瀬中佐によく似たＳ中佐がウヰスキーの瓶を片手に握りしめながら立つてゐた。

「貴樣の支那観になつとらん、プロレタリアだなんて云たつて貴樣の思想は淺薄極まる、もつとよく目を開いて支那を見て物を云へ、馬鹿」Ｓ中佐は醉眼をしばだゝきながら叫んだ。

「見んでも俺には解つてる、貴様なぞは何年ゐても解りやせん、田中義一の手先になつて働いてたんぢや駄目だぞ」

「何、俺が田中義一の手先だ？ヤイ、俺は田中なぞの手先ぢやないぞ。俺は國家のために働いてるんだ、田中が何だ」

「ヨシ〳〵、それならいゝ、忘れても田中の手先になるなよ。支那の民衆を見ろ、虐げられたる民衆を救つて遣れ、帝國主義ばかりが國士ぢやないぞ、俺はかう見えても立派な國士だぞ」

「ウン、だから貴樣を助けて置くんだ、でなきやあ、かうだ」

とS中佐は拳固で相手の腹のあたりをえぐる眞似をした。

「とにかくもう一杯飲め」

「ウン飲まう」

ウヰスキーは大概絨毯が吸つてしまつた。

領事も非常な上機嫌だつた。



（南東市街の一部）

「是れで仲直りだ、さあよし、握手をしやう」

「よし來た」

と云つて前田河は猛然としてS中佐に飛び掛つたと思ふと其の巨きな兩腕で犇と相手の肩に抱き付いて接吻した。これには流石のS中佐も參つたらしかつたが直ぐに勇氣を盛り返して片手で前田河の頭を抱えるやうにして彼の廣い額をペロペロ甜めた。

D通信社のK君は今夜中に前田河君を上海へ連れて行かなければならぬ義務があつた。彼は其の手易い義務を果すために大いに努力しなくてはならなかつた。汽車の時間は十一時だけれども彼は二時間位前から出掛けやうとして焦慮つてゐた。

「まだ早い、もう少し御坐りなすつて」

前田河君は巨きな掌を展い客間一杯に動かして人々の手を握り、そして大きな笑ひ聲を天井に響かせた。彼は最後に隅の方に温和しくかたまつてゐた館員諸君の前へ行つた。

「さて諸君御挨拶を申し上げます、昨日は御大典で色々お骨折りで御座いました、今後もですな、エー國家の爲に南京へ骨を埋めて下さい」

「馬鹿あ云へ、こんな處へ骨を埋めて堪るもんか」背後からS中佐がまぜ返した。

K君は廊下の方からレインコートを外して來て酔つぱらひに着せた。

「諸君、左樣なら、左樣なら」

全部の人が玄關へ送つて出た。

「帽子、帽子」と誰かゞ云つた。

K君は帽子掛から大きな鳥打帽子を持つて來て前田河君の縮れた頭髪の上に置いた。彼はそれをスツポリと眉深に冠つたあとで、もう一度後ろの方を持つてグイと引つ張つた。

「成る程、さうするとトロツキーになりますなあ」領事はさも感じたやうに云つた。

玄關には領事館の自動車が横付けであつた。K君は大汗になつて自分の二倍もある男を車の中へ押し込んだた。

「諸君！」前田河君は又もや車外へ飛び出し掛けるのをK君は漸う喰ひ留めた。

「諸君！最後の萬歳だ。領事館諸君萬歳！」

「萬歳！」

車は暗闇の中へ動き出した。それを機會に半數位の人が歸つて行つた。私も歸り掛けるとS中佐が腕を捉へて客間へ引つ張り込んだ。

「君はまだ歸つちやいかん、もう一度飲まう」

客間には十人餘りの人が殘つた。S中佐はそれらの一人々々にウヰスキーを一杯宛飲ませて廻つた。

「君は、俺があの男と喧嘩でもすると思つたのかい、俺は喧嘩はしないよ、寧ろ俺はあの男が好きなんだ、」S中佐は私にさう云つた。

領事はひとり御機嫌がよかつた。日支交渉の結果新聞紙上で俄かに有名になつた此のO氏を私は可成り興味をもつて見た。

「今夜は實に愉快でした、」さう云つたあとで領事は「昨日は不愉快だつたからな」と附け加へた。

「何故昨日は不愉快だつたのです」向う側の安樂椅子に掛けてゐるジミな背廣を着た紳士はさう反問した。

「だつて、外交部の奴が一人も來んぢやないですか、×××××が生意氣だよ」
「領事、××××はいけませんな、御注意なさい」
「いや、これは、但し此の場だからね」
「但し此の場がいけない、平素さういふ用語をなさるのが大事の場合不用意に出るものです。第一××××は餘り舊時代の思想だ、僕は支那といふ言葉さへ使はないことにしてゐる、民國の人は支那といふ名稱を嫌ひますからね」
「ぢやあ何と云ひます」
「お國とか中國とか云ひます」
色の黑い、澁い顏をした其の紳士は見掛けに依らぬ辛辣な口調で喰つて掛つた。私は其の紳士が先刻も食卓で一寸領事を揶揄したK海軍中佐であつたことを知つた。「オイコラ、貴樣領事に說諭したな、人を說諭した奴は罰杯を飲め」S中佐は角瓶とコップを兩手に持つてヒヨロ／＼しながらK中佐の前へ出て行つてウヰスキーを飲ませた。それで納まるかと思つてゐるとK中佐はどういふわけか少ししつこくからみ出した。
「第一、昨日の祝賀會に外交部の者が來ないといつて憤慨するのは、憤慨する方が間違つてると僕は思ふ」
「それは何故ですか、當方では公式に招待狀を發したのです、然るに參列しないといふのは無禮ではないですか」
「正式の招待狀といふのがそも／＼我輩には解しかねる、王正廷を何の資格で招待したのです、日本は國民政府を承認してゐないぢやありませんか、承認しない政府の外交部長を公式に招待したといふのが矛盾でないですか、王正廷も蔣介石もクーリーも乞食も日本政府の立場から見れば變りはない筈だ、其の苦力や乞食と同資格の人間を相手に外交だの交涉だのといふことも我輩はおかしなもんだと考へてゐるんです」
「承認してゐないからといつても、事實は其處に在る。我國の國家的勃興に際して領事が招待狀を發したのに對して一言の挨拶もなく參列しないといふのは國際的の儀禮を缺いてゐるではないですか」
「いや、來ないのが當然だ、僕が王正廷であつても矢張り來ない、招待するのは勝手であつても來る來ないは先方の勝手です、そんなことを憤慨する位なら何故早く國民政府を承認しないのです」
「それは別問題である」
「いや別問題ぢやない」
「しかし、本國政府からは今日長文の電報が來ましたよ」
「何と云つて」

「支那の[illegible]一人も賛成しないとは怪しからんから[illegible]に[illegible]といふ意味です」

「ハ、、、、そんな陳腐な調査なんか相手にせんがいゝです。政府が沒分曉漢揃ひなんだ。承認もしないで自分勝手の時ばかり來るとか來ないとかいつて愚痴を云つたつて何もならないでせう」

誰よりも一番醉つてゐる筈のS中佐は此の空氣を看取するや俄かに巧妙な調停者の立場に自分を置いて、ウヰスキーで議論を盛り潰してしまふと努力し始めた。

今夜はどうしてかうドラマチツクな光景ばかり見せられるのだらう？　私は誰も彼も此の場の人は嫌ひではない。そして滿腔の尊敬をさへ拂つてゐる。O領事は見掛け以上に確かに硬骨漢である。そして十分に帝國主義者である。前領事が國際的に失敗した後と云ひ、現在日本帝國として最も重要な外交戰場の前哨任務を擔任すべき人物として外務大臣が此の人を選み出したことは當然であると私は思つた。しかし、海軍々人であるK中佐の進歩的意見は私にとつて多少意外でないこともなかつた。けれども、同時に彼の議論は何ぴとでも直ぐに肯定しうるほどしかく單純であることを考へなければならない。K中佐は支那に來てまだ二ケ月しか勤務しない人だといつた。支那へ來るといつても[illegible]心持を[illegible]てゐる[illegible]でもある。[illegible]つた後のK中佐の意見を人々はもう一度聞く必要があらう。支那及び支那人に對して一應愛相を盡かし切ることは、あらゆる支那關係者にとつて必須的條件であることを私は斷言する。それは支那を侮蔑する意味ではない、より深刻な理解の前提として愛相を盡かすきで交はれといふ意味である。われ〳〵の夫婦が眞によき夫婦として平和な共同生活を營み得るまでには可成り相互的に愛相を盡かした後でなければならない。日支關係もそれと同樣である。而して幸ひに愛相を盡かすに足りる支那であることを發見するであらう。

例へば今もK中佐が云つたやうな「支那」といふ言葉を忌むことなどは極めて幼稚な、形式的交際に囚はれてゐる證據である。そんな程度では彼我共に友達にはなれない。

支那を支那といひ、日本を日本と云ひ、支那人を支那人と云ひ、印度人を印度人と呼ぶことに何の遠慮が要る？　支那なる名前は牢固たる地理學的名稱であつて同時にわれ〳〵に雄大なる大陸的範圍を聯想させてゐるではないか。「中國」でも「中華民國」でも構はないが左樣なことに拘泥する必要は毫頭ない。若し支那人自身に支那といふ蔑むべき自國の總稱を賤むだけの

觀念のやうに考へたりする淺はかな者がゐたら深切に教へて遣るがよいのである。私などはあらゆる支那人と交つて其の國を支那と呼び、其の國民を支那人と呼んで未だ曾て差し支へのあつた覺えはない。

私は領事館の車で送つて呉れるといつたけれども此の上面倒をかけるのも惡いやうな氣がしたので領事にも他の人々にも挨拶をしないでソツと客間を出て玄關で外套を着て外へ出た。雨がやんで曇つた空にぼんやりと月がぼかされてゐた。丘の上の廣い道をいゝ加減に歩いて下りるとどうやら道をとり違へたらしかつた。後戻りをするのも面倒だから人通りのない往來に立つて黄包車(ワンポツ)の來るのを待つてゐた。直ぐ側の建物は何かの役所と見えて劍附鐵砲を持つた番兵だか巡警だかゞ入口の處に佇立して私の方を見てゐる。やゝ暫らくして漸く一臺の黄包車が來たのでそれへ乘つた。「東方飲店(トンファアンファアンチン)」と教へると車を曳き出したが飛んでもない變な所ばかり曳き廻した。それは私が最初に方角を違へて歩いてゐたゝめに車夫は旅館へ出る近道を歩いてゐるのだつた。畑の中の小道を通つたり。壁と壁の間を拔けたり、廣い水溜りの岸を通つたりしたが何處でも人には逢はなかつた。空の月は次第〳〵に明るくなるやうで、地上や屋根の上に薄いもやが漾ふてゐるのが見えた。

私は車の上でいろんなことを考へてゐた。前田河君、O領事、S中佐、K中佐……それらの人々のことが一人々々思ひ返された。其の一人々々が主義を異にし立場を異にしてこそゐるが、各々ハツキリした方角に向つて突進しつゝある鬪士のやうに私には見える。少なくともあの人達は支那に對しても一定の主義を有し定まつた立場を有つて居る。私自身はどうであるか？　私は何を考へてゐるか？　私は現在支那へ來て人々が忙しく活動してゐる南京に居る。そして私は何をしてゐるか？から考へて見ると私だけが無目的な人間のやうに思はれる。

私は先刻の領事館客間のあの光景、O領事の口吻などに依つて、所謂日支交渉なるものゝ前途に對してある暗示を得たやうに感じた。けれども私はそれによつて失望もしなければ欣びもしない。それがどうあらうとも結局私にとつては大して關心事でない。前田河君は支那の國家は當然に無産階級が支配すべきであり而して其の可能性の顯著なることを屢々私に向つて斷定してきかせた。

「支那は多く觀ることを必要としない、過去及び現在の支那の民衆がいかに軍閥や資本家から虐げられてゐるかといふ點さへ觀れば、次に來るべきものは明かである。壓迫と搾取がひどければひどいだけ、反動が大きいだけの問題である」と彼は云つ

た。

けれども彼の其の確信が直ちに私の確信とはなり得ないのである。支那はどうなるか私には解らない。私はすべての現狀を肯定するのほかはない。そして此の現狀に變化が生じた時にも矢張り次の現狀を同じやうに肯定するであらう。

私の支那に對する感情の中には國家もなければ階級もない。私は支那の自然を愛し、人間を愛し、藝術を愛し、食物を愛する。かるがゆへに支那へ來たのである。見よ、私と、今私を乘せて走りつゝある黄包車(ワンポウ)との間には國際觀念もなければ階級意識もない。彼は容々寂々としてノロ〱と車を曳つぱつてゐる。私は、彼が支那人であつて自分が日本人であるといふことは考へてゐない。私は彼の妻子が私の妻子と同等の生活をしなければならぬものだといふやうなことは考へてゐない。たゞわれ〱の頭の上に朧ろ月があり、澁りに汚ない壁があることだけである。南京城内の街はずれは只靜かで平和である。

黄包車は突然車を留めて畑に向つて尿をしはじめた。私は車上でマッチを擦つてゆつくりと煙草をふかしはじめた。

父の結婚

島崎藤村氏の息[illegible]、新結[illegible]なる[illegible]にて、藝術家としての藤村氏に[illegible]

「道徳な自己僞瞞」から解放されて、藝術家としての藤村氏に歸つた新生を述ぶ。

各國娘氣質

◆あめりか娘……石川欣一

◆上海娘……堀口大學

◆ろしあの娘……米川正夫

◆内外時評◆（サムライ外交と町人外交・アメリカの兵?とフーヴァー・椅子保護法・花柳病豫防法・其他。）……山川菊枝・らいてう

◆マネキンガールに聽く

◆御大典拜觀紀行　島中雄作

◆圓タク社會相　伊藤明雄

◆大學評判記・帝大の卷◆銀杏並木に吹く時代の風

◆壯快なウインター・スポーツ

◆目白の森に咲く愛の花　秘められた寮舍生活の眞相をあばく……

◆（連載小説）京都……逆つた眼から見られた古都の姿を背景にす。渡邊均

◆新時代の化粧はどうする？　最も新しき化粧法を説く、美容大家連の好篇。

◆別室（特に本誌に寄せられた六十枚の力作。興味無限）……里見弴

◆花はくれなゐ（長篇小説）……池谷信三郎

◆木がくれの巣（長篇小説）……小島政二郎

◆八百屋お七（大衆文藝）……眞山青果

文壇の中心は今や婦人公論に移らうとして居ます。創作を、文藝作品を愛する人で婦人公論を讀まぬ人はもぐりです。

警官物語

矢田挿雲

○

巡廻の巡査が横丁で立小便をして居る男を捕へて

『オイ、コラ、お前は、なぜ、こんな處で放尿をするか』

と詰問するのを以前は能く見かけた。現に小便をして居る者に向つて、なぜ小便をするかと、非常な見幕で訊問するのが、日本の巡査であつたのだ。

でも以前は夫れで濟んで居たから好いが、日本の巡査もだんだん夫れでは濟まなくなつて來るから骨だ。人民の方で

『つい出度くなりましたから、してしまひました。誠に申譯ありません』

とあやまれば事は無難だが、

『生憎と共同便所は無し、事情は切迫して參つたので、已むを得ず御覧の通り』

とでも出られたら、現代の巡査の八九割がたは、此の違警罪犯人の立場に同情して了ふだろう。

けれどもかゝる場合、同情ばかりしてゐては、巡査の役目が勤まらない。そんならば人民の事情などには耳を假さず、ドシドシ警察處罰令に當てはめて、一つでも檢擧件數をふやすのが、忠良な巡査と云ふのであろうか。現代の巡査の疑問は必ず其處になければならない。

よく新聞に巡査の美談として、駐在所巡査が、管内の貧家に、自分の俸給を割いて貢いで居た事が、端なく署長の耳に入りて、表彰されたと云ふ話が出て居る。私はそれを讀む毎に、いつも痛々しい氣がしてならない。さらでだに巡査の待遇は、その劇職に比して薄いのに、その中から何割かを割いて人を養

ふのは、尊き義侠心であるには相違ないが、富人の歓喜を害し、延いては夫れが頭に影響し、又ぞろ『なぜ、小便を垂れるか』の時代に逆轉するようなことはあるまいかと心配である。

論より證據、駐在所巡査が、我もくと貧家に貢いで、それが端なく署長の耳に入りて表彰される事の方へ馬力をかけ出したら、一體此の世の中は何となるであろう。富の巡査に取つては美談かも知らないが、日本の社會としては、美談でもなんでもないばかりでなく、かなりな恥辱である。又此の種の警官美談が續出するようでは、警察事務は必ず均衡を失ひ、駐在所巡査の服務心理が變調を來すものと見ねばならない。

私は警官と人民との親睦する力點を斯うゆふところに置くのは末梢的、寧ろ病的であつて、健全な社會發達のためには、女女しい、好ましからざる現象だと思ふ。

○

「役人は威張るもの』とは封建時代から人民の頭に滲み込んで居て今に抜けない。役人も大臣級や次官級になると、故無く威張らないが（故有る時は仲々威張る）勅任官、奏任官、判任官と下へさがるほど反比例に威張る。

曾て内藤鳴雪翁が文部省の大参事を勤めて馬車で諸官衙に出入した中に、どこの門番も一律であつたが、[illegible]になつたところ、どこの役所の門番も威張つて仕様が無い。そこで、翁の曰く

『門番は平生威張る折があまり有りませんので、それで偶サカ其の折に逢着しますると、日頃の[illegible]を、その、大いに伸べるつもりで、此の時ぞと威張るのでヤスナ。無邪氣なものでヤステ、こつちもそのつもりぢやから、禮を厚うし、辭を低うして、存分に威張らせてやると云ふわけでヤスナ』

門番に限らない。役場、郵便局、[illegible]合の吏員、皆よく威張る。世の中の景氣不景氣、ボーナスの多少に依つて、多少の加減はあるが、先づ官廳の者は人民を見たら威張ることにきめて居る。そのうちでも巡査が最もよく威張る。

併し時代は徐々に流轉する。受付でも門番でも空威張をして人づきの悪い者は次第に淘汰される。電車の車掌に善玉と悪玉とある如く、巡査にも駒澤と岩水と二種類ある。そして、たとへ貧民に貢がなくとも、人民に優しい巡査でさへあれば、人民は敬愛するのである。是が時代思潮である。

犯人檢擧を一面の職掌とする巡査が、人民と見たら犯人乃至犯人では無いかと警戒するのは好いが、まだ犯人ときまりもせぬうちから、オイ、コラ、貴様、などと荒々しい見幕と、[illegible]々

しい言葉とで食つてかゝつた日には、人民の感じは惡化せずに居ない。世人がすべて鳴雪翁の如き寬宏な長者であつて吳れゝば好いけれど、そうで無い限り、所謂、巡査の威厳の保ち方については、時代思潮とあまり背馳せぬ丈けの用意が必要である。

此頃、兇刃に殪れる殉職警官が續出したのに對し、有産者の一二の人が、建築物や金子を提供して慰藉の道を講ずるのは、洵に美擧と謂はねばならぬ。凡そ何が氣の毒だと云つても、春秋に富める者が職に殪れるほど氣の毒なことは無い。假えば鑛道從業員、航海業者、飛行士、爆發物取扱者、傳染病關係の醫師、看護婦、器械操縱者などにして、職務の犧牲になる者は、毎日どの位多いか知れぬ。但だ斯る犧牲の經路は比較的單調で、波瀾に富まぬから、人口に膾炙することもなく、人生のアンノーン・ソルヂヤーとして、闇から闇に葬り去られるのであるが、よしんば其の犧牲の經路は、如何に呆氣ないにもせよ、それで以て犧牲の價値を無視することは出來ぬ。又、當事者が名も無き看護婦だから、名も無き職員だからと云つて、其の犧牲を安く見積ることも誤つて居る。

此種の犧牲者のうちで、就中、同情に堪えないのは、凶刃に殪るゝ巡査である。彼等の殆んど全部が、最後までベストを盡してゐるでは無いか。兇漢の爲めに致命傷を負はされても、猶賊を追跡し、或は賊に組ついて、第二擊を受けて死を早めて居るでは無いか。此精神は果して何處から來るかと云ふに、日頃上官から訓練されて居るところの職責上の觀念に基くのであつて、其の外の何等の利害の念から來るのでは無い。人民の安寧を保護する重任を双肩に荷ふと感じて居て、初めて意識的に果た無意識的に、かの英雄的行動を最後まで續けられるのである。

金のある者は金を出し、金の無い者は腕輻して、是等のアンノーン・ソルヂヤーに感謝するのが當然である。

○

威張る巡査と威張らぬ巡査――それが過渡時代の日本の官界の象徴である。随つて、巡査を別ちて二種となすと云ふ觀念が人民の頭にあるのも事實である。私は先年阿米利加合衆國の人民と警官との親和狀態を見て、日本も何時になつたら、こんな調子に行くかと思つたが、役人は威張るものときめて居た封建時代から、巡査に二種類ありと分類するようになつた現代までを長い目で見渡すと、矢張り時代は流轉する。一概に悲觀するには及ばないのである。

抑も我國に警察制度の起つた年代は、いつであるかと云ふに、貴賤は兎も角、官制としては、大寶令制定の時であらう。卽ち彈正臺が夫れで、今日の警察とは[illegible]に出入があるけれども、非違を彈劾逮捕すると云ふ大眼目のところは一致して居る。此外には同じく大寶令制定の八省のうちに刑部省があり、刑部省の中に囚獄司と云ふ役があつて、是が罪人を禁囚し、獄舍を掌るとあるから、大部分は今日の典獄、殘る小部分が警察官の仕事をしたものと思はれるけれど、先づ彈正臺が今日の司法省と警察署を兼ねたものと思へば好い。

彈正臺の上官を尹と稱し從四位上の雲客が之に任じ、後には多く親王が任ぜられ、或は大納言以上の月卿が兼任した。その下に大弼一人從四位下、小弼一人正五位下、大忠一人正六位上、少忠二人正六位下、大疏一人正七位上、少疏一人正八位上、その下に巡察彈正十人正七位下、史生（書記）六人、台掌二人、使部三十人、直丁二人が屬して居た。

彈正臺の職責は風俗を肅淸し、內外の非違を糺彈すとあつて、凡て朝臣のうち、太政大臣を除く以下の高官は、之を彈奏する權限を有し、六位以下は所司に移して推問せしむ。又彈正台の役人間に非違のある場合は、尹は弼以下が彈正し、其他は相互に彈正する。

十六[illegible]務に京職內外を巡察し、主として人民よりも、人民に對する官吏の不正[illegible]彈すとあることを見れば、前の[illegible]と[illegible]い役人は人皇四十代天武天皇の大寶年間から跡を絕たなかつたものと見ねばならない。

『頃しも秋は央の空、なかめがちなる御袖の、淚の露を拂はせ給ひ、宿直に侍ふ彈正大弼仲國を召され、如何に仲國、小督の行方を知りたるか』

と琵琶唄にある以上、彈正臺の役人は今日の宮內省の役人や皇宮警手の如く、宮中御警衞の任から宿直の役にも就き、併せて又小督局の蹤跡も知つて居なければならず、そして其間には板船權問題とかシーメンス事件とか云ふやうな官公吏の犯罪にも目を光らせて居ねばならず、時には又、式部省の官吏と共に、廷臣の衣冠禮儀をも糺さねばならなかつた。昔の警官も大抵で無かつたことがわかる。

○

それほどの彈正臺も嵯峨朝の前後に京都檢非違使なる官職が設けられてから、彈正臺の權能は大いに縮少し、賄賂の罪を糺す

外の所管事務は、悉く檢非違使廳に移つた。

檢非違使廳は略して使廳とも稱し、今日の司法警察であり、裁判所であり、是が設けられて以後は、從前の彈正臺、刑部省、衞府（門衞）などの職掌は皆合併されて、有名無實となつた。

使廳の長官は他の高官の兼職、即ち別當職であつたけれど、權限は今の警視總監の比では無く、又勢力は伴食大臣の比では無く、別當宣と稱する別當の公文書は勅宣に準じ、若し是に違ふ者は違勅罪を以て處刑されたのだから恐しい。

使廳は京都のみならず文德天皇以後、全國に設置された。そして鎌倉時代までは誰々が何處其處の檢非違使に任ぜられと云ふことが、吾妻鏡、源平盛衰記等に散見するが、賴朝が兵馬の權を握り、京都に守護職を置いて以來、大きな警察事務は守護、地頭の手に歸した。檢非違使は其當座、小ぬすとなどを捕へてお茶を濁して居たが、漸次影が薄くなつて遂に自滅した。

徳川時代の警察制度は、町奉行所の一部と、あとは武家方及び町方の自治制の中に在つた。大岡越前守の村井長庵召捕りなどに當てはめて話すと、わかり易いのだが、それでは一部分しか說明がつかぬから、やゝ乾燥であるが、抽象的に江戸町奉行所の組織全般を述べて見よう。

南町奉行所は數寄屋橋内に、北町奉行所は呉服橋内に、要するに目と鼻の間に在つた。兩奉行所とも、町奉行一人の下に與力二十五人、同心百四十人、都合百六十六人、兩所合計三百三十二人が所屬した。

與力、同心の役柄は、略ぼ今日の警察事務と一致して今日の言葉で云へば、保安、衞生、防疫、保健、交通、營業、防火、防水等に關する事項を網羅した。即ち吟味方は民事の審理、勸解、刑事の審札及び終結執行を掌り、市中取締掛りは市中の取締を掌り、赦帳方、撰要方は免囚調査、撰要類編纂及市民人別改（戸籍整理）を掌り、例繰方は判決例取調を掌り、用部屋手附は、奉行の手許に於て、用人が刑律を取調ぶる際、書記役を勤め、本所見廻り役は川向うの一區に關する事務を扱ひ、道路、河岸地建物、川中足代、橋普請其外の事を掌り、町名主の進退を決し、屬吏たる本所道役を監督し、鯨船を見張り、洪水の折には橋梁の保護、人命救助に任じ、養生所見廻り役は、小石川養生所（今の植物園）を取締り且つ金錢出納を掌り、牢屋見廻りは小傳馬上町の囚獄を取締りて、處刑其他の事を掌り、定橋掛りは官營橋梁の見廻りと普請を監督し、町會所掛りは、町會所に於ける積金、貸金、窮民救助、圍籾（白川樂翁公の制定せる備荒貯蓄の籾のこと）に關する事務を監督し、猿屋町會

風烈見廻り役は、浮浪徒前の木材の手段兵法を留めし、市中取締向見廻り役は、本所横川の古銅吹替事務を監督し、高積改め役は、市中薪炭其他高積制限違犯者を取締り、箱館會所取締掛りは、箱館奉行管轄地の物産貿易を監督し、硝石會所掛りは、硝石採集、彈藥製造に關する事務を掌り、町火消人足改め役は、出火の際、町火消の防火進退を指揮し、隱密廻りは、奉行に直屬して秘密探偵に從ひ、定廻りは、市中を巡廻して非違を戒め、犯罪搜査及び逮捕に任じ、臨時廻りは、主として突發の犯人逮捕に向ひ、人足寄場掛りは、石川島無宿罪人懲治場の事務を監督し、此の外に宿直當番あり、書記當番あり、蹲踞當番がある。蹲踞當番と云ふのは、白洲（法廷）の開かれし時、白洲に蹲踞する役目である。但し蟇のよふにたゞ蹲踞して居れば夫れで宜しいと云ふわけでは無かろう。一旦事有れば起ちあがる所に、無限の潜勢力と意義とを有し、閉廷の際

『立あーてー』

と囚人を大喝するなどは、お茶の子サイ〳〵であつたろう。

○

白洲蹲踞係りなど云ふ役目は今日の警察には無い。裁判所の廷丁だつて蹲踞などしては居ない。併し其の外の役目を見ると

責に任じて居り、今日の或る警察官の職務を扱ふて居るのである。或は内務省、或は司法省、或は市役所、或は大藏省の管下事務に食込んで居る。

時には又、市中諸色（物價）調掛り、御府内物價騰貴掛り、諸問屋組合再興掛り、外國掛り、開港掛り、御國益御仕法掛り、諸色潤澤掛り、諸色値下げ掛り、外國人居留地掛り、町兵掛り、下馬廻り、門前廻り、御用産御張掛り、定觸掛り、引締役、定中役、兩御組姓名掛りなどの臨時編成の下に、餘分に忙しい目を見せられた事もある。明治になつて清浦子爵の警保局長時代に、警察官は不眠不休の活動を心掛くべくと訓示されたが、彈正大弼仲國が、嵯峨野の奥に小督局を捜した以來、警官は不眠不休と相場がきまつて居る。

德川時代の與力、同心の活動は、捕り物の場面で片鱗を傳へて居る。芝居でも映畫でも彼等は、恰かも寄せては返す白浪の如く、一人の英雄に詰め寄つたり追ひ返されたりしながら、一人一人斬りまくられて、徒らに主役を引立てる役である。それは勇ましくも亦哀れな役、金のある者は遺族慰藉料を奮發し、金の無い者は脱帽なさい。

おまけに松平伊豆守が丸橋忠彌を召捕つたとか、大岡越前守が白木屋お駒を裁いたとか云ふ話は却つて面白く仕組まれて居

るが、與力某が丸橋の腕に喰いついたとか、同心某がお駒の膝下に蹴鞠したとか云ふ記錄は、見渡したところ一つも殘つて居ない。一將功成り萬骨枯ると謂ふも愚かや、アンノン・ソルヂヤーの恨みは盡きず二百八十年、かくて時代は流轉して、明治維新、王政復古の御代となり、與力、同心から警官への中繼ぎに邏卒時代なるものが出現する。

其の前に町方の自治制に就て少しく述べ度い。代官中の鬼才小宮山昌世が、幕府の官制を

「御當家の制は庄屋仕立てでござる」

と手輕に喝破したのは至言である。幕府の大官でも大老とか若年寄とか、勘定奉行とか名實共に村役人の延長であるが、町町の自治制は又それを反撥したもので、公私の間に截然たる區別無く、個人の連鎖が公共の網となり、責任も義務も知らん間に公私連帶となつて居るトリックの妙味は、學問上から云へば幾多の無理は有ろうけれど、人情上から云へば、有理らしい仕組である。

江戸の自治制は町奉行の支配下に樽氏、喜多村氏、奈良屋の三年寄が總町を自治し、町年寄の下に町名主がありて町內を自治し、町名主の下に五人組が數家の團體を自治した。町名主は自宅を町役場として玄關を許され、町年寄役所から町奉行所の布令を取次いで來た場合、直ちに之を自身番所に掲示し、又五人組の家主に傳へ、町民に周知せしむる事を初めとし、無頼漢の檢擧、檢束にも干與し、願書訴訟に奥印し、戸口調査を記錄し、治安警察や稅務の責に任じ、其外支配內一切の事に關係した。

自身番所と云ふのは、市中警戒の一機關で、今日の駐在所に似たものである。番所に三種あり、三代將軍の寛永初年、江戸に辻斬が流行したので（其の癖、將軍が率先して辻斬に出た形跡がある）同六年三月市內各所に番所を設けたのが濫觴で之を公儀辻番と稱した。是に倣つて大名旗本の辻番所が出來、町方の自身番所、木戸番所が出來たのである。

番所の警戒事項は、狼藉者、手負者若くは擧動不審の者を留置して、辻番支配人の指揮を仰ぐ事、喧嘩、辻斬を發見次第目付に申告する事、行路病者、泥醉者を留置介抱し、癒ゆれば放ち、一晝夜にして癒えざる者は支配に屆出づる事、荷船の川岸繫留期日を監視し、堀の中に塵芥を捨つる者を見張る事等であつた。

昔の交番たる番所の構造は、能く芝居の道具で見せてある、火の遠吠がして夜廻番婆の仕出しが無駄をしやべつて行つたあと、自身番の親爺が明日の天氣を占つて大欠伸を一つしたりする場面を見ると、如何にも不景氣だが、公儀番所となると、間

刀一回、[illegible]丈尺、[illegible]十一丈二尺、[illegible]二尺、[illegible]十八尺、[illegible]
五寸、関口同断の式台を設け、後方には軒の高サ一丈、長サ一[illegible]の下に家を差つたものだが、大事を江戸の[illegible]
習、[illegible]
任[illegible]

六人の番人が詰め切り突棒、さすまた、もぢり棒、袖搦、御用提灯等の刑具が掛け連ねてあり、不審者を誰何しても立留らぬ時は、もぢり棒を股間に投げて、足がらみにかけ、怯む所へつけ入つて、縄を打つような得意の場面もあるから、決して不景気なものでは無く、外見上は最近外苑の信濃町口に一週間で出来た交番よりも堂々たるものであつた。

ところが番人中往々不心得のものがあつて、巡邏の際の拾得物をそのまゝ着服したり、殺傷人を恐れて見のがしたり、番所内で博奕をしたり、拾子や病人を外の管轄へ引きずつて行つたり、行路病者を隠したり、夜は番所の戸を開放して不寝番を勤める掟であるにも拘はらず、宵から戸を鎖めて蒲團を被つて寝たりする者があるので、幕府は是等に對し、或は江戸拂、或は遠島、或は死罪、或は引廻しの上、死罪等に處して居る。警官の手が後ろへ廻る事も今に初まつた事では無く、昔からチョイ〳〵有つたのである。

次は消防の自治制である。是も番所と同様、幕府の定火消、諸侯の大名火消に亜いで、後年町火消が起り、ヒヤの入つた半

[illegible]

らしの喧嘩に身を入れたりするのは悪い心掛けだ。けれども是迄武家も町家も、大災豫防と消防とに就いては、責任を持ち、或る場合は持ち過ぎて悶着を惹起すほどであつた。

五人組のうちから犯罪人の出た場合、組合員は連坐して法の制裁を受けねばならなかつた。税金の滞納者があれば、残る組合員が負擔せねばならなかつた。時には組合員（店子）の代表者たる家主（大屋）又は、兩者の連絡者たる請人にまで科刑の飛沫が及ぶこともあるから、組合員は相互に戒めて道徳上、法律上の違犯者を出さぬよう警戒せずに居られない。此意味で彼等は相互に警察官であつた。

○

王政復古と共に、有栖川宮熾仁親王を大總督と仰ぐ鎮守府は、明治元年五月十九日を以て江戸に開かれて、軍政を布き、町奉行所を廢し、その建物をそのまゝ南北裁判所とし、町年寄を廢して公私の別を明らかにし、同七月十七日江戸を東京と改め、八月十七日東京府廳を開いた。

町奉行所と自治制とが解體を告げし後、江戸の警察事務は明治元年十二月五日を以て稍々有機的に開始された。市中を四十七區に別ち、一橋以下の三十藩に對して警衛巡邏を命じたのが夫れである。

同二年二月十三日、市中取締に任する諸藩に對し、觸頭ラを置き、同十一月十五日東京府に府兵掛りを設け、十二月府兵規則を頒ち、府下を六大區として、第一二三四大隊區を八小區に、第五大區を九小區に、第六大區を六小區に區分し、各大區に總長を置いた。

府兵なるものは勿論警官である。そして同時に軍人でもある。軍政下の警官、乃至憲兵よりも普通軍人に近くして、同時に又今日の巡査に近きものと思へばよからう。明治二年五月彈正臺を起し、三年廢したが、その間は府兵は彈正臺の指揮で動いた。毒婦夜あらしお絹が逮捕されたのは、第五大區の第何小區かの手で、其の屯營は、淺草觀音の傳法院に在つた。

明治四年六月十八日、各大區出張所を設け、九月十四日之を取締出張所と改稱した。取締と云ふ名は、府兵と云ふ名よりも、一歩今日の警官に接近したので、警官なる概念が、漸次軍人なる概念から分派する過程を示して居る。

同年十一月取締組大體法則を頒ち、各大區に取締所を設け、總長一名、差添役四名を置き、毎大區を十六小區とし、毎小區に屯營所を設け、組頭一人、小頭三人、及組子を置くこととした。組子は今の巡査、小頭は巡査部長、組頭は分署長の如き立場に類するけれど、權限は今日の夫れ等よりも遙かに微小であつたやうだ。

同五年正月各大區取締出張所を各大區役所と改稱し、三月二十九日組頭を廢して區長、權區長を置き、四月十三日東京府に邏卒總長、邏卒權總長、邏卒檢官、邏卒權檢官、區長、權區長を置き、取締組子のことを邏卒と改めた。

邏卒の風俗が明治初年の人民には如何に清新に映じたことだらう。邏卒を寫した錦繪があり邏卒を主にした芝居が書卸された。私などが子供の折まで其のような芝居が人氣を繋いで居た。かすかな記憶を辿れば、或る邏卒は、なんでも義侠心から同郷出身の小女を救つて其母親と共に扶養するうち、少女はわる者にかどわかされて横濱の遊廓に賣られ、西洋人や生糸貿易商などに愛されても、心中には昔の邏卒さんの親切を忘れ兼ねて居る。それから、ドウしたハズミであつたか、その品行方正な邏卒さんが、遊廓へ足踏みしてゆくりなく其の少女とめぐり合ひ、改めて戀仲になる。それが生糸商に知れて、邏卒さんは満座の中で嘲罵された上、足蹴にされて頭の中央で別けた長い

髪の毛が大いに乱れて、夫れと共に見物の心持ちも大いに乱れて麻が
の如くなり、私などは子供心にもその邏卒さんに雨の如き同情
を瞋き、金時のような顔をした生糸商の向うずねに咬ひついてやり度く思つたことを覚えて居る。

それから、その遊女と邏卒とのイキサツが、どんな纏権にからんで、どんな結末になつたものか、とんと忘れてしまつたが、そして遊女の方の顔も風俗も更に思出せないのであるが、不思議なことに邏卒の方の風俗と容貌とは今でもハツキリ覚えて居るところを見れば、並々ならぬ印象を受けたものに相違ない。

その邏卒が遊廓で皆に蹴られる時の着物は、大きな柄の紺飛白に、迚も幅の廣い白木綿の兵児帯を締め、白ガナキンのシヤツの手首や、胸元は釦でとめるようになつて居た。其等の服装の全體の調和が、極めてサツパリした明治初年の書生らしい感じを與へると共に、どうゆうわけか、大變學問のある人らしく私には思へた。

それからその邏卒の官服を着けた姿が又一段と引立つて見えた。その邏卒は細面テの中高な顔に白粉を真ツ白に塗り、太い一文字眉を引いて居たから、夫れ以來私の想像に上る邏卒なるものは、いつでも先代菊五郎のような好い男にしか現れない。

これは何か[illegible]
長い上服に金具附のバンドを締け、左の小脇に手棒を挟まれ
み、右の手に捕縄を下げて、キユツ／＼と痰を鳴しながら花道を出て來た姿は、錦絵などでも到底の服装であつたから、[illegible]ば親愛の念を高めた次第であつた。

夫れから今一つ、別の芝居で邏卒の出て來るのがあつた。それも芸題は忘れたが、役者は川上音次郎、青柳捨三郎などであつた。佐賀の亂を仕組んだ者で、司法卿江藤新平が段々追窮され、腹を切ろうか、血路を開いて再舉を計ろうかと或る百姓家で密議を凝らして居るところへ、官服に草鞋がけ、手棒の代りにサーベロ（サーベルの事）を釣つたり、背負つたりした數多の警官が忍び寄り、家の周圍を弥と取巻き、今で云へば分署長らしいのと、巡査部長らしいのと、二三人で屋内に踏み込み、分署長格の方がいきなり江藤新平の前に手を突いて

「先生、御心中お察し申上げます」

と感慨無量の體宜しくあつて、見物の人氣を浚つてしまつた時は、嗚呼邏卒も亦鬼に非ずと云ふ風に感謝の念を禁じなかつたことを記憶する。だん／＼よく聞いて見ると、その分署長格と覚しき壯漢（是は以前のような好男子では無かつた）は、江藤新平の家に玄關番をして、恩遇を蒙つたものだと云ふのであ

つた。是は河野敏鎌が大久保利通の命を享けて、舊師たる江藤を死刑に處した事實を、平易に飜案したものであらうけれども、何も知らぬ見物は迚も嬉しがつた。

○

右に述べた明治四年の改正で取締組子が邏卒になつた時の總員數は三千人であつた。此のうち一千人を鹿兒島藩の優良子弟から、殘る二千人を各府縣の勤王藩から徴集した。四年は廢藩置縣の斷行された年で、人心未だ全く安定せず、殺氣の下、劫盜、殺傷相踵ぎ、氣を負ふ青衿は巷に爛醉放歌し、而かも之を取締るべき組子は、府兵時代からの因襲で、却つて良民に害を爲し、帝京警保の道、一時絶望に陷るかと危ぶまれたが、新鋭三千の邏卒は邏卒總長川路利良の傘下に、軍隊的訓練を積み、日夜其の職に盡したので、帝都の秩序は徐々に恢復し、良民は初めて堵に安んずることが出來た。

明治警察の創立者であり、警官の父である川路利良は桐野利秋、川上操六と共に鹿兒島在吉野村の產、蛤御門の役に挺身長軍に斬込んで、劍道の達人藤原秀太郎を殪して、西鄕隆盛に知られ、四年四月西鄕が出京して參謀となるや、川路も徴されて東京府大屬に任ぜられ、權典事を經て典事に進んだ。

邏卒制が敷かるゝや川路は、在來の不良警官の一掃を以て、良民保護の最大急務と爲し、新募邏卒の訓練に全力を傾けた。明治五年五月彼は邏卒總長に任ぜられたが、後藤新平の司法卿となるに及び、同年八月警察事務を司法省に移管して、警保寮を置き、川路は警保助兼大警視を拜命した。翌九月西鄕隆盛の推薦で、官命を帶び歐洲に航し、先進諸國の警察制度を研究して翌六年九月歸朝し、警察改良の建白書を提出した。

其建白書を今日一讀するに、色々の意味で興味深く、且つ二三の卓見を含んで居る。頗る長文故、要點のみを掻いつまむ事にしよう。

一、西洋各國、首府の警保寮は直ちに内務省に屬し、府下の警保を管掌せり。首府以外の府縣は、其長官、警察權を兼有す。我國も之に倣はれ度し。

一、邏卒を巡査として四方に派出する時は、府下は脆劣なる番人のみとなり、强行暗殺等續出し、民心恟々たり、殊に番人は政府の義務なるに人民に經費の一部を負はすべき理無し。帝京は全國人民が輻湊して禍害を醸す所なるに、獨り府民をして警保の費を負はしむるの點又更に穩かならず。須らく民費の番人を廢し、官選の邏卒を以て網維せざるべからず。但し番人も急に廢せば苦情あるべければ、其内を精選し

二邏卒に編入し、自然消滅を期すべし。

一、諸外國の邏卒、必ず優良軍人より採擇す。身體強壮にして身長五尺以上を有し、胸間に勳章を帶ぶる者多し。歐洲各國、士民の別を設けず。故に兵士より選拔せざるを得ず。我國武士を廢し、敢て之を用ゐざるは愚と謂ふの外無し。

一、歐洲各國の邏卒、已むを得ざる場合は銃器を取りて兵卒に還元す。故に各國の警察に銃器の豫備あり。是れ一朝有事の際は警察の力を以て鎭壓し、漫りに兵を動かすを耻づるが故なり。譬へば地方に一揆築動生ぜんか、警保寮は人數を繰り出すの權能あるなり。

一、諸外國に於ては消防は警保の一要務たり。消防事務を警保寮に屬せしめよ。

一、番人を廢して民費を減じ、その費を移して道路、橋梁、水道を修めよ。

警察見學の復命書に、橋梁、水道を修めよなどは穿つて居るが、警察で消防事務を管轄せよとの意見は妥當であり、武士あがりの遊民を邏卒とせよは廢物利用の妙案であり、警察費を全部國家の負擔とせよと云ふ意見は、當時としては確かに新しい考であつた。若し夫れ帝京に於ける特種警察の必要を聞かされた明治六年頃の廟閣諸公は、空谷跫音を耳にするの感があつたであらう。

川路の此の建白は殆んど全部採用されて漸次に實現した。邏卒の名を後に巡査と改めたのも、川路の建白書に初めて現れた用語を襲用したのである。

明治七年一月十五日東京警視廳を創設して、官等を定め、次いで職制並びに事務章程を制定した。云ふまでもなく川路の建白の結果である。その時の職制は長官を警視長と呼び、其下に大少警視、大少警部があり、共に正と權とに別れて居た。府下を六大區に分ち、毎大區を十六小區に分ち、即ち六大區九十六小區とし、大區の官衙を警視出張所と云ひ、小區の官衙を邏卒屯所と稱し、小區のうちに又邏卒分配所を若干設けた。そして大區の官衙には少警視一人が出張して大區内の警察事務を總理し、大少警部以下若干の邏卒が是に屬して、執務を助けた。又屯所には大少警部のうち一人が詰めて、小區内の警察事務を執り、數名の邏卒が巡回査察の任務を行つた。

警視出張所はすべて舊各藩邸内に設けられ左の如き配置であつた。

大區	町名	藩邸名
第一	日本橋區坂本町	丹波綾部藩邸
第二	芝區愛宕町三丁目	田原本藩邸

第三　麹町區八丁目　　鳥羽藩邸
第四　本郷區弓町　　上田藩邸
第五　淺草區元鳥越町　　鴨方藩邸
第六　深川區八名川町　　矢部藩邸

屯所は區内樞要の地點又は寺院又は民屋に設けられた。尤も是は府兵時代から繼續せる場所であつた。

四月二十四日を以て川路利良は大警視に任じ、司法中檢事安藤則命、司法大警視田邊良顯、警保權助丁野遠影の四名は權大警視に任じ、司法少警視綿貫吉直、津川綱藏、渥見友成、林三成、檜垣直枝、警保權大屬江口高確は小警視に任じ、綿貫以下の六人を各大區出張所長とし、初めて東京警視廳を鍛冶橋内舊津山藩邸に設置した。

右のうち安藤則命は、廣澤參議暗殺事件に干與して有名な男であつた。安藤は後に川路の下で、藤田組贋札事件の檢擧で味噌を附けて益々有名になつた。藤田組贋札事件は相馬事件と同じく、事實の反對の方、即ち藤田傳三郎が井上馨と結託し、外國で僞造紙幣を作られ、日本で行使したものと一般世人に信ぜられて居るが、實際は根も葉も無い事だ。然るにも拘はらず、安藤は躍起となつて藤田を檢擧し、物にしようとして失敗したのである。

とは云へ私なども昨年六月の太陽臨時增刊に、大審院判事尾佐竹猛博士が、一件記錄を根據として此の疑獄の眞相を發表されたのを讀んで、初めて正確な智識を得た位である。それまでは川路の病死は事に依つたら長州閥の毒殺であるまいかと、御多分に洩れず心配して居た方である。藤田組贋札事件はそれほど川路にも關係が深いから後に詳しく說く事として、其前に廣澤參議暗殺事件と安藤權大警視との交渉を述べよう。

○

明治四年正月九日の夜、參議廣澤兵助は、麹町區富士見町二丁目二十九番地の自邸で、愛妾福井かねと枕を並べて居る所を何者にか暗殺され、かねの陳述が不徹底であつたのと、かねが家令の起田正一と私通して居た廉とで、此兩人が廣澤暗殺の嫌疑を蒙り、當時司法省警保寮の中檢事であつた安藤則命は、何とかして兩人の供述を取らんものと殘忍極まる拷問を反覆した。

それは我司法界の恩人たるボアソナードが來聽する一兩年前であり、清浦子などに依りて治罪法の草案が元老院へ提出される約十年前であり、而かして裁判はまだ自白裁判の時代、拷問が公然是認されてある時代であつた。

かねは姙娠中であつたが、拘留中に分娩し、七十五日經たぬ

うちに苛し、或は背の責道具で両脚一本からだに掛けられた。同年十二月、何度責めても白状せぬとて、海老責にして、からだに縄を掛け、尻を敲いて白状を促した。その縄の跡が公判の時まで腕に殘つて居たそうだ。

かねはやがて起田正一との關係を自白したから、正一は直ぐに逮捕され、是も苛酷な拷問を受けた。明治五年三月二十九日以來、四月十二日までの間に二十二三回、甚しきは晝夜三回づつ海老責と稱する拷問に掛けられ、悶絶すれば氣附藥を飲まされ、正氣になれば又拷問に掛けられた。

綱が弛めば綱を掛け直し、氣絶しそうになれば綱を解いて、その代り石問と稱する新手の拷問に掛けたり、海老責にしたりして、遂々白白させたのである。もとより苦しまぎれにした虚僞の自白であるから、事件が警保寮から司法省へ移されるや否や、正一は曩の自白を顚覆した。かくて明治八年七月十三日、正一もかねも無罪放免となつた。

併しそれまでの安藤則命の態度は、理詰めよりは感情的、感情的も寧ろ意氣づくで、初めから罪人を豫斷し、容疑者を憎んでかゝり容疑者と根くらべでもする心持で、是がもし眞犯人で無かつたとしたら、世間に合はす顏が無いと思ふ如き焦燥で正一に對したのである。是では容疑者は助からない。放尿者を捕へて、なぜ放尿すると云ふ事は何なりと雖も、右といふことは至りか、人を殺しもせぬ者を捕へて、なぜ白状せぬかと云つて打ちおかされたのでは、答へようも何も有りはしない。

併し其の頃は常人が白白さへすれば、之を立證すべき證據は無くとも、それで罪がきまつたのであるから、功を急ぐ警官は必死となつて容疑者を責めたのである。まさか吟味時代、天川屋儀兵衛や松前屋五郎兵衛が受けたような極端な拷問は許されなかつたろうが、石を抱かせたり或は氣付藥を與へて拷問を繼けたりしたことは、今から考へると隔世の感を禁じない。

隔世の感は禁じないが、事實に於ては今日の警察でも折々はやるそうである。豫審の折に、警察での供述を顚覆するもの〻大部分は、警察の拷問に堪えないで、心にも無い供述を致しましたと云つてゐる。乃至、白白すれば歸してやると云はれましたから、警察の思ふ壺にはまるように答へましたとか云つてゐる。して見ると「脊を断ち割り鉛の熱湯」とか「うつゝ攻め」とか云ふ方法こそ跡を絶つたにせよ、暴力を藉りて自白を强うる弊風が、警察のどこかに遺つて居るものと見ねばならない。

況して安藤の頃は、或る範圍の拷問が許されて居たのであるから、常人の提出せる報告書（尾佐竹博士の發表に據る）にも、拷問の度數や方法が明細に記載してある。それを讀むと、

痛ましくもあり、可笑しい氣もする。忠實に職務を執行したものとして、安藤が自慢でもして居るような調子に見えるから——。

○

川路大警視には拷問の話を聞かぬけれど、其の細述せる警察手眼を通じて察するに、頗る精悍な猛將であつたことがわかる。『警察官の心得』の劈頭に

『警察官は眠ることなく、安坐することなく、寒夜企足して怠らざるべし』

と戒しつけてある。形容にもせよ手きびしすぎる。私などは、駐在所巡査が俸給を割いて貧家の世話をしてさへ、榮養不良になりはせぬかと心配するのに、初めから不眠不休を課せられては、イザと云ふ場合役に立つだろうかと取越苦勞が先に立つ。

けれども御方便なもので、猛將の下に弱卒無しとかや。川路大警視の下に第六大區の小區を預かる大警部園田安賢（後の男爵）も頗る勇敢なタチで、勇敢のあまりに失敗した話がある。時は明治六年八月某日、園田が屯所に詰めて居ると本所相生町村上幾次郎方へ、深夜强盜が押入つたとの急訴があつたので、直ちに邏卒東京府士族松岡宣勝外二名を現場に派遣した。すると賊は拔刀で向つて來たので松岡邏卒は大いに危險を感じて退却した。

斯くと聞ける園田大警部は更に小頭の瀬戸山長祥等を派遣し、其の結果賊を捕へたか逃がしたか其處のところは判然しないが、瀬戸山は松岡の顏を見るや否や

『君は武士の家に生れ、拔刀を見て逃げるような弱蟲なら、一層死んでしまへ』

と怒鳴りつけた。是は瀬戸山一個の感想であるか、乃至斯うゆう命令であるか、松岡には解し兼ねたが、後に至り、實は園田大警部の旨を受けて、是丈けのことを怒鳴つたのだと判明した。そこで松岡は大に恥入り

『上官からの嚴命でございますれば、小官は潔く割腹してお目にかけます』

と即座に帶刀の鞘を拂つて鹽冶判官がした通りに切腹してしまつた。

いかに明治六年でも『そんな弱蟲は死んでしまへ』と云ふ上官の命令があるものでないから、園田安賢は忽ち川路大警視の取調を受け、九月三日附を以て官吏私罪贖罪例なるものに照し、贖罪金二十圓申付けられるの已なきに至つた。

其の宣告文が仲々ふるつて居るから後半部を書き拔く。

「第六大區ノ小區勤務大警部岡田安貴與鹿兒島縣士族其方儀（中略）……宣勝儀、賊ノ拔刀ヲ恐怖シ、其場ヲ立退タル所業、如何ニモ不體裁、職業ハ勿論士道を失ヒ（註、職責とか職務上の體面の意？其部廢職業を失つては大變）且邏卒一同ノ鼓舞モ相立タズト一圖ニ思ヒ込ミ、同僚中村正彦ノ諫諍（諫爭の事？）ヲモ顧ミズ、小頭瀬戸山長祥等ヘ申聞ケ說論致サセ、遂ニ宣勝割腹致ス次第ニ立至ル段、右科「威逼死」一律ニ依リ、徴役百日ノ處、官吏私罪贖罪例ニ照シ、贖罪金金二十圓申付ル。仍ホ宣勝埋葬金割合三圓五十錢五厘五毛納ムベシ。

明治六年九月三日　　警視廳大警視　川路利良

人一人殺して二十圓は安いが、埋葬料の三圓五十錢五厘五毛とは細かく刻んだものである。

玆に於て川路は邏卒を巡査と改稱して巡査徴罰令を創定し、併せて巡査賞與及び死傷扶助の道を開いた。府縣、組子時代の警官を改良して、今日の警察の基礎を据えた川路の辛勞は一通りのものでなかつた。彼は先づ持說の通りに番人を廢し、警察事務は一切巡査が是に當ることゝした。そしてその巡査も性質疎暴、懶惰、或は酒癖ある者、惡疾ある者は採用せぬ事にした。例の「巡査規則及心得」も此時出來た。

九月二十八日司法省警保寮から行政警察の事務を警視廳に移管した。是れ行政警察が特に警保寮の手に離した始めである。又此前後して死傷檢視の仕事も東京府から裁判所へ移管し、又東京新橋間に馬車鐵道が開けたので、始めて人道車道の區別を立て、從來の雜沓を禁じた。

次に消防事務を警保寮から移管し、警視廳消防章程を制定した。是も彼が洋行以來の主張であつた。江戸時代の定火消は維新後陸軍に編入され、町火消は東京府に附屬し、火事があれば必ず軍隊が出動したが、明治二年軍隊の火災防禦隊を廢し、三年九月東京府に消防局を設け、四年八月消防局を廢して警保寮に移管し、そして遂に警視廳に安定して今日に至つたのである。

明治六年は征韓論が沸騰し、西郷隆盛が參議を辭して鹿兒島に去つた年で、陰陽西郷の推輓を蒙つて來た川路も、西郷と進退を共にするものと目ざされたが、（此の年、山本權兵衛、東郷平八郎、伊集院五郎等は、西郷の後を追ひて歸郷し、西郷の說諭を受けて、兵學校に復校した）彼は砂上偶語には耳を籍さず、營々として搖籃時代の我警察を保育した。

翌七年、喰違橋に於ける岩倉具視の遭難に處する警視廳の處置が朝野の信用を高めたので、彼は此機をのがさず、警視廳巡査の增員を策し、邏卒時代以來三千人であつた定員を一躍六千

人にした。

警視廳の巡査を二倍にしたことは時世の力であるとは謂へ、又確かに川路の手柄で、此點は當人も終生得意であつたようだ。

○

巡査は私行の際と雖も平服を着ることを禁じ、朝から晩まで官服を着け、錢湯へ行くにも、細君に頼まれて秋刀魚（サンマ）の干物を買ひに行くにも、官服を着けて警視廳巡査たるの威嚴を有せしめたのも、從來巡査に交付して置いた木札印鑑の代りに「巡査の手帳」を渡し、一等巡査の手棒を廢して帶劍せしめたのも、職務の餘暇には講師の將校に就いて兵術と操銃法を學ばしめたのも、門戶に巡査若くは警部と署名した名札を揭げさせる事にしたのも、敬禮の仕方を制定したのも、夫れから人民の希望で、費用自辨の巡査、即ち請願巡査を許すことにしたのも、皆此の前後である。

當時の警官禮式に從へば、途中鳳輦に對する時は、直立して脫帽し、稍上體を前に傾けて最敬の意を表すること、上官に對しては、手棒を左脇に挾み、右手で脫帽すること等であつた。

一等巡査帶劍の儀は、川路の宿論で度々內務省に陳請せし結果、辛うじて允許を得たものであるが、是と同時に一等巡査に訓令して

『强賊逮捕の危險に臨むも、已むを得ざるに非れば拔劍することを得ず』

と戒めた。已むを得ざるか得るかの區別は今日でも實にデリケートな問題で、原敬が內務大臣の時代に、國民大會を警戒した巡査等は（原內相の釋明に據れば）サーベルの鞘で人民を斬つたほどだから、況して是を無暗に拔かれてはあぶなくて仕樣がない。と云つて一髮の機を失すれば此間中のように、兇刃の犧牲にならなければならない。一般の場合の正當防衛と共に、是はどこまで行つてもデリケートな問題であつて、一層巡査の帶劍を廢止すべしとの論もあるようだが、劍にしろ拳銃にしろ何か知ら武器は必要だから、只だ體裁論や面目論だけで片づけるのは空想である。

その頃又警官の自守規則と云ふもいが制定されて、警官は公私言行に關し、コチ〳〵な盟約を立てさせられた。曰く、酒は飮みません。曰く借金は致しません。曰く女には戯れません。曰く合宿所に於て高聲を發しません。放歌致しません。不體裁の所行を致しません。等々。

『規則は一の束縛であり、之を守る守らぬは自分の了見次第で

た無いか。自守規則と云ふ名目をかざして、手段であり、罪悪であり、そして卑怯である。巡査だつて木石では無いぞ。電信柱に花が咲いて巡査が生れたわけでは無いのだぞ。こんな窮屈なところに逼迫しなくとも、廣い世界に太陽が照つて居らあ』

と斯う云つて袂を列ねて轉職した才人も澤山あつた。それかあらぬか、後には此規則は稍や緩和されて、

『飲酒は、藥餌及親戚朋友の慶賀等、已むを得ざる時の外堅く之を禁ず。』

と又已むを得ざるが出た。併し已むを得ざるが出ればモウ締めたもの、禁酒後の米國の如く、醫者の處方さへ貰へば毎日飲んで居られる。その藥瓶にはワン、アワー、ワン、グラスと制限してあつて、グラスの大小をきめて無いのだから、制限が制限にならない。

後の警視總監三島通庸以下、最近の某署長に至るまでが、部下に鱈腹飲ませて置いて、群衆に向つてソレと解放したのも、萬已むを得ざるに出でたものだろう。

自守規則は公平に觀て、些と藥が利きすぎたようであつた。カイゼル時代の伯林を禁止の都と仇名した筆法で謂へば、警察は禁止の役所、警官は禁止の役人であるところへ、非番の時も[illegible]くなくなつた、[illegible]すると、女も見ると、[illegible]たな、[illegible]給が足りなくとも[illegible]するなと、[illegible]では、これも人の子、電信柱から生れたので無い限り、巡査だつて變化せずに居られない。今日ですら巡査に[illegible]ところは變化の不足に乗じて、人間味の欠乏であるものを、況して猛將川路の治下に於ける巡査を鋼が上にも、自守規則で責めつけたのは、可愛相であつた。

權少警視津川顯蔵なるもの、どこかで酒を飲み、巡査合宿所へ酔樂の藝妓を連れ込み、淫行に耽り……とあるから、自守規則などは遙かに超越して此規則を自守しなかつたものらしい。此のことが川路大警視の耳に入つたからたまらない。直ちに諭示免官となつたなどの挿話もある。

其の頃どうゆうものか巡査と兵隊と仲がわるかつた。別に是と云ふ原因も無くて仲がわるいのだから、譬へて見れば犬と猿。中學生と師範生のようなものであつたろう。内には淫行警視あり。外には喧嘩あり。内憂外患交々至るは大袈裟だが。明治八年四月四日。上野の花見に集つた近衛兵と。巡査との一大活劇などは。人民もほとく持てあまし、警察側でも軍隊側でも持てあました。双方に各分々々の理があつて。喧嘩兩成敗の外無いが。巡査等の云ひぶんでは。鎮臺兵がわさと巡査の面前

で、小便を垂れたり、櫻の枝を折つたり、通行婦人にからかつたりするから、巡査等は職責上捨て置けず、ナゼ小便をするデスか。ナゼ公園の樹木を損傷するデスか。ナゼ通行の婦人に妨害するデスかと咎めたら、兵隊は、我々は上官の支配を受ける者である。貴樣等の干渉は受けんと云つて、巡査の制止に從はない――そこまでは好いが、それから先きがいけない、已むを得ず大喧嘩を致しましたと云ふのである。已むを得るも得ないも無い。昔の宗匠は、何事ぞ花見る人の長刀、とすら歎じたのに、巡査ともあり兵隊ともあろうものが、人民の目の前で喧嘩をして見せろと自主規則の何處に書いてある？

警察側は併し十中八九兵隊がわるいと信じて居るので、今後上野の警備はお斷りと内務省に申出た。大久保内務卿は事態容易ならずと陸軍省へ捻ぢ込み、その結果、山縣陸軍卿の名に於て、四月五日以降、鎭臺兵の遊歩を禁ず。但し近衛兵及び教導團のみ之を許し、士官をして部下群衆の地を巡察せしむと示達した。そして大久保内務卿からは、川路に對し從來通り上野を警戒すべく命じ、此悶著は警視廳の勝となつた。



ノウトルダムの妖怪

谷譲次

A Happy New Year

いまの歐羅巴は、北緯五十度を限界に地理的にも人文的にも二つの色彩にわかれてゐる。五十度以北には「重い人々」の「硬い」生活があり、以南には「輕い羅典」の躁狂的な「軟い」文明がある。歩いてみると、じつさい空のいろ、人の顏さへ違ふくらゐだ。だからこの、全然類目(カテゴリイ)を異にする硬軟兩種の社會相を手がけるにさいして、そこにおのづから北緯五十度を境界に、其の態度その扱ひ方に裏とおもてのやうなはつきりした變化がなければならないことは、言ふまでもあるまい。

したがつて「新世界巡禮」をものするに當り、私ははじめからこの「五十度」をもつて前篇後篇のふたつに別けるつもりでゐた。北の重さ・暗さ・硬さに對しては、私といへども多少「紳士的旅客」たる必要が

あつたのだ。私は昨年中、つとめて「私と彼女」を離れずに、飽くまでも「白い洋襟をした黄色い紳士」としてつねに民族的角度に立ち、右手は紳士的に彼女の腕に藉し、左手では、ともすると逃げ出さうとする私の分身――分身のまた分身――近代的無宿者(アウトキャスト) Mr. George Tany をしつかと押さへて、前回まで五十度以北の國々を遍歴して來た。すなはち、踊る地平線・テムズに聽く・黄と白の群像・虹を渡る日・白夜幻想曲、これら五つの「紳士的に忠實な報告」となつたゆゑんである。そして、この前篇の終つたいま、これによつて私は、「五十度以北」を寫し得て成功だつたと信じて、幸福だ。

が、最初からの意企(インテンション)だつたとは言へ、私としては、前篇とともにここに一つの Painstaking な仕事が濟んだわけで、正直、私はのうのうしてゐる。

これから――この巴里から、私は「五十度以南」の社會探險に踏み込むのだ。

五十度で、私はひとつでんぐり返りを打つ。

同時に「分身」ジョウヂ・タニイに彼の欲するまゝの完全な遊離を許さう。

さうするとかれジョウヂは、桑港の波止場人足のやうな恐しい呪語(スウェア)を殘して、放れ駒みたいに暗い横丁へすつ飛んで行つた。爾來杳として消息を聞かない。

本稿「ノウトルダムの妖怪」以下後篇の全部は、太陽と果實と女性の「五十度以南」における A lost soul ジョウヂ・タニイ氏の生活記錄だ。彼の行動についていさゝかも關知するところのない私は、また何らの責任をも負ひ得ない。文中「私」とあるのは、嚴確にジョウヂ自身の一人稱である。

ただ一言、飄然と去るに臨んでジョウヂからことづけがある。それを傳へておこう。

A HAPPY NEW YEAR!

1

『馬耳塞からでも逃げて來たかね?』

『はあ。マルセイユから逃げてきました。』

『船は辛いだらうな。なに丸かね?』

『日本船ぢやありません。英吉利です。』

『英船か。食ひものが非道(ひど)えからね。』

『食ひ物がひでえです。』

『しかしお前、そんなことを言つて巴里へ潜り込んで何うす

るナ・領事館へ泣きついて、移民送還ででも歸るさ。こいつあ[illegible]が利かねえた。』

『そいつも氣がきかないです。何とかして巴里で一旗上げたいと思ふんですが――故里(くに)にあおふくろもゐますし――。』

『どつかね？　國は。』

『鹿兒島です。』

『おれあ下谷だ。もつとも子供の時に出たきり歸らねえんだが――しんさいはひどかつたらうなあ！』

『震災はひどかつたです。わたしも知らないんですが――。』

『AH！OUI！新聞で見たよ。』

いやに星のちかちかするPARISの夜、聖(サン)ミシエル街の酒場、大入繁盛のLA・TOTOの一卓で、數十年來この巴里の「不鮮明な偶(オブスキュア・コウナア)」に巣をくつてゐる大親分、日本老人アンリ・アラキと、親分のいはゆる「脱走いぎりす船員」たるジョウヂ・タニイとが、かうして先刻からボルドオ赤(ルウジ)――一九二六年釀造――の半壜(デミ)をなかにすつかり饒舌りこんでゐるのだ。

何からどう話しを持つて行つていゝか――ま、とにかく、いやに星がちかちかしてタキシの咆哮する晩だつたが、カラアを拒絶して一ばん汚ない古服を常用した私――ジョウヂ・タニイ――が、多分の冒險意識をもつて微宵巴里の裏町から裏まちをうぶつくつもりで、[illegible]タキシイ・警官に追はれた連中には[illegible]れて真夜中の二時ごろ、このサ・ミシエル――サン・ミシエルなんだが巴里訛りは入れ物へ抜けるためほんとはかうしか聞こえない――の「ラ・トト」へ紛れ込んで、國籍不明の「巴里の影」の一つになりすました氣で大いに無賴な自己陶醉にひたつてゐる最中、先方にしてみれば何もここを狙つたわけぢやあるまいが、まつたく狙撃されたやうに飛び上つたほど――つまり私はびつくりしたんだが、いきなりしやがれ聲の日本言葉(ジアポネ)が私の耳を打つたのである。

『やあ(アロウ)！　一人かね？』

といふのだ。斷はつておくが、この場合、何も特にその質問者が當方における同伴――男女いづれを問はず――の有無に關して興味を感じてるわけではなく、第一、ひとりか二人か見れあ直ぐ判るんだし、これは、言はゞたゞ、おや！　こいつあ何國(どこ)の人間だらう？　お國者かな？　一つ探りを入れてやれ、と言つたくらゐの外交的言辭に過ぎないのだ。これでむつつり默り込んでゐると、何でえ、支那(シノア)か、といふことになつて、鑑別の目的は完全に達せられる。じつさい頭から「お前は日本人だらう？」では放浪紳士に對して露骨(ルウド)に失するから、そこでこの挨拶なやうな挨拶でないやうな、ばかに親密な質疑の形式が何時の

世から發見されたもので、これは私たち世界無宿の、にっぽん人間における一つの「仁儀」である。つまり「港のわたり」なんだが、そんなことをしなくても日本人には日本人は一眼で判りさうなもんだと思ふ人があるかも知れないけれど、何うしてどうして一歩日本國を出てみると、早い話が、支那人だの馬來だのハワイアンだの印度だの、西班牙人だの伊太公だの91——〇十一=二〇で猶太——だのと「其他多勢」いろいろと紛らはしいやつが出沒してゐるから、何事も必要は發明のおっかさんなりで、ちよいと石を投げる心もちでこの「やあ！　一人かね？」をやる次第で、これによつて日本人といふ事も確定出來れば、また、忽ちこのとほり十年の知己のごとく、一つ卓子でこの場合ではボルドオ赤——牛塁。一九二八年製——をSIPしやうてんだから。これは仲なか何うして地球的に荒っぽい意氣さの漲るじんぎだと言はなければならない。

事實、馬耳塞でもリスボンでもハンブルグでもリヴアプウルでも、未知の日本人——そして日本帝國外務大臣發行の旅券を持たない人々——のあひだの最初の會話は、隧道でも酒場でも波止場でも、必ずかうして開始されることにきまつてる。

『やあ！　一人かね？』

これに對する應答も約束により一定してゐる。

『やあ！　一人かね？』

とおもむろに同じ文句を返してやるのだ。だからA「やあ！　一人かね？」B「やあ！　一人かね？」とかう一見まことに無邪氣な、昨夜の惡友が今朝また街線で顏を合はしたやうな平凡な一街上風景の觀を呈するんだが、こいつをいき「市民のことば」に翻譯してみると、A「やい！　手前はにっぽんだらう？　白狀しろ！」であり、Bは「日本人だが何うした。大きにお世話だ！」となる。

何處から傍道へ外れたのか忘れちまつたから、再び「夜の酒場、暗いLA・TOTO」へ引つ返して出直すとして——で、つまりその、そこで私が精々ぱり・ごろめかして獨りで凄がつてゐるところへ、突然この「港のわたり」をつけたやつがあるんだが、そんなに心得えてゐるなら何もびつくりすることはないぢやないかと言ふだらうけれど、私をどきんとさせたのは、其の場所——誰だつてこの深夜の巴里サミシエルの「隠れたるラ・トト」でよもや日本語をぶつけられやうとは思ふまい——と、何よりもその聲の主なる一人物の風俗相貌とであつた。

と言つたところで、べつに異樣ないでたちをしてゐたわけぢやない。異樣どころか、ぢろりと出來るだけ陰慘な一瞥を呉れての「やあ！」の出所を究明した私の眼に朦朧と——紫煙を

とほして——うつつたのは、何のへんてつもない、薄よごれた洋装の日本のお爺さんだつたが、それがにこにこしながら自分の酒杯（グラス）ひとつ持つて私の食卓へ移つてきたのを見ると、私だつて相當苦勞を積んでるから三下（ベム）か親分（ボス）か位ゐは一眼で識別出來る。その、先生（シンサン）ばくちの貸元みたいに小柄なくせにでつぷり肥つた巴里無宿のアンリ・アラキ老——これは間もなく名乘りを聞いてわかつたんだが——の身邊には、「七つの海」の潮の香がすつかり染みこんで、酸（サワ）も甘味（スウイキト）も舐めつくしたと言つたやうな、一種の當りのいゝ人なつこさが溢れ、そしてその黒い細い眼の底に、若（わけ）えの、ついぞ見ねえ面だが、近頃めりけんからでも渡んなすつたかね？　といひたげな、いかさま大胆沈着・傍若無人の不敵な空氣が、世慣れたこなしとゝもにうづそりと漂つてゐるんだから、瞬間にして、私は思つた。はゝあ！　これは只の旅人（たびにん）ではない。まさしく何のなにがしといふれつきとした名のある大親分であらう、と。

だから、彼のあひさつに對しても咄嗟に私は幾分の敬語を加味して答へたくらゐである。

「やあ（アロウ）！　一人かね？」

「はッ。お一人ですかッ」

かうして私の前にどつかと——じつさいどつかといふ親分的態度をもつて——腰を下ろしたアンリ・アラキ氏に、何ういふものか最初から私を「馬耳塞から密航してきた下級船員」に決めてかゝつてゐたのだ。何時だつて親分にさからふことは危險を意味するし、ことにこの際、べつにNON！　なんかとわざわざ反對の意思を表明して立場をあきらかにする必要もないから、長い物には卷かれろで、そのまゝおとなしく「脱走船員——海の狼」に扮し切つた私は、さてそこで、ちよいとから船乘りらしく肩を揺すつてぽけつとから紙（パピエ）を取り出し、そこは兼ねての習練で煙草を卷き出したんだが、この私の手の中にさしづめ錨に人魚でもあしらつた刺靑でもあると大いに效果的で私も巾がきくんだけれど、無いものはどうも仕方がないとは言へ、私はすくなからず氣が引けてゐる。が、そのあひだも私と親分は「故國にほんのこと、」私の「今後の身の振り方」等々につき非常にしんみりと語らひをかわしてゐるのだ。

「この頃の若い人は意氣地がねえな。仕様がねえぢやあねえか。石炭焚ぐれえ辛棒が出來なくちやあ——。」

「何うも濟みません。」

「はゝはゝ。濟みませんぢやないぜ。が、まあ、若いうちは何をしてもいゝさ。困つてるならうちへ來なさい。何とかするし、用もないことはないから——」

愉快になつたアンリ親分は、心から「この頃の若い人を持てあましてるやうに、舌打ちのかはりにぐいと私のMEDOC―ボルドオ赤(ルウジ)――をあふりつけてペツと唾をした。

さうすると、巴里の午前二時はほかの町の午後二時だ。LA・TOTOの暗い電燈に佛蘭西語の發音とベネデクテインの香が絡み「工業の騎士(ナイツ・オブ・インダストリイ)」勞働者たちの赫ら顏をGauloisesの煙りがぼやかし、誰かの吹く普佛戰爭當時の軍歌の口笛に客の足踏みが一せいに揃ひ、戸外には、ちかちかする星とタキシの喇叭と、通行の女と女の脚と、脚の曲線とその媚態と――AH! OUI! 深夜の「巴里」はいま聖ミシエルの舗道に流れてゐる。

2

巴里!

ちらと太股を見せて片眼をつぶつてゐる巴里!

Ah, qu'il est beau, mon village,
mon Paris, mon Paris!

しぶ皮の剝けた巴里の女がかう唄ふ。人を呼ぶ「巴里の聲」だ。これに魅されて、一つ出かけて行つて巴里と世間話しでもしてくるかな――ロメオ&ジユリエツト――といふわけで、世界中の「幻影を追ふ人々のむれ」が入りかはり立ち代り巴里をさして殺倒してくる。

EH・BIEN!

四六時中談笑してゐる淫教のメツカ。

限りない狂想と快樂(けらく)の獵場。

夜とともに眼ざめる萬燈の巷。

眠らずに夢みる近代高速度の安夢。

弗(ドル)と磅(ポンド)と圓(エン)と馬克(マルク)と常識と德律を棄てるための美しい古沼。

曰く。あらゆる不可能を現實化して見せる地上の蜃氣樓。

曰く。すでに天へ屆いてゐる現代バベルの架空塔。

また曰く。世紀長夜の宴を一手に引き受けて疲れない公休(ハリデイ)市(タウン)。

詩情と俗曲と秋波と踊りと酒と並木と女の足との統一ある大急湍――OH! PARIS!

土耳古人にもせるびや人にも諸威人にも波蘭人にも、ぶらじりあんにもタヒチ人にも、そして日本人にも第二の故郷である異國者の自由港。

誰でもの巴里。

だから「私の巴里」――もん・ぱり!

みんなが自分の有(もの)として獨占し、したがつて何人にも屬して

ゐたい地球人の交易場。

やつぱり「私の巴里」――もん・ぱり！

英吉利人には Paris, England であり、おめりか人にとつては Paris, U.S.A であり、ふらんす人は未だに Paris, France の氣でゐるが、ほんとは疾うの昔に Paris, Bohemia になつてる「私の巴里」――もん・ぱり！

何といふ惡戯的な蠱惑と手練手管の小妖婦が、この萬人の權利する「私の巴里」であらう！

流行型の胴のしなやかな若い女が、流行型の大きな帽子箱を抱へて、流行型の自動車へ乗るべく今や片足かけてゐる細い線描の漫畫――これが「巴里」だ。何故なら、彼女の長い睫毛と濃い口紅は必ず招待的にほゝゑんでゐるだらうし、すんなりと上げた脚は、失禮な機會の風におほられた洋袴――多くの場合それは單にスカアトの名殘りに過ぎないが――の下から、きまつて靴下の頭と太腿の一部を覗かせてゐるだらうし、そして花輪のやうな其の靴下留めには、例外なく荷札みたいな一片の紙が附いてるだらうから――「あなたへ！」と優にやさしく書かれて。

「影と光りとエッフエルと大散步街とマロニエの落葉と男女の冒險者とヴエルレイヌの雨とを載せて、ふるく新しい小意氣な惡魔―巴里」は、セエヌを帶に結んで臥つてゐる――およそモンマルトルの赤い風車のやうに。

それと一しよに人の感覺もまはる――醉つた中樞神經をなぶに。

みんながみんな「自分の巴里」を持つてゐるからだ。

笑つてゐる巴里。

唄つてゐる巴里。

ちらと太股を見せて片眼をつぶつてゐる巴里。

EH・BIEN！

MON・PARIS！

――ところで、何時までもひとりで騒いでゐたんぢやあ話しが進まないから、いゝ加減こゝらで切り上げて本筋へかゝらう。

さて、これは私――ジョウヂ・タニイ――が、幸か不幸か一時ノウトルダムの妖怪になつた・ＪＯの物語である。

なんかと斯うひとつどかんとおどかしておいて、その君があつと驚いてる隙に乗じてこの事實奇談を運んで行かうといふ肚なんだが、こゝに困つたことが出來たといふのは、どうも「巴里――日本」とかう萬里を隔てゝゐるんぢやあ何かにつけて不便で仕樣がない。で、いろいろと手離せない御用もおありだら

うけれど、そこは私に免じて、一つ思ひ切つて君にも巴里へ來て貰ふことにする。

嫌だなんて言つたつてもう駄目だ。はなしは早い。君の汽車はいま巴里へ滑り込まうとしてゐる――。

僕が停車場まで迎へに出る。

出來ることなら初夏、もしくは秋の夕ぐれがいゝ。長い黒烟の旅を終へて北から南から西から東から巴里へ入市し給へ。

はゝあ！　君にとつてそれは「暫く容けてゐたふるさと」へ歸るこゝろもちだ。この、灯のつき初めた巴里の雜沓へ、北停車場(ガル・ドュ・ノゥ)なり聖(サン)ラザアルなりから吐き出される瞬間の處女のやうな君のときめき、それほど潑溂たる愉悅はほかにあり得まい。何時來ても同じ巴里が君の眼前に色濃く展開してゐる。だから、鞄を提げて一歩改札口を踏み出るが早いか、燈火とタキシと女の眼とキャフエの椅子と、巴里的なすべてのものがうわあつと喚聲を上げて完全に君を攫んでしまふ。同時に君は、忻然として君じしんの意思・主觀・個性の全部をポケットの奥ふかく仕舞ひこむだらう。かうして君は巴里の洗禮を受ける。するともう君は巴里人(パリジャン)といふ一個の新奇な生物に自然化してゐるのだ。君ばかりぢやない。土耳古人もせるびや人も諸威人も波蘭人もブラジリヤンも亞米利加人も――。

笑つてゐる巴里。

唄つてゐる巴里。

ちらと洋袴(スカアト)をまくつて片眼をつぶつてゐる巴里。

君！　君なら何うする？

先づホテルへ。BON！

そら、タキシだ。手を上げる。

『キャトルヴァンデズヌウフ・アヴエヌウ・ドユ・シャンゼリゼエ――セツサ！』

君の口から生意氣な一本調子が自然にすべり出る。はゝあ！　君はまだ飲まない葡萄酒に醉つてゐるのだ！

ホテルへ荷を下ろす。が、夜とゝもにいま生き出したばかりの巴里が、君を包圍して光つてる、笑つてゐる、唄つてる――ちよいと太股を見せてゐる。

さ、第一に、君はどうする？

グラン・ブゥルヴァルへ出かけて歩道の張出し(タレス)で aperitif でも啜るか。BON！

ジョウヂのやうに洋襟(カラア)をはづし、一ばんきたない服を着て聖ミシエルか Les Halles あたりの酒場から酒場を一晩うろついてみるか。これもBON！

それとも些さかの惡心をもつて路上に「鶴」――辻君のこ

と。たぶん立つて待つてる姿が似てるからだらう……でもぶらおふか。または例の「女の見世物」でも漁つて歩くか。同じく

BON!

と、さう何でもかんでも善哉(ボン)ぢやあ案内役の僕が困るが、いま「女の見世物」つてのが出て來たやうだが、じつは、話しはこの「女の見世物」と大いに關係があるんで——と言つても、僕がそんなところを君を引きまはすわけぢやないから安心し給へ。それどころか、僕は僕で、ゆうべサミシエルのLA・TOTOでアンリ親分から言ひつかつた大事な要があるんだ。

とにかく、おもてへ出やう。

巴里の夜は人の眼を wild にする。君ばかりぢやない。土耳古人もセルビヤ人も諾威人も波蘭人も、ぶらじりあんもタヒチ人も「紳士である」いぎりす人も、「あんまり紳士でない」亞米利加人も——。

私の仕事の受持ちは、この英吉利紳士とあめりかのお金持ちなんだが、ぢやあ一たい何んな仕事かと言ふと——」待つた！

今そいつを明かしちまつちやあ第一親分に濟まねえし、それより話しにやまつてものがなくなる。だから、こゝまで來たが最後、嫌でもおしまひまで讀むことだ。

3

ブルヴアル・キヤプシンからマデレイヌ、RIVOLIから宮殿廣場(プラス・ドユ・パレ・ロワヤアル)、オスマンからプラス・ドユ・ラ・コンコルド、シヤンゼリゼエから星(エトワアル)、そこの凱旋門(アルク・ドユ・トリオンフ)から森(ボア)ドユ・ブウロウニユの大街——とから並べ立てると、外國人——ふらんす人以外——の多くうかうかうろしてゐる巴里眼抜きの大通りはたいがい網羅しつくしたやうなものだが、これが簡單なやうで、いざ實地に足で歩いてみるとなかなかさうでない。先づ、リヴオリの「屋根のある歩道」を出はづれてコンコルドへさしかゝると、縱横無盡無秩序滅茶苦茶雷光石火間一髪と言つたぐあひに、どれもこれも家族の臨床へ急ぐやうに、眼の色を變へ、息を切らした自動車の奔流が前後左右から突進し、驀出し、急轉し、新巴里名所「親不知子不知」、もつとも交通巡査だつて根氣よく搜索するより一人ふたりそこらに居るにはゐるんだが、はじめからすつかり降參して、たゞ一番安全地帶に立つて帳面片手に樂しく鉛筆を舐めるきりだ。何をしてるのかといふと、今かいまかと自動車の衝突するのを待つて、事故が起り次第、その狀況・顛末・縱者の姓名——なるべく本名——生年月日・歐洲戰爭に出陣したりや否や——ついでだが、巴里ではこの、大戰に參加したかし

なかつたかによつて個人の待遇に大變な差別が生ずる。これも、負傷でもしたんだと一さういゝ。傷が大きければ大きいほど大きな顔が出來るやうだ。だから、梯子段から墜落して膝でも折つたやつが杖に縋つて町を歩いてゐたりすると、あれあヴエルダンの勇士だらう。道理で勇敢な顔をしてるなんかと行人のさゝやきと尊敬の眼が集まる。じつさい巴里における廢兵の社會的權力と來たら凄まじいもので、地下鐵（メトロ）には特別の席があるし、廢兵が手を出したら煙草でも時計でも衣服でも全財産を即座に呈供して、おまけにこつちから「多謝（メルシ・ボクウ）」と言はなくちやならないし、飾窓を叩き割つて犬を蹴つて、ついでに巡査も蹴つて、これから大道にぐつすり寢込んでも、つまり如何なる活躍も廢兵なら一向差しつかへないことになつてゐる。廢兵でさへかうだから、これが戰死者となると實に大した勢ひで、巴里の街を歐洲戰爭で死んだ人がぶらぶら散歩でもしてやうもんなら―まあ、止さう。

どうもわきへ外れて困る。一たい何からこの廢兵問題が勃發したかといふと、地下鐵の件でもなし、梯子段でもなし、さうさう、プラス・ドユ・ラ・コンコルドの交通巡査のことだつたやうに憶えてゐるが、そしてその交通巡査は、二台の自動車がぶつかるや否、素早く「現場」へ駈けつけて「詳細の報告」をしたゝめやうと言ふんで、手帖と鉛筆を斜（しや）に構へて安全第一の場處に直立してるばかりで、何らGO・STOPの實用にはならないから、「歩く馬鹿」の身になつてみると一通りや二通りの苦勞ぢやないといふ一事を強調したかつたまでのことで、私なんか、これ位ゐなら「馬耳塞でいぎりすの石炭船から脱船」しなけりや宜かつたと思つたほどだ。が、今になつてそんなことを言つたつてはじまらない。巡査だつて何もぼんぼんやり立つてるんぢやなくて、白塗りの棍棒を振り廻しながら盛んに無辜の歩行者を白眼みつけたり、その餘暇に、前を通る自動車にとても忙しさうに矢鱈に挨拶してる。

朝なら「お早う（ボンジュウル）」。

晩なら「今晩は（ボンスワ）」と。

ばかに交通巡査を眼の仇敵にしてるやうだが、全くこんなふうなんだから、自動車には何時だつて轢かれるほうが惡いんで、そしてこのプラス・ドユ・ラ・コンコルドを轢れずに渡つた人はあんまりない。私は中央の島みたいなところを飛びとびに辿つたから轢かれなかつた。轢かれちやつたんぢやあこの話しが出來ないから―。

そこで、これからの一本道が名にし負ふシャンゼリゼェなんだが、こいつがまた凱旋門まで一哩と四分の一もある。おまけ

にいやに[illegible]くだから、面のせいか、なほ長い。

なんて、てくりながらそんなにのべつ愚痴を溢すくらゐなら、早くタキシにでも乗つたらいゝぢやないかと思ふだらうが、いくら私が酔狂だつてかうして郵便脚夫みたいに歩きたかないけれど、それがさうは往かないと言ふわけは、じつは、身をもつて歩き廻らない以上、何うにもならない役目を一つ、ゆうべ私は親分のアンリ・アラキから仰せつかつてゐるのである。

だから今日、かうやつて朝から晩まで巴里街上の風に吹かれるのが、いはゞこれ私の運命なのだ。

運命だから仕方がない。だから、歩く。だから、凱旋門からAVE・ドユ・ワグラム、公園モンソウからオペラ座、伊太利街から――ま、何處でもいゝや。外國人――佛蘭西人以外――のいそうつき廻つてゐさうな通りを選んで、精々こつちも放つきまはつてゐるんだが、もつとも、さう言つたからつて、たゞ漠然とほうつき廻つてゐるんぢやない。それどころか、實は――と、これは極く小聲で言ふんだが――探し物をしてるのである。いや、さがし「物」ぢやない。探し「人」なんだ。尋ね人なんだ、つまり。

とは言へ、顔を識らない人を、しかも出来るだけ多勢拾ひ上げて来いといふんだから、全然それこそ何だか私には一向判然しないけれど、兎に角、ほうべウ・トトで探せといふには、「ジョウチヤ、亞米利加人かいぎりす人が一ばんいゝ。物欲しさうな面の、金持ちらしいのがうろうろしてたら、斯うこうしてこうするやうに――」なんてちやあんと文句まで教はつて出て来たんだが、成程、親分の言つたとほりに、物欲しさうな、金持ちらしいあめりか人や英吉利人――どつちも私には眼で判る――が、到るところに大いにうろうろしてはゐるんだけれど、さて、路上そいつへ近づいて自然らしく交際を開始する段になると――。

A! 九月四日通り(ルウ・ドユ・キヤトル・セプテンブル)へ出た時だつた。

そこの町角に立つて、車道を越さうかこすまいかと沈思してゐる一人の若い英吉利紳士に、私は見事ぶつかりしたのである。何うしていぎりす紳士といふことが解つたかといふと、その、若いくせに分別臭い顔と、手にしてゐる洋傘と皮手袋と、何よりも、刹那に受ける全體の感じとに依つてである。考へても見給へ。巴里の町かどに直立して、さてこの目前の車道をこさうか越すまいかと沈思三番してるなんて、わが英吉利人以外にはなからうぢやないか。

『やあ！　お一人ですか。』

私が言つた。無論、いぎりす言葉でだ。

すると彼は不思議さうにゆつくりと私の外貌を檢査したのち、五月蠅さうに眉をひそめて、

『私と私の影と、まあ、二人伴れですね。』

と餘計な返答に及んだが、私は毫もたじろがない。『この巴里で、影と二人きりとは確かに罪惡の部ですな。が、罪惡は時として非常に甘い。この事實を御存じですか。』

彼は默つて、何度も私の存在を見上げ見おろした。私はつゞける。

『あ、さう言へば夜の巴里の甘い罪惡――あなたは、このほうはすつかり――とこのすつかりにうんと力を入れて――すつかり探検がお濟みでせうな勿論。』

と、若い紳士は急に叱り出した。

『ど、何んなところです、例へば。』

私も知らないんだから、これには何うも困つたが、

『それは、あなた自身が御自分の經驗によつてのみ發見すべき秘密(ミステリイ)です。』

『ふうむ。』彼は苦しさうに唾を飲んで、『――で、君がそこへ案内するといふんですか。』

『いや。私ぢやない。親分です。私の親分は、あなたさへ勇敢に付いてくれれば、決してあなたを失望させるやうな人ではないことを、私はこゝに保證――。』

『夜の巴里の甘い罪惡――。』

『さうです。何んな驚異があなたを待つてゐることでせう！』

こゝで、くだんの若い英吉利紳士の頭に、ちよいとまくつた女袴(スカアト)の下からちらちらと覗いてゐる巴里の太腿が映畫のやうに「flash」したに相違ない。

彼は、誤魔化すやうに眼ばたきをして、

『何時(いつ)？』

『今夜九時半。』

『何處で落ち合ひます。』

『橋(ポン)アレキサンドルの袂で。』

彼はうなづいた。私は歩き出す。彼の聲が追つかけて來た。

『いくらです案内料は。』

『九百九十八法(フラン)。』

『高いですね割りに。』

『あとから考へると、むしろ安いのに驚くでせう。』

これで完全に征服された彼は、

『ぢや、今夜。』

と嬉しさうに手なんか振つてゐた。さまあ見やがれ！

たつた一人だが、こゝに私もやつと自發による犠牲者を摑まへたわけで、何うやらアンリ親分にも合はせる顔が出來たといふものだ。

あとは、夜になるのを待つばかりだが——面倒臭いからぐうつと時計の針を廻して、無理にももう夜になつたことにする。

で、夜——エッフェル塔にCITROEN廣告の電氣文字が、灯の瀧のやうに火事のやうに、或ひは稲妻のやうに狂亂し出すのを兼ての合圖に、星は負けずにちかちかしてタキシが絶叫し、路ゆく女の歩調は期せずして舞踏のステップに溶けあひ、お洒落の片眼鏡に三鞭(シャンペン)の泡が撥ね、歩道のなかばまで競り出した料理店の椅子に各國人種の口が動き、金紋つきの自動車が停まると制服が扉を開け、そこからTAXIDOが夜會服(デコルテ)を助け下ろし、アパルトマンへ急ぐ勤人の群が夕刊の賣台(キオスク)をかこみ、ある人には一日が終り、ほかの人には一日がはじまつたところ——巴里に、この話しに、夜が來た。

4

廿五六の、どつちかといふと大柄な、素晴しい美人であつた。

何うあつてもこゝは素晴しい美人でないと埒が開かないところだし、また素晴しいなんだのだことだから、よこい八ッさも事實を曲げることは出來ないわけだが——で、其の廿五六の、何方かといふと大柄な素ばらしい美人が——。

とにかく、最初からはじめやう。

巴里淺草(モンマルトル)のレストラン千客萬來の「モナコの岸」は誰でも知つてるとほり昔から美人女給の大量を擁し、それで客を惹いてるんで有名だが、この「モナコの岸」の濱の眞砂ほど多い美人女給のなかでも、美人中の美人として令名一世を壓し、言ひ寄る男は土耳古の伯爵・セルビヤの王子・諸威の富豪・波蘭土の音樂家・ぶらじる珈琲王の長男・タヒチの酋長・あめりかの新聞記者・英吉利の外交官——若い何なに卿——・日本の畫家なんかといつたふうに、なに、まさかそれ程でもあるまいが、まあすべての地廻りを片端から悩殺し、やきもきさせ、自殺させ蘇生させ日參させ——その顔は何度となく三文雜誌の表紙と口繪と廣告に使はれ、ハリウッドの映畫會社とジグフヰイルド女道樂(ファリイス)から同時に莫大な口(オファ)が掛つて來たゝめ、目下この新大陸の新興二大企業間に危機的軋轢が生じて風雲樂觀をゆるさないものがある——なあんかと、いや、つまりそれほど一大騷動の原因になつてゐる位ゐの「巷のクレオパトラ」、「モンマルトルのヴィナス」、「モナコの岸」の金剛石とでも謂つべきのが、今いつた

この「廿五六の、どつちかと言へば大柄な素晴しい美人」なんだから、たとひどんなに素晴らしい美人だと力說したところで一こう不思議はないわけで、どうだい、驚いたらう。

名もわかつてる。マアセルといふのだ。

そしてこのマアセルは、怒濤のやうに日夜「モナコの岸」へ押し寄せてくる常連の誰かれにとつて、すこしでも彼女の內生活への覗見(ピイプ)を持つことは、そのためには即死をも厭はない聖なる神秘であつた。とだけ言つておいて、先へ進む。

ところで、廿五六の豐滿な金髮美人マアセルだが――。

も一度、最初からはじめやう。

誰も居ない眞つ暗な部屋だつた。しばらくするとがちやがちやと鍵の音がして、戶があいた。廊下の光りが流れ込んだ。それと一しよに人影が這入つて來た。人影は女だつた。女は、手さぐりに壁のスヰツチを捻つた。ぱつと明るい電燈の洪水が部屋を占めて、桃色に黑の點々のある壁紙が一時に浮き立つた。

部屋はマアセルの寢室だつた。女はマアセルだつた。

マアセルは今日夕方の番(シフト)だつたので、いま「モナコの岸」から、近處に貸りてる自分の部屋へ歸つて來たところである。

あたふたと自室へはいつてきたマアセルは、うしろの戶をばたんと閉めて鍵をかけると、これで完全に自分ひとりになつた安心のため、急に仕事の疲れが出て來たやうにすこしぐつたりとなつた。そして、第一に靴を取ると、緩慢な動作で部屋を突つ切つて、衣裳戶棚の大鏡のまへに立つた。天鵞絨に毛皮の附いた外套の下から、肉色の靴下に包まれた脚が長く伸びてゐる。マアセルは鏡へ顏を近づけたり離したり、曲げてみたり橫から見たりした。やがてやうやう滿足したやうに手早く帽子を脫つて帽子を眺めた。その帽子を大事さうに向うの卓子の上へ置いて、ちよつと栗色の斷髮へ手をやると、そのまゝ崩れるやうに椅子へかけて「あゝあ!」と小さな欠伸をした。

さうしてぢつと何か考へてる樣子だつたが、そのうちに獨り言のやうなことをいひながら、立ち上つて外套(フロック)を脫いだ。それを亂暴に寢臺へ投げかけた。それから直ぐに着物をぬいだ。ぱちんぱちんとホツクの外れる音がすると、着物はだらりと椅子の背にかゝつてゐた。下着とブルマスとコルセツトと靴下だけのマアセルだつた。が、間もなく彼女は、部屋のまん中でかなぐり捨てるやうに、、、、、、。上半身に柔かい電燈が滑つて、光つた。そして頤を引いたマアセルは、ちよこちよこと小走りに急いで、××の橫へ行つた。そこで、、、、、、、、、、、、、、下へ抛つた。さあつと電燈の滑つて光る部分が俄かに廣くなつた。あとは××――マアセルはいま××の端に腰を下ろ

して、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、――

美人マアセルの私生活。

SHhhh！

みんなの眼がずらりと壁に覗いてゐるのを彼女は知らない。

こゝで、マアセルを愕かせないやうに、しづかに、ごく靜かにいさゝか話しを後へ戻す必要があるのだ。

SHhhh！

もう一度最初からはじめやう。

これより先、その夜九時半、月中天に冴え渡るセエヌ河畔はアルキサンドル橋のたもとに、三々伍々、默々として集つてゐる影坊子のむれがあつた――と言ふと、千八百何年かの革命黨員の策動みたいで、これから暗殺でもはじまりさうで如何にも物騒だが、なあに、同じ物騒は物騒でも、そんな時代めいた悶つ苦しいんぢやない。その中のひとりが、今日私によつて九月四日通りで捕獲された若い英吉利紳士である一事に徴しても判るとほりに、この群集こそは、これから一晩がゝりで「夜の巴里の甘い罪惡」を探り歩かうとする、世にも熱烈な獵奇宗徒の一團であつた。群集といつたところで全十四人である。一たい巴里といふところは、何時だつて此の種の、アンリ親分に從へば「物識しさうな面の金持ち」で、こんなことのためにだけ巴里に幾らでも投げ出さうといふ意氣込みでふわふわつとたつてゐる連中――多くは中年過ぎた外國人――をもつて充滿してゐるんだが、かういふ「生きてゐる幽靈」には、本國で紳士ぶつてゐなければならないせいか、妙にいぎりす人が多い。つぎは亞米利加人だが、これあまあ大概の事物には興味を持つんだし、ことに金を出すことにかけちやあ何にだつて人後に落ちない氣でゐるんだから、この今夜の一隊（パアティ）も、例によつてほとんど、英米兩國の旅行者だけだつたと言つていゝ。もちろん男ばかりである。

アンリ親分はまだ來てゐない。

ところで、私が捕まへたのは若い英吉利人ひとりなのに、何うしてから十何人も現れて鉢合せを演じてゐるかといふこと、これは勿論、ゆうべLA・TOTOで親分が「なあにジョウチ、お前（めえ）のはうはそんなに當てにしやしねえ。俺が半日ぶらつけば何十人でも網にするんだ」と豪語したやうに、他はすべて今日アンリ親分が街上で網（ネット）にかけたものであらう。見渡すところ、私の若い英吉利人をはじめ獨身らしいのも二三居るやうだが、どうも大部分は妻子と社會的地位のありさうな分別顔だ。それがみんな、自分一人と思つて出かけて來たところが、意外

にも未知の同好者がかう澤山集合してゐるので、相互にすつかり照れちまつて、或る者は、アレキサンドル橋の欄干からセエヌの銀流へ唾をして、果して眞直ぐ落ちるか何うか試驗したり、他は恐しく濟まし返つて、中天に冴え渡る月をそゞろに仰いだり、または、あわてゝ燐寸をくわへて煙草を擦らうとしたり——in a word・どの影坊子も困り入つて只うろうろするばかり——。

大入滿員「ラ・トト」の一卓でアンリ親分が打ち開けた言葉を、僕は思ひ出す。

『なあジョウヂ、』と親分がいつたのである。『この巴里つて町にやあ物凄えとこがあるつてんで、早え話が、いぎりす人やめりいけんなんか、汗水流して稼いだ金で遙ばるそいつを見にやつて來るてえくれえのもんだ。だからよジョウヂ、だから俺の商賣てえのは、まあ早く言へば案内者だが、その物欲しさうな面の外國の金持ちをあつめて、一晩そんなところを引つ張りまはしてやるんだ。お前のめえだが、それあすげえところがあるよ。何しろお前、巴里だからなあ——もう十何年もやつてるんだが、いくら馬鹿金が儲かつても、そこはよくしたもんで馬鹿金を費ふから俺つて人間は何時まで經つても同じこつた。あはゝはゝは。ま、明日からお前にもそつちのほうへ働いて貰ふさ。』

さて、これですつかり解つたらうと思ふが、つまり親分アンリ・アラキは、「脫走船員」の私を助手に十餘人の「生ける幽靈」を引具し、今から朝まで順々にその物凄えところを廻つてあるかうといふのだ。妙な稼業もあつたものだが、これも需要あつての供給だらうから仕方がないとして、その肝心な親分はまだ姿を見せない。

料金は九百九十八法。千法に二法足らないきりだが、千法よりあずつと安く聞こえる。まるで年の暮れに猶太の莫大小屋が、一弗の股引を九十九仙に「思ひ切り値下げ」して、「犧牲的大廉賣」「自殺か奉仕か此の英斷！」なんかと樂隊入りで廣告するやうな、猶太心理學派の遣り方だが、事實何う算へたつて千法には二法足らないんだから、やすいこた安いわけで、誰だつて文句は言へまい。

かういふわがアンリ・アラキ親分である。寄らば大木のかげで、この人の身内だからこそ、私もかうしてちつたあ利いたふうなことが言へるといふものだ。

まあ、ゞはゞとして——。

「夜の巴里」の探檢隊、同勢十四人。かうなると、ひとり者は世話はないが、運わるく細君のあるやつは苦しがつて種々惡計をめぐらし、やれ「近頃運動不足で不眠だから一晩夜の空氣を吸

つて歩くやうに上院議員の運命だから」ことの、やれ「お前も知つてるとほり今やあたらしく生れ出やうとしてゐる英佛合同一大毛織物會社の設立相談會があつて、ことによると今夜は歸らないかも、たいていは遲くなつても歸るつもりだが、或ひは、ひよつとすると歸らないかも知れないが決して心配しないで先に寢てるやうに」だの、やれ「今の電話で島渡シャルロアへ出張しなくちやならない。商用だ。大急ぎだ。多分あすの朝は歸れるだらう」ことの、やれ「土耳古の伯爵に招待された」ことの「セルビヤの王子が來た」ことのと、其の他曰く何、曰くなにと、それぞれ大奮鬪の末、やつとのことで銘々の「マギイ」を鎭撫納得説厭化し果せた「ジグス」たちが、期待と覺悟と解放のよろこびに燃え立ちながら、かうしてこゝ、噂に聞くアレサンドル橋の袂で、ある者は矢鱈に煙草をふかし、或ひはしきりに欄干から唾をし、他はいやに遊子ぶつて中空に冴えわたる月を眺めたりなんかしてゐると、なかにひとり人見知りをしないお饒舌りなのがゐて、

『じつさい巴里にあ大變なところがあるさうですからなあ――それに、今夜のは特選ぞろひだと言ひますから、まあ、私たちは幸福人ですよ。はゝはゝ、これで何うやら國の惡友達にも土產話しが出來ますからね。』

なことをあちこち話しかけ[illegible]に一同何時の間にやら同じ上機嫌に融け合つて、何事をも辭しない探検家の精神が尖塔みたいに高く天に沖してゐると――義士の勢揃ひ宜しくなこの騷ぎに、義士のことは知らないが何か、はじまつたのかとびつくりして、通行人が足をとめてゐる。

折しもあれ――といふ程のことでもないが――そこへ大殿堂の方ET小殿堂の方角から一台の遊覽用大型自動車が疾驅して來て、待ち兼ねたみんなを拾ひ上げたのである。探検隊長――まるでアムンゼンかノビレみたいだが――アンリ・アラキが、運轉手と並んで腰かけてゐた。

午後九時四十五分。彼は、出發に際して隊員に一場の訓示を與へた。佛蘭西大使のやうに流暢なふらんす語だつた。

「出かける前に廣告はしません。すぐに實物が證明するからです。また何處々々へ行くかといふこともわざと明言しません。好奇心のためです。たゞ心要上、最初の一つだけをこゝにお話しゝませう――。すでにあなた方も御存じの通り、巴里淺草のレストラン千客萬來「モナコの岸」は、昔から美人女給の大軍を擁し、それで客を惹いてるので有名でありをするが、そのなかでも美人中の美人として令名一世を抑しつけ、「モンマルトルのクレオパトラ」と呼ばれてゐるのが、マアセルと申す當年

取つて廿五六――割引無し――の何方かと言ふと大柄な、素晴しい美人でありまして――。』

　と、つまり、マアセルに關してはじめに私が說明した全部は、そつくりこの時の親分の言なんだが、えへん！と親分はここで咳拂ひ――もちろん流暢な佛蘭西語で――をして、あとを續けた。

『で、この萬人――いや、嚴正には、萬男渴仰の的たるマアセルの私生活をこつそりお見せ申すのが本計畫の第一步でありまするが、前もつて特に御注意申し上げたい一事は、私はマアセルの泊つてゐるアパルトマンの夜番に莫大な金を摑ませて特別に其の仕掛けをほどこし、それで斯うして皆樣をお伴れ申すことも出來るわけですが、いま言つたやうに、夜番の男は抱き込んでありますけれど、當のマアセルはもとより、他の止宿人は何も知らないのでありまするから、先方へ參りましたならば、いやが上にも御靜肅に、咳くしやみ等はもちろん物音一つお立てにならないやう、これだけは切にお願ひ申す次第であります。「モナコの岸」の美人女給マアセルが、誰も見てゐないと思つて自分の寢室で如何なる行動に出るか――聖なる神秘はあなた方の行手に！　これによつて先づ些さかの御滿足を與へ得れば、幸甚これに過ぎません。呉々も規則を嚴守下さるやう――では、出掛けます。』

　といふんで、規定の案內料を徵集したのち、一同を乘せてぶうと動き出した探検自動車が、夜の巴里を走りに走り、廻りに廻つて、やがてぶうと停止したところが、モンマルトルの山の下なるこの貸間館（アパルトマン）のまへ。

　ぞろぞろ降りる。夜番が横手の戶をあける。親分の先頭でMAIを含み、跫音を盜取して上つて來たのが、三階のこのマアセルの隣室。マアセルの部屋の壁紙の黑いぽちぽちに眼に見えないほどの小さな穴が開いてゐて、その外側に一つづつ、、、みたいなものが取りつけてあるから、マアセルの有する全部は各人の眼つ先にある。

　親分は廊下に立つて待つてゐるんだが、その心配は全然杞憂に歸して、一人ひとり、、、、、、、、、ゐる隊員は、しはぶきどころか呼吸を凝らしてゐる。髭と奥さんを持つ紳士にとつて、女の生活なんてとつくに卒業して飽き〱してる筈なんだが、度々いふとほり相手が「モナコの岸」の女王なのと、その、誰も見てるものがないといふ確信で、着物と一しよにすべての氣取りを除去したあとの赤裸々さとに、また別の興趣が期待出來るとみえて、かうしてみんなおつと覗き作ら、固唾を飲んで待ち構へてたところへ――前に言つたやうに、「モナコの

岸」から美女マアセルが歸つて來て、竹の子みたいに一枚々々着衣を脱して、さうして、さうして、えつと——何處で話しが後退したんだつたけな？——さうだ、、、、、、、マアセルが、今や寢台に腰かけてするすると靴下をぬいでゐる——。

やがて、ざあつと水の音がした。

壁の穴は模様のぽちぽちに隱れて内部からは氣がつかない。誰も見てないと思ふから、マアセルだつて平氣だ。、、部屋を横切つて、浴室の扉をあけ放したまんま、お湯の栓を捻つてゐる。お湯は直ぐ一ぱいになつた。ちよつと手を入れてみて、マアセルは、熱う！といふやうに顏をしかめた。見てゐる隊員が躍氣になつて「水をうめろ水を」と心中に絶叫する。言はれるまでもない。マアセルは事務的に水を出した。そして、、、、、、、、、、、、ゆつくりお湯につかつて、しづかに天井を研究してゐる。

「女給生活の一日」——なんてことを考へてゐるに相違ない。

と、突然立ち上つた。赤くなつたマアセルだ。それが、いきなり自暴(やけ)にそこゝ洗ひ出した。石鹸の泡が盛大に飛散する。それと一緒に、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。と思つてゐると、ざぶつとつかつて忽ち湯船を出た。烏の行水みたいに早い[illegible]る。

あとはもつと簡單だつた。可等にタオルで拭いたマゴ[illegible]は、浴室をそのまゝにして寢室へ歸つて來た。鏡台のまへで顏に何か塗りつけた。そして今は、姿見に自分を映してみて、さかんに嬌態(しな)を作つてゐる。

兩手を腰に片つぽの肩を上げて爪立ちしたり、眞直ぐに立つて體操の眞似をしたり、櫛を持つてきて髮を色々にアレンヂしてみたり——そのうちにふゝと思ひ出し笑ひをした。同時に、何か低聲に唄ひ出した

笑つてゐるマアセル。

唄つてゐるマアセル。

ちらと——どころか、、、、、、、「モナコの岸」のマアセル。

AaaaAH！　とマアセルは伸びをした。大きく、、、浪をうつて、マアセルの全體重を受け取つた。、、、、、、、、、、、、、、、マアセルは、好きなやうに、、、、、赤本を讀み出した。しばらく讀んでゐたが、何時しか本を持つ手が横ちよにさがり、やがてその本がばつたりと床を打つと、マアセルは床褥の上で眠り出した。すこし口を開けた

大の字なりの金髪美人を照らして、室内には、消し忘れた電燈がいやにかんかん氾濫してゐる――。

擴大鏡の向うで、白い大きな脚がさまざまに動いて、マアセルは、、、、打った――隊員は誰も、、、、離れやうとしない。親分が這入つて來て、そつと肩を叩いて廻る。

これが、アンリ・アラキの夜の日程――てのも變だから夜程だ――における第一の場處「マアセルの寢室」。

モンマルトル、RUEドュ・マンタの五一番ブウランジエ裁縫店の隣りである。

5

第二の場處「すゝり泣くピエロの酒場」――モンパルナス雜典區、57, Avenue du Chéneau。

再び一同を載せて、ぶうと山下を動き出した探檢自動車は、またもや夜の巴里を走りに走り、廻りに廻つて、空にはちかちかする星と赤い水蒸氣と、地には、タキシの激流と步道の散步者と、光る街路樹と暗黒のベンチと、その上の男女の影と其の下の野良犬と、ある廣場にはあせちりん瓦斯をともして、鋼衣一枚の大力士が次つぎに分銅を持ち上げて野天に人と鳥目を集めてゐたり、くらい横丁に立つ女の口にシガレットの火がぽうつと浮かんだり消えたり、名だけ壯麗なHOTELルヰ十四世――お泊り一人一晩七法・種々近代的御便宜あり――の狹い入口に、毛布をかぶつた老婆が占ひの夜店を出してゐたり、それへ子供を伴れたお神さんが何やら煩悶を打ちあけてゐたり、一つの窓から、

Il est cocu, le chef de gare!

Il est cocu, cocu, COCU!

なんかとどら聲の唄と一しよに笑ひと葡萄酒――ボルドオ赤・一九二八年醸製――の香が流れてきたり、街角の巡査がその唄に合はして首を振つたり、その巡査に賣春婦が「今晩は」して通つたり、灯の河の大街を橫斷したり眠つてゐる往來を過ぎたり、エッフエルが見えたり見えなくなつたり、遠くの町を明るい電車が走つてゐたり停まつてゐたり――とにかくぶうとセエヌを渡つて、晝ならば、古本・古物の市の立つ川端から、また暫らく走りに走り、廻りに廻つたわが探檢自動車が、やがてぶうと漸進したのが、これなる古い建物の玄關――外見は平凡な一住宅に過ぎない。

Montparnasse だ。こゝは。

雜典區の夜――何といふ國境と習俗を無視した――若しくは無視した氣でゐる――智的巴里、藝術巴里の「常夜の祭り」が

このかるちえ・らたんでたらく
　珈琲一ぱいで一晩かけてゐるキャフエの椅子のやるせなさ——夜更けてあほるカクテル・ガラスのふちに、ほんのり附いたモデル女の口紅——向う通るはピカソぢやないか顔がよう似たあの顔が——繪の具だらけのずぼん・蒼白い頬へ垂れさがる「憂鬱」な長髪・黒りぼんの大ネクタイと長いもみあげ・おつと卓上のアブサンを凝視してゐる「深刻」な眼つき・新しい派の詩人とあたらしい派の畫家と新しい派の女と、輕喋と衒氣(プリテンス)と解放と——廣い道の兩側に「圓い角(ラ・ロトンド)」、「圓屋根(ラ・ドウム)」、「圓天井(ラ・クポウル)」と三つの珈琲店が榮えて、毎晩きまつてる自分の卓子に、土耳古の詩人・セルビヤの詩人・諾威の詩人・波蘭土の畫家・ぶらじるの畫家タヒチの畫家・日本の畫家が宵から朝まで腰を据えて、晋請と各國語と酒たばこの香と藝術的空氣を藝術家らしく呑吐して、藝術的興奮で自作の戀の詩を——隣の女に聞こえるやうに——低吟したり、さうかと思ふと、おなじく藝術的興奮で眞正面から他人の顔を寫生したり、やがて出來上つたスケッチを珈琲一碗位で當の寫生の被害者へ即賣に來たり、あらゆる思索・議論・喋々喃々・暴飲・天才・奇行・變物、牡蠣の屋台店と舗道をうづめる椅子の海と、勘定のかわりに長髪族が掛けつらねた「圓角(ロトンド)」内部の壁の油繪と——畢竟ラテン區は、これ自身の法律と國民だちの藝術家——お白粉臭い——別世界である。詩人と畫家と三の弟子たちが、筏を負つて集まる放縦所なのだ。
　ま、それはいゝとして、アンリ・アヂキの探偵隊にはいま僅かに要のないところだから、自動車はこの詩人と繪かきの小父さん達の國を突破しておそろしく暗いこゝの小路に停車したわけだが——圓角や圓天井の騒ぎは遙か彼方盛り場の、夜空に どよめいて、あたりは妙にしいんと靜まり返つてゐる。
　親分のノックで戸があく。
　一行勇氣りんりんとして直ぐ二階の一室へ通る——「すゝり泣くピエロの酒場」。
　これが其の酒場なんだらう、あんまり廣くもない部屋にびつしり椅子テエブルが立てこんで、正面に酒台(カウンタ)があるきり、裝飾もなんにもない、外觀以上に平凡といふより、むしろ殺風景すぎる室内だ。なるほど酒場と銘打つてあるだけに、巾着みたいに賣台(カウンタ)のむこうに酒壜の列が並んではゐるが、公衆に開けてるんぢやないとみえて、この、酒場の書入れ時刻といふのに、客といつては一人もなかつた。
　魔法使ひのやうな、きたない服裝(なり)の無愛想なお婆さんが出てきて電燈をひねつたので、はじめてみんな、がやがやと卓子に就くことが出來たくらゐである。

で、一同、思ひ思ひに狹い酒場の椅子に腰かけて、妙にぽかんとしてゐる。なあんだ馬鹿らしい！　こんなところか、何も變つたことはないぢやないか——と言ひたげな、狐につまゝれたやうな、それでゐてちよつと不服らしい顏つきだ。例のお婆さんが、むつつりしたまゝ賣台の向うに立つた。これが酒番だとみえる。

親分が、隊員とお婆さんへ半々に言つた。『とにかく、まだ早いですから、こゝで何か飲(や)つて行きませう。御銘々にお好きなものを御註文下さい——おい、婆さん、おれに黒麥酒(ブルウネット)！』

團員中の人見知りをしない饒舌家が、すぐ親分に倣つた。

『それでは、と。わたしは赤(ブロンド)を頂きませうかな。』

仕方がないから皆それぞれに註文を發する。お婆さんは默つたまゝ、片つぱしからそれを注ぎはじめた。

奧から五六人の女給が出てきて、お婆さんの突き出すのをテエブルへ運ぶ。厚化粧をした若い女たちだつたが、妙なことには、それが一人ひとり違つた型(タイプ)と服裝で、ちよいとした若奧樣みたいなのや、良家の令孃と言つたのや、お俠な女學生風なのや、白エプロンの女給々々したのや、踊子のやうなのや——この近處の人達の內職にしても些(ち)と何うも樣子が變だと思つてゐると、その女たちが、卓子と卓子のあひだの細い通路をすり拔けるやうにして酒を配つて歩く。普通の酒場やカフエの光景で、べつだん何の珍奇もない。

アンリ親分は知らん顏して麥酒を飲んでゐる。

待ち切れなくなつたやうに、一行の代辯をもつて自任してゐる饒舌家が口を切つた。

『何かあるんですか、こゝに。』

コップの底のビイルをすつかり流しこんで、ハンケチで叮嚀に口のまはりを拭いてしまふまで、親分は答へなかつた。

『詰らないぢやありませんか、こんなところ。』饒舌家が全員を代表してぶつぶつ言つてゐる。

遮るやうに親分が大聲を出した。

「ちよつと其のあなたのテエブルの隅へ、卷煙草でも何でもいいから置いて御らんなさい。』

『え？』と、饒舌家は不思議さうな顏をして、『何でもいゝ？此處へですか——。』

言ひながらポケットから十法(フラン)の紙幣を摑み出して、卓子の隅つこへ載せた。

『斯うですか——。』

すると、その言葉の終らないうちに、一同は啞然とした。といふのは、ちようど其のとき饒舌家の傍に立つてゐた女學生ふ

うの女が、いきなり尚々と、、、、、、、、、、、、のである。、、、、、、、、、、、彼女だつた。それが、、、、、、、、、、、、、、、、と思ふと、矢庭にテエブルの角を、、、、しばらく適度に苦心惨憺したのち、、、、、、その十法札(フラン)を、、、悠々と持つて行つてしまつた。それはじつに、習慣と經驗を示す一つの藝(アウト)だつたと言はなければならない。

瞬間の驚きから立ち直ると同時に、みんなは争つて卓子の隅へ金を出した。だから同時に、あつちでも此方でも、狭いテエブルの間にこの白い曲藝が演じられてゐる。奥様ふうなのも踊子も、令嬢みたいなのも女給々々したのも、みな一せいに——。へんに眼の光る、壓迫的な沈默がつゞいた。そのなかで、高く、、、押さへて女たちが、卓子から卓子へ移つて秘奥をつくし、男たちはすべて、誰もかれも無關心らしく頬杖なんか突いてゐた。じつさいそれは、私達の持つ文明と教養を蹂躙しつくして止まない、奇異な悪夢の一場面であつた。

みんな何時までも金を置くから限りがない。

酒番のお婆さんは、詰らなさうにそこらを拭いてゐる。

アンリ親分は超然として壁に煙草を吹きつけてゐた。

6

第三の場面「夜の花園」——については、遺憾ながら[illegible]にすることは出來ない。たゞ所在を記すだけにとゞめておかう。廣場(プラス)ダンフエル・ロウに近いルウ・デ・アウブルの一〇八番だ。

第四の場面「狂畫家の工房(アトリエ)」——これも困る。

つぎは第五「人肉の家」——X., Rue de Lorette ノウトルダムのすぐそばである。

これも、這入つた時は何ら變つた點もない、相當の廣さの普通の應接間だつた。

が、一同がその部屋へ案内されて、さて、これから何がはじまるんだらうといつたふうに、多少要心するやうな態度できよときよとそこらを見廻してゐると、何らの豫告なしに急に室内の電燈が消えて眞暗になつた。すると、何處かでざわざわと衣の動く音がして、おや！　と思つてゐるうちに、映寫のやうに、ぱつと眞上から強烈な光りがさした。そして、敷物と言はず家具といはず人の肩と言はず、部屋全體に無數の影がゆらゆらと揺らめき出した。

と斯ういふと、何か人爲を超越した恐しい設備でも伏せてあつたやうに聞こえるが、なに、よく觀察すると至極簡單な裝置なんで、誰だつて、部屋へ通されると同時に天井へ注意を向

る人なんかないから、今やつと氣が付いただけのことなんだが、ここの天井は、、、、、、出來てゐて、上に水が張つてある。そして其のなかで、多勢の人魚が泳いでゐるのだ。

室内は闇黒だ。天井は板硝子で滿々と水をたゝへてゐる。そこに、硝子の下と天井裏とに皓々と電燈が點き渡つてゐるんだから、早く言へば、金魚鉢を陽にすかして下から覗くやうなもので、頭のうへに光線を溶かして照明そのもののやうな水がひたひたと浪を打ち、、、、、、、、、、薄桃色の蘭の花みたいに大きくひらいては縮み、鳥のやうにつうと流れ、二本の×を、、、まゝ浮かんで行つたり、潜り乍ら魚のやうに急廻轉したり、靜かに水を煽つて平泳ぎを續けるのもあるし——何のことはない、まるで海水浴場か湯船の、、、、、、、、、、同じで、水はそんなに深くないから、なかには立つて歩いてゐるのもあれば、蹲踞んで肩まで漬けてるのもある。

十六五の、女になり立てのから卅歳前後まで、十人あまりの女群のなかには、アルジェリイか何處か殖民地産らしい黒人の女もゐた。水に濡れて、膃肭臍のやうに光つてゐた。それがみんな、水中の必要に應じて思ひ切り行動する——其の、、、、、、、照らし出して、石化したやうに、、、、、、、、、、、、、、、、絨毯のうへに、硝子ごしの光線は千切れ雲のやうな投影を落してゐる。上は明るい海底と人魚の亂舞、下は、ぼうつと月夜の森のやうな半暗の凝結だ。

幻のやうに水の音が聞こえてゐた

戸外へ出ると、ノウトルダムのてつぺんに巴里の月が引つかかつて、石疊が汗をかいてゐた。夜露が降りたとみえる。

このNOTREDAME——ノウトル・ダムの寺院だが、これこそは、巴里のノウトルダムかノウトルダムの巴里か、てんで誰でも知つてる。そしてそれが、船の形をしてセエヌに浮んでゐる、小さな市の島の小高いところに建てることも、昔シイザアが威張り散らして羅馬から此處へ來たとき、巴里はこのセエヌの小舟島イル・デ・ラ・シテだけに過ぎなかつたことも、だから今でも巴里の市章は、市の起原を象どつた船の模樣であることも、イル・デ・ラ・シテはよく巴里の眼と呼ばれ、ノウトルダムは屢々其の臍と形容されることも、何時の世に誰が建立したのか未だにはつきり判らないノウトルダムに關して、ヴイクタア・ユウゴウは紀元七百年代にシャレマアニュが其の第一石を置いたんだと說いてることも、この、ルヰとボナパルトと敵と味方の泪を吸つて黑いゴセックの堆積が如何に多くの莊嚴と華麗と革命と群衆の興亡的場面を目撃して來たのであらうことも、偏僂のクワシモドが身を挺してエスメラルダを助けたこ

とも、一八〇四年、ナポレオン一世がこゝで戴冠式を擧げて、參列者の一人ダルバンテ公爵夫人が「眼に見るやうに」手記してるとほり、せつかちなナポレオンは、先づ一つの冠を非常に靜かに——痛くないやうに注意して、輕くジョセフインの頭へ載せたのち、自分のは、實にがさつに引つ奪るが早いかぐつとかぶつて並居る僧正大官連を驚かしたことも、そして今、ノウトルダムは巴里第一の名所として、見物の異國者が引きも切らずに出たり這入つたりしてることも——これらはみんな、巴里のノウトルダムかノウトルダムの巴里かてんで、誰でも知つてる。いはんや中殿の屋上に十二聖徒の立像が巴里を見張つてゐることや、其の有名な塔のうへに、より有名な異形變化(へんげ)の彫刻が、これもおなじく巴里を見張つてゐることやなんか——有名だから誰でも知つてる。

が、さう何からかにまで誰でも知つてるんぢやあ僕も物識顏をする機會がなくて困るんだが——ここにたつた一つ、これは確かに僕が最初に發見したんだと揚言して憚らない、「ノウトルダムの妖怪」といふ新事實があるのだ。

妖怪は、塔の上の變獸化鳥(けてう)、半人半魔の奇異像(がろてすく)である。

まあ、聞き給へ。

7

故郷を見捨てるのはロマンチストの哀しい權利だ。」みんな性の種族の秘密をさぐり、新しい人生の瞥見にあこがれ、地球の向側の色彩をおのが眼で見きわめたい衝動に驅られて旅に出る。そして、そのうちの或る者は、髪に霜を置いても歸らうとしないでゐる。この種の「漂泊の猶太人(ワンダリング・ジュウ)」の多くを、人は今ふらんす國セエヌ河畔の峽谷に見るであらう。

セエヌの谷——「巴里」。

かうして、何だか自分でもはつきりしないものを翹望して旅をつゞけて來た流人達は、一度セエヌの谷へ這入るや、呪縛されたやうにもうそこからは動かうとしない。巴里は魅精を有(も)つからだ。こゝに言ふノウトルダムの妖怪がそれである。木乃伊取りが木乃伊になるやうに、この妖怪に取り憑かれた彼らは、何時の間にか妖怪の一つに化し去つてしまふのだ。

こゝろみに暗い螺旋段をノウトルダムの塔上へ出てみたまへ。

そこの、榮樂あるGOTHICの線と影のあひだに、或ひは、長い曲つた鼻を市街の上空へ突き出し、または天へ向つて鋭い叫びを投げあげ、もしくは譯ありげに苦笑し、哄笑し、頬杖

をついてゐる不可思議な石像の群――巨鳥の化けたやうなのもあれば、不具の野獸に似たのも、生き物を口へ押し込んでる半身腿、眼を見張つて下界を凝視してる幽鬼、――これら石造の畸形児の列が、肘と肘をこすり、互ひに眼くばせし合ひ、雨の日には唾をしながら、はるかに下に澱む巴里を揶揄してゐる。

これがノウトルダムの、いや、世界に名だたる巴里の妖怪像なんだが、より驚くべきことは、夜になつて魔性の巴里が「べつの生」を持ち出すが早いか、彼らがのこのこ塔を下りて來て夜つぴて町をうろつく一事である。うそでない證據には、私はよく夜の巴里で、この、現實にそして巧妙に人間化してゐる妖怪どもに會つた經驗があるのだ。

土耳古の伯爵になりすましてグラン・ブルヴァルの舗道の椅子に narghileh を喫つてるのや、セルビヤの王子に化けて歌劇のボツタスに納まつてるのや、諸威船の機關長として橫町の暗黒で賣春婦と交渉してるのや、なかには波蘭土の共産黨員を氣取つて聖ミシエルのLA・TOTOで「赤い氣焔」を上げてみたり、ぶらじるの大學生に扮して「圓い角(ロトンド)」で喧嘩してみたり、タヒチの酋家と稱して街上に春畫を密賣してみたり、さうかと思ふと、セエヌの塵埃船を夜中にせつせと掃除してゐたり、メニルモンタンあたりの軒下にボルドオ赤(ルウヂ)――一九二八年醸造――の壜を抱いてぐつすり眠つてゐたり、古着屋に乘り移つて、車を押しながら天へ向つて鋭い呼び聲を投げ上げて行つたり――その他、かれらの千變萬化ぶりは枚擧にいとまないが、これらのノウトルダムの grotesques が假りに人格化した有機物こそは夜の巴里の忠實な市民なのだ。邪教のMECCAの狂信的な使徒達なのだ

げんに今も、その妖怪の一つは、日本老人アンリ・アラキといふ存在を藉りて、かうして「生ける幽靈たち」の行列を引率してゐる。ひよつとすると、この「脱走船員ジョウヂ・タニー」なる性格も明らかに妖怪の化身かも知れない。たゞ近代の百鬼夜行だから、練り歩くかはりに大型自動車をすつ飛ばしてるだけだ。N'est-ce pas ?

夜が明けるにしたがつて、巴里は一そう生き甲斐を感じてくる。

ことに其の裏町――ノウトルダムの化物どもは巴里の裏町を熱愛する。

例へばこの、美しく不潔で、巨大に醜い大街(ブウルヴァル)セバストポウル――巴里人の通語(リンゴ)では略して「セバスト」――憲兵(ミュニシパル)が一般にシパルであるやうに――は、デュウマの世界が今をそのまゝに生きてゐる巴里諸相の代表的なひとつだ。そこには、聖マリ・聖ユスタス

の兩會堂に近く、あまりに古い名の町々が殘つてゐて、その横丁と門内の中庭(コウト)、よごれて傾いた家と痩せて並んでる街燈の柱、そして、酒と脂粉と自動車油(ガソリン)のまざつた、むつと鼻を突いて甘い巴里の體臭、各民族の追放者のやうな群集の吐息――そのなかに蠢く市場の「強い男達」と彼ら相手の女のむれ、焼栗屋の火花と肥つた主人と、より以上に肥滿し切つた其の夫人(マダム)、酒番とトラック運轉手と、愛すべき「小説(フイクシヨン)」の apache と彼の gonzesse。

此の町は、笑ひ聲と色目と秘密と幽暗で一杯だ。

ヴアイオリンを彈く妖精・モリエ レルの下男・キヤ ロウの乞食・女裝に厚化粧した變態の美青年・椅子直しの角らつぱ・鳥の餌賣りの十八世紀の叫び・こうろ天すぼんの夜業工夫・腹卷(ベルト)に剃刀を忍ばせてゐる不良少年(アパッシェ)・安物の絹をまとつたコテイ製の女――これらがみんな露路と入口と舗道をふさいでざわめき、饒舌り、罵りあひ、大げさな表情と三角の髯がフエルトの上履きのまゝおもてを歩き、灯の明るい酒場から吼鳴るバリトンが洩れ、それに縋つて金切聲(フオルセット)のソプラノが絡み、つゞいて卓子(スウ)が倒れてグラスが碎け、一膳めし屋の玉葱汁――定價金卅文也、紙ナプキン使用の方には二十五サンチイム餘計に頂きます――に人影が揺れ――この、樂しい窮乏と色彩的な喧噪のSEBASTO街たる「おいらの巴里」を、ぶうと迂回したわれわれ妖怪見物車は、やがて、でいどろのXマス樹に色電氣をかけつらねて、そこへ香水を振り撒いたやうな、最も高價な好奇の牧場、眞夜中過ぎのシヤンゼリゼエを――ぶうと第六の場面へ。

シヤンゼリゼエからちよいと横へ切れた、眼立たない裏通、Rue d' Albe の九番邸地下室である。

第六、「劇場後の劇場(テアトル・ドアプレテアトル)」。

這入ると直ぐ大きな字で書いてある。

Vive L'amour!――戀ばんざい!

Vive le bon Vin!――好い酒ばんざい!

Vive la ch anson――唄ばんざい!

Vive la dhanseo!――ダンスばんざい!

Vive L'amour!――戀ばんざい!

ふつくらとした眞赤な絨毯を敷き詰めた階段だ。先に立つて降りながら、親分が言ふ。地下室とはいへ、あかるい電燈と金ぴかの装飾に化粧品店みたいなにほひが漂つて、ちよつと大ホテルの婦人室を思はせる。

「御覽のとほり、こゝは今までのところと違ひまして、ずつと高級であります。劇場後の劇場――名前が示してゐるやうに、芝居が閉(は)ねてからの芝居でありまするが、つまり巴里ぢうの有名

な女優たちが、木戸を打つてから此家へ集りまして、特に皆さんのために珍しい舞踏をお眼にかけるのであります。今夜はことに、名ある女優さんはほとんど全部來てをる筈ですが、この連中にはまた外聞といふこともありますから、どうぞ假面だけはお許し下さるやうに、これは豫め私からお願ひ申しておきます。では、御隨意にお掛け下さい――。』

と言ふんで、一同案された重い扉からいはゆる劇場へ案内されると、これは小劇場をうんと小さくしたやうな、といふより、室内劇場とでも命名したいさゝやかな、けれど暖く落着いた一室。眞赤な絹張りの安樂椅子が、劇場の觀覧席のやうに一方を向いて並んでゐる。正面に高目の小舞台、眞赤な幕が垂れ下つてゐた。

みんなが席につくと、例の饒舌家がはじめる。

『すると、これは公開の劇場といふわけぢやないんですね。』

『冗談ぢやありません。公開の場處ならからうして私がお供するまでもないぢやありませんか。もちろん極く内證にやつてをるのです。』

馬鹿なことを訊くやつだといつたふうに、アンリ親分は冷淡に受け應へする。が、しやべつてゐなければ氣の濟まない饒舌家は、

『有名な女優といふと――。』

『先刻オペラ・コミイクでサロメをやつたモナ・ベクマン嬢だの、テアトル・フランセイズのミリイ・ブウルダンだの、いま出て來ますから一々名前を申し上げます。只しかし、面をかぶつてゐますが、それは先刻もお許しを願つたとほり、下つ端ではないのですから、これだけは何うも――。』

『なに？　ベクマンやブウルダンなんかまで？　そいつあ大したもんだ。うむ、成程ね。それあ面ぐらゐは我慢しなけりやあ――。』

それに同意して全員しきりにうなづいてゐるところへ、舞臺の下で急に蓄音機が鳴り出すと同時に、見物席の電氣が消えて行つて音もなく幕があがつた。

脚下燈のまへに廿人程の女優が二列にならんでゐる。

黒の靴下に高踵靴だけの着付けだつた。すこし背の低い前列は、それに一樣に黒い毛皮の襟卷をして、つばの廣い黒の帽子をかぶつてゐた。せいの高い後列の女優たちは、絹高帽に鞭のやうな細身の洋杖を持つてゐた。前が「女」、うしろが「男」の組らしい。それがみんな、靴と靴下と帽子の、、、、、、、、、、。その靴も靴下も帽子も「女」の組の毛皮も「男」の組の洋杖もすべてが漆黒なので、女優たちの膚の色と効果的に對照してちよつと美術的な舞臺面であつた。全部、言ふまでもなく顏ぜんたいを黒布の假面で覆つて、眼と鼻のさきと口だけ出

てゐる。

アンリ親分がなつて、端から名を呼び上げる。

「デ・ラヴエニウ座のイヴオンヌ・モレエル孃。つぎはモナ・ベクマン孃。第三は。いまオデオン座の「サフオ」で賣出しの若手人氣女優ジャンヌ・ロチ孃。四番目は――。」

と言つたぐあひに。前列が終ると靜かに入れ代つて後列がまへゝ出る。さうして一わたり此の披露(アナウンス)が濟んだかと思ふと。矢庭に二十本の脚が高く上がり、蓄音機に合はして盛大な舞踏になつた。

「男女」二人づつ組んで社交だんすの形をとつたり。バレイみたいに團體的に跳躍したり。かはるがはる一人の花形を中央にレヴユウのやうに廻つたり。屈つたり開いたり――その度に枝と毛皮と×が揺れて。黑い靴下のほかは、、、脚が。何本も何本も見物のあたまのうへで曲がる。伸びる。廻る――つよい脚下燈の光りを、、、受けて――。

『これがみんな有名な女優なんですからなあ。ほかで見やうたつて。思ひも寄りませんや。』

饒舌家が呟いてゐた。誰にも聞こえないとみえて。振り返るものもなかつた。

白と黑の廻轉は際なしにつゞいて往つたが。おはりに近づくに從ひ、舞臺は記述の自由を與へないことを遺憾とする。」

『さあ。これあこれで忙し。と――』

一行を送り出して外で別れた親分が言つたら、あいつら、巴里にあまえところがあるつてんで、嬉しがつて踊りやがつたよ』

じつさい。ことごとく滿足した會員は。解散を惜むやうに例の饒舌家が五十法のチップをはづんだのを皮切りに、みんな眞似して五十法づつ親分へ獻上して行つたくらゐだ。が、忘れ物でもしたのか。饒舌家は間もなく引つ返して來た。すると親分は、ごく事務的に私と彼を連れて。いま出たばかりの「劇場後の劇場」へ斯うして後戻りしたのである。

面(おもて)を脱つて着物を着た「有名な女優たち」が。觀覧席で飾り化度をしながらきやつきやと騒いでゐた。そのなかに先づ、私は「モナコの岸」のマアセルを發見した。つぎに、ほかの「女優」もすべて「すゝり泣くピエロの酒場」や「人魚の家」や其の他の場處で今夜見た顏に過ぎないことを知つた。饒舌家は草臥れたと言つて、不機嫌さうに隅の椅子に腰かけた。そして直ぐに女のひとりと口論をはじめて、アンリ親分に呶鳴られてゐた。

がやがやするなかで、親分は、開幕まへに客から集めた金を取り出して、八百長役の饒舌家をはじめ、幾らかづつそれぞれの女に配りながら、大陸の日本語で私に話しかけた

『ジョウチ、いゝ商賣だらう? みんなよく働いて呉れるか

俺も楽さ。なに？　有名な女優の名を使ふのは非道えぢやねえかつて？　馬鹿言ひなさんな。そつくり出鱈目だあね。モナ・ベクマンだのジャンヌ・ロチなんて、そんな女優さんがあつたらお眼にかゝりてえもんだ。知らねえのは恥だてんで、紳士連中しきりに領首くからね。そこがこつちのつけ目さ。え？「モナコの岸」？　マアセル？　このマアセルか。止せよジョヂ、此女あお前、俺んとこの嚊あぢやねえか。（笑）

さう言つて笑つた時のアンリ・アラキの顔に、私ははつきりノウトルダムの妖怪を見た。

――と、こゝでこの話しは済んだのかと思ふと大間違ひで、君、忘れちや困る、君もいま巴里へ来てることになつてゐるのだ。で、着早々「女の見世物」を漁りに飛び出す筈だつたが、ま、もすこし我慢しておしまひまで聞くとして、さて――いやに星のちかちかするPARISの夜、聖ミシエルの酒場、大入繁盛のLA・TOTOの一卓で、数十年来この巴里の「不鮮明な隅」に巣をくつてゐる日本老人アンリ・アラキと、老人のいはゆる「脱走いぎりす船員」たるジョウヂ・タニイとは、實はかうして昨夜から今までまだ饒舌りこんでゐたのだ。

が、不思議なことには、夜どほし一人でしやべり續けて疲れたせいか、話してるうちにアンリ・アラキは、だんだん當初の親分的な無頼さを失ひ、それとゝもに、私の尊崇おく能はなかつた「七つの海の潮の香」も、「大膽沈着・傍若無人の不敵な氣」も何處かへすうと消えてしまつて、代りにそこに、「さまよへる老猶太人」らしい淋しい影が一さう擴がり、見る間に彼の全人格と身邊を占領して、この長ばなしを語りおはつたとき、「大親分アンリ・アラキ」は只の見すぼらしい日本の一お爺さんに還元してゐた。

眼をしよぼつかせながらへつと嘆をして彼は結んだ。

「――と言つたふうにね、いまお話しゝたやうな商賣を始めれあ儲かること疑ひなしでさあ。それといふのが、巴里といふところは何ういふものか昔からそんな風に思はれてゐて、早え話しが、巴里にや物凄え場處があるてんで、英吉利人やめりけんなんか、汗水流して稼いだ金で遊ばるそいつを見にやつて來るてえくれえのもんです。だからさ、見たがるものを見せてやるために、ちよいとね、今の話しのやうなすげえところを拵へといて、其の物欲しさうな面の外國の金持ちを集めてしこたま稼だくつて一晩引つ張り廻さう――てのが、つまり、これあわたしの、長い間の、ま、夢でがさ。が、よくしたもんで金になし、第一そんな女もなし、今更この年で日本へ歸らうにも、領事館へ泣き付いて移民送還てのも氣が利かねえしね――濟んませんが、あんた、幾らか煙草錢でも與つて呉れないかね。（笑）」

言ひ終つた老人の顔に、私は、今度こそはほんとにノウトルダムの妖怪を見た。

四十歳から五十歳への 性情醫學 一名甦性術

◇四十歳から五十歳を醫學上では初老期といふ、初老とは生殖器官に於ける活力衰退、神經系統に於ける腦力の衰碌を意味する、外面的には容貌の萎縮、頭髪の脱落、等々であつて、正に性愛を基調とせる人間生活の最大危機といはねばならぬ。

◇精力の去勢的減退、根氣喪失、安眠の不能、頭重神經衰弱的症狀から次第に生殖機能が減退し、始めは性慾だけが旺んで生殖器が無力狀態を示し、或は早漏、不結果無精となり、之を捨て置くと知らぬ間に陰萎となつて性の幸福は全く不能となる。

◇この際治療法としてはカテラン氏の注射法、電氣療法、機械療法、臓器療法等があるが何れも充分とは云ひ難い。が茲に藥物療法として「トッカピン」の服用が最も安全簡單、しかも根本的で斯界の問題として推奬されてゐる。

◇「トッカピン」は生殖腺の根本機能に一種獨特の營養と刺戟を與へ、衰へたるものを速かに回復し尚一層より以上の活力腦力を増進するので初老の悩みは勿論神經衰弱も退散し、眞に何物かを得たるが如き言外の氣分を感得せしめる。

◇「トッカピン」は愉快と元氣と性の旺盛をより以上に求める男女にとつて、絶好の文化藥である。朝のんで晩の氣分、一週間ものめば貴下は必ず人生無上の樂天家となるであらう。

トッカピンは全國到る處の藥店にあり藥價は三圓、五圓、十圓、廿圓。本舗は東京銀座新肴町丁子堂藥房

正宗白鳥氏夫妻の渡歐



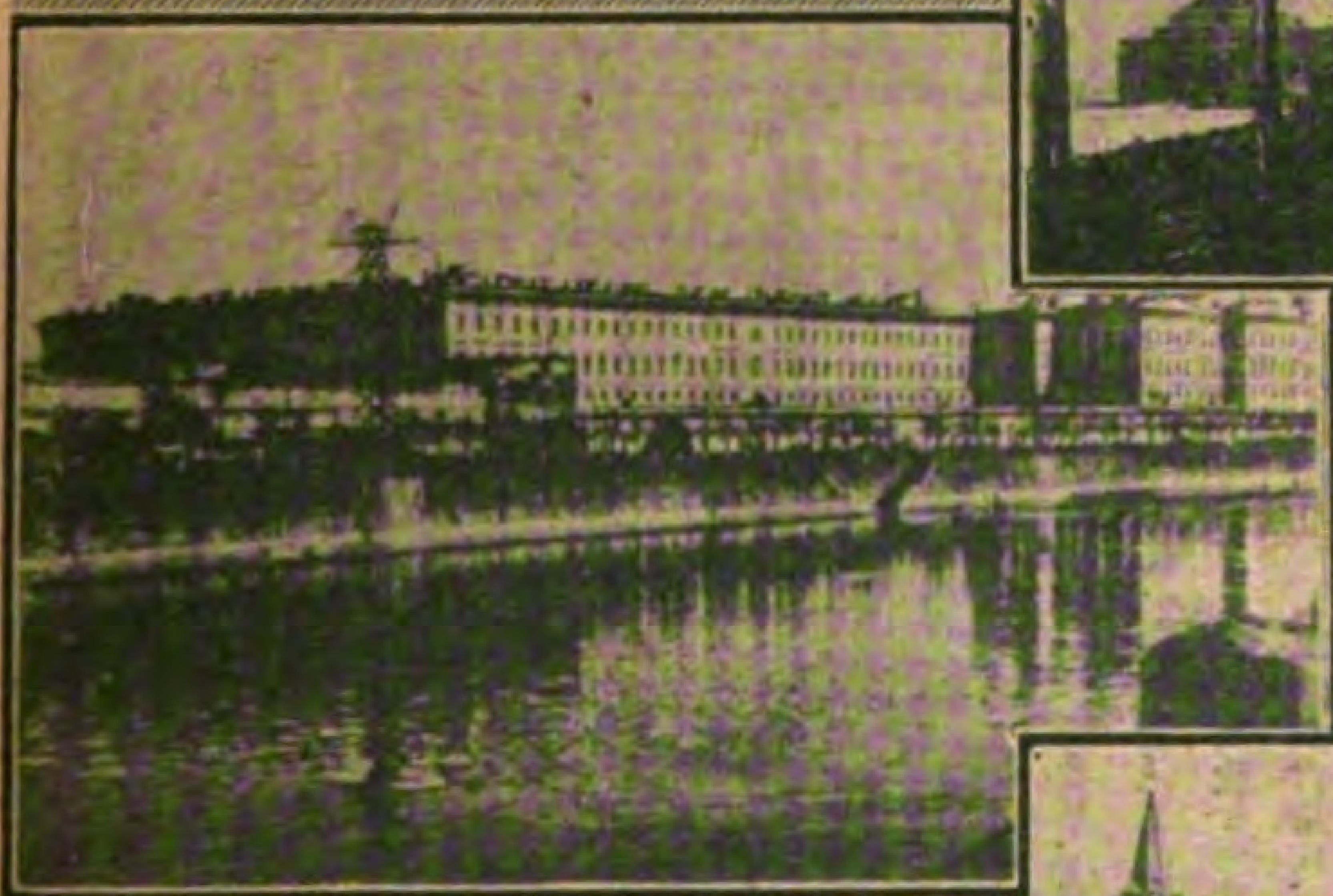
星ヶ丘茶寮に於ける氏の送別會（上）正面右より菊池寛氏、山本有三氏、卓に兩肱をつけるが白鳥氏、小杉天外氏、山本改造社長、左端は島中中央公論社長

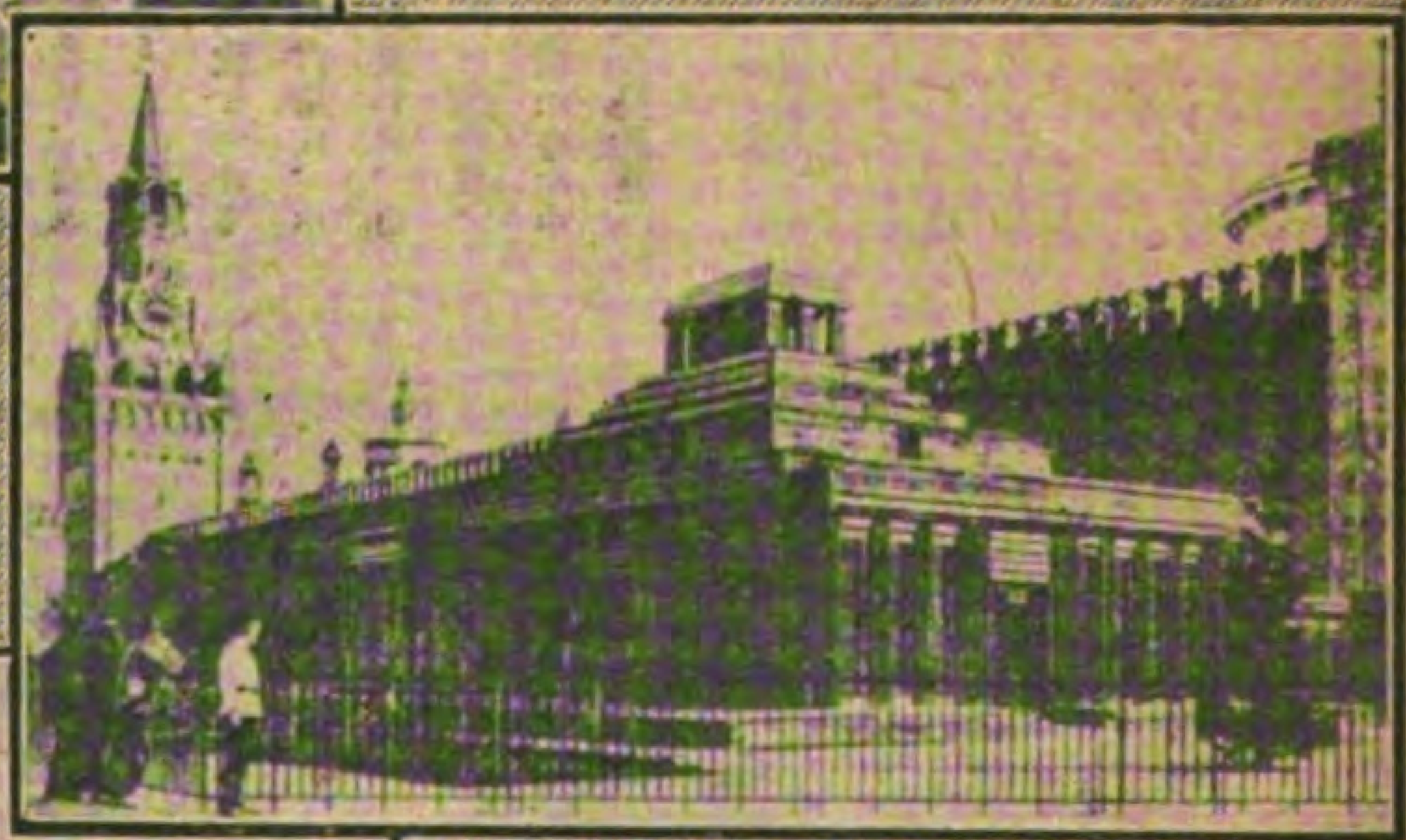
十一月二十三日横濱解纜のコレア丸船上に於ける正宗白鳥氏夫妻（下）



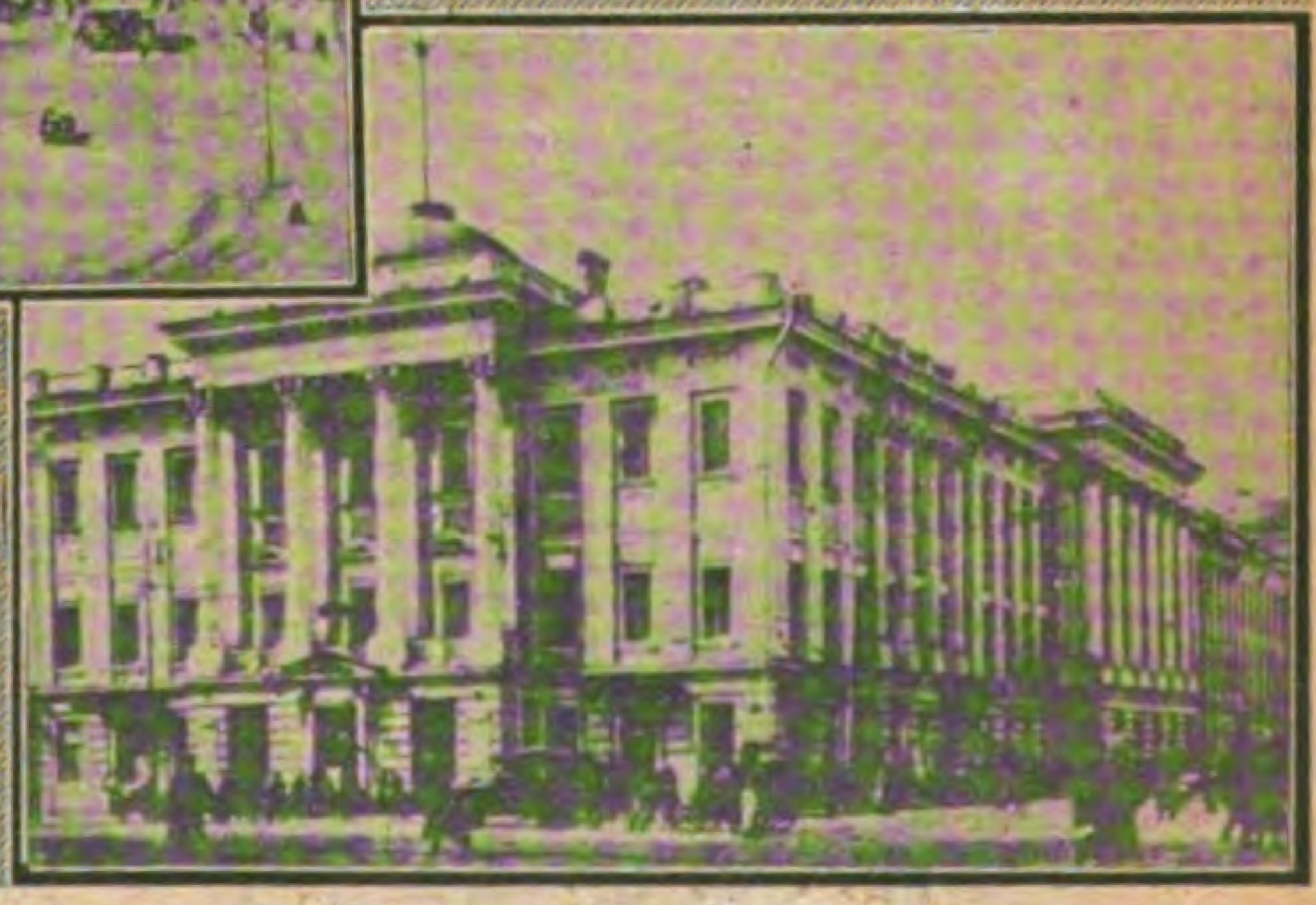
赤露モスクワの新名所











クレムリンの傍にある赤色墓地。革命の勇士を埋葬せる所。（右上）勞働宮殿。勞働者の爲めの文化施設の中央機關。（左上）レーニン廟。背景をなせるはクレムリンの城壁と塔。（右中）大劇場と劇場廣場（左下）ソヴエート聯邦政廳（右下）

ソヴェートロシアの諷刺漫畫



農民教習場

百姓女歎じて曰く「あゝあ退屈だわ。あの人、踊りで浮かれてるのに、わたしこんなとこで讀み書きさせられるなんて。」（左上）



中央執行委員長カリーニンのラヂオ放送

それを聞いてゐる女子共產黨員、カリーニンの肖像に見惚れながら「わたしカリーニンが大好きだわ。せめてラヂオでなりとこの胸の中を打ちあけてやらう。」（右上）

新時代の女

女曰く「お前さんは年が年中コートを縫つてるがいい、わたし踊りが好きよ、さア、ワーニヤお始め、舞踏だ！」（左中）





新時代の夫婦

この節の女は違つたものだよ、煙草の煙で男を捲くだからねえ。（左下）



新舊時代

姑はあの世へのお支度、こちらはソヴェート婦人代議委員の選擧戰。（右下）

ソヴェートロシアの現代風俗



不良少女の相貌（右上）　婦人代表委員の風俗（左上）　少年共產黨聯盟員（ピオネール）（左中）　ソヴェート共和國のシムボル（右下）　初期の赤軍の服裝（左下）

ソヴェートロシアの現代風俗



貧農委員会の議事の光景（上）コムソモルカ（婦人青年共産党員）の風俗（右中）
鐵道職工（左中）オデッサに於けるメーデー（下）



プロレタリア美術の擡頭

右上――彫刻　縛られたる勞働者（吉田清吉）

左上――職場大會　岡本唐貴

中右――黎明（瀬木錦水）

中左――早くいつといて（橋浦泰雄）

下右――彫刻　打倒御殿的雄主義（高須隆介）

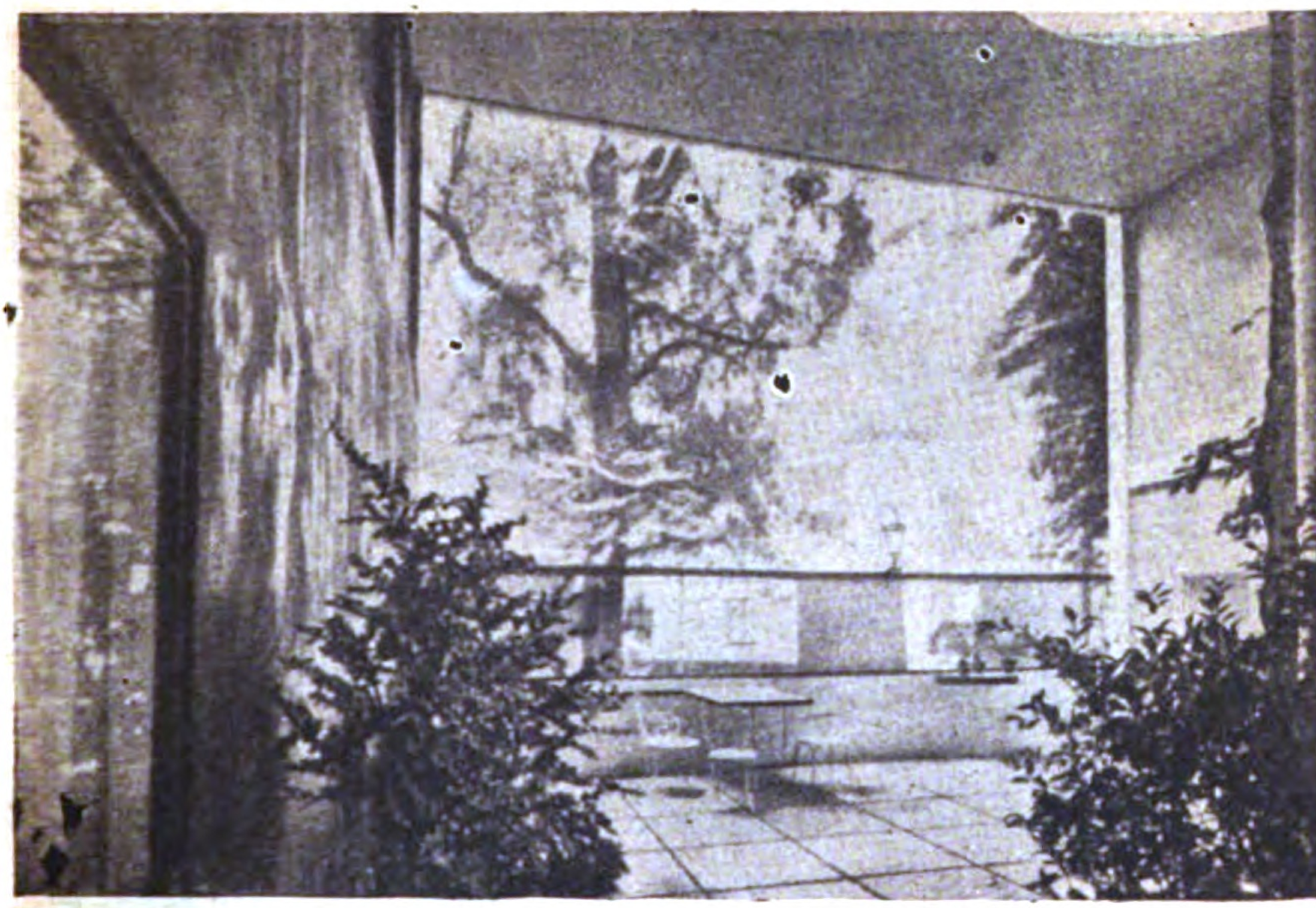
左下――版畫　無題（齋藤治良）

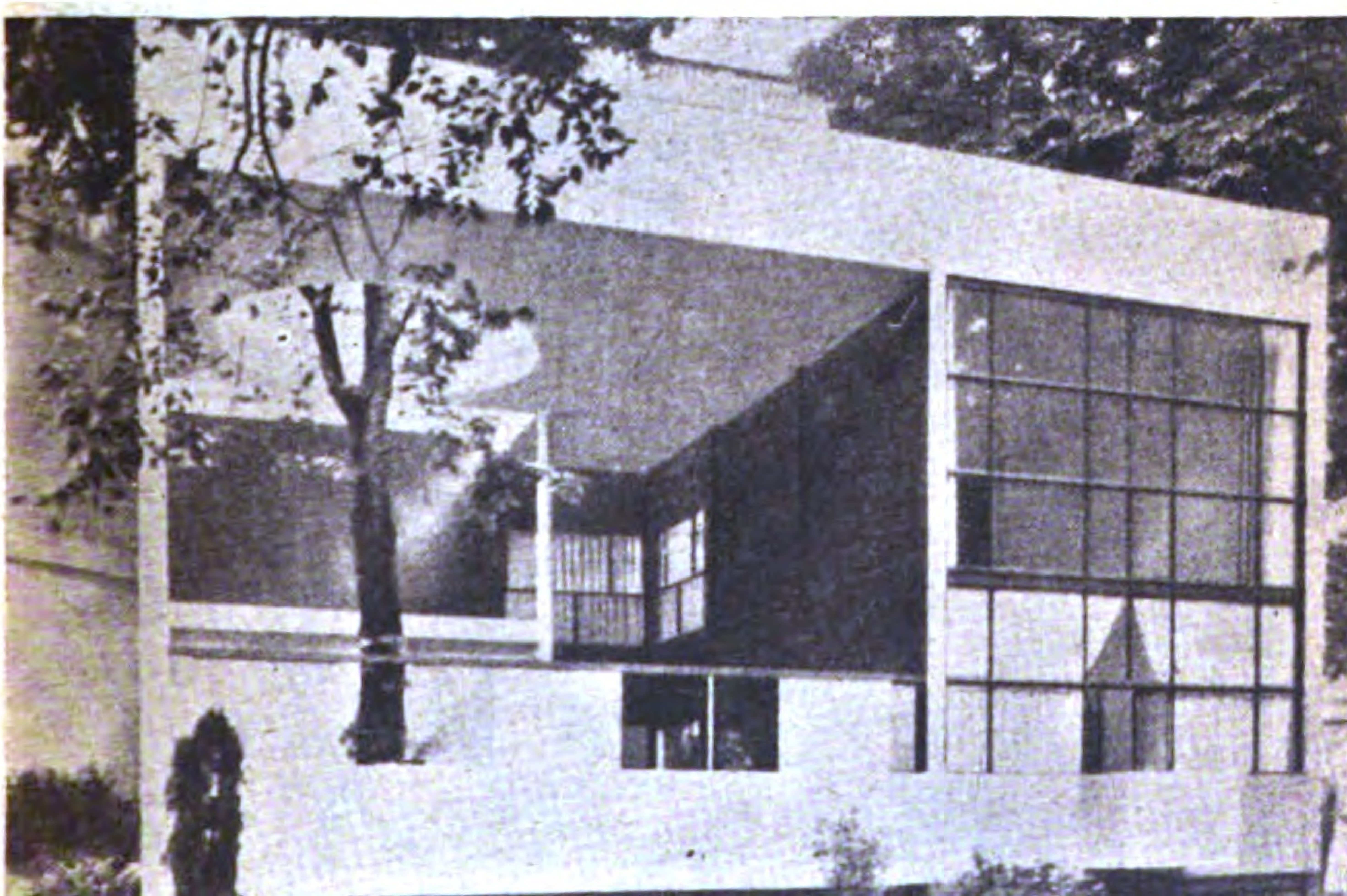




鳥人に捧ぐ

征空の志空しく中途にしてその生命をたてる人々を強く記念するために、オウストリアの知名な彫刻家グスチメス・アンブロジ氏がイカルスの言ひ傳へに靈感を得てものせるブロンズの　彫刻。イカルスは最初に飛行を試みた人で、その蠟翼がとけた時、真逆様に墜落したと云はれる。





家の中に植物のある建物

建築家コルビユヂエは住宅——アパートメント——都市の構成を最も合理的に解決しようとしてゐる。住宅だけについて云へば、彼はそれを「住むための機械」と考へ、最小限度の材料と勞力で最大限度の効果を得べきだと主張する。彼は巴里の郊外に多くの住宅を作つた。それは輕くて、單純で、さつぱりしてゐて、衛生的である。彼は植物を建物と融合させることを好む。庭園を屋上に置いたり、室内に樹を植えたりする。

新著月評

最近政治外交史

坪井九馬三著

煙山專太郎

坪井九馬三氏の最近政治外交史の下卷が現れた。初の二卷をまだ讀んで居ない余としては、新卷の批評を躊躇せねばならぬ理由があるのだが、こゝには、單に新卷だけを通讀して得た印象の一二を同書の紹介かた〴〵述べるに止める。

下卷が狙つてる目標は、十九世紀末に於ける列强の形勢を叙述するにあるが、しかしこゝに記載されてるものは、主として露國の内政外交を中心として、三國同盟の更新されて行つた事情から、露佛同盟の締結、ひいては露佛同盟によりて歐洲に於て三國同盟に對する均勢を贏ち得た露國が、佛國の財的後援を頼みて大に極東に策動するに至り、日淸戰爭に際しては、獨佛の二國を語らつて、日本に干渉するに至つたその活躍ぶりを精寫してる。十九世紀末期以降歐洲政局の最重要なる花形役者たる獨帝ウルヘルム二世登祚來の獨逸政情にも勿論、著者の筆の觸れて居らぬことはないけれども、三十年の永きにわたり歐洲の中原に濶歩した大ビスマルクの失脚に關して僅に露獨再保障條約の滿期廢棄の條に於て、ほんの申譯的に二、三頁を費してるに過ぎない位に、著者の興味は、露國にのみ傾注されてる。アレクサンドル三世の反動政治を說明すべく、ポビユドノースツエフやカトコフを引き出し、殆んど此書の四分の一を費した著者は、ニコライ二世のために一章を設けて更に三十八頁を割いてるのに、獨逸の帝位が續け樣に二度も更迭してる一八八八年の當時のことに付ては、三頁でさつさと片をつけてると云ふ有樣である。從つて獨帝の性格を最もよく示すに足るべき所謂サンレモの悲劇など全く之に言及されて居ない。君主專制の獨逸で、ホーヘンツオーレルンの王朝を知ることの必須なるは露國に於てロマーノフの正體をつきとめるの必要と異つたることはない筈なのに、著者の獨逸に對する同情は、あまりに淡泊にすぎる樣に思はれる。

露國關係の記事では、ウイツテの備忘錄が最も參考されてる樣だ。ニコライ二世の性質を明にするに足るものとして著者が擧げてる幾多の插話は、悉く、ウイツテからの引用ならざるはない。此目的には、ニコライ二世の日誌も、最も適切な材料だが、著者が之を利用されたかどうかは知らぬ。通讀の上で第一に思ひつかるゝは、兩保障條約や三國同盟の談判の推移がいかにも明快にかきこなされてる事だ。著者は、獨逸の外務省が公にしつゝある數十卷の「歐洲各國の大政策」を讀み、その煩はしき外交文書を玩味して、すべての行きさつを細々と述べてるが、いかにも卿手に入つたものだ。

邦人の手に成つた西洋史を見るの時、何とはなしに飜譯臭、編纂臭の嗅ぎつかれ勝なものだが、此書は、微塵もかゝる臭ひの感ぜられざるいかにもしつかりした著述である。從學の我等の卒讀した所では、事實上の誤謬として氣の付いた何ほどもない。ニコライ二世が、ニコライ・ニコラウイチ大公を最信用されたと云ふ著書の斷定は、近刊の皇后の尺牘集あたりを繙かれたら、覆るだらうと思ふ。文久元年の露國軍艦の對馬占領事件を著者は、偶然の出來事の如く、いかにも輕く扱つてるが、これは、巨父島事件をば、英露均勢の爭の一現實と見た著者としては、ちけがわれない事である。個々の史實に付ては余

は上記の外、著者と爭ふべき何ものをも殆んど見出さない。印刷は綺麗だし、校正の誤のないのも良い。漢字の使ひ分けに注意の拂はれてることなども、現代人に對する善い見せしめだ。唯、索引のついてないのと、引用書の掲げられてないのとは、學問的の著述たる此書に遺憾とせざるを得ない。

最後に今一つの遺憾は、此書がつり合ひを甚しく失してる點である。露國に興味を持つことは、著者の自由だが、しかし十九世紀末に於ける列强の形勢を述べんとする著者が己の好む露國のために、露國と劣らない歴史的重要さを有する獨逸を犧牲に供すべき筈はない。著者は彼の言はんとすることをば十分に敍述してるのだから、その點に遺憾はないが、唯、この書の構成は、あまりに、一切の比例を無視してる。三國同盟及二國同盟の發展や、起原に付て各百頁内外を費した著者は、突如東アフリカに關する一章をも設けてる。一八九〇年の英獨協商は、重要ならずとはしないが、ザンジバルの問題を、二國同盟や三國同盟と駢列するの論を失するは言ふまでもなからう。此書をして著者の講義の公にされたるものに過ぎずとせば、余は、その章節の均衡などまでやかましく言ふつもりはない。が、[illegible]の[illegible]に由る所なりと聞いてゐるので、我國の新史學の開拓者の一人であり、史界の重鎭たる著者に對し、斯様な註文を發するも失禮でもあるまいと思ふ次第である。何はともあれ著者の筆の進んで二十世紀に入らんこと、我等の刮目して待つ所である。

(菊判、六五〇頁、定價五・〇〇、東京神田區通神保町冨山房)

赤穗浪士

大佛次郎著

千葉龜雄

赤穗の義擧、赤穗の浪士に關しては、固定概念が、救へぬほど因襲的になつて了つた。小說、講談から浪花節、映畫と、事實を輪をかけて誇大にし、もしくは、事實を有り得ない程度までに引き歪めて了ふ。それは因襲的なものを、その上こち〳〵に固めるのに役立つだけであつた。乾からびた忠義人形や、赤つ面の惡玉が、たゞふら〳〵と動いて居た。たゞそれだけだ。大佛君の「赤穗浪士」はそれらの馬鹿々々しさに堪えられなくなつて、人間の世界の、赤穗義擧を描からとした試みであらう。從來の赤穗浪士では、事件の筋道がい

和文佛譯の研究（[illegible]）[illegible]の入門を一通り終つた人に好適、多少書ける人にもあり、自修用である。[illegible]四十八の參考問題は特に便利である。フランス語の參考書にも漸くこんな風に氣持よい本が出版されるやうになつたと思ふと嬉しい。(四六版二[illegible]頁、定價二・〇〇、東京市神田區小石川町[illegible]・白水社)

英國勞働運動の戰術とレーニズム（ロゾウスキー著和田軌一郎譯）レーニンが英國勞働運動に於て發生せる諸問題をいかに解決して居るかを示すために、是に關せる彼の重要な斷片をあつめたパンフレット。(四六版六〇頁、定價・三〇、東京牛込若町一二・南宋書院)

ロシヤ放浪記（和田軌一郎著）滯露五年間の記錄として「エロシエンコ君と小ロシア旅行」「にわか敎師」「クロポトキンの追悼會」「モスクワの大庭柯公氏」その他が收められてある。相當に興味あるもの。(四六版二〇〇頁、定價・九〇、南宋書院)

作文講話及文範（芳賀・杉谷著、前田晁補）作文講話・作文便覽・文範の三部より成り、便利な書である。時代の推移に伴ふて此度新たに改訂增補された。(四六版六〇〇頁、定價三・〇〇、東京神田通神保町九・冨山房)

私の今昔物語（巖谷小波著）著者五十九才にして、すぎこし日を語る隨筆、二百五十項目。各項目初頭の「今は昔」は、近代人には讀みづらいが、然し洗練された柔かい洒脫な筆に托せられた内容は、甚だ興深い。(四六

くら滅茶苦茶だらうと、人物の性格が、どんなに飛躍的で、有り得ない行動をしやうと、そんなところは一向平氣である。現代人から眺めて、遠いところにある一つのロマンスの世界であり、たとへ創作としてからが、血も肉も通はない、そして恐ろしく幼稚な傳説だとしきか感ぜられなかつたのも尤もである。新らしい「赤穗浪士」は、それを修正した。現代の眼から眺めて、赤穗義擧に横はる、合理的な解決を求めやらとするのである。勢ひ、義擧の一切を取圍んで居る謎の、人物達の性格の自然性を求めやうとするのである。それから、事件に當面する當場人物の、刹那の心理をほり下げ、分析して、神經の動きや、氣持の變化に、相當な、妥當性を與へやらうとしたのでもある。それに、現代を通じて、封建的武士道が、一切の合理性を壓抑した、支配階級の御用思想であつたことにも尖鋭な批判を加へる。

と云つて、それは歴史小説現代化の一面たる、英雄の現實暴露や矮小化――つまり、歴史をすつかり逆に引つくらがへすやうな、既成觀念の破壞を企だてたものではない。むしろ、歴史は大抵のところまでそつとして置いた。吉良義央が、一向つまらない臆病な老人であり、淺野内匠頭が、細かい人間の底がわからない、田舍大名であり、大石良雄は、いくら融通闊達でも、お國家老らしいお國家老であり、その他、苦心の末に仇を討つた最後まで、可なり忠實に傳へられる歴史に因つて居る。たゞ事件のいきさつと、人間心理の動きと、それ〴〵の妥當した人格の躍動において、「赤穗浪士」がこれまでにない「赤穗浪士」を作り上げたのである。

が、それだけならば、「赤穗浪士」は、スケイルの大きい現實主義的歴史小説に安住するであらう。ところが、君は、現實主義を基調としながらに、ロマンチックな躍進に、心臟の鼓動を高めさせる。現實主義的ロマンチシズムへの素晴らしい進出を試みた。こゝに大佛君だけが誇り得る大衆作家的才力がある。君は、冷たい頭腦以上に、暖かい、むしろ熱しきつた心臟の所有者である、その暖かい血潮が、どの人間にも萬遍なく分派されて居る。それに人物と人物を取り組ませる場合、すばらしく巧みなセッチングを、心憎いほど自由に使ひこなす。息づまらせるやうな、高潮した構想が、大衆小説のこつを、申し分なく摑んで居る。たとへば、大石と千阪の對照、あれなどを持つて來たところ、君のどんなに

版・二七二頁、定價二・〇〇、東京牛込早大出版部）

ソヴイエート學生の日記（エヌ・オグニョフ著・平名智太郎譯）原名は「コスチャ・リャブツェフの日記」現在ロシャの中等高等學校に於ける性・試驗・組織・その他の問題を取扱ひ、新興ロシャの心臟にふれて居る。問題小説として代表的なものであらう。（四六版三〇〇頁、定價一・〇〇、東京牛込區市ケ谷田町三の二一・世界社）

平易なる皇室論（永田秀次郎著）鎮嚴と親愛の兩側より皇室をとく。（四六版二〇〇頁、定價・八〇、東京神田小川町四一・敬文館）

佛蘭西文學研究第五輯（東京帝大佛文學研究室編）興味ある内容が盛られてある。（菊版二八〇頁、定價二・〇〇、東京神田小川町三〇白水社）

日本とは如何なる國ぞ（田中智學著、四六版、定價・八〇、東京上野鶯谷・天津民報社）

日本文獻學・文法論・歴史物語及び國語と國民性・日本漢文學史（芳賀矢一遺著）共に、芳賀博士が生前帝大で講義されたもの。むしろ座右に置いて便利な書物である。（夫々菊版四五〇頁、定價二、八〇、東京神田通神保町九冨山房）

巴里の憂鬱（ボードレイル著・高橋廣江譯）ボードレイルのアンニユイとメランコリイは、その深さに於て古今に絶する。本書に收められた詩には既に死の色を帶びたも

何がよいかをあけすけに見せて呉れるではないか。鄙兵衛や、官人や、大石無人などの肯定で、爽やかな引立て役を勤めさして居る。これも同じ趣味で、昔一流の手際だが、この方は、全體の構圖と、どこかしつくり折入れないものがある。多少、假想的な人物だからとばかりいふわけでもない。そんなところには作全體として、脚色の捉へ方にむらがあり、淺と淡の濃淡もたまにあるが、前に擧げた特色が、優に「新一赤穂浪士」の創造としての功績を充分に償つて居る。技巧の美くしさ細かさをも勘定に入れて。(四六版六〇〇頁、定價各冊一・五〇、東京芝愛宕下町改造社)

世界經濟の革新運動

下田將美著

杉山幹

故人フランク・エー・ヴアンダアリツプは世界大戰の直後親しく歐洲を訪ひ、歸來直ちに一書を著して歐洲産業の衰頽と、その將來の積極如何を説し、戰禍恢復の悩みは世人の想像以上に深刻であつて、かねて容易に癒やし難き所以を明かにして、一大警鐘を與へてくれた。平和克復――戰後の好景氣なるものに、反動を直に見舞ふこととなり、戰後十年をだに悩みに悩み抜いてゐる。わが國も亦御多分に漏れないのは、更めていはずもがな、然るに今回下田將美君(大阪每日經濟部長)の手になる「世界經濟の革新運動」の新著は、右の海外の故人の警告が、暗に期待したる新生面打開の方途を指示して、これに結論を下したやうな興味ながら奇妙な因緣を持つものであつて、自分は非常な興味に唆られつゝ全卷を讀了した。

◇

伊太利のマンチニーが戰前唱道した「民族主義」は、世界大戰の揭句に實を結んで、いはゆる「民族自決」の主張となり、遂に小國の分立を促した。まづ墺洪國の分裂によつて墺太利、洪牙利、チエツクの三國となり、ポーランドは獨立し、その他バルチツク海沿岸にあつては、エストニア、ラトビア、リスアニアから、フキンランドの各小獨立國が生まれた。これによつて舊大陸の小天地?において、國境線は俄に延び、無暗矢鱈に、眼に見ぬ萬里の長城が築かれた。かく中歐、ベルカンの地圖の色が塗り替へられると共に、各國は經濟的平時復舊に逐はれ、そこには貨幣相場の混亂動搖も手傳つて、各國は爭つて關税

のがある。(四六版、[illegible])東京府下千駄ケ谷七三三新潮社)

工場新聞([illegible]) 資本主義下の最新武器としての工場新聞に就ての意味機能構成を、具體的に日本語にのべたパンフレットである。(四六版七四頁、定價三〇、東京市神田區錦町一の一二・上野書店)

マルクス主義講座第十一卷 カウツキー的帝國主義とレーニン的帝國主義とを對立させ、極力第三インターナショナルを提唱する細川氏の帝國主義論とその他の三篇より成る。(四六版三五〇、非賣品・東京神田錦町上野書店)

たばこの煙(野波悖著) 著者過去の感想集、卑近な生活を扱つた内容に親しみあり、洒脱な筆には稚氣があふれて居る(四六版四〇〇頁 定價一・五〇、東京府下池袋一・〇〇八平路社)

現代名優身の上話(久佐太郎編) 梅幸左團次・勘彌・猿之助・松蔦・律子・喜久子・故鐵笛・正夫らが夫々語れる生ひたち物語を編せるもの。紙面の惡いのを惜むが、内容が平なる讀物や學術的でなく、彼らの偲ばさる記である所に味がある(四六版三四〇頁、定價一・五〇、東京神田三崎町二の一博文館)

資本主義沒落期の經濟(ヴアルガ著・益田豐彦譯) 本書の内容は、最近數年間に於ける資本主義の主要な事實と發展傾向との概說である。即ち新技術の經濟的結果としての資本主義矛盾の鋭化、資本主義の内的矛

の障壁を高くし、これによつて自國産業の保護に沒頭した。砲火相見え肉彈相擊つ流血の戰こそ熄むだが、新らしく展開されたこの關稅戰爭によつて、各國は遂に自繩自縛の憂き日を見た。而かも歐洲の一大消費國たるロシヤは、國境を封鎖して貿易の國家管理を斷行してゐる。對露通商は、殆んどこれで遮斷されたのに庶幾い。殊に人口一千萬内外、國土狹隘、資源貧弱なる小國が、關稅戰爭に沒頭したとあつては、手近い例が、わが日本において、本土、九州、四國、北海道が、互に割據するやうな封建の古に復つたと同樣である。鐵あり、棉花あり、小麥あり、石油石炭ありの北米合衆國は、如何にも外に對して高關稅を設け、保護主義を徹底せしめてゐるけれども、各州相互の間に州際關稅を布いて通商を障礙してゐる事實はない。いひ換へれば全合衆國を擧げて、關稅は單一の法域に統轄されてゐる。戰後の歐洲は、合衆國の各州が互に對外的に獨立し、個々特殊の關稅壁を立てゝ爭つてゐるに異ならぬ。

◇

右は單り關稅問題の一局に限つて、現下歐洲の苦惱を一寸瞥見したに過ぎないが、際限なき世界的不景氣の蔭には、各國共に、國内的にも重苦しい煩悶懊惱が續いてゐる。下田君のこの新著は、たゞに國際的なる通商自由の運動、或は産業の國際的集中のみならず、國内運動としての産業の合理化、勞資新協調の運動さては以上本論の序論とも見るべき「第二の産業革命」「資本主義經濟の行詰り」「營利主義より民本主義へ」を取扱ひ、「世界經濟の惱ましき時代轉換に對する血の出るやうな努力」の種々相諸傾向を收め、この「新らしい力を築き上げやうとしてゐる時代」の聲を最も親切に紹介してくれた。行文相變らず流暢、氏の隨筆を讀むやうな心持ちで、最後の頁まで讀まされた。(菊版二六六頁、定價二、五〇、東京麴町昭和ビルヂング日本評論社)

田邊壽利譯

社會學的方法の基準

松本潤一郎

エミール・デユルケムは現代社會學者の忘るべからざる師表の一人である。彼は佛蘭西派社會學の主潮とする實證的精神、集團事實の顯現、實質的研究等を最も徹底して敢行し、佛蘭西としては珍らしい堅固な學派、所

房の尖銳化の結果としての慢性的な大衆的失業化と合理化、內國市場の殖得化による世界の市場獲得の鬪爭、世界再分割への展望など、制度としての資本主義の不安定性が說かれ、その淪落が豫期されて居る。而して立論の根據はレーニンの帝國主義論である。(四六版二〇〇頁、定價・七〇、東京牛込神樂坂二の一一叢文閣)

マルクス主義への道(アシヤポヴロフ著・今村保男著)自敍傳乃至追憶記は、從來インテリゲンチアのものせるのが普通であつた。然し本書は一革命勞働者としてのシヤポワロフが資本主義的社會に於ける欺瞞と懷柔・迫害と暴虐のうちにあつて、人生とは何ぞやを考へ、宗教的攪亂をくぐりぬけ、窮極に於てマルクスの宣說に深大な眞理を發見し、その眞理のために死を賭して戰いきたれる內斷的記錄をもれるものである。譯文は流暢(四六版五〇〇頁、定價一・五〇、東京神田錦町上野書店)

藝術の社會的基礎(ルナチャルスキー著外村史郎譯)マルキシズム的藝術理論の基礎をなす「實證美學の基礎」及その發展乃至說明としての「藝術の社會的基礎」――ここでは藝術の本質とその發達過程とを分析する事によつて藝術の社會性が闡明される――と「藝術についての對話」――ここでは現代藝術の諸傾向を批判する事によつてプロレタリア藝術の眞實性がとかれる――とが收められて居る。(四六判二七六頁、定價一・〇〇、東京牛込神樂坂叢文閣)

[illegible]デュルケム學派を[illegible]ことと
によつて、學界にいとも光輝ある一星座を加へたのである。彼自らの研究は自殺、分業、宗教等を始め教育、認識論、哲學等に及んで居り、又デュルケム學派の問題は凡ゆる社會事實に廣く行き亙つて居る。これはデュルケムが總ての社會現象を社會學の對象とせるが故であつて、彼の社會學の特色はかゝる凡百の事實を實證的に攻究すること、而して社會事實を實證的に攻究せんとすれば必ずや社會を說明原理とし社會其者から之を說明しなければならぬことを確信した點にある。そして又實に此點にデュルケム社會學の科學的統一が保障されたのである。

社會學が社會事實を取扱ふ爲めには、先づ此事實が如何なる事實であるかを明にしなければならない。デュルケムは之を個人に對する拘束といふ特質に求めた。これ彼の學說が社會拘束說と稱せられる所以になる。又彼は之を實證的に攻究する爲めに事物として取扱ふ必要を力說した。其眞意は社會事實をも科學的資料として取扱へといふことに外ならない。而して彼が更に社會事實の說明は社會を以てするといふ立場を採つたことは上述の通りである。かくの如き特色ある對象把握、取究、證明によつて[illegible]たる彼の「自殺論」「分業論」「宗教生活の基礎形態」以下の名著であり、又彼の學派の宗教社會學、道德社會學、法律社會學、經濟社會學、言語社會學、藝術社會學、政治社會學、教育社會學、認識社會學、而して綜合社會學等である。私は小著「現代社會學說研究」に於て此等の佛蘭西社會學派の寄與を縷述したのであるから、こゝには一々之に觸れることをしない。

同じく社會事實を問題としても、マルキシズムの說明原理は物的生產力である、がデュルケム社會學のそれは社會其者である。こゝに唯物史觀と社會學との根本的分岐點が求め得られるであらうが、第十八世紀的唯物主義と唯物史觀との相違は後者が社會的精神的事物としての物的生產力を考慮せらるることにあるとすれば、デュルケム社會學はその社會性を純粹に說明原理とし、其上實證的立場を淨化せるものと考へ得るであらう。實にデュルケム的立場は來らんとする社會を揣摩するに非ず、寧ろ現實的社會事實を科學的に解明することによつて、實踐的社會政策を示唆するといふ適當なる實證的態度を固守するものなのである。

藝術の話[illegible]に富ましむるやうな[illegible]。[illegible]四六版二三[illegible]頁、定價一・〇〇、東京上野櫻木町西五柳堂書房

俳人が繪を描くまで（本方秀麟著）俳句で自己の感じを自由に表現し得るに至ると、更に繪畫によつてその情趣を表示せんとする氣持が動く。本書はその間の消息をかたつて、俳句と繪畫とを融合させて居る。（四六版、一五五頁、東京麴町區飯田町二ノ三・寶文堂）

らく我記（高田莊一郎著）現代ユーモア全集の第十一卷で、此の二三年間にものせる著者の感想や諷刺や創作やを集めたものだが、その多方面の趣味を內包した才筆に、讀者は知識と笑ひとを與へらるるであらう。（四六版、五〇〇頁、豫約もの、東京神田表神保町六・現代ユーモア全集刊行會）

思想と信仰（高地大寧著）佛教々學の新世界を建つべく絕えず法海に探して妙珠をさぐるに精進刻苦せる著者が、嘗て江湖に訴へた遺文を收む。著者を偲ぶよすがとして現在に於ける遺徒のものであらう。（四六版五八〇頁、定價二・五〇、東京神田錦町一明治書院）

淺人雲語（得能文著）明治の中期より大正の終りに至るまでの隨筆を收む。沈潛の思惟あり高き學識のありて、著者の人格が[illegible]の下にうかがはれる。[illegible]は相變らず美しい。

「社會學研究法」はデュルケムがかくの如き立場に於て社會事實の研究方法を敎示した著述として不朽の價値を擔ふ名著である。我國に於ても今やデュルケム社會學が漸く一般の學問的興味を惹きつけて來た際に於て、其研究原則を解說した此書の邦譯がデュルケム學派の我國に於ける最も熱心なる代表者である譯者によつて叮寧に譯出されたことは甚だ欣ばしい意義のあることである。此譯書によつて、屢々學界に於てさへ誤解され來つたデュルケムの社會拘束觀、事物として社會事實を取扱ふ態度、又之を說明するに社會を以てするといふ仕方等が一切明かにされるであらうし、又一般の社會研究者が正當なる研究の指導と啓發に接し得られることは云ふ迄もあるまい。(菊版三二八頁、定價二・五〇、東京神田駿河臺刀江書院)

生物學通論

大島正滿著

本誌記者

現在日本には、生物學概論としての優良な書物が少ない。が本書の如きはその少なきものの一つである。

本書、章を分つ三十、S.J.Holms の名著 General Biology に負ふ所多きを見るが、兎に角生物學上の重要事項は、最新の業績に裏付けられた平易な筆を以て、擧げて玆に收められて居る。

著者は先づ、生命の基礎であり、生物無主義を區別する根本である所の原形質を、それからその原形質の形づくれる細胞の種類・機能・構造を精細にとき、ついで單細胞生物に筆を進めて居るが、著者が細胞の起源卽ち生命の起源を、地球冷却現象の際、酸素水素炭素その他の諸元素が或る方法によつて結合した時生じたと見て居るは、穩當な見解である。蓋し將來に於ける生命起源の研究は、此の或るに懸るわけである。

動植物體の構造や發生やを說述した後、著者は第十三章に於て動物の色彩と擬態とを論ずる。從來、保護色警戒色、擬態などは、大自然の妙なる作用として驚嘆され、敎科書などに於ても此の點が寧ろ誇張されて居た如くであるが、著者は玆に最近の生物學界の傾向を引用し、鳥獸昆蟲の類も人類と同じ感覺を以て色彩斑點を視覺するものなりと云ふ從來の人間中心の假定に對して、不信を表明する。まことに、昆蟲類の保護色・警戒色は、そ

(四六版五五〇頁、定價二・五〇、東京市麴町區一番町五第一書房)

マルクス主義の見たトルストイ(國際文化研究會編) トルストイの一生は人生を戰場とせるのそれであり、そこには凡ゆる善と惡とが與つて居たが、只不眞實と云ふ罪だけは、與らなかつたとは、ロマン・ロオランが彼を評せる言葉であつた。然り而して進步せる現代靑年の多くは彼に親しみを覺えないばかりでなく甚しい厭惡をさへ持つて居る。此のトルストイをマルキストは如何に見るか、本書は是に對する甚だ興味深き解答を盛る。(四六版一四〇頁、定價・六〇、東京牛込神樂町叢文閣)

漢文叢書(宇野哲人、鹽谷溫監修) 我國二千年に渉る文化を培養せる根幹としてふさはしい漢書二十卷が、今回、平易なる說明と懇切なる講義との體を供へて、あらはれた。蓋し溫故知新のために意義あるものである。(四六版各卷六〇〇頁、予約品、東京神田北神保町一一・弘道館)

支那の現狀(大西齋著) 朝日常識講座の第三卷である。國民革命にピントを置き、複雜廣汎な支那の內治外交財政經濟を、凡て客觀的事實に卽し、平易に要領よくまとめあげたもの。現代支那の概要を知るに恰當である。(四六版三一四頁、予約非賣品、東京大阪朝日新聞社)

れを餌食するとかげ類の攻撃を免れるためと云はれて居るに係はらず、そのとかげは色に對して全然無感覺であるの事實は、著者の見解を裏書する一例である。玆に哲學上の認識論に對しても興深き示唆が指定される。

次で動物體の再生、異種個體の共棲の問題がとかれ、動物界の團體生活の適例として蜜蜂の社會や、奴隷を養ふたり或る通信法を持てる蟻の社會が敍せられ、是らの團體生活をなす動物の特徴として、單獨生活をなすはいや蚊などにあり得ない現象即ち刺戟に對して全員赫怒して攻撃に出づるなどの事實があげられて居る。著者はかゝる社會分化の眞因を、C. R. Thomson 女史最近の發表に基いて、內的遺傳に歸して居る。が、人類社會を敍するに當つては、ルッソーの「人を造れるは骨・肉でも腦でさへもなく社會である」を引用し、人類今日の進步をその智慧に歸せるよりは寧ろ強く社會に歸して居る。蓋し近時唱導さるる文化社會學例へばオグバーンあたりの見解をそのままに表示せるものである。

續いて著者は、生物の分布、生物進化の事實及その原因に關する所說、ダーウイン以後の進化論例へばド・フリス、ワイズマン等の所說、人類の起源、メンデル遺傳の法則など、見て要領よく說明に紹介し、最後に優生學を說いては、人類の本質を不平等と見、又人類が刻々進步の步を進めて居るや否やに對しては、現代人の體力智力が埃及人希臘人などと較べて何ら進步のあとなきのみならず、白痴その他是に類する者が深く社會に瀰がつて居る事實を顧みて、悲觀的態度を持して居る。只最後の集權主義的社會の欲望は個生物學的の結論ではなからうか。

細かい點をさがせば、ぎごちない點とか、活字の誤りとかがあげられ得るが、然し概論としての本書は恰當のものであり、中の氣の利いた挿繪も嬉しい。讀者はかかる書を繙く事によつて、例へば炭素酸素窒素の循環に見る如き自然界の調和に心寛やかなるを覺えることもあらうし、又例へば生殖細胞、神經傳導、筋肉收縮の問題、動植物分化の理由などいかに未知の世界の多いかに驚きもしやう。

私は最後に生物學は果して可能であるかを問ひたい。「生活現象の根本原理を研究する學」で果して濟まして居られやうか。少くとも現在に於けるが如き廣い漠然とした對象を待つ生物學は恐らく消滅するのではなからうか？（菊版五五〇頁、定價三・八〇、東京神田通神保町富山房）

『吾輩は猫である』に就いて

小宮豐隆

『猫』は、明治三十八年の一月から明治三十九年の八月までのうち、十一回に亘つて、雜誌『ホトトギス』に掲載されたものである。さうして、言はば一回一回讀み切りの樣なものとして、書かれたものである。從つて『猫』は、所謂小說らしい構成的な所を、筋らしい筋といふものを、持つてゐない。もつとも作者は、先きを書き續けるに當つて、前の部分と辻褄を合はせる爲に、前の部分に自然と浮き出てゐる筋らしいものをとり上げ、それを幾らか發展させて見たり、或はそれにある締まりを與へて見たり、さういふ方面にも多少の注意を拂つてはゐる。然しその實作者にとつては、寒月君が富子孃と結婚しようがしまいが、苦沙彌先生の家に這入つた泥棒が警察の手で捕まらうが捕まるまいが、そんな事はどうでも可い問題であつた。作者には、言ひたい事、言はなければならない事、言はずにはゐられない事が、腹の中に一杯ある。それを排泄するといふ事が、第一義の問題である。筋は單に、その言ひたくて堪らない事を、委曲を悉し若しくは單調を避けて言ふ爲の、若しくは今書かれてゐる世界が今まで書かれた世界と全然脈絡のないものではないといふ事を示す爲の、方便として若しくは申譯として、假に設けられた樣なものであるに過ぎない。從つてその點では、『猫』は、少しく誇張を

約して言へば、まつたく出たとこ勝負の、甚だだらしのないものである。若し何等かの意味で纏まつた筋を持つてゐないものは小說ではないとするならば、『猫』は正に小說とは名づけ得られない。寧ろ實錄とか隨筆とか日記とか、さういふ名前の下に分類されて然るべき性質の作品である。事實またさういふ名前を『猫』に冠して『猫』を批評した批評家も、いつだつたか確にあつた様に記憶する。

然しこの分類そのものが直ちに『猫』の價値的等級を意味するものであり得ない事は、無論の事である。小說といひ雜錄といひ隨筆といふは、畢竟、作者ではない他人が、便宜の爲めに、作者によつて表現されたさまざまな藝術形式に、それぞれに與へた名に過ぎない。然も凡ての藝術形式は、それが內容から抽象された形式である限りに於いては、必ず中性である。小說なるが故に隨筆よりも格式が一段高く從つてその値うちも幾倍する筈のものだと考へるのは、華族なるが故に平民よりも格式が一段高く從つてその値うちも幾倍する筈のものだと考へると一般、畢竟その人の頭が迂愚で幼稚で正に封建時代に屬するものである事を、自ら堂堂と告白するに外ならない。

『猫』の作者から言へば、『猫』が小說になつてゐるか隨筆になつてゐるか論文になつてゐるかは、問題ではなかつた。『猫』がそのいづれでもないと宣言されたところで、『猫』の作者は少しも痛痒を感じない。唯作者の腹の中には、表現を要求して止まないものが磅礴してゐる。その磅礴してゐるものを、どうすれば最も適切に表現する事が出來るか。それを例へば咽喉に詰つた痰をかつと吐き出して了ふ様に、綺麗さつぱりと吐き出して了ふ事が出來さへすれば、それが詩になつてゐやうが戲曲になつてゐやうが小說になつてゐやうが、又それらのうちのどれでもないものになつてゐやうが、ただその存分に吐き出したといふ事それ自身丈で、作者は十分な滿足を經驗するのである。

ニイチエは『ツアラツストラ』を書いた。『ツアラツストラ』は元より論文ではない。それかと言つて又詩でもない。戲曲

でもなければ、又小說であるとも言ひ切れない。然しそのためにニイチエの『ツアラツストラ』は、價値がないとは言へない。反對に、ニイチ二の『ツアラツストラ』はそのためにより多くの價値を發揮したと言へない事もない樣である。それは、さういふ種類のどれでもない『ツアラツストラ』には、さういふ種類のどれにも見出す事の出來ない直接性があつて、ニイチエの惱める魂がぢかに我我の魂に話しかけるからである。『猫』を『ツアラツストラ』に比べるのは、色んな點で不都合な事もあり得る。然し、少くとも更に表現を追つて止まない心に、最も適切な表現を與へる爲めに、今までに殆んど類のない樣な形式を創造した點では、兩者は全然同じ道をあるいてゐるものと言つて可いと思ふ。

『猫』が初めて世の中に出た時には、人人はその形式の異樣であるのに、先づ驚異の眼を見張つた。それにも拘はらず人人は、かういふ形式を選み上げて來て、それを自分の內面に最も適切な表現の器としたといふ、作者の獨創力に對して殆、何の注意をも又何の敬意をも拂はなかつた。人人は、コロムブスの卵の樣に、さういふ事は疾うの昔から知つてゐる事で、別に珍らしい事でも骨の折れる事でも、なんでもない事の樣に思つた。其所に、一方から言へば、作者の驚嘆すべき獨創性と作者の驚嘆すべき藝術的手腕があつたとも言へる。人人に何の不思議も感じさせない程に、作者は、その異樣な形式を、親しい、身についた形式として、驅使する事が出來たからである。然し『猫』の藝術的價値を論じようとするものは、何よりも先に、まづこの點を問題にしなければならないものの樣に、私には思はれる。『猫』は小說でもある、論文でもある、戯曲でもある、詩でもある、雜錄でもある、隨筆でもある、日記でもある、さうして又そのいづれでもない。言はば、なんでも這入つてゐる、なんでも入れる事の出來る、乞食袋の樣なものである。なんでも入れられ、又なんでも這入つてゐるから、一つのものしか入れられないものの樣な、束縛がない。氣苦勞を必要としない。自由自在である。此所では、あらゆる心が、その動くがままに殆んど自然に、何の強制もなく、ぞろぞろと躍り込む事が許さ

れる。換言すれば、作者から言つても讀者から言つても、此所でなら、手紙でも書く様な心持で、若しくは爐邊を圍いて座談でもする様な心持で、どんな種類の事でも、言ひたい事を勝手に、遠慮も氣兼もなく、言つたり書いたりする事が出來るのである。實際作者は此所で、自分の言ひたい事を、思ふさま自由自在に言ひまくつた。——その意味では『猫』は、作者の日記であるといふのが、一番適切な名前であるかも知れない。

『吾輩は猫である』といふ題名は、作者自身ではなく、外の人が選んだ名前だといふ事になつてゐる。是はその通りである。然し是は、作者が題名を『吾輩は猫である』としようか、それとも唯簡單に『猫傳』としようか、といふ事に迷つてゐた際に、外の人が決定を與へたといふのみで、『吾輩は猫である』といふ題名が、最初は作者の頭には存在してゐなかつたのだといふ事は意味しない。然も『猫』の第一の冒頭からが既に、「吾輩は猫である」といふ言葉をもつて破題されてさへもゐるのである。

吾輩といふ一人稱には、これ自身の中に、既に滑稽が含まつてゐる樣に思はれる。使つてゐる當人はそれで得意なのかも知れないけれども、そのいかにも尊大ぶつてゐる所が、同時に何となくさもしく見え又寂しくも感じられ、その矛盾が我我に妙に擽つたい樣な感情を刺激するのである。「吾輩は猫である」の吾輩といふ言葉を選み上げた時にも、作者は、それに、同じ樣な感じを籠めようとしたものではないかとも想像される。然も此所で、その吾輩、吾輩を繰り返すものは、例へば選擧區民を前に置いた代議士かなぞの樣なものではなく、獸であり、獸の内でも強い方ではあまりその存在を認められさうもない、一匹の猫であつた。さうしてその猫が、先づ最初に「吾輩は猫である」と堂堂と宣言するのである。さうしてまた得意さうに「名前はまだ無い」と二の句を續ぐのである。吾輩、吾輩と稱へる人間に、滑稽を感じる人と威壓を感じる人と不快を感じる人と憤慨を感じる人とに論なく、此所ではその吾輩が、人間ではなく一匹の猫によつて、いか

にもえらさうに使はれるのだから、誰でもすぐに吹き出したくなる程の、突梯滑稽を感じるに違ひない。『猫』は、さういふ「吾輩は猫である」といふ言葉を題名とし、又同じ言葉を一篇の破題として用ゐてゐるのである。――作者がこの一篇で目ざした所のものは、既にそれだけで十分説明し悉くされてゐると言つて可い。

この事は『猫』の笑ひの性質をきめる上に、最も重要な示唆を與へるものである。この重要な示唆を究明する事なしに『猫』の笑ひの性質を論じるのは、病源を突きとめる事なしに無闇に患者の腹部を切開する外科醫の無謀にも等しい。私は少しこの問題に深入りして行かうと思ふ。

「吾輩は猫である」といふ言葉そのものの中に滑稽がある、當人は非常にえらい積りか何かで頻に吾輩は、吾輩はを繰り返してゐるけれども、さういふ事を言つてゐる奴はと見ると、高が一匹の猫に過ぎない、從つて他人から見れば、それがひどく滑稽に見える。――この事は、既に前に指摘したところである。すると次に、それでは、さういふ事を言つてゐる猫と作者との關係はどうなつてゐるかといふ問題が起つて來る。

一般に『猫』の中の苦沙彌先生は、作者自身を描いたものだと信じられてゐる樣である。或はさう言つても可いかも知れない。苦沙彌先生の中には可也濃厚に作者自身の影がさしてゐる。然しその苦沙彌先生は、吾輩は、吾輩はを繰り返す猫から、どうかすると褒められないでもないが、寧ろ頻にやつつけられてゐるのである。猫は單に苦沙彌先生をやつつけるのみならず、金田夫婦をやつつけ、鈴木藤十郎をやつつけ、東風をやつつけ寒月をやつつけ、『猫』の中では一番ふざけたりからかつたりひやかしたり縱横無盡にあばれ廻つてゐる迷亭をも、さんざんにやつつける。それのみではない、この猫はその潑剌たる才氣にまかせて、或は人間一般を論じ、神を論じ、藝術を論じ、文化を論じ、天馬空を行くの概をもつて、あらゆる機會にあらゆる氣焰を揚げてゐるのである。さうすると作者は、此所では、一方苦沙彌にもなつてはゐるが、

然もその苦沙彌を自分から突き放して、その上に立つ位置にもなつて、もつと適切に言へば、作者は猫の假面の下に、自分の言ひたい事を言つてゐるのだと見るより外はない事になる。

事實またその通りに違ひない。自分の分身として苦沙彌先生を描いた作者は、同時に猫となつて、その苦沙彌先生の色んな言動を色色に批評してゐるのである。――そんなら作者は猫と同じものであるか。

然し作者は猫になつてゐるとは言つても、苦沙彌先生を自分から突き放したと同じ樣に、猫をも亦自分から突き放しても居る。例へば作者は猫に雜煮を喰はせて踊りを踊らせる、三毛猫に失戀させる、泥棒を見て竦み上がらせる、猫が鼠をとるのに自分を東鄉太將に比した所まではよかつたが鼠に飛びつかれて棚からどたりと落つこちろ、最後にはビールを飲んで醉拂つて水甕の中に踏み込んで無殘非業の死を遂げる。かういふ所を拾つて見れば、作者は『猫』の中で一番幅を利かしてゐる猫をさへも、上から見下ろして書いてゐるものの樣である。――是もまた事實その通りに違ひない。自分の分身として苦沙彌先生を描いた作者が、同時に猫となつて其の苦沙彌先生を見下してゐる如く、自分の分身として猫を描いた作者は、同時に猫以上の存在として、又その猫をも見下ろして書いてゐるのである。

自分自身であると同時に他人でもあり得るといふ事が、詩人の無敵な特權だといふ意味の事をボードレールが言つてゐる。『猫』に出て來るあらゆる人物は、いふまでもなく、すべて作者の分身である。然も作者は、その分身を、他人として眺める事の出來る、無敵な特權を賦與されてゐる。從つて作者は、『猫』の中に出て來るあらゆる人間にもなれるとともに、他人としてそれらの人間の言動の正邪善惡美醜を判斷する猫にもなれ、又その猫の言動の正邪善惡美醜を他人として判斷する猫以上の存在にもなれるのである。――もつとも『猫』には、無論、その猫の言動の正邪善惡美醜を他人として判斷する猫以上の存在の意見は、少しも書かれてはゐない。然し、そこに猫以上の存在として作者が立つてゐるといふ事

を認識させるものは、『猫』の題名と『猫』の破題の「吾輩は猫である」といふ言葉である。若しくは篇中到る所に現はれる一人稱の、吾輩は、吾輩はといふ言葉である。假令猫自身は一生懸命に眞面目に眞つ赤になつて何かを得意氣に辯じ立ててゐるとしても、それをもう一段高い所から見てゐると、結局「屁の様な氣焔をふき出」してゐるものに過ぎない、さういつた嘲侮の笑ひが、これらの言葉によつて、全體の上に浴びせかけられる事になるからである。作者は猫になつて、天下の人間のみならず、自分自身の影を濃厚に宿してゐる苦沙彌先生を笑つた、然も同じ作者は猫以上の存在となつて、その猫を笑つてゐるのである。その意味で『猫』の笑ひは、その根柢に於いて、自嘲の笑ひに外ならない。

もつとも猫の氣焔を、結局は勝手な熱を吹いてゐるに過ぎないといふ風に、すつかり見下して了へるほど高い所に、若し作者が身を置いてゐたとしたら、恐らく『猫』は出來あがらなかつたに違ひない。一方ではそれを見下ろす様な心持を持つてゐながら、一方では尙それを見下ろし切つて了ふ事が出來ない、從つて默つて濟ましてゐる事が出來ない、其所にこの作者から『猫』が生れる所以の根柢があり、又其所に『猫』にこの作者の眞摯が動き出る理由の根本が横はる。その意味で『猫』を生む氣分の底を貫くものは、多くの純正喜劇と同じ様に、正に悲劇的な心である。

元來この作者は、一途な一國な、火の様に燃える感情を胸に貯へてゐた人であつた。それがなければ、例へば『幻影の盾』の様な、若くは『坊つちやん』の様なものを、この作者は、書く筈がない。しかも同時にこの作者は、火の様な感情と並んで、是を支配し是を調節する筈の、條理に明らかな、理性を鍛え上げてゐる人でもあつた。然しこの火の様な感情は、どうかすると、理性の支配力や調節力を絶して、猛烈に爆發する事があつた。作者はそれを恐れた。從つて作者は、それを未然に防ぐために、いろんな形で、安全瓣の様なものを用意して置かなければならなかつた。さうしても尙そ

の火の様な感情は、猛然としてその頭を擡げる事もあるのである。その點では、この作者の生活の大部分は、纔に平衡を保たれた天秤皿であつた様にも、私には思はれる。さうして、その纔に平衡を保つ爲めの安全瓣の一つとして『猫』は存在してゐるのである。「發句をやめてから『猫』を書き出すまでの間は、眞暗な穴の中をあるいてゐる様な氣がしてゐた。『猫』を書き出して初めて、先きが明るくなつた様に思はれた」——私が直接作者から聽いたこの言葉も、また、一面から、この間の消息を物語るものであるに外ならない。

この作者は、事物を必ず兩面から考へなければならない、物の見方は決して一面的であつてはならないと考へ且つ實行しようと努めた人であつた。然しこの作者の裏に燃えてゐる火の様な感情は、直接に、一途に、一國に、物を見、物を感じ、物を考へたがつた。それが理性とともにあるき、若くは理性から調節され制御され得る内はそれでもよかつたが、然しどうかした機會に理性の力ではどうする事も出來ないほどに力強く動き出す場合には、作者は必然に、一面的に物を見、物を感じ、物を考へるべく餘儀なくされざるを得なかつた。それが作者を、作者らしからず、我が強くも我儘にも頑固にもした。然もそれは、あとでは必ず、作者の心を暗くした。

是は主として頭の中での問題である。實行上の問題にも當て箝り得るには違ひないが、然し實行には實行に移るまでのうちに可也の反省や意志が加はり得る。反省の鋭い、意志の鞏固なこの作者にあつては、從つて、それがよくせきな場合でなければ、實行にまで移されないうちに、中途で喰ひ止められて了ふ事が多かつたからである。然も内省的な人間にとつて、その事が實行に移されると移されないとに論なく、ある事を感じ若しくはある事を考へたといふ事は、既に動かす事の出來ない一個の事實である。作者は頭の中でこの事實に出會ふ毎に、あとでは必ず心を暗くした。然し作者の心をその都度暗くしたといふ事は、必ずしもその都度作者の火の様な感情の威力が減殺されて行つたといふ事を意味しない。反對

に、ある時その火の様な感情は、自分の見、感じ若しくは考へたところのものを、已むを得ない事とし、若しくは正當な事として、それに支配や制御を加へようとする理性を憎み、其所から全然解放されて了ふ事を、猛然として要求する様な事も屢あり得たのである。作者の頭の中では、ある時期の間は、理性の悲哀と感情の叛逆と――換言すれば、兩面的に見ようとする心と一面的にしか見られない心と一面的にしか見られなかつた事を悲しむ心、と一面的に見て構はないと主張しようとする心と、さういふ心が幾重にも入り亂れて、少しも安住を與へる事がなかつたものの様に、私には想像される。かういふ幾つもの心が頭の中に入り亂れて歸一する所を知らない様な頭の狀態を持つてゐる者にとつて、『猫』の様な形式の作品は、最も適切な表現の器となり得るものではなかつたか。――不正を憎み、惡を指彈し、醜を擯斥し、誠實と單純とを愛した作者は、その憎み指彈し擯斥するものをも、兩面から觀察した上でなければ、自分の意見として是を公表する事を欲しなかつた。然し當時の作者の中に燃えてゐた火の様な感情は、もつと直接にさうして一圖に、さういふものを憎み指彈し擯斥しなければゐられなかつた。他人の立場に立つて再應それを檢覈した上で、二つの立場が互に働き掛ける所を眺め、其所から正當な結論を導き出して來るといふ様な、そんなまだるつこい手續は踏んでゐられないほど、その要求は作者を刺激した。その刺激を直ちにとりあげて、そのまま紙に、吐き出す様に書いて了ふものとして、『猫』は最も都合の可い形式ではなかつたか。――なぜなら『猫』は、作者夏目漱石が夏目漱石としての意見を述べるのではなく、猫が、作者が猫になつてはゐるが、然し猫は必ずしも作者の全部ではない事は初めからはつきり知れてゐる。その猫が意見を述べるのだからである。意見を述べるものが猫である以上、その意見が、假令一面的ではあつても、それは作者夏目漱石の全部の責任ではなく、作者夏目漱石の一部の責任であるに過ぎないからである。その點で『猫』は、作者の心持を樂なものにする。腹が立つても、その腹立ちをすぐそのまま其所に書く事が出來る。喧嘩をしても、その喧嘩を又すぐそのまま其所に書く事が出來る。一應も再應も兩面から觀察して、その結果、不正はどつちにあると、斷案を下す必要

は、此所では少しもないからである。

——かういふと、或は作者を卑怯な様に考へる人がないとも限られない。然し『猫』の形式が、作者夏目漱石の一面にしか責任を持たせない様に出來てゐるといふ事は、主として創作心理の上の問題であつて、それは、『猫』一篇が讀者に與へ得る藝術的若くは倫理的影響に對して、作者夏目漱石がその一部しか責任を負はないのだといふ事を意味するものではない。作者は『猫』で、誠實に、自分の見た事、感じた事、考へた事を記錄してゐる。その點では恐らく作者は、誰の前にも恥ぢる所がない。ただそれが、錬りに錬り鍛へに鍛へられた結果の發表ではなくて、言はば反射的に表現せられたものである。その反射的であるといふ點に作者は引け目を感じる、その感じが、かういふ風な形式をとつて發表せられれば、さして強く作者の心を刺さなくても濟むといふのである。この引け目は、寧ろ作者自身が作者自身に對して感じる引け目であつて、他人に對して感じる引け目ではない。その意味で作者は、自分に對しては或は卑怯であつたかも知れないが、他人に對して決して卑怯ではなかつたのである。然もこの際自分に對して卑怯であるといふ事は、天に對して謙遜であるといふ事に外ならない。

作者は『猫』で、自分の感じた事を、言はば反射的に表現してゐる、と私は言つた。然しこの事は註釋を必要とする。なぜなら『猫』は、表面的には、決してさういふ尖尖しい感じを持つてゐないからである。それは、第一にこの作者には、物の姿を刻み出す活動そのものに寄せる、多大の興味があつた。第二にこの作者には、生の感情を生生しく寫し出す事に對する、本能的な嫌惡があつた。第三にこの作者には、いくら憎んでも結局までは憎み徹せない、人類に對する暖い愛があつた。第一のものから『猫』は、作者の當時の感情とは緣の薄い、場所や場面や人物の、いろんな巧妙な描寫を得た。それが方方に鏤められて、『猫』の空氣は可也ゆとりのあるものになる。第二のものから『猫』は、輕蔑と誇張とに彩

どられた作者自身の痼癖を得た。從つてその痼癖は、痼癖としてでなく、滑稽として我我に訴へる。第三のものから『猫』が受けとつたものは、どんなに作者が不愉快な心持をもつて對してゐるものでも、結局奥の方ではそれと握手しようとしてゐる所がありでもする樣な、全體の上に現はれた、和やかな暖かな空氣である。――かういふ要素が集つて、『猫』の味を、一色でなく、可也複雜なものにする。さうして『猫』に、『猫』を生み出した根本の氣分とは正反對な外貌を與へさへもする。『猫』を、陽氣な賑やかな、落語かなぞの樣なものに見る人は、畢竟、この外貌のみを取り上げて論らつてゐる人なのである。

『猫』を批評するのに、同じ作者の『文學評論』の中の、スヰフトに關する批評が、よく持ち出される。諷刺と滑稽とに對する作者の意見は、『猫』の笑ひの性質を理解する上に必要な手引となるものであるには相違ないが、この作者とスヰフトとは、人生に對する態度の上に、根本的な相違がある樣に思はれる。『猫』の作者もスヰフトの樣に、懷疑的な氣持になつてゐた事は、爭はれない。然し『猫』の作者は、いかに懷疑的になつてはゐても、人類への愛丈は捨る事か出來ない。それは常に作者を率いて、作者を人間に近づける。スヰフトも感情過多の爲めに惱みぬいた人の樣である。また倫理的に潔癖であつた人の樣にも見える。さうしてその爲めにスヰフトは人間一般を憎んだと言はれる。然し『猫』の作者は、箇箇の人間の惡を憎みはしたけれどもその箇箇の人間そのものを、若しくはその奥を流れてゐる人間一般を憎む事は出來なかつた。假令人間一般を憎み得る事があつても、またその奥の人類を憎む事は出來なかつた。憎みに徹して生き得るには、『猫』の作者は、あまりに淋しい人だつたのである。――この作者が、人が誠實を缺き技巧を用ひ策略を施す事を極端に憎んだのも、そのために天眞の愛の流露が遏まれて、單純に魂の肌と肌とを觸れ合せる事を不可能にする。その意味で自分の淋しさが容易に充たされる事がない事を、憤つたものであるに外ならない。

『猫』では人生の惡がいろいろ笑はれてゐる。然し『猫』で笑はれてゐる惡は、多く抽象化され類型化された惡であつて、割合に具體的なものが少ない。是は何故であるか。

是は一つは、作者の實人生に觸れる程度が、當時まだ僅少であつたせゐもあろかも知れない。然し、それよりももつと重大な理由は、作者に十分具體的なものはあつても、それは餘りに身邊すぎ眼前すぎ生生しすぎるために、特にそれを類型的なものにし抽象的なものにするのでなければ、表現するに堪えなかつた、といふ點にある樣に思はれる。例へば同じ作者の『道草』である。『道草』の題材を形づくつてゐるものは、『猫』が書き出される少し前の、然し生活氣分から言へば殆んど同時代と言つて可い時分の、作者自身の生活である。その『道草』では、作者は、勿論作中のどの人物よりも遙に高い所に立つてはゐるが、いかにも具體的に、一一の事件を描いてゐる。もし作者が『猫』で、當時、惡と感じて憎んでゐたところのものを、具體的に書かうと欲したならば、少くとも『道草』の範圍丈でなら、十分具體的なものが書けた筈である。然し作者は、それを書かなかつた。假令書いても、それを抽象的に、類型的に、おかしい事としてしか書かなかつた。不愉快な事、腹の立つ事、寂しい事、情ない事、さういふ種類の凡ての事は、何所かで抽象的なものにし、類型的なものにし、從つておかしい事として表現するのでなければ、少くとも『猫』を書く時の作者は、それを表現する氣にはなれなかつたのである。

然し、抽象的なものにされ、類型的なものにされ、おかしい事にされて表現されたのでもなんでも、ともかく此所では、一切腹の中に溜つてゐるものが、すつかり吐き出して了へるのである。殊に『猫』の樣な自由な形式を持つてゐる作品では、例へば落雲館事件の樣に、一方ではそれを笑つて叙述してゐても、一方ではその笑はれる事の中に可也打ち込んで行く事も出來る、その意味で作者は、自分の上に常に或拘束を加へてゐるとは言つても、一面ではその拘束を超えて、自在に自分の感情を直瀉する事も出來るのである。作者は『猫』を書く事が出來た爲めに、どの位心持を爽やかにし得た

か分からない。

殊に興味を惹かれるのは、苦沙彌先生を中心とした、迷亭や寒月や東風や獨仙や、さういふ人達によつて作られてゐる、特別な社會の空氣である。この社會には特に人情がかつたものは動いてはゐないけれども、それでも何かしら底の方から暖かなものが滲み出て來る事は爭はれない。さうして其所には、遠慮も氣兼も、禮儀も作法も、猜疑も嫉妬も、權謀も術數も、我執も偏見も、狹量も固陋も、さういふ實生活に於て人を息苦しくする樣なものは何もなくて、あるのは直截と自由と平和と品位とである。『猫』の中の猫は、是を「太平の逸民」と評してゐる。まことに是等の人達は「太平の逸民」であり、是等の人達によつて形づくられてゐる社會は二十世紀の武陵桃源であると言つて可い。さうして鈴木藤十郎君や金田夫人や多々良三平君の樣な、或は直截を知らず品位を缺き自由を持たない人人といへども、他の色んな人物からさまざまにやつつけられる事によつて、即ち税金を拂ふ事によつて、またこの武陵桃源の一員たる資格を持つ事が出來てゐるのである。

かういふ社會を創造し、かういふ社會の空氣に浸るといふ事は、息苦しいいらいらした生活を續けてゐた當時の作者にとつて、どれほどの慰安であり得たか、想像するに難くない樣な氣がする。この點ででも『猫』は、作者にとつて、たしかに救拔（エルレーズング）だつたのである。この作者は『猫』の最後の回である第十一回と殆んど相接して書かれた『草枕』で、主人公の畫工をして、非人情を說き、二十世紀に於ける非人情の功德を說かしめた。『草枕』の畫工がその非人情の旅から受ける筈の功德は、やがて『猫』の作者が『猫』から——少くともこの苦沙彌先生を中心とする一つの社會の空氣から受ける筈の功德である。『猫』はその意味に於いて、著しく相違した外貌を持つてゐるにも拘らず、その奧の方では『草枕』と重要な點で握手する。

かういふ態度は然し、一般には、回避的な消極的な態度だと言はれてゐる樣である。息苦しい人生に於いて、その息苦しさを突き拔ける事なしに、その息苦しさから救拔（エルレーゼン）してくれる世界を創造し、その中に立て籠つて休息するといふ事が、回避的にも亦消極的にも見えるのであらう。然しその反對の、直行的な若しくは積極的な態度とは、如何なる態度であるか。車夫や車力の樣に、日が暮れても夜があけても、のろのろと車を曳き續けてゐる事が、直行的な積極的な態度であるか。藝術にこの意味の救拔（エルレーズング）を求めて、其所でいら立つた頭を靜め苦しい息をつくといふ事が、何故にいつでも安臥し休息してゐる事を意味するのであるか。その世界の空氣に頭を浸す事によつて、更に勇氣を回復し、あらためて實人生とまともに取つ組み合ふといふ事が、それらの作品が存在する事によつて、なぜ否定されなければならないか。車夫車力といへども、睡眠はとる筈である。八木節も聽き映畫も見物するに違ひない。さういふ事とかういふ作品を書くといふ事との間に、どれだけの相違があるか。

『草枕』の中で作者は、「二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此出世間的の詩味は大切である」と言つてゐる。『草枕』が作者の精神生活にとつて必要な睡眠であつた如く、『猫』も亦、一面、作者の精神生活にとつて必要な睡眠でもあつたのである。

『猫』の作者は、慶應の末に生れた、日本人である。その意味に於いて作者が、近世日本の精神文化史の一面を最も濃厚に彩どる、禪文化の傳統の上に立つてゐるといふ事は、少しも不思議な事ではない。又假令さういふ傳統を繼承しなかつたとしても、この作者ほど實證的であつて然も感情の過多に苦しんだ人が、自力でその感情を超越して自然そのものと一つになることを、その修業の根本とする禪に、十分の共鳴を感じるといふ事も、亦少しも不思議な事ではない。

『猫』に於いて、作者のその方面の修業が、既に成就されてゐるとは、無論私は思はない。然しその方向に於いて、『猫』

が正しくその方向を指してゐるものである事は、事事しく說明するまでもなく、明白である。作者が此所で、他人の惡を笑つてゐるのも、又自分の惡を笑つてゐるのも、又比較的さういふ惡に染まる事の少ない一つの小さな社會を創造して喜んでゐるのも、又それら凡ての上に立つてそれら凡てを大きく笑はうとしてゐるのも、凡て作者の態度が、この方向を指してゐるものである事を證明する。一方から言へば、『猫』の作者の態度がこの方向を指してゐるものであると見る事によつてのみ、それが初めて統一された態度として理會され、又それが後の作品を俟つて徐徐に完成されて行く態度と脈絡する所以のものを理解する事が出來るのである。――手短に言へば、かういふ『猫』の樣な過程を繰り返し繰り返ししながら、作者は、『道草』を書き得る樣な心境に、大正四年には到達し得たのである。

作者の態度を消極的と言ひ回避的と名づける人が、若し作者のこの態度をその證としようとするものであるならば、それは、唯その人の眼が、單に表面に眩惑されて、奧に火花を散らしてゐるものに眼を放つ事が出來ないといふ事を、自ら證明するに過ぎない。

作者は、禪坊主が寺に立て籠ると同じ樣に、書齋に立て籠つてその一生を過した。その點では或は作者は、消極的であり、回避的であつたと、言はれ得るかも知れない。然しそれは唯、肉體を方方に持ち廻らない丈の話である。さうして、此所では問題が內面の問題である以上、肉體を持ち廻るか廻らないかといふ事は、いかなる契機をも形づくる權利を持つてはゐない筈である

元來作者の態度が回避的であるといふ事は、究明を必要とする一大事に逢著しながら、それとまともに取つ組み合つて格鬪する勇氣がなく、かはせる丈は身をかはして、あはよくばその究明を有耶無耶の裡に葬り去らうとする態度である。又作者の態度が消極的であるといふ事は、究明を必要とする一大事に逢著しながら、それとまともに取つ組み合つて格鬪

する勇氣がなく、究明しない事は氣懸りではあるが、いつまでも煮え切らずに因循ついてゐる態度である。然しこの作者ほど眞面目に眞劍に又まともに、究明を必要とする一大事と取つ組み合つた人はなかつた。殊に正義と愛との對立と調和とは、殆んどこの作者の一生を苦しめ——換言すれば、この問題は、この作者が、一生の間かかつて、最も眞面目に最も眞劍に最もまともに、取つ組み合つた問題であつた。この態度が若し消極的であり回避的であるならば、トルストイの態度も亦消極的であり回避的でなければならない。ストリンドベルクの態度も亦回避的でなければならない。

『猫』に就いても同じ樣な事が言はれ得る。『猫』では凡てのものが滑稽化されて、笑ひの衣裳の下に、現はされる。是が恐らく『猫』の全體を不眞面目なものに見せ、作者の態度を消極的にも回避的にも見せる、重なる理由になるものと思はれる。然し、當時は最も眞面目に行動したものが、後でその行動の目的物を形づくつてゐたものは一瞥をすら値ひしない無價値なものであつたと氣がついた時、自分が當時それにも拘らず最も眞面目に行動した事を嘲笑したくなるのは、極めて自然な事ではないだらうか。然もこの際、當時の行動を馬鹿馬鹿しく醜く感じる心は、さうして當時の行動を嘲笑したくなる心は、決して不眞面目な心ではない。又消極的な回避的な心でもない。寧ろ人は、眞面目であればあるほど、積極的であればあるほど、それを、馬鹿馬鹿しく、醜く、嘲笑したく感じる筈である。然もこの事は、時日を隔てて過去の自分の行動を省みた時にのみ、起り得るものとは限らない。他人の行動を現在眼前に見ても起り得る。自分の行動を現在眼前に見ても起り得る。啻に行動のみならず、言ふ事、感じる事、考へる事に就いても、同樣に起り得る事實である。さうして『猫』の笑ひの根柢は、この種の嘲笑に根ざしてゐるのであつた。其所に、何の、不眞面目といひ消極的といひ回避的といふ、さういふ批評が這入りこんで來る、餘地もあり得ない。

唯、例へば過去の自分の行動が徒勞に過ぎなかつたといふ事に氣がついて、それを非常に不愉快な事に考へ、或は憤慨し或は悲歎する者、換言すれば、それを嘲笑する事の出來ない者もあり得る事は爭はれない。然し是は氣質の相違であつ

て、其所から眞面目不眞面目の區別が生れて來るべき筈のものではないのである。さうして『猫』の作者は、それを嘲笑したくなる種類の、男性的の作者であつた。同時に『猫』の作者は、それを嘲笑し得る丈の、高みに身を置く事の出來る作者であつた。

所詮、この高みに身を置いて自分自身を眺める――眞面目に眞劍に愛し憎み喜び悲しんでゐる自分を、そのまゝで高い所から眺め得る――さういふ二重の心の活らきを理會するといふ事が『猫』を理會する上の、最も貴重な鍵となるのである。

編輯者雜記

×

皆さんおめでたう！

諸君と共に心からこの昭和四年の新春を祝福しませう。

昭和四年度の本誌の活躍に期待を有たるゝ諸君よ。喜んで下さい。計畫は十分に熟してゐます。二月、三月號をも樂しみにしてゐて下さい。

×

新年號は新時代への進出を祝福する意味で態とゴタゴタしたものを避けて、一粒選り、力作揃ひの大物ばかりでスッキリとした雜誌を作つて見ました。讀んで見れば判る通り、どの一篇と雖も力の籠らない好い加減のものはありません。實に堂々たる大雜誌だと自信してゐます。

×

頁がウンと超過した爲めに、已むを得ず割愛しなければならなかつた力作が澤山あります。別に玆に列擧しませんが、その方々には深くお詫びをし、讀者諸君には次號を期待して頂きたいと思ふ。

〇

沈滯不振の一年は過ぎた。局面打開の聲も既に久しい。行詰つた現狀を打破する力は何處から生れるか。これは新時代の新勢力でなければならぬ。時代の潮流は常に動く。亡びゆくものをして亡ばしめよ。眞に新時代を背負つて立つべき新興勢力が生れる時、時代の沈滯不振の空氣は一掃されるであらう。一九二九年よ！希望と光明の一年であれ！

〇

論文と讀物に不相變本誌獨特の充實した編輯振りを見て頂きたい。斷じて他雜誌の追隨を許さぬものであることを自負する。殊に創作六篇新鋭の力溢れた傑作のみを集め得たことは近來の會心事である。新春文壇を聳動すべき問題の作品は本誌から現れるであらう。讀者の精讀を希望する。

□

十二月號で讀者諸氏にお約束しておいた島崎藤村氏と前田河廣一郎氏の長篇小說が作者の御都合で新年號から掲載するの運びに到らなかつたことはかへすがへすも殘念だが、それだけこの二つの長篇は磨きに磨きをかけられてよりよき作品となつて諸氏に見ゆるであらうことが期待される。が、それにしても本誌新年號の出來榮えの素晴しさはどうだ。編輯者は聲高らかに「まアこの內容を見て下さい」と言はずに居られない衝動に驅られる。創作欄では今年は新年號に傳統を破つてことさら新進氣鋭の作家の作品のみを集めてわが文壇に新鮮な生々した空氣を注入しようと試みた。文壇、讀書界に一大センセーションを起すや必せりだ。

◇

時代は躍る！時代は惱む！

一九二九年の幕は切つて落された。

中央公論は、諸君！深刻な情熱を湛へ、溌溂たる盛氣を漲らして生れ出でた。

光芒は燦として輝いて居る！

尖鋭な感覺を感覺し、聰明な認識に裏付けられたこの豐潤な內容を見て下さい！

一粒選りの力作のみ集つた本誌には、一分の隙もない、はちきれる力がある！

炎々火を吐く河合教授の名文、益々冴ゆる新世界巡禮、創作に於ける新進の力作。資本主義日本は何處へ往く」の項目は、觀念的を排してあくまでも現實に即す本誌の態度を徵せるもの。聰明なる大衆は本誌を要望し待望して居る。私たちはその期待に背かぬ確信と自信とを持つて居る。

「夜明け前」を出すについて

島崎藤村

私は今ある試みを思ひ立つてゐる。しばらく私も長い物語を書く機會がなくて過ごしたが、昨年本誌に短篇「分配」を寄せた後あたりからまたその心が動いて來たので、今度新たに『夜明け前』の稿を起し、成るに隨つて本誌に寄せることにした

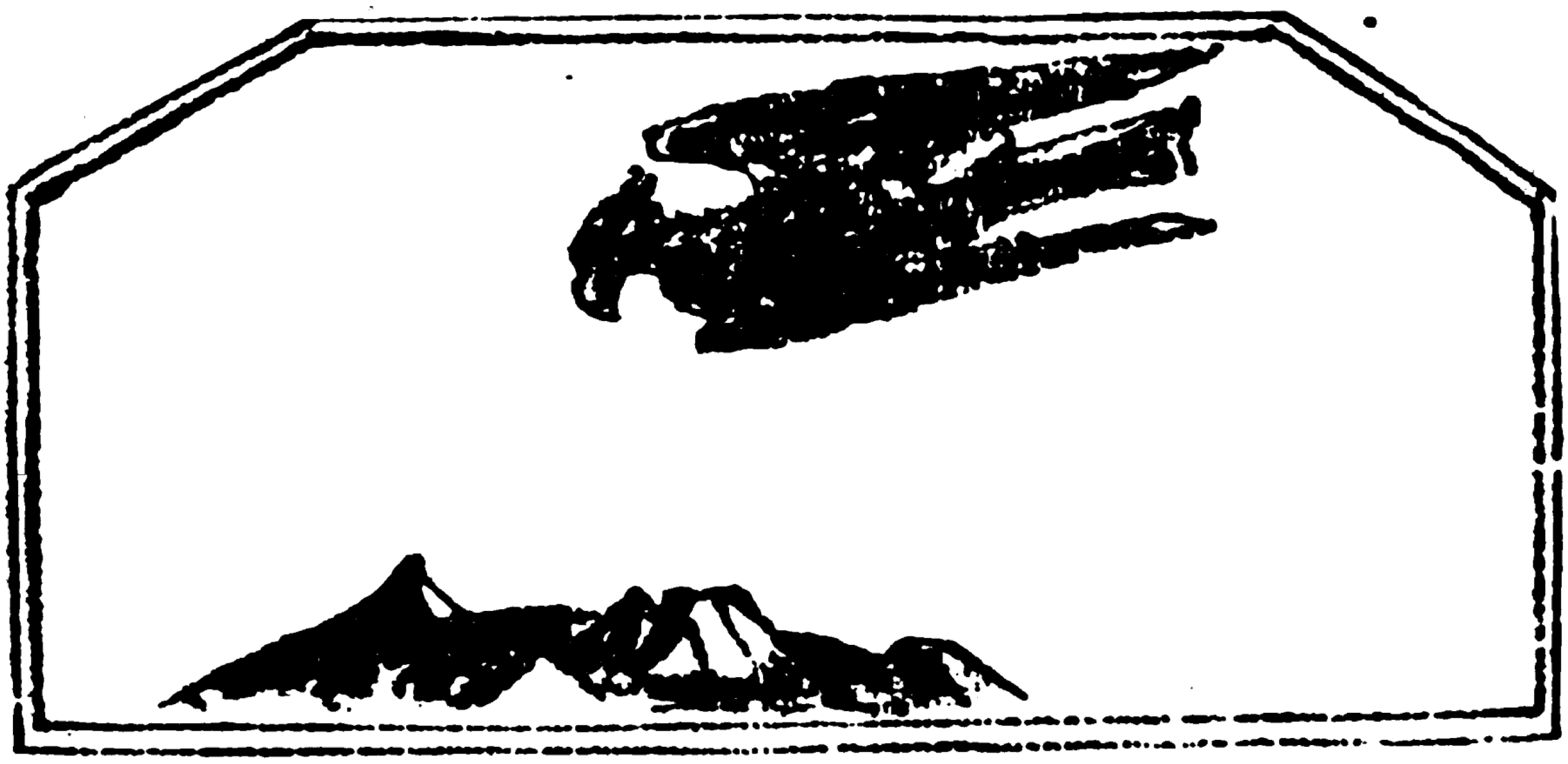
この作は相應の長さにも達しようと思ふから、これを連載して行くには左の方法によりたい

一年四回のこと。

一月、四月、七月、十月の四回に亘つて掲載して行くこと。

第一回は來る四月號よりのこと、

これを出すについて、何かこゝに書きつけることを本誌の編輯者から求められた。しかし私は今しばらく默してゐたい氣がする。自分の内から子供の生れて來る前であればあるだけ、その沈默を作者としての言葉に替へたい氣がする。實のところ、私はこの作をするについて何も讀者に約束することは出來ない。たゞこれが私に取つて第五の長篇小説であること、私はまた成るべくやさしい平談俗語をもつてこれを綴るであらうといふことが言へるのみである。過ぐる一年半ばかり、私は出來るだけ諸雜誌への寄稿も斷り、引籠り勝ちに暮して來た爲か、まだこの作に着手してもゐない前から、いろいろな取沙汰が世に傳へられるやうになつた。それらは皆、過ぎた言葉である。『夜明け前』一篇は私として、一つのスタディを持ち出して見るに過ぎない。



牛山ホテル

岸田國士

牛山よね　ホテルの女將
同　とみ　よねの養女
藤木さと　眞壁の妾
石倉やす　佛蘭西人の妾
眞壁　S商會出張所舊主任
三谷　S商會出張所主任
三谷夫人
鵜瀞（うのとろ）　S商會社員
島内　同
金田　金田洋行主

岡　寫眞師
納富　劍道教師
ロオラ　別居せる眞壁の妻
その他、ボーイ、車夫、水夫、女等

佛領印度支那のある港

九月の末――雨期に入らうとする前

港に近く、佛國人の住宅地と、所謂「アナミット」の部落とに接する一區劃、その中心にある日本人經營のホテル。

一

ホテルの帳場兼女將の居間――蓙が敷いてある。
前面一段低く、椅子、テーブルを置いた土間。
右手に玄關を兼ねた玉突場に通ずるドア。左手は二階に上る階段と、食堂の入口。正面は大きな窓。そこから波止場の一部と水平線が見える。
日が暮れようとしてゐる。

とみ（十九）が、風呂から上つて、化粧をしてゐる。
やす（二十八）は、腹這ひになつて雑誌を讀んでゐる。
二人とも白木綿の襦袢に腰卷だけをしてゐる。
さと（二十四）が、土間の上り口に腰をおろして、ぼんやり窓の外を見てゐる。これは、浴衣がけである。

さと。船はまうさつかり、着いたつだつとん、なんしとつとだろかい。
とみ。ベル・ビユウで茶でも飲んどつとたい。
やす。檢疫で止められとつとだろ。上海から來た船はやかましかもん。
とみ。ほんに、コレラんはやつとるとだつた。おやすさん、風呂へ入つてこんかな……。
やす。今日は、やめとかう。
とみ。ひゆうじこつけ……！（無精者！の意）
やす。東京の奥さんに見てもらへばええ。印度支那にどぎやん別嬪がをるか……。
さと。船のつく日はいやいや。なんにも手につきやせん……。
やす。あんたが、また、何を待つとつとな。
とみ。ムツシユウ・眞壁たい、きまつとるぢやなつか。
やす。今まで其處へをつた人間ば、誰が待つもんか。
とみ。そんなら誰や。

さと。…………

やす。今度來る主任さんな、あんた、名前ば覺えとらんかい。

さと。ムッシュウ・三谷………。

やす。さうさう、今朝、八號に行つたりや、そんムッシュウ・三谷のこつで、みんな大騷ぎだつた。

とみ。奥さんば連れて來つていふとだつてえ………。

さと。そら善かばつてん、わしがこつば、なんか云ふとりやせんだつたかい。

やす。あんたぐりや、運のよか人間な少なかて云うとつた。

さと。さういふこつちやなかと。あつちのおツ母さんがわしのこつば惡う思ふとりやせんかしらん………。

やす。どうしてや。たゞ、こぎやにや云ふとツた。――あん娘がもうちツと家できばツてくるつと、よかばつてんがあて………。

さと。そぎやんした相談ばもちかけられたばツてん、わしや斷はツた。そぎやん云ふつてちや、今から、いくらなんでもなあ………。

やす。そらあさうたい。尤も、わしなら、「わかりやせん。そこがあんたと違ふとこつたい。わしや、今ん男と別れたら、また八號にでんごろごろしとツて、代りのムッシュウ・フランセばつかまゆつたい。今更國なんぞに戻つて、苦勞する氣にやならん。

ロオラ(三十)がはひつて來る。猶太系の佛國女、可成り贅澤なりをしてゐる。

さと、慌てゝ起たうとする。

ロオラ。（眼ざとくそれを見つけ）もし、もし、あなた、眞賢と一緒にゐる方でせう。眞賢に會はせて下さい。

さと。（そこへ立ちすくんだまゝ返事が出來ずにゐる）

とみ。ムツシユウ・眞賢、をらんばい。今、ケエに人ば迎ひぎや行つた。

ロオラ。うそでせう。あなた方、みんなうそつきです。わたし、あの人に澤山話したいことがありますから、どうしても會ふんです。

とみ。をらんけん、をらんていふとた。嘘と思ふなら、部屋でんなんでん見て來つとよかた。

やす　ほんなこてケエに行つとるけん、見て來なつせ。天草丸の着いとるケエだるけん……。

ロオラ。店の方へ行つても、會へません。何時でもゐないつて云ふんです。此處へは來たくありませんけれど、しかたがありません。

やす。わからん人ね、あんたも……。アレ・ボワル・オ・ケエ。ムツシユウ・エ・ラ・アベク・マダム・リシヤマ。セ・セリユウ。

ロオラ。C'est pas vrai！（かう云ひながら、どんどん二階に上る。）

とみ。よかつかい。あぎやんこつさせて……。

やす。むぞげえ！……。（可哀さうに！の意）

さと。裁判な、まだ片づかんとかしらん……。

やがて、ロオラが降りて來るが、その儘出て行つてしまふ。

やす。　ムッシュウ・眞鍋が日本に來るごと云ふけん、慌て出したつだらう。あんたん顔ば、善う覺えとつたなあ。

さと。たつた一ぺんなるばつてん、會うたたあ。

とみ。こないだおツ母さんに、あんたんことば、いろいろ訊いとつたえる。マリヤアジしたかてろん、子供が出けたかてろん、なんてろん、かんてろんて……

やす。雲南の山ん中は、寂しかばい。好いた男となりや、あぎやんとこれ行たて、暮すとつたい。辛氣しゆうてしたてちや出來んし……丸一年、自分の國の言葉ば使はでん居つて見ろな、あんた、どぎやんあつて思ふ。君が代だいろなんだいろ、歌はうごつなるばい。

とみ。日本語ば教ゆつとよかろてえ。

やす。あんたたちと話すごた行かんたい。そんなら同じこつたもん。（起ちあがり）どら風呂へいつて來う……（出て行きながら）一番の蚊張、早うまた吊つとかんとおつ母さんに怒らるるばい。

とみ。今日は入らんて、いふとつて……。

（起つて、これも二階に上る）

岡（三十二）寫眞機を提げてはいつて來る。神經質らしく、一種の畸形的體格をした男。

岡。（さとを見つけ）あんた、ひとりかな。

さと。誰に用んあつとて

岡。實はあんたに……なんて、別に用と云ふわけぢやなかばつてん、寫眞ば一枚、撮らして貰はうて思ふち……。

さと。わしや、こん土地いをる間は、寫眞なんど撮りたうなかと。

岡。どうして？

さと。いつそ共(とも)そぎやんいうとるけんたい。

岡。何處で……八號でかい？　ところが、さういうとつて、みんな撮つてますよだ。お花さんが、先月キヤビネを撮つたし、お千代さんは、こないだ、大型を寫したし、それで、みんなには內證だつて云ふんだから、おかしかよ。妙な癖は、つけたもんたい。

さと。ほうら、そぎやんいうて、あんたが喋舌つてしまふけん、好(す)かん……。

岡。あんただけは特別、默つとつてあげる。それに、あんたは、もう、あすこにや居らん女(ひと)なんだもの。そぎやんむつかしかことといはんてちやあ、一枚寫しておきなはりまつせ。かう云つちや何だが、九州へんにや、僕ぐらゐの寫眞屋はゐませんよ。

さと。そぎやん威張るなら、お千代さんの寫眞ば見せちみなはり。どぎやん寫つとるか。

岡。お千代さんとあんたとは、違ふたい。寫眞は實物次第ですからね。

さと。今度來る。三谷さんていふん奥さんば寫させて貰へばよかたい。

岡。それはそれ、これはこれ、商賣と好意とをごつちやにしないで下さい。あんたなら、ただで寫さうて云ふとたい。

さと。そぎやんこついうとつて……

岡。冗談ぢやなかばい。あんたが、ムツシユウ・眞鍋と二年間一緒に暮したのも、商賣氣を離れてのこと、僕があんたの姿をカメラに納めて置きたいと希ふのも、これや、寫眞師岡なにがしとしてぢやなかです。金もなく、名もなく、印度支那三界に果敢ない戀を追ふ一日本人の、最後の心盡せです。

さと。……。

岡。そぎやん顔して、なんたいな、とつけむにやあ。おさとさん、わらくしや、こつでん、眞面目ですばい。あんたは、明日から自由なからだぢやありまつせんか。

さと。……。

岡。兎に角、二三日うちには、自由なからだになつとだらう。たつた一年でよか。僕の傍にをつてくだはり。一年が永すぎれば一月でもええ。一月、國へ歸つとば、延びやあち下はり。なあ、おさとさん、後生のお願ひです。

さと。……。

岡。ムツシユウ・眞壁には金がある。僕にはないばつてんが、僕には、ムツシユウ・眞壁にはなかものがある。あんたは、男の眞心と云ふものを知つとりますか。愛する女のためには、命でも差出すと云ふ男の眞心を……。必要な時は、金で縛つて置く。用がなうなれば、金をやるから出てゆけ。これが男の眞心たいな。成程、そのお蔭で、あんたは、五年の年期を三年あまりで濟ますことができ、その上嫁入りの支度金まで持つて、お父つつあんの傍へ歸れるとて云ふかも知れん。しかし、そるがなんたいな。あんたは、ムツシユウ・眞壁と、さういふ風に平氣で別れられるぢやなかですか。

さと。平氣……。どうしてそぎやんこついはるつとな。

岡。どぎやんしてん別れられんと云ふんぢやなでかせう。

さと。そぎやんこつ云ふても、しよんなかもね。

岡。つまりそこたい。しよんなかごつさせたのは誰な。

さと。もう、わかつとるけん、やめち下はり。わしも、馬鹿ちやなかけん……。

岡。さうですか。これお安しよんなか。寫眞だけ撮らせお下はり。記念に一枚……（寫眞機を用しながら）こゝいまでゝかな。

さと。そんなら、今、着物ば着換えちくるけん、待つとつてな。（急いで階段を昇る）

岡は寫眞機を程よき處に据え、撮影の準備をする。

この時、ホテルの女將よねを先頭に、鵜瀞、眞壁、三谷夫妻、島内、金田などが、どやどやはひつて來る。

岡は驚いて、寫眞機を引抱える。

よね（五十五）——太つた女、無雜作なつくり。何處となく苦勞人らしい、さつぱりした女。
鵜瀞（四十二）——毛深かい眼のどんよりした男。酒飲みのだらしなさ。
眞壁（四十）——がつしりした、活動家らしい、幾分荒んだ風貌。無表情。
三谷（三十七）——秀才型の紳士。固苦しい氣取り。
三谷夫人（二十六）——内地ではさらに見る現代風の若夫人型。和服でヴェールをかぶつてゐる
島内（二十五）——事務員らしい地味な青年。
金田（四十七）——植民地の小商人タイプ。不似合な口髭と眼鏡。

よね。（岡を見て）そぎやんところで、あんた、なんばしよつと？

岡。（何やら口の中で云ふが聞えない）

よね。（大きな聲で）誰もをらんとかいいここにやあ……？

食堂の方から、だるさうに、土人のボーイが現はれる。

よね。ムッシユウのバガアジ・アポルテ・アン・オオ。コンプリ？

ボーイ。モア・パ・モアイヤン。

よね。プルコア・パ・モアイヤン・エン？ トワ・ツウジユウル・マラアド。アロオル・ヴア。オン・ガルドラ・パ・トア。コンプリ……？

三谷。なんていふの。

よね。しよんなかですとたい。アナミツは……。支那人の方がよつぽど役にたちますばい。

岡。荷物は店のボーイにやらせるからいゝよ。奥さん、お疲れでせう。部屋でおやすみになつたらどうです。もういゝんだろ、婆さん。

とみが二階から降りて來る。

よね。（とみに）部屋の方はもうよかかい。

とみ。あゝ、よか。

よね。そんなら、どうぞ……

岡。（三谷に近づき、名刺を差出しながら）私、かう云ふものです。どうかよろしく。

三谷。あゝさうですか。へえ、こんなところに、日本人の寫眞屋さんがあるとは思はなかつたね。や、これからいろいろまた……。

岡。（三谷夫人に會釋しながら）是非一度、そのうちに……。

三谷夫人。ほんとに……。（夫に）ねえ、あなた、船の中で撮つたのをお願ひしたら……。（岡に）現像もなさいますんでせう？

岡。はあ、何でも致します。

三谷。まあ、後にしよう。出すのは面倒臭い。

三谷夫人。どうせ駄目かも知れませんわ。

眞壁。（三谷夫人に）そいぢや、どうか……。（先に起つ）

よね、三谷夫人、三谷の順にその後につづく。

よね。（階段を昇りながら）今日はボーイが寢とるもんですけん……。

眞壁。二日ぐらひでも、船はあれで、なかなか疲れますよ。

三谷夫人。あら、そんなでもございませんの。香港でゆつくり休んで參りましたし、海がそれや靜かで……。

眞壁。（聲だけ聞える）社宅の方は、もつと場所もよし、建物もしつかりしてゐますよ。

（[illegible]）

やすが風呂から出てくる。

やす。なんしとつとな、いつそとめ、こぎやんとこつで、ぼうつとして……。

金田。奴こそなんか、そぎやん太か脚ば、出やあち……。おい、とみ公、コンニヤクを一杯……。

鵜澤。おれにも……。

とみは戸棚から、コニヤックの壜と杯を二ツ出して注ぐ。

やす。(岡に向ひ)そゑから、あんたは、どぎやんしたつ。一體全體、誰ば殺したと……。

岡。(聞えないふりをして)もう暗うなツたけん、今日はやめとかう。

鵜澤。(金田に)どうだい、今夜あたり、一番戰かはさうか。

島内。今度の大將、うるさいぜ。

金田。なに、わしが引張り込むよ

鵜澤。妻君も一緒にか。だけど、一昨日の晩は、荒かつたぜ。MYの連中、青くなツてたよ。柴野の奴さん、歸りの旅費をみんなすツちやツたからね。

島内。小森だよ。太い奴は……。一晩に八百ピヤストルつていふのは、レコードでせう。

岡。ちや、みなさん、お先へ……。

闇が出て行くと、入れ違ひに、車夫と別のボーイとが荷物を運んで來る。

金田。ちや、今夜は何處で……？
鵜瀞。此處はうるさいから、おれんとこでやらう……。飯は出さないよ。
金田。斷はらなくつたつて、食つて行くよ。
島内。(とみに)おい、飯はまだか。
とみ。今日はどさくさして、遲なつたつですばい。
島内。(食堂をのぞきに行き)なんだ、まだテーブルの用意もできてないぢやないか。
とみ。そぎやんこつ、わしに云ふたてちや知らんけん。
島内。おれも、何處かへ家を借りよう。三度三度催促しなくつちや、飯を食はさないなんて、人を馬鹿にしてやがらあ……
……。
とみ。今日は、きつと、御馳走んあるとばい。
島内。こゝの御馳走つて云へば、鹹辛い茶椀蒸しにきまつてるぢやないか。
鵜瀞。あいつを、まだ食はすかい。鷄のトサカまで刻み込んである奴だらう。
とみ。あぎやんこつば云ふとる。
やす。ほんなこつだるけん、しよんなかたい。
金田。島内さん。今晩は、あたしが支那飯をおごらう。
島内。そいつあ、有難いな……

やす。金田さん、わしは悲しうてやれん、
金田。鵜澤先生。どうしたもんだらうね。
鵜澤。くせになるから、よしてくれ給へ。
やす。あんたにや、頼みやせん。
鵜澤。三谷夫人つて云ふなあ、あれや、どつかで見たことがある。
金田。さういふ女は、よくあるよ。
鵜澤。おれは不圖、學生時代のことを思ひ出した。もう二十年も前のことだ。神田の下宿でごろごろしながら、幻の戀人にひそかな微笑を送つて居た頃だ。
金田。おい島内さん、出掛けよう。
鵜澤。まあ、聽け。
金田。面白くないよ、さういふ話は……。
鵜澤。さうかなあ。そいぢや、さよなら。
島内。荷物は、このまゝにしといていいですね。
鵜澤。知らないよ。君が責任を持つんだよ。我輩は、主任の引越しなんか手傳ふ身分ぢやない。その爲めに、君つていふ申分のない秘書役がついてるぢやないか。君が居ないうちに、主任夫人の長襦袢が一着、鞄の中から消えてゐたつて、罪を我輩になすりつけちやいかんよ。
島内。（もぢもぢしてゐる）
やす。よかばな、ムツシユウ・島内、わしが番しとつてあげるけん。行つて來なつせ。

金田。よし、よし、さういふ人も居なけれやむ。ちや、また後で……。

兩人出て去る。

鵜瀞、コニヤツクを注いで飲む。

とみ。金田のハゲちやん、善うなかな、毎晩ムツシユウ・居内ば引張り出しやあち……。

鵜瀞。やくな、やくな。

とみ。悍りさん、お門違ひですよだ。

やす。（鵜瀞に）なして人の顔ば見とつとな、そぎやん眼つきばして……。大好かん、馬鹿んごたる。

鵜瀞。おや。

二階から、よねが聲の聞える。とみを呼んでゐるのである。とみはその方に行く。

鵜瀞。どうだい、近頃、病氣の方は……。

やす。もうちつと惡かこてえしとくと。

鵜瀞。早く歸つてくれつて云つて來るだらう。

やす。何時まつでん、こぎやんしとれとは云はんくさい。

鵜瀞。浮氣をしろとはなほ云ふまい。

やす。云はんてちや、すつときやすつたい。

鵜源。つまらねえから、よさう。時に、おさとさんは、泣いてるか、笑つてるか。

やす。人んこつばつかり心配せんてちや、早う嫁御でん、貰へばよかてえ……。ええ年ばして、見ちやをられんばい。

鵜源。昨日、誰かもそんな事を云つたよ。おまへさんにや悪いが、おれんとこで辛抱できるなあ、おやすさんぐらゐなもんだつて云つた奴がある。

やす。ふん。そぎやんこつ云ふた奴の面ば見たか。わしや、辛棒ていふこたあ、大好かん。そんかわり、人がなんと云ふたてちや、好いたこたあ、すつたい。

鵜源。おれみたいなことを云やがる。おい、もう空だぜ、この壜は……香港・上海・西貢・新嘉坡……それと、こゝにもう今年で七年……。好きなことは何でもやつて來たが、やつたことは好きなことばかりぢやない。お前さんだつてさうだらう。思ひ出してもいやなやうな男の顔が、二つや三つ頭の中にこびりついてるだらう。

やす。……。

鵜源。おれだつて、かう見えて、月夜の晩に、西貢の植物園を、女に泣かれながら、夜通しうろついたこともあるんだ。

やす。もうよかよか、胸ん悪うなる……。

鵜源。變な持病だね、そいつあ……さあ、また來よう。また來るよ、モン・プチ……。

やす。あゝ、またおいで、グロオ・コション……。

鵜源は出て行く。やす一人になる。

やすは、暗くなつたあたりを氣にしながら、窓ぎわに行く

乾草の唸り聲。——長い沈默。

やがて、よねととみが、二階から降りて來る。

よね。（とみに）そんなら、早う行たつ來……。（やすに）ケエで二時間も立たされつ、そん上、こんだあ、税關がせからしゆうしね。

やす。ピボオつて、好かんやつ、そぎやん時、ばつかり、役人顔して……。

よね。そるがくさい、此ん前、米ば積み出す時ムツシユウ眞壁の掘らせ方が足らんだつたけんたい。そぎやんだろもん、今までこぎやんこた、なかつた。尤も、荷物が澤山ぢや……。

やす。そるから、おつ母さん、昨日ん話しや、どぎやんしゆうかな。パツケエの話くさい。

よね。そぎやんこつていふもな、わからんやうで、何時の間にだいろ、知れるもんばい。わしや、やめたがよかろて思ふ。一月や二月、そぎやんこつしてみたとこつで、幾りやんもなりやせんぢやなつか。そりよりや、お前、はよう戻つてやつた方がよかばい。

やす。おつ母さんな、こぎやんこたあ、なかなか堅かな。

よね。うん。已、堅かばい。鬼に角、きまつた男があつてえ、そぎやんこたあ、已にやでけん。そいで逝てきたつだもん、こるまで……。そん方が身のためだるけん。苦勞んなうして よかばい。病氣と云ふちやあ、こぎやんして、ぶらぶら遊うどらるつたあ、誰のお蔭かな。もうちつたあ親身にならにや。あつでん俊しか人ぢやなつか。」

やす。せからしか！……

よね。なにがせからしかもんが。

此の時、とみが駈け込んで來る。その後から、佛蘭西の水夫が、醉つぱらつて追ひかけて來る。すると、もう一人が、それを止めようとして引つ張る。それでも、とうたうはひつて來て、今度は、そこにゐたやすの肩に手をかける。やすは、平手で、烈しくその頬を打つ。二人の水夫は、何か怒鳴りながら出て行く。

よね。八號と間違へたつたい。

再びロオラがはひつて來る。

ロオラ。今晩は……。眞壁、もう歸りましたか。
よね。なにか用かな。
ロオラ。一寸、會つて話したいことがあります。さう云つて下さい。
よね。あんた、ムッシュウに用のあんなら、辯護士に頼んだ方がよかでせう。アボカな……。その方がよかですばい。
ロオラ。アヴオカ、駄目です。眞壁からお金を貰つてゐます。わたしの頼むこと、聞いてくれません。
よね。裁判所の方はどぎやんなりましたか。
ロオラ。まだ濟みません。あの人、國へ歸ると、あと困ります。わたし、早くお金欲しいですから……。また、ペテルスブルグへ歸ります。今、お金、一文もないんです。(ハンケチを出して涙を拭く)今朝から、なんにも食べません。
よね。わしから、ムッシュウ・眞壁によう話して見てあげまつしゆう。あん人は、悪か人ぢやなかですばい。日本人な、

女の方でやかましう云ふても、金は出しまつせん。黙つとると、出します。(懐から紙入れを出し)一文もないちや、お困りだらう。少なかばつてん、こるばとつて泣きなつせ。(紙幣を一枚渡す)

ロオラ。(それを受取り)ありがたう。merci, merci beaucoup! わたし恥かしいです。J'ai honte, vous savez, j'ai tellement honte!……(泣き入る)

二

ホテルの一室──寝臺が二つ並んでゐる。寝臺には蚊張が吊つてある。

朝──電燈がついたまゝになつてゐる。

さとは、髪を結つてゐる。

眞壁は、まだ寝床の中で新聞を讀んでゐる。

さと。わしや、今晩の會にや、出んでもよかでせう。

眞壁。出た方がいゝ。おれたちは、誰に憚るところもない間柄だ

さと。そつでもねえ………。

眞壁。お前は、三谷の細君に氣兼ねをしてるんだらう。お前だつて、堂々たる眞壁夫人だ。長く一緒になるわけぢやなし、あと一日で、もうあの先生たちと顔を合はすことなんかありやしないんだもの………。

さと。そぎやんこと云ふと、また悲しうなるぢやありまっせんか。あと一日のなんのって……。

眞壁。お土産は、もう揃つたか。

さと。はい、ぼつぼつ集めとります。

眞壁。おれも、此處の店を無事に勤め上げたのなら、お前にも、もつとなんとかしやうがあるんだが………。

さと。あつちの方も、まだ、片がつかんとかなあ。

眞壁。そんなことを、お前が心配しないだつていゝ。

さと。そらあ、わしが心配したてちや、なんにもなりやせんばつてん……。どうせ、奥さんぢやなかつぢやるけん……。

眞壁。さうだ。世の中の奥さんたちみたいに、男の苦勞まで背負込む女になつちやおしまひだ。女は、自分だけで背負ひきれないくらゐの苦勞があるんだからな。

さと。また髮が抜け出した。困つてしまふ。

眞壁。おれは、あのロオラといふ女に、十年間苦しめられた。今迄、お前も訊かうとしなかつたから、おれは云はなかつたが、おれと、あの女とは、抑も、お互に、欺し合つてゐたやうなものだ。おれが羅馬尼亞大使館で副領事をしてゐた頃、佛蘭西語の教師に雇つたのがあの女だが、二人は、別々の目的で一歩一歩近づき合ひながら、表面は、世間並の戀人らしい眞似をしはじめた。よく云ふ、自分でかけた罠に、自分で引つかゝつたといふ奴さ、これもさらにある結婚の型だ。あいつは、おれの眼を盗んで、金を溜める。おれは、あいつに内證で女をこしらへる。大使館をやめて、此の土地へ舞込んで來てから、おれたちは、同じ檻の中で嚙み合ふ獸のやうな生活をし續けた、愈々辛棒ができなくなつて、二人は別々の家に住むことにした。それからは、お前が知つてる通りだ。離婚の訴訟は向うから起したのだが、こつちにも、慰藉料ぐらゐ請求する理由は十分にある。だが、まあ、これは、世の中の夫婦といふものが、お前たちが考へてる

やうに、男だからぢやないといふ樣に云つて突き放した途さ、家へ歸つたら、おとなしい、とく／＼おそくなつても見つけるやうにするのはいゝよ、わけのわからん男なんかの、甘つたるいよひ手にうけて、うつかり一歩ふみはづせばになると、それこそ、取りかへしがつかないよ。男からは、愛情を求めるかはりに、愛情のしるしだけを貰つて行けばいゝ。わかるかい、おれの云ふことが……？

さと。……。

眞壁。そんなに、ぢつとして聽いてないでもいゝよ。さつさと髮を結つてしまへ。

長い沈默。

さと。わしや、今度あんたから貰ふた金で、お父つつあんに、こまあか店ば出さするつもりですたい。近所に酒飲みの多かけん酒屋が一番よかて思ひます。

眞壁。さうして、賣るお酒は、みんなお父つつあんに飲まれてしまふんだらう。そいつあ、やめた方がいいね。實を云ふと、おれは、お前をまたお父つつあんの手に戻すことはあぶないと思つてるんだ。今もつてる二千圓の金を飲まれちまつて、もうあと二千圓こさへろと云はれたらどうする。また、ここへ舞ひ戻つて來るか。さうして、今度は、おやすのやうに、身動きができなくなつた上に、恐ろしい病氣までうつされるか。さうなつてから、おれに相談しようつたつて、おれはその時分、何處にゐるかわからないよ。何時も云ふやうに、おれにはおれの仕事がある。あと一月で、おれはお前のことなんか忘れてしまふんだ。はつきり云つとくよ。お互に心殘りはない筈だ。何時までも別れた人間のことを思ひ出すなんてことは、おれの性分ぢやない。お前は、誰のことも考へないで、一人で、自分の運命を切り開いて行

け。おれも、今度の仕事で、店に二十萬といふ穴をあけたが、これで、どうやら商賣人らしい度胸もついた。おれにも、新しい未來が見え出して來た。二千噸の鹽が、あの大雨に流れ去つた光景は、おれの過去四十年を葬る痛快な儀式だ。

さと。わしやさいせんから不思議でならんと……。そつてちや、あんたが、いろいろなこと云ひなはるとば聽いとつて、そるば自分に云はれとるごたる氣のせんとだもね。

眞壁。なるほど、それがほんとうかも知れない。おれは今、お前のことより、自分のことを餘計考へてゐる。お前にもそれがわかるのだ。今日のピクニックは、お前の送別會だつて云ふが、男は誰々が行くんだ。

さと。はじめは、男を一人も入れんつもりだつたりや、鵜澤さんがどうしてん行くて云ふてききまつせんと。ぢやるけんあん人だけですたい。

眞壁。八號の女たちもみんな行くのか。

さと。はい。

眞壁。また何時かのやうなことがあると厄介だから、運轉手に酒を飲まさないやうにしろ。

さと。はい。そつでん、鵜澤さんが、きつと相手をさすぢやろ。今晩の宴會は六時からだて云ふとだつて、これまでに戻らるるか知らん……心配なこつちや。

眞壁。三谷の方の世話は島内だけで大丈夫かね。

さと。三谷さんつて云へば、あの奥さんね……。

眞壁。どうしたつて……。

さと。わしのこつば、奥さまて云ふとばな。

眞壁。だからいいぢやないか。

さと。そつでん、なんだいろ可笑しか、昨夜、食堂であう云ふて尋ぬつとですばい。――あの、奥さまも、社宅の方にすつといらつしつたんですかいつて……。

眞壁。それで……。

さと。な、をかしかでせう。わしや、なんて云ふてえゝかわからんだつたけん、「いいえ、はあ、ちよつと」……こぎやん云ふといたと。

眞壁。「いいえ、はあ、一寸」か……。社宅にお前がゐちやいけないのか。

さと。いかにも悪かごつ云ふとぢやもね。それから勝手の具合なんかどぎやんですて訊くと……「コックに委せきりで、よう知りまつせん」……こぎやん云ふといたと……。

眞壁。そんなこと、どうだつていいよ。

さと（髪を結び終り、着物を着替へ始める）

眞壁（これも起きて顔を洗ふ）

さと。朝御飯、部屋へ取寄せちやいかんか知らん？

眞壁。どうして……？ いいさ。

さと。二人だけで食べる、これが最後ですもね……。今晩は宴會……。明日の朝は、忙しうしてゆつくり出來んし、そん上、六時ていふ時間に乗り込むんぢや、御飯なんぞ、たべてをられやせん。

眞壁（部屋の呼鈴を押す）

さと。わしが、今さら云ふて來つてえ……。

やがて、とみが、現はれる。

さと。あ、濟まんばつてん、御飯ば、こつちに持つて來てもらたごたる。今朝は、こゝでたべろけん……。あ、そろから、あらあ何時もん通りなるばつてん、コンニヤクば一杯づつ附けて來てくれんかい。

とみ。堪共持つてくればよかなあ。

さと。それでよか。今日は果物の新しかとんあるか知らん……。

とみ。さあ、どぎやんだいろ、訊いてみゆうたい。

とみが立つた後、さとはしばらくその後を見送つてゐる。

眞壁（笑ひながら）とうたう、コンニヤクがなほらなかつたね。

さと。コンニヤク……。そつでん。みんながさう云はんもんだろけん、わしだけコンニヤクてろん、なんてろん云ふと、可笑しかつですもね。

眞壁。少し、風が出て來た。明日は荒れなきあいゝが……。

さと。わしどんが、こつちい來つときや、ほんなこてえ惨めだつた。船底へ莚ば敷いて寢かされたつだもね。支那人の苦力がいつぴや乘つとつて、何處でんかしこでん唾吐きちらきやあつそろから、魚の骨でんなんでん、ペツペツて吐き出やつ。そつだろけん、わしどま、御飯も食べる氣はせんだつた。暑うし、臭うし、そん上、蝨んをつて、窮屈し、眞

暗うし……。

眞壁。もういゝ、もういゝ、そんな話は…………。そんなことばかり考へ出すもんぢやない。暗い中は、そんなところはかりぢやないんだ。廣い海を見ろ、廣い海を…………。お前の國の方では、女ばかり働いて、男は遊んでゐるんぢやないか。

さと。わしが、國にゐるときや、男でん女でん、遊うどるもんなんぞ見たこたなかつた。まあ、遊うどると云へば、子供ぐりやんもんた。

眞壁。さうでもなからう。

さと。うちの父つつあんてちやあ、あつでん、なかなか働き手ばな。たゞ、きばつてもなんにもならんだけたい、あゝた。

眞壁。お前の話は、陰氣臭くつていかんよ。働いたつてどうもならんなんてことがあるものか。働き方がわるいだけの話さ。下手に働くといふことは、働かないのと同じことだ。とは云ふがね。これは女には當てはまらない理屈だ。さ、また、催促しないと、二時間ぐらゐ待たされるよ。

さと。わしが、行たツ見て來る

さと、出で去る。

眞壁は、窓を開け放つ。可なり強い風が、カーテン、蚊帳などを吹き上げ、眞壁の着てゐるピ・ジヤマの前が、ぴつたり胸にくつつく。彼は、長く伸びた頭髪を心地よげに後ろに靡かせ、風の眞面に立つたまゝ、眼を細くして、海の方を見てゐる。

汽笛が長く尾を曳く。それに交つて、天主教會の鐘の音が、かすかに鳴り響く。

長い間。

やがて、さとが、ボーイと共に朝食の膳を運んで來る。とみはその後から、コニヤックの壜を提げて現はれる。

さと。窓んあいとるとかな。

眞壁（默つて窓を閉ぢる）

さと（テーブルの上を片づけ）さ、此處へ置いてくれな。

とみ。あんた、今、岡さんが來てなあ、今日あの人も行くて云つとつた。寫眞機ばもつて行たツ、わしどんば、みんな寫いてくるつてつたい……。

さと。（腰かけながら、一寸、眞壁の方を見た後）あぎやん人、來んてちや、よかこてぇ……（かう云つて、首をちぢめ、舌を出す眞似をする）

とみ。そつでん、只でよかて云ふとばい。

さと。（ボーイが寢台をしなほさうとするのを見て）ノン・ノン。パ・メントナン。アップレ。（眞壁に珈琲を注いでやる）

とみ。もう、用はなかつぢやろかい。

さと。もうなか。

とみとボーイ、出で去る。

眞壁とさとは、默つて、食事をしはじめる。

眞壁は佛蘭西風の簡單な朝食、さとは和食である。

さと。（思ひ出したやうに、コニャックの壜を取り上げ）注ぎまつしゆうか。別れの盃ですばい。わしもちつとばつかり……

……。（杯を差し出し）はい、乾杯……。ア・ボートル・サンテ……。

眞壁。（同じく杯を差出し）ア・ラ・ヴオートル……。（笑ひながら飲む）

さと。これで安心した。そるばつてん、なんだいろまだ、明日たつごたる氣のせん。どうしてだいろ。

眞壁。用意さへ出來てれば、それもいゝさ。お前が明日たつ。おれが、三日置いて、十一日か……。なるほど、おれも、そんな氣はしないな。お前を送り出したら、おれは、その晩から、ベル・ヴュウへ移らうと思つてるんだ。こゝはどうにも我慢がならんよ、この木賃宿は……。婆さんは珍しくいゝ人だが、ホテル經營の手腕はゼロだ。

さと。そるばつてん、こつでなからんばゝ、わしどんが氣樂に泊つたりなしたりしちやをられんもね。普通の日本人にや、これで丁度よかつばな。なるばつてんが、あんおつ母さんだるけん、こつでよかかも知れん。誰でん、此處へ來る日本人は、ホテルへ來つとぢやなく、おつ母さんとこれ來つとばな、賴めばどぎやんこつでんしてくれるし、昔が昔だけに、わしどんが氣持ば一番善うわかつてくるつと……。そけえ行くと、八號のおつ母さんどまあ、うはべは親切で、氣のつくごたるばつてん、賴らうていふ氣ば起させせんとばな。何處だいろ油斷のでけんていふ氣のしはせんかなあ。

眞壁。なに、此處の婆さんだつて、なかなか油斷はならないよ。おれは、婆さんが、あのおとみといふ娘を、ある佛蘭西人に押しつけようとしてるつて話を聞いたよ。あゝして、身寄のない子を養女にしてゐると云へば人間はいゝが、また、實際、幾分の義侠心らしいものも手傳つてはゐるんだらうが、それも、育て上げれば、金になるといふことを知つてゐたからだ。或は、もう少し穩かに云へば、今になつて、それに氣がついたんだ。

さと。そん話しや知らんだつたばつてん、おつ母さんな、いつでん、男をもつなら西洋人に限るて、そぎやん云ふとつて

……。わしの前でん、平氣でそぎやん云ふとばな。

眞壁。それや、自分がいゝ銃を抽き當てたからさ。それで、お前にもフランセを世話しようつて云ふのか。

さと。まさか……。

眞壁。どう云ふんだい。毛唐は親切でいゝつて云ふのかい。

さと。それよりか、一番、のんびりしとつてよかて云ふとたあ。

眞壁。あの婆さんが云ひさうなこつた。

さと。わしや、初手から見ると、よつぽど變つたか知らん……？

眞壁。おれのところへ來てから、少しは悧巧になつたくらゐのものだ。おれはお前を教育しようと思つたことはないが、お前はなかなか心掛がよかつた。しかし、いろいろ考へて見ると、お前をまたお父つつあんの手へ戻すことは、なんだか、あぶないやうな氣がするなあ。

さと。……。

眞壁。やつぱり此の土地にゐた方が、何かいゝことがあるやうな氣がしやしないか。

さと。……。

眞壁。明日の船で、此の土地を離れるつていふことは、逃れられない運命かどうか。寧ろ、おれといふ人間がゐる爲めに、さうなるのではないか。かう考へて見ると、おれは、今、お前の運命について、もう一度神に訊ねて見なければならないといふ氣がし出した。——おれが神といふのは、お前の本心だ。

さと。……。

眞壁。おれに氣兼ねはいらないよ。お前は全く自由なんだ。どうだ、やつぱり國へ歸るか？それとも、船を斷つて、もう

しばらく此島にゐるか？

さと。……。

眞壁。それ見ろ、お前はまだ迷つてゐるぢやないか。

三

硝子戸越しにホテルの食堂が見えるヴエランダ——食堂の内部が明るいのに反して、外はわづかに人の顔が見分けられるほどの暗さ。

ヴエランダの一隅には、さとがテーブルに突俯し、その傍でやすが背中をさすつてゐる。食堂は、今、宴會の最中である。

眞壁と三谷とを中心に、その左は、三谷夫人、右は空席一つ、之に向ひ合つて、金田、鵜瀞、島内、岡などの姿も見える。

ケバケバしい、染模様の着物を著た八號の女たちに交つて、とみが酌をして廻る。

眞壁の正面に起ち上つて、テーブル・スピーチをしてゐる頑丈な半白の老人は納富（六十三）である。

納富。……さういふわけで、一介の劍道師範たる私は、今を去る二十五年前、内地の熟練な農夫二十家族、五十名を引き連れて、此の地に渡つて參りました。

鵜瀞（酒のまはつたらしい調子で）その話はもう三度聞いた。

納富。因循にして氣概なき此の地方の青年には、悲しい哉、わが劍道の精神を解せず、私の素志は空しく今日に至つたのでありますが、一方、模範農場の經營と、農作指導の事業は、着々とその歩を進め、その翌々年には、佛蘭西政府より、

名譽ある橄欖章の贈與を受けました。今日、わが日本國民の需要に應じ得る印度支那米の産出は、實にその期間に於て、確乎たる基礎を作り得たものと信じます。然るに、これらの日本農夫は、その技術に於てこそ、誇るに足るべきものでありましたが、國家百年の計を立つる精神的訓練に於ては、甚だ缺くるところがありました結果、或は病氣と稱し、或は報酬の不滿を唱へ、或は、父親が亡くなつたからとか、或は嫁を貰はにやならぬとか申して、一人還り、二人還り、遂に、私一人を置き去りにして、悉く歸國してしまつたのであります。

鵜瀞。もうわかつた、わかつた。おい、お千代、先生にお酌をしろ。

納富。大分、座が亂れてまゐりましたから、これくらゐで止めますが、要するに、植民地に於ける同胞の團結は……。

鵜瀞（起つて行つて納富を席につかせ、無理に盃を押しつける）

納富。よし、よし、もう少しだから……（起たうとするが、鵜瀞は起たせない）

金田。おい、鵜瀞君、いゝ加減にしろよ。（途方にくれ）それでは、甚だ無體裁でありますが、先生のお話は何れ此の次の機會に伺ふとして、眞壁さん、どうぞ……。

眞壁。僕は、もう別に……。

金田。それやいけません。それぢや、形がつかない。

鵜瀞（なほも、しつッこく、納富にからみついて行く）

納富（それを突きのけ）うるさいッ。

此の際に於いて、さとに、顏をあげる。

やす。なんでもなかつたろが。どぎやんかい、ちつたよかかい。

さと（うなづく）

やす。あぎやん飲むとだもね、そらあ苦しか筈た。

食堂の内部は、異様に緊張した長い沈黙が續く。

やす。そん上に、自動車ん酷うはなかつたつえる。無茶に急ぐとだもね……。おつでん、頭んふらふらしたつばい。

此の時、食堂で、また話聲がしはじめる。

金田。かうしてゐてもなんですから、三谷さん。これぢや一つ……。

三谷。……。

眞壁。そんな形式的なことはどうだつていゝぢやないか、君。かういふ會を開いて下さるのは有りがたいが、挨拶を强ひられるのは困るよ。植民地には、植民地らしい交際と禮儀とがある筈だ。酒を飲んで、馬鹿話でもすれや、それでいゝことにしようぢやないか。

女の聲。贊成……。

金田。それぢや、さういふことにしますか。岡君、手品でもやつたらどうだ。

岡。今日は駄目です。醉ふとつて駄目です。島内さん、なんかやんなはり。

島内。……。
三谷。此處にゐるねえさんたちは、三味線を彈かないのかい。
金田。彈ける人もゐるんだね。
三谷。さつき家内とも話したんですが、かうしてゐると、丸で日本にゐるやうですね。日本にゐて、少し變つたことをしてゐるやうな氣がしますよ。
眞壁。君が一人で來たら、さうでもないんだよ。君達御夫婦を除いて、どれもこれも、内地にゐさうな人間は一人だつてゐやしない。みんな少しづゝ日本人でなくなつてゐるよ。
納富。わたしはさう思はんですな。なるほど植民地のふしだらな生活が、骨の髓まで浸み込んでゐる人間も、一人や二人はゐませうが、大かたは、いざと云へば、これでも日本人です。少くとも、わたしは、飽くまで日本人としての……。
眞壁。僕の云つたのは、さういふ意味ぢやないんだが――さうおつしやるあなたにしても、失禮かも知れんが、何處か海外放浪者の特徴を具へてをられる。僕は無論、思想的にも、感情的にも、一個のコスモポリタンです。三谷君のやうな人から云へば、僕などは、立派に世界ゴロの仲間にはひるんだらうが、納富さんなんかは、かういふ名稱を着せられることは不服でせうな。
鵜瀞。わたしはどうです。
眞壁。君か、君は、まづ、植民地ゴロといふところだね。
鵜瀞。植民地ですつて……。なにもさう、階級をつけないだつていゝぢやないか。西洋人をお神さんにもつてたからつて、世界中を股にかけたやうなこたあ、云つて貰ひますまい。
岡。上海から新嘉坡までは、全く、鵜瀞さんの繩張りだた。

鵜藩。 寫眞屋は默つてろい。

眞壁。 何をそんなに威張つてるんだ。同じ植民地ゴロでも、野心勃々たる奴は、あれでなかなか愉快です。何時か此處にも來たんだが、例の、バンコックで齒醫者をしてゐたといふ男なんか、免狀もなんにも持たずに、暹羅の會社から治療代をしこたまふんだくつてたんだからね。向うで怪しいと思ひ出した頃は、もう姿を晦ましてゐたんだ。さうして、香港に現はれた時には、ちやんと、基隆運輸株式會社支配人といふ名刺を作つてゐる。それから、ホテル代を一月分踏み倒して、こゝへやつて來た。僕は、そんな手には乘らないが、金田君なんか、大分怪しげな翡翠を買はされてゐたぜ。

金田。 あれや、一杯食ひました。

眞壁。 それがさ、あの男になら、騙されてもそんなに腹が立たないよ。どこか愉快なところがある。自分さへ安全なら、大に聲援でもしたいつていふやうなところがある。

金田。 冗談ぢやない

眞壁。 僕は、自分にもさういふところがあるからかも知れないが、快活な惡事といふものには、そんなに反感が起らないんだ。なんにも出來ないで、不平ばかり並べてる奴は、人間の屑だと思つてる。

鵜藩（起ち上り）なにを……。

金田。 君のことを誰も云つてやしないよ。

鵜藩。 おれは、人間の屑か。よし……。

（眞壁の方に近づいて行く）

金田（それを遮らうとする）

島内。（起ち上り）鵜瀞さん、さ、あつちへ行かう。

鵜瀞（二人の手を振り拂ひ）誰が今迄、その人間の屑をこき使つたんだ。一と晩中、荷役の見張をさせたのは誰だ。自働車にも乘せず、日に三度もアロンへ走り使ひをさせたのは誰だ。朝の間に、チヤンの苦力を五十人驅り集めろと云つたのは誰だ。

眞壁。おれだ。――そのうち、どれか一つ、滿足に出來たことがあるか。今、こんなことを云ひ出す必要はない。しかし、君が、さうして僕のやり口を非難するなら、僕の方にも云ひ分がある、此處にをられる諸君には、いろいろの意味で、御別れの挨拶がしたいのだ。その挨拶には、また、いろいろの點で、感謝の意を含めたいと思つてゐる。しかし、君だけには、今迄の僕に對する態度から見て、一言も云ふべきことはない。默つて別れることが、一番穩かな挨拶だ――さう考へてゐたんだ。

鵜瀞。八十ピアストルの月給で、そんな仕事ができると思つたら、大間違ひだぞ。

三谷。おい、君、そんなことは、此處で云はなくつたつて、いくらも云ふ時機があるんぢやないか。見つともないからよし給へ。

鵜瀞。云ひたいのは月給のことぢやないんだ。人を使ふなら、人情を辨へろと云ふんだ。島内を見ろ。あゝやつて神妙な顏はしてゐるが、心の中では、我輩と同じように、貴様を恨んでゐるんだ。

島内。鵜瀞さん、何時僕がそんなことを云つた。

鵜瀞。云はなくつたつて、我輩にはわかつとる。

金田。よせつたら…………君はそれがいかんのだよ。お互に云ひたいことを云つたら、きりがない。過ぎさつたことは過ぎ去つたことゝして、愉快に飲まうぢやないか、愉快に…………。（鵜瀞を席に連れて行き、盃を渡す）

長い沈默。

やす。　ムッシュウ・眞壁の驚きやあた顏、はじめて見た。
さと。　頭ん、破るゝごたる。
やす。　部屋に戻つて寢たかい。
さと……………。
やす。　明日の朝は早かつだろが、もう寢た方がよかばい。

食堂では、人々が小聲で話し合つてゐる。

やがて、

三谷（起ち上り）それじや、われわれは、これで失敬します。どうも有りがたう。
三谷夫人（これも席をはなれて一同に會釋する）
眞壁。　僕も失敬しよう。お先へ……。

三人は食堂を出る。

金田。今日は、みんな少し變だ。

納富。こんな宴會ならやらん方がいゝ。

岡。ムツミエウ・三谷の奥さんなんか、びつくりしなはつたらう。

島内。鵜崎さん、いけないよ、あんなこと云つちや……。

とみ。酒は、もうよかかな？

金田。あゝ、もういゝ。それから、ねえさんたち歸つてもいゝよ。

納富。さうさう、金田君、あんたのとこに、からすみがあつたね。あれ、少し欲しいんだがね。

金田。からすみ……あれや、もう、みんなでしたよ、先生。

納富。みんなか。そいつあ、殘念だ。（起ち上り）それぢやね、ごまめを二合ばかり屆けてくれんか、明日でいゝから……

……。

金田。よろしうござんす。

納富、出て去る。

岡。寫眞はどきやんします、金田さん。

金田。あ、さうだ、忘れてた。また今度にしよう。

岡。しよんなか幹事さんだなあ。（かう云ひながら、席を起ち、ヴエランダの方に出て來る。さうして、女たちから離れ一隅の椅子に倚る）

島内（續いてヴェランダに現はれ、岡の近くに座を占める）

金田。おい、みんな行つちまつちや、困るぢやないか。此の醉拂ひ先生、誰れか連れて歸るんだい

　女將牛山よねが食堂に現はれる。

よね。もう濟みやしたか。

金田。婆さん、どうかしてくれ、此男……。

よね。ほつとけば、よかぢやつせんか。（から云ひ捨てゝヴェランダに出て來る）

やす（よねを見つけ）一寸、こるば見てくれな、おつ母さん、此處んもをつとばな、女ん醉拂ひつ……

よね。どうしたと、そぎやん苦しかつたかい。さう云ふと、ちつと亂暴だつたもんね、今日は、……。何時もんおさとさんぢやなかつたごたつた（腰をおろす

　食堂では、金田が、しばらく女たちとこそこそ話をした後、ヴェランダの方を一寸のぞいたまゝ出て去る

すると、女たちは、一齊にテーブルを圍み、殘り物をつまみながら、小聲で雜談をしはじめる。時々笑聲が起る。

やす（岡に向ひ）あんたは可笑しか人な。用もなかて、こぎやんとこれ出て來て、何ばぢろぢろ見とつと……？

岡。もう喧嘩は御免だ。人の顔さへ見れば喰つてかゝるなあ、よくない癖だよ、おやすさん。おらあ、みんながもうちつと、お互の氣持ば尊重し合ふごつしたかて思ふとたい。

やす（相手の言葉が耳にはひらないやうに）兎に角、わしや、あんたといふ人が眼ざわりでしよんなかつたるけん……。

岡。どうも済みまつせん。

とみが現はれる。

とみ。島内さん、ムツシユウ・三谷があんたに一寸げな……。

島内。今頃、何の用たい。

とみ。今、奥さんの居んた、やもりの一匹天井からつこけえつ來たげなけん、そんこつかも知れんたい。

島内。やもりが……？　やもりとおれとどう關係がある。（かう呟きながら出て去る）

とみは食堂の方へ行く。

食堂にゐる女たちは、ヴエランダをのぞき、よねに會釋して、それぞれ出て行く。

やす。あゝあ、わしや、もういやになつてしまふた。

よね。なんがや。

やす。こぎやんしとつとがたい。病氣なんぞ、どぎやんなつたてちやよかけん、戻ろかしらん……。

よね。病氣のなほるまでや戻つて來るなていふとだるけん、早う病氣ばなほすとよかぢやなかつか。

やす。ところが、そぎやん早うはなほらんとだるけん……。何時までんこぎやんしとるぎりや、ろくなこた、ありやせん

える。

よね。そん時やそん時の話たい。お前さんそんつもりでをればよかばつてん、ムッシュウ・シャンドロンにして見たば、代りの女はいくらでんあつとだるけんね。

やす。そぎやんばつかりも云はれんたい、こつでもな。あら、つん眠つてしもたつばい、こん女は……。

よね。隨分窮屈だつたらう、二年間、あゝいふ暮しをしとつちや……。

やす。わしなら、二日も辛棒はでけんなあ。ばつてんが、今度はちつた淋しか。

よね。お前も、そぎやんした氣になつたかい

やす。尤も、わしなら、そん金ばもつて、上海にでん遊びぎや行たつはち來る。日本に戻つたてちや、しよんなかつたも

ね……。

よね。そらあまあ、別の話なるばつてん、こるから、日本に戻つて一體どぎやんする氣だろかい。これで、本人は、そぎやんまぢや、落うどらんとばい。

やす。此ん女は、どぎやんことんあつたてちや、そぎやんまぢや、婿つしやにやせんと……。そん代り苦勞もたかごたる。

よね。日本に戻ることん、そぎやんまごうれしうなかわけは、己にやわかつとるばつてん。まうかと云ふて、こぎやん話なつとるもんば、引き留むるわけんも行かず……。

やす。わしんもわかつとつと……。だるけん、云ふとた、――あんまり人次第だるけんいなくて……。

よね。ほんに。今日もショオロンの所で、しみじみ己へ云ふたつなるばつてん、ムッシュウ・直様が此處えをる間は、どうしてん發たんわけにや行かんて、そぎやん、自分できめとつと……。

やす。日本に戻らんば、金はやらんて云ふとか知らん……。

よね。さうぢやなかつたい。今朝なんぞ、どつちでん自分の好きなやうにせろて、そぎやん云ふたげな。船の方は、今から取り消せばなんでもなかつだるけんて……。

やす。それぢや、なんのこたなかぢやなかつかな。やつぱあ、いざと云へば、戻つた方がよかごだる氣のすつとだろた。

よね。うゝん。ムッシュウしやが、をらんぎりや、自分ぢや、此處えをろごたるて、そぎやん云ふとつた。

やす。妙な義理ぢやなつかな。そらあ……。よし。そんなら、わしが、引止めて見しゆう。おい。おさとちゃん、風邪引くばい。

此の時、とみが、慌てゝはひつて來る。

とみ。あんなあ、おつ母さん、今たあ、またロオラが來たつばな。

よね。そつで、どぎやんした。

とみ。默つて二階へ上つたつた。

よね。そぎんこつさせちゃ、仕様なかちやなつか、お前がをつて……。

とみ。そつでん、どんどん上つて行くとだもね……。

よね。そんなら、よかけん、早う食堂ば片づけさせろ……。

とみ。岡の間抜が、また寫眞機ば忘れて行たつ。

やす（笑ひながら）どつちが間抜けだいろ。そけえをるぢやなつか。

とみ。御免なつせ。知らんだつた。（きまり惡るさうに逃り去る）

さと（ぼんやり）こゝは、何處けえ。

やす。おら、よつこりしよ、氣味の惡か。何處んつもりでをつとけえ。

さと（あたりを見まわし）宴會、もう濟んだつかな。

よね。しつかりせんかい、冗談のごたる。そッで明日發たるつとかい。

さと。……‥。

やす。頭痛はもうなほつたかい。

さと。うん。（かう云つたと思ふと、急にしくしく泣き出す）

やす。あら、どぎやんしたて云ふと……。ひよくらッと、いろいろなこつば思出やつけんだろ。どぎやん云ふたてちや、そらあ、ほかんこつた逢ふけんね。

よね。あんまり、そばから、たんのかんのつて云はん方がよかばい。

長い間。

やす。俺共と逢ふて、やつぱ、一途に思ひ込むたちだつたばいね。人並ん様子ぢや、案外平氣んごつ見えとつたばつてん

……‥。

長い間。

よね。さあさあ。そぎやん泣やあとつたてちや。どぎやんもなりやせんとだるけん。これからんこつば考へて。氣ば太うもつこつたい。ムッシュウのことなんぞ。早う忘れてしまふた方が悧巧もんばい。妙なこつ。そつでん、今日になつて。ひよくうつと……。

やす。そらあ。しよんあるもんかな。いよいよつていふ晩だもね……。

さと。そぎやんぢやなかつ。そつで悲しかつぢやなかあつ。

やす。そんなら。國に戻ろごたなしでんにやあとつとけえ。

さと。……。

よね。さうとすれば。なほ可笑しかぢやなつか。そぎやん好かんとこれ。わざわざ戻らんてちやよかつだるけん……。

さと。わしや、なんだいろ。自分でもわからんと……。たゞ。明日發つと思ふたりや。ひよくうつと。淚んこみ上げて來たつた。

やす。一人で戻つとん淋しかつだらう。

さと。さうか知らん……。そぎやんでもなかごたる。――わしや、男と別るることた、もちつと辛かもんだらうて思ふとたりや、そらあ、自分でも不思議なぐらい何のこたなか……。今朝でん、あん人いろいろ云ふてくれるばつてん、かういふ時ゃ、ほんなこつなら。泣かんばならんとばいて思ひながら、そるが、どぎやんしてん泣かれんだつたつ……。今なんぞ、あん人んこた、ちつとん考へとりやせんだつたつだつて……。そつでん、つひ、胸んつまつて……。

此の時、二階から、Menteur! Menteur! と叫ぶ女の聲がきこえる。

よね。そら惚れた仲なりや別だるばつてん、云ふてみたやが何も云ふごたつとだるけん、そなお前に向ていうなあれ、一時てん住み馴れた土地ば離るつていふもなあ、たんとなしい、心淋しかもんたい。早かもんたい、丸三年になるけんね。

やす。い、、、さつかりも、おつ母さんと話したこつだるが、あんたしやが、そん氣になれば、ずつと此處ゑをつたてちや、大丈夫、やつて行かるつとだるけんね。どつちかて云へば、あんたなんぞ、そん方が仕合せかも知れんとたあ。當分遊んどらるる金はあつとだるけん。そんうちい、よか運の向いて來つたい。なあ、おつ母さん。

よね。おるも、今日、濱で、そるば云ふたつた。

さと。つまらんと……。わしにや、どうしてん、そるが出來んと……。今更、そるば云ひ出すてこたあ出來んと……。そぎやん云へば、あん人、そぎやんかて云ふにきまつとる。いかんなんぞ云やあせん。ばつてんが、そるが、わるうして仕様なかつだもね。どぎやんしてん、そつぢや濟まんていふ氣がすつと……。

やす。そぎやんこたあなかぢやなつか。自分の好いたごつせろて云ふとだらう。

さと。そるがさい。そぎやな云ふとつても、あん人ん氣持かり云へば、わしば國に戻したかつだもね。國に戻つたてちや。わしが仕合せになるとは思つとりやせんとなるばつ。そつでんが、やつぱわしば國に戻した方が安心すつとたあ。

そるが、わしにやわかつとだもね。

やす。そらあ、あんたんそぎやん思ふだけたい、あん人が安心しゆうが安心しみやあが、あとんこたあどうだつたつてちやよかぢやなつか。あんたんこぎやんしたかて思ふこつばさせてくれしやかすれば……。

さと。そるがわしにや出來んとだるけん……。あん人はな、こぎやんせろて云つて、そるばそん通りすつて喜うなかことんあつと……。わしやあん人ん氣持だけは、もうわかつとるつもつたい。だるけん、言葉にも顔色にも出さんごたるこ

つば、どこだいろで感づつとたあ……。さうすつと、もう、どぎやんも出來んと……。そん通りいたつてしまふとたもね。

よね。なんべんも云ふこだるばつてん、お父つつあんの、あぎやんした人でなからんぎりや、己てちや、國に戻るこつば勧むつとなるばつてん、どうにもかうにも、あつぢや、わざわざ苦勞ば重ねぎや行くごたるもんだものね。そるよりや。こつちで、ちやんとした男ん世話にでもなつて、からだば落ちつけた方がいくら樂だいろ知れやせんからな　あんたほどの器量なら、望みてはいくらでんあるし、そるこそ、おつでん、ほつときやせんたい。(間)そんなら、ムッシュウしやがをらんぎりや、國に戻つとば見合せてもよかて云ふとかい。

さと。………。

二階の女の聲が益々激しくなる。一同はそれとなく耳を欹てる。

よね。何か都合ばつくつて、ひと船遲らするこてえすれば………。さうすれば、ムッシュウは先へ發つてしまふし、あとは、こつちのしゆうごたるごつたもん………。

よね。なあ、岡さん、それがよかなあ。

岡。僕は、おさとさんの好いたごつするがよかて思ふ。

やす。そぎやんこたあわかつとるぢやなつか。だるけん好いた通りさする話ばしとつとたい。

よね。今迄、そけをつて、己共んが話ば聞いとつたつだるけん、一人だけ善か面しゆうて したてちや、そらあ出來んたい。仲間入りばせんぎりや承知せんけん………。

間。僕は、あんた達の仲間入りはせんたい。ばつてんが、僕一人の考へで、おさとさんに逢つこたあ出けせなんたな。

僕は、おさとさんに、はつてかるれば、此ん土地にやさるれん人間たい。第一、美しかもんと云へば、一體、何があるか。男は狼のごつ餓え、女は牝犬のごつ恥知らずたい。そん上、自然はと云へば、黄色か熱と灰色の空氣に傷められた不健康そのものゝ姿たい。そん中で、たつた一つ、僕の眼を樂しませ、心を慰むるもんなあ、おさとさんの存在たい。僕は、もう決して、おさとさんにどうしてくれとは云はん。そらあ、自分の夢ば自分で醒ますごたるもんたい。僕は、ただ、おさとさんは自分の眼の屆くとこれえ置いておきたかだけたい。僕は、一生、寫眞師らしう、レンズを透しておさとさんの姿を眺め暮さうと思ふとる。そんなら、よかろうがな、おさとさん……。今日、ショオロンで、あんたは一人、僕が向けたレンズを避けたのはどういふわけたいな。それはもうよか。訊きますみやあ。ばつてん、僕が何時でんあんたに向けとる心のレンズは、あんたも避くることあでけんばな。

此の時、突然、二階で一發の銃聲が響く。

鵜瀞を除く外、一同の視線は、期せずして階上に注がれる。

長い沈默。

四

眞壁の部屋——眞夜中

寢臺の一方に、眞壁が頭に繃帶をして寢てゐる。

さとはその傍で、ぼんやり椅子に腰かけてゐる。

三谷はやゝ離れて、これも椅子にかけてゐる。

よねが、立つたまゝ話しをしてゐる。

よね。そるがね、いろいろなこつば訊かるつとですよ。わしや、かう云うてやつた。――こつちは女だるけん、ロオラさんの味方にもなるばつてん日本人としちや、ムツシュウ・眞壁の肩を持つて……。さうしたりや、コンミツセエルも笑うとりました……。

眞壁。三谷君、君が、さつき、驅けつけて來てくれた時、あの女は机に向つてたらう。何を書いてたと思ふ。

三谷。知らない。あの時、なにやら、云つたやうだつたね、僕たちの方を振り向いて……。島内君は、「誰も此の部屋にはひるな」つていふやうに聞えたと云ふんだが……。

眞壁。それは僕も氣がつかなかつた。しかし、あれは、君、手紙を書きかけてゐたんだよ。警察の奴が訊いたら、さう云つてた――ペトログラアドにゐるお袋のところへ出すんだつて……。

三谷。すると、君に會ふまでは、あんなことをするつもりはなかつたんだね。

眞壁。それやわからん。話の結果によつてはと思つてゐたかも知れんよ。普斷ピストルなんか持つて歩く女ぢやないんだから……。兎に角、あいつを向けられた時は、流石に驚いた。しかし、どうする暇もないんだ。いけないツと思つた瞬間、頭がガンとした。それでも、煙の中に、あの女の姿がはつきり見えたので、すぐにその手からピストルをもぎ取つんだ。さうすると、奴さん、急に、兩手で顏を蔽つたまゝ、机の方へ歩いて行つた。君たちがすぐ來てくれなかつたら、僕があの女を殺してゐたかも知れないよ。

よね。そんなことはあるまい。君は、非常に冷靜だつた。何事もなかつたやうな顔をしてゐたさ

よね。コンミツセエルも、ムツシユウ・眞壁は、どうして笑つとつたつかて、こぎやん訊いとりました。

眞壁。もう、その話は、よさうや……。遲いから、君たちもねむいだらう。寢てくれ給へ。

三谷。僕は平氣だがね。君はどうだ。まさかすぐは寢つかれまい。

此の時、三谷夫人がはひつて來る。

三谷夫人。如何でいらつしやいます。

眞壁。やあ、どうもお騷がせしました。もうなんでもありません。

三谷夫人。でも、あたくし、なんだかまだ心配ですわ。

眞壁。隨分、妙な人間ばかりゐるところでせう、印度支那つていふところは……。

三谷夫人。でも、こんなことは、東京の眞中にゐたつて、あることですわ。たゞ、此の土地で、かういふことがあると、さう申しちやなんですけど、さもありさうなことつていふ氣がいたしますわ。

三谷。おい、おい、無茶なことを云ふな。

眞壁。ほんとですよ。此のホテルだつて、初めて來て見ると、何かの巢窟つていふ感じですからね。氣は此の通り暗いし、壁や天井は、あゝいふ風に雨漏りの跡だらけだし……。

三谷。その上を、やもりがあんなに蝠ひまわつてゐるしね。

よね。それや、此のホテルばかりぢやありまつせんばい。

三谷夫人。あら、何處にでもゐますの。

眞壁。ゐますね。社宅の方は、もつとひどいですよ。もつと大きな奴がゐますよ。

よね。ところが、あらあ、どぎやんもしやしませんけんな。わしの知つとる佛蘭西人は、あるぱ一匹、ビールの中に入れて、いつしよに飲み込うでしまひましたばい。

三谷夫人。まあ、氣味がわるい。

三谷。しかし、お前は、日本を發つて來る前から、大に印度支那を讃美してたぢやないか。

三谷夫人。あたくしの云ふのは、もつと、奥の方ですわ。安南の森の奥ですわ。

三谷。なんだつけな。——孔雀と錦鷄鳥とが、なんとかの花の間を飛びまわつてゐるつていふんだらう。さういふところ、あるかい、眞壁君……。

眞壁。あるかも知れんよ。どうかね、婆さん……。

よね。さあ、なんのこつだいろ、よくわかりまつせんだつたばな。虎は、ちいつと此の奥に行くと、をるごたるな。アナミツの部落へ寄り出て來るて云ひますたい。人間の子供が好物ちたなあ。

三谷。少し話が違ふやうだね。

三谷夫人。全く……。

三谷。婆さんは、此の土地に二十年からゐるつていふ話だが、隨分、いろんなことに出くわしたろうね。

よね。でくわしましたちゆあ……。日本人ばつかりぢやありまつせんけんな、これまでわしが知り合うて來た人間て云へば……。前の連合が、佛蘭西人でッしう。毎日、佛蘭西人同志のことを、見たり聞いたりしましたたい。そつでん、人情ていふものは變らんもんですな。アナミツの方は、使ふとるもんが主ですけつどんが、あん人達にやあん人達の世間

ていふもんがあつて、やれなんのかんのつて、それ限宿にごたごたがあつとですな。かといふわけで、まだまだ人間になつと、苦勞が多かもんな。わしなんぞは、學校もろくに行つとりまつせんばつてんが、年配が年配だるけん、若い女たちに、おつ母さん、おつ母さんて、せからしか相談は持ち込まれますしな。

三谷夫人（さとに向ひ）こんなことがあつちや、奥さまも、明日お發ちになるつてわけには行きませんわね。

さと（眞壁の方を見て）さあ……。

眞壁（默つてその視線を避ける）

長い沈默。

よね。もう、わしどめにや用はありまつせんな。

眞壁。あゝ、もう別にない。やすんでくれ。

よね。そんなら、おやすみなはりまつせ。

よね、出て去る。

三谷。（妻に）僕達も引上げようか。

眞壁。あ、君達は、迷惑でなければ、もう少し、話してつてくれないか。實は、奥さんに是非聽いて貰ひたいことがあるんだ。

三谷夫人。どんなことでせう。伺ひますわ。

眞壁。なに、大したことぢやないんです。僕は今迄、自分のしようと思ふことを、人に相談したことなんかは一度もないんですがね。今度だけは、どうしても決心がつかずにゐるんですよ。おさと、お前は、一寸下へ行つてろ。

さと、三谷夫婦に會釋して出で去る。

三谷。今時分下へ行つたつて、君、ゐるところなんかあるのかい。

眞壁。あいつあ、何處にゐたつてかまやしないんだよ。どうせ、下が家みたいなもんなんだ。それはさうと、奥さん、あの女をどう思ひます。

三谷夫人。どうつて……。ほんとに、おやさしい方ですわ。

眞壁。奥さんなんかゝら御覧になると、僕たちの關係は、さぞ不純なものゝやうにお考へになるでせうが、そのために、あの女を輕蔑しないでやつて下さい。

三谷夫人。輕蔑だなんて、そんな……。でも、いろいろ伺つて見ると、あの方もこれから、大變ですわね。

眞壁。もう、そんなお話をしましたか。

三谷夫人。いゝえ、詳しいことは、なんにもおつしやらないんですけれど、たゞ、あたくしが、お察しゝてるだけですわ。

眞壁。僕は、あの女に對して、するだけのことはしたつもりでゐるんです。ところが、いざ國へ返すといふ所になつて、大きな不安を感じ出した。と云ふのは、あの女が、國へ歸ることを、それほど悦んでゐないといふことゝ、もう一つは、その理由が、至極有力な理由だといふことなんです。

三谷夫人。さうおつしやれば、さういふところも、おありになるやうですわね。

眞壁。さうでせう。それについて、あなたに何か云つてきましたか。

三谷夫人。いゝえ、はつきりしたことは、さうおつしやいませんけれど、なんだか、御自分でも、不安なやうな御口吻でしたわ。

眞壁。僕は、それで、よつぽど、計畫を變へさせようかと思つてみたんですが、どうもそれが云ひ出せない。可笑しな話ですがあいつの顏を見ると、つひ迷つてしまふんです。

三谷夫人。でも、お國へお歸りにならないとすると、ほかに、いらつしやるところでもおありになるんですの。

眞壁。ありやしません。まあ、此處にゐて、どつかへからだを落ちつけるより、しかたがないでせう。

三谷夫人。でも、此處ではねえ………。

眞壁。そんなら、何處へ行つても同じことですよ。此の土地なら、顏馴染もあるし、また以前のやうな生活に落ち込む前に、誰か世話をするものがあるだらうといふ氣がするんです。本人も、それを望んでゐるんぢやないかと思ふんですよ。佛蘭西人の妾になつて、一生樂な暮しをしてる日本の女が隨分ありますからね。

三谷夫人。まあ、あなたまで、そんなことを………。

眞壁。ほかの女ぢやありませんよ。あゝいふ前身の女ですよ。

三谷夫人。それぢや、折角、あなたがこれまでにしてお上げになつたことが、なんにもなりませんわ。

眞壁。奥さん、僕を買ひ被らないで下さい。あの女が何んと云つたか知りませんが、僕は、自分のリベラルな行爲を反省して、今更それを責める氣持は毛頭ありませんし、あの女の將來についても、徹底的に考へてみる勇氣はないんです。たゞ、自分の眼の前で、あの女が、これから歩いて行く方向を決めようとしてゐる場合、僕の意志がそこに働くことを

非常に恐れてゐるといふだけなんです。もう少し穿つて云へば、僕といふ人間の存在が、あの女の運命を決定することになると大變だと思ふだけなんです。白狀しますが、かういふ氣持は、僕が今迄經驗したことのない氣持です。

三谷夫人。男の方つて、割合に、さういふことには無頓着なものですわ。

眞壁。かうして、もう船まで決めてある。明日はその船が出ようとしてゐる。それに、あの女は迷つてゐます。僕も、それを、發つなとは云へずにゐる。もともと、國へ歸るといふことは、それこそ、あたり前のことのやうに思つて、決めた問題なんです。僕が此處を引上げる。あの女とこれ以上一緒にゐるわけに行かない。差し當りあいつの行くところがない。旅費さへあれば、國へ歸るだらう。で、いくらか金をやるといふ話をしたんです。

三谷夫人。それが一番自然ですわ。

眞壁。ところが、今になつて考へて見ると、あの女の手に、二千圓といふ金がはいつた。その金があれば、おやぢのところへなんか歸らなくつても、當分、一人で暮して行くことができる。それなら、日本よりも此處の方が、あの女に取つては住みいゝに違ひない。金がなくなつても、慌てる必要はない。そんなら、何んのために、明日、此の土地を離れるのだ。さういふ疑問が起つて來たんですよ。

三谷夫人。でも、それは、あんまり實際的すぎるやうに思ひますわ。その御考へは……。

眞壁。實際的……。さうでせう。僕も、これくらゐ實際的な考へ方はないと思つてゐます。しかし、その實際的といふことが、僕を一番誘惑するんです。それにですよ、それほど僕の氣持は動いてゐながら、その考へを、はつきりあの女に傳へるといふことが、何んだか、してはならないことのやうに思へる。それについて、昨日からいろいろ自己解剖をやつてみてるんですが、かういふことも、一つの理由だらうと思ふ。――それは、恐らく、二十の聲を聞いて以來、絕えて音沙汰のなかつた僕のロマンチシズムが、久々で、しかも最後の別れを告げに來たんだと思つてゐるんです。三谷

君、まあ、笑はずに聞いてくれ。——僕は、あの女を、一度は、ほんとうに救ひ出してやりたい。いや、少くとも、救ひ出したといふ氣持になつて見たい——さうぢやないかと思ふんだ。

三谷。それやさうだらう。君だつて、さう平氣で別れられるとは思はないよ。

眞壁。いや、それとこれとは違ふんだ。うるさいだらうが、もう一度云ふよ。あの女が國へ歸るといふことは、たゞ、おやぢの手へ戻るといふことにはならない。それは、どうせ無駄かも知れないが、一度は、普通の女になるといふことだ。

三谷夫人。さういふことがわかつていらしつやるんでせう。

眞壁。待つて下さい。少し上氣（のぼ）せてると見えて、さつきから、なんだか下らないことを云ひ過ぎたやうですが、僕が惡さんにお願ひしたいのは、實は、かういふことなんです。——あの女が、若し此の土地にゐるやうになつたら、なにくれと、相談相手になつてやつて下さいませんか。此處の婆が、何れ、いろんな世話を燒くだらうと思ひますが、あゝいふ種類の女ですから、いよいよ駄目となつたら、また御承知の八號へでもころがり込むだらうと思ふんです。これだけは、僕も、やり切れない。非常に勝手なお願ひですれど、さういふ場合には、一つ、女中にでも使つてやつて下さい。

三谷夫人。……。

眞壁。あなたが、若し、それを承知して下されば、僕の決心はもうきまるんです。あの女は、明日の朝までに、きつと發ちたくないといふ意志をほのめかすでせう。さうしたら、僕は、それに贊成してやります。決して、責任をもつていたゞかうとは思ひませんよ。たゞ、あの女に最後の足場を與へてやつて下さい。

三谷夫人。それやもう、あたくしどもで出來ますことなら、なんでもいたしますわ。でも、ほんとうに、その方がよろし

いんですか知ら……。（三谷に）ねえ、あなた……。

三谷。それは、われわれが嘴を容れるべき筋ぢやないさ。しかし、實際問題として、さういふ場合、あの女の方から、こつちへ相談に來てくれなくちや困るなあ。僕たちとしても、あんまり立ち入つた眞似はできないから……。

眞壁。うん、それや、勿論。さうさせる。——ですがねえ、奥さん、さつきから、あなたの御顏を見てると、なにか知ら、僕の後暗いところを責めてをられるやうに思へるんですが……。

三谷夫人（笑ひながら）後暗いところなんか、おありになるんですの。

眞壁。後暗いと云ひますか。卑怯な態度と云ひますか……。

三谷夫人（やゝ皮肉に）よくそれがおわかりになりましたのね。

眞壁。變なもんですね。今夜は、僕の神經が、それほど鋭敏になつてゐるんですよ。

三谷。なんだい、はつきり云つてくれよ、二人とも……。

眞壁（しばらく考へた後）僕はね、あの女と結婚してもいゝと思つてゐるんです。しかし、さうすると、あの女が可哀想ですよ。僕は、半年經たないうちに、あの女を棄てゝしまふでせう。

五

一と同じ場面。——拂曉

よねが籠に果物をつめてゐる。

とみは部屋を片づけてゐる。

土人のボーイが、二階から、トランク、柳行李などを持つて降りて來る。

よね（柱時計を見た後、ボオイに）イレ・デジヤ・シ・ズウル。エン。デベエシュ・トア。

ボオイは急いで荷物を外に運び出す。さとが旅行の身支度を整へて、二階から降りて來る。

よね。まだ寝とらすとかい、ムッシュウ・眞壁は……。
さと。ゆう眠とるけん、起こさんだつた。
よね。そつてちや、お前、挨拶もせんでや。
さと。昨日ん朝、もうしてしもた。別れの盃までしたつばな。
よね。そるばつてん昨夜、あるから、こゝで寝てしもうたんので、お前も、よつぽど、呑氣かね。己あ、今朝、眼ん覺めつ時、側あお前が寝とるもんだるけん、びつくりしたつばい。
さと。何時の間にだいろ眠てしもたつた。餘程くたぶれとつたつばい
よね。どつちしてん、ムッシュウ・眞壁に默つて發つていふ法はなかろ。
さと。うゝん、そぎやんぢやなかつなるばつてん、わしや、なんだいろ、あん人と話すとが怖ろしかつだもね。
よね。そぎやん馬鹿んこつば云ふとる場合ぢやなかばい、なんが怖ろしかもんか。そん上、あぎやん怪我までしとる人ぢやなつか。あれぎりなんにも云はでん出て行くなんてこたあ、そらあ、いくらなんてちやをかしかばい。
さと。まだ時間のあつどか知らん……。
よね。時間な充分あつたい。ゆつくり別ればして來るがよか。
さと。そんなら、もう一ぺん行たツ來るけん。

（二階に上る）

やすが揚子を使ひながら、奥から出て來る。

やす。おさとさんな……？

よね。あん娘も妙な娘ね。昨夜からムッシュウのそばにや寄つつきもせえでんをつて、今朝んなつても、なんにも云はでん發つなんて云ひ出すとばい。

やす。どういふんだいろ、わしにやわからん。喧嘩でんしたつぢやなかつだろかい。

よね。そぎやんした風も見えんばつてん。何か云はるつとん怖ろしかつだろばつてん、今更、なんもそぎやんびくびくするこたあなかちやなつか。

やす。國に戻るていふこたあ、どつちしてん、自分一人で決めたつだろな。ムッシュウが、發つなとでん云ふとぢやなかつかな？

よね。そるが、己んもわからんとたい。いくら訊いても、はつきりしたこたあ云はんし、夜でん、己あ、もう面倒臭うなつたけん、どぎやんでんよかごつするがよかて、そぎやん云ふてやつたたい。ムッシュウに此處にをつたらどぎやんかとまで云ふとつと。自分も、ほんとうはそぎやんしゆうごたつと。そんなら、たんも云ふこたあなかぢやなつか。そるば、どうしてん、發たすにやをられんて云ふとだるけん、こん位あわけんわからん話てあるもんぢやなかと。

やす。一ぺん國にも戻つて見たかていふだけたい、きつて……。そん内、ふらつと舞お戻つてくるけん……。

此の時、食堂の入口から、寝ぼけ面をした鵜滸が、のそのそ出て來る。

やす。あ、魂消つた。

よね。なんちうこつな、ムツシユウ・鵜滸……あんた、そぎやんとこれ寝とつたつた、昨夜から……。

鵜滸。知らばくれるなあ、よさうぜ。人を、いゝ加減に扱やがつて……。

よね。平生ん心掛んわるかけんたい。そんなら、昨夜ん騒ぎも知らんだろが。

鵜滸。おれが何かしたのか。

やす。あんたがムツシユウ・眞壁に怪我させたつたい。

鵜滸。何時……?

よね。さ、もうそろそろ出掛けんば……。

鵜滸。やつぱり今朝發つのかい。おさとは……。

よね。どうしてん發つていふけん、さうさせんばしよんなかつたあ……。あんたも船まで送つて行つてやらんかな。

鵜滸。送つてくよ。それや……。しかし、大將はどうしてるんだい。

やす。頭に繃帶ばして寝とつたい。

鵜滸。ほんとか、それや……。

やす。見て來つとよか。部屋に行たッ……。

鵜滸（何かを思ひ出すやうに、ちつと考へ込む）

やすは食堂の方へ出て行く。

よね。ほんなこたな。昨夜ロオラさんが來て、ムツシユウ・眞野ばピストルでうつたつたい。
鵜瀞（ぢつとよねの顏を見つめてゐる）
よね。わしどんまでコンミツセエルに調べられたり大騷ぎをしたつばな。
鵜瀞（相變らず目を見据ゑながら）それで……？
よね。後で見舞に行かんば善うなかろう。たんへ、僞あなんでんなかごたるばつてん。
鵜瀞。おれや知らんよ。そんなこたあ……。おい。飯を食はしてくれ。
よね。ボーイにそぎやん云ふて、何なつと食て來なつせ、もう時間のなかつだろけん。
鵜瀞（欠伸をしながら食堂の方に去る。）

さとが二階から途方にくれた樣な顏をして一歩一歩躊ひながら降りてくる。
よねは籠に果物を詰め終ると、何かを取りに奥の方へ行く。――さとが降りて來たのに氣が付かない。
さとは階段を降りきると、土間の椅子にぐつたりと倚りかゝり、頬杖を突いてぼんやり考へ込む。

長い間。

壇の底から湧く樣な汽笛の響。

やがてよねが現はれる。

よね。もうよかつかい……？

さと（默つて點く）

よね。ムッシュウ・眞鍋は見送つて來らつさんとかい。

さと（默つて點く）

よね。そるばつてん門口位までや見送つて來らしたてちやよかりさうなもんね。もう起きとらすとだろもん。

さと（首を振る）

よね。おまやあ本なこて挨拶ばして來たつかい。

さと。そつてちや、起けても起きらんとだもね、二へんも三べんも呼うだつなるばつ。そつでん目ば覺さんと……。わしやひよさぶろと思うて手ば出あたりや、部屋ん中でゴトンて音んしたッ……。なんもをりやせんとなるばつてん、わしやひよくつとからだ一ぴやッンとして、そぎやんすることも出來んだつたつ……。もう一ぺん呼うでみうと思つてちや、臀ん出んだつたつ……。寢台の傍あ立つたまゝ、あん人ん眠とる面ばぢつと見とつたつた。そしたりやひよくつと布團ば被つてしもたつだもね。わしがをるとば知つとつとだいろ知らんとだいろ……つん眠つとつとだいろ、つん眠つとらんとだいろ、そらあわからんだつたつなるばつてん……。わしや、もうこつで善かて思ふたつた。そつで、胸ん中で、さいならて云ふて、こぎやんして降りて來たつた。そるけん、もうなんも云はでん發たせつくれな。

よね。お前がぞぎやん云ふなら、そつで善かこてしとこう。こん籠にや果物と菓子ばちつとばつかり入れといたばい。そるからもう忘れもんななかろね。

さと。なか。

やすが、メリンスの兵古帯を締めながら奥から現はれる。

よね。早うせんぎりや、遅るつぞ。

やす。わしやもうよかつばな。

よね。（大きな聲で）おとみ……。早うせんぎりや遅るつぞ。

とみが外出の用意をして奥から出て來る。

とみ。わしや何ば持つと？　あ、こるば持つて行く（さう云ひながら土間に下りて果物の籠を提げる。）

其處へ、鵜齋が又顏を出す。

よね。ムツシユウ・鵜齋、早うせんぎりや遅るゝばな。

鵜瀞。おれは行くのは止めとかう。腹が痛つて動けん。（さう云ひながら疊の上にごろりと寢ころがる）おさとさん、おれは此處で勘辨してくれ。

さと。……。

よね。さ、そぎやんこた云はでん、ムッシュウ鵜瀞……。

やす。こぎやん人間に見送つて貰はん方がよかばい、おさとさん。

さと、そんなら達者（たつしや）うしとんなつせ。

鵜瀞。あゝ、あんたも御機嫌よう。

よねを先頭に、さと、やす、とみの順に外へ出る。

長い間。

やがて二階から島内が寢間着のまゝ降りて來る、あたりを見廻す。

島内。（鵜瀞に）もう發つたんですか。

鵜瀞。あゝ。

島内。そいつはしまつた。（かう云つて、しばらく躊躇してゐるが、そのまゝ二階に上つて行く。）

長い間。

三谷夫人が二階から降りてくる。時計を見る。

三谷夫人（鵜飼に）もう發ちましたんでせうか、あの女（ひと）……。

鵜飼（起き直り、）えゝ、たつた今……。

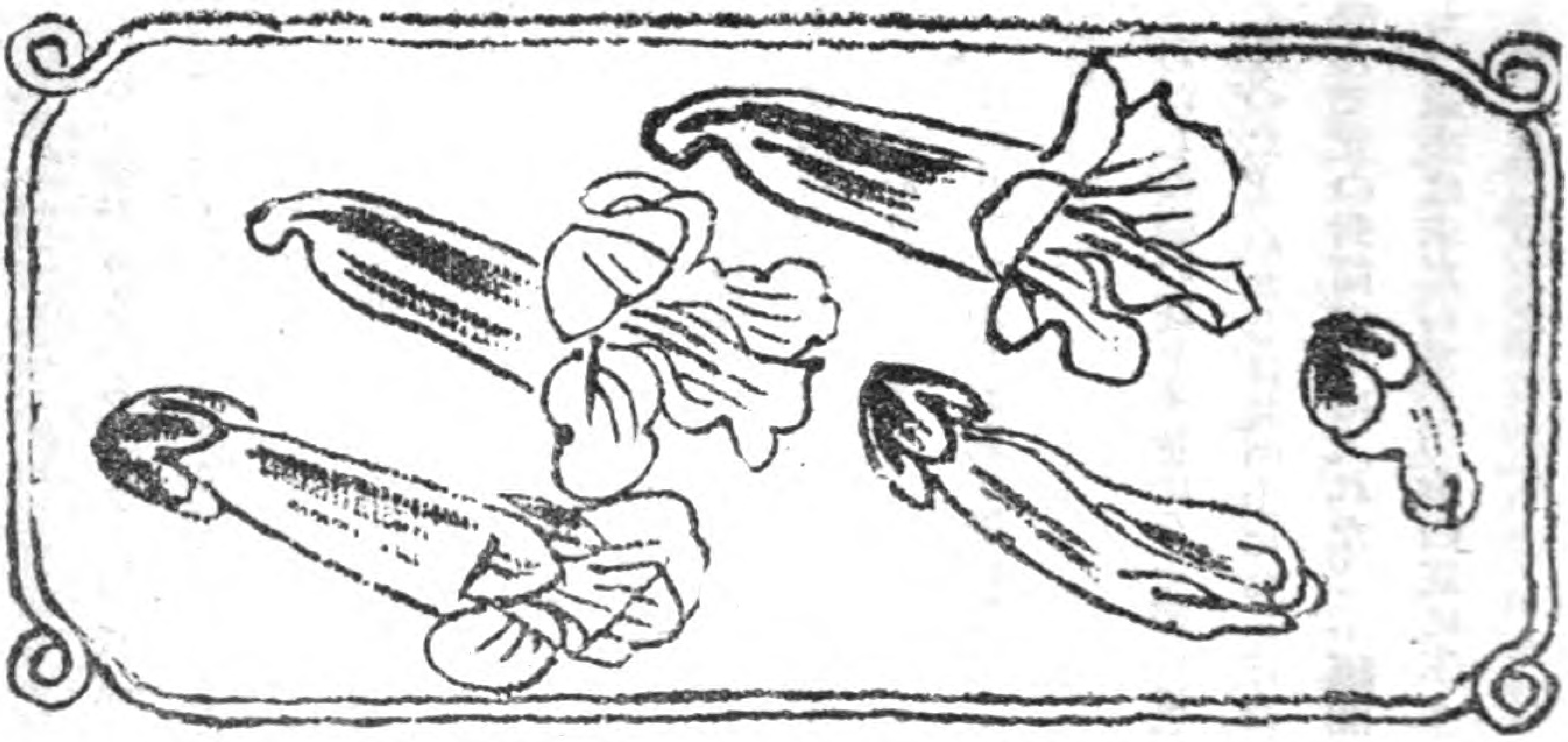
三谷夫人。さうでしたか（かう云つて稍途方にくれた様に、窓の外を見てゐるが、これも、その儘二階に上つてしまふ。）

鵜飼は再び仰向けに寢ころがる。

長い間。

やがて、ピジヤマを着た眞壁の姿が、階段の途中に現はれる。ぢつと下を見下してゐる。が、それは、さとがいよいよ出發したといふことを見とゞけるよりほか何の目的もないらしい。靜かに踵を回らして自分の部屋に歸つて行く。

—幕—



悲劇を探す男

尾崎士郎

1

「サム公よ。お前と別れて歸つてから、不眠症にて、アダリン、カルモチンなどちやんぽんに飲み、そのせいか、また風邪のためかわからないほどひどい發熱にて二日寢ました。それで手足、顏が豚の子のやうにはれてそれはみつともないことになりました。しかし今朝は宿の女中が二人あそびに來て、三人でバカのやうになつて騷ぎ廻り、熱のある身體のまゝにて、とび走りましたので今日はどうやらぽかんとしてゐます。身體のわるいときには自分の家がないのは心細いです。歸りたい。歸りたい。サムは如何して暮しておいでるやら。Y溫泉もこゝ二三日夏らしい暑さになりました。それで東京は定めて暑いことであ

らうと思ふとサムが可愛想でなりません。私も身體がよわいがサムの方がもつと弱いし、それにサムは神經でもまゐるくせがあるから、どうぞ早う涼しいこちらへ來ておくれ。この部屋は日本一に涼しいです。廣いです。川のそばです。四方がガラスばりにて風通しがすばらしいです。お前がおいでるまで每日電報うたうか。東京で何がお前をとめてゐることでせう、おばあさまのこと、それから家の借金のことなぞは私が入りかはりになり、八月、九月までかゝつてすつかり整理します。何も心配せず十圓札一枚握つて荷物もカバンも何も要らないから、身體一つでとんでおいで。こちらは涼しい。涼しい。原稿用紙は二百枚ある。お前と入れかはりになつて私が東京で金の工面をします。早うおいでんされ。待つてゐます。朝晩何を喰べておいでるやら、何を着ておいでるやら。何もくよくよしてはいけません。私は東京での困難な生活を、ある意志的な空想をもつて樂しんでゐます。お前がYですばらしい仕事と健康とをお持ちる間に私は私たちの巣を住み心地のよいすばらしい玩具の家庭につくり直すのです。この玩具の家庭の中には何時でもサム公のすばらしい着物と本と喰べものと、それから帽子と靴と、それから何時でもピチピチした十圓札とがあります。もう一つすばらしい寢床があります。こんな玩具の家庭をもつお前は仕合せではないでせうか。それは玩具ですからお前が厭になつたら何時でも壞すことができます。あゝ、うれしい、悲しい。……

わたしの胸の底を不意にうそ寒い風が通りぬけた。すると、わたしにはもう妻の手紙をこれ以上讀みつゞける勇氣がなくなつた。わたしは机の上にひろげた手紙——一枚の原稿紙の上に細かいペン字でぎつしりと書込んである——を丁寧に疊んで元の封筒の中に入れた。一瞬間、わたしは自分の心が一氣に古い記憶の中へ陷ちこんでゆくのを感じた。——しかし、過去は未だわたしの胸の底に生々しくくすぶつてゐる。その回想の一つ一つが今、新しい火の中に無氣味な音を立てて燃えはじめただ。

――おやあ、これでわたしたちはすつかり別れてしまふのね、

――さうさ、何も彼も消えてしまつたのさ、死滅したテーマのぐるりを堂々廻りしてゐたつて仕方がない、いゝかね、おれにとつて一ばん大事なものは記憶なのだ、その記憶が今はずたずたに引裂れてしまつたのだ、一切のものの消えよだ、この家が何だい、この壁が――。この庭が、おれはだれにでも哭れてやるぞ！

――それで、もう何も言ふことはないのね、わたし明日から、もうゐなくなつてしまふのよ、そして今度會ふときには、始めてあなたに會つたときのやうな可愛いゝ娘さんになつてやつてくるわ、上野で逢たときのやうに、島田を結つて、いゝ着物を着て、それから長襦袢も着て、…………

――泣くな、馬鹿、そんなセンチメンタリズムが今のおれたちに何の必要があるんだ。貴様は何時でもおれのヤケ（自棄）に調子を合す用意をしてゐやがるくせに、

――要らぬお世話さ、あなたはこれからひとりになつて奇麗な若いお嫁さんを貰ふといいわ、でも、わたし悲しいのよ、だから私もこれからうんと奇麗になつて勝手なことをして暮してやるわ、さあ、これからほんとうにひとりぼつちなのよ、ねえ、何故あなたはそんな難かしい顔をしてゐるの、まるで人類の苦悶をひとりで脊負つて立つてゐるやうな顔をしてさ、

――だから、お前の存在なんぞ眼中に無いと言つてるんぢやあないか、――うるさい奴だな、おれはもう寝るよ、

――あなたはそれで平氣で眠られるの、ぢやあ、これでほんとうにすつかりおわかれなのね、わたし明日から何處かへ行つてしまふのよ、

――如何でもするがいいさ、何處へでも勝手なところへ行けよ、ゴミ溜の中でも、群集の中でも、何處へでも行つてお前の新しい痴話喧嘩の相手を探してくるがいいさ、

うす暗い部屋の中で妻の蒼ざめた顔が顫へてゐる。二人は大きな瀬戸の火鉢を挾んで坐つてゐるのであつた。その中に投げこまれた一束の手紙——わたしたちの戀愛の歴史——が、やうやく燃え盡きようとするところだつた。わたしは今にも泣き出しさうになる氣持をぢつとこらへながら、しかしかすかにわたしの胸をみたしはじめた慘虐な感情を無理にもかき立てようとしたが、しかし、わたしの眼は火鉢の中の灰の上に白くうかんでゐる手紙の文字の上を放心したやうに彷徨つてゐるのであつた。如何しておれはかういふ氣持になつてしまつたのか、——いや、さういふことを考へるべきではない。おれは前へ進むのだ、さあ此處で大きく廻れ右をして未知の將來に向つて歩きだすのだ！

ともすれば深い回想の中へ引きもどされさうになる自分を勵ますやうに、さう呟いてみるのであつたが、しかし、わたしの心の中は、道具を一つ殘らず運び去られてしまつたあとのがらんどうの部屋のやうであつた。そのとき、夜風に鳴る笹の葉づれの音が、この部屋の中のうそ寒く澱んだ空氣に調を合すやうにひゞいてきた。その音の中にわたしの昂奮はぢりぢりとおとろへていつた。すると、このうす暗い部屋の中にいがみ合つてゐる二つの魂が同じやうに哀れな姿をとつて不意にわたしの眼の前に現はれてきたのである。

わたしの兩手は何時の間にか前にのびてゐた。わたしは化石したやうに冷たくなつた妻の痩せた肩をしつかりと壓へつけながら、

「——さあ、今夜は寢ようぢやないか、お互に新しい不幸の中へ飛びこんでゆくときが來たんだ、それだけのことさ、おれたちはこの古ぼけたロマンチシズムの城砦を捨てて新しい人生の旅にのぼるときが來たのだ、だからおれたちは……」

しかし、涙をこらえるためにぢつと歯を喰ひしばつてゐる妻の横顔を見ると、わたしは急に口を噤んでしまつた。悲しみがどつと溢れてきた。そのまま、わたしは火鉢のふちに顔を俯せてしまつた。何も言ふことはなかつた。もう二人の間にはお互ひの理解を要求するための新しい言葉は殘つてゐなかつたから。さうだ、深い愛情の中に、——愛情の高まりに

つれて離反してゆく二つの魂の持つ宿命がいよいよ最後のわかれ道にまで二人を追ひ詰めてしまつたといふことに氣づいては。——

妻は、ふと思ひ立つたやうに火鉢の中を名殘惜しさうに見詰めてゐたが、急に深い溜息を吐きながら、そばにあつた一枚の古新聞を膝の上にひろげはじめた。それからおそるおそる火箸をとつて、もうすつかり灰になつてしまつた手紙の燃えかすを二つ三つとつまみあげた。わたしは思はずどきつとした。深い悲劇がわたしの心を捉へた。彼女の心がありありとわたしの胸にうつつてきたのである。

「おい、如何するんだ、そんなことをして？」

「この灰をとつておくのよ」と、妻は、わたしの言葉を彈き返すやうに明るい調子で言つた。——「わたし、あなたの氣持はよくわかるの、だけど、わたしには、この古いロマンチシズムが無ければ生きてゐられないのよ、でもわたし今はほんたうに幸福なのよ、あなたがわたしに、どんなひどいことをなすつても、やつぱり、あなたはわたしを愛してゐて下さるといふことがよくわかるのよ、わたし、こんなに愛されてゐたといふことだけで、どんなに幸福か知れないのよ、でも、わたしは何一つあなたのお役に立たなかつたのね、わたしはほんたうにいけない奴なの、そのことだけが悲しいわ」

「おい、おい、——そんな話はもうよさうぢやないか、何しろ今夜は寢よう、愚圖愚圖してゐると夜が明けてしまふぜ」

「夜が明けたつていいぢやないの、もう今夜だけだといふのに、さあ、此處へいらつしやい、そしてならんで腰かけて靜かな氣持で話をしようぢやないの」

彼女はよろよろと立ちあがつて寢台の端しに腰をおろした。……………

わたしはもう、ほぐしはじめた回想の糸を絶ち切ることができなかつた。それは不思議な物狂はしい瞬間であつた。この同じ部屋の中でわたしは何時の間にか半歳前の出來事の復習をやつてゐるのであつた。そして、火鉢も、寢台も、窓も、カーテンも、いや、かつてわたしたちの不幸を照らした電燈の光さへ、同じやうにわたしの淋しい影を高い壁の平面にうつし出してゐるのに、それにもかゝはらず、この美しい空想は最早わたしの手の屆かないところまで遠く離れていつてしまつたではないか。といふのは、わたしはもう新らしい不幸の中へ身を躍らしてしまつてゐるからである。それはちやうど糸を失つた風船が次第に高く空の深みの中に消えてゆくのをぢつと見詰めてゐるやうなものだ。おゝ、それにしても、あのときから、もう半歳近く經つてゐるではないか。玩具のやうな家庭、玩具のやうな家、すばらしい寢台、ピチピチの十圓札――わたしは妻の手紙の中の文句をもう一度頭の中に繰返へした。しかしこの美しい空想すらも、今は何とうす氣味わるくわたしの心の上にのしかゝつてくることよ。このやうな深い愛情にみちた妻を持つた幸福な男が世界の何處にゐるであらうか。このやうな深い愛情に追駈けられながら、それにもかゝはらず逃げ廻らなければならない不幸な男が。――

わたしは到頭、妻に送る手紙を書くために机の上に原稿用紙をひろげたのである。しかし、わたしの感情は硬化して何を書く氣力もなかつた。すべてが終つてしまつたのだ。すべてが。――すべてがあまりに進みすぎてしまつてゐるのだ。それでなければあまりに遲れすぎてしまつてゐるのだ。妻への愛情は最早わたしの心に一本の古い里程標となつて殘されてゐるだけだ。それだけのことではないか。前へ進め、前へ！

わたしはそのまゝ寢臺の上へぐつたりと死骸のやうに横になつた。すると、一隊の騎兵が乾いた道路に砂塵を立てゝ走り去るやうに、過去と未來とをつなぐ雜念の行列が陰酸な翳をふるひ落しながら走りすぎた。風が絶え間なくあけ放した窓のカーテンをゆり動かした。そのたびごとに蒼く澄んだ空の色が疲れたわたしの視野の中にひろがつてきた。遠くの方

から太鼓の音が聞え。それから。かすかな跫音が。きれぎれに夜風の中を傳つてきた。その音におもはず耳を澄ましてゐると。夜祭の雜踏の中をひとりでよちよちと歩いてゆく妻のうしろ姿がひよつこりとうかびあがつた。すると。古い回想が。一つ一つ。鈍い午後の陽ざしの中に舞ひ落ちる木の葉のやうにわたしの腦底をかすめて逝つた。わたしはもうぢつとして部屋の中に坐つてゐることができなくなつた。やつとのことで鳥籠をぬけ出した一羽の小鳥が新しい未來に向つて翼をひろげたときに彼の身體はもう何時の間にかカスミ網にひつかゝつてしまつてゐるやうに息苦しい羽搏きを心の中につづけながら。しかし。わたしは自分のつくりあげた人生の筋書をもう一度頭の中で調べはじめたのである。その筋書には少しの誤りもなかつた。わたしが進んで極度の不幸の中に追ひ込まうとした主人公（わたし自身）は。見事にわたしの想像以上のどたん場に追ひ詰められてしまつてゐるのだから。「羚羊の攀づる道」さへも今は彼の眼の前に横つてはゐないのである。彼は過去の地獄をうしろに殘して歩きつゞけてきたのだ。そして今や新しい不幸の斷崖が彼の脚下にはるばるとつゞいてゐる。だが。しかし。その前に立ちどまつて。ふとうしろをふりかへつた彼の眼に。夕陽の中に輝いた過去の風景がいかに美しく見えることであらう。それは妻を捨てゝ。故郷を逃れ出た男が。とある丘の上に立つて慘苦の記憶の中にすらも美しい姿を描き出すことができるやうに。彼は過ぎ去つた日のゆるやかな生活の流れにぢつと耳を澄ますのである。それから彼は立ちあがる。そして何の躊躇もなく。くるりと一廻轉して。新しい道を歩きはじめる。風景は眼新しく刻々にうつり變つて。彼の殘してきた過去の里程標はたちまち夜の闇の中にかくれてしまふのである。

それだけのことではないか「お前は蜃氣樓に欺かれてはならないぞ！」と。わたしは顫へ聲で自分に叫びかけながら冷たい蒲團の中へもぐりこんだ。しかし。何時の間にか枕が涙に濡れてゐるのに氣がつくと慌てゝ立ちあがつた。そして。外からくる過去のおもひでの來襲を防ぐために力強く窓をしめた。

2

朝。わたしは重苦しい夢の中に氣忙しく下の家の格子戸を敲く音を聽いた。痩犬のフリッツが甲高い聲で吠え立てた。わたしは今、自分をとりまいてゐる借金取りの一人を頭に描きながら、――しかし、さういふ豫想の中に不吉な運命を感じながら、ちやうど寢臺に眠つてゐる將軍が兇惡な刺客を迎へるやうな氣持で起きあがつた。靴音がわたしのゐる上の家に向つて土の階段を駈けのぼつてきた。かういふときには機先を制するにかぎる。――わたしは急いで鍵を外して、一氣に入口の扉をひらいた。すると、ヴエランダの前に立つてゐた若い電報配達が、わたしのとげとげしい表情にぶつかつて、かすかなおそれと輕い反抗とのために肩をそびやかしたところだつた。

「電報です！」

「――――」

わたしは妙に照れ臭い氣持になつて彼から電報をうけとると、そのまゝ逃げるやうに寢室へ歸つた。そして、電報の差出人に對して、不安を極度にまで誇張することによつて胸を躍らせながら、しかし、急いで短い電文を讀みはじめた。

「イツクルカスクヘンマツ」

いよいよ、運命に對する妻の挑戰がはじまつたのだ。わたしの胸は見事にこの愛情の砲丸によつてうちぬかれた。しかし、一瞬間、もはや彼女の機關銃から身をそらすことができないといふ氣持のために、單身、敵の陣營の中に躍り込まうといふ勇氣がわたしの心に奮ひ起つてきたのである。

おれは妻をおそれてはならぬ。今こそ、おれは冷徹な惡魔の心になつて、妻の前にすべての眞實を語るのだ。わたしが人生の上に立てた新しい計畫について。すべての家庭的な愛情がわたしにとつてまつたく無價値になつてしまつてゐるこ

とについて。それから、何時の間にか妻にかくれて、わたしが一人の少女を愛しはじめたことについて。

わたしは、しかし、何よりもこのひそやかな戀愛の報告のために妻の心に現はれるであらうところの反應について考へねばならなかつた。何故かといつて、いかなる言葉によつてこの事實が語られるとしてもわたしの心の動きを正しく彼女に傳へることは出來ないであらうから。――

わたしは、自分の語るべき言葉をさまざまに組立てゝみるのであつた。それを幾度びとなく解きほぐしては、そして、解きほぐすごとに、自分に都合のいゝ想念を一つ一つ積み重ねていつたが、しかし、嚴めしく裝ひ立てられた空虚な論理は、すべて、彼女の前ではひとたまりもなく崩れてしまひさうに思はれる。そこで、わたしは到頭、彼女に會ふための心の構へを投げ棄てた。――勝負は時の運ではないか、何しろ、おれはぶつつかつてみなければ、………。

わたしは時計を見て汽車の時間表を調べ、それから大急ぎで洋服に着替へた。すると、まるで何事もなく平穏な旅に出かけるやうな、そわそわした氣持にさへなつた。蟇口の中には二圓足らずの金しか入つてゐないが、しかし、途中で時計を質に入れゝば如何にかなるであらう。恐るゝことはない。下の家の母親の寢てゐる部屋の窓の下をそつと通りぬければそれでいゝのだ。(母親の病勢は前の日から少しづつ險惡になつてゐた)――わたしは壁際に立てかけてあつたステツキをとつて立ちあがつた。

大氣は妙にうすじめつて風にはかすかなねばりがあつた。門前にならんでゐる椎の木の梢が高く鳴りだした。その音をうしろに聽きながら、何時ものやうに新しく砂利を敷いた裏道を忍びやかな足どりで歩きはじめた。しかし、石塊を敷いた坂道を表通りへぬけることは何よりも危險だつた。と、いふのは、「袋の口を思はせるその露路のぐるりは、小さな債權者のむれによつてすつかりとりかこまれてゐたから。先づその入口に陣を敷いてゐるのは見るからに精悍な酒屋の親爺であつた。(こいつは最も强敵である)その前が、肴屋、米屋、俥屋といつた風に沒落に瀕したわたしの居城をとりかこんで

彼等は何時でも火ぶたを切らうとしてゐるのである。だが、わたしは誰れにも見つけられずに雜木林のかげの落葉を蹴いた細い道にぬけることができた。誰れも見てゐるものはなかつた。今は、わたしにとつて唯ひとりのサンチョパンザであるところの老犬フリッツが鼻を鳴らしながらついてくるほかには。──だが、停車場へつゞく廣い大通りへ曲る坂の上り口まで來たときには、この氣まぐれな犬の姿はもう見ることができなかつた。

3

三島驛へ着いたのは、しかし、その日の日ぐれ方だつた。わたしは、かすかな胸のときめきを感じながら、悠遊しにプラットホームを見わたした。それから、ぞろぞろとおりる乘客の一ばんうしろから、わざとゆつくりした足どりでついていつた。汽車をおりるとき、わたしは一歩踏みとゞまつてもう一度雜踏の上を見おろした。 渉がわたしを見つけるよりも前に、わたしの方が先きに彼女を見つけるために。そして、彼女の新しい魅力がどの程度にまでわたしに働きかけるかをさぐるために。

人々の影がわたしの眼の前をゆらめいて流れた。おや、來てゐないのかな。──わたしはすぐにホームへとびおりた。すると、彼女はわたしのまん前に、ぢつとわたしを見上げながら、柱をうしろにして立つてゐるのであつた。どきつとしてわたしは立ちどまつた。彼女はわたしの視線を迎へると、待つてゐたやうにほがらかな笑ひを浴せかけた。不意うちを喰つて私は思はず帽子をとつた。もう一息でお仕儀をしてしまふところだつたが、しかし一瞬間、彼女の瞳をかすめた悲しげな感情に觸れると、わたしはやつとわれに返つた。

そのまゝ、わたしたちは一言も交さないで改札口の方へ歩きだした。頬紅の色のために彼女の顏は前よりも肥つて見えたが、しかし、もう六月も終りだといふのに、セルの平常着を着流してゐる姿が、妙に侘しい感じを與へた。それに、最

も悪いことに、すべての身装が見通りだといふことだつた。無造作に束ねた髪にも、帯の結び方にも、手提袋にも、安物の下駄にも、半年前の二人の生活の影が沁みついてゐるといふことだつた。――

「若しかしたら電報が間に合はないかしらと思つてね」

すると、おそるおそる彼女を見たわたしの顔の上に、妻は深い愛情のこもつた視線を投げながら言つた。――「大急ぎでやつて來たのよ、そりやあ、もう、ろくすつぽお化粧をするひまもなかつたのよ、これで……」

と、彼女は出口の前で立ちどまつて、

「――これから何處へゆくの？」

「何處へゆくか見當なんかつけてゐないよ、それに電報が間に合はないやうな氣がしたものだからね」

「電報が間に合はなかつたら如何するつもりだつたの？」

「さあ、――仕方がないから、さうなればM町に泊つて、もう一度電報をうつか、それとも……」

「どつちにしても、あなたはY（温泉）までゐらつしやるつもりはないのね、わたし、さう思つて、わざと宿の方には停車場まで迎へに來なくてもいゝと言つてきたのよ、でもよかつたわ、ことによると、わたしが出たあとで、行くのを見合せるといふ電報が來てゐるんぢやないかしらと思つて、はらはらしながらやつてきたのよ」

そのとき、ホームの左手（汽車の到着する場所とは反對側の）に、S行の輕便列車が氣魂しく發車の汽笛を鳴らしはじめた。すると、彼女は、ほとんど衝動的にその前に走りよつて一番最後の車室の扉をあけた、そして、せき立てるやうにわたしを追ひ込みながら、早口に言つた。

「ぢやあ、兎に角、これに乘りませうよ」

車室の中は彼女とわたしと二人きりだつた。

「ねえ、あなた、——あなた今、お金持ち?」

汽車が動きだすと、突然彼女は調子はづれの聲でかう言つてから、くすくす笑ひだした。——「わたし、自分の言葉をまるで忘れてしまつたのよ、何だか、へんにピントが合はなくなつてゐるのね、あなたの顏だつて、わたしすつかり忘れてしまつたのよ、ほんたうに、こんな顏だつたのかしら」

その言葉の浮々したわざとらしさにもかゝはらず、彼女の表情の中には、全く反對の感情がひそんでゐた。彼女は、極度に言葉をゆがめることによつて、深い悲しみをまぎらさうと努めてゐるやうに見えた。

「それで、一體、何處へつれてゆくんだい?」

「——このすぐ先きにNといふ溫泉があるのよ、でも、あなたはあまりゆつくりできないのね」

わたしはそのとき、ぢつとわたしの顏に定着してゐた彼女の視線が次第にゆるんでくるのを見た。如何したといふのだ。——ピントがはづれてしまつたのは言葉だけではなかつた。この色のあせた會話の中に如何して以前の夫婦の姿を描きだすことができるであらう。——一瞬間、わたしの眼がしらはぼうつとかすんできた。涙が止度もなく流れだした。

「馬鹿ね。——サム公、こんなところで泣いたりして」

彼女はハンカチをもつた左手で不意にわたしの顏を抑へた。この思ひがけない愁歎場に一脈の色彩を添へるために。

4

客のほとんどゐない靜かな溫泉宿の離室であつた。わたしと妻とは、夕飯のあと、明るい電燈の光の中にはじめてしみ

じみと顔を見合はせたのである。わたしの心は、もう何時の間にか何事も起らなかつた前と同じやうなゆつたりとした落ちつきにみたされてゐた。――それは過去と現在とを同時に感じてゐるやうな奇妙な時間であつた。まるでわたしは長い旅を終へて自分の家へ歸つたやうな氣持にさへなつた。今、そこに、わたしの眼の前に坐つてゐるのはいふまでもなく、昔ながらの、わたしの妻と呼ばるべき女であり、だから、わたしたちの間には昔ながらの愛情がかき立てられてゐるではないか。

それにもかゝはらず彼女は、もはや家庭の牢獄の中で、わたしの生活を見まもり、わたしの空想の方向にまで干渉しようとする意地のわるい看守ではなかつた。それにしても、わたしの心は古い戀愛の里程標をうしろに殘して、前へ前へと進んでゐるのに、そして、二人の生活はすつかり變つてしまつてゐるのに、何と新しい情感の陽ざしがわたしの胸の中にひろがつてくることよ。

これは一體、生活の始めなのか、それとも終なのか。……事實、東京でのわたしの生活は一變して、新しい戀愛が芽をふき、新しい敵に向つての戰鬪が、ひろげられてゐるのに、おゝ、それ等の生々しい現實までがいかに古ぼけて見えることであらう。そして、わたしは今、此處にゐるではないか。昔ながらの妻のそばに。昔ながらの情愛の中に。――

しかし、その感じは、妻が口をひらいて、彼女の生活――Y温泉での新しい友人たちにとりまかれてゐる――を語りだすにつれて、だんだんうすれていつた。わたしは彼女が、わたしから遠く離れた雰圍氣の中にゐることを感じなければならなかつたから。さういふ雰圍氣に對して、わたしは何時の間にか、前と同じやうな嫌惡と嫉妬を感じはじめた自分の心を今更のやうに顧みた。わたしの心に反應したその感じに對して、しかし、慌てゝ彼女は警戒しはじめたのである。そして、話題の方向を一變して、多分わたしが興味を持つであらうところのY温泉でのさまざまな出來事をしやべりだした。

例へば、宿の女中が一夜泊りの學生と駈落ちした話とか、村の豪農の娘が電報配達に強姦された話とか、山の中腹にある

有名な瀧が新しい水力電氣の工事のために水量を失ふといふことについて村中で大騒ぎをしてゐるといふ話とか。……

だが、それ等の話はわたしにとつてはおそろしく退屈なものであつた。それ等の退屈な話がつゞいてゐる間に、しかし、わたしは過去の幽靈に對する構へをすつかり立て直してゐた。わたしは相手を自分のつくつた陷穽におびきよせるために何時の間にかかういふ調子で言葉を切りだした。

「ねえ、それよりも、お前の戀愛事件（ラヴアフエイア）を聽かうぢやないか！」

「わたしの戀愛事件ですつて、——冗談ぢやないわ、あなた未だあんなことを氣にしてゐるの？」

彼女はどきつとして、不意に言葉の調子を變へてから、わたしの表情をさぐりはじめた。——「あの人はもうY温泉にゐないのよ、だけど、あの人が假りにわたしに戀してゐたとしてもそりやあ、あの人の勝手ぢやないの、それに、わたし此頃はあの人がやつてきてもろくすつぽ物も言はなかつたのよ。」

「あの人といふのは高尾君のことなんだね？」

「さうよ、——だつて、あなたがさう思つてゐるんでせう、だけど、そのことは、わたし誰れの前だつてはつきり言へるわ、あの人がどんなに深刻な戀情を寄せたとしても、わたしの心にひゞかなかつたとしたなら何でもないぢやないの？」

彼女の顏は昂奮のために火照つてきた。わたしは、自分が豫期してゐたよりも以上の苛立たしさを感じながらも、しかし、次第にわたしの思ふ壺にはまつてくる彼女の心を被告に對する冷酷な檢事の眼で見おろした。

「そんなことにムキになる必要はないぢやないか、——おれたちの關係はもう明かにそんな時期を通り越してゐるんだからね、だから、お前も、もつと樂な氣持で話した方がいゝよ。」

「樂な氣持ですつて、へん、——そんなことを言ふもんぢやないわ、みつともなくつて仕方がないぢやないの、わたし、あの人に會ふのが恐ろしかつたわ、あの人は十五年間、わたしが自分のところへ來るのを待つてゐるといふのよ。」

過去が再びわたしの頭の中に殺到してきたのである。心が前にのめりかゝつた。――わたしは自分のつくつた陥穽の中に危く足を踏みはづしてしまふところだつた。その瞬間、妻に對する憎惡が、もうすつかり錆ついてしまつた古い記憶とゝもに溢れ出てきたのである。すると、一年前に、わたしの愛情の上に小さな蹉跌を來したところの一つの出來事が、その出來事の前にみすぼらしく腰をかゞめてきた自分の姿までがありありとうかんできたのである。

――一年前の冬の夜であつた。もう年も暮に近かつた。Y溫泉から彼が妻を訪ねてやつてきたのは。しかし、わたしとの間にあまり年配の隔たりのないこの若い洋畫家、――高尾伸三をわたしはその年の夏、始めてY溫泉へ行つたときから知つてゐた。彼の顏の輪廓も身體つきも妙に角ばつて無恰好であつたが、しかしそれにもかゝはらず、この男と話してゐると、ひそやかな情感が迫つてくるのを覺へた。それは佗しい運命の影に彩られた情感であつたが。――わたしは何時の間にか、彼に對して、それは年長者が年下の者に對して感ずるやうなかすかな尊敬と信頼とを感じはじめた。妻はわたしよりも先きにそこへ行つてゐたので、彼女がわたしに彼を紹介したときには二人の間にはもうさゝやかな友情が、――といふよりも、彼の情感が妻の心の一角に淡い影を落してゐた。といふのは、彼の言つた言葉が何時の間にか妻の口によつて繰返され、ときには彼の辭までが、妻の言葉の端しはしにまで現れてきたからである。

しかし、わたしは、つとめておろかな亭主となるための役割を避けねばならなかつた。例へば、假りに、高尾の友情が彼女に對して、はつきりとした戀愛のかたちをとることがあるとしても何であらう。さういふ場合が來たら堂々と戰はう。おれはこの戰ひを不純にしてはならぬ、――わたしは心にさう叫びかけながら、むしろ彼の挑戰をひそかに期待するやうな氣持で、毎日のやうに心の中を去來する小さな嫉妬を壓へつけねばならなかつた。しかし、妻に對する感情とは反對の角度をもつて彼はわたしに近づいてきた。わたしは彼の心の動きに對して、かすかな心の用意を感じながらも、しかし、わたしに近づき、わたしを理解しようとする彼の眞實を疑はなかつた。秋が來て、妻だけをそこに殘して東京に歸る

日が來ても、だから、少しの不安を感じなかつたほどに。だが、東京へ歸つてくると、現實への距離があまりに遠くなりすぎたので、無數の幻覺がわたしをおびやかしはじめた。曇りかけた感情の中でわたしは次第に妻の愛情を疑ひはじめたのである。すると空想の中のわたしの敵は正面からわたしに向つて銃口を向けだした。――一ト月ほど經つて妻はひとりで歸つてきた。

「――もう少し經つたらね、高尾さんがゐらつしやるつて」と、彼女はわたしの顏を見るとすぐに浮きうきした調子で言つた。

「高尾君が、――何しに？」

ふとわたしの顏に現はれた險惡な表情を見てとると、妻はいかにも意外だといつた風に急に聲の調子を落した。

「勿論、あなたに會ひによ」

「おれに會ひに、――」

わたしは鼻の先きでせゝら笑ふやうに、さう言つてから、妻の表情の中に少しの嘘もうかんでゐないのをたしかめると、急にどぎまぎしながら。

「ぢやあ、高尾君を迎へる準備をしよう」

しかし、わたしが自分の卑劣さを掩ふための照れかくしにさう言つた言葉までが、一ト月と經たぬうちに現實となつて現はれてきたといふことは何といふ皮肉であらう。といふのは、わたしは久しぶりで彼と向ひ合つた瞬間、わたしが彼を親しい友人として迎へようと努めてゐるよりも以上に彼の心がわたしに對して極度のぎごちなさのためにほとんど何時もの平定を失つてしまつてゐることに氣がついたからである。それは夕方であつたが紺絣りの着物の上に黒いマントを羽織つた彼の姿はわたしの胸にかすかな哀傷を喚つた。寒い風の中を歩いて來たせいであらう、彼の顏は蒼ざめて、切ない物思

ひに深く沈んでゐるやうに見えた。——その夜、近所に住んでゐる若い詩人、Aの家でダンスの催があるから見に來ないかといふ誘ひをうけてゐたので夕飯のすんだあとわたしたちは彼と三人で出かけた。Aの家は奇麗にとりかたづけられて、正面の西洋間には、蓄音機の奏樂につれて幾組かの男女が踊つてゐた。わたしはダンスのはじまつてゐる次の部屋で踊りに疲れた人々といつしよにウィスキーを飲みながら雜談に耽つてゐたが、ふと傍にゐた高尾仲三の顏を見ると、思はずしやべりかけた無駄口を途中でよしてしまつた。彼は非常に苛々してゐた。それは彼の氣持がこの場所の空氣に調合しきれないもどかしさのためであるよりも以上に、何か心の底におさまりきれない感情のそひんでゐることを思はせた。彼はひとりで、ぐいぐいとウイスキーを呷りはじめたのである。それから、蓄音機の奏樂に合せて椅子に腰をかけたまゝで無恰好な身體をゆすぶりだした。

「——どうです、高尾君、いつそのこと踊つてみては?」

わたしはふいと立ちあがつて、うしろから彼の肩を敲いた。すると、彼はどろんとした眼でぢつとわたしを見据へながら、けれどもある感情の反撥を示すために、わざと一度、苦笑ひをしてみせてから、

「何故?」と言つた。

わたしは彼の思ひがけない强い語調にどぎまぎしながら、

「——いや、君が踊り出したらね。ことによつたら僕も小說が書けるかも知れないと思つてさ」

「ぢやあ、踊りませう。君に小說を書かせるためにね」

荒々しく立ちあがつて、彼はダンスの相手をさがすために部屋の外へ出ていつた。そのとき、わたしの耳に廊下の一角から妻の言葉がひゞいてきた。——「あぶないぢやないの、そんな恰好をして……」

彼女は何かしきりに高尾と言ひ爭つてゐるやうであつたが、一瞬間、わたしの耳は烈しく鳴りだした。もう落ちついて

ゐることができなかつた。わたしは立てつゞけにウイスキーをぐいぐいと飲み乾した。

數分間の後、彼は、いかにも疲れたやうに胸を撫でながら部屋へ歸つてきた。彼とわたしとは始めてテーブルをはさんで向ひ合つたのである。彼はもうすつかり落ちついてゐた。しかし、彼が落ちつくにつれて、わたしの心は俄かにいきり立つてきた。わたしは正面から彼に對してぢりぢりと攻勢をとりはじめた。わたしの表情の中からすぐに、彼も一つの感情を讀みとつたらしい。――――彼は傍にゐた人たちの方を向いて醉ひにまかせて、しかし、靜かな調子でわけもなくしやべりだした。わたしには彼が何をしやべつてゐるのかまるでわからなかつた。わたしの心は唯一つの機會をねらふことにのみ追はれてゐたから。そのとき、彼がくるりとわたしの方を向いた。わたしはぢつと彼の顏を見た。そして眼を。――すると、彼の表情の中をひとすぢの輕侮の情が電光のごとく走り去つた。

「おー―」と、わたしは低く叫んで立ちあがつた。胸の底で何か一つの堅い殼がぱちん！とはぢけるやうな音を聞きながらわたしは右手に握りしめた煙草を火のついたまゝふりかざして、一氣に彼の面上に敲きつけた。燃えさしの煙草は彼の額に當つて、テーブルの上に落ちた。彼は、しかし、冷やかな手つきで、今、眼の前に落ちた煙草をつまみあげた。ぢつとわたしの顏を見詰めてゐる彼の眼は、わたしの顏に現はれた戰意をたしかめようとするよりも、むしろ、何か一つの見えざる感情への憧れのために輝いてゐた。この思ひがけない素振りに、充分、彼の應戰を豫期してゐたわたしの心は急にたぢたぢとひるみはじめた。すると、彼は視線をわたしの顏から離して、ぢつと考へこむやうに眼を瞑ぢた。しかし、すぐに猛然として立ちあがつた。

「よし、やらう。――さあ來い！」

わたしの心は隙をつかれて二三步あとへのめりかゝつたが、しかし、彼の不意の襲擊に對して長い間壓へつけられてゐた野性が一時に燃えあがつてきた。しかし、わたしたちの怒號はそこにあつまつた人々によつてすぐに隔てられてしまつ

た。そのとき、わたしは自分の右手が、妻の咽喉の中にしつかり支へられてゐるのを知ると、矢庭に彼女の肩を突きとばしながら叫びだした。——「馬鹿！あつちへ行け、貴様におれをとめる資格があるか、今こそ、貴様が望むところのものを見せてやるのだ、馬鹿！」

その夜の出來事が、——もう、すつかり、新しい土によつて掩ひかくされてしまつてゐる過去の事實が、わたしの眼の前に現れてきたのである。すると、わたしは妻に對する憎惡の記憶に唆しかけられながら、そして、慘忍な感情が小氣味よく心を煽るのにまかせながら、もう一度古い言葉を胸の中で繰返へした。……「今こそ、貴様が望むところのものを見せてやるのだ！」

5

しかし、長い沈默のあとで、彼女は、ほがらかに、輕るがるとわたしのつくつた陷穽の上をとび越えてしまつた。——「そんなことよりも、サム公、もつといい話をしようぢやないの、こんなもつたいない時間をそんなことでつぶしてしまふのは惜しいわ」

「いい話だつて？」

「さうよ、——わたし、もうづつと長い間このことを考へてゐたのよ、わたし、あなたの心を苦しめたりなんぞしないわ、わたしがみんなわるかつたのよ、だから……」

「だから如何するのさ？」

「そんな風に言はないでね、——わたし、ほんとうにあなたを一人きりにしてあげるわ、そして、わたしたちはもつと高いところで結びつかうぢやないの、ねえ、——「事實は影なり」つて、何時かあなたはわたしにかう言つて敎へてくれた

ことがあるぢやあないの、だから、過去の事實をほぢくり廻すのはよさうぢやないの」と

さうかも知れない、――だが、おれの心の中ではお前の存在そのものが既に過去の事實になつてしまつてゐるのだ、とわたしは危く言ふところだつたが、しかし、やつと疼くやうにのぼつてきた一聯の言葉を咽喉元で壓へつけながら、

「お前の言ふとほりさ、だがね、おれは「影」を求めてゐるのぢやなくつて「事實」を求めてゐるのだ、――動いてゐるのは「事實」であつても「影」ぢやあないからね」

「ぢやあ」

と、彼女はそのとき呼吸を彈ませながら言つた。――「ぢやあ、わたしたちの愛情もあなたにとつては一つの「影」なのね？」

「さうさ」

わたしは此處で、今まで自分を胡魔化してゐた假面を剝ぎ捨てた。そして、わたしの眼の前に坐つてゐる一人の女の顏を見おろした。一人の女を、――さうだ、妻でも戀人でもないところの一人の女の顏を。

すると、ちやぶ台の端しをつかんだ彼女の指の先がかすかに顫へだした。

「ぢやあ、あなたの心の中には、わたしに對する愛情はほんのちよつぴりとも殘つてゐないのね、そして、あなたは未だわたしを憎んでゐるのね？」

「――さうだ、すくなくとも、今までおれたちが家庭の中で大事に育ててきたやうな小さな愛情はね、しかし、おれはこんなにお前を愛してゐるぢやないか、それはお前を憎んでゐるといふことと同じことさ、――お前がおれに小さな愛情を求めるのは、やつとのことで金網を喰ひやぶつて飛んでいつた小鳥の前に同じ鳥籠を置いてもう一度この中へはいれといふやうなものさ、未知の荒漠に向つて翼をひろげた小鳥の姿が、とりも直さず未知の悲劇に向つて突進するおれの姿だ

——おれは多分、不幸になるだらうよ、だが、あの鳥籠の中でお伽噺のやうな戀話喧嘩のテーマをくりかへしてゐる時期はもう疾くに過ぎ去つてゐるんだからな」

彼女の顔は見る見るうちに曇つてきた。話が途切れた。窓の下を流れてゐる川波の音がどつとわたしの幻想の中に迫つてきた。立ちあがつて障子をあけると、雨氣を帶びた山の綠に電燈の火影がうつつてゐる。流れの上には夕霧が流れ、すぐ眼近にある大きな岩は艶やかにしめつてゐた。だがそのなめらかな岩肌にこびりついた苔が波を浴びるごとにかすかにゆれてゐるのを、わたしはもどかしい氣持で眺めた。——

わたしは、しかし、部屋の中で妻のすすり泣く聲を聞くと慌てて障子をしめた。彼女は何時の間にか壁の方を向いて、わたしに背を向けて坐つてゐた。すると、肩から下の丸く屈んだうしろ姿が、不意にわたしの心に無氣味な愛情を喚び起したのである。

「ねえ、おい——如何したんだ、泣くことなんか少しもないぢやないか！」

わたしは彼女のうしろへにぢり寄つた。泣きじやつくりをするごとにぴくぴく動いてゐる瘦せた肩の感觸は妙にとげとげしく冷たかつた。力を加へたら今にもぽきぽきと折れてしまひさうだつた。

「——何でもないわ、よくわかるのよ、でも考へると悲しくなるの、文學なんかやつてゐたつてわたしはやつぱりただの女なのよ」

きれぎれの聲が一つ一つ鋭い實感をもつて吸盤のやうにわたしの心を吸ひつけた。彼女は、しかし、急にわたしの顔を見上げながら低い聲で言つた。——「ねえ、あなた、わたしたちの生活はほんたうにもう終つてしまつたのね」

「さうだ、———おれたちの生活は終つたのさ、だが、終つたといふことは始まりだといふことなのだ。ほんたうの生活はこれから始まるのだ。それに」と、わたしは言葉の調子を變へて自分の心に呼びかけるやうに言つた。

「どつちみち、もう此處まで來てしまつてゐるんだからね、勇を鼓して前へ進むのだ！」

「でも」と、彼女はわたしの肩に凭れかゝりながら、

「――わたし、これからひとりきりで暮してゆけるかしら、何だか心の中心がなくなつて倒れさうな氣がするのよ」

だから、そんな氣持になつちやいけない、おれたちは今、斷崖の上に片足だけで立つてゐるやうなものだからな、――かういふときにはうしろを振返つちやいけない、前を見るのだ、前を……」

だが、しかし、事實倒れさうになつてゐるのは彼女よりもむしろ、わたし自身の方だつた。激情ともつかず、執着ともつかぬ哀憐の思ひが烈しくわたしの胸の中にどよめきかへした。一瞬間、彼女とわたしとの心の距離がぐつと引きしまつた。

「――ねえ、あなた、わたし、これからどうなるかわからないのよ」

「どうなるかつて、――そんなことを心配しなくたつて今にお前の道がひらけてくるよ」

「わたしの道が――でも、あなたは前にかう言つたことがあるぢやないの、お前のやうな性格の女には危險のすぐ間近にゐても危險だといふことわからないものだつて。――」

わたしは、彼女の身體を輕く壁の方へ押しのけた。ぢりぢりとよりかゝつてくる彼女の肩の重みのために、わたしの心は壓しつぶされてしまひさうな氣がしたからである。すると新しい想念がわたしの腦底に閃いた。この女は多分、永久に男の壓迫（どのやうにつまらない男からでも）から逃れることができないであらう。そして、今に何處からか荒くれ男がやつてきて、この女を滅茶滅茶にしてしまふであらう。――

しかし、彼女はすぐにわたしの方を向いてはだけた褄をかき合せながら言つた。

「――もう、ほんたうに何でもないのよ、わたしバカなのね、これから自分の生活を建てなほすことにするわ、ほんたう

に。これからはセンチメンタル厳禁さ。――どんなことがあなたの身邊に起つたつてわたしは少しも驚かないことさ。だからね、一つのことだけ約束して下さいね」

「一つのことゝいふのは？」

「――これから、あなたがどんな女に戀することがあつても、家庭的な生活だけはしないことさ。――ね、若しあなたが新しい家庭をつくるやうだつたら、それこそ前の生活の中の惡いものだけをうけ繼ぐことになるのよ、さうなると、あなたはきつと滅びてしまふわ、」

　わたしは默つてうなづいて見せながらしかし、思はずうしろをふり向いた。自分の心の中を誰れかこつそり覗いてゐるものがあるやうな氣がしたからである。そのわたしの空々しい顏を彼女は悲しげな眼付で眺めながら囁くやうに言つた。

――「でも、さう言つたつてわからないわね。若しあなたが、その女をほんたうに好きになれば、あなたは女の力に負けてしまふ人ですもの、こんな約束をしたつて結局無駄になつてしまふのね」

「だがね、――おれの心の中には、すつかり自分を慘めにする用意が出來てゐるんだから、さうなれば、おれはお前の聲の聞えないところまで逃げ出すよ」

　わたしは、ひそやかに迫つてくる彼女の情感を拂ひのけるために、わざと冗談口を敲くやうな調子で言つた。しかし、彼女の方が役者が一枚上だつた。といふのは、彼女はわたしの言葉の中からいくつかの漠然とした事實を感じてしまつたからである。それからぢつとわたしの顏を見詰めてゐたが、急に穩かな語調でしやべりだした。

「そんなこと何でもないわ、わたしは足が長いから何處までゞも追驅けるから、――だからね、サム公、何も彼も話しておしまひなさいよ、どんなひとなの、その女は？」

「どんなひとだつて、――おれは未だ何も話してゐやしないぢやないか、だがね」

と言ひかけて、わたしは思はず言葉を途切らせた。しかし、滅多にその手に乘つて堪るものか、——と、いふ氣持のために、わたしの心は反つて妙に固くなつてしまつた。

「ほんたうに、あなたの言ふとほりなのよ、事實は影なりさ、わたしたちは、はなればなれに暮してゐても、高い愛情の中で溶け合ふことができるのよ、だから、わたしもこれから方々へ行つて好きな男を探してくるのよ、お互ひに浮氣者のくせに相手の心を縛り合ふなんていけないことなのね、だから何も彼も話しておしまひなさいよ」

彼女は愉快さうに笑ひだした。だが、彼女の感情の方向が急速に廻轉したのでわたしの遠近法はまつたく狂つてしまつた。

「ぢやあ言はう、——そのことに觸れなければ、おれが此處へやつてきた理由の大半は消えてしまふわけだからね、その女はね……」と、わたしは何時の間にかたぢたぢとなつて土俵際に押されてゆく自分の心をはつきり意識しながら、しかし、今こそ安らかな氣持でうちあけることができるぞ、——といふ氣持になつた。すると、不意に彼女が、まるで新しい發作でも起つたやうにわたしの前に兩手をひろげた。

「駄目よ、駄目よ、——やつぱり言はない方がいゝわ、結局わたし何も知らない方がいゝのよ、だから、あなたもわたしに知らせちや駄目よ」

わたしは此處まで來て、到頭、片足を土俵のそとに踏みだしてしまつた。彼女は最早、完全に數分間前の弱々しさをとび越えてゐた。何か一つの幻想の中に心を委ねてゐるやうであつた。いや、その幻想の中で自分の心のほがらかさを樂しんでゐるやうにさへ見えた。

「——わたしたちの生活は今によくなるわ、M村の家はわたしたちの戀愛の紀念塔としてとつて置かうぢやないの、あれは、もうわたしが貰つたんだから、すばらしい家にするわ、でも、わたし、どんなに好きな男が出來たつて、あなたのや

うにへまな眞似はしないことよ」

彼女の眼には、かすかな哀愁の翳も殘つてゐなかつた。わたしの心にはもはや次の勝負を試みる勇氣はなかつた。何故かといつて、一度過去の渦卷の中へまきこまれたわたしの感情は、やつと新しい波の上へうかびあがつたのだから。

夜が更けてゐた。わたしたちは白い蚊帳の中に蒲團をならべて眠つた。ときどき眼を醒まして明るい會話――わたしたちの將來について、文學の問題について、それから、決して彼女にヒステリーの發作を起させないですむところのさまざまな話題について、――を續けながら。

6

二日目の午後、わたしは彼女と、三島驛でわかれた。汽車が動き出したとき、かういふ感情の中でこの女をふたゝび見ることはないであらうといふ氣持のために、わたしの心は一瞬間、離れがたい氣持に囚はれた。わたしは窓から首をつき出して、プラットホームに立つてゐる彼女の顏を見た。彼女の顏は、しかし無心にわたしに向つて笑ひかけた。强烈な陽ざしを浴びてその顏は深い幻想の中に冴えかへつてゐた。汽車が進むにつれて、彼女の姿は小さくなつたが、しかし、わたしの胸に落ちた彼女の影は次第に大きくひろがつてきた。さて――おれは今から何處へ行くのか？

――言ふまでもなく新しい不幸の中へ！

心の中で一つの聲が答へた。だが、その聲は、皮のゆるんだ大皷をうつやうに力のない不快な響をつくつてわたしの心の中へ跳ね返つてきた。その問答は、しかし、汽車の進行につれて、幾度びとなく繰返された。繰返へされるごとにわたしの心は過去の回想の中へ强い力でひき戻されながら。

日暮れがただつた。やつと汽車が横濱へ着いたとき、わたしはもう一度はつきりと彼女への心の距離をたしかめてみ

た。さうすることによつて少しづつ新しい勇氣を奮ひ起さうとしたが、しかし駄目だつた。ちやうど、戰線の間近まで追ひ立てられた憶病な兵卒が否應なしに彼の敵に向つて小銃の照準を定めるやうに、新しい未來に向つて心の構へを立て直さうとしたが、兩足はわなわなと顫へて今にも倒れさうだつた。それにわたしの心臟は回想の重みのために壓し潰されさうな氣がした。

　わたしは最早自分に對してかすかな誇を感ずることもできなかつた。しかし、何よりもこの落着きのない氣持をまぎらすことが必要だつたので、わたしは、わざと省線のホームの方へおりずに途中下車をしてしまつた。しかし、開札口を通りぬけて待合室へはいると一層惡いことが起つた。といふのは、ふと入口に近いベンチに、三十近い一人の女がぢつと入口の方を見詰めて腰かけてゐたが、しかし、そこへ請負師風の髯の生えた男がはいつてくると彼女は慌てゝ立ちあがつた。やがて彼等はわたしのすゞ隣りの空席に腰をおろした。新しい發車時間が來るごとに待合室に集つた人の數はぢりぢりと減つてゆき、入り替り立ち替りに新しい顏があらはれたが、ほとんど二三十分の間、二人は默つて顏を見合せたまゝ物を言はなかつた。わたしの心はすぐに彼等の方へひきつけられた。彼等の顏は何か深い感情の中で言ふべき言葉を探してゐるやうに見えたから。女はわたしの方に脊を向けてゐたので、わたしは男の顏を見ることが出來ただけであつたが、しかし、彼の表情が苛立たしく變ることに、女の心の動きがすぐにわたしの頭にうつつてきた。すると、この二人は何であらう、といふ興味が烈しくわたしの胸に來た。答は簡單だつた。――以前は夫婦か、それでなければ、それに似たやうな關係に置かれたことのある人たちだ。その想念は、しかし、わたしの心をすぐに彼等の運命に結びつけてしまつた。二人の年配から察すると彼等は十年あまり同棲生活を續けて來たにちがひない。如何して彼等はわかれたのか。――勿論、ありきたりの痴情沙汰が原因で。だから、いふまでもなく少しづつの憎愛と未練とを殘して。そして、女が呼出しをかけたのだ。男は何のためにやつてきたのか。勿論、わかれた妻の新しい魅力をさぐるために。

わたしの頭の中には二人の幻像が異常な速度で動きはじめた。そのとき、ぢつと女の顔を睨んでゐた男の眼が急に険悪な色を帯びて輝きだした。（過去の記憶の中でこの男は女を憎みはじめたのだ）しかし、彼は一つの感情をぢつとこらえてゐるやうに見えた。そして、不意に吐き出すやうな調子で、（それはかういふ種類の男が他人を恫喝するときに用ふるあの一種獨特の下品さで）言つた。

「――おい、よくも、そんなみつともない恰好をしてやつてきたな！」

すると、女が早口に何かしやべつたやうだつた。彼女の言葉はわたしにはよく聞きとれなかつたが、しかし、男の顔にうかんだ表情の變化と、女のいきり立つた調子によつてわたしはすぐに彼女の言葉を想像することができた。……「へん、よくもそんな口がきけたもんだ、自分の昔の女房が、こんなみつともない恰好をしてゐるのがお前には耻かしくないのか………」

男はもう一度ぢろぢろと女の風體を見ながら、（女は髪だけは新しい丸髷に結つてゐたがしかしよれよれの浴衣の上に伊達卷のやうな帯をしめてゐた）何か言はうとしたが、前歯で一度ぐつと下唇を嚙みしめてから、わざと女の顔を見ないで怒鳴るやうに言つた。

「何だつて、――末だ貴様の根性はなほらねえんだな、よし、もう一度この拳骨を頭に喰はしてやらうか！」

すると女がすぐに低い聲で、しかし喚きたてるやうに喰つてかゝつたが、男は、そのとき、待合室の中の人の眼がことごとく自分に向けられてゐるのを知ると、ある氣耻かしさのために、つとめて冷靜を裝ひながら、

「おい、おい、――あまり大きな口は利かねえ方がいゝぞ、お前がおれのうちを出てからの行狀はすつかりわかつてゐるんだからな」

「――そりやあ、わたしだつてひとりで暮さなきやあならないんだからね」

「ひとりで過すつて、——へん、えらいもんだね、おれのうちを出て——さあ、それから、言つてやらうか、みんな」

女の肩がかすかに顫へるのが見えた。それから彼女は前屈みになつて、泣きぢやつくりをおさへるために急いでハンカチで顔を掩つた。そのしぼらしのために男はますます冷酷な調子になつて、——

「まつたくえらいもんさ、淫賣屋に奉公してさ、——しかしね、そのときと比べたら今は大した出世さ、何しろ横須賀の不見轉藝妓ときてるからね」

小氣味良ささうに笑つたが、しかし、彼の顔はくすんだやうに蒼ざめて、眼だけが底氣味わるく光つてゐた。やはり、わたしの想像どほりだつたのだ。しかし、この二人の關係が現實の上にはつきりしたかたちをとつてくるにつれて、わたしは何時の間にか、この男の冷情を憎みはじめた。昔の女房の不幸をこのやうな賤しい言葉で輕蔑しようとしてゐる男の心を。

女は顔をあげた。彼女の肩が輕くわたしの肘にさわつたので、わたしはすんでのことで女の脊中を撫でゝしまふところだつたが、その瞬間、男の顔をかすめた烈しい苦悶が不意にわたしの心に新しい感傷を呼び起した。

「それぢやあ……」と、女が、かすれるやうな低い聲で言つた。——「あなたはやつぱりわたしのことを思つてゐてくれたのね」

わたしは胸がこみあげてきた。（このやうに愛すべき言葉があらうか）しかし、女の最後の執着を男は賤しい、せゝら笑ひをもつて素早く彈き返した。

「へん、何だつて？」

女は、その言葉を聞くと、ぢつと眼を瞑ぢた。最早、自分の姿が衆人の視線によつてかこまれてゐることを意識しなかつた。わたしは涙が彼女の手の甲の上に、——それから膝の上に落ちるのを見た。彼女は噛みしめた唇の間から洩れる、

とぎれとぎれの聲でもつれかゝるやうに言つた。

「——ねえ、わたし、こんな苦勞をしてきたのも、——みんなもう一度あんたといつしよになりたいからなんだよ」

「ほう、——大した度胸だね、しかし、さういふわけにもゆくめえよ、まあ、お前さんもせいぜい稼業に精を出すことだね、これから十年も經つてお前さんが待合でも出すやうになつたら、おれもお客になつて一ぺん位は出かけるからね——」

わたしは彼の言葉をしまひまで聞くことができなかつた。よろけさうになる兩足を踏みしめてわたしは待合室を出た。すると、數時間前にわかれてきたばかりの妻の姿が沁みるやうに頭の中にひろがつてきた。おれは何人をも不幸にしてはならぬのだ。——と、わたしは心に思つた。「さうだ、何人をも。」「しかし、それにもかゝはらず何故お前は人生の不幸の中へ突入しようとするのだ？」「おれは新しい事實を創造しなければならないからだ。」新しい事實を。さうだ。——「おれは影を追つてはならぬ。事實にぶつかるのだ。事實に！」

7

二タ月あまり、わたしの生活は、ちやうど逆潮に乘りあげた船のやうに一つの方向に向つて流れはじめた。過去の岸邊は遠く小さくわたしの背後に消えていつた。幾度びとなくわたしは逆潮のそとに踊り出ようと試みたがその努力は結局、わたしを疲勞させることに終つてしまつた。かういふときにはぢつとしてゐるにかぎる。——わたしはもがくことをやめてこの宿命的な事實の中に身をまかせた。良榮丸といふ漁船が潮流のためにアメリカまで押流されていつたといふ新聞記事を讀んだとき、わたしは心に呟いた。——「おれは良榮丸だ。だから、どつちみち何處かの岸に乘りあげるだらう！」

夏の夜、わたしは一人の少女と深い雜木林にかこまれた淋しい道を歩いてゐた。わたしは女にとつて、彼女のロマンチ

ツクな空想を充すべき唯ひとりの戀人であつた。だが、しかし、わたしにとつては、女はやうやく熟しかけた果實であつた。それでなければ新しく伸びはじめた若木であつた。彼女の若さと健康とがわたしの情感を唆り立てた。樹立から洩れる月の光が、白い路上にわたしたちの影をうつし出した。この女には今から人生が始まらうとしてゐるのだ、とわたしは思つた。――それにもかゝはらず、おのれの青春はもう終りに近づからうとしてゐるではないか。すると、一瞬間、わたしの心は青春を空費したといふ悔恨に惱まされた。細い坂道の前まで來たとき、わたしは立ちどまつて女の肩に兩手をかけた。彼女は慌てゝ胸をそらし、わたしから逃れようとしたが、しかし、そのとき、彼女の首筋に纏ひついたわたしの兩腕は彼女の顔を力強くわたしの胸にひきよせてゐた。わたしは彼女の額に接吻した。それから脣に。――

彼女はぐつたりとわたしの身體にもたれかゝつて、それから顫へ聲で呟いた。――「これから如何なるの?」

「如何なるかつて。――そんなことがおれにだつてわかるものか!」

しかし、逆潮は非常な速さでわたしたちを押流していつた。十日と經たないうちにわたしたちの戀愛はロマンスではなくてアフエイア（事件）に變つてしまつたのだから。わたしが抱きしめたものは若木のやうな彼女の肉體ではなくて重苦しい生活の枯木ではないか、といふ疑ひがわたしの心に不幸の豫感を與へたのだ。だが、おれは決してこの少女を不幸にしてはならぬ、とわたしは思つた。それにもかゝはらず、わたしは自分の手をもつて彼女のために一つの小さな牢獄をうち建てようとしてゐるではないか。その中にわたしの新しい空想を幽閉するために。

しかし、M村にあるわたしの家は航路を失つた難破船のやうに暗礁に乘りあげてしまつた。その中に唯ひとりだけ殘されて助けを求めてゐる老母のために、わたしは時々歸つていつたが、しかし、歸るごとにわたしは深い回想の波を浴びてづぶ濡れになつた。といふのは、その家の何處にも妻の記憶の沁みついてゐないところはなかつたから。壞れかゝつた門の前に土を小さくもりあげた芝生の中には二本の紅棗の木がならんでゐた。それは妻と二人でひこばえのときから育て

たものだつた。二三十本あつたひこばえの中でやつと二本だけが殘つたのである。これを結婚記念だといつて日當りのいい芝生の中へ植變へたのは六年前だつたが、しかしその木は同じやうに育つて、今はわたしの背丈ほどにまで伸びてゐるではないか。夜、石疊を敷いた坂道を足音を忍ばせながら歸つてくると、眞つ暗な家の中に母の寢てゐる部屋の窓だけが明るく輝いて、荒れ果てた庭の上に椎の木の影がゆれてゐる。

すると、この家が出來かゝつた頃の二人の生活が鈍い燈火に照された影畫のやうに現はれてくるのだ。そして、六年間の過去が幻覺のごとくわたしの頭の中をすべりぬける。地ならしが終り、土台石が据えられて、もつこを擔いだ土工が狹い坂道を往つたり來たりする頃から、しかし、わたしと妻との間には奇妙な感情のこだわりが現れた。今は、それすらも一つの幻覺に過ぎないとしても、二人の致命的な爭ひの中に、この小さい家が、わたしたちの戀愛を象徴するために出來あがつたといふことは何といふ皮肉であらう。——

秋に入つて妻はY温泉から歸つてきた。そして、海岸のアパートの一室に入つて、彼女の新しい雰圍氣をつくりはじめた。すると新しい事實は矢繼早にあらはれてきた。ある雨の夜であつた。わたしが幾日ぶりかでM村の家へ歸つてゆくと、上の家にも下の家にも電燈の光が青い窓のカーテンに泌みてゐた。わたしは思はず門の前まで來て立ちどまつた。すると下の家の六疊の間のあけ放たれた窓の間から五六人の男女の談笑する聲が聞えた。おそるおそる近づいて覗いてみると大きな机をかこんで麻雀がはじまつてゐるところだつた。正面に坐つてゐた妻は、小聲で鼻唄をうたひながらずつと眼の前にならんだ牌を眺めてゐたが、しかし、ふと、わたしの顏を見ると、落ちついた聲で

「おはいりなさいよ」

と言つた。

彼女は何時の間にか斷髪にしてゐるのであつた。そのせいか、前よりもずつと若く見えたが、しかし、それにもかゝはらず、ぢつと彼女の顏を見てゐるとまるで別の人のやうな氣がした。

「――わたし今日から此處へ陣どることにしたのよ、上の家はね、Kさんに借してあげたの、此處でがんばつて一仕事するつもりなのよ、今夜は引越し祝ひなんだから、あなたも一杯おあがりなさいよ」

彼女は机のかげにあつたコップをとりあげてわたしの手にわたした。そして、いそいでビールを注ぎながら、麻雀に夢中になつてゐる若い人たちの上に輕い流し眼を吳れてから、

「――如何？これはみんなわたしの燕なのよ、ところが、ほんたうはどれもこれも、せいぜい烏（からす）といふところなんだからね」

「――でも、このごろは酒が飲めるんだね？」

「ちえッ！」と、小さく舌を鳴らしてから、彼女は怨々たる思ひをこめてぢつとわたしの顏を見た。――「さうよ、何しろ亭主に捨てられたんだからね、せめて酒でも飲まなくつちやあ」

常談のやうな調子でかう言てから、しかしすぐに若い人たちの笑ひ聲に合せて、ほがらかに笑ひだした。

8

麻雀の勝負が進行してゐる間、わたしは自分の古い書齋の中をもう一度見たいといふ衝動に驅られたので、そつと席をはづして上の家へあがつていつた。しかし、扉をあけると部屋の中はすつかり新しくなつてゐた。かつて、古雜誌が亂雜に積み重ねてあつた正面の壁の前には新しい洋書で埋められた書架が整然とならび、かつて、わたしの一閑張の古机（そ

れは四年間同じ位置から動かされなかつた）が置いてあつた場所には、頑丈なテーブルが据ゑられ、その傍の小さな長いテーブルのぐるりには眼新しい五六脚の椅子が訪客を迎へるためにならんでゐた。以前と同じものは唯、リノリウムの上に敷かれた古い絨毯だけだつたが、しかし、天井からくる明るい電燈の光がその茶色の敷物の上に、かつてわたしがこぼしたインキの汚點をうきあがらせてゐるほかには、わたしの回想を喚び起すものは一つもなかつた。

すべてのものが新しく變つてしまつたのだ。それはちやうど古い壁の上に落書された文字のあとが新しい壁によつて塗りつぶされてしまつたやうに、この部屋の中に殘された過去の事實はことごとくわたしの眼の前から消え失せた。一瞬間、わたしの心は深い感慨に捕へられたが、しかし、すぐにわたしは主人のゐない部屋の中へはいつていつた。そしてわざと客のために用意された椅子の上には腰かけないで絨毯の上に胡坐をかいた。すると、この部屋の中で窓をとざして暮してゐた六年間の生活が長く影を曳いて、きれぎれにわたしの頭の中を辿りすぎた。わたしはその記憶の一つ一つを噛みしめるやうに味ひながら、しかし何時の間にか過去の感情の整理をはじめたのである。わたしは自分に所屬する荷物だけをまとめて引越の馬車に積みあげるために、堆高く散らばつてゐる過去のおもひでの中から自分に必要なものだけを選りわけた。

それから、立ちあがつて、部屋の中をぐるぐる歩き廻つた。今はわたしの心の中にはかすかな感傷の翳すらも殘つてゐなかつた。今こそわたしはすつぱだかになつて新しい人生の中へ躍りこむときが來たのだ、と思つた。おれは他人を不幸にすることをおそれてはならぬ。だから、新らしい悲慘は多分これから續々とあらはれるであらう、わたしは花道の前に立つて、やがてひらかれる新しい舞台に躍り出ようとしてゐる役者のやうに大きく胸を張つた。すると、一つの聲がわたしの心の底からのぼつてきた。——「しつかりしろ！悲劇はこれからだ！」

そのとき、下の家からは麻雀の牌を交ぜ合す賑やかな音が、ゆるやかな諧調をもつてひゞいてきた。——



氷河

黒島傳治

一

市街の南端の崖の下に、黒龍江が遥かに凍結してゐた。

馬に曳かれた橇が、遠くから河の上を軽るく辷つて来る。

兵營から病院へ、凍つた丘の道を栗本は辷らないやうに用心しいしい登つてきた。負傷した同年兵たちの傷口は、彼が見るたびによくなつてきた。まもなく、病院列車で後送になり、内地へ歸つてしまふだらう。——病院の下の木造家屋の中から、休職大佐の娘の腕をとつて、五體の大きいメリケン兵が、扉を押しのけて歩きだした。十六才になつたばかりの娘は、せいも、身體のはゞも、メリケン兵の半分くらゐしかなかつた。太い、しつかりした腕に、娘はぶら下つて、ちよか〱早足

に丈の高い靴をかはした。

「馭者！馭者！」

ころげさうになる娘を支へて、アメリカ兵は靴のつまさきに注意を集中して丘を下つた。娘の外套は、メリケン兵の膝頭でひら〳〵ひるがへつた。街へあひゞきに出かけてゐるのだ。娘は、三ケ月ほど、日本兵が手をつけやうと骨を折つた。それを、あとからきたアメリカ兵に横取りされてしまつたものだ。リーザといふ名だつた。

「馭者（イズウォシチイク）！」

「馭　者（イズウォシチスタ）！」

朧の方で、なほ、辻待の橇を呼ぶロシア語が繰りかへされた。

凍つた空氣を呼吸するたびに、鼻に疼痛を感じながら栗本は、三和土にきしる病室の扉の前にきた。

扉を押すと、不意に、溫い空氣にもつれあつて、クレゾールや、膿や、便器の臭ひが、まだ痛みの去らない鼻に襲ひかかつた。

踵を失つた大西は、丸くなるほど繃帶を卷きつけた足を腰掛けに投げ出して、二重硝子の窓から丘を下つて行くアメリカ兵を見てゐた。負傷者らしい疲れと、不潔さがその顏にあつた。

「ヘッ、まるでもぐらが頭を動かしたくても動かせねえといふやうな恰好をせやがつて！」

「何だ、君はこつから見てゐるんか。」

「メリケンの野郎がやつて來たら窓から離れないんだよ。」

大西と並んでゐる、色の白い看護卒が栗本を振りかへつた。

「癪に障るからなあ、――一寸ましな娘（バルシニヤ）はみんなモグラの奴が引つかけて行つちまひやがるんだ。」大西は窓から眼をはな

さなかつた。

「あいつらが僞札を掴ましてるんが、露助に分らんのかな。」

「俺等にや、その掴ます僞札も有れやしないや。」

「僞札なんど有つたつて、俺等は使はんさ。」

彼等と、アメリカ兵との間には、ロシアの娘に對する魅力の上で、かく段の差があつた。彼等は、誰れも彼れも、枯枝のやうに武骨で、話しかけられると、耳の根まで紅くした。彼等には輕蔑してゐるその僞札もなかつた。椅子のある客間に坐りこむ、その禮儀も知らなかつた。

二

病室には、汚れたキタならしい病衣の兵士たちが、窓の方に頭を向け、白い繃帯を巻いた四肢を毛布からはみ出して、ロシア兵が使つてゐた鐵のベッドに横たはつてゐた。凍傷で足の趾が腐つて落ちた者がある。上唇を彈丸で横にかすり取られた者がある。頭に十文字に繃帯をして片方のちぎれかけた耳朶をとめてゐる者がある。唇をやられた男は、冷えた煉乳と、ゆるい七分粥を火でも呑むやうに、おず〳〵口を動かさずに、食道へ流しこんでゐた。皆と年は同じに違ひないが、十八才位ゐに見える男だ。その男はいつも、大腿骨を彈丸にうちぬかれた者よりも、むしろ、ひどく堪え難さうな顔をしてゐた。

彼等は、人が這入つて來るたびに、痩せた蒼い顔を持ち上げて、期待の表情を浮べ、這入つてきた者をぢつと見た。むつくり半身を起して、物ほしげな顔をするのは凍傷の伍長だつた。長く風呂に這入らない不潔な體臭がその伍長は特別にひどかつた。

栗本は、負傷した同年兵たちを氣の毒がるゝさういふ時期をいつか通りすぎてしまつた。反對に、負傷した者をそんだ。負傷者は、あと一ケ月もたゝないうちに内地へ送りかへされ、××な軍隊の勤務から退いてしまへるのだ。彼は、内地から着いた手紙や、慰問袋を兵營から病院へ持つてきた。シベリアに居る者には、内地からの切手を貼つた手紙を見るだけでもたのしみである。

一時間ばかり後、それを戰友に渡すと彼はアメリカ兵のやうに靴さきに氣をつけながら、氷の丘を下つて行つた。

「俺もひとつ、××してやるかな。」彼は心に呟いた。「×××ゐるのこそ、クソ馬鹿らしい！」

負傷者の傷には、各々、戰鬪の片影が殘されてゐた。森をくぐりぬけて奥へ赤衛軍を追つかけたことがある。列車を顚覆され、おまけに、パルチザンの襲撃を受けて、あはくつて逃げだしたこともある。傷は、武器と戰鬪の状況によつて異るのだ。鐵砂の破片が、顏一面に、そばかすのやうに這まりこんだ者は爆彈戰にやられたのだ。挫折や、打撲傷は、顚覆された列車と共に起つたものだ。

負傷者は、肉體にむすびつけられた不自由と苦痛にそれほど強い憤激を持つてゐなかつた。

「俺ら、もう十三寢たら浦潮へ出て行けるんだ。」大西は、かういふ時、嬉しさをかくすことが出來なかつた。

「さうかね。」

栗本は、ほゝゑんで見せた。彼は内地へ歸れることを羨んだ。その羨しさをかくさうとすると、微笑が、張り合ひのぬけた淋しいものになる。それが不愉快なほど自分によく分つた。

「なんか、ことづけはないかい？」

「ないやうだ。」

「一と足さきに失敬できると思ふたら、愉快でたまらんよ。」

そこにゐる者は、もはや、除隊後のことを考へてゐた。彼等の胸にあるものは、内地の生活ばかりであつた。いつか、持つて來た慰問袋を開けてゐると、看護長がぶら〳〵病室へ這入つてきたことがある。慰問袋には一ツ〳〵何か異つたものが入れてあつた。寒いところで着るための眞綿がある。石鹸、手拭、カキモチが這入つてゐる。高野山の繪葉書に十錢札を狹んである。……それが悉く內地の匂ひに滿ちてゐた。手拭には、どつかの村の肥料問屋のシルシが染めこまれてある。しかし、それはシベリアで樂しむ内地の匂ひにすぎなかつた。戰友は、這入つてきた看護長を見ると、いきなり、その慰問袋から興味をなげ棄てた。

「看護長殿、福地、なんぼ恩給がつきます？」

栗本には思ひがけないことだつた。彼は開けさしの袋をベッドにおいたまゝボンやりしてゐた。

「お前階級は何だい？」

恩給がほしさに、すべてを軍隊で忍耐してゐる。そんな看護長だつた。恩給のことなら百科辭典以上に知りぬいてゐた。

「一等卒。」

「ま、五項症に相當するとして……增加がついて二百二十圓か。」

足のさきから腰まで樋のやうな副木にからみつけられてゐる、多分その片脚は切斷しなければなるまい、それが福地だつた。大腿の貫通銃創だ。

「看護長殿、大西、なんぼ貰へます？」

「踵を一寸やられた位ゐで與れるもんか。」

「貰はにや引き合ひません。」

負傷者は、それぞれ、自分が何項症に屬するか、看護長に訊ねるのであつた。「何項症であるか、それによつて恩給の額

がきまるのだ。そんな場合、栗本には、彼等が既に國家に對して債權者となつてゐるやうに見えてきた。

「何だい！跛や、手なしや、片輪者にせられて、代りに目くされ金を貰ふて何うれしいんだ！」彼は何故となく反感を持つた。

しかし、これからさき、なほ、どれだけ×××義務を脊負はされてゐるか量り知れない自分にはうんざりせずにゐられなかつた。丈夫で勤務についてゐる者は、いつまでシベリアにゐなければならないか、そのきりが分らないのだ。

「俺もひとつ、×××××してやるかな。」

彼は、ひそかに考へた。彼はシベリアにあきてしまつた。過激派と鐵砲で撃ち合ひをやり、村を焼き、彼等を捕へて、白衛軍に引渡す、さういふことにあきてしまつた。白軍の頭領のカルムイコフは、引渡された過激派の捕虜を虐殺して埋沒した。森の中にはカルムイコフが捕虜を殺したあとを分らなくするため血に染つた雪を靴で蹴散らしてあつた。その附近には、大きいのや、小さいのや、いろいろな靴のあとが雪の上に無數に入り亂れて印されてゐた。森をなほ、奥の方へ二つの靴が、全力をあげて馳せ逃げたあともあつた。だらだら流れ出た血が所々途絶え、また、所々、點々や、太い線をなして、靴あとに添ふて走つてゐた。恐らく刄を打ちこまれた捕虜が必死に逃げのびたのだらう。足あとは血を引いて、一町ばかり行つて、そこで樹々の間を右に折れ、左に曲り、うねりうねつてある白樺の下で全く途絶えてゐた。そこの雪は、さんざんに蹴ちらされ、踏みにじられ汚されてゐた。凍つたかち〳〵の雪に、血が岩にしみこんだやうになつてゐた。捕虜は生きのがれやうとあるだけの力を搾つて抵抗したのだらう。森のまた、歸る方の道には、腕關節からはすかひに切り落された手や、足の這入つた靴が片足だけ、白い雪の上に不用意に落されてあつた。手や足は、靴と共にかたく、大理石の模型のやうに白く凍つてゐた。

日本軍が捕虜を殺したのではない。しかし捕虜に對する住民の憎惡は、白衛軍を助けてゐる日本軍に向つて注ぎかへさ

れた。栗本は、自分達のやらされてゐることを考へた。それは全く無駄な骨折だ。——と、反抗的な熱情が涌き上つて來るのを止めることが出來なかつた。それは彼ばかりではなかつた、彼と同じ不服と反抗を抱いてゐる兵卒は多かつた。彼等は、ある時は、逃げて行くパルチザンを撃たずに銃先を空に向けた。またある時は、雪の上にへたばつて「進め」に應じなかつた。またある時は、癪に障る奴に銃劍をさし向けた。しかし、さういふ反抗も、その經驗を繰返へすに從つて、一部の兵卒だけでは、あまりに効果が薄いことを克明に知るばかりだつた。

三

寒暖計の水銀が收縮してきた。氷點以下七度、十一度、十五度、そして、つひに二十度以下にさがつてしまつた。怨恨を抱いてゐるパルチザンの襲撃は鋭利になりだした。日本の兵士は、寒氣のために動作の敏活を失つた。むく／＼した毛皮の外套を豪猪のやうにまんまるくなるまで着こまなければならない。左右の手袋は分厚く重く、紐をつけた財布のやうに頸から吊してゐなければならない。銃は、その手袋の指の間から、蠟をなすりつけたやうにつる／＼滑り落ちた。パルチザンはそこへつけこんできた。

兵士達は、始終過激派を追つかけ、家宅捜索をしたり、武器を押收したり、夜半に叩き起され、やにはに武裝を整へて應援に出かけたりしなければならなかつた。鐵道沿線へは多くに分れた小部隊が警戒に出かけた。栗本の中隊は、汽車に乘つてイイシの警戒に出かける命令を受けた。汽車には宵のうちから糧秣や彈藥や防寒具が積込まれた。夕闇が迫つて來るのは早く、夜明けはおそかつた。

栗本は、長い夜を町はづれの線路の傍で、幾回となく交代しつゝ列車の歩哨に立つた。朝が來るのを待つて兵士達は、それに乘りこんで出發するのだ。寒氣は疼痛をもつて人に迫つてきた。警戒所でとつた煖爐（ペーチカ）の溫度は、扉から出て二分間

も歩かないうちに、黒龍江の下流から吹き上げて來る嵐に奪はれてしまつた。防寒靴は雪の中へずりこみ、歩くたびに脊のやうにがく〳〵動いた。それでも足は、立止つてゐる時にでも常に動かしてゐなければならない。靜止してゐると、そこが凍傷にかゝるからだ。

　夜がふけるに從つて、頭の上では、星が切れるやうに冴えかへつた。酒場のある向うの丘からこちらの丘へ燈火をつけない橇が凍つた雪に滑桁をきしく〳〵鳴らせ、線路に添ふて走せてきた。蹄鐵のひゞきと、滑桁の軋音の間から英語のアクセントかゝつたロシア語が栗本の耳にきた。

「止れッ！」

　ロシアの娘を連れ出したメリケン兵が酒場から歸つて來る時分だ。

「止れッ！」

　御者のチョッ〳〵といふ舌打ちがして、橇は速力をゆるめた。

「誰れだ？」

「心配すんねえ！……えらさうに！」

　聲で、アメリカ兵であることが知れた。と同時に、別の彈力性のある若い女の聲が闇の中にひゞいた。聲の調子が、何か當然だといふやうに横柄にきこえた。瞬間、栗本はいつもからの痼癖を破裂さした。暗い闇が好機だといふ意識が彼にあつた。振り上げられた銃が馬の背に力いつぱいに落ちて行つた。いつ彈丸の餌食となるか分らない危險な仕事は、すべて日本兵がやらせられてゐる。共同出兵と云つてゐる癖に、アメリカ兵は、たゞ町の兵營でペーチカに溫り、午後には若い女をあさりにロシア人の家へ出かけて行く。そこで僞札を水のやうに撒きちらす。それが仕事だつた。而もその札は、日本の紙幣そつくりそのまゝのものだつた。出兵が始まると同時に、アメリカは、汽船に一杯、僞札を浦潮へ積みこんで

きた。それを見たといふ者があつた。

「何で化けの皮を引きむいてやらんのだ！」

兵士達は、僞札を撒きちらされても、何一ツ制裁もよう加へない當局の無氣力を憤つた。メリケン兵は忌々しく憎かつた。彼等は、ひまをぬすんで寝かへりを打つた娘のところへのこ〱やつて行つて僞札を嘲諷した。

「何故？」

肌自慢の鼻の高いロシアの娘は反問した。

「ぢや、これと較べて見ろ！」

一ケ月の俸給に受取つた五圓いくらかのその五圓札を出して見せた。

「アメリカ人がどうして、日本の僞札を拵へるの？ え、どうして拵へるの？」娘は、紅を塗つたやうな紅い健康さうな唇を舌でなめながら真顔になつた。紅い唇はこつちの肉感を刺戟した。ロシアの娘にはメリケン兵の不正が理解せられないところだつた。「これが僞札なら、あんた方がこしらへたんでせう。さうにきまつてる！ どうしてアメリカ人に日本の僞札が拵へられるの？」

「馬鹿云へ、俺等が俺等の僞札を使ふか！」彼等は裏から敵を落すことを知らなかつた。

「アメリカ人はずるいんだ。だから弗の僞札は拵へずに、圓の僞札を拵へるんだ。ろくな奴ぢやない！」

娘は、十五でもう一人前の女になつてゐた。脚の丈夫な、かゝどの高い女靴をはひて歩く時の恰好が、活潑で氣色がよかた。日本の女には見られない生々さがあつた。

彼等は、ロシア人の家へ遊びに行くひまが、偸まなければできなかつた。勿論僞札はなかつた。しかし、何故、彼等ばかりが危險に身をさらさなければならないのだらう！ そして女はメリケン兵に取られてしまはなければならないのだ！

何故メリケン兵が偽札をさばさば使つて差支ないのだ！　さうして、ロシア人から憎惡と怨恨を受けるのは我等ばかりだ。彼は、アメリカ兵が忌々しく、むづ〳〵した。アメリカは、日本軍を監視するために出兵してゐるのだ。全くの徒勞に、自分達だけをこき使ふ者を大聲で「馬鹿野郎！」と呶鳴りつけてやりたかつた。

栗本は闇を喜んだ。毆られた馬は驚いてはね上つた。橇がひつくりかへりさうに、一瞬に五六間もさきへ雪を辷つた。アメリカ兵は橇の上から懷中電燈でうしろを照した。電氣の光りで大きい手を右のポケットに突つこんで拳銃を握るのがちらつと栗本に見えた。

「畜生！　擊つんだな。」

彼は立つたまゝ銃をかまへた。その時、橇の上から轟然たるピストルのひゞきが起つた。彼は、引金を握りしめた。が引金は輕るく、すかくらつて辷つてきた。安全裝置を直すのを忘れてゐたのだ。

「どうした、どうした？」

ピストルに吃驚した竹內が步哨小屋から靴をゴト〳〵云はして走せて來た。

栗本は默つて安全裝置を戾し、銃をかまへた。橇は滑桁の軋音を殘して闇にまぎれこんだ。馬の尻をしぶく鞭の音が凍る嵐にもつれて響いてきた。

「どうした、どうした？」

「逃がしたよ。」

「怪我しやしなかつたかい？」

「あゝ、逃がしちやつたよ。」

栗本の笑ふ白い齒が闇の中にあつた。

四

馬が苦しげに氷上蹄鐵を打ちつけられた脚をふんばつて丘を登つてきた。岩に乘り上げた舟のやうに傾いた橇の底では兵士が、でこぼこのはげしい道に動搖するたび、傷を抑へて齒を喰ひしばつた。

「おや、また入院があるぞ。ウエヘヘ。」

觀音經を唱へてゐた神經衰弱の伍長が、ふと、湯呑をチン／＼叩くのをやめた。

負傷者は、傷をかばひながら、頭を擡げて窓口へ顏を集めた。五六台の橇が院庭へ近づいてきた。橇は、逆に馬をうしろへ引きずつて丘を辷り落ちさうに見えた。馭者台からおりた馭者は、しきりに馬の尻を鞭でひつぱたいてゐた。

「イイシへ行つた中隊がやられたんだ。ウエヘヘッヘ。」

伍長は嬉しげに頓狂に笑つた。

「何がおかしいんだ！　氣狂ひ！」

やかましく騷ぐ音が廊下にして、もう血のしみ通つた三角巾で思ひ／＼にやられた箇所を無細工に引つくゝつた者が這入つてきた。どの顏も蒼く憔悴してゐた。

脚や内臓をやられて歩けない者は、あとから擔架で運ばれてきた。

「あら、君もやられたんか。」大西は、意外げに、皮肉に笑つた。「わざと、ちよつぴり怪我をしたんちやないんか？」

「…………。」

腕を頸に吊らくつた相手は腹立たしげに顏をしかめた。

「なか／＼内地へ歸りたうて仕樣がなかつたんだからな。」

それにも相手は取り合はなかつた。そして釦をはづした軍衣を、傷が痛くてぬげないから看護卒にぬがして呉れるやうに云つた。痛がつて、やつと服を取ると、血で糊つけになつてゐる襦袢が現れた。それは、蒼白に、がくがく顫を慄はしてゐる栗本だつた。

看護卒は、負傷者にベッドを指定すると、あとの者を連れに、又、院庭へ出て行つた。

さまざまの溜息、呻き、訴へる聲、堪え難いしかめツ面などが、うつしこまれたやうに、一瞬に、病室に瀰漫した。血なまぐさい軍服や、襦袢は、そこら中へ放り出された。擔架にのせられたまゝ床の上に放つておかれた、大腿骨の折れた上等兵は、間歇的に割れるやうな鋭い號叫を發した。と、ほかの者までが、錐で刺されるやうにぶるぶるツと慄へ上つた。

「こんなに多くのものが悉く内地へ歸されるだらうか。そんなことをすれば一年内に、一個聯隊の兵士がみんな内地へ歸つてしまはなければならないだらう。だが、そんなことはさせまい。――このうちから幾人かはシベリアに殘されるんだ。」さきから這入つてゐる者はさういふことを考へた。

輕い負傷者は、

「俺れや、シベリアに殘される、その一人に入れられやしないかな?」心でそれを案じた。そして、なま〳〵しい傷を持つて新しく這入つて來た者に、知らず識らず競爭と反感の爪をといだ。

「どこをやられたんだ?　どんなんだ?」

頭を十文字に繃帯してゐる三中隊の男が、疚しさを持つた眼で、まだ軍醫の手あてを受けない傷をのぞきこみにきた。

「骨をやられてやしないんだな?」

栗本は、何を意味するともなく、たゞうなづいた。

「さうかい。」

と、疚しさを持つた眼は、ほッとしたやうに、他のベッドに向いた。そこで、又何か訊ねた。隣の病室でも、やかましく呻きわめく騒音が上りだした。

栗本は、何か重要なことを忘れてきたやうで、焦點のきまらない方に注意を奪はれがちだつた。すべてが紙一重を距てた向うで行はれてゐるやうな氣がした。顚覆した列車の窓からとび出た時の、石のやうな雪の感觸や、パルチザンの小銃とこんがらがつた、メリケン兵のピストルの轟然たる音響が、まだ彼の鼓膜にひびいてゐた。

腕はしびれて重かつた。それは、始め火をつけたやうにくわツ〳〵と燃え立つてゐたが、今では反對に冷え切つて義足のやうに感覺も溫度もなかつた。出血を止めるため傷の上方をかたく紐で縛りつけた。それで手の方へは殆んど血が通はなくなつてゐるのだつた。腕は誰れか、力の強い奴が引つぱつてゐるやうに重かつた。

「あゝ。たまらん。早よ軍醫殿にさう云つて呉れろ！」

着かへたばかりの病衣に血がにじみだした。

「辛抱しろ！」通りかゝつた看護卒がちよつと眼をくれた。と、その眼が急に怖はく光つてきた。そして血に染つた病衣をぢいつと見つめた。「何だ。仕樣がないぢやないか！早や洗濯したての病衣を汚しくさつて！」

「あゝ、たまらん！　あゝ、たまらん！　おおい！　おおい！」

呻きはつゞいて出てきた。

栗本は負傷することを望んでゐた。負傷さえすれば、すぐ內地へ歸れると思つてゐた。そこには、母や、妹や、鬚むしやの親爺が、彼の歸りを待つてゐる。が、その母や妹や親爺は、今、どうしても手が屆かない。遙かな彼方に彼とは無關係に生きてゐるのだ。誰れも彼に憐れみの眼光を投げて呉れる者はなかつた。看護卒は、たゞ忙しさうに、忙しいのか擬

に障るらしく、ふくれツ面をして無慈悲にがた〳〵やつてゐた。昨日まで同じ兵卒だつたのが、急に、さたから少尉にでもなつたやうに威張つてゐた。

「誰れも俺等のためなんど思つて呉れる者は一人も有りやしないんだ。」栗本はベッドの上で考へた。「みんな、自分勝手なことばかりしか考へてやしないんだ！」

――彼は、内地の茅葺きの家を思ひ浮べた。そこは、外には、骨を削るやうな労働が控えてゐる。が、家の中には、温い囲爐裏、ふかしたての芋、家族の愛情、骨を惜まない心づかひなどがある。地酒がある。彼は、さういふものを思ひ浮べた。――俺れだつて誰れも省みて呉れん孤児ぢやないんだ！　それを、どうしてこんな冷たいシベリアへやつて来たんだ！　どうして！……彼は嘆息した。と、それと一緒に、又哀れげな呻きが出てきた。

「どいつも、こいつも弱みその露助みたいに呻きやがつて！」見廻りに来た、恩給に精通してゐる看護長が苦々しく笑つた。「痛いくらゐが何だい！　日本の男子ぢやないか！　死んどる者ぢやつておるんだぞ。」

右を見ると、よく酒保の酒をおごつて呉れた上等兵が毛布の下に脚を立て、歯を喰ひしばりぢいつと天井を見つめてゐた。その歯の隙間から唸る聲が漏れてゐた。看護長の苦々しげな笑ひに氣がつく餘裕さへ上等兵には無いやうだつた。

「自分がうるさいから叱つてゐるんだ。」と栗本は考へた。「俺等のためなんど思つても呉れやせんのだ！　どうしてこんなところへやつてきたんだ！　どうして、あんな引つくりかへされる列車に乗つて行つたんだ！」

と、又溜息が出て、呻かずにはゐられなくなつた。

――遂いはてのない曠野を雪の下から、僅かに頭をのぞかした二本のレールが黒い線を引いて走つてゐる。武裝を整へた中隊が乗りこんだ大きい列車は、ゆる〳〵左右に眼をくばりつゝ進んで行つた。線路に添ふて向うの方まで警戒隊が出されてあつた。線路は完全に、どこまでも真直に二本が並んで走つてゐる。町は、まもなく見えなくなり、列車は速力が

加はつてきた。線路は谷間にかゝり、やがてそこを通りぬけて、また曠野へ出た。

雪は深く、線路も、草原も、道もすべてが掃きならされたやうだつた。そこらの林や、立木が遠い山を中心に車窓の前をキリ〳〵廻轉して行つた。いつか、列車は速力をゆるめた。と、雪をかむつた鐵橋が目前に現れてきた。

「異狀無アし！」

鐵橋の警戒隊は、列車の窓を見上げて叫んだ。

「よろしい！　前進。」

そして、列車は轟然たる車輪の響きを高めつゝ橋にさしかゝつた。速力は加はつたやうだつた。線路はどこまでも一本が平行して完全だつた。ところが、中ほどへ行くと不意にドカンとして機關車は脚を踏みはづした挽馬のやうに、鐵橋から弄放にはね出してしまつた。

四角の箱は、それにつゞいてねぢれながら雪の河をめがけて顚覆した。……

と、待ちかまへてゐたパルチザンの小銃と機關銃が谷の上からはげしく鳴りだした。

日本軍の警戒が嚴重になればなる程、パルチザンの怨恨は鋭利になつた。そして、それを慰むべき手段は次第に潜行的に、意表に出てくるのだつた。

線路には、爆破裝置が施されてゐるのではなかつた。破壞されてゐるのでもなかつた。たゞ、パルチザンは、枕木の下へ油のついた火種を入れておくだけだつた。ところが、枕木は炭燒窰の生木のやうに、雪の中で點火されぷす〳〵燻りながら炭になつてしまふのだつた。雪の中で燻る枕木は、外へは火も煙も立てなかつた。上から見れば、それは一分の故障もない完全な線路であつた。歩哨にも警戒隊にも分らなかつた。而も、そこへ列車が通りかゝると、綿を踏んだやうに線路はドカンと落ちこみ、必然脚を踏み外すのであつた。

五

十三寢ると病院列車に乘つて浦潮へ出て行ける。

それが、今度はアルファベットになつた。なほ十三日延ばされたのだ。十三日に十三日を加へてABCの數だけねなければ浦潮へ出て行かれない。

その理由は何か？――列車の都合といふのに過ぎなかつた。それ以上は兵士には分らなかつた。

負傷者は、Aの日が暮れるとBの日を待つた。Bの日が暮れるとCの日を待つた。それからD、E、F……。ゼットが來なければ、彼等は完全にいのちを拾つたとは云へないのだ。

衛兵にまもられた橇が黑龍江を横切つて靜かに對岸の林へ辷つて行く。それが丘の上の病院の眼に映つた。黑龍江はアスファルトの街道のやうに光つてゐた。

橇は、向うの林の方へ、二三枚の木葉舟のやうに小さく、遠くなつて行つた。列車の顚覆と同時に、彈丸の餌食になつた兵士が運ばれて行つたのだ。

觀音經をやりながら、ちよい〳〵顚狂に笑ふ伍長をのけると、みんな憂鬱にベッドから頭を上げなかつた。

「まだ、俺等は運がよかつたか！」

栗本は考へた。ベッドには、一人の患者がゐなくなると、また別の傷病者がそのあとへやつて來る。それがゐなくなると、又次の者がやつてくる。蒲布團も毛布も幾人かの血や膿や汗で汚されてゐた。彼は、それをかむつて、ひそかに自分を慰めた。

負傷者は、死ぬまで不自由と苦痛を持つてまわらなければならない。不具者だ。

彼等は、おかみから、もとの通りの生きてゐる手や足や耳を賠償して貰ひたかつた。一度切り取られた脚は、それを生れたまゝのもとの通りにつけ直すことは出來ない。それは相談にかゝらない。でも、出來ても出來なくても無理やりに辨償を强要したかつた。不服でむかくしてやりきれなかつた。さういふ激しい感情を林へ引いて行かれる橇を見て自ら慰めるよりほか、彼等には道がなかつた。彼等と一緒に兵タイに取られ、入營の小豆飯を食ひ、二年兵になるのを待ち、それから歸休の日を待つた者が、今は、幾人骨になつてゐるか知れない。

ある者は戰場から直ぐ、ある者は繃帶所から、ある者は擔架で病院までやつてきて、而も、病院の入口で見込がないことを云渡されて林へ運ばれて行つた。中には、まだぬくい血が傷口から流れ出てゐる者があつた。自分たちが、負傷から意識を失つた、若し、それをまだ取りかへさないうちに見込がないと云渡されてゐたら……。彼等は、それを思ふとぞッとした。さういふ者がないとは斷言出來ないのだ。

「煙が上りだしたぞ。ウエヘヘツへ。」

伍長が病的に笑つて、湯呑みをチンくと叩きだした。

「やめろ!」

彼等は、髮や爪が燒ける惡臭を思ひ浮べた。雪に包まれた江の向ろの林に濃い紫色の煙が上りだした。

「誰れやこしたつたんだ?」

腰に彈丸がはまつてゐる初田がきいた。

「六人ちやといふこつちや。」

「六人?」

六人の兵士は、みな名前を知つてゐた。顏を知つてゐた。一緒に、あの朝、プラットフォームのない停車場から重い背

嚢を背負つて、やつと列車に這ひ上り、イイシへ出かけたのだ。イイシにはメリケン兵がゐない。ロシアの娘がまだメリケン兵に穢されてゐない。それをたのしみにしてゐた仲間だ。ある時は、赤い貨車の中でストーブを焚き、顫へながら夜を明かしたこともあつた。

彼等は、誰も、ものを云はなかつた。毛布をかむつて寝台からペンキの禿げたきたない天井を見た。

戦死者があると、いつも、もと坊主だつた一人の兵卒が誦經をした。その兵卒は林の中へもやつて行つた。

林の中に嗄れた誦經の聲がひゞき渡ると、薪は點火せられ、戦死者は、煙に化して行くのだつた。薪が燃える周圍の雪が少しばかり解けかける。……

自分の意志を刈りこまれ、たゞ、一つの×××のやうにこき使はれた彼等は、すべての希望を兵役の義務から解き放された後にかけてゐる。彼等はまだ若いのだ。しかし、そのすべての希望も、あの煙と共に消えなければならない。兵士達には、林の中の火葬の記憶が一番堪えがたかつた。

急ごしらへの坊主の誦經が、いかに聲高く樹々の間にひゞき渡らうとも、それによつて自ら望まない死者が安らかに成佛しようと信じられるか！　そのあとに、もろい白骨以外何が殘るか！

「まだ、俺等は、いゝくぢを引きあてたんか！」彼等はまた考へた。

いのちが有るだけでも感謝しなければならない。

そして、又、

「アルフアベットを数えてしまへば、親爺や、お袋がゐるところへ歸つて行けるんかな。」そんなことを考へた。「俺等にも本當に恩給を呉れるんかな？」

そこで、一本の脚を失つた者に二百二十圓かそこらの恩給が、シーメンス事件で腰を折つた××大將の六千五百圓の恩

給にもまして有難く感じられて來るのだつた。

六

病室は、どの部屋も滿員になつた。

胸膜炎で、たき出した番茶のやうな水を、胸へ針を突つこんで汲み取る患者も、トラホーム・パンヌスも、脚のない男も一つの病室にごた／＼入りまじつた。

「軍醫殿、栗本も內地へ歸れますか？」

彼は、自分から癪に障るくらゐ哀れみを乞ふやうな聲を出してきいた。

「あゝ。」

栗本の腕は、傷が癒えても、肉が剔り取られたあとの窪んだ醜い禿は消す譯に行かなさうだつた。

「福島はどうでせうか、軍醫殿。」

「歸へすさ。こんな骨膜炎をいつまでも置いといちや場所をとつて仕樣がない。」

あと一週間になつた。と、彼等は、月火水木……と繰り方を換へた。

今は、不潔で臭い病室や、時々夜半にひゞいて來るどつかの銃聲や、叫喚が面白く名殘惜しいものに思はれてきた。それらのものを、間もなくうしろに殘して內地へ歸つてしまへるのだ。

「みんなが一人も殘らず負傷して內地へ歸つたらどうだ。あとの將校と下士だけぢや、いくさは出來んぞ。」

聲が室外へ漏れんやうに小さく囁き合つた。

「やつぱし、怪我をして內地へ歸るんが一番氣が利いてら。」

「こんな中にや、だいぶわざと負傷をしてきた奴があるちやらうがい？」大西は無遠慮に寝台を見まわした。「さういふ奴は三等症だぞ。」

「三等症どころか、銃殺だ。」

どう見ても、わざとの負傷と思はれる心配がない、腰に弾丸が這入つてゐる初田が毛布からむく／＼頭を持ち上げた。

「馬鹿云へ、誰れが好んで痛い怪我をする奴があるか！」

彼等は平和だつた。希望に輝いてきた。

また、繰り方を換へた。あした、あさつて、しあさつて、と。もうあと三日だ。と、新しい傷病者が、追ひつかうとするやうに、又どか／＼這入つてきた。その中にアメリカ兵と喧嘩をして、アメリカ兵を軍刀で斬りつけた勇士があつた。それは彼等をひどく喜ばした。砲兵の将校だつた。

肩のさきをピストルでやられてゐたが、彼は、それよりさきに、大男のメリケン兵を三人ぶち斬つてゐた。

中尉は、下顎骨の張つた、獰猛な、癇癪持ちらしい顔をしてゐた。傷口が痛さうな振りもせず、とつておきの壁の青い別室に坐りこんでゐた。その眼は、頭蓋骨の真中へ向けられ、何か一つの事にすべての注意を奪はれてゐる恰好だつた。

やつたのは、ロシア人の客間だ。さういふ話だつた。そこで、アメリカ兵は、将校より、もつと達者なロシア語を使つて、娘と家族の会話を彼の方から横取りした。中尉は、癇癪玉をちく／＼刺戟された。が、メリケン兵をやつつけるとあとからもんちやくが起る。アメリカ兵は、やつけられて泣き寝入りに訴へるロシア人や支那人のやうな奴ではない。それを知つてゐた。で、そのまゝ何気なく歸らうとして、外套に手を通しながら、ちよつとテーブルの方を見た。と、そこに、新しい手の切れるやうな札束があつた。競争に負けたジヤツプには鐚一文だつて有れやしないんだらう。――テーブルに向つて腰かけたメリケン兵の眼には明かな彼への軽蔑があつた。

「それや、どこの札だね？」と

彼は、片方の袖を通しさして、手を天井に突き上げたまゝ、テーブルに近づいた。

「お前のもんぢやないよ。」

顔の細長いメリケン兵が横から英語で口を出した。も一人の方は、大きな手で束から二三枚を抜いてロシア人にやつてゐた。その手つきが、また見せつけんばかりに勿體振つてゐた。

「それや、僞札ぢやないか！」

彼は、劍吊りに軍刀をつらうとして、それを手に持つてゐた。

「でも、この通り、ちやんと通用するんだよ。」メリケン兵は、また札を二三枚抜いてパチパチ指ではぢいて見せた。

彼は背に火がついたやうな焦燥を感じた。そして、心で日本刀の味を知れ！と呟いた。

入院患者をつれてきた上等兵の話はさういふことだつた。

つひすると、ロシアの娘は、中尉がさきに手をつけてゐた、その女だつたかも知れなかつた。

「ほう、そいつは、俺も加勢するんだつた。いつかは、そんなことになると思ふとつたんだ。」樋の上からピストルを放したメリケン兵のロシヤ語は、まだ栗本の耳の底にまざまざと殘つてゐた。「眼のこ玉から火が出る程やつつけてやるといゝんだ！」

けれども靑い別室の將校は、

「おれは中尉だ。兵卒とは違ふんだ！將校だ！それがどうして露助に分らんのだらう！どうして分らんのだらう！」

と、こんなことを、まるで熱病患者のやうに發作的に聲に出して呟いてゐた。

彼はロシアの娘が自分をアメリカの兵卒と同じ階級としか考へず、同じやうにしか持てなさないのが不滿で仕樣がなか

つた。同様にしか扱はないのは、彼にとつては、階級を無視して、より下に扱つてゐることだ。彼をメリケン兵に格取りされる危惧もそこから起つてくる。

「何で、俺の肩章が分らんのだ！何で俺のさげとる軍刀が分らんのだ！」

それが不思議だつた。胸は鬱憤としていつぱいだつた。

「もつと思ふさまやつてやればよかつたんだ！やつてやらなけやならんのだつた！」

彼は、頭蓋骨の眞中へ注意をむけるやうな眼つきをして衝動的に繰りかへした。刀を振りまわしたのも、呶なりつけたのも、自分をメリケン兵よりもえらく見せるがためだつた。彼には、そのやり方が、まだ足りなかつたやうで、遺憾に堪へないものがあつた。

「俺は中尉だ、兵卒とは違ふんだ！どうしてそれが露助に分らんのだらう！どうして分らんのだらう！」

が、彼は、軍隊の要領は心得てゐたので、本當の自分の心持は、誰れにも喋らず、僞札に憤慨したといふ噂は、流れ擴がるにまかせて、知らん顏をしてゐた。……

七

鈴をつけた二十台ばかりの馬橇が、院庭に横づけに並んでゐた。傷病者の携帯品は病室から橇へ運ばれた。銃も、背嚢も、實彈の這入つてゐる彈藥盒も浦潮まで持つて行くだけであとは必要がなくなるのだ。たうとう本當にいのちを拾つたのだ。

外は、砂のやうな雪が斜にさら／＼とんでゐた。日曜日に働かなければたらない不服を、のどの奥へ呑み下して、看護卒は、營内靴で廊下や病室をがた／＼とびまわつた。「さあ、乘れ、乘れ！」護送に行く看護長が廊下から叫ぶと、防寒服

で丸くなつた傷病者が病室からごろ〳〵靴を引きずつて出てきた。

橇には、五人づつ、或は六人づつ塒にかたまる鷄のやうに防寒服の毛で寒い間隙を埋めて乗りこんだ。歩けない者は、看護卒の肩にすがり、又は、擔架にのせられて運んで行かれた。久しい間の空氣のこもつた病室から院庭へ出ると、壓縮された胸がすが〳〵しく擴がるやうだ。病院へつれて來られる時には、うつゝで、苦痛ばかりを意識しながら登つてきた丘に、今、さら〳〵と快よい雪が降つてゐる。

雪のかゝらない軒庇から負傷者が乗りこむのを見てゐた看護長は、

「何だ？　何だ？」

と、息せき〳〵這入つてきた聯隊の傳令に云つた。

「これであります。」

傳令は封筒を出した。

「どれ？」

看護長は右の手袋をぬいで、よほどそこで開けて見たさうに封を切りに二本の指を持つて行つたが、何か思ひかへして廊下を奥へ早足に這入つて行つた。

傳令は嵩ばつた防寒具で分らなかつたが、二度見かへすと、栗本と同じ中隊の一等卒だつた。毛の房々した帽子をぬいで手のひらで額の汗を拭いてゐた。栗本とは入營當座、同じ班の同じ分合にゐた。卷脚絆を卷くのがおそく、整列におくれて、たび〳〵栗本と一緒に聯隊本部一週の早駈けをやらされたものだ。

「おい、おい！」

栗本は橇の上から呼びかけた。

田口は看護長の返事を待ちながら、傷病者がうまく橇に身を合はさうとかた／＼やつてゐるのを見てゐた。

「おい、おい、田口！………俺だよ。」

痛くない方の手を振ると、傳令は、やうやう栗本に氣がついたらしかつた。が二人の間には、膝から下を切斷し、おまけに腹膜炎で海豚のやうに腹がふくれてゐる患者が擔架で運んで來られ、看護卒がそれを橇へ移すのに常を喧嘩腰にしてゐた。栗本は田口がやつて來さうにないのを見て、橇からおりて雪の中を馬の頭のさきを廻つて行つた。

「俺ら、今日歸るんだ。」彼は、歸れることに嬉しさを感じながら、「みんなによろしく云つて呉れ。」

田口は、何か譯の分らないことを呟いて、當惑さうな色を浮べた。そして、ここから又セミヤノフカへ一個大隊分遣される、兵士が足らなくて困つてゐる、それに關する訓令を持つて來た、と云つた。一個大隊分遣される、それや、内地へ歸る傷病者の知つたことぢやない。が、田口のなんか事ありげな氣配で栗本は直ぐ不安にされた。

「また突發事件でもあつたんか？」

田口は、今、ここへ來しなにメリケン兵の警戒隊に喧嘩を吹つかけられた、と告げた。二三日前、將校が軍刀を拔いたのがもとで、兩方が、いがみ合つてゐる。メリケン兵とも衝突するかもしれない。

そこへ軍醫が出て來た。あとから、看護長がついてきた。その顏に一種の物々しさがあつた。

「みんな一つぺん病室へ引つかへすんだ。」

軍醫の聲は、看護長の物々しさに似ず、悄然としてゐた。

負傷者は、一寸、見當がつかなかつた。なんでもないことのやうでもあり、又、非常な突發事件のやうでもあつた。彼等は乘込んだ橇から暫らく立上らうとしなかつた。そこらにゐた看護卒も軍醫の言葉を疑ふものゝやうにぢいつとしてゐた。しばらく、さら／＼と降る雪の音ばかりがあつた。

「一つぺん病院へ引つかへせ！」相變らず、軍醫の聲は悄然としてゐた。

「雪が降るからですか？」

誰れかゞきいた。

「ううむ。」

「ぢや、雪がやんだら歸れるんですね？」

返事がなかつた。

軍醫の云つたことが間違ひでないのを確めた看護卒は、同じ言葉を附近の負傷者に同情を持たぬ聲で繰りかへした。

栗本は、脚がブル／＼慄へだした。

「俺等をかへさんといふんぢやあるまいな？」

田口は、また困つたやうな顏をして答へなかつた。

栗本は、一本の藁にでもすがりたい氣持をかくして、殊更、氣輕るく、

「こつちの中尉がメリケン兵を斬りつけたんが惡るかつたんかい？」と重ねてきいた。

「あゝ。」田口は氣乘のしない返事をした。「それで悶着がおこつてきたんだ。」

「だつて、あいつら、僞札を使つてたんぢやないか。」

田口は、メリケン兵を惡るく云ふのには贊成しないらしく、鼻から眉の間に皺をよせ、不自然な苦い笑ひをした。栗本は、將校に落度があつたのか、きかうとした。が、丁度、橇からおりた者が、彼のうしろから意氣さうにぞろ／＼押しよせて來た。彼は、それをさきへやり過ごさうとした。みんな防寒具にかかつた雪を拂ひ拂ひ彼につきあたつて通つた。ブル／＼慄へてゐる脚はひよろ／＼した。彼は、道の眞中にある石のやうに邪魔になつた。看護卒がやかましく呶鳴つた。

脇へよけやうと右へ向くと、軍醫が看護長に、小聲で、

「梶は、うまく云つてかへして呉れんか。」

さう云つてゐるのが聞えた。彼は、軍醫の顔を見つめた。そこに何か深い意味があるやうに感じた。軍醫は、白い顔を傷病者の視線から避け、わざと降る雪に眼を向けてゐた。

栗本は、ドキリとした。もう、如何に田口から委しいことをきいても、取りかへしはつかない、と覺つた。

病室の入口では護送に行く筈だつた看護卒が防寒服をぬぎ、帯劍をはづして、二三人で、何かひそ／＼話し合つてゐた。負傷者が行くと、不自然な笑ひ方をして、帯皮を輪にしてさげた一人は急いで編上靴を漆喰に鳴らして兵舎の方へ走せて行つた。

患者がゐなくなるので朝から焚かなかつた煖爐（ストーブ）は、冷え切つてゐた。藁布團の上に疊んだ敷布と病衣は、身體に觸れて出來た小皺と、垢や脂肪で、他人が着よごしたもののやうにきたなかつた。

「あゝ、あゝ、まるで賣り切りの牛か馬のやうだ。好きなまゝにせられるんだ！」

彼等は、すつかりおさらばを告げて出て行つた筈のベッドへまた逆戻りした。大西は、いつもの元氣に似ず、がつかりして、ベッドに長くなつた。

「ほんまに家まで去んでみにや、どんなになるか分れやせん。」

あの封筒に這入つたもの一ツが、梶を反對の方向にねぢ向けてしまつた。彼等はそれを感じてゐた。梶は、又、彈丸が降つてくる方へ向けられた。アルファベットを繰る間絶えず胸に描いてゐた美しい、魅力のある内地が、あの封筒一ツに覆がへされてしまつた。

栗本は、ベッドに腰かけて、心の動搖と戰つた。茅葺きの家も、圍爐裏も、地酒も、將みしやの親爺も、おふくろも―

——それらは安らかさと、輝かしさに滿ちてゐる——すべてが自分から背を向けて遠くへ飛び去つてしまつた。內地へ歸りたさに、どれだけ目に見えぬ心を使つたか！一寸した將校のしわざが、俺等に祟つて來るのだ！下らんことのために、こゝに居る者の願望が根こそぎ掘り取られてしまふのだ。これからさき、どうなることか！

二重硝子の窓を通して、空の橇が馭者だけを乘せて、丘の道を一列につゞいて下るのが見えた。馬は、人を乘せなかつたことが嬉しいかのやうに奔放にはねてゐた。粉雪は一層數を增して斜に、速いテンポでさら〳〵と落ちてゐた。

「さうだ、あたりまへたら、今頃、あの橇で辷つてゐる時分だ！」

彼は、ふと、こんなことを考へた。

伍長は、手箱の湯吞をいぢつてゐたが、觀音經は忘れたかのやうに口にしなかつた。

「俺れや、また銃を持てえ云ふたつて、どうしろ云ふたつて動けやせん！」骨折の上等兵は泣き顏をした。

八

錆のきた銃をかついだ者が、週番上等兵につれられて、新しい雪にぼこ〳〵落ちこみたがら步いて行つた。一群の退院者が丘を下つて谷あひの街へ小さくなつて行くと、またあとから別の群が病院の門をくゞりぬけて來た。防寒帽子の下から白い繃帶がはみ出てゐる者がある。ひよつく〳〵跛を引いてゐる者がある。どの顏にも久しく太陽の直射を受けない蒼白さと、病人らしいむくみがあつた。その顏に銃と、彈藥盒と、劍は、どう見ても似つかはしくなかつた。

珍らしく晴れ渡つた朝だ。しかし、下つて行く者は、それをたのしむ色はなく、顏は沓りきつてゐた。

中隊では、彼等が歸つて來るのを待つてゐた。セミヤノフカへ分遣する部隊に加へるか、メリケン兵に備へる部隊に加へるか、そのいづれかだ。アメリカの警戒隊は、大きい銃をかついで街をねり步いてゐた。意地の惡い眼を光らせ、日本

の兵營附近を何回となく行き來した。それは、キツカケが見つかり次第、衝突しようと待ちかまへてゐる状態だつた。中隊では、おだやかに、おだやかにと、兵士達を抑制してゐた。しかし、兵士はただ放して置かなければならなかつた。

二三人の小人數で、日本兵が街を歩いてゐると、武器を持つたアメリカ兵は、挑戰的につめよつて來た。兵士はヒヤ〱した。同時に、なんとも云へない不愉快な反撥したい感情を味つた。それは、朝鮮人が日本人に對して持つ感情だ。そんな氣がした。彼等は、わざと知らぬ振りをして、而も、メリケン兵が居る側へ神經を集中して通りぬけなければならなかつた。が、向うから、こつちを打つた場合、それでもおだやかにと心掛け、打たれてゐることが出來るか。いや、それは出來ない。で、兵士の數を負けないだけ無理やり、ふやしておかなければならなかつた。セミヤノフへ一個大隊行かなければならないことは、ここで大きな打擊だつた。

聯隊の二階では、長靴に拍車をつけたエライ人が、その拍車をがち〱鳴らしながら、片隅の一室に集つて何か小聲で話し合つた。それから傳令が走らされたのだつた。……

大西も、栗本も、腰に彈丸がはまつた初田も週番上等兵につれられておりてきた。

「こんなに、さはつたらころびさうな連中を引つぱり出して鐵砲をかつがせるつて法があるかい！」その群の一人が云つた。

「數が足らんのだよ。」

「足らんだつて、病人を使ふ法があるか！」

彼等の胸は、强暴な思想と感情でいつぱいだつた。

彼等は、橇から引つかへした日に、一人一人、軍醫の診斷を受けた。それが最後の試驗だつた。それによつて、內地へ歸れるか、再び銃をかついで雪の中へ行かなければならないか、いづれかに決定されるのだつた。

病氣を癒すことにかけては藪醫者でも、上官の云つたことは最善を盡くして實行する、上には逆はない、さういふ者の方が昇級は早い。軍醫は、その軍隊のコツを十分呑みこんでゐた。兵タイを内地へ歸へすと約束して、まだその舌の端が乾かないうちに、反對に戰場へ追ひやるのは隨分ツライ話だ。が、彼は、そのツライ話を實行しなければならないと考へた。

負傷者は、今、内地へ歸れなかつたら、この次、いつ内地へ歸れるか、さきは暗闇だつた。――鐵橋からの墜落、雪の中の歩哨、爆彈戰、忌々しいメリケン兵などが彼等の前に立ちふさがつてゐるばかりだつた。そこで彼等は、再び負傷か、でなければ、黑龍江を渡つて橇で林へ運ばれて行く屍の一ツにならなければならないのだ。それは、堪へ難かつた。彼等は、知らず識らず傷をひどく見せ、再び役には立たん人間のやうに軍醫に見せやうと努めた。

軍醫は、診斷にやつて來る兵士が、どれもこれも哀れげな元氣のない顏をしてゐるのを見た。

「私は、内地へ歸して下さい！」

その眼は、純粹な憐れみを乞ふてゐた。

「どうだ、もう飯を食ふとるだらう？」

軍醫は、上唇を横にかすり取られた幼なげな男に、かうきいた。

「はい。」

「どれ、口を開けてごらん？」

その男は、アングリ口を開けて見せた。

「よし！もうよくなつとるね。」

そして、彼は、診斷室を出て行くやうに、合圖に手を動かした。その男は「よし」といふ辭で中隊へかへされると感じ

て、

「私は、いつ、再び弾丸が降つて來る下へ追ひやられるやうな悪いことをしたんです！」

と、子供らしい眼で訴へた。そして、そこら中を見まわした。軍醫の表情には冷たい、固いものがあるばかりだつた。

その少年は、もう一度、上唇のさきが無くなつた口を哀れげに擴げて、

「こんなにおとなしい無抵抗な者を殺してもいゝんですか！」と云ふやうな眼をした。

「この眼に負けちやいかん！」軍醫は自分を鞭打つた。

耳朶のちぎれかけた男も、踵をそがれた男も、腰に弾丸のはまつた男も、上膊骨を折つた男も、それぞれ、憐れみと、懇願の混合した眼なざしを持つて弱々しげに這入つてきた。内地へ歸りたい慾求は誰れにも強かつた。

「どいつも、こいつも、病氣を誇張してやがるぞ！」軍醫は考へた。

栗本も同様に、憐れみを乞ひ求める眼と、弱々しげな恰好をして、軍醫の前へやつて行つた。彼は、シベリアに殘されるのだつたら軍醫の前にへたばらうと考へた位ゐだ。

「どうだな？」

「傷の下になんかこりのやうなものが出來とるんですが。」

「手は伸ばせるかい？」

「いゝえ、まだ伸びません。」

「これを握つてごらん。」

軍醫の態度には、どつか柔かい、温かげなものがあつた。栗本は、出された皿のすべつこい、小さい手を最大限度に力を入れて握つたと見せるために、息の根を止め、大便が出る位ゐきばつた。その實、出來るだけ力を入れんやうにし

て。

「傷はまだ痛いか。」

「はい。」

「よしッ！」

軍醫は出て行くやうに手を動かした。と温かげたものが、急に、頑固な冷たいものに變つた。

「自分はまだ癒つちや居らんでせう！　この病院でもいゝ、こゝに置いて下さい！　いやだ！　俺れやまだ銃がかつげないんです！」

栗本の眼はそれを訴へた。そして、軍醫の顔を、何か反抗するやうに見つめた。

「よしッ！」

「始めの約束通り内地へ歸して下さい！」

彼の眼はもう一度それを訴へた。

「よしッ！」

軍醫の頑固な冷たいものが、なほ倍加して峻嚴になつてきた。

ベッドに歸ると、ひとしほ彼の心は動揺した。まだ絶望したくはなかつた。窓外には、やはり粉雪がさら／＼と速いテンポで斜にとんでゐた。――どつちへころぶことか！　今は、もうすべてが軍醫の甲のすべつこい、光つてゐるあの手一つに握られてゐるのだ。

彼は診斷室の方の物音と、廊下を通る看護卒の營内靴に耳をすまして時を過ごした。甲のすべつこい、てら／＼光つてゐる手は信頼できない性格の表象だ。どつかの本で見た記憶が彼を脅迫した。三時半を過ぎると、看護兵が卑屈な笑ひ方

をして、跫音を忍ばし、裏門の方へ歩いて行つた。五十錢拂つて、マルーシヤのところへ遊びに行つたのだ。不安は病室の隅々まで浸潤してきた。栗本は夕飯がのどを通らなかつた。平氣でねてゐるのは、片脚を切斷した福島と、どうせ癒る見込がない腹膜炎の患者だけであつた。

電燈がついてから、看護長が腋の下に帳簿をはさんで、にこ〳〵しながら這入つて來た。その笑ひ方に、ぴりッとこつちの神經に觸れるものがあつた。看護長は、帳簿を擴げ、一人一人名前を區切つて呼びだした。空虚な返事がつゞいた。

「ハイ。」

「はッ」

「はッ」

呼ばれた顏は一ツ一ツ急にサツと蒼白になつた。そして頬の筋肉が痙攣を起した。

「ハイ。」

栗本はドキリとした。と、彼も頬がピク〳〵慄へ引きつりだした。

「今、ここに呼んだ者は、あした朝食後退院。いゝか！」

同じやうに、にこ〳〵しながら看護長は扉を押して次の病室へ出て行つた。

結局かうなるのにきまつてゐたのだ。それを、藁一本にすがりつかうとしたのが誤つてゐたのだ。栗本は、それが眞實だと思つた。病院は負傷者を癒すために存在してゐる。負傷者を癒すと彈丸がとんでゐるところへ追ひかへすのだ。再び負傷すると、またそれを癒して、又追ひかへすだらう。三回でも、四回でも、五回でも。

一つの器械は、役に立たなくなるまで直して使はなければ損だ。それと同じだ。そのために病院の設備はよくしなければならない！恐らくこれからさき、ます〳〵よくなるだらう。しかし、それは吾々には何にもなりはしない。

栗本は、ドキリとした瞬間から、急激に體內の細胞が變化しだしたやうな氣がした。彼はもう失ふべき何物もなかつた。恐るべき何者もなかつた。どうせ死へ追ひやられるばかりだ。

彼等は丘を下つて行つた。胸には强暴な思想と感情がいつぱいになつてゐた。足を引づつてゐるものがある。ひよつく／＼跛を引いてゐる者がある。防寒帽の下から白い繃帶がはみ出してゐる者がある。彼等は、銃をかつぎ、彈藥盒と劍を腰にまとつてゐた。どの顏からも、まだ、患者らしい疲勞がとれてゐなかつた。

すが／＼しい朝だ。バイカル湖の方から來る風に、雪を含んだ雲が吹き拂はれて、太陽が遠い空に素裸體になつてゐた。彼等は、今、氣がねをすべき何者もなかつた。何者にもとらはれることはいらなかつた。鬱憤とした思想と感情は、それを慰める手段を取るのが自分達に當然だと考へてゐた。

新しい雪は、彼等の靴の重みにボコ／＼落ちこんだ。彼等は、それを蹴つて歩いて行つた。……



この人達の上に

細田源吉

一

北に向いた小さな半窓の前は、すぐ隣りとの廂間になつて、夜あけから時雨れてゐる外氣がぢつと動かなかつた。その狹い空地には、裏の櫟林から飛ばされた落葉が塊り、古新聞やざら紙のノートブックなどが千切り棄てゝあつた。この家は割惡く他の貸家の蔭になつてゐた。南から陽をとり入れるたつた一つの場所は、それも六疊の一間の半窓だつた。お正午からの二三時間あまりといふもの、皆なが南の窓のある部屋に集る習慣だつた。すこしでも格安な家賃を探せば、結局小蔭の奥の方へ入り込むわけであつた。

朝の一時は、茶碗をとりあげる子供二人で煩さいくらゐの中へ、貧乏な食卓なが

ら、これだけは健康さうな味噌汁の匂ひが湧き流れた。

「……さあ、とうさん、皆なでそこらを一寸一ト廻りして來たら！けふは一日、とうさんお骨休めしてよ。さア、悦ちやん達、とうさんと早く外へ行くのよ」

食後の子供達と來たらそこら中をとり散してゐた。毎日、なにか職を探し廻つてくたびれてしまつた父親は、仰向きに寢ころがり、昨夜からの重い不機嫌を持ち越したまゝだつた。

この月がもう七八日で終りかけてゐたから、十になる兄の方の悦は、さういふ母親の言葉を大人並みにすぐ呑み込まうとするのであつた。拂ひだけのことを子供達から母親が隱さうとするのは無理なことであつた。早熟で、年齡よりも三つくらゐは上に見られる大きな悦は、かあちやん一人に、意地のわるい外の風を防がせておけない氣がするのであつた。

「ぼく家にゐる」

「なぜさ？……とうさんとお出でよ。ね、とうさんてば、外がいゝわ。私も用があるから」

「おい」

と、それまで考へ込んでゐた父親が、四十五六の薄禿になつた頭を擡げた。小錢一つなくなつて了つたこの幾日かこつち、母親が頻りと手職にありつかうと焦つてゐることを知つてゐた。家にゐては都合のわるい、こともありがちだつた。殊にこんな二間つきりの小さい家の中では。そこで父親が着物の裾に坐り皺のついた寒さうな恰好で子供達に云つた。

「一廻り歩いて來よう。もうぢき日が暖くなる……原の方へ行つたら暖いぞ」

弟の茂は起たうともしなかつた。

「とうちやんの眼、まつ赤だ。……そんな眼してろとうちやんと歩くの、厭……」と云つた

「お前、なんです」

と、母親が一寸きつく云つた。

「來ないもなア、いゝもの買つてやらない」

帽子をとりながら父親が縁側からおりた。

「とうちやん、いつだつてなアんにも買つてくれないぢあないか」

兄の悦は、その性分でぴちりとそれだけ云つた。それでも茂の場合と違つて、母親はなんとも咎めなかつた。

十一月末のうら枯れた野の方へ、子供二人と一緒に、父親は外套なしのふところ手で歩いて行つた。昨日までの畑地に、型變りの洋館が建ちかけ、闌れた薄の群がつてゐる大きな空地の果には、新しい邸町が屋根を聳て合つてゐた。ふと通りがけの大きな新邸の庭で、年寄の主人らしい男が鍬を持ち出してゐるのを、ちらつと生垣越しに覗いた茂が、

「とうちやん、あすこのとうちやんも遊んでるの……？　銀行をやめたんだろか」と云つた。

「ばかあ！」

悦は大きい聲で笑つた。「なんでもみんな銀行へ出てると思つてらあ……」

「ね、とうちやん、いゝ家出來るね」

と、茂の方は父親の手を探し求めながら「あ、あすこの家、いゝね、あの二階の欄干、なんだろ？　椅子がおいてある、ね、とうちやん……」

雲が切れて陽が漏れ出してゐた。明るいヴアルコニーにはいたづらに陽が射し渡つた。まだ邸に泥まない庭木の硬い葉の茂みがきら／＼してゐた。

「自家（うち）はどうして汚いの……？　いつ迄あんな家にゐるの？」

「あすこはね」と父が受けた。「とうちやんの知り合ひだもの……」

「だつて、かあちやんはあんな家、厭だつて云つたよ、すぐ越すつて云つたよ。暗くつて、厭だもの……。ねえ、とうちやん、前にゐた四谷の家どうして出たの？　ええ？　ええ？　ねえ？　どうして出ちやつたのさ？　いゝ家だつたぢやないか！」

破風の玄関が、子供の記憶を喚び出したいた。四谷時代の家は、六間ほどだつたが玄関は破風の堂々とした構へだつた。

「……もつと大きくなるまで、そんなこと知りたがるもんぢやない」

さう父親が云つた。真面目な調子だつた。

「大人つて、とうさん、いくつから大人さ？」

悦の方がそんなことを突き詰めるやうに訊いた。

「兵隊検査の時からさ」

返事の方よりも父親は妙に心持が塞がれて来た。十五年も前に一緒に私立〇〇大學を出た友達の誰彼を思ひ出しても、現在の自分のやうにむさぐるしく惨めに失職してゐる者はないらしかつた。學校を出ると或る經濟新聞へ入つたが、その うちいゝ手づるから第△銀行へ乗り替へ、そこで貸付係へ廻はされ、九年も勤めてゐる間に、身體の心まで銀行風に浸りきつて了つた。ところが、一昨年の或る春先のこと、係の主任だつた田村といふ男から彼は時ならない金を掴ませられた。これといつて主任は理由の説明をしなかつたが、

「君だつて、いつまで律氣に給料ばかりで生活してたつて始まらないぜ、時におぼろいこともなくつちあ、ねえ……」と云つた。「重役連中を見給へ、自分でいゝやうに金のやりくりをして儲けてるぢやないか。僕達だけがお預けを喰つた犬みたいに凝つと金に見とれてゐろつて譯もないぢやないか」とも云つた。そんな言葉が三年後の今でも彼の耳の底に染みついてゐた。綿糸相場にうち込んだ主任は公債や社債券のやうなものを持ち出すらしかつた。保管しなければならない擔保の證券だつた。一年はなにごともなかつた。主任の田村は、重役をも凌ぐくらゐの豪奢を、そつと陰に廻つては下役どころ

の彼の目の前で演じてゐた。彼も知らず識らずその掴分けに與つたことが再三になつた。その破綻は突然に田村の上に落ちなければならなかつた。

「なんか擔保品が失くなつて居りませんか」

或る日銀行の重役のところへさういふ密告の電話がかゝつた。丁度主任の田村は行用で名古屋へ出張してゐた時だつた。その前日から不思議なことには田村と連れ合ひで買ひ煽つてゐた山師の近藤が、不在の田村を裏切つて俄然市場で賣りへ變つた。同時に田村の不正が露れた。市場は混亂に陷入つて綿糸は暴落した。山師の近藤だけが、賣玉を利喰して巨利を占めて了つた。……田村が馘首される時、彼も前後して重役室へ呼び出されないわけにいかなくなつた。頭から足の先まで銀行風に浸み込まれた彼は、何年か振りで巷へ放り出されてみると、途方に暮れるばかりだつた。慌てた彼は小さな通信社へ入り込んだが、半年と續かなかつた。或るかなりの呉服店の宣傳部にいゝ椅子が空いたが、そこも二タ月で適任でないといふことを雇主から云ひ渡された。彼は仕方なしに或る電氣機械の外交員にもなつてみたが、彼の朴訥さがこんなでもあつたのかと、自分ながら驚くくらゐ賣込みの押が利かなかつた。知り合ひの人が、村から町になつたばかりの役場の吏員に世話してくれたのは、その後のことであつた。四十圓の給料では、どの途から考へても親子四人の口は過せなかつた。……現在、その役場からも夙に出てしまつた彼は、併し四十圓でもこの際入つてくれゝば助かる、とさへ思ふのだつた。その後悔がありながら、といつてもう一度その知り合ひのところへ頼みに出る彼ではなかつた。

彼は子供達と前後しながら、いくらか照りかけて來た侘びしい日和の中を動いて行つた。氣がつくと、一日光の頼りない有様だつた。力を入れて、衰への見える手足を激しく振つたり蹴つたりしてゐた。さうするとくら／＼と眩暈が來た。立ち停つて呼吸を整へようとすると、悦が傍へ引つ返して來た。

「とうさん、なんかした？　苦しいの？」

「ん、いや、なんでもないよ」

握られた悦の手を、彼も大きく掴んだ。彼のその大きさは大人のものだつた。併し容積のない小ささながら、新鮮で生々のいゝ握力は子供の方に感じられた。

「いつ、ぼく小僧に出ていゝの……？」

悦は父親を見上げて訊いた。父親はすぐ返事をしなかつた。自分が子供の時分將來に期待したのは學生々活だつた。さうして現在は……？ところがこの子はちつともそんなあこがれを見せようとしない。むしろ望まうとも思はないのだらう。弟の茂も、なにか頼りなげに父親の右手につかまつた。

「なんか唄を教へてね……」

と、茂は父親をゆすぶつたが、父親は酒場で聞いた流行唄を、それもうろ覺えに知つてゐるだけだつた。器用な性質でない彼は唄に興味さへ持たなかつた。……今、父子三人で歩きながら、生活を明くする唄一つないことが、彼を息詰らせた。

二

その夜の八時近く、母親は遠く郊外へ歸つて行く電車の内で顏を上げなかつた。もしうつかり顏を上げたら、

「……おや、歸り？」

などと、侮辱に近いほどの狎々しさで誰かゞ寄つて來さうで仕方がないのであつた。少くも、今夜、はじめて知つた二人の男は。……一人は五十がらみのお店者風だつた。その後でもう一人のところへ出てみると三十を出たか出ない位の會社員風だつた。恐怖が彼女を落ちつかせなかつた。もう彼女は平然と電車にさへ乘れない種類の女になつたことを知つた。目の前に黑い布をおろされて了つたやうだ。さう思ふと、周圍の人達の眼がどれもこれも自分を輕蔑してゐるとしか

精れなかつた。知らず識らず、ついと彼女の手は額を撫で廻はした。洗ひ落したあの、こゝに、引いたしの字、小鼻のあたりにお白粉が拭き殘つてゐさうで不安だつた。何年ぶりかで、あんなに濃く塗つた……借り着だからなほこゝにおいても中流どこの未亡人風になりきつた……閉ろ瞼をあければ、さういふ自分だけ見えるやうな氣がした。借り着の、小腕に絡むやうなモミ裏の好ましい冷たさ……漆のやうに撫でつけた男の髪の匂ひ……娓々と、いつ良人に死なれたかなどと、定りきつた男の機嫌とり……汗がれても飲まなかつた酒の香……いはゞ本當の喪服にくるまれながら、一つ〳〵思ひ返す苦々しさだつた。お互ひに住所は絶對にうちあけ合はないことにしてゐながら、親切にかこつけた男のはげしい好奇心が、これからの彼女を心底まで恐怖させた。今、以前通り締めてゐる古いメリンスの帶の間には六圓近い金が挿み込まれてゐる。六圓……それもこんなに思ひ設けない心の苦しみが、六圓ばつかりの高で量られるだらうか。自分こそ、むしろ高價過ぎる手負ひを、荷ひきれない苦しみを、背負ひ込んでしまつたのではないか……。

「おい」

と、頭の上で誰か呼びかけた。ぞつと、頸許を戰かせて彼女はふり仰いだ。良人だつた。良人がつか〳〵と歩み寄つて釣革にぶら下つた。

「……今歸るとこかい？　どうだつた、森さんの話は……？おれもお前が出るとぢき家を出たんだよ、三浦ンとこへ行つて、なんか仕事を探してもらはふと思つたもンで……」

不意を衝かれた彼女の心は、あわてふためきながら現前の良人を間違なく見定めようと焦つた。さうして焦るほど彼女の意識は遠くへ退いて行くやうだつた。どんな眼で、今つけつけと良人の顏を仰ぐことが出來るだらう、と自分を偷護した。良人は、彼女が毎頃家を出かける間際に説明した通りを信じてゐた——彼女の少女時代の友人で、かなりの富裕の森氏へ嫁いでゐる女を訪ねてみて、一週に一度とか二度とか、そんな定めでなにか洗ひもの（など）ない、拭き掃除なりに使つてもら

はうといふのであつた。それは良人と子供達の留守に來てもらつた或る中老の女から、うまくいひ含められた口實だつた。

「…あんたなんかと違つて、この師の女は、どうして／＼、立派な旦那さんがありながら、いゝ物着たさに出る女だつてあるんだもの……誰か、あんたの昔のお友達か遠い御親類か、そんなとこへ、なんか用でさ、ちよく／＼出かけることになつたとか、そこらンとこで、一寸うまく云ふとしてね…」と、仲介の女が拵へを貸したのであつた。それを知りつゝ、聞かれて、でたらめに森さんの宅のことをいふのは苦痛だつた。電車が、がう／＼と駛るのをいゝことに、彼女は言葉少なくしてゐた。

「頭でも痛いのかね」良人は酒くさかつた。

「えゝすこし……」

「馴れないとこへ行つたからだらう……顔がきれいにてか／＼してゐるから誰か違ふ女かと思つた」

「さう…森さんでお風呂へ入れてもらつたから。あの女、昔を忘れないで大事にしてくれて、お金を貰つて來たわ」それきり口を噤んで彼女は動かなかつた。良人が自分を一寸でも美しいと思つて見損ねたといふことが頭に響いた。

A…ステーションでおりると、良人がかなりに醉つてゐることがわかつた。どこか一軒、ほんの一杯だけ寄つて飲みたいと云ひ出した。

「子供はご飯をどうしたかしら…？ね、なんか子供達にも買つて早く歸りませうよ」

「いゝぢやないか、十分やそこら…なアに悅の奴がゐるから二人で喰べてるよ」

「……ぢあ、あんただけでお入りなさいな」

いふなり手早く彼女は帶の間から一圓紙幣をとり出して良人の手へ渡した。良人の掌は喜びで開いた。その瞬間、ぐつと押しつけきつてゐた苦しみが、あべこべに良人への反感となつた。なにも知らずにゐる良人へ、この上知らさずにおいても構はない氣がした。咽喉の向ツ肚だつたが、さういつて了へない深いものが胸に閊えた。

歸つてみると、西向きの緣側の戸があいたなりで、内からの明るい灯を後に二人の子供が黒い影をつくつてゐた。大きい悅が急に昂奮したやうに地べたへ飛び降りた。母親はふいと眼頭が熱くなり、潤み出すのをどうも出來なかつた。

「かあちやんが出て、こんなにおそいことないんだもの……心配しちやつた」

子供達にと誂へて來たうどんが持ち込まれると、悅も茂も他愛なしで生意氣らしく胡坐をかいた。二人は飛び跳ねて母親にとり縋つたりした。

「……なんか、い丶匂ひがすらあ、かあちやんなんかつけた?」と、悅が嗅ぎ出した。

「どれ……あ、い丶匂ひがすらあ」と、茂も云つた。二人は小さな鼻を三度も四度もくん／＼させながら、うどんへ箸を突つ込んだ。

一寸の間、浮き立てられた母親だつたが、すぐ叩きのめされたやうに暗い顔になつた。五六時間前まで、皆な一緒だつたのに、子供と寸分隙もなかつたのに、自分からある隔ての盛り上がるま丶になつた。汚れた疊からも、壁につるした着物のやうなものからも、彼女は一人除け者にならないわけにいかなくなつた。

醉つた父親が歸へると子供達を横抱へにしたりして何年ぶりの浮々しさかわからないくらゐ燥ぎ合つた。い丶元氣で父親は母親の機嫌さへ迎えた。それでも彼女だけは厳しい孤獨の中にとり殘されてゐた。笑ひ合せても、合槌をうつても。

父親は茂をころ／＼と疊の上に押し轉しながら、

「い丶さ、いまにいつも家中がこんな賑かでゐるやうにするよ。おれを侮蔑してる友達をきつと見返してやるぞ。……今日だつて、とうさんは實は厭アな氣持で御馳走になつたンだ、三浦の家でさ……三浦はおれのことを廢人だつて云やがつた……廢人、廢人でい丶さ。なア……おれはさうだよ。おれは三浦つて男が底意地の悪いこと、はじめて分つた、あいつ、なか／＼惡魔主義者だよ。人間、落ちぶれると却つてその男を侮蔑するもんだ……同情こかしに、さ。その證據に三浦の

家を見ろよ、どれだらいゝぢやあないか、あの西洋室の壁掛け一つだつて、おれ達四人が一年やそこら喰つて行ける……なにも施してくれつて譯でもないが、あんなもの一つ壁へかけるんなら、その何十分、何百分の一でも、おれ達に呉れたらどんな助けだとおもふ？」

醉ひに驅られて喋舌る父親は、とめ度もなかつた。ちよい〳〵間で母親が制めた。さうしては母親は顳顬を押へた。

「……三浦にいはれなくつたつて、おれの職業の探し方は悪いだろ、さ……併しだよ、三浦のやうに城廓を築いて、その上からおれみたいな落伍者を説教するなんて、ひどいよ、落伍者に説教がいるか……落伍者には救ひだけさ、さうぢやあないか」

腹の喰ひ膨れた二人の子供達は、繰返し調子づいて喋舌る父親の傍で眠むたがり出した。母親は床をとり出してやつた。一匹の仔犬のやうに二人は寢ころげた。

「……いゝか、きつと見返さうぜ。いゝか、おれはまだ捨てたもんぢやあないぞ。おれには肉體的な勞働は出來ない。それをさ、三浦は知りつゝ、おれに街中へ出て日雇仕事にありついたらいゝだらうつていふんだ。三浦はさう考へていゝ氣持かしらないが、いはれた身になりあ、そんなことが、たつた一日の喘ぎだけだつてこたあ、わかつてるんだ。……一日働いて三日寢込むやうなおれのこれまでの育ちや仕つけ方を、先づ考へてくれ……」

叫びつゞけてゐる良人の顏の輝きは、ほんの一時のものだといふことを彼女は知り過ぎてゐた。自分も良人がなんの勞働にでも選り好みなしに出來るやうだつたら、どんなに助かるかと思ふのであつた。良人の才能は狹く限られてゐる、それにしても良人だけがさういふ狹い人ではない筈だ……と彼女は醉ひに狻つてゐる良人をはじめての人のやうにまじ〳〵と瞬つた。

どうしてこの人が街で勞働が出きるだらう……良人に說き聞かせたといふ三浦が急に疎ましくならずにゐられなかつた。それが出來たら、こんなに苦しみはしない……自分までがこんなにみぢめなことをしはしない……。

その暗い罪蹟を彼女は茂の傍に身體を横へながら夜ひて苦しみつゞけた。今となつては、一夜の眠りくらゐできれいに洗ひ浄められるものではなくなつた。これまでの苦痛や疲勞にくらべて、この打撃はどんなに長續きするだらう……目の前には、晩かれ早かれ病毒に侵される自分が見えた。良人が氣づく。それをどうして良人から隠せるか。自分ばかりか、良人もどうなるかわかりはしない。それから子供達なんかに向つて、大事な母親としては……彼女の頭の中は煮詰められるやうだ。一度はどうあつても彼女の身體はそこへ行き着くのだ。もう明日にも、明後日にも……。これが一番いゝ金とりの途だつたらうか。自分を泥溝に棄てたばかりか、家中の者をもさうしてしまつた？

どこから考へてみても彼女を戰かせる事實ばかりだつた。もと〱事務所なぞへ勤める自信はなかつた。といつて、針仕事となると、こゝらの裏屋なぞへ持つて來るものでは、銘仙くらゐが上もので、大抵は女中さんのものだ、その上縫ひ上げが拙いと云はれさへする。彼女は他人の一日分を三日かけなければならなかつた。日割にしてみると、二十錢そこ〱の收入にしかならないわけだつた。

「あんたの縹緻ならいゝね、縹緻で喰べられるよ……」

市場の買ひもので知り合つた中老の女が、煽るやうに彼女へ囁いた。その時、勿論笑つてしまつた言葉が、日毎に買ひものさへ出來なくなる生活の中で彼女をちり〱と秘密な手段の方へ牽きつけて行つた。先方はまつたくの素人屋で、通ひの方がよく、錦紗づくめに着飾らせてくれるといふ話だつた。その着物や帯の損料をこめ、七三で客からの取り分を分けることは今夜になつて知つた……。

うす鈍い隣室の四疊半の電燈をうけた彼女の顔は、蒼黝く浮いてゐた。薄い蒲團を被せ直しては小さい茂を締めるやうに抱いた。子供はまだ彼女のものだ……。

三

二人の兄弟は朝からＡステーションで待つた。或る晩からふいと母親が歸らなくなつたのだ。さうなると父親の方も半日だつて家に落ちつかなくなつた。一晩は父親も家をあけた。さうして昨晩も。

今日こそどつちか歸つて來るだらうと、二人はベンチの冷たい板の上で尻を冷やしながら、電車の發着に目を注ぎ通しだつた。どつちもすぐ不機嫌に眉をしかめ合はずにゐられなかつた。お互ひの云ひ分は、お互ひに不滿だつた。

兄にいはせると、母親が歸つて來なくなつた日の樣子は、弟の方が誰れよりも知つてゐる筈だつたのに、白ばつくれたやうな要領を得ない云ひ方ばかりするからだつた。弟はその日の晝頃、どこかのお邸とかへ出かけて行く母親を、二三丁も送つて出た。母親は默つて途中まで隨いて行つた弟に、小さい銀貨を一つ呉れて歸るやうに云つた。幾度か母親も躊躇つてゐたらしかつた。が、弟は只、

「かあちやんはなんか忘れたんだ……」と云つた。母親は自分で歸らないつもりだつたか、それとも誰かに妨げられでもしたのか。そんなことは勿論弟の話でわからう筈はなかつた。ところが兄はその責めをすべて弟の上にかぶせずにゐられなかつた。

さうかと思ふと、弟は弟で——その晩どんな事件がふいに家中を驚かしたか、どうして父親が誰かに呼ばれて出て行つたか、誰が父親を呼ぶことが出來たんだろか、などと、兄の話では結局摑まへられないからだつた。

「にいちやんは馬鹿だア……。どこへ行くンですかつて、とうちやんに聞いたらよかつたんだ」

併し父親も昨夜また歸つて來ないとしてみると、自分達の上に容易でない事件がふりかかつてゐるといふことは、二人ともに了解してゐた。只、兄の方はもつと知つてゐた。その晩、もう十二時といふ時分に誰か戸を叩いたのであつた。二人

の黒い影が家の中へ入ると、顔を出した父親に向つて、

「××署まで行つてもらひたいんだ……」と云つた。父親はつれられて出る時、

「靜かにして待つといでよ、なんにも心配ぢあないんだから……」と、悦の耳にそつと云ひおいた。その黙りつめた父親の表情が、異常な怖ろしさを唆つた。彼は胸のうち合ふほど震えた。かあちやんが、なんか犯したのだらうか、それともどこかで大怪我でもしたんだらうかと。悦はその刹那の紙持は、小さい弟へ云へないのであつた。なにか、それを話しでもすれば、かあちやんをこの上苦しい破目に陥れるやうに思はれたからだつた。

どつちにしても二人はすべてに渉つてまだ知り悉せるわけがないのであつた。

「……とうちやんが悪いんだ、一人でかあちやんを出したから」と、茂はわからないながらどこまでも父親に罪をきせた。

「どうして？とうちやんなもんか……よそのおぢさんだよ」

「どこの……」

「そんなことわかるかい！」

「とうちやんがかあちやんを叱るからだ……かあちやんはこないだ泣いてた」

「どこで……？」

「……夜中だよ、なんだろと思つて觸つてみたらかあちやんが坐つてたんだ……寝なさいよ、つてた。そいで茂ちや

んは寝たんだ……」

「なぜ、早くとうちやんに云はなかつた！」

「忘れたんだ……」

「忘れる馬鹿はないや……」

八分毎に電車が發着した。一時間かそこらの間をおいて汽車が百にあまる窓々を搖かし流すやうに通過した。その間に四十輛も連結した貨物列車が地鳴りを立てゝ馳りぬけるのだ。二人の兄弟はお正午が來ても、さうして電車だの汽車だの、それから一度にステーションへどつと現はれては消える何十人もの人間を一人一人見逭すまいと焦つた。

「……にいちやんの馬鹿ッ」

時ならない時に、ふいと眉を皺めた弟が、兄の顏を摑みかゝつた。喰べものゝ臭ひが、驛員室で火鉢の上にお茶でもこぼしたらしく、ぷんと通つて來たのが弟を堪へられなくしたのだ。弟は肚一杯の抑へきれない不滿さを、兄の上にぶちまけたかつたのだ。兄は、ほい、と腕をふつて弟の手を拂つた。それでも弟は武者ぶりついて來た。兄に對し、なにをしようとするのか終ひに弟もわからなくなつて、やたらに泣きたくなつた。口惜しい對手は兄にあつたわけではなかつたやうだ。わあ――と泣き上げた。

構内にゐた車夫や兒守などが寄つて來た。

「……この三四日あゝやつて二人してベンチにゐるんだよ」と、赤兒を搖りながら小娘が云つた。

「云ひ合ひばつかりしてるぢやあないか」

「……ん、なにしてるんだか。……おい、虐めるなよ」と、誰か悅を引き分けた。

「二人はね、、、山のとこにゐるらしいよ。一昨日か新聞に出てたらう！素人淫賣のあげられたつて奴だ。あん中に、二人のおふくろがゐるんだ……」

その持ち出された話に興を唆られた三四人が集つた。桝屋の小僧がどこかゝら聞き込んで、これに彼の想像もいゝ加減に加へたところでは、――父親と話し合ひの上で、麹町の方の婆さんとこで四五度客をとつたといふのだつた

「どんな女だい。別嬪か。こゝを通つてたんだらうがな」

「ちよつと喧嘩だよ。餘そしてるんで見たとこは汚なさうだね。あれならよくやれるだに
嗣(と)められてゐた悦は、そんな立話が彼の方へも流れて來ると、手嚴しい仕樣に逆上した。どつと集つた人達の中へ突つこくられたやうに飛んで行つた。彼は今迄なにか喋舌つてゐた小僧に向つてしがみついた。小僧は逃げやうとした。だ、すぐ悦を呑んでかゝつて頭をうちおろした。悦は小僧の脚に絡みつき、小砂利の上に引き倒した。

多勢の人達が子供の悦を擲る小僧の方に味方した。只、悦が小僧にくらべて年齢が行つてゐないだけに手出しはしなかつた。慥かに面白い見物くらゐのつもりだつた。電車が着いて、あふれる人波がこの擲り合ふ悦達の方へ一切に集つて來た。もう誰れ彼れなしに二人を引放さうとした。どこかの夫人が荷物を小腕にしながら悦を人ごみから連れ出して行つた。それと悦が氣がつくと、夫人は頭から脚まで劬はるやうに、

「あんなことするもんぢやないわ、對手はあんたよりか七八ツ上だもの………かなふもんぢやあない」

云ひながら夫人は悦の手を引つ張つて町通りの方へ行つた。後から小さい茂が高い泣きじやくりをしながら蹤いて來た。夫人はふり返つた。

「………あんたの弟？　それなのに喧嘩なんかして」

悦は氣がついて弟を傍へ引きつけながら夫人のいふまゝに歩いた。彼は夫人が持ちかゝへてゐる荷物を、自分が持つて行かうと云ひ出した。

「さう………持つてくれるの、それはありがたう………」

夫人は荷物を渡してしまふと、小腕を撫でた。

その邸の前まで來た夫人は悦に大きな銀貨を一つ與れた。悦は手を引つこめ、もぢ〳〵して取らないで逃げた。その後に、おくれた茂が夫人に引きとめられてゐた。茂はのそ〳〵と來た。

「……なんだ、銀貨だろ」

夫人が門の中に入つた後で、悦が兄らしくその銀貨を自分の掌にのせた。

「……二人でなんか喰ふか」と云つた。

弟は一時の重い不機嫌が拭かれたやうにけろりとしてゐた。二人は、そば屋の前で、どうしようかと躊躇した。が、悦は思ひ切つて弟をつれて土間へ入つた。

父親の歸つたのは、夜もおそくなつてからだつた。二人の兄弟にはなんにも云はなかつた。兄の悦は、茂がすう／＼と輕い寢息を立てると、くるりと向きを變へた。父親は一人で火鉢のところに蹲つてゐた。悦は、晝間小僧の噂をしたことで肚の底から怒りが迸つたのだつた。父親をみてゐると、もう一度その怒りがこみあげて來さうになつた。……父さんは、なんだつて母ちゃんを連れて來ないんだらう。母ちゃんは牢屋にぶち込まれたんだろうか……それだつて、とうちやんさへその氣なら連れて來られるんだ。なにしてるんだろうな、一日、ちつとも家にゐないで……。留守中をさ

重さうに父親は四疊半の方へ、一人だけの寢床を運ぶのだつた。なぜ、こつちへ寢て呉れないのだらう……

みしがつてたのに……。それでも默つた父親は背を丸め、なにかつぶやいて居た。

晝間の小僧の言葉が悦の頭を惱ました。父親に口を切るのが可怖くなり、ぶる／＼と顫えた。彼は足を縮め、床の中で動かうとしなかつた。

隣りに移つた父親の方から、床に抑へるやうな歔欷きが起つた。いくら經つても泣き止まうとする氣勢がなかつた。悦も誘き入れられて泣き出した。

四

午前になると父親は家にゐられなくなるのだつた。父親が出てしまうと、二人の兄弟はAステーションのベンチへやつて行つた。一日二日のうちに、弟の方はなにか嗅ぎ出したか、ステーションを嫌ひはじめた。

「……こゝになつたら、かあちやんが歸つて來てよろこぶからな。なんか、後で買つてやるから、よう、にいちやんのいふことを諾くんだぞ」悦は弟の心持を抑へるのに骨を折つた。

彼は一昨日のことがあつてから、こんなことを思ひついてゐたのだ。——どこかのおばさんが重さうな荷物を持つて降りて來たら、そいつを持つてつてやらう、と。さうしたら餓じい二人はなにかしら喰べられる、と。それがやつてみたかつた。

只、悦は弟より以上にステーションが氣持のわるいところになり出したことを知つてゐた。それをいつてたひには、せつかくの思ひ付がぶち壞れてしまふ……。慥かに、弟にも嗅ぎ分けられたやうに、二人を見るとこそ〳〵噂する人達が目につくのは事實であつた。グラフや新聞をぶらさげた賣店の女が、

——よつぽど喰べるのに困つてゐるらしいんですよ。お菓子一つ喰べてた時がないんですからね、お父さんもよくこゝから電車でどつかへ行きますわ。牢の方へでも行くんでせう。

牢、牢、かあちやんのやうなおとなしい人が、どうして牢へ行つたんだろ……お金をとつたつていふけど……でも、どこの人も家のこと心配してくれやあしない。そこへ行くと一昨日のおばさんはいゝ人だつた。かやちやんだつて、お金さへ持つてたら、あゝいふおばさんみたいに……もつと〳〵いゝおばさんになる。悦は昨日も一度或る年寄の風呂敷を持つてやつた。今日はもつといくたりも持つてやらう。昨日はどこかのおばあさんが、隨分歩かせておばあさんが十錢呉れた。

一昨日のおばさんは來ないだらうか。

悦は電車の入るたびに、上りでも下りでも改札口のところへ張りついてゐた。

「邪魔だからあつちへ行くんだ」

と、驛員が聲をあらゝげた。

物色してゐた甲斐があつて、今日は、

「ほう、そりあ調法する……」といつて呉れた中年の婦人もあつた。悦は女の人を見のがさなかつた。送つて行く間、弟の茂はベンチへおいて行つた。弟もひとりでに兄の心持がのみ込めて來た。併し兄がステーションへ引つ返してみると、弟がゐなくなつてゐることが度度になつた。弟は辛くなつて了つたのだ。

「……おい、君、なんの眞似してるんだ、そんなこと、ずつとやる氣か」

と、溜りから一人の車夫が悦のところへ來て云つた。「小さいから放つとくやうなものゝ、づう〳〵とそんなことする氣か、おい、どうなんだ」

「いゝやね、止せよッ……」

もう一人、年齢をとつた車夫が近寄つて來てとめた。「放つとけよ……お前まだ年齢が行かないから分らねえんだろ？なア、さうだろ……？。いゝやな、その代り、構内から出ろよ、やつぱりな、仲間が組合つてものをつくつてるから、いふだけのこたあ、いふんだからな……おめえとこ、おつかあがゐねえんだつて？　ほんとか？」

妙に悄んぼりと悦は突つ立つて了つたが、終ひの「おつかあ……」へ來ると眼が熱くなつた。とうちやんはかあちやんをそんな風に呼ぶことをひどく嫌がつてゐる。それにこの車屋は頭からばさりと云つてしまつた。悦も、とうさんのやうな人達の中から、一遍にこの車屋の中へ放り込まれたやうな氣がした。

「おめえンとこのお父さんは一體どうしてるんだい、遊んでゝおふくろまで喰ふんかい」

默つてゐた悦はその時こらへられなくなつてくるりと背を向けるなり、歔欷上げた。

「まあ……泣くなよ。おめえはいまに働けらア……なんしろからきし年がいかねえんだからなア」

一人二人集つた車夫が溜りへ引き上げて行つた。一人は悦の背中を輕く叩いて笑つた。

その時弟のゐないステーションに一人ゐるのは堪へられなかつた。心の中で、母親を呼びつゞけながら、彼は歸つて行つた。

背後を櫟の林で劃られた一かたまりの貸家の方へ悦が歩いて行くと、今迄、誰れからも顧みられなかつたちつぽけな家を、なにかしら横目で見て通る人が目立つのだつた。引越して來てやつと二タ月になるかならないかだつたが、この界隈の子供達は彼等二人の兄弟を仲間に加へようとしなかつた。悦の身體が、特別大きく見えて、これを可怖がるからだつた。

併しもうこの數日こつちといふもの、子供達が遠くから悦を小馬鹿にしはじめてゐた。小石を投げる者さへあつた。

「……なんだ、野郎ッ」

と、悦は睨みつけた。悦兄弟が喰ものに困つてゐても、界隈の人達は寄つて來なかつた。あべこべに、まだ馴染みの淺い彼等を目尻で嗤ふ風をした。

夜歸つて來る父親には悦の嘗めた苦いものがわからなかつた。今夜も父親は、ふら／＼するくらゐ醉つてゐた。

「お友達ンとこで……」と、それとなくどこで飲んだかを子供達にいひわけをした。どこからか父親はすこし纏つた金を借りて來たのであつた。

「とうさん、こゝ越さうか、こゝん家を……」

「……ん、それよかお前二人どう思ふね……かあちやんに歸つてもらはないやうにしようと思ふんだがね……お友達がとうさんにいふのさ、ともかくもう一度世の中へ出直せつてねえ、それにあ、かあちやんみたいなことしてくれては困るんだ、あの噂さでは世間に對して困るつていふんだ……いゝね？ どうだ、かあちやんが歸らないでもいゝね……？」父親は悦にわかつてもらはうと、隨分下手に出たつもりだつた。

黙り込んだ悦は、ぢつと父親を見てゐたが、そつと目を外らした。

「いゝだろ、な、どうだ……？　とうさんはかあちやんと別れて新規蒔き直しさ」

悦はまだ黙り込んでゐた。

「な、悦……茂もどうだ……？」

「とうさんは間違つてる！」と悦が叫んだ。

「さうか……？」

「そんなこと、かあちやんにひどいや」

「なら、お前はかあちやんがなにしたか知つてるか？」

「知つてる……牢へ入つたンだ……こゝらの家でみんな噂してるもの……」

「男からお金をもらふ商賣なんて困つたことぢやないか」

「………」

もうそこからは悦の判断は間に合はなくなつた。只それにしても彼は母親を知つてゐた。男から金を貰つたとしても、それでも、母親はなんの違ひもありはしない。……悦はむつとしてわざと不貞た恰好で大人のやうに足を抱いた。

「さうか、まあいゝ。そいぢやあ、もうすこし綬り考へてみておくれ、いゝか。とうさんはこれきり一生を棒にふつちまひたかあないもの、そこをね……」

出來るだけ寛かにおひつとけたが、父親は内心の大きな動揺を隠しきれなかつた。彼は子供の心に除き難いものを見た。突き當つてみると、そこに彼の弱さの中の親身なものが感じられた。やつぱり別れようとするのはひどいことか……？

友達の間では、それも世間的に實業界で働いてゐる三浦などは別れる方がいゝといふのだつた。世間の眼はやつぱり三浦

の限たつた。浮気をした女を、もう一度以前通りに……それこそ氣の弱い良人のすることだと想像してゐるのであつた。
彼はその意見にも引きずられないわけにいかなかつた。彼の思ひ出す一つの操は、××署まで喚び出された時、刑事部屋でうつ向いてゐる彼女を見ながら、そこに居合せた刑事が笑ひ聲で云つたことだつた。
「どうも一度泥水へ入ると癖になるもんさ」と。彼は心の奥まで動かされて了つたのであつた。
うつ向いてゐたその日の彼女は、言葉をかけてもすぐに顔を上げなかつた。棄てきつた心を見せるつもりらしかつた。
……どんなに生活が苦しいといつても、そこまで陷るといふのは、彼女の見えないふしだらさではないか……そいつがいつ又狂ひ出るとも知れないとしたら、……さう尻込む彼であつた。心の支えのない彼は、それを世俗に求めた。
子供を動かし損ねた彼の氣持は、その夜も更けると變に惱ましくなつた。彼の心の隅に押しやつた憐みが、水の擴がるやうな勢ひで彼を顚倒した。刑事部屋で顔を變へなかつた彼女の胸を、十年からの二人の生活が彼にわからせた。彼女は自分からは詫びられないと思つたのだらう、こつちの救を待つてゐたのだらう……あの時、あまりに不意な強い打撃で呼吸も出來なくなつてゐた彼は、只一瞥の彼女だけで、きれいに思ひ切るのが當然なやうな氣がした。自分の顔に塗られた泥土は、自分が落すより方法がないと思つて了つた……。
暗い外へそつと出て行つた。誰かどこかで小さく呼んだやうだつたが、それは隣の家かも知れなかつた。今、どこへ持つて行つていゝかわからない心の混亂の中で彼は一人喘いだ。
「……友達は嗤ふだらう。また考へ直したとでも云つたら、そこでおれは生活が出來なくなるだらう……この上に友達に見限られたら」
いく夜も惱み明かして來た彼の頭は、もう一度子供たちの爲めに彼女を呼び戻す場合の方へも牽かれて行つた。先刻悦の前で立派に云つた「出直す」なんて心持も只の云ひ前としか自分に考へられなくなつた。彼はどこかへ頭を叩きつけた

くなつた。彼はそのまゝ町通りの方へ力なく歩き出した。

小雨の來さうな一面の曇り空だつた。通りへ出てみるとまだ十一時をすこし過ぎた時刻だつた。彼は飮みなれた土間の腰掛を見出すとそこで尻をおちつけて了つた。立ち上つた時は時刻のわきまへもなくなつてゐた。強い燒酎が彼の足許をぶらぶらさせた。彼の頭からは、父としても、良人としても、どつちかに決めなければならない火急な考へが、まるつきりどこかへふつ飛んでゐた。只、兩足を踏みしめるのに氣をとられながら、ひどく手間どつて自分の戶口まで歸り着いた時、彼はなにか急に胸へこみ上げて來る心持を覺えた。――どうしたつて駄目だ、といふ考へだつた。細君を戾すにしろ、戾さないにしろ、それから友達に助けてもらふにしろ貰はないにしろ、廣い世間といふものが、今ちつぽけな茶碗ほどのものに浮んで來た。どうしたつてそん內へ入つてゐられるものか……。

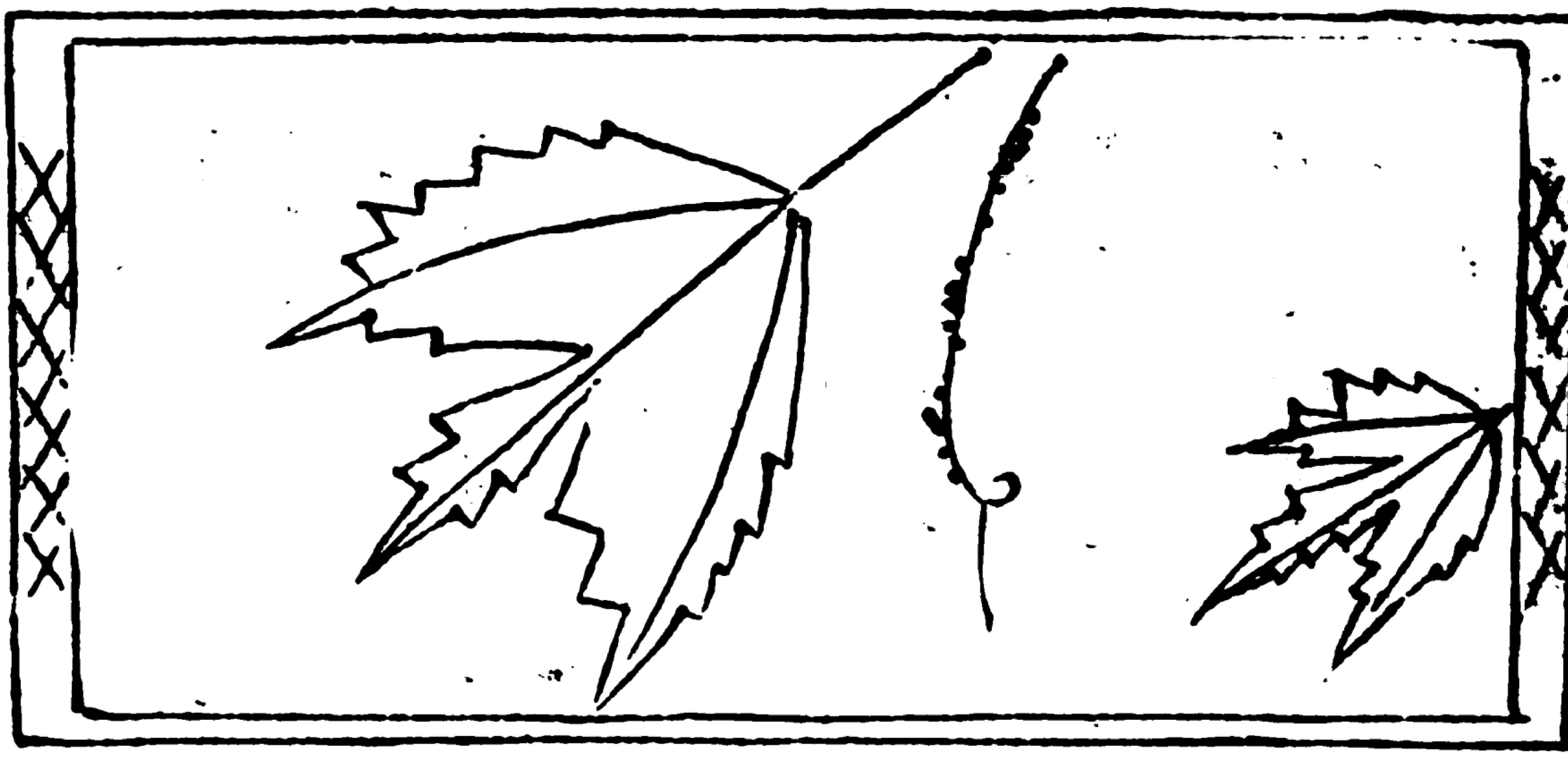
彼はもう一度戶口から手を放して眞暗な空地の方へと行つた。枯葉のやうなものが彼の足の踏みどころを敎へた。ふと彼は一本の樹へすいつけられた。二分三分と、彼の動作は繰り返へされた。彼は泥溝水をこすりつけてゐる氣持で、醉ひ乍らも銳い手先の意識が木の太さを計つてゐた……。

暗い向うから誰か近寄つて來た。

「なにしてるの」と、悅が呼びかけた。近寄つた悅の眼は闇を探ぐつた。前後もないやうな父親が、一言もいはずにするすると帶を解いてそれを樹の枝へ放り上げてゐるところだつた。悅は飛び上るほどの聲で父親の耳に叫び込んだ。

「う、なんだ……なんだつてンだ」と、父親はうめきと同じやうな聲で、うツうふと笑つた。

悅はすぐ父親の帶を腰へ卷きつけてやりながら、ぐいぐいと櫟林の入口から連れ戾した。子供の力にさへも父親は抗へなかつた。試したことのない大人らしい力を自分でわかつた。少くも父親を引きずつて行くほどの……。時刻はもう二時だつた。（三年十二月作）



亞剌比亞人エルアフイ

犬養健

一

マラソン競走の優勝者、佛蘭西領アルジェリイ生れの亞剌比亞人エルアフイは少しばかり跛足を引きながら地下室の浴場に入つた。

一九二八年の八月五日の夕方であつた。そこはアムステルダム市外にある國際競技場に附屬した浴場だ。北歐の八月は沙漠に育つた彼には秋に等しい。午後の三時から二十六哩四分ノ一を走り通した後で、空色の地に赤い線を染め出した佛蘭西代表のジャケツトを脱ぐと、エルアフイはやはり幻覺を感じるほどに疲れてゐた。

彼は不意に耳をそばだてた。

ラ・マルセイエエズの吹奏樂を競技場の方角に聞いたやうに思つたのである。

「はてな。觀衆が熱狂してもう一度繰り返へさせてゐるのかな」

しかしそれは奏樂ではなくて、ほんの一瞬間のうちに消えたアムステルダム發巴里直通の急行列車の汽笛であつた。それほどに彼は、やはり昂奮してゐたのだ。

湯槽に仰向いたエルアフイの胸はまだ魚のやうに喘いでゐた。乳の間隔がひどく開いたり縮まつたりしてゐた。彼は人種學の教へるとほりに黒髪で、面長で、銅いろの額が廣かつたが、その手入れのいゝ髪につけてゐる油はまさしく巴里生粋のものだつた。シヤワーをねぢつて彼はその髪の汗臭さを落したが、すると、此處のシヤワーは細かい湯を降りかけながらくるくる廻るシヤワーであつた。さうだ。今日の走路の至るところにかういふものが廻つてゐた。――回想しながら彼は額をしかめて、降りそゝぐ温い雨のなかで眼をつぶつてゐた。――運河のほとりの無數の風車。人垣のなかでどこの國の民族性よりも喜怒哀樂をあらはした佛蘭西應援委員。最後の一キロまで彼から十米とは離れなかつた智利人のプラザ。頬骨の出てゐる日本のヤマダ。頭髪が麻いろで、それが青いジヤケツトと釣り合ふやうに染めてあるのではないかと思はれた芬蘭のマルテリン。到着を知らせる表門の喇叭。そして最後に、影の長い夕日のなかで押しあひながら動いた新聞寫眞班。……

彼はいまこそ自分の二時間三十二分五十七秒を淸算した。

數學の式を分解するやうにいまそれを分解した。――

扉があいて、オリムピツク競技の象徴である五色の輪を帽子に縫ひとりした僕(ボーイ)が覗いた。エルアフイは選手監督がマツサージ師をよこしたのだと思つて誰何もしなかつた。すると、隙き間をすり抜けるやうにして靴から先きに忍び込んで來たのは細面(ほそおもて)の、眼と脣の子供じみた、パリジアン好みの裝をした、薔薇の花束を一抱へかゝへ込んだ新聞記者だつた。新聞記者だとひと眼で判つたのは腕に卷いたしるしの布からである。記者は妙ににこにこして、まるで彫刻家が美術

術の彫刻にでも近づくやうにエルアフイの裸體へ無雜作に近寄つて來た

「誰だ。誰だ。君は」

エルアフイは狼狽てゝタオルを腰に巻きつけながら怒鳴つた。

「御免下さい、ムツシユウ、大變お邪魔をして」記者は遣り口の突飛なわりには、それでも顔を赤らめて低頭してゐた。つまり圖圖しいよりも熱狂の力で侵入が出來たものらしい。「この名刺をどうぞ。僕はその、ル・タンの特派員です」

「ル・タンの特派員ならばひとの風呂場に入つてもいいのですかね」

「濟みません。濟みません」若い記者はエルアフイの顔いろを見て、一層巴里人むき出しの早口で謝まつた。「私は通報機關です。本社から至急詳報を命ぜられてゐるのです。それに私は、ムツシユウの裸體をはじめてゞはないのです。七月二十六日の夕方に、そら、マラソンコースの復路だけを極秘のうちにあなたが試走されたでせう。あの後でマツサージの粉が足りなくて、あなたは大變怒つて居られましたね。その時にすぐ自動自轉車で選手宿舍まで粉を取りに行つた男があつたでせう。あれが私なのです

さう云はれて見れば、けふも往復三十キロほどマラソン走路に沿つてゐた運河の上のモーターボオトから、三色旗を振りながら誰よりも熱狂した聲で、先頭を切つてゐる他國の選手と彼との距りを絶えず知らせてゐたのもこの青年らしかつたと、エルアフイは次第に想ひ出して來た。この青年は生粋の巴里語でエルアフイが刻刻に追ひつきつつある日本人、亞米利加人、芬蘭人、加奈陀人に就てひどく洒落のまざつた批評を加へては、沿道と船の上の佛蘭西語のわかるすべての人間を笑はせてゐた。この若者は應援隊の哄笑の中心だつた。活氣の要素だつた。——エルアフイはいまその洒落の一つを思ひ出して、知らず識らずこの男に笑顔を向けてしまつた。

と、新聞記者はもう公然の許を得たといふ身ごなしで、浴衣のかゝつてゐる椅子に花束を置くと、その端に自分も腰を

おろしながら、手帳を開いて云ひ譯するのだ。

「失禮します、ムッシユウ。こんな奇矯な事をやらないと大戰後はなかなか喰つては行けないのです。私は元來詩文をつくる方なのですが、巴里のやうに世智がらい都會では、文士も第一歩は奇拔に出ないと生存競爭に負けるのです。巴里は流行第一の市ですからね。御承知でせうが「エッフエル塔の結婚」といふ評判の劇を書いたジャン・コクトオ。やつは私と左程齢も違はないのですが、その手でたうとう飛躍しましたよ！　こんな癖が私にもつい附いてしまつて、それに、家の母親や妹がまた私のパンのためにその癖を賴みにしてゐるのです。――そこで、御感想をうかゞひたいのですか」

「感想？　感想はさつきスタヂウムで聯合記者團に話してしまひましたよ」エルアフイはこの青年に少しづつ馴れて、石鹼のついた兩足を思ひ切り湯の面に浮かした儘、笑つて應酬した。「君は折あしくそこに居合せなかつたと見えますね」

「どうしまして！あれはこの通りもう打電を濟ませて來たところです」記者は手帖の頁をめくつて證據を見せた。「さやう、あなたはこんな風に仰有つたのですね。鬪牛士出身の智利のプラザがいつまでも影のやうにあなたの後に附き添つて、薄氣味のわるかつた事――日本の選手は勝を急いだ氣味があつて、それにふだん優美な芝の道を駈けてゐたせゐか敷石道では少し勝手が違つたやうに見えた事――あなたは又何者よりも傳統を持つた芬蘭のラクソーネン、マルテリン、コスキ、ラスタスの一團を恐れた事――前回の勇者米國のデ・マールの衰退は意外であつた事、そんなお話でしたね。しかし、うちの主筆はもつと詳しいあなたの印象を纏めるやうに命令して來てゐるのです。祖國は八百米競走でセラ・マルタンを逸しましたからね。それから千五百米でもラヅメルグを逸しました。優勝を逸したばかりでなく優勝のニウスまで逸しちまつたのです。そこへあなたが大きい特種を作つて下さつたのです。ル・タンは優勝者には二段分の記事を用意する筈です。明日は巴里は役所でもカフエでも沸き返るでせう。――失禮ですが巴里のムッシユウのお住居は？」

「どうせパッシイといふやうな場所ぢやありませんよ。わたしは自動車会社の技手なのです」
「もうどのくらゐ巴里にいらつしやいますか」
「三年」
「それからと、生ひ立ちなぞも少し伺ひたいのですが。――アルジエリイからおいでゝしたね」
「さうです。砂や蠅のなかで育つたのです」エルアフイは思ひついて、不意に忍耐強い眼をあげた。「時に、あなたはテユスから三百哩ほど奥へ入つたビスクラといふ町の名を――名前ぐらゐ聞いた事はありませんか。もしかするとおありかと思ふのだけれども」
「ビスクラですか？　えゝ――ありますが」
「あすこが私の郷里です。さう、ビスクラのやうなちつぽけな町を御存知だとすると、旅行記か何かからですな」
「えゝ、旅行記もさうですが――」
「ああ。さういふ御返事だと又面白いです！」エルアフイは待つてゐたといふ工合に天井を向いて狡く笑ひ出した。「當てて見ませうか、あなたは文士だと仰有るから。――名高い小説からでせう。私は軍隊にゐる時にはじめて聞いたのです、ビスクラを種にした小説本があると。私はつい未だに讀まないのですが、どうもその小説は私がまだ家にゐる時分のビスクラを書いたものらしい」
しかし若い新聞記者が興味を起して何か訊ねやうとした時に、ノックの音でマッサージの用意の出來た合圖があつた。
「かうしませう」と、アルジエリイを場末扱ひにしないでくれる青年記者を前に置いて、エルアフイが先刻よりもずつと機嫌よく云ふのだ。「マッサージをして貰ふ間だけ、あなたに時間を割きませう。隣の部屋へ御一所にいらつしやい。私なぞと違つて小説を澤山讀んで居られるあなたには、恐らく一寸面白い話がありますよ。それがまた、私のマラソンを稽古

した事に全然無關係ではないのです」

から云つてエルアフイは石鹸の泡のなかゝら立ち上ると、運動シャツのところだけ皮膚の白くなつてゐる脊中を見せながら浴衣を取つた。エルアフイはそうして薔薇のある椅子の傍へ後ろ向きに立つた。新聞記者にはその瞬間のエルアフイが、異國好みの畫家に雇はれた壯麗なモデルのやうに見えた。

二

「私はアルジエリイ駐屯軍に編入されて、もともと沙漠のなかの支隊から支隊へ信書を運ぶ傳令兵に選ばれてゐたのです。このために私は自然と長距離競走のコツを覺えたのです」

エルアフイは隣の部屋に用意してある、まるで野戰病院のそれのやうな寢臺の上に俯伏せになりながら、マッサージ師の肩越しに話し出した。

「尤もそれは大戰直後のことで、もう大ぶん以前の話ですが、昨年の秋にオリムピック佛國準備委員會の役員としてこの私を憶ひ出したのは、當時のテュニス本隊付大尉であつた外務書記官のS氏でした。そこで私はアヴニュ・ド・シャンゼリゼの自動車店からコロンブ競技場へ引き出されたのです」

「私にはお望みのやうな生ひ立ちの話もありませんな。また、運動を特に好きになつた動機といふほどのものもありません。もともとアルジエリイ人には靜かにしてゐる生活といふものがないのですから。――たゞあなたの本職といふのをさつき伺つたら、一寸お話して見たい事柄が一つあるのです。それは郷里のビスクラにあつた話なのです。――十四五年も前でしたらう。――」

頸すぢを押されて枕の中に顏を埋めたので、エルアフイは一瞬間默つた。が、それは記憶を追つてゐる人の動作にふさ

はしいものだつた。

「たしか降誕祭のすぐ後だつた。といふのは私の母親が基督教徒なので、土人の私にも降誕祭の記憶はあるのです。——或る日私の遊び友達の悪童どもが云ふのです。村のホテルにたつた一組佛蘭西人の旅客が夫婦で滞在してゐて、その良人のはうが大ぶん重い病氣らしい。しかもその夫婦は寂しい土地のホテルに退屈しきつて、村の子供たちが庭に入つて遊ぶのを大變喜ぶし、時によると二スウから五スウ、少くとも菓子を呉れる事は保證すると。——私はよく覺えてゐます。山羊小舍の柵の上でその客人の噂を非常に珍奇なものに思つて、兄にすぐさま告げ口した。一體北部阿弗利加ではその時節が一年のうちでも氣候のわるい變り目で、婦人を連れた遊覽客と聞いては尋常に思はれないのですから。——私はもう十六七で、正直のところ子供ではなかつた。愛らしくもなかつた。が、好奇心と慾に驅られてホテルの土塀をそつと越えたものです」

「その佛蘭西の紳士は脊の高い、額の廣い、眼の澄んだ、言葉の至つて少ない人でした。寢臺に寢たきりで、子供達がコルク倒しをしたり角力をとつたり喧嘩をはじめたりするのを見てゐました。默つてゐる時には怒つたのではないかと思はれるやうな様子だが、しかし一旦物を言ふとなると、不意にそれが優しい眼つきの人に變るのです。この粹を呑み込むと子供達はホテルの露台にまで入り込んで遊ぶやうになつた。——ホテルと云つても白い石灰を塗つたまゝの平屋建であつて、私の國の習慣として露台は荒れて見えるほど廣い。その露台から棕櫚の木を越して町はづれの果樹園のオアシスが見え、オアシスの向ふに沙漠がだんだん高まつて擴がつてゐました。——病人の部屋はひどく寂しくて何の額も懸つてゐなかつた。たゞ天井までのガラス扉が露台へ開いてゐるのです。だから病人は一つの大きい穴をとほして沙漠と向ひ合はせになつてゐたものです。」

「まつたくそれは靜かな夫婦だつた。なぜといふにアルジエリイの土人は「ホテルが汚い。人間が醜い」と云ひ散らす旅客

に馴れてゐたからです。殊にその奥さんが物優しかつた。といふのは旅客で大袈裟に苦情を云ふのがいつも女の方であつたからです。奥さんは飾らない帽子から黒いヴエールを深く垂れてゐました。今から考へれば服裝のしるしらしい。そのヴエールが金髪の艶を隱して、顔を實際よりも遠くにあるやうに見せてゐた。――奇妙な事にこの夫婦は一つ部屋で離れ離れに物を考へてゐる時が多かつた。少くも私の見たところではさうでした。良人が何十分もの間ぼんやり空や沙漠を見つめてゐると、奥さんはその邪魔をしないやうにして、本國へ書くのであらう手紙の封を幾つとなく、そして一つ一つ唇で叮嚀に濕してゐました。が、この離れ離れに見える奥さんは土人の眼には一層華奢で美しかつた！――白人の夫婦が腕を組んで歩く時に見せびらかすところの二倍の横柄さを、私たちの種族でないあなたには到底想像がつかないでせう。」「或る日、ホテルの洗濯ものを引き受けてゐた村の女がテラスの奥さんを見つけると、瓶に入れた地酒を賣りつけに近寄つて行きました。地酒は棕櫚の幹に切り傷をこしらへて、そこから垂れる滴でつくるやつです。ところがこの説明が洗濯女には出來ない。庭の子供にも出來ない。そこで私が呼ばれたのです。私はいつも土塀の破れ目に足を組んで、近づきになる機會を辛抱強く待つてゐましたから。――私は親から出世のためにと云つて少しづつ教はつてゐた佛蘭西語で、どうやら通譯してのけた。そこへ遲れ走せに駈けつけた黒人のボオイが、私を見ると奥さんに説明したのです。「なるほど、この子は親がテュニスでホテル勤めをしてゐましたから一寸喋れます。母親は母親で基督教徒ですよ、奥さん。散歩の時にはこの子をお使ひになるが御便利ですな。こいつは駝鳥のやうにすばしつこいが、いゝえ、あまり物を壞したり盗んだりは致しません。」――私は金髪の奥さんの前で全く赤くなりましたよ。拳骨でひと撃ちにそのボオイを撲り倒してやらうかと思つた。が、奥さんは基督教徒の子と聞いて安心したのでせう、それ以來私といふものを覺えてくれました。」「石と砂ばかりといふ庭のベンチで、手眞似を少し許り混ぜて貰ひながら、私は奥さんの口からこの本國人夫婦の身の上を多少知りました。この夫婦はまづ新婚といふべきであつた。新婚後はじめての旅行にマルセエユからシシリイ島に渡つて、さらにシ

シリイのシラクサからの船で大陸のチュニスに來たのです。良人の父親の重病のために。長い交際もなしに結婚を急いで——この還り口はどうも佛蘭西風よりは亞剌比亞風ですが——葬式が濟んでからはじめて慰勞の旅行に出たのであつた。が、南方の氣候をまつたく信じて、厚着の用意もなしにこの大陸へ來て、長い間の看病に疲れてゐた良人は辻馬車のなかで突然血を吐いたのださうです。（かういふ事を話す時に奥さんの見せた笑顔は影が多くて。そのために大變奥さんに似合ひましたよ。）奥さんはまた良人が巴里で本を書く人だと教へてくれた。——次の日に奥さんはテラスから降りると、白い本を一冊持つて私の傍へ來ました。「これが昨日話した、ムッシュウの書いた本ですよ。表紙のこゝは讀めるでせう。讀んで御覧なさい」

カシイの花の匂つて來る石の上で、私は無器用に字を拾ひました。

「ア・ン・ド・レ・ジ・ッ・ド」

三

エルファイの云つたその名前を聞くと、ル・タンの記者は思はず聲をたてた。

「何ですつて！」意外でもあるが、商賣氣からも刺戟された聲だつた。「アンドレ・ジッドイ　あなたは「狹き門」や「プロメテ」や「背徳者」や「アフリカ紀行」の作者の噂をなさらうつていふのですか！」

そして記者は「背徳者」のなかにあるアルジェリイの美しい描寫を不意に想ひ浮べた。

「さうです。あの後澤山のよい本を書かれたといふムッシュウ・ジッドとの因縁をさつきからお話してゐるんです」

エルアフイはもう一度、狡くて無邪氣な笑ひ聲を天井へ打ちつけた。われわれの物に馴れる本能で、エルアフイはこの若い記者の拔け目なさがどうやら快くなつて來たのだ。——が、彼は急に口を曲げて耐らへた。マッサージが腰骨の急所

に觸れたので。

「――私はその時、偶然にも生きるか死ぬかの長旅にあつたムッシュウ・ジッドを識つてゐたわけです。實際ムッシウはたゞの容態ぢやなかつた。或る晩なぞはカンテラを點けて、駐屯軍の軍醫が馬を飛ばして來たりしました。私は奥さんから小遣ひを貰つてゐたし、この晩も用を云ひつけて貰はうと待ち構へてテラスの隅にじつと足を組んでゐたのです。が、やがて軍醫が「お休み」を云つて立ち去つた後で、奥さんはいつものやうに「誰かボオイさん」とは呼ばずに、不意に取り亂して、優しさを籠めて、寢台へ寄つて行きました。私は見つかつた時の奥さんの怒りを想像して赤くなつた。

「わたしのためにお祈りするんぢやないよ」……やがて私の豫想とはまつたく違つて、ムッシュ・ジッドの低い傲慢な聲が聞えて來ました。「わたしは保護を受けるのなんぞは嫌ひだからね」

「どうしてなの？　アンドレ……。」

奥さんが情けないといふ調子で訊き返してゐるのです。

「あなたお獨りでは癒りませんわ。可哀想に――」

「ぢやあ仕方がないさ」

寢返りでもうつたのではないかと思はれる間があつた。「――氣の鎭まるやうにして置くさ」

私はこそこそテラスを逃げ出さうかと思つた。

「あなたは神樣のお授けを斥けていらつしやるのね、アンドレ。分りますわ」

「…………」

「あなたは別のものに頼らうとしていらつしやるのね」

「…………」

私は吠えつく犬を叱り飛ばして土塀の穴をすり脱けました。が、あの光澤のいゝ髯を生やして儼然としてゐる紳士が、まるでうちの母親から私の問ひ詰められると同じやうな事柄を、奥さんから聞き訊されてゐるのにはまつたく驚きました。透き徹つた星の下で、私はムツシユウ・ジツドと自分とはつまる所仲間だと思ひましたよ。ムツシユウも教會へ行つて足をしびらすのは嫌ひといふ手合ひだなと呑み込みました。これは野生兒には痛快な發見であつた！　私がムツシユウに對して持つてゐた微かな毛嫌ひを取り除いたのはその晩あたりからだつた。——」

「ひと月も經つと、しかし、ムツシユウ・ジツドはやうやく外へ出られるやうになつた。ムツシユウは村の子供を介添にして毎日歩く距離を少しづつ伸ばして行きました。たうとうムツシユウはあの露台から見えたところの、町外れの果樹園まで歩けるやうになつた。土語でセギアスと云つてゐる灌水用の堀の、幾すぢとなくめぐつてゐる單調きはまる果樹園です。ムツシユウはそこのベンチで子供を相手にいつも長い休息をしました。雉鳩の微かに聞えるベンチであつた。——が、私はなぜムツシユウが白人の習慣のとほりに奥さんを連れて行かないのか、不思議でならなかつた。私は或る日思ひ切つて奥さんを誘つて見た。奥さんは大變喜んで、しかし私にムツシユウの外套をあづけながら斷りました。

「いゝのよ。いゝのよ。あなた達で行つていらつしやい。ムツシユウはいま病氣と精一杯取つ組みあつていらつしやるんです。だからわたしのやうな弱蟲とよりはあなた方のなかへ混つて、あなた方の惡戯に見とれていらつしやりたいのよ」

氣の毒な——といふ眼付を私から感じたのでせう、奥さんは直ぐにほかの事を云つて紛らせました。

「それよりか、エルアフイ。ムツシユウがもつと元氣になつたら、今度あなたの家へ行つて見ませうね」

「でも、僕の家はあんまり汚いのですから」

「そんな事を氣にかけないでもいゝのよ。私は信者同志の訪問をするのですもの」

「ぢやあムツシユウは？——信者ぢやないんですか」

奥さんは一瞬間私を視つめました。

「ムツシユウも――信者です」

と奥さんが云つた。

「たゞ、ムツシユウのはプロテスタンと云つて、分らないでせう！ 私の神様とは少しばかり違ふのですよ。ムツシユウは戰つて行かうとなさるのよ。私のは神様に唯おすがりする信者ですけれど――」

しかしそれきり、奥さんは笑つてやめました。やめて――外套を果樹園へ屆けてくれ、そして日が翳つたらムツシユウが寒がつても着せてあげてくれ、かう頼んでテラスへ引つ返しました。……」

「アルジエリイでは一月に入ると急に雨が續いて、その合ひ間の晴れた日はぐつと氣溫がのぼるのです。まさしく熱帶風な春の前觸れです。ジツド夫妻はそこで荷物を纏めて、巴里の家ではない、ノルマンデイの郷里へ行つて後養生をする仕度を始めました。だから、その儘であつたならば私は奥さんの便利な小使になつたゞけで、別にムツシユウとは何の因緣も持たずに終つた筈です。ところが出發する少し前の晴れわたつた日に、ジツド夫妻は突然私の家の入口まで散歩がてら來てくれた。ムツシユウは文士だから亞剌比亞人のふだんの生活といふものを一度見て置きたかつたのでせう。私の家は砂地の中庭を取り圍んだ粗土造りの平屋で、入口は乘馬の儘でも入れるやうに高く弓形になつてゐました。――私の父はその時鐵砲の手入れをしてゐた。母は水瓶を頭に載せて井戸へ往復してゐた。兄は半裸體で寢ころびながら盜んだ笛を吹いてゐた。が、私が白人の客を迎へたと見ると一齊にうろたへて――飛び出して挨拶したり、奥へ逃げ込んだりしたのです。ムツシユウ・ジツドはそれを大變面白がつた。白い頭巾や着物が光つて間誤つくのを興がりました。」

「私の父は口ぎたなく羊や駱駝を追ひ立てゝ、そのかはり厩から自慢の仔馬を引き出してムシシユウに見せました。われわれ亞剌比亞人がどんなに亞剌比亞馬を大切にするかは御存知でせう。と、馴れない服裝の客人を見て、仔馬は急に耳を立

てると跳ね上りました。仔馬は父の手を振りほどき客人の腕をかすめて駈け出した。私の父は見事仰向けに打かつて、それから老人の醜さをさらけ出しながら無駄にも後を追はうとしました。突差に私は中庭の入口に向つて斜に走つたのです。私の敏捷なことは兄弟ぢうでも定評であつた。私は穹形の蔭の下で往來へ走り抜けやうとする仔馬に間に合つた。横飛びに一間ほど飛んで鬣をつかまへると、私は引きずられながら足掻いて背中へよぢ登りました。——やがて中庭をひと廻り輪乗りして見せた時の、ムッシュウの滿足は大したものであつた。何をそんなに感動したのか私には分らなかつた位です。ムッシュウはいま精一杯活躍させたばかりの、そして擦りむき傷から血のにぢんでゐるところの私の手足をさすつて見て、思はず獨り言のやうに云つてゐた。——「ああ、達者なものだ。本當に羨ましいものだ。このすんなりした筋肉はどうだらう。君の今つかまへた美しい仔馬の比ぢやない」

正直に云つて私はしばらく厭な氣持がしたのです。しかし、ムッシュウ・ジッドはそれ以來目に見えて、出發の日までを私に愛想よくしてくれました。——それから一週間。ジッド夫妻は驛馬車でコンスタンティーヌへ發つて行つた。私どもは砂の道を一哩も走つて、その頃そもそも起工してゐた鐵道の線路に添つて送つたものです。——さうさう、私の母に奥さんの遺して行つた形見が、いまもビスクラの家にある筈です。それは聖句の刷つてある綺麗な栞であつた。奥さんは私の母にかう云て渡しました。「ムッシュウにはお禮を云はなくてもいゝのですよ。ムッシュウはこの句がどうもお好きではなくて、本に挿んであげた時にもお怒りになつたのですから」

私もいつとはなしにその句を覺えてしまつた。それはペテロに與へた基督の言葉であつた。

「汝今こそ、自ら好む處を歩めども、老いたらん後は手を伸べん……手を伸べん……」

四

日が落ちかゝつてゐた。スタヂツムの觀衆を散らした筆法で、秋風がこの部屋でもマツサージの白い粉を敷布に散らしてゐた。と、マツサージ師は隣の窓の透き間に澤山の顏の押し合つてゐるのを見つけた。優勝者エルアフイを見たがる女子供だ。マツサージ師は亂暴に透き間を閉めてしまつた。それで萬事お終ひだつた。何故ならば此處の休息室の窓は運動家の神經を鎮めるために、すべて磨り硝子にしてあつたから。――

「三年經つてムツシユウ・ジツドはヌアルジエリイに來ました。私は實に奇妙な場所で出會つたのです。私はその頃佛蘭西語を資本にコンスタンテイーヌの町へ出て、新らしく出來た鐵道會社の案内係をしてゐました。やがてはニイスか、せめてマルセエユの洒落れたホテルの事務員になるのが私の望みでした。私は儲けた金をカフエではたいてゐた。線路の工夫や殖民地稼ぎの放浪者の巢窟で毎夜ごろごろしてゐた。私のムツシユウ・ジツドに出會つたのは實にさういふ場所であつた。それはスウダン人の出してゐる天幕張りのあやしげなカフエだつた。私は奥まつた部屋で、敷物から一尺とは高くなつてゐない縁臺のうへで阿片をふかしながら、亞剌比亞女の氣まぐれな踊を眺めてゐたのです。その踊はたゞの滑走のやうに退屈で、その女は私の情婦だつた。游んで行人に身體を賣るやうな女でした。――夜になつてしきりに東南風が吹いてゐた。と、不意に白人の紳士がステツキで帳を擧げて私達を覗きました。紳士は鋲を打つた旅行靴を鳴らして、天井とすれすれに侵入して來ました。「エルアフイ！エルアフイ！たうとう見つけたよ」――紳士はいきなり跼むと、私に心から懷しげな接吻をしたのです。

　私はこの遣り口にすつかり落着きました。ムツシユウ・ジツドはあの形のよい髭をとつてしまつて、そのかはり手入れもしない髪を無雜作に伸ばし、眼をぎらぎら光らせて、全く別人のやうであつた

「どうしたのです、ムツシユウ！」私はたしかに狼狽してゐました。「どうしてこんなところを搜し當てたんです」

「君の兩親に聞いたよ。それから鐵道會社で聞いた。君は――すつかり大人になつたね」

しかし情婦の眼の前で、そんな言ひ方は私にあまり有り難くなかつた。

「何でまた、ムツシユウ・アルジエリイへなんぞいらしつたのです。あなたの身體にはさはつた土地ぢやありませんか」

「生きかへつた場所が懐しかつたからさ」

「ぢやあ奥さんも御一所なんですね」

ムツシユウ・ジツドは一寸暗い顔をしました。

「いや、あれは今カンヌの里家で母親と暮してゐるよ」

「それは又どうされたのです！」その僅かな暗い顔をも見逃さずに、奥さんの便利な小使であつた私は急き込んで尋ねました。「あの美しい奥さんが——」

「僕の病氣が傳染つたのさ。あれは可哀想な女だよ。僕もこの一年、一所にカンヌで靜かに暮したのだ。ところが醫者は——ジロードといふ巴里の腕利きなのだが——妻の身體には絶對安靜が必要だといふし、僕の狀態にとつては本當のところ保養旅行がいゝのだが、と云ふのでね。——さう聞くと急に昔の土地へ來て見たくて堪らなくなつたのさ。今の季節の此の大陸は天國ではないかね！實を云ふと僕はビスクラからの歸りなんだ。君の郷里だが、ビスクラには失望したよ」

「どうしてゞす」

「鐵道人夫の募集で古馴染は皆散つてゐるぢやないか。アマタルもゐない。ブウバケもゐない。アリもゐない。そして殘つた奴は合憎マルセエユの人間のやうに拔け目がなくなつてゐる」そのマルセエユの人間に先づならうと云ふ私は、一寸出鼻を挫かれた形でした。「それから君の家を訪ねた。君の居所を教はつた。——さうさう、僕は此處の鐵道案内局へ行つて、一週間君をガイドとして雇ふ契約を結んで來たよ。——しかし、僕はまだ晩飯を濟ませちやゐない！」

そしてムツシユウ・ジツドは學生か士官のやうに私と竝んで寢床のうへに仰向けに寢ころびました。

金のある旅客と睨んだのであらう、私の情婦はいやに忍び寄るやうな亞剌比亞風の媚を見せて、卓の上の阿片の煙管を故意と下手に隱さうとしてゐた。白人相手の阿片代がどの位うまい儲けになるかは想像がつくでせう。すると、ムッシュウはその女への合圖は拔きにして、いきなりこの私に尋ねました。

「君はあいつを飲るね」

「いゝえ」と私は不意打ちにどぎまぎして嘘をついた。「この家が密賣をやるので、それでどの部屋にもあんな仕掛けがしてあるのですよ」

「どうだか！――ビスクラで訪ねた時にも、お母さんが僕をつかまへて何かくどくど云つて居られたぜ。こゝにはウイスキイもあるね。葉卷もあるね。君はすつかり實業俱樂部の紳士だね。どれ」とムッシュウは、私の腕をとつたのです。「なるほど、こんな疲れた腕は巴里の邸町にも轉がつてゐる。それにこの御大層な容れ物だ」ムッシュウは笑つて、少し滑稽に阿片の煙管を取り上げて見ました。「ひと瓶いくらに附くね。今ぢやあお父さんの仔馬が逃げたら君はどうするね」「それあ私だつて阿片ぐらゐやりますよ。亞剌比亞人は十五でも嫁を貰ひますからね」むつとして、私は云ひ返したのです。「亞剌比亞人だつて人並みな事はしたくなりますよ。あなた方に、亞剌比亞馬より強いなんて珍らしがられるのは、もう澤山でさあ！」

醉にまかせて、それに情婦の手前、云ひ過ぎたなと氣が付いた時には、ムッシュウ・ジッドは今の瞬間までの人懷しげな笑顔を消してゐた。そして意外な事に、まるで孤獨な人間でゝもあるかのやうにムッシュウは、私を柔かく視つめました。

「君はあれを覺えてゐたね。――さうだ。――はつきり覺えてゐてくれたかはりに間違つて覺えてゐた」少時して、ムッシュウが穩かに云つた。「それどころか！僕は君達の生きる力が好きなんだ。先祖代代の生活の力が好きなのだ。分るか

ね。エルアフイ」

「それならばムッシユウ。なぜあなただつて飲む酒や煙草が此處におくのを見て、いゝ顔をなさらないのですか」

「僕がかね！」靴よりも低く、仰向けに頭をクッションに埋めた儘、ムッシユウ・ジッドは肩をつぼめて見せました。「とんでもない！僕は食後の葡萄酒さへ飲むのを惜しみたいよ。僕はシラフでゐた方がよつぽど醉ひ心地になれるのだ。夜中でも僕は眼を開いたまゝで眠たいと思ふくらゐだよ。何故だらう。生命の價打を知つてゐるからさ。生きてゐるのが堪らなく珍らしいからさ。しかし、そいつを教はつたのは君の國でなんだよ！」

實際ムッシユウは先刻から一滴の酒も飲まないのに、まるで醉つたやうに若返つてゐた。

「君は亞剌比亞馬に喩へられたのは不平かね。どうしてだらう。僕に云はせれば君が三年前に見せたのは、あれは美しい動物力だ。あれこそ僕たちの先祖傳來の力だよ。文明はあれから溢れて來たのさ、君の今ひどく奉つてゐる文明だがね。――分るかい。僕は神のかはりにこいつを信じてゐるんだ。こいつを信じて快活になるのだ。そこで、三年前の君達はそのすばらしい標本ぢやなかつたのかね」

外では東南風（シッコ）の向きが變つたらしい。筵張り（ひしろは）の薄い壁がわれわれの寢床を微かに搖るのです。その早春の足音をじつと聽きとりながら、ムッシユウ・ジッドは私に出會つたといふ事がどうも氣に入つたらしく、一人でいつまでも大聲に喋り立てました。私は以前ビスクラのホテルの扉口に何十分も坐つて知つてゐた。ムッシユウの激しい獨り言は昔からの癖であつた。

「君は覺えてゐるだらう、エルアフイ。ビスクラで僕が散歩の時にあまり妻を連れて行かなかつた事を。――今でもこの通り、あの物優しい女の傍をそつと拔け出して來たよ。分つたらう。僕は猛烈に生きたいのだ。生きたいのだ。この大陸が好きなのだ。歐羅巴大陸にはもう何の魅力も感じないのだ。それあ奴らは禮服を着て生きた振りをしてゐるさ。奴らは數

舍へ行つてゐるさ。奴らは十分生きたつもりでゐる。ところが僕は奴らの傍へ行くと、もう生きてゐなくなるのさ」

輿に乗つて、ムッシュウは立ち上ると低い天井の下を無意味にあちこち動きました。ムッシュウはまた、私の女の置いて行つた銅盤の樂器を鳴らして見た。

「君はがつかりするだらうが、奴らの文明はもう固まつてゐるんだよ。それで自分のつくつた殼で今首を締めてゐるのさ。ところがどうだらう。やつと地中海を脱け出して昔の土地へ着いて見ると、こゝにも一人首を締めてゐる男がゐる」

ムッシュウは急に笑ひ出して、冗談を混ぜてくれた。「疲れて――氣取つて――勿體ない話だ。やめ給へ、やめ給へ。さもないと今夜のうちにガイドの契約は取り消して、さつさとカンヌへ歸つてしまふよ！」

　私は實のところこんな風の話がよく分りませんでした。よく分らなかつたばかりでなく、あまり氣にも留めなかつた。が、ムッシュウ・ジッドと新設の汽車旅行を一週間も愉快に續けた翌年に、私は本國のアルジェリイ駐屯軍に召集されたのです。私はトウグウルの分隊に編入されて奥地に入りました。この邊まで入ると沙漠はまつたく際限もなく擴がつて、移動する支隊と支隊との聯絡にはその具として傳令のほかは方法がなかつた。――そこで新兵の何よりも厭がるのはこの傳令卒見習になる事です。それは一番能のない、足の强い、馬の代りになり得る男が採集されるのです。ところが最初の體格試驗で、私は見事にその一人に選ばれてしまひました。私は大笑ひのうちに命令された。古參兵に小突かれたり、帽子のうしろに垂れてゐる日覆ひの布を引つ張られたりして揶揄はれた。酒保の女までが氣の利かない證據のやうに私の新らしい役目を笑ふのです。私はもう軍法會議も何もない。天幕のなかで小刀を振り廻はしてやらうかと思つた。亞剌比亞人は小刀を上手に使ひますからね。――その時にふと私の思ひ出したのは、ムッシュウ・ジッドの、あの汽車旅行の間にも厭になるほど聞かされた獨り言に近い說法であつた。私は古參兵や女や同僚に對する反抗心から、はじめてその說法に賴つて見ました。するとだんだん强く、だんだんはつきりとその說法の魅力を感じるやうになつた。ガアルダイアの沙漠區

域――ワルグラの區域――エル・ゴレアの區域――私はたつた一人で、帽子のうしろに附いた日覆ひの布を靡かせて、小さい砂煙を立てゝ、自分の足音を一日ぢう聞きとりながら、分隊分隊の休んでゐるオアシスからオアシスへ五時間も十時間も驅け通しました。ともすれば私は日の出と月の出とを、いつまでも起伏してゐる砂の丘の同じ方角に見ました。さういふ時に、私は地球が圓い、地球はいつまでも廻つてゐると教へてくれた土人學校の教科書を目のあたり、身をもつて復習したのです。さういふ時に私は人間が大變小さいといふ、補習學校の教科書を目のあたりしみじみと復習したのです。しかし、さういふ時に 私はムッシユウ・ジッドの話のとほり、祖先代代の人間の一番の强みだといふ、限りない動物力を胸一杯に感じて、これを呼吸して、砂漠のなかでこの上なく傲慢になつたものです。風で出來た砂の波の一つ一つに朝の日、晝の日、夕方の日のあたるのを見渡して、全身をもつて傲慢になつたものです。そしてこの前後七年間にわたる最も忠實な傳令兵としての賞狀と履歷書が、私のマルセエユへ出た時、巴里に來た時に、何よりも役に立ちました。――大戰では私は自動車隊に編入された。私は近東地方で土耳其軍と戰つた。私の今後の望みとしては、今の職業で發動機の秘術を知り盡して飛行士の免狀を取る事です。肉體の力をまづ相當のところまで永年使つてお見せした私が、もうそろそろ機械の力を司配しやうと思ひ立つても、ムッシユウ・ジッドはあながち厭な顏はなさるまいと思ひます。――私の妻はいまトロカデロ廣場の方で百貨店に務めてゐます。――今日の電報が行つたら喜ぶことでせう。――テユニス生れの混血兒ですが私は滿足してゐる。私どもには、どうも脾弱くて困るやつですが、もう五つになる娘があるのです。」

　引見を終へた時に、エルアフイは氣のない様子で枕元の新聞紙を取り上げて見た。今朝のアムステルダム新報だ。マラソンに就てのあらゆる豫想を一面拔きに載せてゐる朝刊であつた。しかしつい先刻の一時間以來、それはもう堪え難いほど古い反古になつてゐた。記者から貰つた薔薇を包むにしても、それは花よりも早く醜くなつてしまふであらう。……

「歸り途にル・タンの記者は、窓から運河の見える中央郵便局に立ち寄つて、この興味のある會見談の概要を本社へ送ると同時に、次の電報を打つた。

「マラソン優勝者エルアフイは競技の直後特に余を浴槽に引見し、既報の感想のほかに、文學者アンドレ・ジツド氏との意外なる友交に就き語れり。原稿發送」

もう六時であつた。巴里の本社まで無電で一時間かゝるとして――堤防の影とは反對に白く光りはじめた運河では、モーターを具へた引き船が窓枠から窓枠へゆつくり通り過ぎてゐた。

五

六日後。巴里。

「背徳者」「アフリカ紀行」の作者アンドレ・ジツドはこの年珍らしく巴里に落ち着いてゐた。彼はクリツシイの並木通りから一寸入つた裏町のアパルトマンの前で、豫め打ち合せて置いた時間にエルアフイの細君を待つてゐた。呼鈴を押して門番に言傳を頼んでから、四階住ひの女が降りて來る間を待つてゐたのである。

やがて女は鈍いろの石のために影の多い、その往來に降り立つた。仕立直しらしい服をつけた、皮膚が秋の葉のやうに黄色味を帶びて、眼が秋の實のやうに黑いエルアフイの細君は混血兒らしく控へ目にして、「先日は」といふ握手を交した。ジツドは俯いて細君に手を引かれた娘を見た。白髮を少しばかり見せたジツドは、子供には適しない愛想を云つて見た。なるほど話のとほり腺病質な、顏いろの惡い子供だと思つた。

ジツドがエルアフイの娘の病弱な事を知つたのはル・タンの記事からであつた。アムステルダム特派員の例の會見談もさうだし、また巴里の本社員がエルアフイの留守宅を訪問した記事にもその様子が書かれてあつて、ジツドはそれを朝の

食卓で讀んだのだ。

それから彼宛にエルアフイの細君から禮狀が屆いた。エルアフイの細君は何かジツドが良人に長距離競走の秘訣を教へたことでもあるかのやうに、新聞記事を讀み違へたものらしい。ジツドは苦笑したが、しかしこれは素朴な香りを不意に嗅いだ心地のする穏かな苦笑であつた。彼はすぐに返事を書いてこの半佛蘭西人の細君——テユニスの太陽や砂を共通の話題にのぼせ合ふことも出來る細君をお茶に招いた

ホメールとユイチエとマラルメと、この三人の集冊の殊に目立つ書齋で、ジツドはそのお茶の折にエルアフイの細君の口から娘のふだんの樣子を聞いたのだ。風邪をひき易くて、風邪をひくと長い。脣が赤くない。そして細君の口振りから察するとどうも時々微熱の出る形跡がある。——ジツドは胸の病では心肝に傷を刻まれたやうな過去を持つてゐた。頑丈な拳を卓の上に組んで、ジツドは科學者のやうに娘の容體を問ひ詰めた。混血兒の細君の醫藥にまつたく無智なのが彼はいぢらしくなつた。——ジツドはペンを取つて名刺に添へ書きした。

「差し出がましいやうですが、奥さん、これをお持ちになつて私の友人のジローといふ醫者の意見をお聞きになりませんか。この男ならば十分相談に乘つてくれます。——同じやうな目に逢つた者には、どうもお孃さんの樣子は他人事ではありませんから」

しかし、エルアフイの細君が躊躇してゐるのを見た時に、ジツトはそれでは自分も附き添つて行かうと約束した。並木の落葉がぢきに始まらうといふ巴里でそのやうな容體を放つて置く事をジツドは反對であつた。この年の氣候は夏のをはりの變化が激しくて、それに肝心のエルアフイはスカンヂナビアの體育聯盟に招聘されてゐて、まだ一ト月は留守だつたから。——

ジローの住居はモンソウ公園の裏でクリツシイからはタクシで五分もかゝらない。人によつては亜米利加じみてゐると

拡雜するかも知れないやうな、白塗の清潔なアパルトマンの三階にそれはあつた。が、藥瓶のあるべき棚に分厚な書物なぞを亂雜に積んで、借家人のジローは客種のいゝ開業醫といふよりはむしろ研究所の書記の生活に近かつた。この人が昔ジットの病、ジッド夫人の病の主治醫であつた。それから最も親しい精神上の仲間としてジッドの著作を揃へて持つてゐる友人だつた。ジローはまた知りびとの依賴で絶えず施療患者を抱へ込む方面の名人でもあり、それを又幾分か生活の義務と心得てゐる、といふ風な男であつた。

助手が娘の姓名容體を書き取つてゐる間に、リンドバアグ好みの新らしい秋服を着けた女が懐中白粉で頰をたゝきながらレントゲン寫眞室から出て行つた。これがジローを訪ねる患者の最初に受けねばならない試驗だつた。そしてこれが表向きの診察時間の最後まで居殘つてゐた患者であつた。——やつとこれでひと息つける。冗談も云へる。やれやれと云つた調子で、ジローは扉越しにジッドとエルアフイ母子とをそのレントゲン寫眞室に呼び入れた。

寫眞室では窓を殘らず黑い幕で覆うて、ジローは革の手袋と前掛とをいかめしく着けてゐた。ジローは、この部屋の器械や人間の奇妙な格好にもう脅えてゐる娘をあやさうとして、戸棚からアルバムを取り出した。

「そら、お孃さん、これが何處だか分りますか。——奥さん、これが誰だか分りますか

それは、白い日覆の頭布をかぶつて亞剌比亞士人の姿に裝つた、ジッドその人であつた。うしろは砂と太陽と蝎とのビスクラだつた。例の重患の折の紀念に撮つた寫眞なのである。台紙には署名に添へて、現在よりはずつと圭角のある十五年前のジッドの文字と文章とで、から記してあつた。

「余は此の大陸の熱と力とを愛す。余はこれによつて再生す。余はこれに據つて虛無に反抗す。——A・G」

アルバムの效き目のあつた間に電氣裝置の用意が出來た。下着一枚になつたエルアフイの娘を、ジローはレントゲン寫眞機の眞中にある乾板と刷り硝子板との間に立たせやうとした。が、娘はもう泣き顏に變つてしまつた。

「おやおや、可笑しいですね。ちつとも恐い事はありませんよ。——では奥さん、一寸その刷り硝子の間に手をお入れになつて下さいませんか——よろしい！」

助手がボタンを押すと、器械は蒸汽機關に似た音をたてた。電氣の兩極が小さい稻妻をこしらへた。その響きに打ち消されない用心をして、ジローは急行列車のなかの乘客のやうに聲を高めながら、娘の氣を引き立ててゐた。

「そら、お母さんの手が映つたでせう？ 覗いて御覽なさい。映つても、お母さんはちつとも痛いとは仰有らないでせう」

實際刷り硝子の上には、母親の手の骨が化石した蜘蛛といふ格好に、はつきり映つてゐた。指輪の影像がその骨の影像にとつては不似合ひに太くて、今にも音を立てゝ床に落ちさうであつた。

「今度はこの小父さんだ。君も、アンドレ、お附き合ひに手を出し給へ。——なるほど小父さんの手の方がずつと大きいですね。そしてずつと形が惡い。そら、伯父さんもちつとも痛くないつて笑つてゐるでせう」

心の柔かい氣さく者のジローは隧道(トンネル)に入つた列車の乘客のやうに、ますます聲を大きくした。

「さあ二人とも痛くないのならば、お孃さんにもきつと痛くないに違ひない。今度こそお孃さんの番だ。もう少し奥へ入つて。その黒い板の前に立つて

欄干の縁を擦り寄るやうにして、娘は横歩きにやつと乾板の前に立つた。娘は眼を精一杯に大きく見開き、當てもなく正面の扉を視つめてゐた。娘の膝には遊び事のをりの傷痕があり、腓下には目立たぬやうに母親の苦心した繼ぎがあつた。——電燈が消えた。と、小さい肋骨が何の謎も持たずに、單純に、明瞭にそこに映つてゐた。ジローはこの影像の肋骨に眼鏡を擦りつけんばかりにして、檢査しはじめた。

「ふむ、ふむ。——奥さん御覽下さい。これが肺腺といふところです。坐骨、肺部、これが横隔膜。この動いてゐるのが心臟です。おや、お孃さん、まだ恐がつてゐますね。心臟の動悸のうつり方でちやんと分りますよ」

圖星を刺されたといふ工合で、ジローの指差した處には赤黒い袋が奇妙な形に激しく揺れてゐた。

「なるほど、此處のところですね、御近所のお醫者さんが注意したといふのは。——そら、細かい網目のやうなものが少し黒くなつて、モヤモヤと散つてゐるでせう。——石灰化してゐる部分が多いから、このモヤモヤの皆が皆、いま悪くなつてゐる場所といふのではありません。ありませんが、しかし、これは滋養劑を第一に飲んで戴くとして、當分の間一週に一度づつお連れを願ひませうか。奥さんのお務めの終つた後で結構。私の表向きの診察時間の濟んだところでお待ちしますから。——よろしい！」

ジローの合圖で寫眞を二枚撮る音が起つた。しかし暗闇のなかでジッドは、娘のばかりではない、母親の、ジローの、助手の、そして自分自身の助骨を感じた。動いてゐる心臓を感じた。五つの動物性をありありと感じた。それらの助骨は寒帶の木のやうに枝をしつかり張つて少しづつでも伸びやうとして居り、心臓は日光の透らない深海の魚類のやうに忍耐強く喘いでゐた。

この瞬間、ジッドの生命は他の四つの生命に不思議な親しみを感じた。種族を感じた。「仲間」を感じた。

この小説家らしい想像が彼をしばらく無言にした。——彼がエルアフイに教へて、それゆゑにエルアフイが沙漠の中で全身をもつて傲慢になつたといふ同じ理由のために、ジッドはその何分かの間巴里のランブラン街の「共同」建物のなかで、すぐ横に立つてゐる混血兒の細君にも増して市民らしく謙讓になつてゐた。

電流のぼんやりした照り返しを受けて、彼は娘の骨を眼のあたり見せられたエルアフイの細君が恐怖のあまり十字を切るのを見かけた。しかしそれは聖母マリアへであつた。彼の守護神の——永遠回歸の動物力へではなかつた。

明るくなつた時に、ジローは急いで涙を拭いた痕のあるエルアフイの細君と、肩で息をしてやうやく耐えてゐた娘とを陽氣に見廻した。黒い幕を晴れ晴れしくあけると、ジローの三階の窓からはモンソウ公園の植木が新葉を返して、アンリ・ルッソオの繪のやうに素朴であつた。…………

（終）

新女

細田民樹

五年前、肺で斃れた田宮君の遺稿の一部が、『病中日記』と題され、倉地氏の編輯する求道的な雜誌に、今頃連載されて評判となつてゐる。

私は田宮君の死後、間もなく、細君の安枝さんからその遺稿を示され、随分いゝものと思つたので、これはぜひ出版するやう勸めると、もの靜かな安枝さんも、多少興奮の色を見せて、その交渉を私に依頼したものだつた。田宮君がひどい、窮乏の中で死んだことを、私は知つてゐたので、遺稿の出版で印税が入れば、安枝さんも助かるし、田宮君の兩親を精神的に喜ばせることも大きいと思ひ、相當盡力して見る熱意を自分で感じた。

私が田宮君を始めて見たのは、彼の死んだ前年だつた。塚本といふ青年作家が私の書齋に來て、時々田宮君の話をしてゐるうちに、いつか塚本君が、彼等夫妻を連

れて來たのであつた。ふたりは從兄妹夫婦で、顏もよく似てゐるし、どちらも無口で、性質もかなり共通なものを持つてゐるやうに見えた。實に純な夫婦だつた。その點が眼立つて氣持よかつた。しかし、同じやうに純粹なものを持ちながら、田宮君は情的で、細君の方はより多く理性的であることが、一度會つただけの私にも大概解つた。田宮君は同志社出身で、有島武郎氏のホイツトマンの講義を聞いた青年だつた。夫妻とも油繪も描く、詩も作る、小說も書くといふ風だつた。細君は長崎のミツシヨンスクールを出た關係で、英語ものの短篇を翻譯して『婦人の友』に投書したりしてゐた。田宮君が重い病床についてからは、細君が專ら看病に當り、田宮君の兩親が、工場で働いて息子の藥餌をかせいでゐた。お母さんは、もう、五十くらゐな年輩で女工をしてゐた。尤も、後段に書くやうな事情で、若い頃から一種の婦人勞働者ではあつたが――。

私は田宮君の遺稿に、それ〳〵感心したが、中でも病中の日記が優れてゐると思つた。この內容ならば、如何に田宮君が無名の青年でも、出版を引き受ける本屋は、探せさうな氣がした。細君にもそのことを言ふと、細君は田宮君によく似た美しい筆で、一々亡き夫の原稿を淸書して、その度に私のところに持つて來た。私が始めてこの夫妻に會つた時、細君の顏から受けた感じは、大して間違つてゐないことが、次第に解つて來た。最初細君の顏を見て、私は珍しく個性の優れた人だと思つた。澄んだ額、深い底の方に熱情を湛へた眼、抑揚の極めて尠いインデイフアレントな言葉つきにも、一本、筋の通つてゐる理性の閃きが感じられた。そして全體のポーズに、どこか生命力のある氣品と淸楚なものがあつた。氣品どか淸楚とか言へば、人は大抵血の氣のない女性を想像するだらうが、この人には、もつと熱から來る、さういふものがあつた。私は細君の顏を見た時、ヴアン・エツクの描いた或る女をすぐ思ひ出した。このクラシツクに、マネの好んで描く女を突き合はしたやうな印象だつた。遺稿の淸書で、時々安枝さんが來る度に、私はその人の行動が、その顏の印象を裏切つてゐないことを知つた。しかし、遺稿と言へば、田宮君の原稿について、私には不本意なことが一ツあつた。それ

はまだ彼の生前だつた。それほど病氣の進まない頃、私は彼のバイロンの譯詩の出版を頼まれて、或る出版社で話が纏まつた時、そこの社員で同じ詩集を譯してゐるものが表れ、社では私との結束を反古にして、人情的にそちらの原稿を採つた爲、田宮君のは出ないことになつてしまつた。自分で仕事をした最初の本の出版される日を、病床で樂しみにしてゐた田宮君にこの不結果を報告に行つた時の、私の氣持はちよつと辛かつた。勿論本になることが、彼の第一の喜びではあつたが、お蔭で、心待ちにしてゐた印税もふいになつたのだから――

以前にさういふ失敗があつたので、私は今度こそと思ひ――まして今度は飜譯と違ひ、彼自身の死を賭して書いた。而も優れたものだつたので――出版交渉については、かなり骨を折つたものだが、生憎圓本の流行時代になつた爲と、一つは私自身の微力から、遂に出版といふ段取りには至らなかつた。そのうちに、私も東京を離れて、房州の方に住むやうになり、安枝さんの身邊も色々に變移したので、私は田宮君の遺稿の一部を預つたまゝ、いつも氣になつてゐた。すると安枝さんが、夏の或る日房州に遊びに來て、或る關係から、介地氏の雜誌に連載してくれる約束が成つたと言つた。私もそのことを喜んで、原稿を渡したのであつた。そして、それが今頃、求道的なその雜誌で、評判になつてゐるのである。

田宮君の『病中日記』は、先年死刑せられた古田大次郎君の『死の懺悔』と好き一對をなすやうな、若い魂の苦しんだ記錄である。古田君が今の時代に生まれたアナアキストだとすれば、田宮君は今の時代に生まれた自然詩人であつた。ふたりともよく似た純な魂を持つて、年齢相應に、人生に眞劍な戰を挑んで斃れた、愛敬すべき一對であつた。毎月介地氏の雜誌を寄贈せられてゐるので、今机邊にあるものから、田宮君の日記中、安枝さんに關したことを、ほんの少し引いておかう。

一九二四年
九月二十五日

私も安枝も、ひとから可哀そうだと思はれるたちではないらしい。やはり自分でかはいさうになるやうなひとを、ひとも可哀そうがるらしい。

ときどき可哀そうがられて見たい。

安枝は、そらから花から生れたやうに美しい性質をもつてゐる。澄んだしなひやすい感情を。たゞ一つ不足なのは、あまりに母親（作者曰く、安枝さんの實母、田宮君の叔母）に執着し過ぎる。私が母に怒つてゐる時でも母にやさしくする。そんな時私は安枝から、母親ほども愛されてゐない氣がして、たまらない氣持ちになる。

親ひとり子ひとりの間だからしかたがないのだが。また、殘して來たものは、現在自分のものであるものよりも、可哀さうになるところもあるものだが。

夜の妻はほゝゑみながら指を組む私を見ては胸せつないか。

五月二十九日

昨夜安枝とのいさかひの氣持を、けさまた思ひ出した。頭がいたむ。靜かに考へれば何でもないことだが。愛の獨占の氣持が一つの原因だ。安枝のうちに完全を求むる焦燥が一つの原因だ。あまりによくないことだが、私はもつとも近いものは、ちつと見てゐられない。

氣持を抑制しなければ病氣はすすむばかりだ。だが、怒りがいつも靜かな思想を破つてしまふ。

この頃私の肉體は強く安枝の肉體にあこがれてゐる。だが愛慾を氾濫させることは死に近づくことだ。——（下略）

安枝の作つてくれたズックの詩のノートが、壁にくつきりかかつてゐる。何となく新鮮だ。まだひとびとが見てゐない詩だ。發見されない詩だ。

だが、いくら集めて見ても、いくら整理して見ても、私の詩を未知の友のもとにはこぶことは出來ない。たゞ巨大なジアーナリズムの怪物の爲に。

九月二十二日

昇ちやんに逢ひたくなつた。夏のあひだすこし不滿に思つてゐたが、やはり安枝の次には、もつとも私を知つてくれる愛してくれる一人だ。いちばん懷しい從弟だ。

實に善良でやはらかな感情を持つてゐる。たゞあまりに多血質だ。のぼせやすく浮足立つ危險がある。私が死んだら昇ちやんよ、ここを讀んでくれたまへ。

人の足音が戀しい。まるで心を慰める力のある音樂のやうだ。

ひまはりがいい天氣に燃えてゐる。好きな太陽に耻かしい顏を向けてゐる。

けだかい花よ、愛らしい花よ。元氣のいい花よ。

「柿もあんなに熟れたわ」と安枝がふすまをあけて私に見せる。

ときどき變なくせが起る。昨夜も安枝のはだにふれるまで私はこころ細くて眠れなかつた。おゝ情熱をふくんだまろらかな足、月いろの足、可愛い小さな丘。

消え入るやうな思慕と抱愛に胸も痛む。

書きあらはすこともむつかしいが、だいじなことを書かないでゐることもむつかしい。

日本から棄てたい言葉。

下女、女中、殿さま、勞働者風情、成金、獸性、獸的——けものに氣の毒だ。美人、××××、××××、慈善、博愛、人情、義理、邸宅、妾、情人、情婦、その他かぎりがない

だが監獄を刑務所にかへるなどと、どこの馬鹿が云ふのだ。監獄は監獄にしておくがいゝ。永久に——監獄制度の罪惡を知らせる爲に。

かういふ引用（クオウテイシヨン）は無理で、田宮君の幾パーセントを表すものでもないが、——殊にこれでは、彼の純な魂のいぶきが、一向でないわけだが——とにかく、田宮君は所謂人道主義から社會主義へ移らうとする時代の、最も悩ましい時に、その

悩みを眞劍に受け容れて呉れた人であつた。

　ところが、私の知人の出版屋が、雜誌に連載された田宮君の『病中日記』を愛讀してゐて、それを出版したいから、よろしく賴むと言ひに來た。私はその書肆とあまり懇意ではなかつたが、近頃益々不如意で、何かで當てようと焦つてゐるらしいので、うつかり話には乘れないと思ひ、そのうち安枝さんの意向を聞いておかうと返事した。しかし、その後再三同じことを依賴して來るので、大體印税の話なども取り纏め、私は安枝さんに一度ゆつくり合ひたいと思つた。といふのが、田宮君の遺稿には、今評判になつてゐる『病中日記』の他に、いゝ詩稿のあるのを知つてゐたので、安枝さんに相談して、それをも本に入れたいと思つたからだ。

　しかし、安枝さんの住所は、いつも轉々としてゐて、どこにゐるか解らないことがよくあつた。田宮君が亡くなつてから、暫く九州の故郷へ歸つてゐたが、間もなく出て來て『新しき村』の出版部に入り、そこで被搾取者の迫害をつぶさに嘗めてから、遂に當時問題になつた出版爭議を起した。そしてそこを追はれると、生活の爲に大衆作家E・Sの筆耕をしたり、家庭百科全書の下請負の原稿を書いたり、童話の飜案などしながら、みづから進んで組合運動に從事してゐた。安枝さんがいつからか、年下の天鹽といふ出版勞働組合の猛烈な鬪士と、同棲してゐるといふ噂を、私達の同志の者から聞いたが、たまに安枝さんが私の家に來ても、私はその話に觸れなかつたし、安枝さんも必要のないことは言はなかつた。それに私も色々忙しいので、生憎不在だつたり、他に客があつたりして、私は田宮君が亡くなつてから、落ちついて安枝さんと話したことは殆んどなかつた。で、安枝さんがたまに訪ねてくれても、私よりも妻をあてに來るといふ風だつた。安枝さんは、私達夫婦の溝畑といふ男の友人を通して、妻を理解してゐたので、妻と安枝さんは、どちらも大變氣が合ふらしかつた。安枝さんの歸つたあと、私は妻の口から、その消息を聞く場合が多かつた。

　そんなことで、この夏安枝さんが、天鹽君の子供を分娩した時も、どこでどうお産をしたのだか、私達にはちよつと解

らなかつた。安枝さんと同じやうに、或る消費組合の仕事をしてゐる、コンミユニストの女流作家T・Hが來て、「安枝さんお産しましたわ。」と聞かされた時、始めてその住所も聞いたわけだつた。T・Hは安枝さんのお産に、何日か手傳ひに行つてゐた。

「少し早産で、赤ちやんに着せるものがないんですつて。まだタオルにくるんであるものですから、Mさんの奥さん、何か赤ちやんのものを持つていらしつたんですけど、あそこにも、もう赤ちやんのものは殆んどないんですつて。」

ですつてにりのこもつた、男性的な語調の癖のあるT・Hから、さう聞いたのは、安枝さんがお産をして大分經つてからだつた。で、妻は四年前の赤坊の着物など、行李の底から探し出して、間もなく見舞に出かけたが、なか／＼家が解らず、やつと探し當てて行つて見ると、安枝さんの赤坊はもう死んでゐた。

「赤ちやん風邪を引いて、熱が出たのを、氷で冷したんですつて。」

妻もがつかりしたやうに、歸つて言つた。

「氷で。」

「えゝ、それがいけなかつたのよ。私安枝さんからうかゞつて、すぐさう思つたんですけど、安枝さんも、それに氣付いてらつしやるやうでしたから、默つてましたわ。いくら熱があつても、産まれたばかりの赤ちんやんに、氷は慘酷だわ。」

「産む氣ぢやなかつたんだらう。」

「Mの奥さんに聞いんですけどね、安枝さんお身體もあまり健康ぢやないし、流産なさらうとして、いろ／＼苦心なすつたらしいの。しかし、お金が出來なくて、たうたうお産なすつたのよ。」

「天鹽君ゐた。どんな人。」

「さうね。非常に強い感じの人よ。どこか金屬的な人。私が行つた時、安枝さん、いつになく惡い顏をしてらしつたわ。

きつと天瞳さんを私が始めて見たからでせう。それに私が赤ちやんのものを持つて行つたのに、もう亡くなつてゐて、悲しい、濟まないやうな氣持がなすつたのよ。私も氣の毒で、ちよつと接穗(つぎほ)のない氣持で、妙に白けたいやうな心持になつてしまつたわ。そこへ天瞳さんが、お菓子を買つてらしつてね。ナツプの若い女子大學の方が來たりして、やつと安枝さんの氣持がほぐれて來たの。」

「安枝さんの産後はいゝの。」

「いゝんですつて。安枝さんのお話では、天瞳さんも産まれるまでは、流産のことばかり言つてらしつたさうですけど、産まれると、無理な都合をして、赤ちやんの着物を買つて來たり、隨分喜んで、お父さんらしい氣持になりなすつたさうですわ。こんなことになるなら、あなたのお家に上つて、お産の準備などしとけばよかつたつて、安枝さん隨分殘念さうでしたわ。赤ちやんが亡くなつてから、運動に對する氣持も、一層積極的におなりになつたやうよ。同志の天瞳さんに對する考へ方も、變つて來たんですつて。赤ちやんの笑顏をした寫生畫を、粗末な机の上に飾つて、お線香とお花が立ててあつたわ。しかし、まア、ひどい家よ。二軒長屋のトタン張りで、壁つていふものが全然ない家なの。この暑さに、頭の上からトタンが照りつけるでせう。あれぢやア、赤ちやんだつてお産婦だつて、たまらないわ。」

私も妻の話を聞き、安枝さんがそんなところで、お産さへしなければならない事實について、色々考へさせられていつもの腹が立つて來た。そして私は、死んだ赤ちやんの寫生畫の話から、田宮君の葬式のことを思ひ出した。私は或る事情で、時間に遲れ、雜司ケ谷の田宮君の家へ駈けつけた時は、もう葬式の出た後だつた。生垣のさきに、安枝さんが眼を泣き腫らして靜かに立つたまゝ、小さな從妹と、菊の花を折つてゐるのが見えた。それは實に澄みきつた神々しいやうなポーズだつた。私は生垣を這入つて、安枝さんにお悔みの頭を下げた。安枝さんも默つて頭を下げたきりだつた。田宮君のお母さんと弟さんが、緣側に端坐して、私に挨拶をした。私はその時始めてお母さんの、しつかりした樅のやうな顏を見

た。田宮君の家はみんな肉親同志だつた。佛壇の前には、田宮君の從兄のとつた彼の死面、遺稿、床や鴨居には、水彩や油繪の彼の遺作がかけてあつた。これほどいゝ素質と純な魂を持ちながら、遂に世の中に認められなかつた彼の作品の前に、私は頭を下げた。肉親の人達が靜かに故人の話を私にし、お互にしたが、この一家の人達が、如何に靜かで暖かい、親愛の情ある人々であるか、私は田宮君のやうな人の生まれたことも、理由があると思つた。貧しいどん底の生活ぶりの中で、私はかういふなごやかな感じを見たことがなかつた。今も忘れないでゐるシインの一つである。

安枝さんは、しかし、この夏さういふお産をした家からも、もはや何度か、引越してゐるらしかつた。彼女も同棲してゐる天鹽君も、經濟的にひどく貧しいのが、引越しの一原因に違ひなかつたが、一つには天鹽君が猛烈な實行運動家の爲に、官憲の迫害も相當あつて、一個所に安住出來ないのであつた。私は例の知人の出版屋が、田宮君の『病中日記』のことを再三頼んで來るので、ちよつと安枝さんに合ふ必要を感じたが、どうせあの人達のことだから、變名でもして、郊外の一隅に隱れるやうに住んでゐようから、ちよつと住所も探しにくいと思つた。安枝さんは、ずつと無産者消費組合の仕事をしてゐる筈なので、組合について聞けば解るかも知れなかつたが、どこの組合で働いてゐるかも、今はよく解らなかつた。私の近所に、安枝さんの間接な知人があつたので、家のものに手紙を持たせて、彼女の住所をそこへ訊きにやると、その人は親切に教へてくれたが、「この間までは、この住所にゐましたが、また引越したかも知れません。銀座T堂に安枝さんの友人G君が勤めてゐますから、念の爲そちへ電話でお聞き下さい。」と附記した地圖を書いてくれた。

が、その地圖で見ると、ひどく不便な所になつてゐるので、もしそこへ訪ねて、引越したあとでは困ると思ひ、私は新宿に出て、銀座T堂に電話をかけた。果して安枝さんはまた引越してゐた。G君は、

「今度は阿佐ケ谷の停車場附近らしいのですが、この間一度來るには來ましたがね、場所をよく知らないんです。安枝さんは今××産業組合に勤めてゐますから、そちらで訊いて下さい。」

G君は××産業組合の電話番號を調べてくれた。私はすぐにその組合へかけたが、半官的なこの組合では、土曜日ははんどんだつたので、もう安枝さんが歸つたあとだつた。しかし、そこでやつと住所を確かめ、私は阿佐ケ谷に行つて、その番地を探した。私の妻も、この夏お産の見舞に行つて、隨分探し廻つたといふので、私もまたそんな目にあふことを覺悟で、やつと番地を探し當てると、そこは以外にも、私達の消費組合支部のある所だつた。支部の所在なら私はよく知つてゐたのだが、安枝さんの番地に拘つて、私は支部の存在に氣づかなかつた。

私がつか〳〵と這入つて行くと、顏を知らない青年が、砂糖をハカリに懸けてゐた。

「田宮安枝さんは、ここにゐるんですか。」

小倉服の青年は、私をちよつとよく見て、

「あなたは。」と訊いた。すぐ正面の臺所で、夕飯の支度らしく、同じやうな勞働服を着て、ひちりんに火を起してゐた今一人の青年も、ひよいと首を捻ぢて、うろんな眼を光らせながら、私の方を見た。私が名前を言ふと、青年達は始めて安心したやうに、

「ここにゐることになつてをりますが、實はこの先の角を左に這入り、川がありますから、橋をお渡りになると、二軒目の家です。田邊といふ家に同居して、杉村と名のつてゐます。小さな名刺が出てゐますから、それをごらん下さい。」

私はさつき探した時、その橋の向うの小さな長屋を家の恰好から言つて、この邊に住みさうだと見當をつけ、ぐる〳〵廻つて見たので、青年の敎へてくれた家は、すぐあたりがついた。案の定、變名してゐるのでは、私がさつきひとり廻つてもわからない筈だつた。

しかし、橋から二軒目に田邊といふ家はなかつた。私はまた迷ひ始めた。建前をしかけた家の間をくゞつたり、何か一尺幅しかない露地をぬけたり、色々探したが解らなかつた。が、私はさつきこの長屋を見てゐたので、組合の青年が敎へ

た時、直覺的に往來にそつて二軒目と早呑み込みをしたのだ。實は狹いどぶ川にそつて三軒目の家だつた。折角探し當てたが、その家は生憎留守らしく、おもてが眞暗だつた。私はちよつと殘念な氣がして、裏に廻つて見ると、裏には明るく灯がついて、臺所の音がしてゐたので、またおもてに廻つて、案内を乞ふと、三十ぐらゐな鼻ひげの濃い、痩せた男が出て來た。私は天鹽君の風采は聞いてゐたので、この男が安枝さんの同棲者でないことは解つた。男が私の言葉を取りついで、ふすまの向うに行くと、安枝さんの聲がして、割烹前掛けで手をふきながら、足早に安枝さんが出て來た。そしてさつと行儀よく、暗い玄關に手をついて挨拶した。

「少しお話があつてお訪ねしたのですが、お差支へなかつたら、どこかそのへんで、御飯でも食べながら……。」

「さうですか。ちよつとお上り下さいまし。」

「いや、いつか、またお邪魔しますから。」

私は丁度夕食時分、狹い家に共同生活をしてゐる人に、迷惑をかけたくなかつた。

「ぢやア、おともいたします。ちよつとお待ち下さい。」

安枝さんは、ものの二分も待たないうちに、紫色の毛のコートを着て、玄關に出た。と、そのあとから、背の高い、かつぷくのいゝ青年が、紺絣の羽織姿でのぞいた。

「あの……天鹽です。」

安枝さんが、はつきりした靜かな聲で言ふと、

「天鹽です。いつもお世話になります。」

「あゝ、お歸りだつたんですか。御健康は？」

私は天鹽君が、この頃或る事件で、K署に百パアセントの拘留を食つてゐたことを聞いてゐたので、初對面の挨拶の代

り、さう言つて訊いた。

「檢束が三日で、あと二十九日ゐました。」

近頃出て來たらしく、顏色が少し窶れてゐるやうに見えた。聰明な美しい顏の青年で、言葉にも力があつた。

「今度はビラだつたのですか。」

「いえ、ビラではありません。」

玄關の次の間の机の前に、さつきの男が坐つて長い煙管を持つてゐた。

「お世話になつてゐる川邊さんです。」

安枝さんは、私にその人を紹介し、私をも紹介した。どこか、私達と縁の遠くない仕事をしてゐる人のやうだつた。

私は天鹽君と僅か二言三言話して、安枝さんと一緒に外へ出た。安枝さんは、土間でコートのボタンを嵌めながら、小さな聲で天鹽君に何か言つてゐた。その言葉の中に、ちよつと同志の女の名前が出た。私は何か差支へがあるのではないかと思つて、

「丁度御飯時分、連れ出して、惡いのぢやないですか。」

「いえ、もう支度は濟んだのですから、かまひませんわ。」

「ぢやア、ちよつと借りて行きます。檢束はしませんから。」と、私は天鹽君の顏を見て笑つた。

「いや。」

天鹽君も笑ひながら、安枝さんの小聲で言ふことに、明るい、いゝ返事をしてゐた。

私は安枝さんと珍しく肩を並べて、停車場の方へ歩きながら、彼女が天鹽君にちよつと話してゐた樣子を思ひ、

「何か御用だつたのでせう。」と訊いた。

「いえ、今夜支部の例會があるものですから。」
「何時からです。」
「七時からです。でも、君津さんの奥さんに賴んでくれるやう言つておきましたから、あとで決議の時に行つて見ますわ。」
「いゝのですか。」
「えゝ、今夜はそれでもいゝのです。」
「天願君、いつ出ていらしつたのです。」
「一週間前ですわ。警察（作者曰く留置場のこと）の方が、ずつと疲れるらしくて、少し弱つて歸つたやうです。住所があやふやだと、危がつてなかなか歸さないものですから、おもてむき、消費組合にゐることになつてますの。」
「今度の事件は何だつたのです。」
「黨支部に色々看板はかゝつてゐながら、いつ官憲が來ても、何のこともないでせう。だからどこかに連絡があると睨んでゐたのです。その時、天願があちらの支部へのぞいたものですから。」
安枝さんは以前から、美しい中音だつたが、田宮君時代よりも、その聲は少し高くなつてゐた。運動と共に、聲まで少し變つて來た。しかし、相變らず靜かな、はつきりした口調だつた。
「しかし、天願君は出版（作者曰く出版勞働組合員）でせう。あちらの政治運動に關係があるのですか。さういふ噂ですね。」
私は或る批判を胸に置きながら言つた。
「さア……、ないと思ひますわ。でも、自分の運動のことは何も話しませんので、私よく解りませんけど。」

「この頃、あなた御健康は。」

「今の勤め、半官的ですから、わりに楽にやつてをりますの。でも、女は損ですわ。この頃日が短かうございますから、帰つたらその服装で、夜の支度をするやうですの。」

「さうですね。食事の世話なんか入らないアパアトが、やはりいゝんですね。」

「えゝ、この頃、ふたりで、しみ〴〵必要上、アパアトへ這入らうと話すのですが、どうにもお金が許さないものですから。」

安枝さんが、女は損と言つた意味は無論、職業を持つ男と女を比べての言葉だつた。

私は歩きながら、田宮君の『病中日記』出版のことを話した。

「今度はうまく行くかと思ふのです。倉地君の雑誌で評判にもなつてゐますし。」

「さうですか、それは有難うございます。一時S堂から、あれを出すといふ話だつたのですけれど、何だかぐづ〴〵してるやうですから。」

「S堂なら、尚いゝのですがね。その話が確かなれば。」

「でも、田宮の日記の頃とは、時代が移つてますから、それでS堂も考へ込んでるのでせう。」

「さうかも知れませんね。しかし、あの日記を本當に讀めば、そんな筈はないんですがね。」

「倉地さんも、あれを掲載し始める頃は、多少の稿料も出るといふお話でしたの。さうしたら、田宮の墓を立てて、あれの両親を安心させたいと思つたのですけど、あの雑誌、今の時代ぢやア、やはり不景氣でせうね。」

「あまり賣れないでせう。倉地君もだん〴〵暗いことを書いてますよ。一時と違つて随分貧乏もしてるやうです。そして貧乏のどん底に落ちる日を待つてるやうです。あの人として突き詰めてゐるやうですね。」

私は倉地氏の最近の論文の話をして、それに私の意見を加へた。

「同居してらつしやる田邊といふ人は。」

「あの『農民』の同人で、塚本さん今野さんなどと、『新しき村』を最初に開墾した詩人ですわ。共同生活もいろ〳〵して見ましたが、なか〳〵うまく行かないものですわ。まア、今度はうまく行つてる方です。田邊さんの奥さんが、解つた人なものですから。」

「村と言へば、あの時は騒動でしたね。あなたなんか尖鋭だつたのでせう。」

「えゝ、工場で働かない村の同人には、文學青年が多いものですから、始めなか〳〵爭議を理解しなかつたのです。工場側のものが、帳簿など占領して、これを専門家に見せたものですから、それで始めて同人にも利害が解つて、あんなストライキが出來たんですの。私は後で追ひ出されましたけど。」

郊外には曖昧なカフエーは隨分殖えたが、ちよつと落ちついて、飯を食べるやうな家はないので、私は安枝さんを新宿まで御苦勞させようかと思つた。しかし、今夜支部の委員會を控へてゐる彼女に、多くの無駄な時間を潰させてはならなかつた。で、私は停車場附近に、仕出屋をかねたやうな家をみつけた。そこもへんな女のゐる家とは解つてゐたが、他に適當な家もなし、また今の安枝さんが、そんなことに頓着しないことが解つてゐたので。

まるに御料理と染めぬいた茶色の暖簾の、あやしげな二階家の前に來ると、

「いやな家ですね、かまひませんか。」と私が言つた。

「いゝ、私はちつとも。」

で、土間に這入ると、くしやくしやツとした顔を眞白く塗つた、狐に似た女が出て來て、女連れである私を、ちよつと意外なやうに見ながら、そして同性の安枝さんに對する多少の反感を表しながら、しかし客は客なので、二階に案内した。おもて通りにのぞんだ部屋に、座蒲團をおかうとするので、私は襖の開いてゐる三間ばかり奧の部屋を見ながら、

「少し話しがあるのだから、奧の部屋にしてくれたまへ。」

「さうですか。」

女はちよつと當惑さうな顔で、奧の部屋に座蒲團を持つて行つた。淫賣宿といふほどの感じもなかつたが、風儀の惡いこの附近では、ここも或ひは賣淫に應ずる家かも知れなかつた。女の顔がさうだつた。女は亂暴に座蒲團をおいた。

「夏はお産でお困りでしたね。始めから、、、、、、、、ぢやなかつたのですか。」

私は電燈の下に、暫くぶりに安枝さんの顔をよく見た。

「えゝ、そのつもりでした。少し惜しい氣もしましたが、天靈もそれを言ひますし、若い人達も運動の邪魔にして、、、、まるで贊成しませんし……事實子供が出來ては、この上母の仕事が殖えて、私、家庭と職業と母と運動と、四重に苦しまなきやなりませんから、それではやつぱり運動も出來なくなりますし……、惜しいとは思つたのですけど、、、、、、諦めました……。」

安枝さんは靜かな笑顔をした。

「、、、、、、、、ですね。」

「津山ドクトルにお願ひしようと思つたんですが、津山さんさういふことで評判になつて、M新聞に書き立てられた時でしたから、官憲もドクトルを睨んでましたし、遠慮しましたの。」

津山ドクトルは、無産階級運動に關係のある醫者で、勞働者の病婦や貧困で子供の養育など出來ないものに、さういふ

便宜を與へるといふ時は私も聞いてゐた。

「ですから、津山さんの知つた方から、その××を借りた時も、津山のところへは行つてくれるなといふお話でした。しかし、家で、、、、、してから、急に恐ろしくなりましてね、却て失敗してよかつたと、ほッとしました。やはり私子供が惜しかつたのですね。」

「さういふ場合、これまでの婦人にある罪といふやうな感じはしないものですか。」

「えゝ、そこは私、もう通りぬけてゐると思ひますの。」と、安枝さんは、私が何か試すやうに訊いたと思つたのか、緊に力を入れてさう言つた。「唯、折角なものを、惜しいといふ氣持だけでした。」

「で恐くなつたものですから、安全を期して、それからK病院にかゝりましたの。でも、やつぱり、今子供があつては、實際飯が食へなくなりますし、今こそ運動の方も忙しくて、育兒などに時間を割くことを許さないものですから、惜しくても、やつぱり××××××ならないと思ひましてね。一つはそれを證明させる下心で、K病院にかゝつたのですけど、K病院では、少し骨盤狹窄だから、早産の必要はあるが、流産の必要はないと言つて、どうしても認めてくれないんです。貧困證明書も出したのですが、それだけでは駄目です。あと二つの證明書がないと、やつてくれないものですから、困つてしまひました。よく新聞に廣告の出る小山丁四郎、あそこの調節所へも行きましたが、なか／＼高いことを言ふので、とても私達には、そのお金が出來ないものですから。」

「あんなところは、ぼるものでせうね。」

「えゝ、でも、S夫人、あの方ブルヂョアですけど、Y病院にかゝたら、三百五十圓も取つたさうですわ。」

「へえ。無産者には、姙娠の調節さへ許されないんですね。お産の時、お郷里（くに）のお母さん、おいでになつたさうですね。」

「まゐりました。母は理性の強い人ですから、そんなこと、とやかく申しませんでしたけれど、早産だから育たないかも

知れない。その時は氣を落さないやうに――。それくらゐのことを言つて母は間もなく歸つて行きました。」

「しかし、折角產まれて來たんだから、惜しいことをしましたね。赤ちやん風邪を引いて亡くなつたのですつて？」

「えゝ、丁度八月の始めで、トタン屋根が燒けるやうに暑いものですから、暑いからいゝだらうつて、若い連中が來ると、すぐに障子を開けつちまふのです。それで風邪を引いたんですの。逆子で一晝夜も苦しんで、私何度も强心劑をやられましたので、身體も頭もぐつたりして、一々若い人達に注意することも出來ませんでした。かはいゝ子だなんて亂暴に抱いたりしたんですつて。偶然近所に、支那で開業してゐた產婆がありましてね、それが私達を多少理解して、親切にしてくれたんですけど、赤坊に熱が出ると、近所の女醫にかけましたの。女醫が氷で冷せと言つたんです。私雜誌などで讀んでゐましたから、赤坊に氷はどうかと思つたのですけど、まア醫者のすることだから、さういふ場合もあるのかと思つてました。」

「產婆も默つてゐたのですか。」

「えゝ、やはり女醫を信賴してたやうです。それにＫ病院でも產婆でも、逆子のことに氣がつかなかつたのです。醫者もうつかり信賴出來ませんわ。赤坊は全く冷し殺したやうなものでした。天燕もあとで、冷し殺したと言つて、憂鬱になつてゐました。隨分長い間苦しんで呻つて亡くなりました。私並んで寢てゐましたけど、死んでからは、赤坊の顏を向うに向けて、それきり見ませんでした。運動の方の若い男の人達で、悔みを言つてくれる人はひとりもなく、みんな、死んでよかつたと言ふものですから、その時は妙に腹が立ちましたわ。亡くなつて三ケ月くらゐ、子供のことが胸に來て、拘はつて困りました。しかし、働いてゐると、いつか忘れますわ。」

　そんな話をしてゐる間に、さつきの亂髮な女は、何度か上下して、廊下では鼻歌をうたひながら料理と酒を持つて來た。そして氣を利かしたつもりで、そこの襖なんかぴつしやりしめた。

「こんなところへ、女の方なんか連れて來ちやァ氣が利かないね。その代り、今度はいゝ人を連れて來て上げるよ。」

私は杯を持ちながら、その女にさう言つた。安枝さんも笑つた。

「あら、そんなことございませんよ。この近所には料理屋らしいものが他にありませんので、よく御一緒にお見えになりますわ。」

女は茨城辯でお愛想を言つた。

私は二三年前、偶然中野のカフエーに行くと、そこで安枝さんと、コンミユニスト作家のT・H、他に二三人の婦人運動者と會ひ、暫くぶりに會つた安枝さんに、コクテイルをすゝめたことがあつた。その時、T・Hが安枝さんは酒を飲むと言つたので、長い交際でありながら私は始めて、おとなしい安枝さんに、酒が飲めることを知つた。その頃安枝さんは、おかつぱのやうな斷髪にしてた。しかし、相變らず、そのカフエーでも安枝さんは無口で、きちんとしてゐた

私はその時のことを思ひ出し、

「少しはいいのでせう。僕もこの頃、殆んどやらないのですが。」と、杯をとつて安枝さんにお酌をした。

安枝さんは杯をうけながら、

「郷里の父が炭坑で働いてゐましたので、酒事があると、乎傳はされたものですから、その頃どうかすると、一二合も飲んだことがありました。今は二三杯しか頂けませんが、お酒の味は好きです。」

「髮をおのばしになつたやうですね。」

私は川宮君時代から見ると、眼じりに少し皺の出來た安枝さんを、もう二十六七になる筈だと思つた。その頃から、彼女が化粧をしてゐるといふ感じは、一度も受けたことがなかつたが、やはり今もさうだつた。

「えゝ、若い時は斷髮もよございますけど、私のやうになりますと、斷髮では求職に都合が惡くなりますわ。」

「赤ちやんが亡くなつてから、大分お氣持もお變りになつたでせう。」

「いろ／＼私にも不行屆きなところはありましたけど、やはり何と言つても、金が無くて殺したやうなものですから、もつと私達無産婦人に、都合のいい日が來るやう、運動しませんと……。」

安枝さんは、赤坊の死を靜かに顧みるやうに、獨言の口調だつた。

「今度の職業は大分お續きになるやうですね。」

「えゝ、丁度一年續きます。始めは走り使ひのやうなことでしたけど、今はあそこから出てゐる雜誌編輯の下ツ端をしてます。全國四百萬の會員を持つてる産業組合ですが、編輯には、その道の熟練な人がゐますので、私なんかわりに樂です。あそこの仕事は全國町村の産業組合に對する補助機關と宣傳ですの。女はこれまで使はなかつたのですけど、私はわりに男の人達とも自由に交際つてますし、さういふ問題も起しませんから、信用してくれてゐるやうです。でなかつたら官僚的なあんな所で、長持ちはしません。そして月給も普通です。四十五圓、それで天鹽とふたりで生活して、運動の方の費用も辨じるのですから、どうしても今のやうに、人と共同生活でもしなければやつて行けません。」

「天鹽君も、あゝ度々やられては、就職も困難でせうね。」

「折角職がみつかつたと思ふと、すぐ捕まるものですから、だん／＼難かしくなりますわ。三・一五（作者曰く、一九二八年三月十五日の共産黨大檢擧事件）の前も、××局でわりに金になる仕事をみつけたのですけど、あゝして、捕まつて、市ケ谷に投り込まれたものですから。」

「天鹽君お幾つですか。運動には隨分勇敢な人ですつてね。」

「二十四です。私より四ツ年下ですわ。私と同じやうに口不調法ですけど、運動には、かなり大膽です。でも、藝術的な素質の方が、あるのぢやないかと思ふのですけど、當人はそちらをわざと避けてるやうですから、私も何も申しませんの。

天鹽は田宮の友達の弟で、田宮の死後、天鹽の家では、私と兄の方と一緒にしたかつたやうでした。私も兄の方が好きでしたが、何分牧師なものですから、考へが違ひましてね。當時弟の方は、もう勞働組合に這入つて、運動を始めてましてね、郷里へ歸つてゐた私に、その方の本を送つて色々讀ませてくれましたやうな關係から、一緒になりましたけど、でも年上の私では、時に氣の毒に思ふことがございます。誰か若いいゝ女がみつかつたら、私別れてやりたいと思つてますの。天鹽も今出版（作者曰く出版勞働組合）の役員をしてますので、運動が忙しく、いつも家庭なんか邪魔だと言つてますわ。私も同感ですから、もつと生活形式を更へたいのですけど、いつも貧乏で、月給をもらつても、右から左へ移る間もなく、右から右へ消えてしまふので、どうすることも出來ません。天鹽が若いものですから、始めは愛情の方へ拘はつて、互にちよつと憂鬱でしたけど、あれもずん／＼運動へ進みますし、私もさうなので、いつか互に自分の元氣を取り戻して來ましたから、もう大丈夫ですの。私達にとつて戀愛なんか、どう考へても第二義ですから、あれもさつぱりしてますし、私も拘泥してませんの。でも、若い人達が始終出入りして、私の役目は、せい／＼みんなに料理をして食べさせたり、洗濯ものをしてやつたり、みんなのスイートな話には、もう關係ないやうに、平氣でそんなおばさん役をさせますので、かなひませんわ。尤も、私が世話好きなせゐもありますが、若い人達は私のところを、クラブのやうに思つてるんですわ……。」と安枝さんは、自然な眩い笑ひを浮かべた。「私が序に序にと、洗濯なんかしてやるものですから、消費組合の人まで、平氣で持つて來たりするんです。私もさう／＼はかなひませんので、この間も、私だつて新時代なんだから、資本の蓄積に、本の一册も讀まなきやならないつて、洗濯ものを斷つてやりましたの。」

　安枝さんは更ににつこりして、ユモラスな笑ひを漏らした。

「ハツハツ、そりやアさうですとも。若い者はかまひませんからね。忙しいあなたを苛めて……。」

「天鹽君つてば、あの溝畑ですね、田宮君の亡くなつたあと、溝畑はあなたと結婚したかつたのですが。」

溝畑は私の親友で、今或る教育事業に從事してゐる詩人だが、私の發見！で安枝さんを知つた彼は、幾度か安枝さんに會つて、直接結婚の話を進めたものだつた。溝畑はその藝術的な素質からも、人間の深さ、よさからも私が肉親の兄弟のやうに敬愛してゐる友人だ。それが四十を過ぎて、安枝さんに結婚の話を持ち出したのだから、彼が如何に安枝さんのよさを見たかが解る。しかし、その時、溝畑はよく知らなかつたが、安枝さんは天鹽君と、深く共鳴してゐたのであつた。それに溝畑の思想的な立場は、安枝さんと大分違つてゐた。で、ふたりは會つて色々話したり論じたりしながら、結局安枝さんが、溝畑に同感することが出來なかつた。その破綻は、私がまだ房州にゐた頃で、當時このいきさつを溝畑から委しく聞いたものだつた。私の妻は、溝畑が鎌倉のE寺に、六年間修業中、彼の發見！して來た女だつた。溝畑は四十を夙くに過ぎて、まだ一度も結婚したことがなく、彼が結婚の意志を持つた女は、あとにもさきにも、この安枝さんと私の妻の二人であつたらう。それほど彼は、安枝さんを認めたのであつた。

「溝畑さんには、濟まなかつたと思ひますわ。私が輕率だつたのです。年の若い天鹽は健康ですし、私は身體が弱いんですから、生理的にも無理がありますし、天鹽と別れたらば、その意味では、溝畑さんなどがいゝのですね。」と、そこで安枝さんは、ちよつと聲を改めた。「しかし、あの時、溝畑さんのから仰やつた言葉が、私耳に殘つてをります。──亡くなつた田宮君は幸福でしたな、あなたの獻身的な愛を受けてをつたんですから──。私この言葉を、考へさせられました。溝畑さんは、どこか田宮のやうな性格の方でせう。私再び田宮との生活のやうな、あんな生活を始めてはたまらないと思ひました。獻身的に男を愛するやうな、あんな生活は、もうとても堪へないと思ひました。それに溝畑さんも、田宮と同じやうに、非現實的な人ですし、そんなことが、破綻の原因だつたと思ひますわ。でも、今でもよく溝畑さんのことを思ひ出します。珍しく優れた人ですね、今の世にはユニークな人ですわ。」

私はこれまで一年に二度くらゐなわりで、安枝さんに會つてゐたが、彼女の口から、溝畑との破綻を聞いたのは始めて

だつた。沸畑が委しく私に話し、私もまた十分それに信をおいてゐたので、沸畑の話は、安枝さんから聞くと同じだと思ひ、彼女に會つても、別に訊きもしなかつた。しかし、安枝さんとしては、沸畑と私の友情に對しても、一度は私に話しておきたいことなので、ちよつと興奮の口調だつた。

「しかし、戀愛も變つて來ましたね。コロンタイなんか、一部の若い女性に、大分讀まれるやうぢやありませんか。」

「えゝ、若い女逹の間ではゲニヤ（作者曰く、コロンタイ女史の小説『三代の戀』のヒロイン）ばやりですわ。少し流行し過ぎますね。でも私、コロンタイのあんな小説なんか讀まれて、一部の若い女逹が却てよくなつたと思ひますわ。今まで唯表面的な時代化で、盲目的に出鱈目な戀愛を遊んでゐた女逹が、同じやうにひどい戀愛をしながらも、それを今度は意識的にやり始めたやうですわ。それだけでも、コロンタイなどから來た進歩だと思ひますわ。」

「あなたなんかどうです。」と私は笑つた。

「さうですね……、新しい戀を得ると一緒に、何かもつと意味のある生活が始まるなれば、する氣も起きるか知れませんけど、唯戀愛だけをするのでは、もうそんな元氣はありません。今も異性と共同生活をしてるのですから、唯それだけのことならば、いくらも機會がありますけど、しませんね。それに働いて歸りますと、夜なんかぐつたり疲れますから、そんなことも勘くなります。だから、あゝしてお互に他の家族と共同生活も出來るんですわ。そんなことが盛んだつたら、やはり共同生活なんか、出來にくいものですけど……。」

それは安枝さんの實感だと私も思つた。そんな話から、ちよつと同志の家庭の話も出た。女流作家のT・H、劇作家Mの家庭爭議のことなど。

「T・Hさん、今にもKさんと別れるやうなことを言つて、往來で會ふと、安い貸間ない？　貸間探してるのよ。どうしても別れるの。』そんなことをよく言つてましたが、近頃落ちついてるやうですわね。」

「Kがいゝコンミユニストですからね。それを見出して、落ちついたT子さんも利巧な女ですよ。Mの細君も、あの人の持つクリスチヤニテイーと、コンミユニズムの間で惱んでるやうです。それでよく家庭爭議を起しますが、M自身も俣逹と同じく、清算すべき多くのものを持つてますが、細君ももつと、吾々の運動の目的を愛さなくちやいけませんよ。古い袋に新しい酒を盛らうとするから、あの細君も苦しいのです。」

「さうですね、亡くなつた田宮も、そこを苦しんで斃れたのですけど、今生きてゐたら、きつと轉換してると思ひますわ。」

「さうです。それは『病中日記』を讀めば、ありありと解りますね。」

「肺病なんか、死ななくてもいゝ病氣ぢやありませんか。田宮は自分で自分を惡くして行つたのですわ。思想的に行きつまつてましたから。もしあれが轉換してゐたなら、あれくらゐな病氣で斃れはしなかつたらうと、非常に殘念に思ひます。」

「だが、病氣は病氣ですから。」

「でも肺病なんか、ほんとに死ななくても濟む病氣ですわ。思想の行きつまりが、あれを殺したのですわ。」と安枝さんは、如何にも殘念さうに繰り返して言つた。「身體の弱い私だつて、かうして生きて來たんですのに。」

田宮君の在世の頃、安枝さんも絶えず微熱的な肺を病んでゐたが、今は熱もないといふことを話した。私は當時、田宮君夫妻が貧困の中で、夫婦とも藝術を愛し、自然を愛し、同じパレットを使ひながら繪を描いたり、純情的な詩を作つてゐた姿を思ひ出した。私の買つて行つた『肺病征服記』など、夫妻で笑ひながら、讀んだ頃の生活を思ひ出した。その頃に比べると、安枝さんも、隨分變つたものだと思つた。

安枝さんも、ほんの少ししか飲まないし、私もあまりやらないので、酒も冷えてまづくなつたので、私は彼女の組合委員會の時間を思ひながら、さつきの女に飯を持つて來させた。

「あなたも、あの頃とは變りましたね。天崎君と知る前は、どこにゐらしつたのですかね。」

「本郷にブルジョアの叔父がゐますので、生活に困つてそこで暫く女中をしました。働くから月給をくれと叔父に言ひますと、叔父は最初笑つてましたが、私は叔父から月給を取りました。その代りそこの從姉妹達が寢そべつてゐる時でも、私は臺所から、風呂焚まで眞面目にやりましたわ。」

「以前お書きになつたのだから、小說でもまたお始めになつたら。」

「でも、飯が食へませんから、あてのない原稿をいろ〳〵と書いてはゐられませんし、何を措いても書からとしたつて、生活だけは措いておくわけにもまゐりませんわ。しかし、それでも出來なくないかも知れませんが、それまでにして書く感興がなか〳〵湧きませんの。やつぱり素質がないんですわ。實行家の方に出來てるのかも知れません。今は實行運動の方が、何だか力が這入りますから。」

「さう仰やれば、川宮君のお母さん――あなたの伯母さん――も隨分働いた人ですつてね。」

「よく働きましたわ。何しろ川宮の父が自分で炭坑を堀り始めたものですからね、伯母も朝から晩まで、眞黑になつて坑に下りたり、工夫達の辨當の世話から、洗濯ものまでしてやつたものでした。あの伯母なんかこそ、家婦と妻と女中と母と勞働者を兼ねて、盲目的に唯自分を消費した一生でした。今でも田舍の家庭は大抵さうですけど、そこに働く女こそ氣の毒なものですわ。經濟的に言つても、家族的な盲目な勞働は、何の價値も創造しないのですから、今の家族制度など、國家にとつても、却て有害なものですわね。主婦の仕事なんて、日に〳〵無益な、益々不生產的なものになつて行くんですもの。ブルジョアの奥さんなら、女中とか家政婦とか、專門的な勞働者を使ふことが出來ますけど、伯母なんかのやうな

人は、全く不生産的な一生を送つてしまつたんです。零落して東京へ出て來てからも、たつた妹だつてまで女工をしてゐました。でも田宮の家族は、今府下の方で、わりに樂な生活をしてをります。K鑛業が大戰前、九州のTに大きな鐵工所を作りかけましてね、ばたりと戰爭が止んだものですから、工場は立ちぐされです。しかし、田宮の父が、當時Tの助役をしてまして、K鐵工所に骨を折つたものですから……それにKはあゝして今大臣になつてますし、そんなことで、當時のことを謝するつもりですか、Kから毎月百圓ばかり支給してるんですの。私達は、あゝして子供の頃から、徒弟的な苦しい勞働を見て來ました。田宮の父なども、大資本に壓倒せられて、無念の涙をのんだひとりですわ。」

「さうですかね。田宮君のお母さんのお顏は、どこか嚴のやうで、カール・ローザに似てますね。それでゐて隨分脆い優しい人ぢやありませんか。一二度しか會はないですが、僕の好きな人です。いつたい、あなた方の系統は、不思議にあゝいふ方が多いですね。」

「優しい賢い伯母です。今でもたまに行きますと、天鹽のことを訊いて、一緒に遊びに來いと申しますの。天鹽があんな人間ですから、伯母の家なども、官憲の捜索を受けたんですけど。」

私は腕時計を見て、あまり安枝さんの邪魔をしてもいけないと思ひ、倉地氏の雜誌に掲載された田宮君の『病中日記』以外の詩稿など、私の手元に送つてくれるやうに話し、本の裝幀のことや、印税の話もして、女中に勘定を言つた。裝幀には、田宮君の靜物畫を表紙にしようといふことになつた。

「お忙しいところをお邪魔しましたね。今夜は何の會合です？　こちらの消費組合も、大分會員が殖えたやうですね。」

「いゝえ、私こそ……。御馳走さまでした。今夜の委員會は、郊外のKに支部をつくることなんですの。本當こちらの支部ですけど、こちらが少し睨まれてますから、Kのは單獨な組合のやうに屆けないと、許可しないと思ふのです。」

「消費組合を政治運動に捲き込んぢやアかはいさうですからね。」

「さうですとも。私、委員長つてことになつてますけど、さうだと思ひますわ。消費組合の運動なんて、全く合法的なものなんですから、どこまでもさういふ風にやらないと、とても今の家庭婦人などに、浸潤して行きつこありませんわ。合法的だからこそ、婦人には這入り易いんですもの。無產婦人を覺醒させるには、今のところまだ〳〵、消費組合の運動が大切ですわ。貧乏な婦人の實利に訴へる運動ですから、これが一番きゝめがあります。家庭婦人はまつさきにこのことから眼ざめて、それから他の運動におひ〳〵進むやうになるんですわ。婦人運動は、何と言つても、さういふ婦人の數を增さねば、いゝことにならないのですから、みんな熱心にやつてをります……。」

靜かな言葉で、さう言ふ安枝さんの眼には、全國の勞働者農民の、悲慘な家庭を打ち目守つてゐるやうな眞實な光りがあつた。

「消費組合の運動は、二宮金次郎のやうな勤勉卒直な實際家がゐないと、うまく行かないものですね。非合法を表看板に立てかけ、蔭で汲々と合法化してる連中に騷がれちやア、出來ない運動ですよ。」と私は微笑した。私の言葉が何を指すか知つてゐる安枝さんは、柔かに笑つてゐた。

「女は男と違つて、生活の道を斷つてまで、運動はしにくい事情があるものですから、……或る種の男性のやうに、運動即生活とは行きにくいものですから、私もあゝして官僚的な××產業組合で、パンの爲に働いてますの。これは已むを得ないことです。生活あつての運動ですから、今一切の生活を殺してまで、かゝるわけにはまいりませんわ。」

私達は間もなく外に出た。初冬の寒い夜だつた。安枝さんは綿ものの粗末なコートを着て、つゝましく私と並んで步いた。

「新警社へは時々お出かけになるでせう。その節はお寄り下さい。私の勤め先、K坂の下の、あの日附ですから。K警察署の隣りの建物ですわ。」

「さうですか。なるほどあすこに、ちよつとしたビルがありましたね。あれですか。ぢやアあなたは、天野君がこの間拘留せられたお隣に、勤めてらつしやるんですね。」

「えゝ、私の窓から、すぐ眼の下に、天野の打ち込まれてゐる留置場が見えてゐました。」

「留置場ぢやア、面會もさせないんですね。」

「えゝ、させませんの。今度の拘留には、腹は立ちましたけど、別に面會したいとも思ひませんでした。三一五の時は、二三度市ケ谷に面會に行きましたけど。」

郊外の暗い道を、組合支部へ曲るところで、私は安枝さんと別れ、停車場の方へ引き返した。私はコンミュニスト作家のT・Hを始め、三一五で今繋がれてゐる女大生、その他幾人かの、時代の尖鋭となつて華々しく活動してゐる年若い女性を知つてゐる。しかし、安枝さんのやうに、謂はば縁の下の力持ちをしながら、無産者の爲に、靜かに熱心に不斷の努力を續けてゐる人もあるのである。安枝さんのやうな人は、今のマルクス・ガールのやうに、流行のショールでも引つかけるつもりで、所謂轉換をした人ではない。長い間の人生の勞苦をつぶさに嘗め、相當な年齢になつて、自分の使命を徐々に悟りながら、今日に至つた人であらう。かういふ人こそ將來、無産階級解放の母と謂はれるやうになるのかも知れない。

無産階級の前線に立つて、華々しい活動する新女も、これから益々殖えるであらう。しかし、安枝さんのやうな位置(シチユエーシヨン)に立つ新女も、將來決してその數を減じはしないのだ。(完——一九二八年十二月)

定價	
定價	送料
一冊 八十錢	參錢
六冊 四圓八十錢	送料共
十二冊 九圓六十錢	同

毎月一日一回發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます

△御送金は爲替にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和三年十二月十八日印刷
昭和四年一月一日發行
（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作

印刷人　高木鳥三

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話丸ノ内二〇六番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番

神經衰弱
不眠症



▼岡田醫學博士▼伊藤醫學博士
▼福田醫學博士▼ロビンソン博士證明推奬

レーベン

レーベン　は米麥等を主食とせる日本人の體質に適應する植物製劑にして絶對に副作用の憂なし
レーベン　は腦の重要なる榮養素たるリンサンを多量に含有し積極的治療劑として健腦强精の卓効を有す

主効病状

腦病・神經衰弱・ヒステリー頭痛・頭重・逆上・便秘・不眠症・耳鳴・眩暈・記憶力減退・勉學過度・憂鬱焦燥・心身衰弱・遺精・夢精・陰萎等の生殖器障害

注意

學者、銀行、會社員、學生、著述家、技師、官吏、其他平素腦を使用する人は必ず常用せよ

◉進呈

増田博士森常持兩學士共著神經衰弱療法精神療法は申込次第贈呈

藥價

一圓・二圓・三圓・五圓・(徳用分)拾圓(試用分)五十錢
全國到る處有名藥店にあり

發賣◀ 東京市京橋區弓町 大阪市天王寺上汐町六 中南定太郎藥房▶

GHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.

Terms of Subscription : Annual subscription yen 12.48, Single copy 80 sen including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

